垂井女房が坪遺跡・野口遺跡
北馬場遺跡・柏原遺跡

―一般国道24号京奈和自動車道（橋本道路）
建設工事に伴う発掘調査報告書―

２００７年３月

財団法人　和歌山県文化財センター

垂井女房が坪遺跡・野口遺跡
北馬場遺跡・柏原遺跡

――一般国道24号京奈和自動車道（橋本道路）
建設工事に伴う発掘調査報告書―

２００７年３月
財団法人　和歌山県文化財センター



遺跡遠景（南から）



1A区（南から）



遺跡遠景（北から）



調査地全景（西から）



1・2・4区（東から）



5～7区（南から）



遺跡遠景（東から）



調査地全景（南から）



7区 方形周溝墓群（北から）



同 南西部（北東から）



735石室墓（西から）



1区 近世土坑群（南から）

序

和歌山県の北東部に位置する橋本市は、古くから人々の営みが盛んなところです。市内には縄文時代の市脇遺跡や弥生時代の血縄遺跡、県指定の陵山古墳をはじめとする数多くの埋蔵文化財が発見されています。また、国宝の隅田八幡神社人物画像鏡など県内はもとより国内でも貴重な文化財が多数残されています。

財団法人和歌山県文化財センターでは、国土交通省による一般国道24号京奈和自動車道橋本道路の建設工事に先立ち、平成10年度から平成16年度までの7箇年にわたり、橋本市内に所在する4つの遺跡の発掘調査を行いました。

調査の結果、縄文時代や弥生時代、また、中世から近世にかけてこの地域に暮らした人々の営みを示す数多くの遺構や遺物を発見することができました。

当文化財センターでは、発掘調査の終了に引き続き、平成17年度から平成18年度にかけて出土遺物をはじめとする調査資料の整理作業を行ってまいりましたが、ここにその成果を取りまとめ発掘調査報告書を刊行いたします。この報告書が、橋本地方のみならず県下の歴史を知るうえで皆様方の調査研究の一資料ともなれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査及び出土遺物の整理作業、また、本書の作成にあたり、種々ご指導・ご協力をいただきました関係各位ならびに地元の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後も当文化財センターへのより一層のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

平成19年3月

財団法人和歌山県文化財センター

副理事長　小　関　洋　治

例　言

1．本書は、一般国道24号京奈和自動車道（橋本道路）建設工事に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び出土遺物整理業務は、国土交通省近畿地方整備局和歌山河川国道事務所（旧建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所）の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

3．発掘調査は1998・1999・2001～2004年度、出土遺物等整理は2005・2006年度にそれぞれ実施した。

4．財団法人和歌山県文化財センター事務局

年度	98 H10	99 H11	01 H13	02 H14	03 H15	04 H16	05 H17	06 H18
専務理事	中谷　博昭	中谷　博昭	岩橋　驍	岩橋　驍	岩橋　驍	岩橋　驍	岩橋　驍	松田長次郎
事務局長	中谷　博昭	中谷　博昭	岩橋　驍	岩橋　驍	岩橋　驍	岩橋　驍	熊崎　訓自	熊崎　訓自
事務局次長	菅原　正明	菅原　正明	畑中　照雄 松田　正昭	松田　正昭 篠原　隆	松田　正昭	松田　正昭		
管理課長	西本悦子主査 （課長心得）	西本悦子主査 （課長心得）	西本悦子主任 （課長心得）	西本　悦子	西本　悦子	西本　悦子	西本　悦子	西本　悦子
埋蔵文化財課長	松田　正昭	松田　正昭	松下　彰 渋谷高秀主任 （5月～ 課長補佐）	渋谷　高秀	渋谷　高秀	渋谷　高秀	渋谷　高秀	渋谷　高秀
埋蔵文化財課 （担当）	佐伯和也主査	村田弘主査 （垂井・野口） 佐伯和也主査 （北馬場）	村田弘主任	井石好裕主任 丹野拓技師 （柏原） 佐伯和也主任 三浦　基行 専門調査員 （北馬場）	井石好裕主任 丹野拓技師	井石好裕主任 黒石　哲夫 副主査	井石好裕主任	井石　好裕 課長補佐
事業	垂井1次	垂井2次		柏原1次	柏原2次	柏原3次	整理1次	整理2次
		野口						
		北馬場1次	北馬場2次	北馬場3次				

5．発掘調査及び報告書作成に際し、国土交通省・和歌山県教育委員会文化遺産課（旧文化財課）・橋本市教育委員会をはじめ地元諸氏の助言と協力を得た。

6．航空写真撮影及び航空写真測量は、写測エンジニアリング株式会社・南紀航空株式会社・株式会社サンヨーナイスコーポレーション（株式会社サンヨー）に各々委託した。

7．胎土分析・微化石分析等の理化学分析調査は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

8．本文は各調査担当者が執筆した。

なお、第5章第4節については、分析調査委託会社の報告書を基にしている。

また、第5章の執筆に当たっては、菅原正明の協力を得た。

9．遺構写真は、各調査担当者が撮影を行った。

10. 遺物写真は、村田・井石・冨加見泰彦（専門員）・佐々木宏治（副主査）が撮影を行った。

11. 本書の編集は、井石が担当した。

12. 調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

凡　例

1．遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系（第Ⅵ系）に基づき、方位は座標北を示す。

2．遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P.）である。

3．発掘調査で使用した調査コードは、以下のとおりである。

垂井女房が坪遺跡第1次（1998年度）――――――98－12・003

〃　〃　第2次（1999年度）――――――99－12・003

野口遺跡（1999年度）――――――99－12・044

北馬場遺跡第1次（1999年度）――――――99－12・046

〃　〃　第2次（2001年度）――――――01－12・046

〃　〃　第3次（2002年度）――――――02－12・046

柏原遺跡第1次（2002年度）――――――02－12・048

〃　〃　第2次（2003年度）――――――03－12・048

〃　〃　第3次（2004年度）――――――04－12・048

4．遺物番号は、遺跡別に1番からの通し番号とした。ただし、柏原遺跡出土の石器についてのみ別の通し番号とし頭にSを付した。

5．遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。

6．遺物実測図の縮尺は、土器類は1/4、石器は2/3及び1/2を基本としている。
遺物写真の縮尺は、特に統一はしていない。

7．土器及び調査時の土層の色調は、日本色研事業株式会社発行小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』を使用した。

8．本書では、一部を除き原則として年号は西暦表示とした。

目　次

巻頭図版

序・例言・凡例

第１章　はじめに …… 1

第１節　遺跡の位置と環境 …… 1

第２節　調査と整理の方法 …… 5

１．調査の方法 …… 5

２．整理の方法 …… 7

第２章　垂井女房が坪遺跡 …… 9

第１節　調査の経過と方法 …… 9

第２節　層序 …… 10

第３節　遺構と遺物 …… 11

１．１区の調査 …… 11

２．２区の調査 …… 15

３．３区の調査 …… 22

４．４区の調査 …… 25

第４節　まとめ …… 26

第３章　野口遺跡 …… 29

第１節　位置と環境および調査に至る経緯 …… 29

第２節　層序 …… 30

第３節　遺構と遺物 …… 30

第４節　まとめ …… 32

第４章　北馬場遺跡 …… 33

第１節　調査の経過と方法 …… 33

第２節　層序 …… 34

第３節　遺構と遺物 …… 38

１．１区の調査 …… 38

２．２区の調査 …… 41

３．３区の調査 …… 55

4．4区の調査 …… 62
5．5区の調査 …… 72
6．6区の調査 …… 73
7．7区の調査 …… 77
8．8区の調査 …… 78
9．9区の調査 …… 81
10．10区の調査 …… 82
11．11区の調査 …… 82
第4節　まとめ …… 85
第5章　柏原遺跡 …… 91
第1節　調査の経過と方法 …… 91
第2節　層序と遺構面 …… 95
第3節　遺構と遺物 …… 98
1．はじめに …… 98
2．5区の調査 …… 99
3．1・6区の調査 …… 103
4．2・7区の調査 …… 148
5．3区の調査 …… 199
6．4区の調査 …… 210
第4節　理化学的分析 …… 211
第5節　まとめ …… 232

報告書抄録 …… 244

図　版　目　次

巻頭図版

1　垂井女房が坪遺跡　遺跡遠景／1A区
2　北馬場遺跡　遺跡遠景／調査地全景
3　北馬場遺跡　1・2・4区／5～7区
4　柏原遺跡　遺跡遠景／調査地全景

5　柏原遺跡　　7区　方形周溝墓群／同 南西部

6　柏原遺跡　　735石室墓／1区　近世土坑群

垂井女房が坪遺跡

PL.1　1．1A区　全景
　　2．1B区　全景
PL.2　1．1B区　東半部
　　2．掘立柱建物1
PL.3　1．2区　東半部
　　2．2区　西半部
PL.4　1．2－306土坑
　　2．2－338石垣
PL.5　1．3区　全景
　　2．2－324土坑　土器出土状況
PL.6　1．4区　全景
　　2．3－1土坑　土器出土状況

野口遺跡

PL.7　1．全景
　　2．4溝

北馬場遺跡

PL.8　1．1区　全景
　　2．掘立柱建物2
　　3．掘立柱建物3
PL.9　1．2区(1次A区)全景
　　2．2区　南東部
PL.10　1．掘立柱建物4
　　2．掘立柱建物6・7
　　3．掘立柱建物8
PL.11　1．掘立柱建物9
　　2．掘立柱建物10・11
　　3．掘立柱建物11　柱穴断面
　　4．　〃　　〃
PL.12　1．掘立柱建物13
　　2．2－254土坑　土器出土状況
　　3．2－451土坑
　　4．2－512土坑
　　5．2－67土坑
PL.13　1．3区　全景
　　2．3区　西半部
PL.14　1．掘立柱建物14
　　2．掘立柱建物15
　　3．掘立柱建物16
　　4．3－23ピット
　　5．3－48地鎮遺構
　　6．3－88ピット
PL.15　1．4区　全景
　　2．4区　北西部
PL.16　1．掘立柱建物17
　　2．掘立柱建物19
PL.17　1．掘立柱建物20
　　2．掘立柱建物21
PL.18　1．4－1180竪穴住居

2．4－1160土坑
3．4－1644土坑
4．4－1643土坑
5．4－1643土坑断面
PL.19 1．6区　全景
2．6区　全景
PL.20 1．掘立柱建物23
2．掘立柱建物24・6－6土坑
PL.21 1．掘立柱建物25
2．掘立柱建物26
PL.22 1．5区　全景
2．7区　全景
PL.23 1．8区(S)全景
2．8区(N)全景
3．9区　全景
PL.24 1．10区　全景
2．11区　全景

柏原遺跡

PL.25 1．遺跡遠景
2．調査地全景
PL.26 1．5－1区　側道部
2．507方形周溝墓
PL.27 1．5－1区　全景
2．5－2区　全景
3．502方形周溝墓土層
PL.28 1．1区　第1遺構面検出遺構
2．〃　〃　〃
PL.29 1．1・2土坑
2．3土坑土層
3．3土坑
4．3土坑断面
5．〃　細部
6．5土坑検出状況
7．5土坑断面
PL.30 1．4・5土坑
2．50～53土坑
PL.31 1．57・63土坑
2．671石組遺構
PL.32 1．1・2区　第2遺構面　全景
2．〃　〃　〃
PL.33 1．6区(第2次調査)第2遺構面　全景
2．1区　第2遺構面　東半部
PL.34 1．6区(第3次調査)東半部
2．〃　西半部
PL.35 1．80竪穴住居
2．174竪穴住居
PL.36 1．79竪穴住居
2．〃　土層
3．122竪穴住居
PL.37 1．631竪穴住居
2．119竪穴住居
PL.38 1．90・91方形周溝墓
2．91方形周溝墓(第2次調査)
PL.39 1．90方形周溝墓
2．〃　土層(B′－B)
3．〃　土層(C－C′)
4．〃　土層(D′－D)
5．89方形周溝墓
PL.40 1．掘立柱建物1・2
2．掘立柱建物4

PL.41　1．651土坑・649溝
　　2．92土坑
　　3．1区　第3遺構面　全景
PL.42　1．7区(第2次調査)
　　2．〃　〃
PL.43　7区　進入路部　全景
PL.44　1．2区　全景
　　2．7区　カルバート部　全景
PL.45　1．7区(第3次調査)東半部
　　2．〃　西半部
PL.46　1．760竪穴住居(第3次調査)
　　2．〃　(第2次調査)
　　3．〃　土層
PL.47　1．821竪穴住居
　　2．822竪穴住居
PL.48　1．7区　方形周溝墓群　西半部
　　2．〃　東半部
PL.49　1．219方形周溝墓
　　2．719方形周溝墓
PL.50　1．702方形周溝墓
　　2．遺構709土器出土状況
PL.51　1．862方形周溝墓
　　2．775方形周溝墓
PL.52　1．771・819方形周溝墓
　　2．766方形周溝墓
PL.53　1．708方形周溝墓
　　2．772・766方形周溝墓
PL.54　1．776方形周溝墓・794土坑
　　2．721方形周溝墓
PL.55　1．868方形周溝墓
　　2．708方形周溝墓　集石部
　　3．868方形周溝墓　集石部
PL.56　1．掘立柱建物6・838竪穴住居
　　2．掘立柱建物7
　　3．掘立柱建物8
PL.57　1．735石室墓
　　2．〃　石棺検出状況
　　3．〃　石棺南半部細部
　　4．〃　石室と石棺底石
　　5．〃　掘形検出状況
PL.58　1．734石室墓
　　2．〃　石棺検出状況
　　3．〃　石棺東半部細部
　　4．〃　石棺蓋石と釘検出状況
　　5．〃　掘形検出状況
PL.59　1．783土器棺墓
　　2．225土坑
　　3．720土坑
　　4．701土坑
　　5．791土坑
PL.60　1．782流路
　　2．782流路土層(A－A')
PL.61　1．782流路南半部
　　2．782・723流路、786土坑
PL.62　1．3・4区　全景
　　2．3区　全景
PL.63　1．301石室墓
　　2．302溝
PL.64　1．4区　全景
　　2．4区(S)全景

垂井女房が坪遺跡

PL.65　1区　出土遺物
PL.66　2区　第1～3層出土遺物
PL.67　2区　遺構出土遺物
PL.68　2区　遺構出土遺物
PL.69　3・4区　出土遺物

野口遺跡

PL.70

北馬場遺跡

PL.70　1・2区　出土遺物
PL.71　3・4区　出土遺物
PL.72　6～11区　出土遺物

柏原遺跡

PL.73　5区　出土遺物
　　6区　包含層出土遺物
PL.74　6・1区　包含層出土遺物
PL.75　1区　包含層出土遺物
PL.76　1区　包含層出土遺物
PL.77　1区　包含層
　　1・6区　近世土坑出土遺物
PL.78　1区　近世土坑出土遺物
PL.79　1区　竪穴住居出土遺物
PL.80　91方形周溝墓出土遺物
PL.81　91・90方形周溝墓出土遺物
PL.82　1・6区　遺構出土遺物
PL.83　1・6区　遺構出土遺物
PL.84　7区　包含層出土遺物
PL.85　7区　包含層出土遺物
PL.86　7区　包含層・竪穴住居出土遺物
PL.87　219方形周溝墓出土遺物
PL.88　719方形周溝墓出土遺物
PL.89　719・702(709)方形周溝墓出土遺物
PL.90　702(709)方形周溝墓出土遺物
PL.91　702(709)・862方形周溝墓
　　781土坑出土遺物
PL.92　775・766方形周溝墓出土遺物
PL.93　7区　遺構出土遺物
PL.94　7区　遺構出土遺物
PL.95　7区　遺構出土遺物
PL.96　786溝・825土坑出土遺物
PL.97　3・4区　出土遺物
PL.98　石器(1)
PL.99　石器(2)
PL.100　石器(3)

挿　図　目　次

はじめに

第１図　血縄遺跡 …… 1
第２図　周辺の遺跡 …… 2・3
第３図　東家遺跡 …… 4
第４図　隅田八幡神社経塚(平面図・断面図) …… 4
第５図　隅田八幡神社経塚(第２経塚) …… 4
第６図　地区割り模式図 …… 6

垂井女房が坪遺跡

第７図　垂井女房が坪遺跡調査区位置図 …… 9
第８図　垂井女房が坪遺跡土層柱状図 …… 10
第９図　１－３自然流路土層図 …… 12
第10図　１Ａ区北壁面土層図 …… 13
第11図　１－８竪穴住居実測図 …… 14
第12図　掘立柱建物１実測図 …… 14
第13図　１区出土遺物実測図 …… 16
第14図　２・４区遺構実測図 …… 18
第15図　２区第１～３層出土遺物実測図 …… 19
第16図　２区遺構出土遺物実測図(１) …… 20
第17図　２区遺構出土遺物実測図(２) …… 21
第18図　３区出土遺物実測図 …… 23
第19図　４区出土遺物実測図 …… 26
第20図　遺構配置図……27・28

野口遺跡

第21図　野口遺跡調査区位置図 …… 29
第22図　野口遺跡土層柱状図 …… 30
第23図　遺構配置図 …… 30
第24図　４溝土層図 …… 31

第25図　出土遺物実測図 …… 31

北馬場遺跡

第26図　北馬場遺跡調査区位置図 …… 33
第27図　北馬場遺跡土層柱状図 …… 37
第28図　掘立柱建物２・３実測図 …… 39
第29図　掘立柱建物４・５実測図 …… 42
第30図　掘立柱建物６・７実測図 …… 44
第31図　掘立柱建物９・13実測図 …… 47
第32図　掘立柱建物10・11実測図 …… 48
第33図　２－67土坑・３－304土坑・４－1643土坑実測図…… 51
第34図　１・２区出土遺物実測図 …… 52
第35図　１・２区遺構配置図……53・54
第36図　３区北壁面土層図 …… 55
第37図　掘立柱建物14・16実測図 …… 57
第38図　３区遺構実測図 …… 59
第39図　３区出土遺物実測図 …… 61
第40図　掘立柱建物17・18実測図 …… 63
第41図　掘立柱建物20・21実測図 …… 65
第42図　４区遺構実測図 …… 68
第43図　４－1180竪穴住居実測図 …… 70
第44図　４区出土遺物実測図 …… 71
第45図　６区南壁面土層図 …… 72
第46図　掘立柱建物23・24実測図 …… 74
第47図　掘立柱建物25・27実測図 …… 76
第48図　６区出土遺物実測図 …… 77
第49図　７・８・９・11区出土遺物実測図 …… 78
第50図　３～７区遺構配置図……79・80
第51図　９－513溝土層図…… 81
第52図　８～11区遺構配置図……83・84
第53図　伊都・橋本地域の縄文土器……87
第54図　北馬場遺跡中世掘立柱建物配置図……89

柏原遺跡

第55図　柏原遺跡調査の範囲 …… 91
第56図　柏原遺跡調査区位置図 …… 92
第57図　既往の調査 …… 94
第58図　柏原遺跡土層柱状図 …… 97
第59図　方形周溝墓規模計測凡例 …… 98
第60図　近世土坑規模計測凡例 …… 98
第61図　5区遺構配置図 …… 99
第62図　5区出土遺物実測図 ……100
第63図　504・505土坑実測図 ……101
第64図　502方形周溝墓・509土坑土層図 ……102
第65図　507方形周溝墓実測図……102
第66図　6区礫層・第2～4層出土遺物実測図 ……104
第67図　1区第3層出土遺物実測図 ……105
第68図　1区第3・4層出土遺物実測図 ……106
第69図　1区近世土坑実測図1 ……109
第70図　1区近世土坑実測図2 ……111
第71図　1区近世土坑実測図3 ……113
第72図　1区近世土坑出土遺物実測図 ……115
第73図　近世土坑出土遺物実測図 ……116
第74図　1・6区第1遺構面遺構配置図……117・118
第75図　671石組遺構実測図……119
第76図　134竪穴住居実測図……120
第77図　80竪穴住居実測図 ……122
第78図　174竪穴住居実測図……123
第79図　134・80・174竪穴住居出土遺物実測図 ……124
第80図　79竪穴住居実測図 ……125
第81図　631竪穴住居実測図……126
第82図　79・631竪穴住居出土遺物実測図……127
第83図　119・122竪穴住居実測図 ……128
第84図　91方形周溝墓実測図 ……130
第85図　91方形周溝墓出土遺物実測図 ……131

第86図　91方形周溝墓出土遺物実測図 ……132
第87図　90方形周溝墓実測図 ……133
第88図　90方形周溝墓出土遺物実測図 ……134
第89図　掘立柱建物１・２実測図 ……137
第90図　掘立柱建物３・５実測図 ……138
第91図　掘立柱建物４実測図 ……139
第92図　651土坑・649溝・84土坑実測図 ……140
第93図　92土坑実測図 ……141
第94図　１・６区遺構出土遺物実測図 ……143
第95図　１・６区遺構出土遺物実測図 ……144
第96図　１・６区第２遺構面遺構配置図……145・146
第97図　１・６区出土石器実測図 ……147
第98図　７区包含層等出土遺物実測図 ……150
第99図　７区包含層出土遺物実測図 ……151
第100図　７区包含層出土遺物実測図……152
第101図　838竪穴住居実測図 ……154
第102図　760竪穴住居実測図 ……155
第103図　838・760・822竪穴住居出土遺物実測図 ……156
第104図　821・822竪穴住居実測図……157
第105図　219方形周溝墓実測図 ……158
第106図　219方形周溝墓出土遺物実測図 ……160
第108図　719方形周溝墓出土遺物実測図 ……163
第107図　719方形周溝墓・763土坑実測図 ……161・162
第109図　702方形周溝墓実測図 ……165
第110図　遺構709遺物出土状況図 ……166
第111図　702方形周溝墓出土遺物実測図 ……167
第112図　862方形周溝墓・781土坑出土遺物実測図……169
第113図　775方形周溝墓出土遺物実測図 ……171
第114図　771方形周溝墓実測図 ……172
第115図　766方形周溝墓実測図 ……174
第116図　708方形周溝墓実測図 ……176
第117図　772・819・820方形周溝墓実測図 ……177

第118図　776方形周溝墓実測図 ……178
第119図　721方形周溝墓実測図 ……179
第120図　868方形周溝墓実測図 ……180
第121図　2・7区方形周溝墓出土遺物実測図……181
第122図　掘立柱建物6・7実測図……183
第123図　掘立柱建物8実測図……184
第124図　735石室墓実測図 ……186
第125図　734石室墓実測図……187・188
第126図　783土器棺墓実測図 ……189
第127図　2・7区遺構出土遺物実測図……190
第128図　765溝・768土坑他実測図……191
第129図　225・246・720・701土坑実測図……193
第130図　7区土坑実測図……195
第131図　782流路出土遺物実測図 ……196
第132図　786土坑・825土坑出土遺物実測図……198
第133図　7区出土石器実測図……200
第134図　7区出土石器実測図……201
第135図　7区出土石器実測図……202
第136図　782・723流路実測図 ……203・204
第137図　2・7区遺構配置図 ……205・206
第138図　3区出土遺物実測図……207
第139図　301石室墓実測図 ……208
第140図　302溝土層図 ……209
第141図　4区遺構配置図……210
第142図　342土坑実測図 ……210
第143図　342土坑出土遺物実測図 ……210
第144図　方形周溝墓規模分布図……234
第145図　弥生時代集落模式図……238
第146図　弥生時代・飛鳥時代主要遺構変遷図……240
第147図　1区近世土坑配置図……243
第148図　大塚遺跡の近世土坑……243

表 目 次

はじめに

表1　調査区対照表 …… 5

表2　調査及び整理工程表 …… 5

北馬場遺跡

表3　北馬場遺跡掘立柱建物一覧表 …… 90

柏原遺跡

表4　柏原遺跡竪穴住居一覧表 ……233

表5　柏原遺跡方形周溝墓一覧表 ……234

表6　方形周溝墓周溝出土弥生土器破片数 ……236

表7　方形周溝墓出土弥生土器の様式 ……236

表8　柏原遺跡掘立柱建物一覧表 ……239

表9　柏原遺跡近世土坑一覧表 ……242

写 真 目 次

はじめに

写真1　発掘調査風景 …… 8

写真2　出土遺物整理(洗浄) …… 8

写真3　出土遺物整理(接合) …… 8

柏原遺跡

写真4　調査前の状況 …… 93

写真5　工事用仮設道設置状況 …… 93

写真6　工事完了後 …… 93

写真7　現地説明会 …… 94

写真8　現地見学会 …… 94

第5章第4節　表・図・図版目次

表1　分析試料 ……211
表2　柏原遺跡検出珪藻化石産出表 ……214
表3　花粉化石産出一覧表 ……217
表4　分析試料 ……220
表5　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴 ……226
表6　試料中の岩石片の分類と組み合わせ ……227
図1　柏原遺跡堆積物中の珪藻化石分布図 ……213
図2　遺跡周辺の地質図 ……229
図版1　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真 ……215
図版2　プレパラート状況 ……218
図版3　弥生土器胎土の顕微鏡写真 ……230
図版4　弥生土器および瓦器胎土の顕微鏡写真 ……231

第１章　はじめに

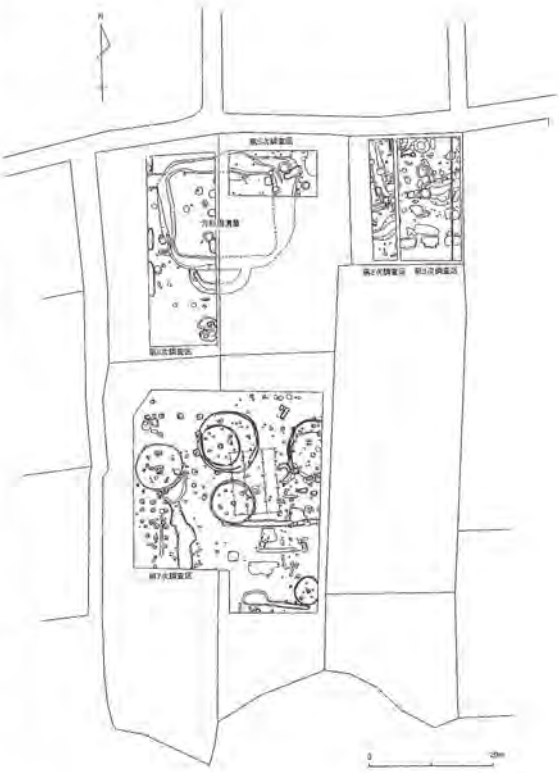
第１節　遺跡の位置と環境（第１～５図）

今回、発掘調査を実施した４箇所の遺跡は、いずれも和歌山県北西部の橋本市に所在する。橋本市は、北は大阪府河内長野市、東は奈良県五條市、西は和歌山県かつらぎ町に接している。市域は中央構造線により南北に分断されており、北半は砂岩・泥岩からなる和泉帯の和泉層群（和泉山脈）、南半は結晶片岩を主体とする三波川変成帯（竜門山脈）に属している。中央構造線の地溝には紀の川が西流しており、その河岸段丘上には各時代の遺跡が多数みつかっている。紀の川はこれらの遺跡に自然の恵みをもたらすとともに、他地域との交流の窓口として機能していた。また、和泉山脈を越え河内方面と往来するルートも古くから開拓されていたようである。

調査対象の遺跡は、橋本市東部の垂井町にある垂井女房が坪遺跡・野口遺跡、橋本市中央部にある北馬場遺跡、橋本市西部にある柏原遺跡である。いずれの遺跡も、紀の川の支流が近くを流れる紀の川北岸段丘上の緩斜面に立地している。垂井女房が坪遺跡・野口遺跡は高橋川、北馬場遺跡は橋本川、柏原遺跡は山田川沿いに形成された遺跡である。

縄文時代の遺跡は、橋本市市脇遺跡・芋生小島遺跡、かつらぎ町船岡山遺跡等がある。市脇遺跡では縄文時代後期の土器・石器のほか、屋外炉などがみつかった。芋生小島遺跡では後期の竪穴住居が確認された。

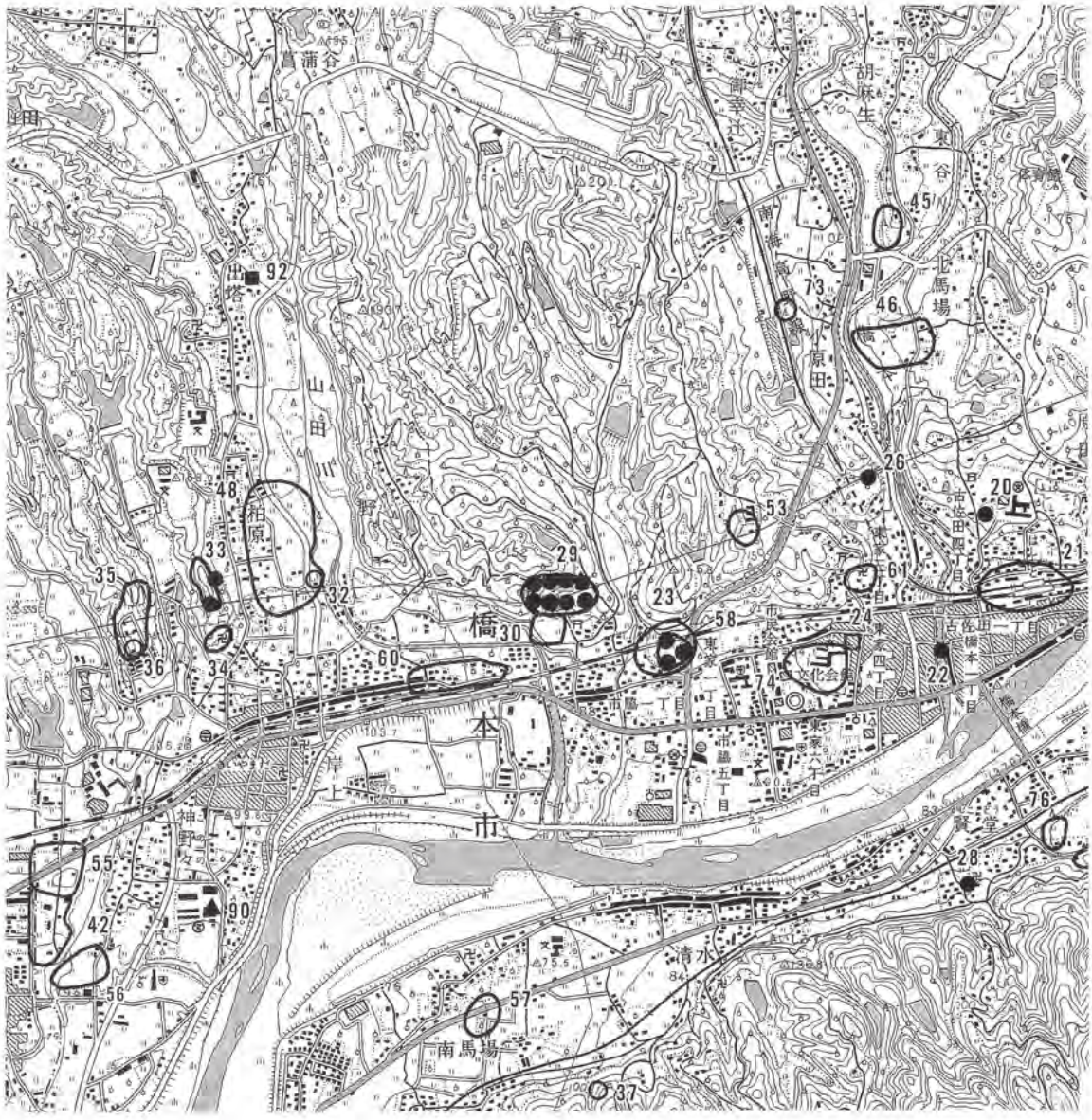
弥生時代の遺跡は、橋本市血縄遺跡・高尾遺跡、かつらぎ町佐野遺跡・船岡山遺跡・西飯降Ⅱ遺跡、五條市原遺跡・中遺跡・釜窪丈六堂遺跡、吉野町宮滝遺跡等がある。血縄遺跡では、遺跡の東部にあった中期の集落が、後期に遺跡の西部へ移動する様子が確認された。原遺跡・中遺跡・宮滝遺跡・西飯降Ⅱ遺跡等では、方形周溝墓群がみつかった。後期には、船岡山遺跡・釜窪丈六堂遺跡など川の中洲や丘陵上に立地する遺跡があり、遺跡の移動や高地性集落との関係が注目されている。



第１図　血縄遺跡（方形周溝墓と竪穴住居）

古墳時代の遺跡は、橋本市市脇遺跡・市脇古墳群・市脇東膳那古墳群・東家遺跡・陵山古墳・八幡宮古墳・上兵庫古墳群、九度山町真田古墳、かつらぎ町渋田１号墳、五條市近内古墳群等がある。橋本市を含む伊都郡域は古墳が比較的少なく、単独ないしは小規模な古墳群が点在する。陵山古墳は濠をめぐらす直径46mの円墳で、近畿地方でも早い段階の横穴式石室が知られている。八幡宮古墳は終末期の古墳で切石積横穴式石室が構築されている。また、この地域の著名な考古資料として隅田八幡神社所蔵の人物画像鏡があり、鏡背に「癸未年」の年号の入った日本最古の金石文として国宝に指定されている。このほか、垂井女房が坪・野口遺跡の周辺には垂井古墳・宮の壇古墳、北馬場遺跡の周辺には東家古墳、柏原遺跡の周辺には堂の浦古墳・仏性寺古墳群が分布している。

奈良時代の遺跡は、橋本市古佐田遺跡・神野々廃寺・山田瓦窯・名古曽廃寺・名古曽墳墓、か



つらぎ町佐野廃寺のほか、五條市に多数の窯跡がある。神野々廃寺・名古曽廃寺・佐野廃寺は寺院跡、古佐田遺跡・山田瓦窯は瓦の出土地で、名古曽墳墓からは三彩蔵骨器がみつかった。

2	垂井古墳	17	上田遺跡	33	仏性寺古墳群	55	神野々Ⅰ遺跡	75	織田屋敷跡
3	**垂井女房が坪遺跡**	18	鳥坪古墳	34	山田瓦窯跡	56	神野々Ⅱ遺跡	76	土居の腰跡
5	垂井横塚遺跡	20	隈山古墳	35	時雨山遺跡	57	南馬場遺跡	85	竹田土居屋敷跡
6	宮の塁古墳	21	古佐田遺跡	36	神野々古墳	58	市脇東廻那古墳群	86	芋生土居屋敷跡
7	八幡宮古墳	22	橋本一里塚	37	西畑古墳	59	芋生小島遺跡	87	青木土居屋敷跡
8	霜山城跡	23	市脇遺跡	42	神野々廃寺跡	60	銭坂城跡	88	松岡土居屋敷跡
9	血縄遺跡	24	陀羅尼寺跡	43	護国寺北方遺跡	61	妙楽寺	90	神野々Ⅲ遺跡
10	血縄古墳	26	東家古墳	**44**	**野口遺跡**	67	岡山城跡	91	隅田八幡神社経塚群
11	西山遺跡	27	善福寺跡	45	胡麻生館跡	68	神山城跡	92	出塔の水道
12	霜山遺跡	28	定福寺九重塔	**46**	**北馬場遺跡**	69	上田土居屋敷跡		
13	上兵庫古墳群	29	市脇古墳群	**48**	**柏原遺跡**	70	小島土居屋敷跡		
14	利生護国寺旧境内遺跡	30	医王寺跡	52	恋野遺跡	73	小原田城跡		
16	土居遺跡	32	堂の浦古墳	53	東家Ⅱ遺跡	74	東家館跡・東家遺跡		



第２図　周辺の遺跡

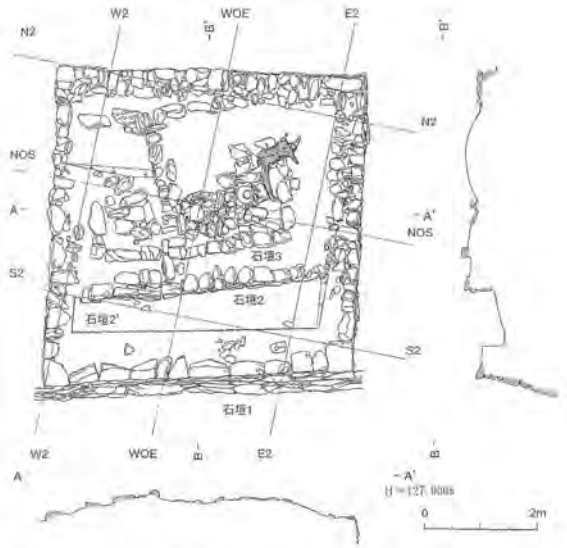
平安時代の遺跡は、橋本市小峯寺旧境内遺跡・隅田八幡神社経塚群、高野町高野山金剛峯寺遺跡等がある。高野山は平安時代初頭に開創され、次第に勢力を伸ばし、中世には荘園経営などを通じこの地域の一大勢力となった。小峯寺旧境内遺跡では黒色土器が出土しており、中世とされていた葛城修験の寺の成立時期がやや早まる可能性が考えられている。また、この時期に石清水八幡宮の荘園として隅田荘が成立し、隅田八幡神社が勧請された。神社の境内にある隅田八幡神社経塚群では、平安時代末の経塚が確認された。

鎌倉時代の遺跡は、高野山金剛峯寺遺跡、粉河町粉河産土神社経塚群等がある。経塚はこの時期を中心に、平安時代末から室町時代まで継続して築かれた。

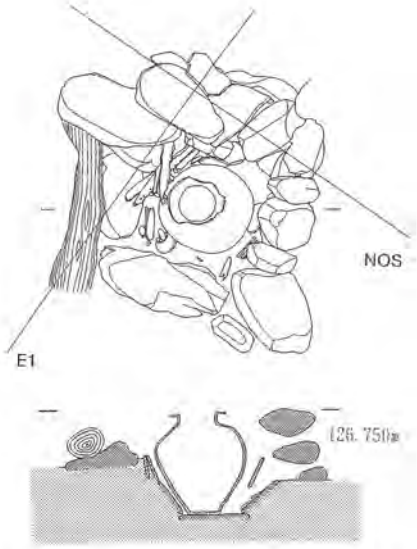
室町時代の遺跡は、橋本市利生護国寺旧境内遺跡・医王寺跡・東家遺跡がある。利生護国寺は



第 3 図　東家遺跡（古墳時代の遺構）



第 4 図　隅田八幡神社経塚（平面・断面図）



第 5 図　隅田八幡神社経塚（第 2 経塚）

隅田党の氏寺とされており、土器・瓦のほか膨大な量の石塔類が出土した。東家遺跡では屋敷地の跡が確認された。このほか、岩倉城跡・霜山城跡・長藪城跡をはじめとする多数の中世城館跡が、橋本市内の周辺各地に分布している。

第2節　調査と整理の方法（第6図、表1・2）

1．調査の方法

調査区名　調査対象地は道路や水路等で複数の調査区に分割されている。現地調査時にはこれら各調査区をA区・B区や1区・2区等と呼称した。複数年度に跨り調査が行われた垂井女房が坪遺跡及び北馬場遺跡では、調査区名が重複していたため本報告書では表1に示す調査区名を使用する。なお、柏原遺跡では、調査区名は重複していなことから調査時の呼称をそのまま使用した。

北馬場遺跡

次	調査時	本報告書	本報告書	次	調査時
1	A	2	1	1	B－2
	B－1	4	2	1	A
	B－2	1	2	1	B－3
	B－3	2	3	3	
	C－1	8	4	1	B－1
	C－2	8	5	2	B
	C－3	10	6	2	A
	C－4	11	7	2	P－4
2	A	6	8	1	C－1
	B	5	8	1	C－2
	P－4	7	9	2	P－2
	P－2	9	10	1	C－3
3		3	11	1	C－4

垂井女房が坪遺跡

次	調査時	本報告書
1	A工区	1A
	B工区	1B
2	A	3
	B	4
	C	2
本報告書	次	調査時
1A	1	A工区
1B	1	B工区
2	2	C
3	2	A
4	2	B

表1 調査区対照表

地区割　出土遺物の取上げ等に使用する地区割は、平面直角座標系の第Ⅵ系を使用し、調査対象地を網羅するX・Yの交点を基点とし4m毎に割り付けた。地区の呼称は第6図に示す方法で行った。なお、座標系は、柏原遺跡は世界測地系、その他3遺跡では日本測地系を使用している。

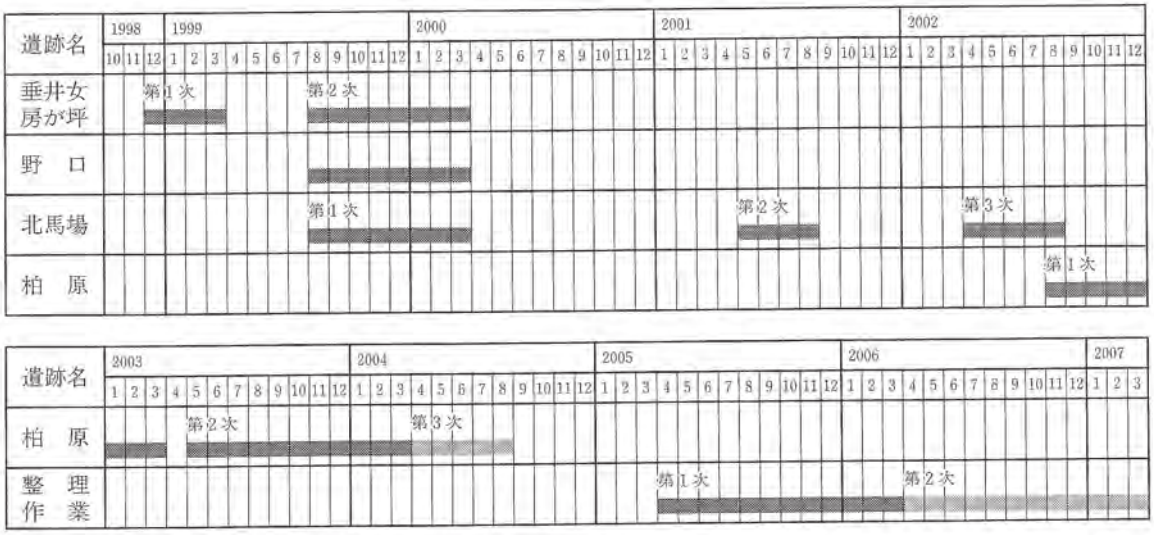


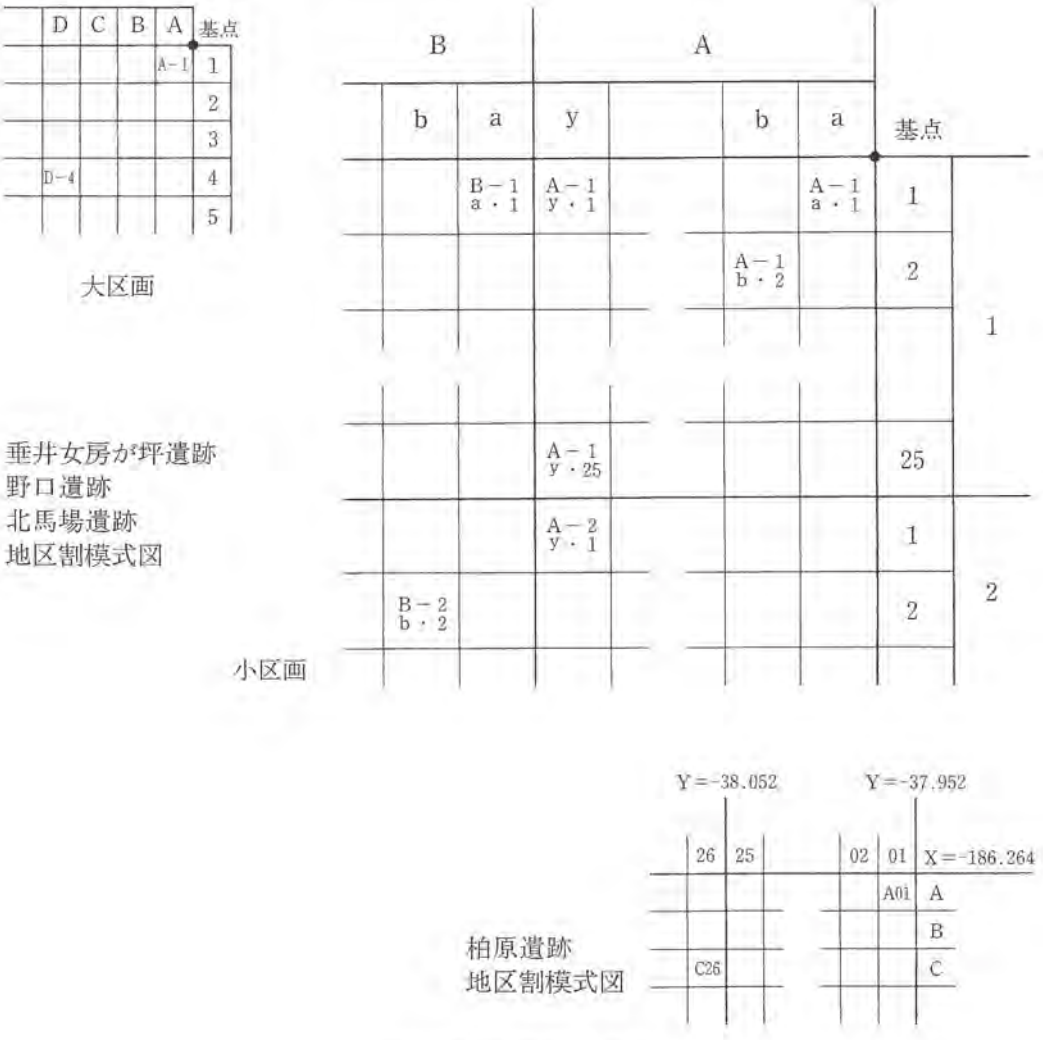
表2　調査及び整理工程表

調査の略号（調査コード）　当センターの発掘調査要項で規定する調査コードは凡例のとおりである。

遺構番号　遺構番号は、各遺跡別に１番からの通し番号となっているが、調査区名同様に垂井女房が坪遺跡及び北馬場遺跡では番号が重複している。このため、両遺跡の遺構名は、調査区名と遺構番号を組み合わせ、さらに、遺構番号の後ろに遺構の種類を加えることで調査時の番号をそのまま使用することにした。なお、柏原遺跡及び野口遺跡では遺構番号の重複が無いことから、遺構番号と種類のみとしている。但し、掘立柱建物のみ新たに番号を整理し、掘立柱建物１・２等とした。

例：１－695土坑、２－316溝（垂井女房が坪遺跡、北馬場遺跡）

504土坑、90方形周溝墓（柏原遺跡、野口遺跡）



第６図　地区割模式図

2．整理の方法

洗浄　出土遺物のうち多くは発掘調査と並行して行った応急遺物整理時に作業を行っている。このため、出土遺物整理作業では未洗浄ものについて作業を行った。

注記　土器類及び瓦を対象として実施した。注記は調査コードと登録番号のみ記入した。注記は当初、攪乱出土して取り上げられていた遺物や小破片については対象外としていたが、包含層の異なる層位間及び遺構との接合関係が認められたため、新たに作業対象に加えた。石製品については、石鏃等の小型の製品が大半を占めることや、写真撮影の仕上がりを考慮して注記は行っていない。

登録　遺物の取上げ単位であるビニール袋１袋毎に登録番号を与え遺物登録台帳を作成した。垂井女房が坪遺跡・野口遺跡・北馬場遺跡出土遺物の一部は、簡易な登録作業のみ行われていたが、石製品及び金属製品や遺構出土遺物等について数量把握を行う必要が生じたため、パソコンへの入力作業を新たに行うと共に当該作業も併せて実施した。

接合・抽出・補強　注記の完了した遺物について、遺構単位、包含層の各層毎及び異なる層位間、遺構と包含層出土遺物間で接合作業を行った。接合の一部は応急整理作業時に行われていたが、注記の項で記したように異なる層位間等での接合が確認できたため改めて実施した。接合完了後、実測を行う遺物の抽出を行った。抽出は、遺構及び包含層の時期を反映する遺物、各器種の代表的な遺物を基準に選定を行った。また、実測作業を行う際に破損するおそれのある遺物については必要に応じて石膏を使用して補強作業を行った。

実測　抽出した土器類及び瓦、石製品の全量、金属製品の遺存度の良好な遺物を対象に実測を実施した。また、必要に応じて採拓を行った。実測図番号は原則として各遺跡の調査年次別に１番からの通し番号としたが、石製品及び金属製品の一部は種類毎の通し番号とした。

遺物カードの作成　上記作業で作成した実測図の検索やトレース作業等の利便性を図るため、原図を縮小コピーし遺物カードの作成を行った。

復元　実測済みの遺物について、報告書での使用等を念頭に石膏による復元作業を行った。また、復元した遺物は、写真撮影を考慮してポスターカラーを使用して彩色を施した。

トレース　報告書に掲載予定の遺構及び遺物実測図についてトレースを行った。トレースはロットリングペンを使用し、線種は仕上がりの縮尺を考慮しつつ実施した。

遺物の再収納　実測済以外の遺物について、各遺跡別に遺物の再収納を行った。コンテナ番号は遺跡毎に１番からの通し番号とし、収納内容が判別できるよう遺跡名・調査年度・遺物登録番号・作業内容等を記入したセンター所定のラベルを貼付した。

遺構実測図の整理　現地調査時に作成した図面に通し番号を与え、図面の内容等を記した遺構実測図台帳を作成した。また、図面検索及び遺構実測図版作成用に、航空写真測量による１/100

の縮小編纂図を適宜縮小コピーし、地区割り用基準線・地区名・遺構番号等を記入し以後の作業に備えた。

写真の整理　アルバムに未収納のものを収納した後、遺跡及び調査年次別にフィルムの種類毎に各コマに通し番号を付した。次いで各カット毎に写真の内容が未記入のものについては記入を行った。

台帳の作成　上記作業に伴い、各種台帳の作成を行った。作成した台帳は、遺構実測図台帳・遺物登録台帳・遺物実測図台帳・コンテナ台帳である。これら新たに作成した台帳類は全てパソコンにて入力作業を行った。また、既作成済の手書きの台帳についても併せて入力作業を実施した。

図出典

＊図１：『平成７・８年度　血縄遺跡第７次発掘調査概報』橋本市遺跡調査会　1997年

＊図３：『東家遺跡発掘調査概報－橋本市立橋本小学校屋内運動場建設事業に伴う緊急発掘調査』橋本市教育委員会　1984年

＊図４・５：『平成10年度　隅田八幡神社経塚発掘調査概報』橋本市教育委員会　1999年



写真１　発掘調査風景



写真２　出土遺物整理(洗浄)



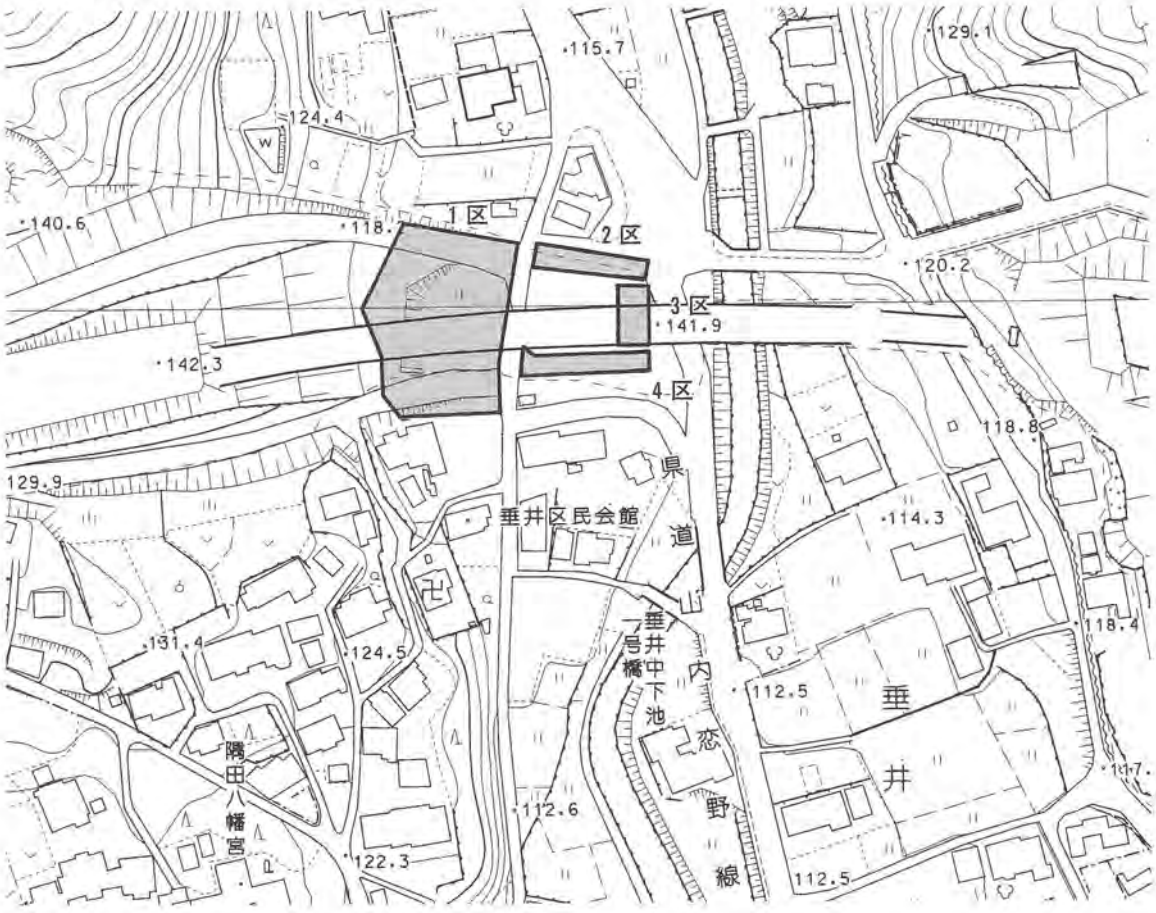
写真３　出土遺物整理(接合)

第２章　垂井女房が坪遺跡

第１節　調査の経過と方法（第７図）

垂井女房が坪遺跡は、紀の川の支流沿いに南北に長く展開する遺跡である。近畿地方建設局和歌山工事事務所による一般国道24号橋本道路（京奈和自動車道）建設工事が行われることとなり、当遺跡がそのルート上にかかるため、平成10年度に和歌山県教育委員会が試掘調査を行った。試掘トレンチは幅２ｍで東西方向に36mと30mを２本、南北方向に24mを１本設定した。結果、この時点で数条の溝を確認し、本調査を実施することになった。

調査区は周知の遺跡範囲の北端部で、小さな谷部の入り口付近に位置する。立地は紀の川支流と丘陵に挟まれた狭小な平地部分で、北から南に緩やかに下る。現状は三枚の水田で、北から南にかけて約0.6mの比高差がある。標高は約114.00～115.00mを測る。調査区は４箇所（１～４区）に分かれ、総調査面積は約2,200㎡である。



第７図　垂井女房が坪遺跡調査区位置図

第２節　層序（第８図）

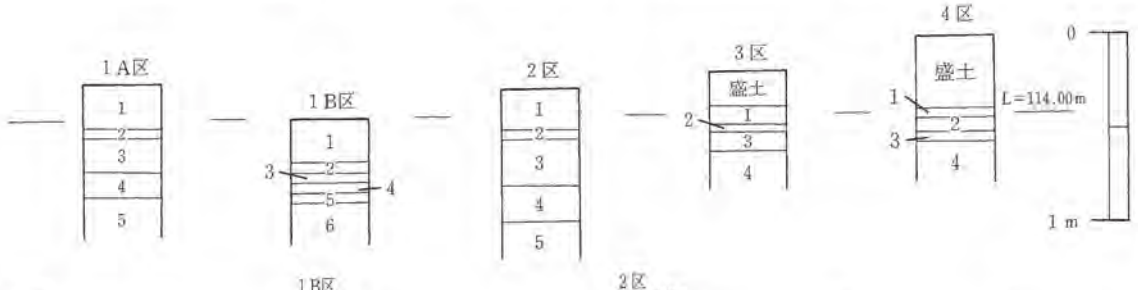
１．１区の層序

１Ａ区　現状は水田で、現地表面の標高は約115.00mである。基本層序は、第１層が現耕作土、第２層が床土で、この現代の水田層下に第３層10YR6/1褐灰色シルトが堆積している。第３層からは土師器皿、瓦器、東播系須恵器捏鉢などが出土しており、中世の包含層と考えられる。ただこの層からは、時期の遡る遺物として緑釉陶器、須恵器、土師器なども出土している。第４層10YR7.5/8黄橙色シルト・第５層2.5Y8/5淡黄色シルト（礫少量含む）はともに地山で、場所によっては若干の色調の差異が認められる。遺構は第３層除去後、第４層の地山直上で検出した。

１Ｂ区　北側の１Ａ区と同様に現状は水田で、１Ａ区より約60cm低くなっている。ここでも第１層が現耕作土で、第２層が床土となる。第３層は中世の包含層で、2.5Y7/1灰白色シルトが概ね調査区の東側に４～８cmの厚さで堆積していた。第４層7.5Y6.5/8橙色シルトも中世の包含層と考えられ、0.5～１cm大のマンガン粒子が入る。この層は２～10cmの堆積で西方向に厚くなり、調査地のほぼ全域で確認した。なお、第４層の下部には一様にマンガン粒子が厚さ３cm程度の帯状に堆積する。水田の痕跡であろうか。第５層は10YR6/1褐灰色シルトで、古墳時代の包含層である。この層は、６～12cmの厚さで西方向に厚く堆積する。第５層の上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。第６層は地山で2.5Y7/6明黄褐色シルトと2.5Y5/1黄灰色シルトが混じる層である。遺構は地山直上で検出した。

２．２区の層序

第１層が現耕作土で、第２層が床土となる。第３層５Y6/1灰色礫は中世の包含層で、瓦質土器のほかに弥生土器が含まれている。調査区西側では第３層がなく、第２層下に平安時代から近世にかけての遺物を含む淡黄色シルト層が堆積する。第４層は7.5YR6/6橙色粗砂礫で、この上面



1A区
1．耕作土
2．床土
3．10YR6/1褐灰色シルト
4．10YR7.5/8黄橙色シルト
5．2.5Y8/5淡黄色シルト（礫少量含む）

1B区
1．耕作土
2．床土
3．2.5Y7/1灰白色シルト
4．7.5YR6.5/8橙色シルト
5．10YR6/1褐灰シルト
6．2.5Y7/6明黄褐色シルト＋2.5Y5/1黄灰色シルト

2区
1．耕作土
2．床土
3．5Y6/1灰色礫
4．7.5YR6/6橙色粗砂礫
5．2.5Y5/2暗灰黄色粗砂礫

3区
1．耕作土
2．床土
3．7.5Y5/1灰色土
4．2.5Y6/2灰黄色礫

4区
1．床土
2．7.5YR5/1褐灰色土
3．7.5YR4/1褐灰色土
4．5Y7/4浅黄色土

第８図　垂井女房が坪遺跡土層柱状図

で、中世の遺構を検出している。第５層は2.5Y5/2暗灰黄色粗砂礫で、この上面でも遺構検出をおこなったが、遺構密度は希薄であり、遺構の帰属時期についても明らかでない。

３．３区の層序

調査時には水田の上に盛土がおこなわれていた。基本層序は第１層耕作土、第２層床土で、第３層は7.5Y5/1灰色土で、古墳時代から室町時代の土器が含まれる包含層である。第４層は2.5Y6/2灰黄色礫で、地山となる。この層の上面で多くの土坑・柱穴を検出している。

４．４区の層序

４区も３区同様、水田の上に盛土がおこなわれており、その際に耕作土が除去されていた。このため第１層が床土となる。第２層は7.5YR5/1褐灰色土、第３層は7.5YR4/1褐灰色土で、ともに中世の包含層である。第４層は地山５Y7/4浅黄色土で、この上面で遺構を検出した。

第３節　遺構と遺物

１．１区の調査（第10・20図、巻頭図版１、PL.１・２）

調査は排土置き場の関係上、まず北側半分の重機掘削を行い、この北側の調査が終了後埋め戻しを行い、次いで南側の排土を北側調査済み箇所に置くという折り返しの工法をとった。

調査地の現状は水田である。調査では耕作土・床土を重機で掘削し、第３層（中世の包含層）の上面で精査をおこない、遺構検出を試みたが、遺構を確認することは出来なかった。第３層より下層は人力により掘削をおこなっている。

包含層除去後、地山直上で古墳時代の遺構を検出した。検出遺構には自然流路・掘立柱建物・竪穴住居などがある。試掘調査で検出した溝の多くはこの自然流路の一部となり、調査区を北から南に蛇行して流れている。また、調査地の南側で自然流路を避けるような安定した位置で、竪穴住居や掘立柱建物、土坑を検出した。

検出した遺構には古墳時代の竪穴住居１棟・掘立柱建物１棟、土坑数基、溝３条、自然流路等がある。

包含層出土遺物（第13図、PL.65）

１～３は古墳時代の須恵器である。１は壺で、口縁部下に１条の沈線を巡らす。頸部から肩部にかけては、櫛による簾状文・波状文を、体部中位には竹管状工具による連続刺突文を巡らす。２は甕で、口縁端部は外方に面を有する。３は杯身で、口縁部は内傾して立ち上がり、端部は丸く収める。４は平安時代前期の緑釉陶器椀である。５～７は平安時代後期の瓦器である。５・６は

椀で、5は内外面にミガキを施す。6は見込み部にループ状のミガキを施す。7は小椀で、高台は太くて高い。体部から口縁部の内外面にミガキを施す。8～12は鎌倉時代から室町時代の遺物である。8は土師器小皿、9は土師器土釜で、このうち9は口縁端部を内方に拡張する。10は東播系須恵器の捏鉢で、口縁端部を上方に拡張する。11は青白磁の合子身で、口縁部と底部は露胎である。12は青磁碗で、見込み部には花弁状の印刻がある。高台内は露胎である。

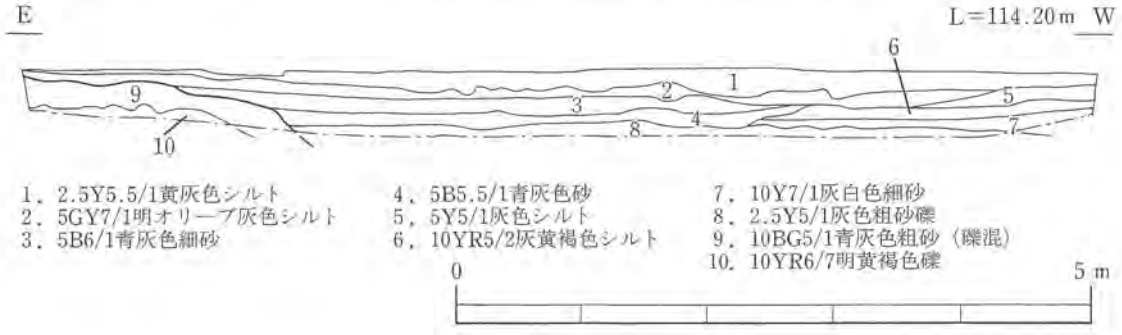
1－1～3 自然流路（第9・10・13図、巻頭図版1、PL.1・65）

第3層（中世包含層）除去後検出した。これらの自然流路は、蛇行しながら分流しているが基本的には同一の可能性がある。ただ、1と2は確実に同一の自然流路と考えられるが、3の自然流路については、調査範囲の中では断ち切れているため、必ずしも同一のものとは判断し難い。

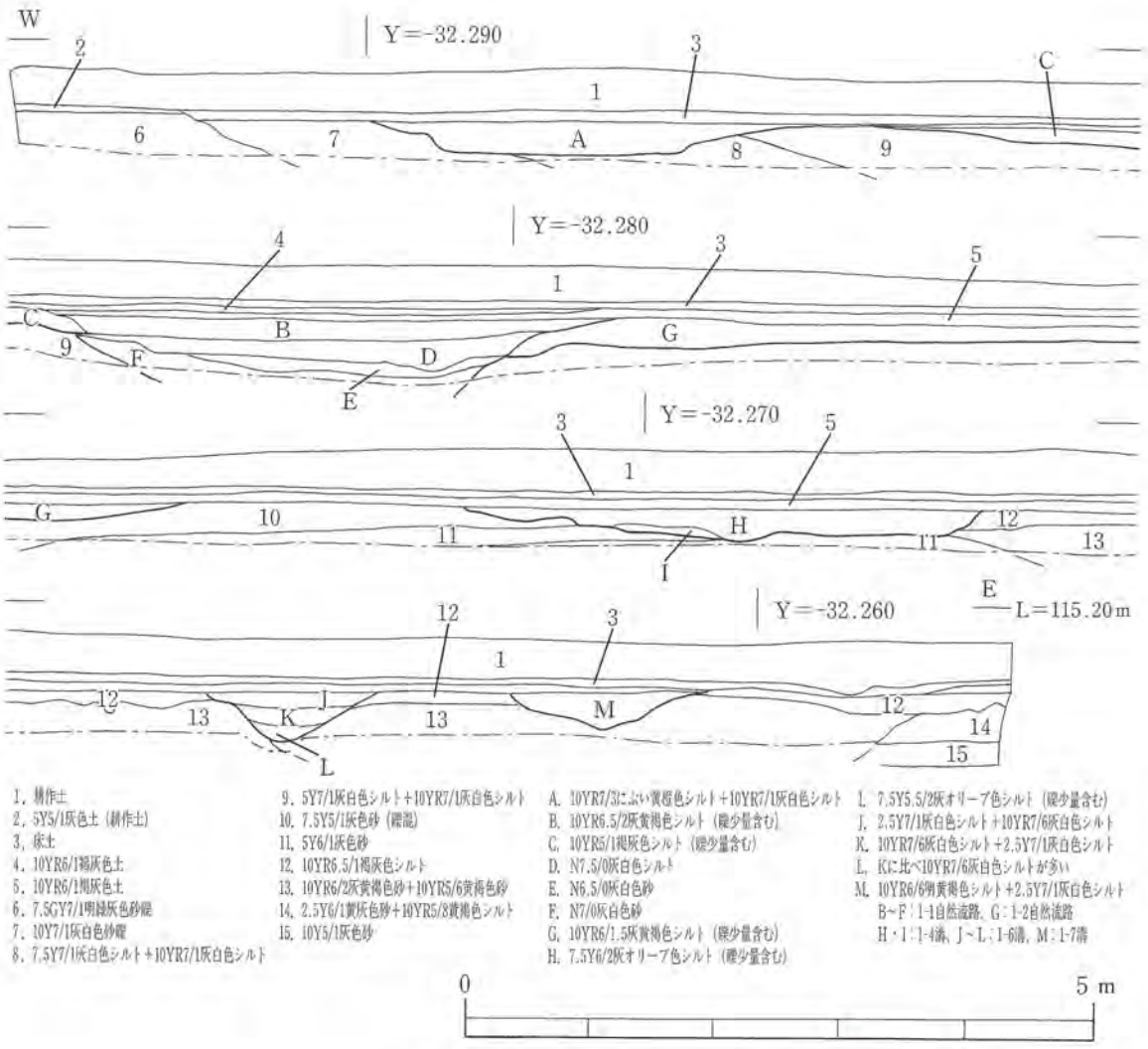
各自然流路の幅は8～12mを測る。全体に底まで掘削していないが、トレンチで確認した深さは約75cmを測る。

出土遺物は1－1自然流路の上層から土師器（13）、須恵器（14・15）が、下層から土師器壺（16～22）、須恵器（23）が出土している。13は布留式期の二重口縁壺で、口縁部が屈曲して外上方に立ち上がる。端部はわずかに内方に拡張し、外上方に面をもつ。14・15は甕で、口縁端部は外方に面をもつ。14は口縁部がカーブを描くように外反する。体部内面はタタキをナデ消し、口縁部内面は粘土の接合痕が顕著に残る。16は13と同様の布留式期の二重口縁壺で、口縁部が屈曲して外上方に立ち上がる。端部はわずかに内方に拡張し、内上方に面をもつ。17・18は甕で、口縁部が「く」の字に屈曲し、端部は丸く収める。体部内面はヘラケズリ調整である。19～21は高杯で、このうち19は、脚柱部から裾部にかけて、スカート状に広がる。外面はハケ調整、脚柱部内面はヘラケズリ調整である。20は脚部中位に円穴を穿ち、裾部は強く外反する。外面はヘラミガキ調整、裾部内面はハケ調整を施す。21は裾部がやや屈曲して広がる。杯部は器高に比して高く、体部と口縁部の境が明瞭である。脚柱部はヘラケズリ調整である。22は小型甕で、つくりは雑である。23は杯身で、口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は内上方に面をもつ。

1－3自然流路上層からは土師器（24～26）、須恵器（27）が出土する。24は壺、25は小型丸底



第9図　1－3自然流路土層図



第10図　１Ａ区北壁面土層図

壺である。25の体部はやや扁球形で、口縁部は緩やかに外反する。26は高杯で、裾部は屈曲して広がる。27杯身で、口縁部は内傾して立ち上がる。

出土遺物からこれらの流路は５～６世紀にかけて機能していたと考えられる。

１－４溝

調査区の東側で第３層除去後に検出した。調査区東辺の内側に沿ってほぼ直線的に北から南に向って延びる。検出した長さは約57mを測る。北側と南側は調査区外のため不明である。検出幅は北から南までほぼ均一しており4.0～4.7mで、深さは20～26cmを測る。埋土は基本的には２層に分層でき、上層は灰オリーブ色のシルト層でこの溝の埋土のほとんどを占める。下層の埋土は西側の底の立ち上がり部分に６～８cmの厚さで貼り付くように堆積し、上層と同じ範疇の灰オリーブ色シルト層であるが、上層に比してやや濃色を呈する。上層・下層ともに１～３cm大の礫が少量含まれる。なお、出土遺物は皆無であり時期確定ができないが、１Ｂ区で、この溝の埋没後に１－

1自然流路が流れ、また、1－8竪穴住居が掘削されているので布留式期以前であると考えられる。

1－5土坑

1A区の南端東寄りで検出した楕円形の土坑である。軸の方向は東西方向で、長径1.26m、短径1.0mを測る。深さは3～5cmと非常に浅い。埋土は褐灰色シルトの単一層である。出土遺物は無い。

1－6溝

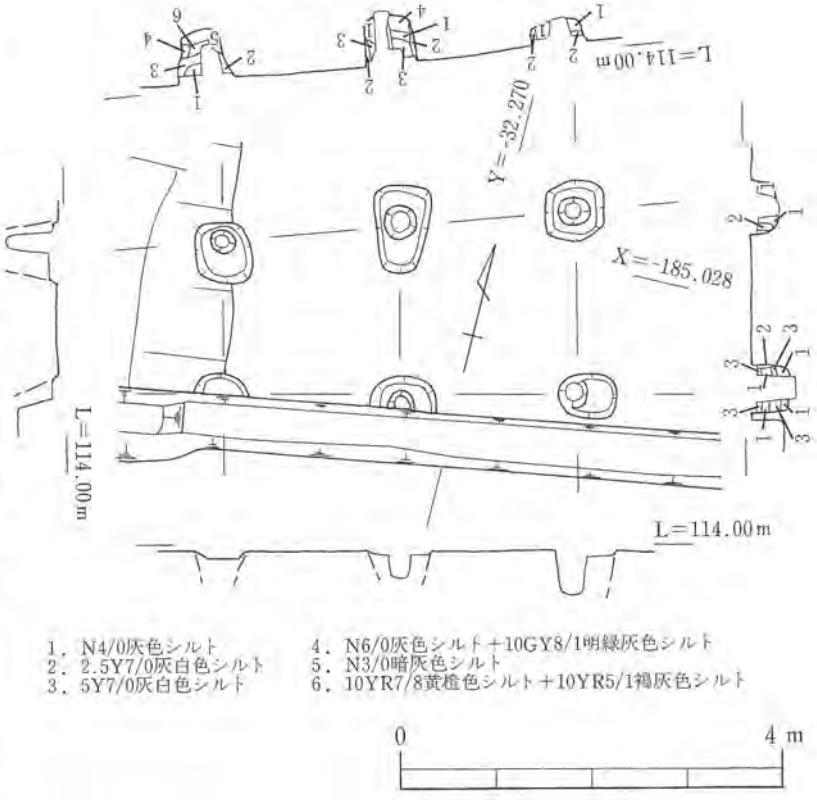
1A区の北東隅で、第3層除去後検出した。調査区外の北方向から南東方向の調査区外へ延びる。検出長は弧状に約7.5mで、幅は0.8～1.2mを測る。深さは約60cmを測り、肩部は緩やかに両側に立ち上がる。埋土は3層に分層でき、レンズ状の堆積を呈す。3層ともに灰白色系のシルト層である。出土遺物はない。

1－7溝

1A区の北東隅、1－6溝の東側で検出した。調査区外の北方向から延びて、調査区内で終息する。したがって、検出し得た長さは約2.5mで、検出幅は約0.6mである。底の形状は若干凸凹しており、最



第11図　1－8竪穴住居実測図



第12図　掘立柱建物1実測図

も深い箇所で約30cmを測る。埋土は単一層で明黄褐色と灰白色が混ざる微砂混じりのシルト層である。出土遺物は皆無である。

1－8竪穴住居（第11図、PL．2）

1B区東端中央部で第5層除去後検出した。南北に長いやや長方形の竪穴住居である。この竪穴住居には主柱穴・竈（炉）、あるいは貯蔵穴などの通常有るべき施設が検出されない。規模は東西長約3.6m、南北長約3.9mを測る。残存の深さは遺りの良い箇所で18cmを測り、壁の西辺と南辺はほぼ垂直に立ち上がるが、東辺と北辺は斜め上方に立ち上がる。壁直下には壁溝が四周し、幅は8～14cm、深さは床面から4～12cmを測る。埋土は2層に分層でき、上層は灰色シルトに径1cm程度のオリーブ黄のシルトが斑点状に入る。下層は上層よりも若干濃い色調の灰色シルト層で床面全域には認められない。

住居の覆土からは古墳時代前期の土師器甕の破片が出土している。

掘立柱建物1（第12図、PL．2）

1B区の南東隅で検出した掘立柱建物で、総柱と考えられ南側は調査区外に延びると想定できる。建物の規模は東西2間（3.67m）×南北1間（1.91m）以上で、主軸の方向はN－15°－Wである。東西方向の間尺は北側柱列の東から1.81m、1.86mである。柱穴の掘形の形状は正方形もしくは長方形を呈し、規模は一辺50～60cm、深さは45～54cmを測る。柱は痕跡から直径20～30cmで、柱当りは若干凹む。ただ、北東隅の柱穴は26cmと浅い。柱穴の断面の形状はやや袋状を呈し、底では丸味を帯びる。埋土は灰色系もしくは灰白色系のシルト層で、レンズ状の堆積を呈する。遺物は柱穴から古墳時代の土師器片が総数量で14片出土している。

2．2区の調査（第20図、PL．3）

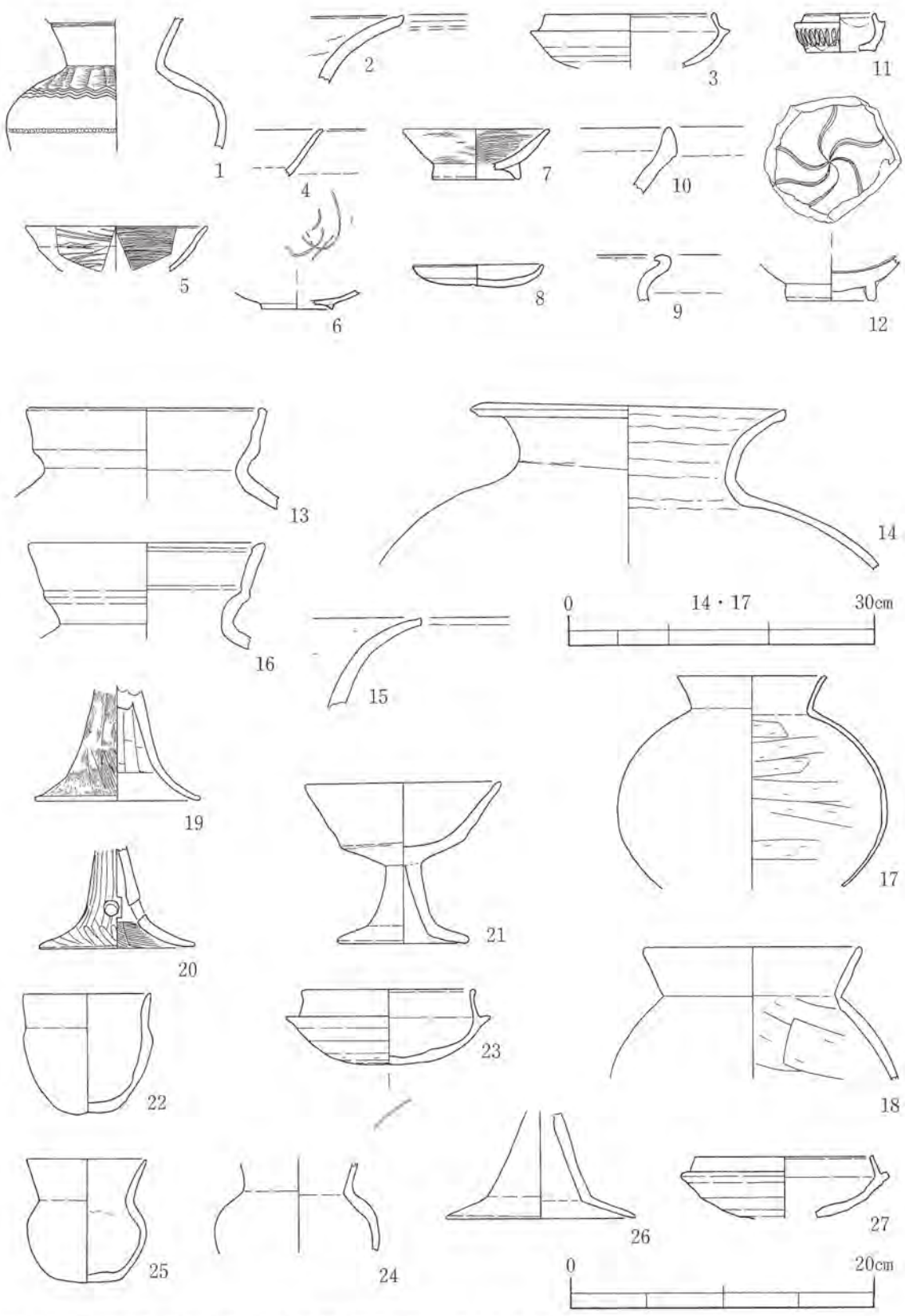
2区は京奈和自動車道の北側側道部に当る場所であり、調査区は幅約5m、延長31mを測る。

遺構としては平安時代後期の不整形な土坑などをいくつか検出した。これに伴って瓦器椀・土師器皿が多く出土している。下層は遺構密度が希薄であり、東側で自然流路を検出したのみである。

第1～3層出土遺物（第15図、PL.66）

28は第1層、29～34は第2層、35～39は第3層から出土し、40は排土中から採集したものである。28は肥前系染付碗で、外面には梅花文を施す。高台内にも文様があるが判読することができない。

29は瓦器椀で、体部内外面に細かなミガキを密に施す。30は瀬戸・美濃系陶器の天目碗で、畳付から高台内は露胎である。31・33は中国製白磁椀で、高台部は露胎である。32は白磁小杯で、全釉であるが、畳付の釉は削り取っている。内外面に細かい貫入が認められる。34は土師器小皿



1～12：包含層、13～23：1-1 自然流路、24～27：1-3 自然流路

第13図　1区出土遺物実測図

で、底部は静止糸切りである。

35・36、38・39は弥生土器である。35は後期の甕底部であり、外面底部付近まで平行タタキを施す。36は中期の甕蓋で、体部はヘラケズリの後、口縁部付近にはナデ調整を施す。38は後期の広口壺口縁部で、やや垂下させた口縁端部外面に2条の擬凹線を施し、その上に円形浮文を二個一単位で貼付する。内外面は丁寧にヘラミガキ調整である。39は長頸壺で、頸部に9条以上の沈線文を巡らす。時期的には前期末が考えられる。37は古墳時代と考えられる土師器甕で、口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部は上方に面を有する。

40は緑釉陶器椀で、口径は12.0cm、器高4.1cmを測る。体部は中位で屈曲して稜を持ち、口縁部はわずかに外反しながら斜め上方に立ち上がる。平安時代中期、10世紀前後の製品であろう。

2－304土坑（第16図、PL.67）

円形を呈する土坑で、二段落ちする。遺物は肥前系の染付碗（41）が出土する。見込み部は蛇ノ目状釉剝ぎで、中央にコンニャク判の五弁花文を施す。遺物から江戸時代後半頃の遺構であると考えられる。

2－306土坑（第14・16図、PL.4）

瓦質土器の火鉢を埋設した土坑である。土坑の形状はほぼ円形を呈し、規模は直径75～78cmを測る。残存する深さは28cmで、平坦な底面中央に火鉢（43）を据えていた。火鉢内からのもう1点瓦質土器の火鉢片（42）が出土している。製品としては火鉢であるが、後世に便所甕に転用して使用されていた可能性が考えられる。

42・43は奈良火鉢である。43は口縁部の径39.2cm、器高33cmで、口縁端部を肥厚させ、その外方には沈線を巡らして、直下に押圧文を施す。また口縁部下位と底部付近にそれぞれタガ状の突帯を巡らす。底部は三足となっている。42は口縁部とその下位に突帯を巡らせ、その間にはスタンプによる梅花文を施す。いずれも15世紀代の製品である。

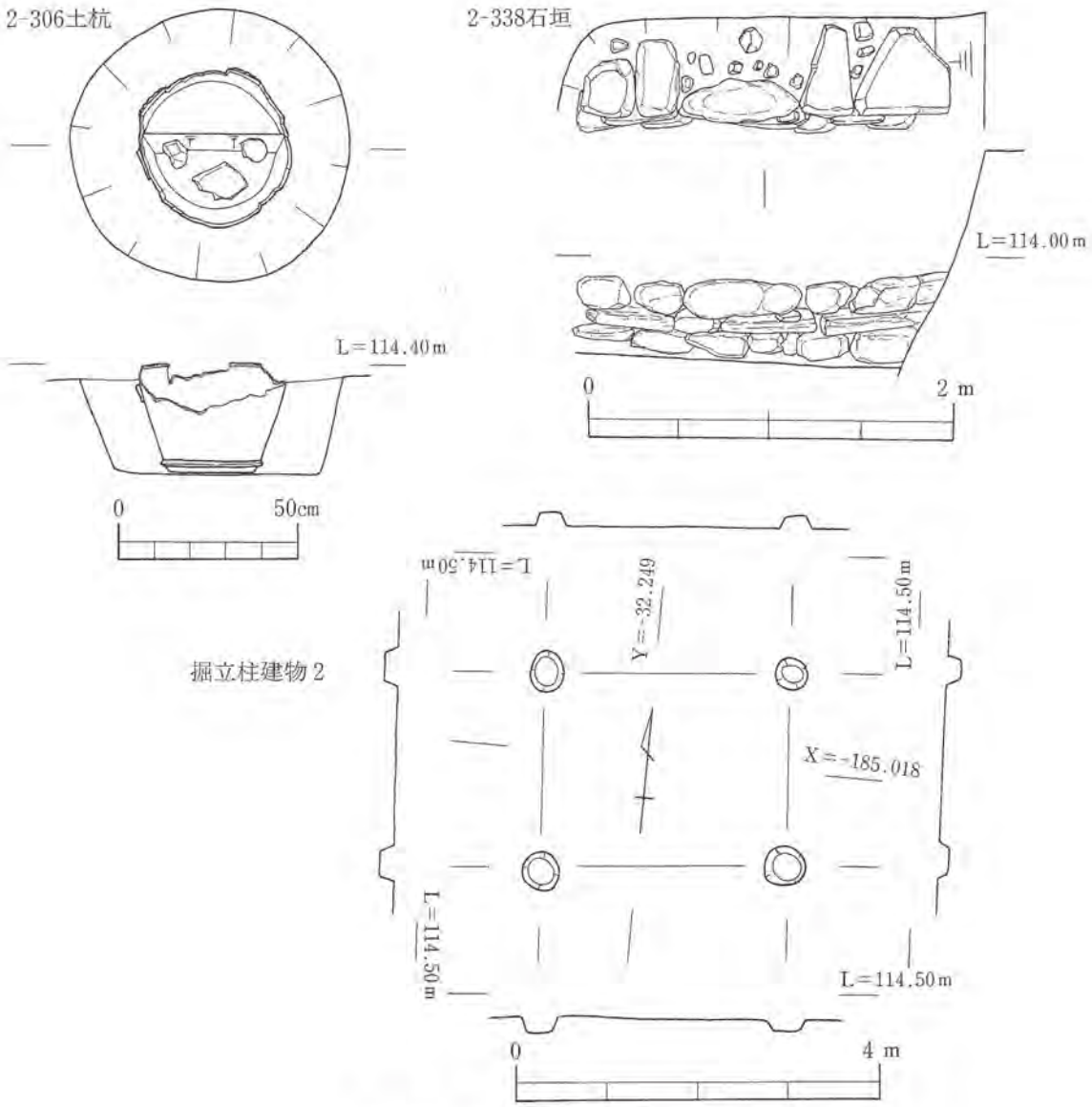
2－310ピット（第16図、PL.67）

2区の中央付近で検出したピットである。出土遺物には瓦器（44）と磁器（45）がある。44は椀で高台はやや「ハ」の字に開く。見込み部のミガキはジグザグ状である。45は肥前系の染付碗で、外面には花文を施す。45から江戸時代後半頃の遺構であると考えられる。

2－315土坑（第16図、PL.67）

直径70cmほどの円形を呈する土坑で、深さは20cmを測る。完形あるいは完形に近い土師器小皿（46～57）がまとまって約30個出土しており、地鎮遺構の可能性もある。

46～57は、口径7.5cm前後、器高1.6cm前後で、口縁部に強いヨコナデを施し、底部は指押さえの後粗くナデ調整をおこなう。技法的には糸切り底より後出するタイプであり12世紀後半から13世紀初めに収まる一群と考えられる。

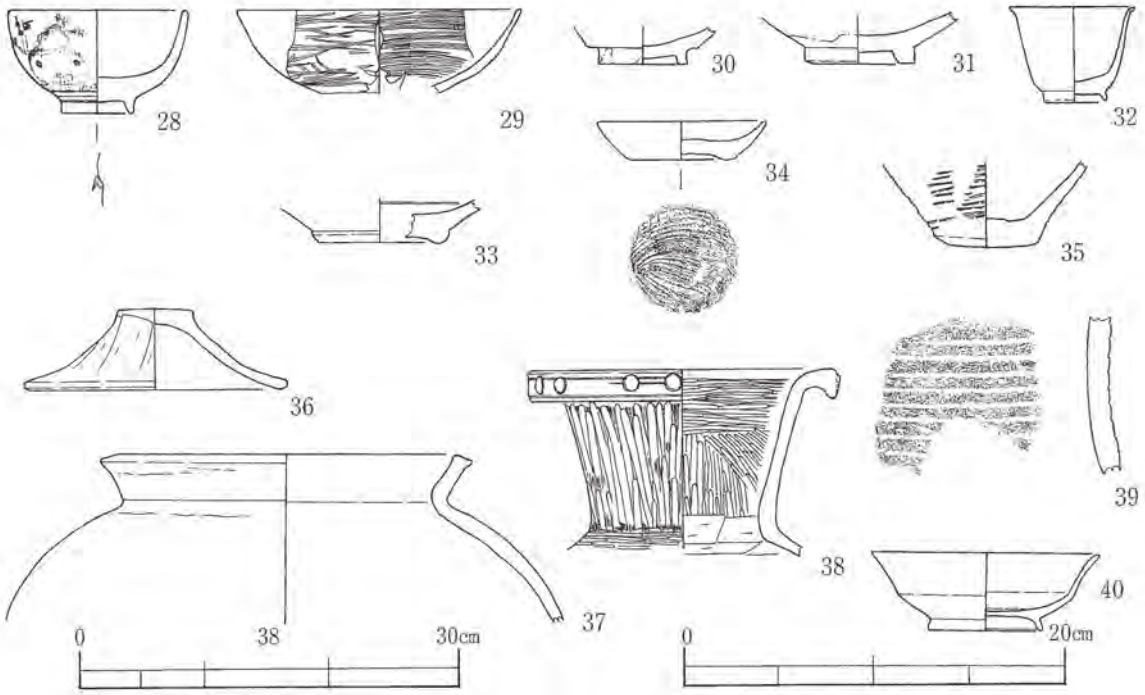


第14図　2・4区遺構実測図

2－318土坑（第16図、PL.67）

直径約2.0mの不整円形を呈する土坑で、深さは約40cmである。遺物は平安時代後期（11世紀末ないし12世紀初頭）の土師器皿（58～61）や瓦器椀（62～67）が多く出土している。

土師器の皿には大皿（58～60）と小皿（61）がある。大皿は口径15cm、器高３cmほどで、体部は回転ナデにより平滑に仕上げられており、底部の処理は静止糸切りとなっている。糸切り時の圧力のせいか底部がやや上げ底となっているのが特徴的である。小皿は口径9.7cm、器高1.6cmを測る。技法的には大皿とまったく同じで、回転ナデを加えたのち、底部をやはり静止糸切りにより処理している。これらの土師器皿は５寸・３寸という大小関係を保持した規格性の高いものと言えよう。



28：第1層、29～34：第2層、35～39：第3層、40：排土中

第15図　2区第1～3層出土遺物実測図

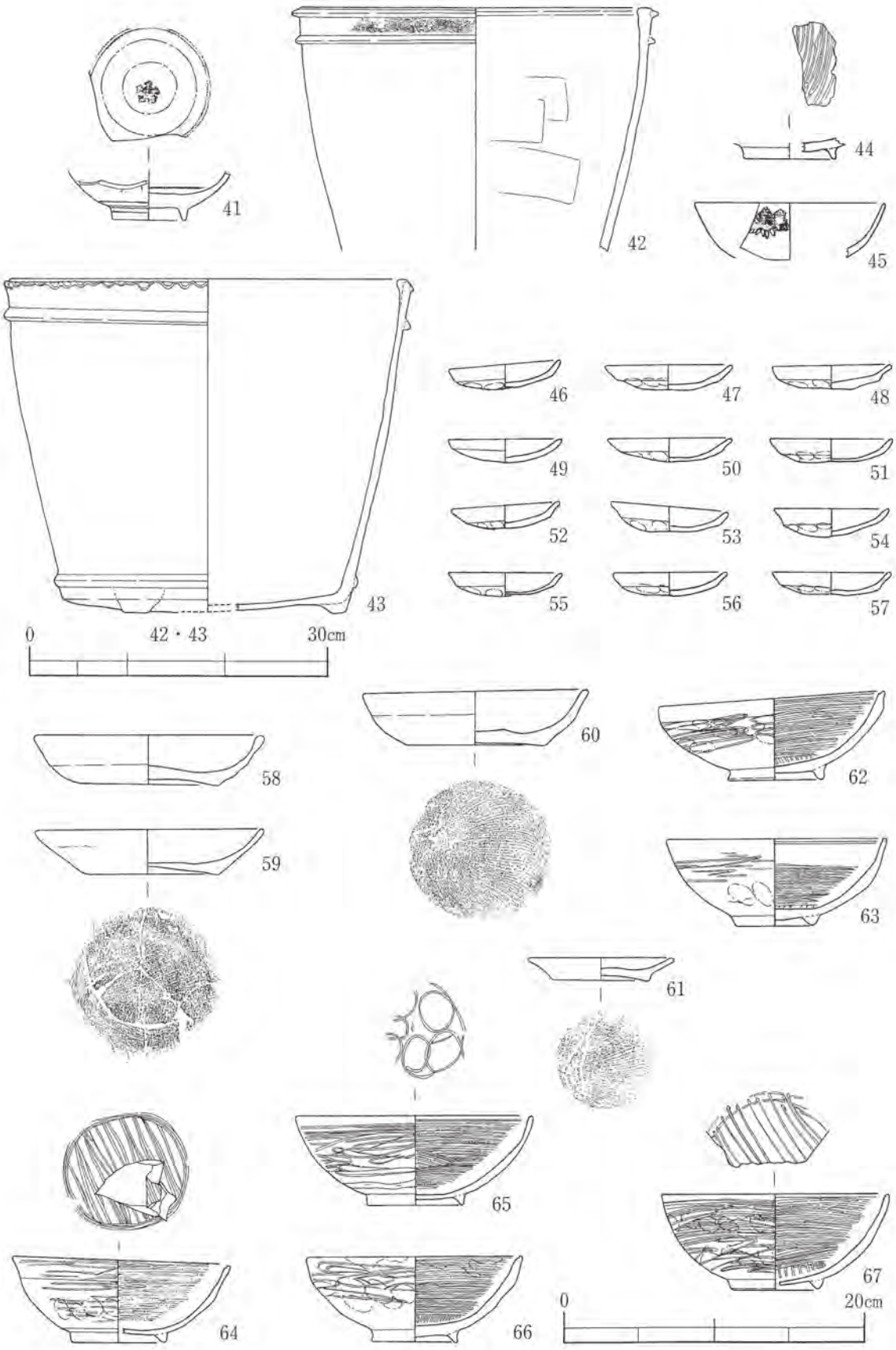
瓦器椀は、口径15cm前後、器高6cm前後のものである。プロポーションは底部から口縁部にかけて内湾気味に丸みを帯びて立ち上がる。高台は断面三角形で幅は広く、どっしりとした感じでやや外側に張り出している。見込み部のミガキはループ状のもの（65）と平行線状のものがあるが、いずれも体部内面のミガキは細かく密に施されている。体部外面にもミガキは施されており、67では高台部付近にまで及んでいる。いずれも口縁端部に沈線が施されている。ただし、その沈線も大和型と較べるとややシャープさを欠いている。またミガキなど調整方法が大和型とは異なっている。これらのことから大和型の影響を強く受けつつ在地で作られた製品と考えられよう。

2－324土坑（第17図、PL.5・68）

2.5m×1.5mほどの長方形を呈した土坑である。深さは最深部で75cmを測る。遺物は平安時代後期の土師器皿（68～72）や瓦器椀（78～85）・皿（73～77）が多く出土している。

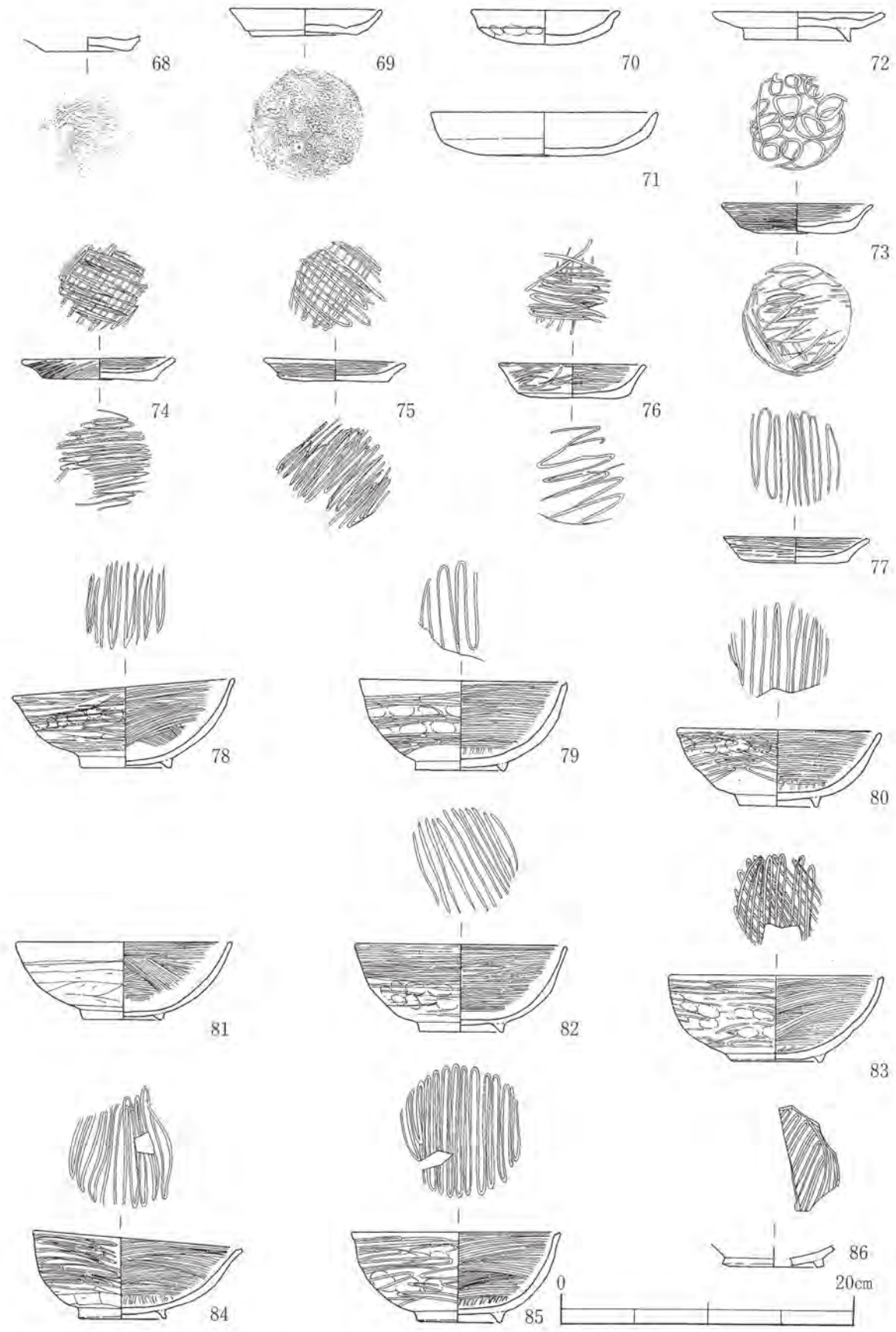
土師器皿のうち68･69の小皿は前述した2－318土坑から出土している土師器皿とまったく同じタイプのものである。これに対して71の大皿と70の小皿は底部の処理が糸切りではなく、指押さえとナデにより処理されている。大皿の口径は15.4cm、小皿は10.0cmを測るもので、両者でセット関係をなすものであろう。72の土師器皿は高台の付くやや特異なタイプである。口径の11.7cmに較べて器高は1.9cmとやや扁平である。底部から口縁部にかけて回転ナデを施す。高台は貼り付けによるものでこの部分はヨコナデにより仕上げられている。

瓦器皿はいずれも口径は10cm前後、器高は低いもので1.5cm、高いもので2.3cmとややばらつき



41：2-304土坑、42・43：2-306土坑、44・45：2-310土坑、46～57：2-315土坑、58～67：2-318土坑

第16図　2区遺構出土遺物実測図（1）



68～85：2-324土坑、86：2-336土坑

第17図　2区遺構出土遺物実測図（2）

が見られる。底部内面のミガキは73のように連続する細かなループ状のもの、77のように連続線による平行のもの、さらに75のように連続線による格子状のものがある。体部内面および外面のミガキは細く極めて密に施されている。底部外面のミガキについて見れば、まったく施されていないもの（77）、施されてはいるが粗雑なもの（76）、比較的密に施されているもの（74・75）の3タイプがある。瓦器椀はいずれも前述した2－318土坑出土のものと同じタイプのものと考えてよいであろう。

以上述べた2－324および土坑2－318土坑出土の遺物について言えば、一括性がきわめて高い一群と考えられるもので、11世紀末から12世紀初頭段階のものと判断される。とりわけ瓦器について言えば、初現期に近いものであり、これまで県内で出土した中で最も古い一群に位置づけられるものである。瓦器椀の編年研究や紀伊への技術導入を考える上で、きわめて貴重な資料となるものであろう。

2－336土坑（第17図）

調査区の西部で検出した楕円形の土坑である。出土遺物には瓦器（86）がある。86は椀で、高台は断面が台形で、底部内面のミガキは連続する平行線である。

2－338石垣（第14図、PL．4）

高さ50cmほどで、延長2mほどを確認した。石積みは三段で、真ん中にはやや扁平な石を用いている。胴木は敷かれていない。当初石垣と考えたものであるが、掘形のラインがほぼ直角に曲がっていることから、溜枡などの方形の石組み施設の一部の可能性もある。遺構の時期は中世後半であると考えられる。

3．3区の調査（第20図、PL．5）

3区は橋脚部に相当する部分で、調査面積は約230㎡である。検出した遺構には、土坑のほか直径20～40cmほどの柱穴と思われるものピットを100基以上確認することができた。出土遺物からこれらの柱穴の大部分は平安時代後期から鎌倉時代初めにかけてのものと考えられる。検出した数が多すぎたため、逆に整然とした並びを確認することができず、具体的な建物を復元するには至らなかった。調査区の北東隅では自然流路を確認している。これは前述の2区東側の下層で検出している自然流路とつながるものである。

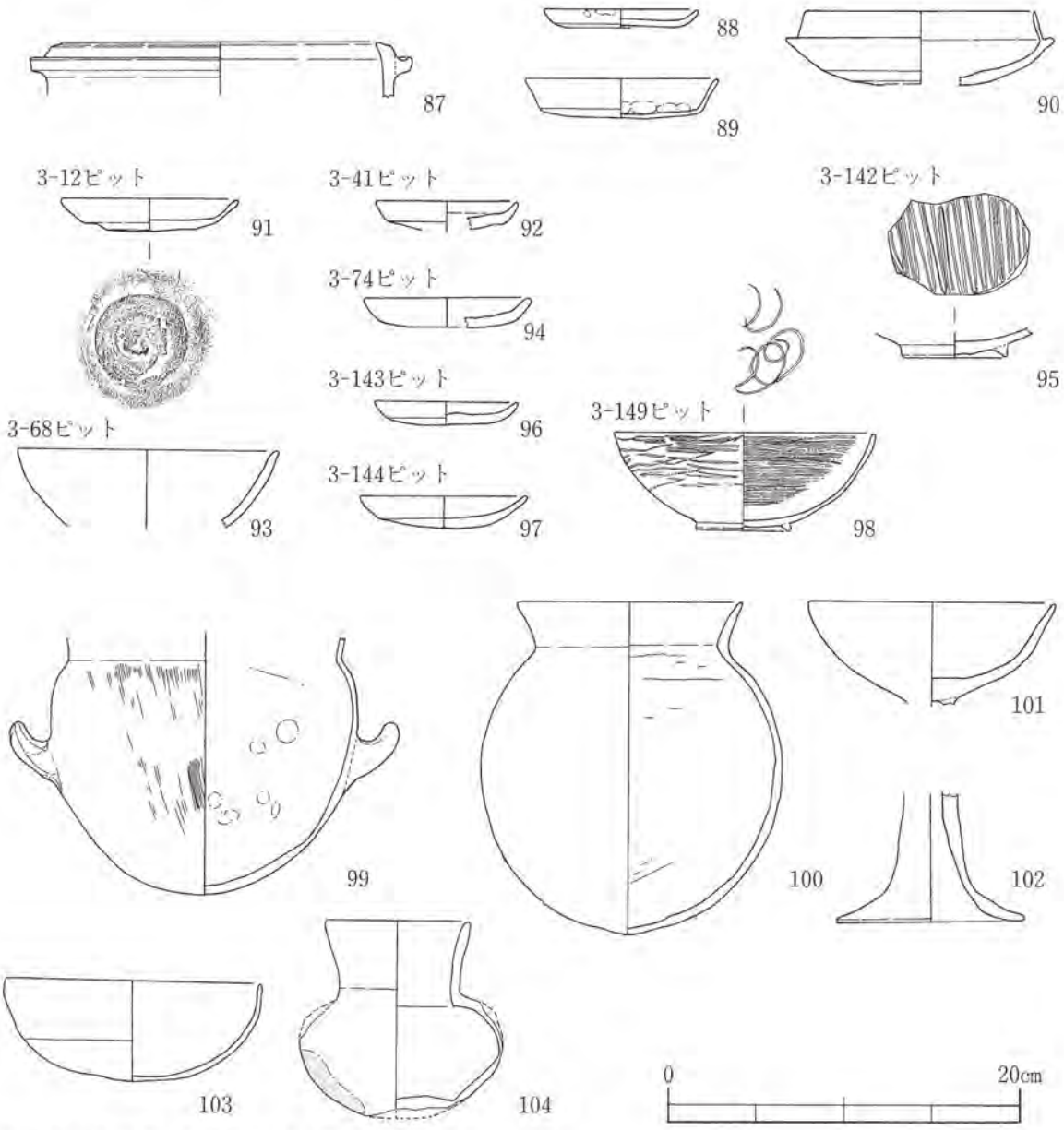
第1・2層出土遺物（第19図、PL.69）

古墳時代後期の須恵器（90）や中世の土師器（87～89）がある。90は杯身で、口縁部は薄く、内傾して長く延びる。87は土堝で、体部から口縁部にかけて直立する。口縁端部は内方に拡張し、上方に窪み気味の面をもつ。端部直下には台形状の鍔を巡らす。紀ノ川中流域から海南市で出土例が知られており、とりわけ岩出市所在の根来寺坊院跡では多い。15世紀代のものである。88は

小皿で、浅い器形である。底部の処理は指押さえののち、ナデを施す。89は土師器皿で、器壁は薄い。底部から口縁部にかけてナデ調整を施し、底部内面には指押さえ痕が顕著に残っている。88は13世紀代、89は15世紀代のものと思われる。

3－1土坑（PL.6）

長さ4.2m、幅2.1mほどの長方形状を呈しており、深さは10cmほどである。この土坑からは鎌倉時代初め頃の瓦器椀、土師器皿が出土している。



87～90：包含層、99～104：3-179土坑

第18図　3区出土遺物実測図

3－179土坑（第18図、PL.69

3－1土坑の底部で検出したもので、一辺50cmほどの丸みを帯びた三角形状を呈しており、深さは検出面から約40cmを測る。

出土遺物としては古墳時代前期の土師器（99～104）が出土している。99は把手付塝で、体部外面には粗い縦方向のハケ目が残る。100は甕で、口縁部の外反の度合いは緩く、やや上方気味に立ち上がっている。体部はやや縦に長い球形で、体部の外面はナデ、内面はヘラケズリ調整である。101・102は高杯である。このうち101の杯部は椀形である。102は脚柱部が緩やかに開き、裾部で強く外反する。103は椀で、底部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がる。器壁は薄く、調整は口縁部がヨコナデで、他はナデである。104は小型壷で、扁球形の体部に直立気味に立ち上がる口縁部をもつ。体部下半の一部にススが付着する。これらの土器は布留式新段階ものと考えている。

3－12・41・68・74・142・143・144・149ピット（第18図、PL.69）

プランは明らかにできなかったが、掘立柱建物の柱穴などであると考えられる。

91は3－12ピットから出土した土師器皿で、底部の処理はヘラ切りで、体部および見込み部は回転ナデが施される。時期的には11世紀後半から12世紀の間に収まるものと思われる。

92は3－41ピットから出土した土師器小皿で、底部と体部の境は比較的明瞭である。底部に比して、体部・口縁部は薄く、端部は尖り気味である。

93は3－68ピットから出土した黒色土器A類の椀である。復元口径で15cmを測る。口縁部のみ丁寧なヨコナデを施しているが、体部に指押さえの凹凸が残るなど比較的雑なつくりである。

94は3－74ピットから出土した土師器小皿で、底部と体部の境目は不明瞭である。回転ナデ調整で仕上げられている。

95は3－142ピットから出土している瓦器椀の底部で、見込み部のミガキは連続する平行線が密に施されている。12世紀初め頃のものであろうか。

96は3－143ピットから出土した土師器小皿で、浅い器形である。体部・口縁部はヨコナデで、他はナデ調整である。

97は3－144ピットから出土した土師器小皿で、体部・口縁部は器壁が薄い。体部・口縁部はヨコナデで、他はナデ調整である。

98は3－149ピットからの出土した瓦器椀である。見込み部のミガキはループ状のもので、体部内面には細かなミガキが密に施されており、外面体部下半にまでミガキはおよんでいる。また口縁端部に沈線が巡る。大和型の影響を強く受けた製品であり、11世紀後半から12世紀初めのものであろう。

4．4区の調査（第19・20図、PL．6）

4区は南側側道部分に相当する箇所であり、調査区は幅6m、長さ40mを測る。検出した遺構には掘立柱建物、土坑のほか前述の3区からつづく直径20cm前後の柱穴などがある。

第1・2層出土遺物（第19図）

105・106は第1層、107・108は第2層から出土した。古墳時代の土師器（106・108）、平安時代の土師器（107）、中世の土師器（105）などがある。105は土釜で、口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部をわずかに上方に拡張し丸く収めている。胎土に砂粒を多く含む。107は底部のみの出土であるため詳細については不明であるが、土師器杯と考えている。高台は貼り付けによるもので、わずかに外側に開く。丁寧なナデ調整が施されており、全体に橙色を呈している。106は小型丸底壷となるものであろう。口縁部は大きく外反し、器壁は概して薄い。108は土師器の壷の体部と思われるが小破片のため詳細については不明である。体部外面に8本単位のやや粗いハケ目が施されている。

掘立柱建物2（第14図）

調査区の西端で検出したもので、東西1間、南北1間分しか検出していない。おそらく北側と西側にさらに1間ないし2間広がっていくものと考えられよう。柱間は南北で2.15m前後、東西はやや広く2.75m前後を測る。柱穴の径は40cmほどで、深さは15cmほどであった。

遺物は柱穴から鎌倉時代初めと思われる土師器皿や瓦器椀が出土している。

4－2土坑（第19図）

109は土師器の鉢である。底部は強い指押さえにより周縁を外下方に拡張し、上げ底状を呈している。庄内式併行期のものと考えられる。

4－207土坑（第19図、PL．69）

調査区の東北端で検出した土坑で、大部分が調査区外に延びるため全容は不明である。確認規模で幅1.1mを測り、深さは最深部でも20cmほどであった。

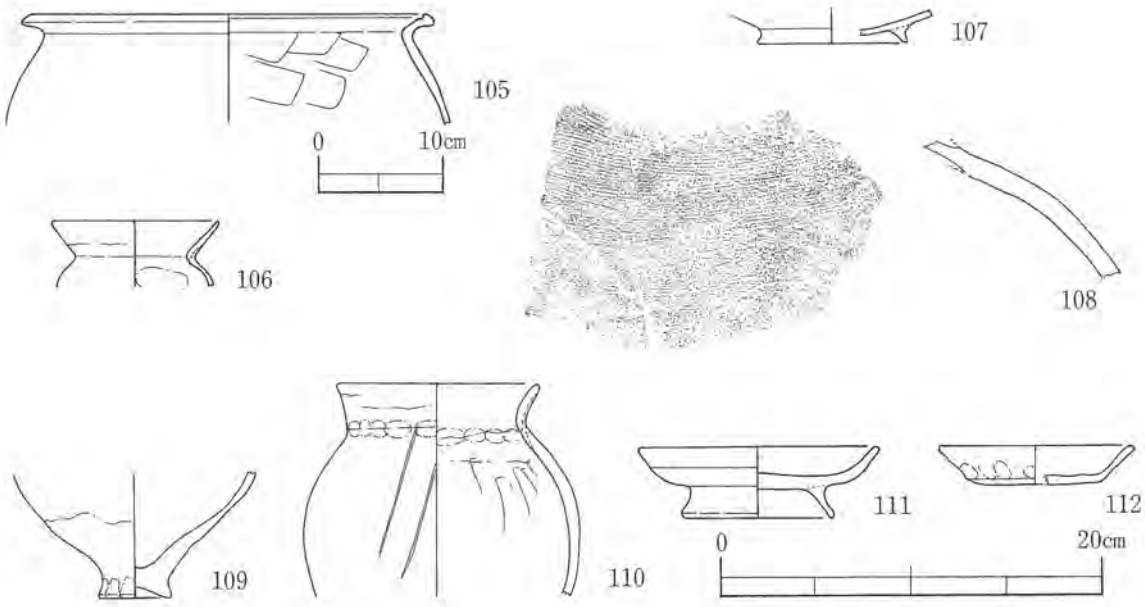
出土した遺物には土師器の甕（110）がある。体部内面はヘラケズリ調整で、頸部に粘土紐のつなぎ目痕が残る。古墳時代のものと考えられよう。

4－218土坑

径1.6mほどの土坑になるものと思われるが、北側が調査区外に延びていっており全容は不明である。深さは30cmを測る。出土遺物は少なく小破片であるが、飛鳥時代ぐらいの須恵器杯と思われるものが出土している。

4－237土坑（第19図、PL．69）

長辺4m、短辺2mで南西部がくびれる不整形な土坑である。深さは最深部でも10cmほどと浅いものである。



105・106：第1層、107・108：第2層、109：4-2土坑、110：4-207土坑、111・112：4-237土坑

第19図　4区出土遺物実測図

出土した遺物には土師器皿（111・112）がある。112は復元口径10.2cm、器高2.1cmを測る。

口縁部は斜め上方にまっすぐ立ち上がる。胎土にはよく水簸された精良なものが用いられており、全体に白っぽい色を呈する。おそらく中世でも15世紀まで下る時期のものと考えられる。111は高台が付くもので、やや異質なものである。高台は貼り付けによるもので、外側に大きく張り出している。口縁部には強いヨコナデが施されている。中世段階での高台付きの土師器皿については出土例がきわめて少ないが、15世紀代に先祖返りしたように突如現れる例がいくつか知られている。前述の土師器皿も15世紀のものであり、この皿についても15世紀代のものと考えてよいであろう。

第4節　まとめ

遺跡に隣接する丘陵上には人物画像鏡で有名な隅田八幡宮があり、古墳も数基確認されている。調査では古墳時代前期の建物や中世の土坑などが検出され、また弥生土器にはじまり中・近世にかけての土器が出土することからも、弥生時代以降連綿と生活が営まれていたことが窺える。1－A・B区の大半は流路で占められ、方向からも川の分流であった可能性があり、丘陵裾となる西側はやや不安定な土地であったと考えられる。このことから多くの遺構は調査区の東寄りで検出されている。遺構検出状況から、調査区から北側の谷奥方向にも展開していることが予想され、遺跡の範囲もやや北方向に広がる可能性がある。


Y=-32.300
Y=-32.280
Y=-32.260
Y=-32.240
Y=-32.220
X=-184.980
X=-185.000
X=-185.020
1A区
1B区
2区
3区
4区
1
2
3
4
5
6
7
8
掘立柱建物1
掘立柱建物2
333
324
336
315
318
304
338
306
104
90
64
41
68
74
179
12
149
144
181
143
142
124
218
207
237
210
0
30m

第20図　遺構配置図

第３章　野口遺跡

第１節　位置と環境および調査に至る経緯（第21図）

野口遺跡は橋本市隅田町中島地内に所在する。紀の川右岸の河岸段丘上の平坦面にあり、東側を高橋川が流れている。今回の調査地点では標高110m前後を測る。隅田八幡宮の南西に開けた地域であり、中世は隅田庄に属していた。野口遺跡については、これまで一度も発掘調査されたことがなく、縄文時代から中世の遺物の散布地として知られるのみであり、その実態については不明という状況であった。

周辺の遺跡としては、東側の標高120mほどの段丘上に八幡宮古墳が所在している。この古墳は終末期の古墳で、墳丘についてはすでに削り取られており、規模は不明である。主体部は南東方向に開口する結晶片岩を用いた切石積みの横穴式石室で、全長６m、玄室の長さは３m、幅1.7mを測る。県下では御坊市に所在する岩内１号墳とともに数少ない切石積みの横穴式石室墳として知られている。

そのほか高橋川を挟んで東側には中世の山城である霜山城跡がある。中世にこの地に勇力を張った隅田一族の野口氏が居城としたと伝えられており、別名野口城とも称されている。現在は雑木林となっているが城跡は原形をとどめており、東西145m、南北98mの郭跡が幅９m、深さ3.5mの空堀に囲まれている。堀で区切られた一の丸と二の丸はともに東西30m、南北40mの方形で、土橋で結ばれている。なお、この城については中世後期には畠山氏の持城となったとされている。



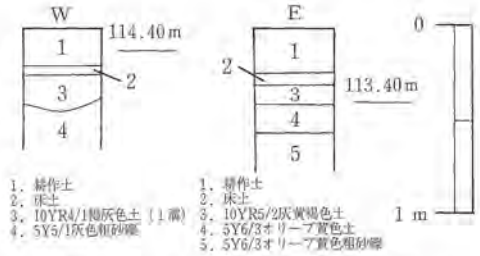
第21図　野口遺跡調査区位置図

調査は、道路の高架部分を支える橋脚部建設予定地の約300㎡について1999年11月に実施した。

第２節　層序（第22図）

調査地の現況は二枚にわたる水田であり、西側の水田の標高は114.5m、東側の水田はこれより70cmほど低くなっている。西側の水田部では第１層耕作土、第２層床土で、その直下で地山である第４層灰色粗砂層となっており、水田化の際にかなり削平を受けた模様である。地山直上で２条の溝を検出した。

東側の水田部では、第２層床土下に第３層灰黄褐色土が10cmほどの厚さで、さらにその下に第４層オリーブ黄色土が15cmほどの厚さで堆積していた。遺構を検出したのは第４層下で、地山と考えている第５層オリーブ黄色粗砂礫の直上である。ここでは２条の溝を検出した。



第22図　野口遺跡土層柱状図

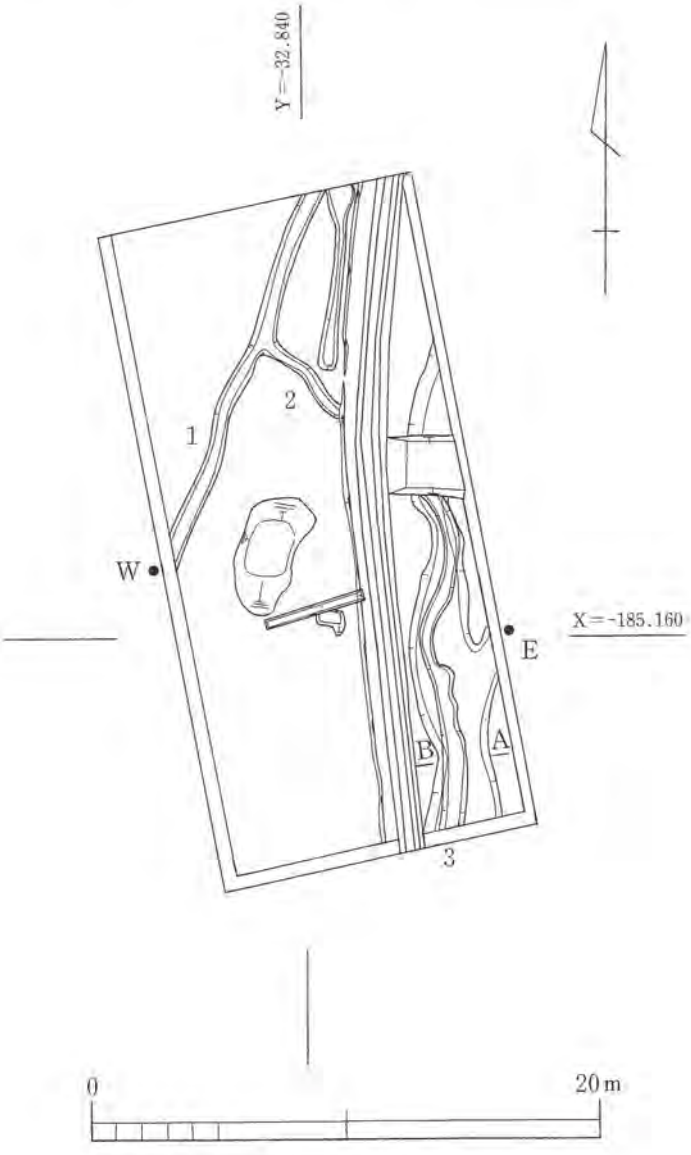
第３節　遺構と遺物

（第23図、PL．７）

西側の水田部で２条の溝（１溝・２溝）、東側の水田部でも２条の溝（３溝・４溝）を検出している。

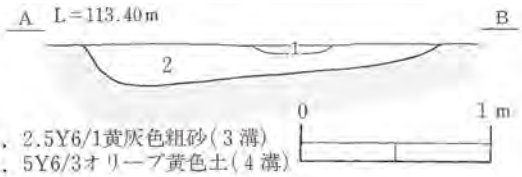
１溝

溝の幅は約70cm、深さは約20cmで、北北東から南南西方向に走り、両端は調査区外に延びる。調査区内で長さ約16.0mを確認した。埋土は褐灰色の土で、砂など水の流れていた痕



第23図　遺構配置図

跡は窺えない状況であった。出土遺物はまったくなく、時期については不明と言わざるを得ない。



第24図　4溝土層図

2溝

1溝から分岐して南南東方向に約4.0m延びるもので、幅・深さ・埋土とも1溝とまったく同じであった。この2条の溝は本来もう少し規模の大きなもので、後世の削平によりその底部のみが残存していた可能性が高いものと考えている。

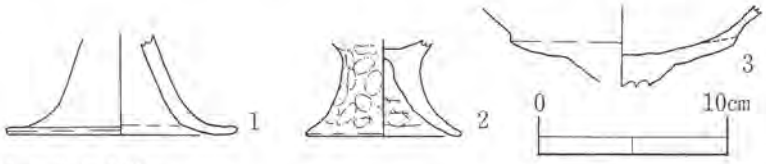
3溝

蛇行しながら南北に延びる溝で、幅50～80cm、深さ約10cmを測る。北側は明らかでなく、南端は調査区外に延びる。調査区内で約13.0mを確認した。埋土は黄灰色の粗砂で、遺物は出土しなかった。3溝は後述する4溝が埋まって行く過程での最終段階のものとも考えられる。

4溝（第24・25図、PL.7・70）

3溝と同様に蛇行しながら南北方向に延びる。溝幅は一定ではなく、2～3mで、深さは最深部で約40cmを測る。埋土は一層で、オリーブ黄色土である。この溝は自然流路であった可能性が高い。

出土遺物は、溝の底からわずかではあるが古墳時代前期の土師器高杯(1～3)が出土している。1は高杯下半部である。斜め下方に開いた脚部は裾部で強く外反し、接地面が大きくなっている。全体に暗橙色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれる。片岩は認められず、在地の土器と思われる。2は高杯下半部である。脚部が短く、裾部の径も8.5cmと小さい。内面に粘土紐のつなぎ目痕が残る。全体にくすんだ肌色を呈し、胎土にはやや大粒の砂粒が含まれている。3は高杯杯部である。口縁部を欠いているが体部との境に稜がつくもので、口縁部はおそらく斜め上方にまっすぐ立ち上がるタイプと思われる。色調・胎土が前述の1と酷似しており、両者は同一個体である可能性が高い。これらの高杯の帰属時期について言えばいずれも布留式期に相当するものであろう。



第25図　出土遺物実測図

第4節　まとめ

今回の調査区においては遺構密度が低く、わずかに4条の溝を検出したのみである。また、出土遺物もきわめて少量であった。

このため当遺跡の概要を考えるにもその資料を事欠く状況と言わざるを得ない。ただ前述したように当該地付近は段丘面の平坦地であり、近くに古墳が所在していること、また中世には隅田一党でも有力者であった野口氏の居城に近いことなどを考え併せれば古くから拓けていた地域と想像される。今回の調査ではこうした兆候を確認することはできなかったが、もう少し面積を広げ調査する機会があれば成果があがるものと思われる。いずれにせよ当遺跡の解明については今後の課題であり、今回の調査はその足がかりになるものと言えよう。

第４章　北馬場遺跡の調査

第１節　調査の経過と方法（第26図）

調査の原因は垂井女房が坪遺跡と同じで、近畿地方建設局和歌山工事事務所による一般国道24号橋本道路（京奈和自動車道）建設工事が行われることとなり、当遺跡がそのルート上にかかるため、平成10年度に和歌山県教育委員会が試掘調査を行った。

試掘調査は幅1.5mのトレンチを帯状に数本設定し行われた。結果、縄文時代中期の土器片が出土した土坑状遺構や中世の掘立柱建物の柱穴などを確認している。確認した遺構については掘り下げずにプラン確認だけに留め、再び覆土を行い本調査時に備えていた。

調査地は現有の町道および里道が十字に通っているため、これを利用して便宜上１～６区を設定した。７～11区については橋脚建設部分である。

調査は３箇年に分けて実施した。各年度の調査区は次の通りである。調査区１～11区のうち１・



第26図　北馬場遺跡調査区位置図

2・4・8・10・11区は平成11年度の第1次、5～7・9区は平成13年度の第2次、3区を平成14年度の第3次で発掘調査を実施した（表1）。

調査地の現況は3・6区が民家の敷地跡で、他は水田であった。

第2節　層序（第27図）

1．1区の層序

基本層序は第1層が水田耕作土、第2層が床土で、その直下が地山となる。遺構検出は地山直上でおこなった。遺構検出面の標高は約111.00mを測る。

2．2区の層序

基本層序は第1層が水田耕作土、第2層が床土、第3層が中世包含層で、包含層下が地山となる。第3層は西側の一部分で確認できる程度で、他では後世の削平が著しいためか、第2層下で地山となる。第3層上面で遺構を検出しているが、この層が薄いこともあって地山上面で検出した遺構との区別ができていない。

遺構検出面の標高約110.40mで、西側の一段低い箇所は約109.65mを測る。

3．3区の層序

基本層序は第1層が水田からの転作畑の耕作土、第2層が転作以前の水田の床土、第3層が中世包含層(10YR3/2黒褐色シルト層)で、その下に調査区の北側では整地土と考えられる第4～6層が、40～60cmの厚みで存在する。整地土下は地山(7.5YR5/6明褐色の粗砂層に径1～3cmの礫混じり）となる。調査区の南側は第3層下に若干の整地層がみられる程度である。

遺構面は2面を確認した。上面は第3層包含層上で、中世の遺構を検出した。下面は第4層直上であるが、検出した遺構からは遺物が出土せず、整地土にも遺物が含まれないことから面が形成された時期も明らかでない。ただ、直上の包含層に含まれる遺物からも、上面と同じ中世の範疇で下面の時期を考えたい。北馬場遺跡の調査区内で3区だけに整地土が存在する。これは北側が崖状に低くなっており、元々の地形は南側の4区などに比べ若干低かったからであると考えられる。遺構検出面の標高は北側では111.00m、南側では111.20mである。

4．4区の層序

基本層序は第1層が現在の耕作土で、それ以下第4層まで耕作に係わる層位である。第4層以下の層位は地点によって異なり、東側ではH地点の柱状図でも示したように、第4層直下で地山と

なる。北側では第５層が2.5Y5/1黄灰色シルトと2.5Y6/4にぶい黄色シルトの混層で、第６層が10YR4/2灰黄褐色シルトと2.5Y5/1黄灰色シルトの混層となる。第５・６層はともに中世包含層で、南西側では、これに対応する層として第５層が10YR5/1褐灰色シルト層・第６層が10YR4/1褐灰色シルト層が存在し、さらに南側の中央付近ではその下に第７層として10YR4.5/1褐灰色シルト層がある。第７層もまた中世の包含層である。

ほとんどの遺構は第６層上面で検出している。遺構検出面の標高は約111.00mである。

５．５区の層序

基本層序は第１層が現在の耕作土、第２層が床土で、第３層が旧床土となる。旧床土は５cmほどの厚さであるが、時期については出土遺物がなく限定できない。第４層は礫を少量含む10YR3/1黒褐色土で、飛鳥時代から室町時代までの遺物を含む包含層である。ただし、この包含層は後述する６区に較べると薄い。また、第４層は、調査区の西側のみに堆積しており、東側には及んでいない状況であった。遺構検出は地山直上でおこなった。

６．６区の層序

基本層序は第１層が現在の耕作土、第２層が床土で、第３～５層が旧耕作土となる。第６層は包含層で、礫を少量含む10YR3/1黒褐色土となっており、その下が地山である礫混じりの黄褐色土となる。第６層は、調査区の西側では30cmほどと厚く堆積していたが、東側に向かって徐々に薄くなり、調査区の東端においてはまったく認められなかった。

遺構は第６層上面と地山直上で検出している。第６層上面は幾つかの土坑を検出したものの建物など具体的な遺構については検出することができなかった。地山直上は遺構密度が高く、建物跡などを検出した。

なお、包含層からの出土遺物の量はさほど多くを数えるものでないが、調査区北西部においてのみ比較的まとまったかたちで出土している。時期的には縄文時代から奈良・平安時代を経て中世後期、室町時代までの遺物が含まれており、かなりの時期幅を持つものと考えられる。ただし縄文土器などは極めて少なく、量的に最も多いのは鎌倉時代、13世紀前半代から中頃にかけてのものである。

７．７区の層序

第１層耕作土の上に盛土がなされていた。第２～４層が旧耕作土やそれに伴う床土、第５層10Y3/1黒色土が包含層で、その下で礫混じりの黄褐色土の地山となる。包含層についてはわずかに調査区北西隅において薄い堆積が認められる程度であった。包含層からは中世後期、15世紀代の

遺物が少量ではあるが出土している。遺構は地山直上で検出している。

8、8区の層序

8－1区は調査区の中に用水路があり、これの東と西側では堆積土の様相が異なる。東側は現在の水田層（第1層耕作土・第2層床土）の下層に第3層・4層の中世包含層が存在する。各包含層の上面から遺構が検出され、それの下層は地山となる。第3層上面からはピット・土坑、第4層上面からもピット・土坑を数基検出した。これらの遺構の埋土は全て単一層で7.5YR3/1黒褐色シルト質であった。西側は現在の水田層の下は地山であり、ピットを南壁土層で1基だけ地山上から確認している。出土遺物はないが東側の遺構の埋土と同様であることから中世の遺構と考えられる。

8－2区も現状は水田であった。第1層は耕作土、第2層は床土、第3層は旧床土で、第4層が中世包含層の7.5YR4.5/1褐灰色シルト層、第5層が7.5YR6/6橙色シルトの地山となる。遺構は第4層上面で検出した。

9．9区の層序

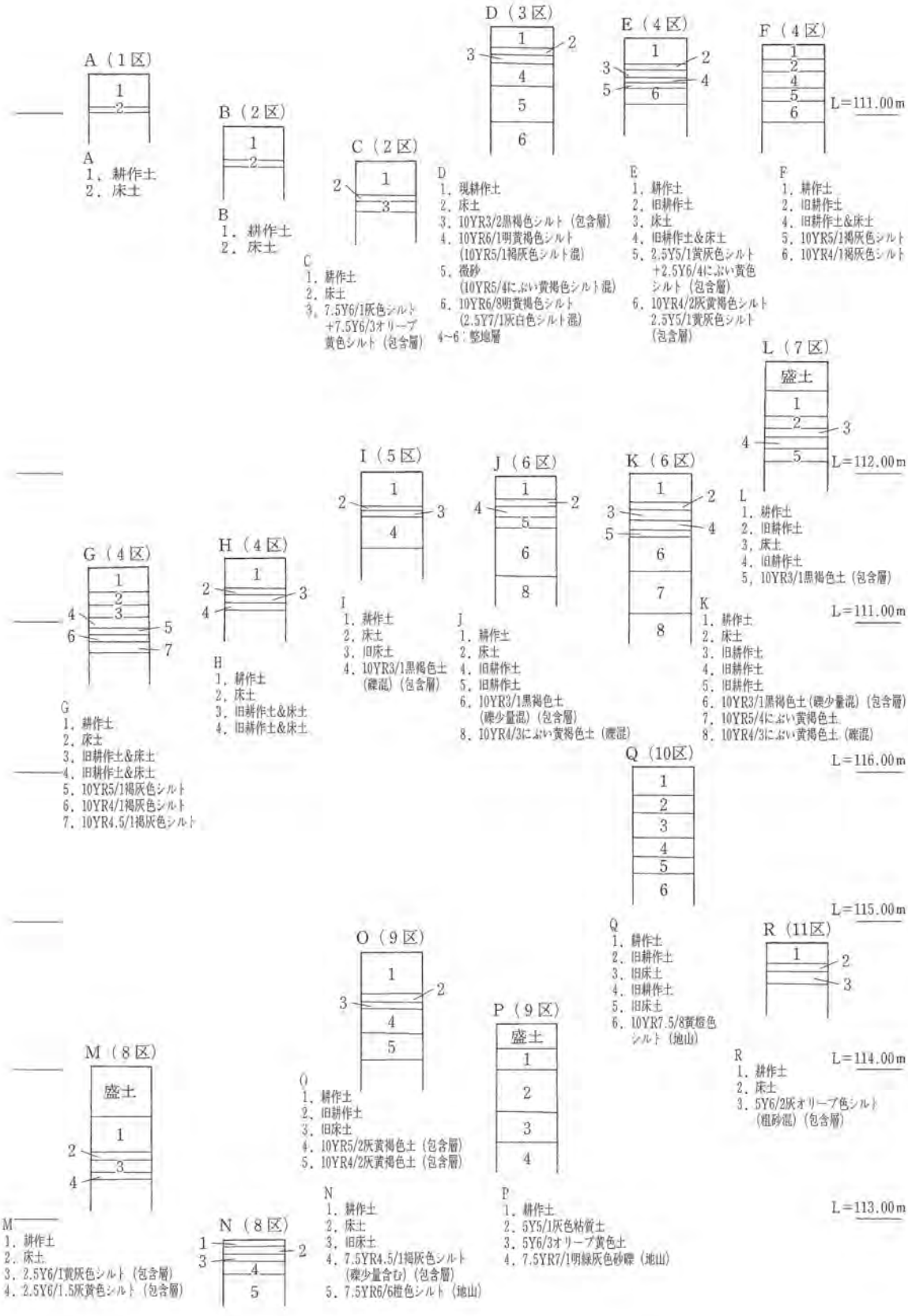
南北二つの調査区に分かれる。北側は第1層耕作土、第2層旧耕作土、第3層旧床土、第4・5層が中世の包含層で、その下が地山となる。遺構は地山直上で検出した。南側は盛土がなされており、第1層が耕作土、第2層が5Y5/1灰色粘質土、第3層が5Y6/3オリーブ黄色土で、第4層が7.5YR7/1明緑灰色砂礫の地山となる。第2・3層は近世の整地土で、この上面で遺構検出した。地山直上では遺構が検出できなかった。

10．10区の層序

基本層序は第1～5層までが、耕作に係わる層位で、その直下が10YR7.5/8黄橙色シルトの地山となる。地山直上で遺構検出をおこなったが遺構はなく、東から西に落込む旧地形を検出したに留まった。

11．11区の層序

基本層序は第1・2層が現水田の耕作土・床土、第3層が粗砂混じりの5Y6/2灰オリーブ色シルトの中世包含層で、その下が10YR7.5/8黄橙色シルトの地山となる。第3層は調査区全面には存在していなかった。遺構は地山直上で検出した。



第27図　北馬場遺跡土層柱状図

第３節　遺構と遺物

１．１区の調査（第35図、巻頭図版３、PL．８・70）

１区は地形的には台地北西の縁辺部にあたり、現況は水田で、標高は約111.20mを測る。調査区北端から北方向に約10mで１mの高低差がつき、その先は崖状に低くなっている。

検出遺構には中世（鎌倉時代後半～室町時代初頭）の掘立柱建物・土坑・溝などがある。この地区からの出土遺物には瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜などがある。

掘立柱建物１

調査区中央北側で検出した。規模は東西２間（3.99m）×南北２間（4.02m）としたが、北側は調査区外のため南北方向は２間以上の可能性もある。主軸の方向はＮ－22°－Ｗである。南北方向東側の北の間尺が他の間尺より約30cm長いため平行四辺形の建物である。掘形の形状は円形を呈し、規模は直径30～37cm、深さ約33cmで、柱当たりから柱の直径は16～25cm程度であったと考えられる。掘形の埋土は10YR4/1褐灰色シルトである。

建物に伴う遺物は出土していない。

掘立柱建物２（第28図、PL．８）

調査区中央やや東で検出した桁行２間（3.56m）×梁行２間（2.94m）の総柱建物で、主軸の方向はＮ－14°－Ｗである。平面プランはほぼ長方形で整っているものの、間尺は一定でなく、桁行・梁行とも15～20cm程度の差異がある。柱の掘形は円形もしくは楕円形で、直径22～70cm、深さ25～46cmで、柱当たりから柱の直径は15～26cm程度であったと考えられる。東側の２間・南側の２間・西側の北１間で幅15～25cm、深さ５～20cmの布掘溝を検出している。溝は建物の構造上、側板もしくは壁などを埋め込むためのもので、蔵や土蔵などの性格が考えられる。

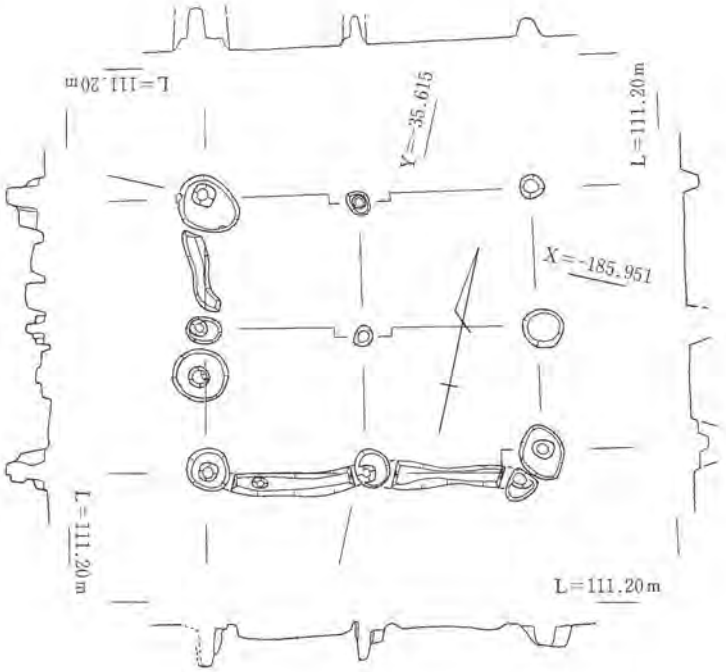
遺物は建物北西隅の柱穴掘形から瓦器椀が８片、北東隅柱穴掘形から瓦器皿１片が出土している。

掘立柱建物３（第28図、PL．８）

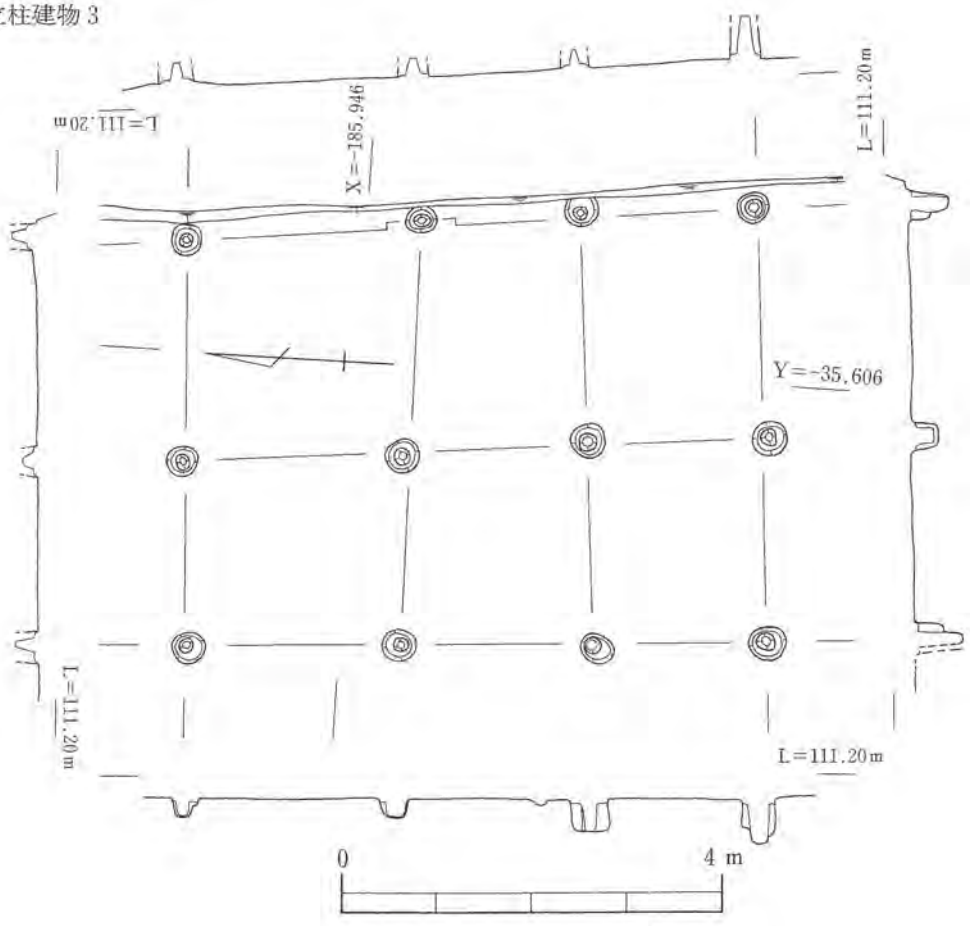
調査区東端で検出した南北棟の総柱建物である。規模は桁行３間（6.09m）×梁行２間（4.64m）で、主軸の方向はＮ－4.5°－Ｗである。建物の東に接して町道が通っているが、この道と平行に検出した。平面プランは梁行北側が短くなっており、やや台形状を呈する。これもあって間尺も一定でなく、桁行で1.50～1.68m、梁行で1.95～2.53mである。柱穴掘形の形状は、ほぼ円形で、直径27～48cm、深さ21～50cmを測る。柱穴の埋土は10YR4/1褐灰色シルトで掘立柱建物１と同様である。

遺物は北西隅の柱穴掘形から瓦器皿片・土師器皿片が各々1片、西側柱の柱当たりからは瓦器椀２片、土師器皿５片が、南側柱の掘形から瓦器椀が１片出土している。

掘立柱建物２



掘立柱建物３



第28図　掘立柱建物２・３実測図

1－695土坑

調査区の北東端で検出し、北側は調査区外で全容は不明である。形状は円形もしくは楕円形と考えられ、最大径1.7mを測り、深さは約20cmを測る。埋土は単層で10YR5/3にぶい黄褐色シルトに径５mm内外のマンガン粒子が疎らに入る。遺物は出土していない。

1－696土坑

掘立柱建物３の北西で検出した。平面形状は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸2.1m、短軸1.6mで、深さは約15cmを測る。埋土は単一層で10YR5/1にぶい褐灰色シルトに５～40cm大の砂岩と片岩の礫が多量に入る。遺物は出土していない。

1－720土坑（第34図）

調査区の南東で検出した。1－730溝と重複し、当遺構の方が古い。南端はわずかに調査区外で不明である。平面形状は不定形で、規模は南北の長軸2.5m以上、短軸2.5mを測る。深さは約20cmを測り、断面形状は船底状を呈する。埋土は２層に分層でき、上層は10YR5/1褐灰色シルト層に径１～２cmの細かいマンガン粒子が疎らに入る。下層は10YR6/4にぶい黄橙色シルト層である。

遺物は上層から器面の摩滅の著しい瓦器（２）のほか土師器羽釜の細片が１点出土している。２は皿で、口縁部はヨコナデ、底部は指押さえ後ナデ調整である。

1－741ピット（第34図）

調査区中央のやや東側で検出したピットである。掘立柱建物２の西側柱列と重なるが、柱穴との重複がないので、新旧関係は不明である。形状は円形を呈し、直径58cm前後を測る。

遺物は瓦器（１）が出土している。１は椀で、形骸化した高台を貼り付け、器高は低い。内面にはミガキが認められるが、摩滅により不鮮明である。焼き歪みが大きく、口縁部が楕円形を呈する。

1－771ピット（第34図）

調査区の東側で検出したピットで、掘立柱建物２の南東隅の柱穴と接する。形状は楕円形で、長軸48cm、短軸40cm、深さ12cmを測る。底近くに10cm程度の川原石が入っている。

遺物としては土師器（３）が出土している。３は皿で、外面の底体部は指押さえ調整である。

1－794土坑

調査区のほぼ中央で検出した。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸約1.0m、短軸約0.7mを測る。深さは50cmを測り、断面形状は逆台形で、両肩はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は２層に分層でき、上層は10YR5/2灰黄褐色のシルト層が厚み約８cmと薄くレンズ状に堆積する。下層は10YR5/3にぶい黄褐色シルト層である。下層からは釘が１本出土している。規模や断面形状、釘の出土から墓壙の可能性もあるが、土層断面では棺の痕跡などは確認できなかった。

遺物は釘のほか、上層から瓦器椀細片が出土している。

1－730溝

調査区の南で検出し、東西に直線的に延びる。溝は底の高さから西方向に流れていたと考えられる。検出延長は約25.5mを測り、東は調査区外で不明であり、西は近世の縁石で削平されている。幅は約30～80cmで、深さは15～25cmを測る。埋土は1－720土坑の上層に酷似するが、当遺構の方が濃色を呈する。

出土遺物には摩滅が著しい瓦器椀片、土師器皿片がある。

2．2区の調査（第35図、巻頭図版3、PL.9）

2区の現況は水田である。位置的には町道を挟んで1区の南側で、西端は台地の縁辺部にあたる。さらに調査区の西端は一段低くなり75～80cm程度の高低差がつく。

遺構は縄文時代中期の土坑、奈良時代の掘立柱建物・土坑、中世の掘立柱建物・土坑・溝、近世の土坑などを検出した。これらの遺構の検出面は、殆どが地山上である。包含層（第3層）の確認できる地点では、一部の中世の遺構を包含層上で検出した。

第2・3層出土遺物（第34図、PL.70）

第2層からの出土遺物には土師器（6）、瓦器（7～9）、須恵器（10）、石器（33・34）がある。6は浅い器形の皿で、底部は板状工具によるナデにより平坦気味である。瓦器のうち7は皿、8は小椀、9は椀である。7は体部から口縁部外面にミガキを施す。8は断面三角形の高台を貼付け、口縁部のヨコナデが強いことから体部との境が屈曲気味となる。9は浅い器形で、炭素が摩滅している。10は杯身で、底部端に断面台形の高台を有する。33・34はサヌカイト製の楔形石器である。

第3層の出土遺物はほとんどが瓦器・土師器皿の破片であったが、縄文時代の石鏃（31・32）なども出土した。

掘立柱建物4（第29図、PL.10）

調査区北西隅で検出した南北棟と思われる建物である。桁行4間(6.45m)以上、梁行は検出し得た結果でいえば1間で5.25mである。主軸の方向はN－13°－Wである。北は調査区外で、南は後世に削られているため北側柱列・南側柱列が確認できない状態であり、並列する柵列の可能性も捨てきれない。柱穴はほぼ直線的に並ぶものの、間尺は1.56～1.94mと一定でない。掘形は中世の掘立柱建物の柱穴に比して大きく、掘形の形状は中には不定形のものがあるものの、殆どが方形を基本としている。掘形の規模は43～83cm、深さ36～52cmで、柱当たりから20～29cm程度の柱であったと考えられる。柱穴の埋土は10YR4/1褐灰色シルト質で、柱当たりの埋土はこれより若干暗色であった。

柱穴からの出土遺物がないため、建物の時期は不明であるが、柱穴掘形の形状や規模、また、



第29図　掘立柱建物4・5実測図

包含層や周辺遺構の埋土に混入して古代の遺物が出土していることなどから奈良時代もしくは平安時代の建物の可能性がある。

掘立柱建物5（第29図）

掘立柱建物4の東に近接して検出した東西棟の建物である。規模は桁行3間(6.39m)×梁行2間（4.32m）の総柱建物で、主軸の方向はN－14°－Wである。後世の削平のためか柱穴の遺存状況は悪い。平面プランは西側梁行がやや短くなっているが、間尺は梁行・桁行ともおおよそ2.1m（7尺？）前後で整っている。掘形の形状は円形か円形に近い楕円形で、直径26～42cmで、深さは17～28cmを測る。部分的に認められる柱当たりから、柱の直径は18～27cm程度であったと考えられる。2箇所の柱穴において、柱当たり底で川原石が出土しているが、据え石であった可能性も考えられる。掘形の埋土は10YR4/1褐灰色シルト質と10YR5/2灰黄褐色シルト質が7：3の混層である。

遺物は北側柱の掘形から土師器皿が5片出土している。

掘立柱建物6（第30図、PL.10）

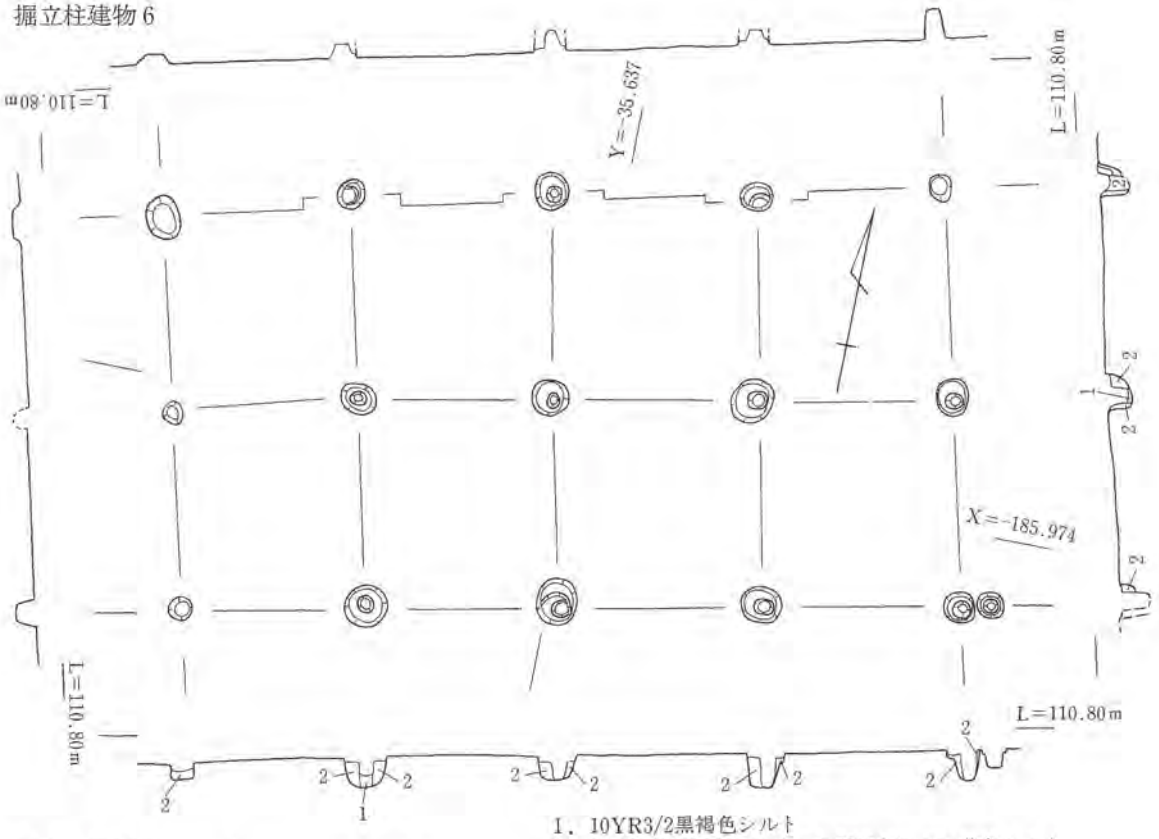
調査区ほぼ中央の北寄りで検出した東西棟の建物で、掘立柱建物7と南北に並列する。規模は桁行4間（8.28m）×梁行2間（4.48m）の総柱建物で、主軸の方向はN－12.5°－Wである。北馬場遺跡で検出した中世の掘立柱建物の中では、掘形の形状や深さが比較的揃っている建物の一つである。平面プランはやや平行四辺形であるが、間尺は桁行・梁行ともおおよそ2.1m前後（7尺？）を基本として揃っている。ただ、桁行方向の西端1間分が他の間尺と比べるとほぼ10cm内外短い。掘形の形状は円形か楕円形で、直径32～49cmで、深さは26～36cmを測る。柱当たりから、柱の直径は17～21cm程度であったと考えられる。柱穴の埋土は10YR3/2黒褐色シルトで柱当たりはこれよりやや暗色を呈する。

遺物は建物の北側柱の柱当たりから瓦器が1片、南側柱の中央の柱当たりから瓦器が6片・土師器皿5片が出土している。また、奈良時代と思われる土師器杯の破片も出土している。土器の器面はかなり摩滅しているが、瓦器高台の形態などから13世紀の範疇のものと考えられる。

掘立柱建物7（第30図、PL.10）

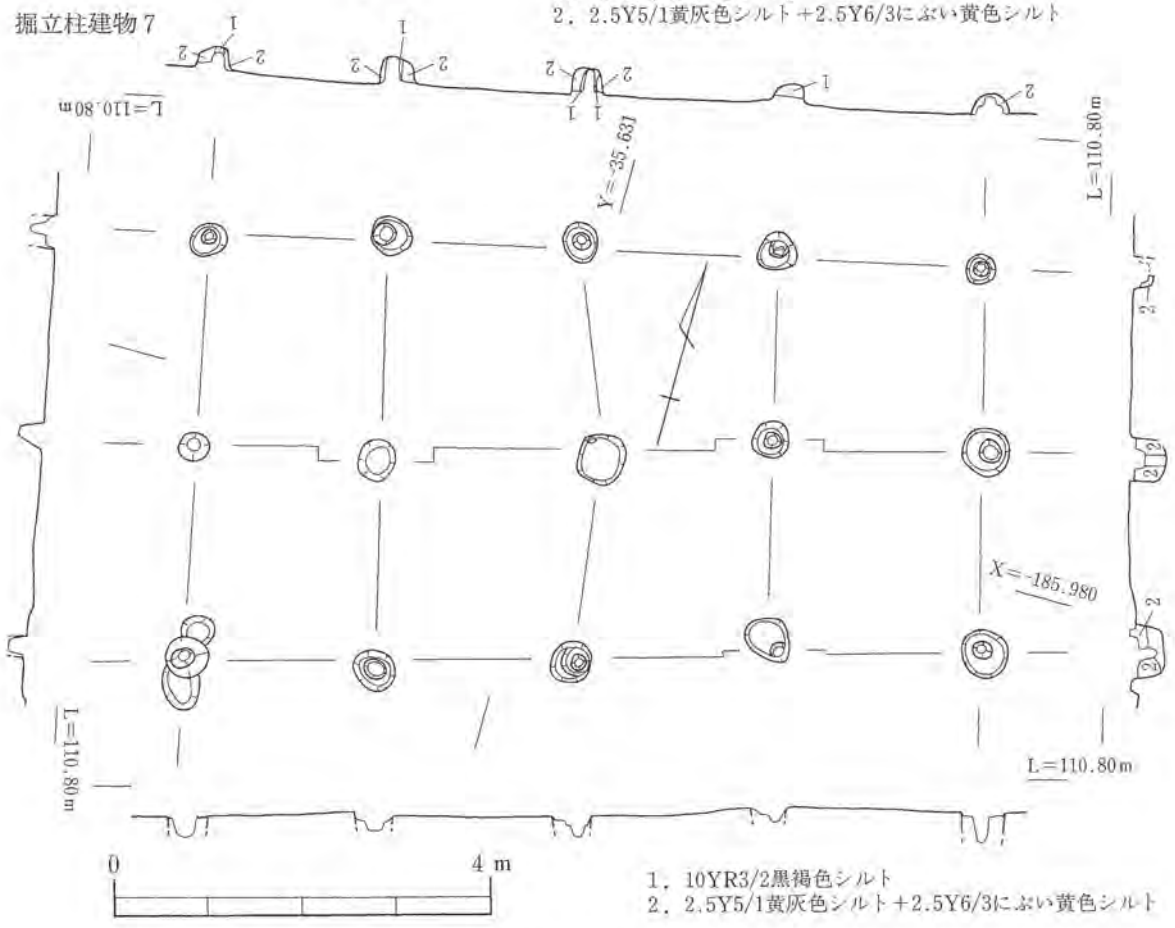
掘立柱建物6の南に隣接して検出した。東西棟の総柱建物で、検出時は掘立柱建物6と軸方向をほぼ等しくし、柱穴の埋土も同様で、掘立柱建物6との間隔も約2.1mを測ることから同一の建物と考えたが、掘立柱建物7の柱穴掘形の方が総体的に大きいことから掘立柱建物6と別の建物とした。このような状況から建替えの可能性も考えられるが、掘立柱建物6との新旧関係は不明である。規模は桁行4間（8.37m）×梁行2間（4.45m）で、主軸の方向はN－12.5°－Wである。平面プランは東側の梁行が短く、やや台形状を呈するが、間尺は桁行・梁行ともおおよそ2.1m（7尺）前後と整っている。掘形の形状は円形もしくは楕円形に近く、直径29～53cmで、深さは20～37

掘立柱建物6



1．10YR3/2黒褐色シルト
2．2.5Y5/1黄灰色シルト＋2.5Y6/3にぶい黄色シルト

掘立柱建物7



1．10YR3/2黒褐色シルト
2．2.5Y5/1黄灰色シルト＋2.5Y6/3にぶい黄色シルト

第30図　掘立柱建物6・7実測図

cmを測る。柱当たりから、柱の直径は18～27cm程度であったと考えられる。

遺物は北側柱の柱穴の掘形から瓦器椀片、南側柱の掘形から瓦器椀・土師器土釜・東播系須恵器捏鉢の破片が、東側柱中央の柱穴掘形から土師器皿の細片が9片出土している。

掘立柱建物8（図34、PL.10）

調査区中央南端で検出した。規模は東西3間(6.37m)、南北方向は西側柱が調査区内をかすめるように検出されたため1間以上である。主軸の方向はN－6.5°－Wであるが、棟方向は不明である。掘形の形状は円形か円形に近く、規模は直径33～40cmで、深さは18～26cmを測る。柱当たりから、柱の直径は約20cm程度であったと考えられる。

遺物は東から2基目の柱穴柱当たりから瓦器椀(14)、東端の柱穴柱当たりから土師器皿が出土している。14は口縁端部内側に沈線を巡らし、内面のミガキは密である。

掘立柱建物9（第31図、PL.11）

調査区東寄り中央で検出した東西棟の総柱建物である。規模は桁行方向4間(8.68m)×梁行方向2間（4.06m）で、主軸の方向はN－18°－Wである。平面プランはやや平行四辺形であるが、間尺は桁行・梁行ともおおよそ2.1m（7尺？）前後と揃っている。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形に近く、直径24～53cmで、深さは20～36cmを測る。柱穴掘形は北側柱列が割合に小さく、それらを除けば直径約40～50cmと安定している。柱穴の埋土は、掘立柱建物6・7などと同じ10YR3/2黒褐色シルトである。

遺物の内容は建物6に酷似し、中世以前の遺物も出土しているが、南側柱中央の柱穴から瓦器椀片、土師器皿片・土釜片が出土している。

掘立柱建物10（第32図、PL.11）

掘立柱建物9の南側で検出した東西棟の総柱建物である。建物9の南西隅と重複するが、柱穴の重複でないため新旧関係は不明である。規模は桁行3間（6.18m）×梁行2間（4.10m）で、主軸の方向はN－10.5°－Wである。平面プランはほぼ長方形で、間尺は桁行・梁行ともおおよそ2.1m（7尺）前後と整っている。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形に近く、直径33～60cmで、深さは14～26cmを測る。柱当たりから、柱の直径は15～28cm程度であったと考えられる。柱穴の埋土は10YR3/2黒褐色シルト質で柱当たりはわずかに暗色を呈する。

遺物は北側柱の東から2基目の柱穴掘形から土師器皿の細片2片とサヌカイトの剥片1片が、同じく西から2基目の柱穴柱当たりからは土師器土釜片1片が出土している。また、西側柱の中央柱穴から瓦器椀が1片、南西隅の柱穴柱当たりから瓦器椀と土師器皿の細片が数片出土している。

掘立柱建物11（第32・34図、PL.11）

掘立柱建物10と重複する形で検出したが、柱穴の重複がなく、出土遺物からも新旧関係は不明

である。掘立柱建物２と同様な布掘溝をもつ建物で、桁行２間（3.72m）×梁行２間（3.62m）の総柱建物で、主軸の方向はＮ－12°－Ｗである。平面プランは正方形に近く、間尺は1.8m（６尺？）前後と整っている。布掘溝は四周に存在し、幅25～30cm、深さ約５～15cmを測る。北側柱列の断面から、布掘溝を掘削後、いったん埋め戻し、再度柱位置部分を一段深く壺掘りしていることがわかる。柱穴の形状は円形か円形に近く、規模は直径28～53cm、深さ38～58cmを測る。柱当たりから、柱の直径は20～28cm程度であったと考えられる。

遺物は南側柱の中央の柱穴を除いて出土しており、北東隅の柱穴から瓦器椀（13）が出土する。13は浅い器形で、断面三角形の高台を付す。内外面にミガキは認められない。鎌倉時代後半から末くらい位置づけられ、建物の時期を窺う資料である。このほか北側柱からは瓦器椀や土師器皿の破片が、南側柱からは瓦器椀・土師器皿・土釜の破片が出土している。なお、建物の時期以前の遺物としては、柱穴から縄文土器、黒色土器椀の細片が出土している。

掘立柱建物12

掘立柱建物10の南で北側柱列のみを検出した。南側は調査区外のため不明である。軸線の方向は建物10と同じで、おそらく東西棟の建物と思われるが、総柱の建物かどうかは不明である。したがって、規模は桁行３間（6.47m）×梁行不明である。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形に近く、直径40～48cmで、深さは20～28cmを測る。柱当たりから、柱の直径は18～26cm程度であったと考えられる。

遺物は西端以外の柱穴から出土しているが、いずれも細片で、土師器皿・土釜と思われるものがある。

掘立柱建物13（第31図、PL.12）

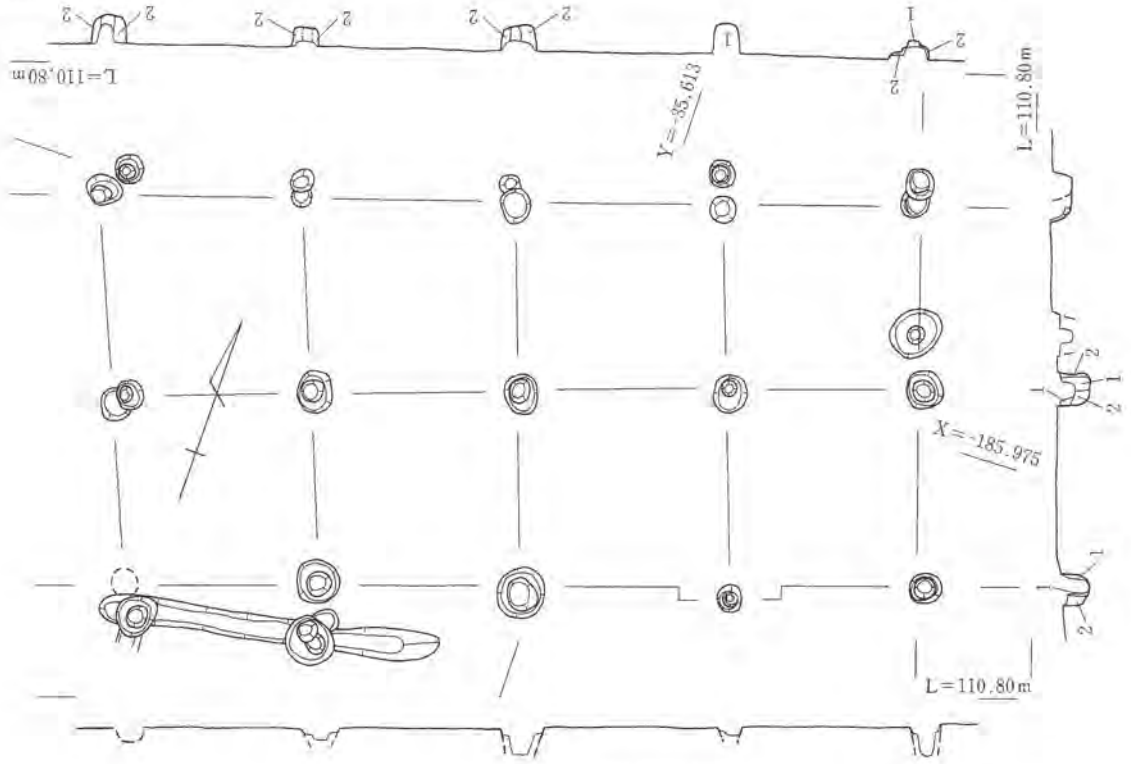
調査区東端中央で検出した総柱建物である。規模は南北２間（3.76m）×東西２間（3.11m）で南北方向の間尺の方が長いため南北棟の建物と考えられ、主軸方向は座標北である。平面プランはほぼ長方形を呈するが、間尺は一定でなく、梁行・桁行とも約30cmの差異が認められる。柱穴掘形の形状は隅丸方形あるいは楕円形に近く、規模は長さ・幅が54～78cm、深さ20～58cmで、他の建物に比べ大きく、掘立柱建物４とほぼ同様の大きさである。柱当たりから、柱の直径は22～30cm程度であったと考えられる。

出土遺物には瓦器椀片や時期不明の土師器細片などがあるが、瓦器は混入遺物と考えられる。時期的には柱穴掘形の規模・主軸方向が他の中世の建物と違うことや、この建物の南側で検出した奈良時代の２－500土坑の存在から考えて８世紀の範疇と考えられる。

２－254土坑（第34図、PL.12・70）

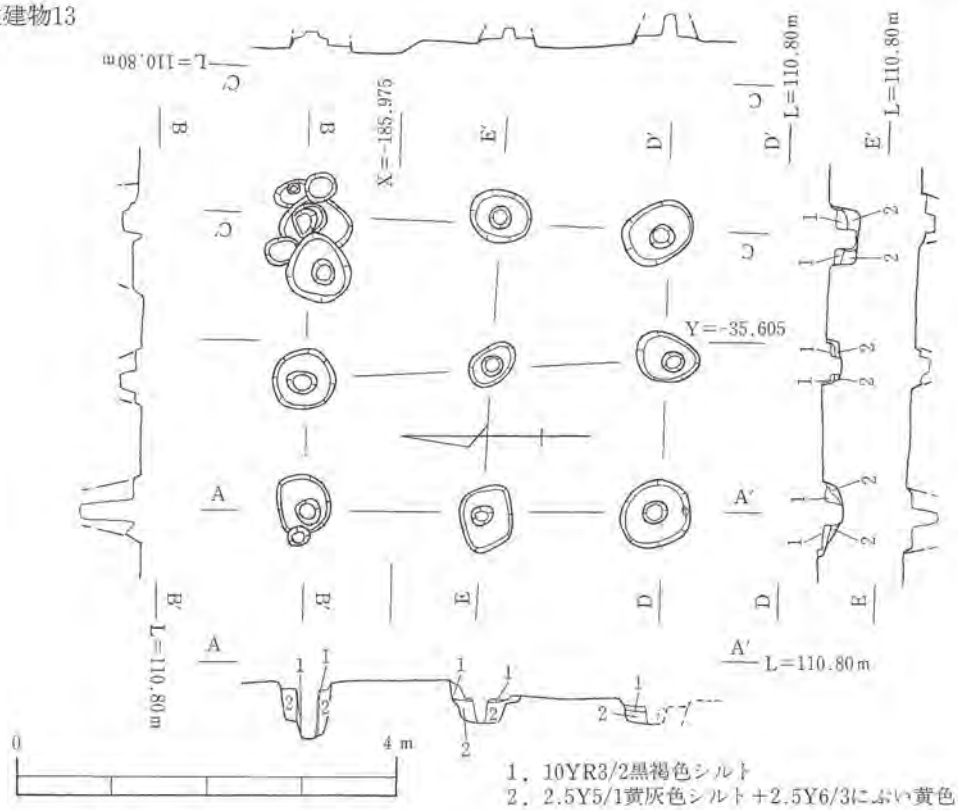
２区中央南端において、地山直上で検出した。土坑とはいっても掘形が判然としなかったのが実情である。遺物は縄文時代中期の深鉢（28）で、同一個体と考えられる口縁部と体部の一部が

掘立柱建物9



1．10YR3/2黒褐色シルト
2．2.5Y5/1黄灰色シルト＋2.5Y6/3にぶい黄色シルト

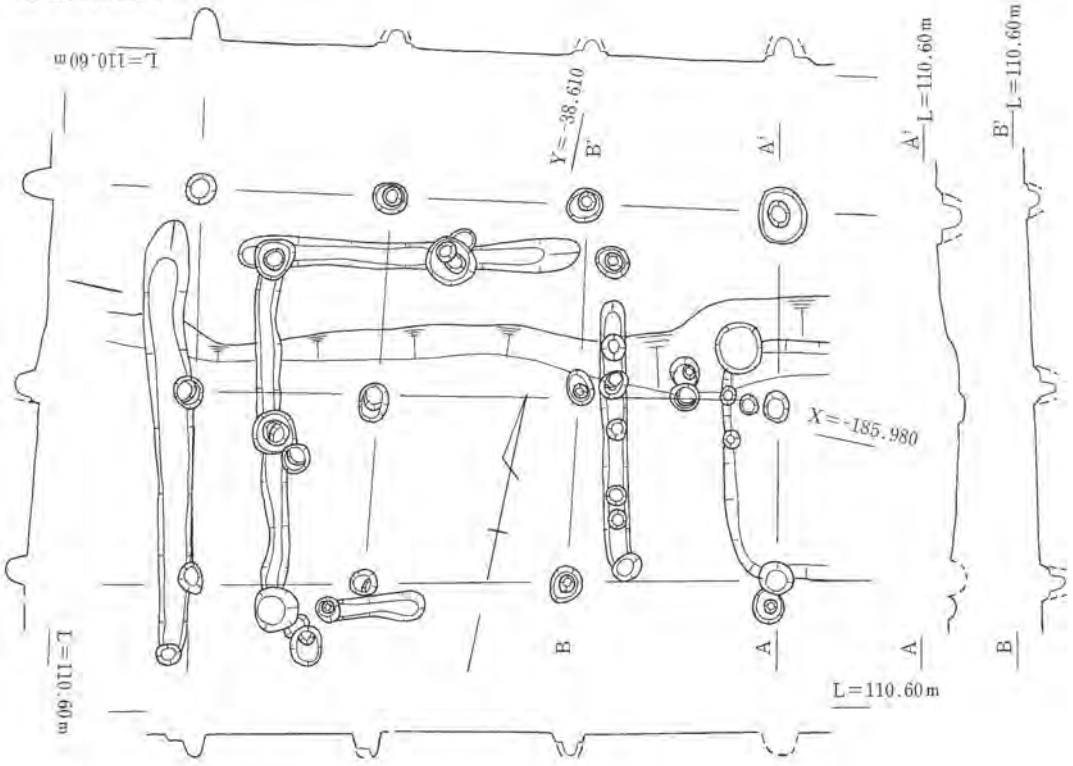
掘立柱建物13



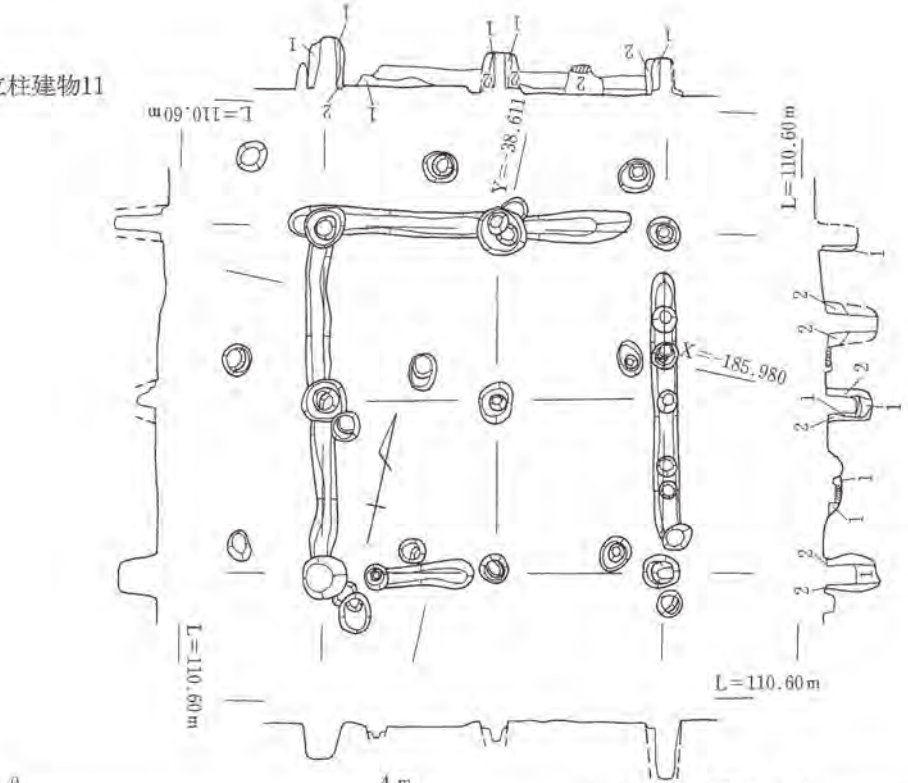
1．10YR3/2黒褐色シルト
2．2.5Y5/1黄灰色シルト＋2.5Y6/3にぶい黄色シルト

第31図　掘立柱建物9・13実測図

掘立柱建物10



掘立柱建物11



0 4m

1．10YR3/2黒褐色シルト
2．2.5Y5/1黄灰色シルト＋2.5Y6/3にぶい黄色シルト

第32図　掘立柱建物10・11実測図

まとまって出土しており、底部の破片は全く確認できない。土器は壊れた状態で、ほぼ円形に直径約1.1mの範囲に広がっていた。同一個体がまとまって出土している状況から埋甕遺構の可能性も考えられる。

28は船元II式の深鉢で、口縁部はややキャリパー状の形態を呈する。外面の頸部直下には下開きの弧状に突帯を貼付け、突帯上とこれの上側に接して爪形文を施す。弧状の接点から突帯を垂下させて、その上にも爪形文を施す。口縁部内面直下に縄文帯を施し、ナデによる稜が付く。外面の縄文はＲＬで、内面はＬＲである。胎土には長石を多量に含み、石英も少量認められる。

２－500土坑（第34図）

調査区の南東隅で検出した。南側は調査区外のため全容不明であるが、形状は東西に長い楕円形を呈するものと考えられる。規模は検出し得た最大長で5.4mを測る。底は東側が西側より約20cm深くなっており、東側の最深部で78cmを測る。埋土は２層に分層でき、上層は7.5YR2.5/1黒褐色シルト層で、この層には10YR3/1黒褐色のシルト質の塊が混ざる。上層の底は凸凹である。下層も同様な状況で7.5YR2.5/1黒褐色シルト層に10YR7.5/6黄橙色シルト質の塊が混ざる。このような状況から意図的に埋められたと考えられる。

出土遺物は全て上層からで、土師器皿（27）・高盤、須恵器杯蓋などがある。27は内面見込み部に放射状の暗文を施す。底部外面は板状工具によるナデである。これらの遺物の帰属時期は８世紀と考えられる。

２－243土坑（第34図、PL.70）

掘立柱建物７の南に隣接して検出した。規模は2.0m×0.7mの長楕円形の土坑で、深さは約５～10cmを測る。埋土は単一層の10YR3/2黒褐色のシルト質である。

遺物は土師器皿（18・19）が出土している。

２－316溝（第34図、PL.70）

調査区の中央東寄りで検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約６m、幅は最大で60cm、深さは約５～10cmを測る。埋土は単一層の10YR3/2黒褐色シルトである。

遺物は瓦器椀（15）が出土している。器壁は厚く、浅い器形である。高台は断面三角形で低い。摩滅が著しく、ミガキの有無は不明である。遺物から13世紀後半から末頃の溝と考えられる。

２－361土坑（第34図、PL.70）

掘立柱建物10の東側で検出した直径約50cmの円形土坑である。深さは約15cmを測る。埋土は単一層で10YR3/2黒褐色のシルト質である。

遺物は瓦器椀（23～26）が出土している。すべて口縁部がヨコナデにより外反し、端部内面に沈線を施さないタイプで、和泉の瓦器形態に近い。ほぼ同時期に位置づけられる垂井女房が坪遺跡の２－318・324土坑出土の瓦器が大和の瓦器形態に近いタイプで占められているのと対照的で

ある。24・25の高台は「ハ」の字に開く。23・24は器面の摩滅が著しいため、ミガキは不明である。25・26は内外面にミガキを施す。

2－381土坑

調査区東側中央で検出した。掘立柱建物9の南側柱列と重なるが、柱穴との重複がないことから新旧関係は不明である。形状は削平を受け、楕円形気味になっているが、元々は長方形を呈するものと思われる。規模は長径1.10m、短径1.04mを測る。残存する深さは5～8cmと浅い。埋土は単一層で10YR3/2黒褐色のシルト質である。

出土遺物には土師器小皿や13世紀代と考えられる稚拙な高台を付す瓦器椀破片がある。

2－432土坑（第34図）

掘立柱建物11の南で検出した。形状は楕円形を呈し、規模は40cm×55cmの小土坑である。残存の深さは約30cmである。埋土は10YR4/1褐灰色の単一層である。

遺物は瓦器椀（17）が出土している。断面三角形の低い高台を付すもので、時期的には13世紀後半と考えられる。

2－433土坑（第34図）

調査区南端の東寄りで検出した。掘立柱建物12と重なるが、柱穴との重複がないことから新旧関係は不明である。南側が側溝によって削平されて全容は明らかでない。形状は円形もしくは楕円形を呈すると考えられ、32cm以上×43cm、深さ10cmを測る。

遺物は土師器小皿（11）が出土している。底部は平坦であるが、指押さえとナデで調整される。

2－434土坑（第34図）

2－432土坑の南側で検出した土坑である。南側が調査区外のため全容不明であるが、60cm×80cm以上の楕円形と思われる。残存の深さは約30cmを測り、埋土は10YR3/2黒褐色のシルト質である。

遺物は土師器皿（16）が出土している。口縁部がヨコナデで、他はナデ調整を施す。

2－451土坑（PL.12）

掘立柱建物11の南側に点在する柱穴群の中で検出した。形状はほぼ円形で、直径は約70cmを測る。深さは16cmである。底は船底状で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単一層の10YR3/2黒褐色シルト層に焼土と炭が混ざる。

遺物は2－381土坑と同様に断面三角形の稚拙な高台を付す瓦器椀片と底部糸切り調整の小皿が出土している。

2－512土坑（PL.12）

2－451の東側で検出した。形状はほぼ円形で、直径は62cm、深さは26cmを測る。底は平らで、壁は垂直に立ち上がる。埋土は2－451土坑と同じで、焼土と炭が入る。

出土遺物には瓦器椀と底部糸切りの土師器小皿がある。規模や埋土の状況から判断して2－451土坑と同様な性格のものと考えられる。ほかにも規模は若干小さいが2－567土坑も全く同じ様相を呈する。

2－530土坑（第34図）

掘立柱建物11の東側で検出した。形状は隅丸長方形を呈し、規模は長さ約2.5m、巾1.85mを測る。残存の深さは最も深い地点でも12cmと浅く、埋土は単一層で、10YR3/2黒褐色のシルト質である。底は平らで壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物には土師器小皿（20）・皿（21）や13世紀後半と思われる瓦器椀（22）などが多量に入るが、焼締陶器（備前焼・常滑焼）の体部片、瓦質土器擂鉢の口縁部破片がある。20は粘土紐で成形されたもので、口縁部にススが付着することから灯明皿として利用されていたものと考えられる。遺構の時期は瓦質土器擂鉢の出土から15世紀前半と考えられる。

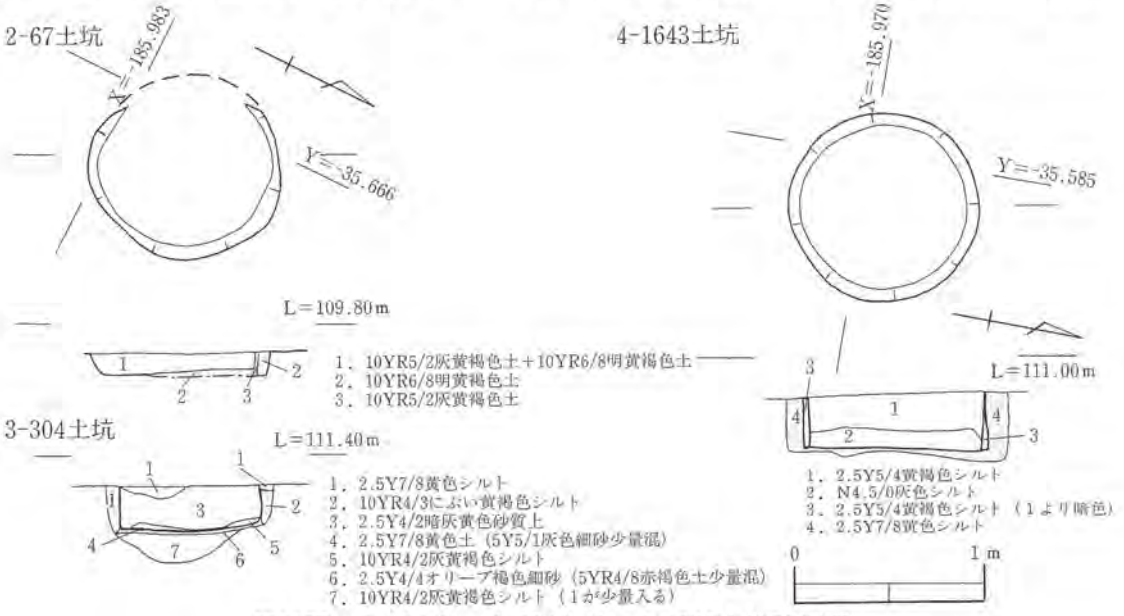
2－578土坑（第34図）

調査区の南東隅付近で検出した。2－500土坑と重複し、それより新しい。南側が調査区域外で全容は明らかでない。楕円形を呈する土坑であると考えられ、1.0m以上×1.3mを測る。

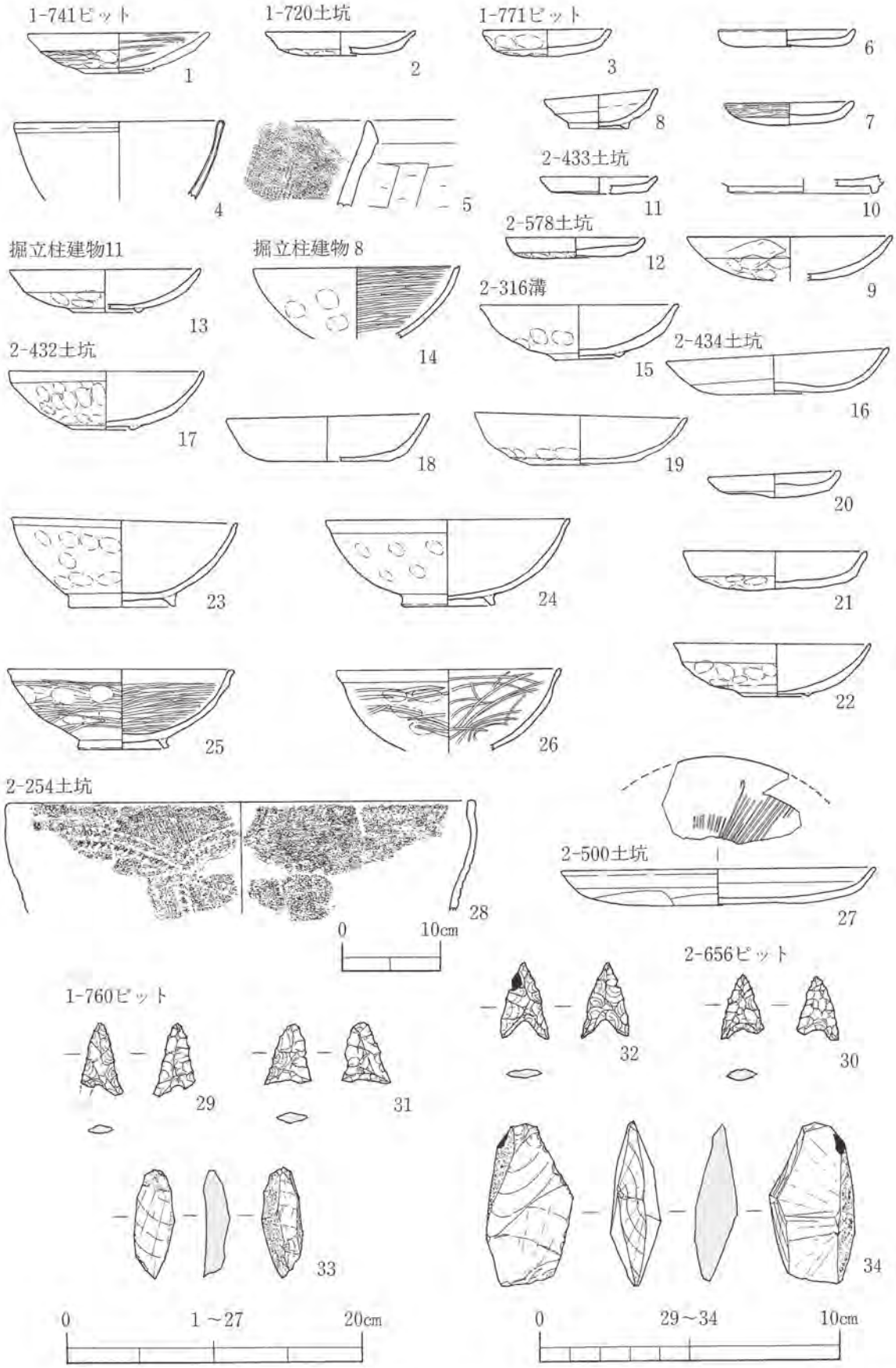
遺物は土師器小皿（12）が出土している。浅い器形で、底部はほぼ平坦であるが指押さえ・ナデ調整である。粘土紐を巻いて成形している。

2－68土坑（第34図）

調査区の西端の一段低い箇所で検出した。西側は調査区外で不明である。平面形状は楕円形を呈し、東西方向の長軸は4.0m以上、短軸は約4.0mを測る。残存の深さは約60cmを測り、壁の立ち上がりは斜め上方に直線的に延びる。埋土はシルト層がレンズ状に堆積し、4層に分層できる。



第33図　2-67土坑・3-304土坑・4-1643土坑実測図



4・5：2-68土坑、6～10・31～34：2区第2・3層、18・19：2-243土坑、20～22：2-530土坑、23～26：2-361土坑

第34図　1・2区出土遺物実測図



第35図　1・2区遺構配置図

遺物は最上層からは青磁碗（4）が出土している。釉はオリーブ灰に発色し、無文である。他に瓦質土器火鉢・擂鉢（5）の破片、常滑焼甕の体部破片が出土している。遺構の帰属時期は15世紀と考えられる。

2－67土坑（第33図、PL.12）

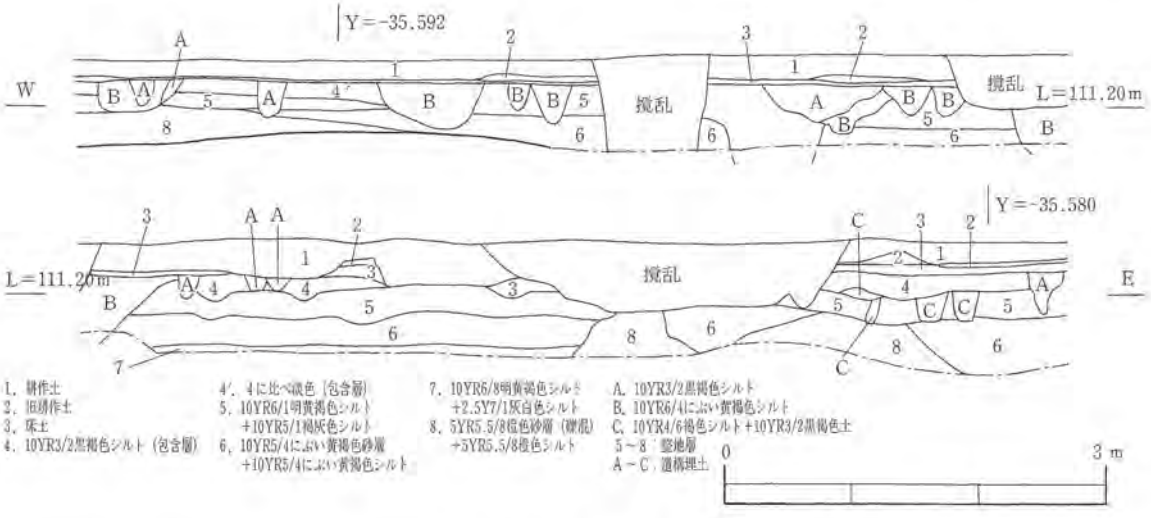
2－68土坑と重複し、本遺構の方が新しい。円形を呈する掘形に桶を据えた埋桶遺構である。掘形は直径約1.0m、深さ14cmで、底は平坦である。桶は痕跡から直径80cm程度であったと考えられる。桶の据付は、まず掘形底面に厚さ3cm程度で10YR6/8明黄褐色の粘土を貼り、ほぼ中央に桶を置いた後、底と同じ粘土で桶の周囲を埋め戻している。埋土は10YR5/2灰黄褐色と10YR6/8明黄褐色のシルト質の混層である。桶の底・周囲に粘土を充塡していることから、埋桶の中には液体が入れられていたと考えられる。

3．3区の調査（第36・50図、PL.13）

調査前の現況は宅地で、調査地の大部分は民家の前庭部分に当たる畑地で、何ヶ所も大きな攪乱を受けていた。

第3層上面からは中世以降の遺構を検出した。中世に帰属するものとしては、掘立柱建物、土坑、地鎮遺構、ピットなどがあり、このほか近代の土坑なども検出している。中世の遺構の時期は、出土遺物からおおよそ13世紀前半から14世紀末までと考えられる。遺構からの出土遺物には瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜、東播系須恵器捏鉢、瓦質土器甕、砥石、サヌカイト剝片などがある。

第4層上面で検出したのは土坑状やピット状の遺構が数基のみで、これらからの出土遺物は皆無である。



第36図　3区北壁面土層図

包含層出土遺物（第39図、PL.71）

瓦器、土師器、東播系須恵器などがある。35～37は土師器小皿で、外底部は指押えとナデ、口縁部はヨコナデ調整である。35・36は口径が7㎝前後と小振りである。37は口縁部をわずかに摘み上げる程度で、器高が1.2㎝と浅い。38・39は瓦器皿で、ミガキの有無は明らかでない。56は瓦器椀で、断面台形の高台を付す。体部外面は指押えが顕著で、口縁部はやや肥厚する。内面のミガキは摩滅のため不明である。60は東播系須恵器の捏鉢で、口縁端部の拡張が上下に認められる。

掘立柱建物14（第37図、PL.14）

調査区西で検出した南北棟の建物である。規模は桁行3間（4.89m）×梁行2間（3.97m）で、主軸の方向はN－17°－Wである。建物内に柱穴が多いが組合うものがないため、ここでは側柱の建物としておくが、総柱建物の可能性も十分考えられる。平面プランは梁行の南側がやや長くなっており、間尺も一定でない。柱穴掘形の形状は円形か円形に近く、直径19～29㎝で、深さは2～15㎝を測る。部分的に認められる柱当たりから、柱の直径は20㎝前後であったと考えられる。

遺物は北側柱の中央の柱穴から瓦器と土師器皿の細片が出土している。

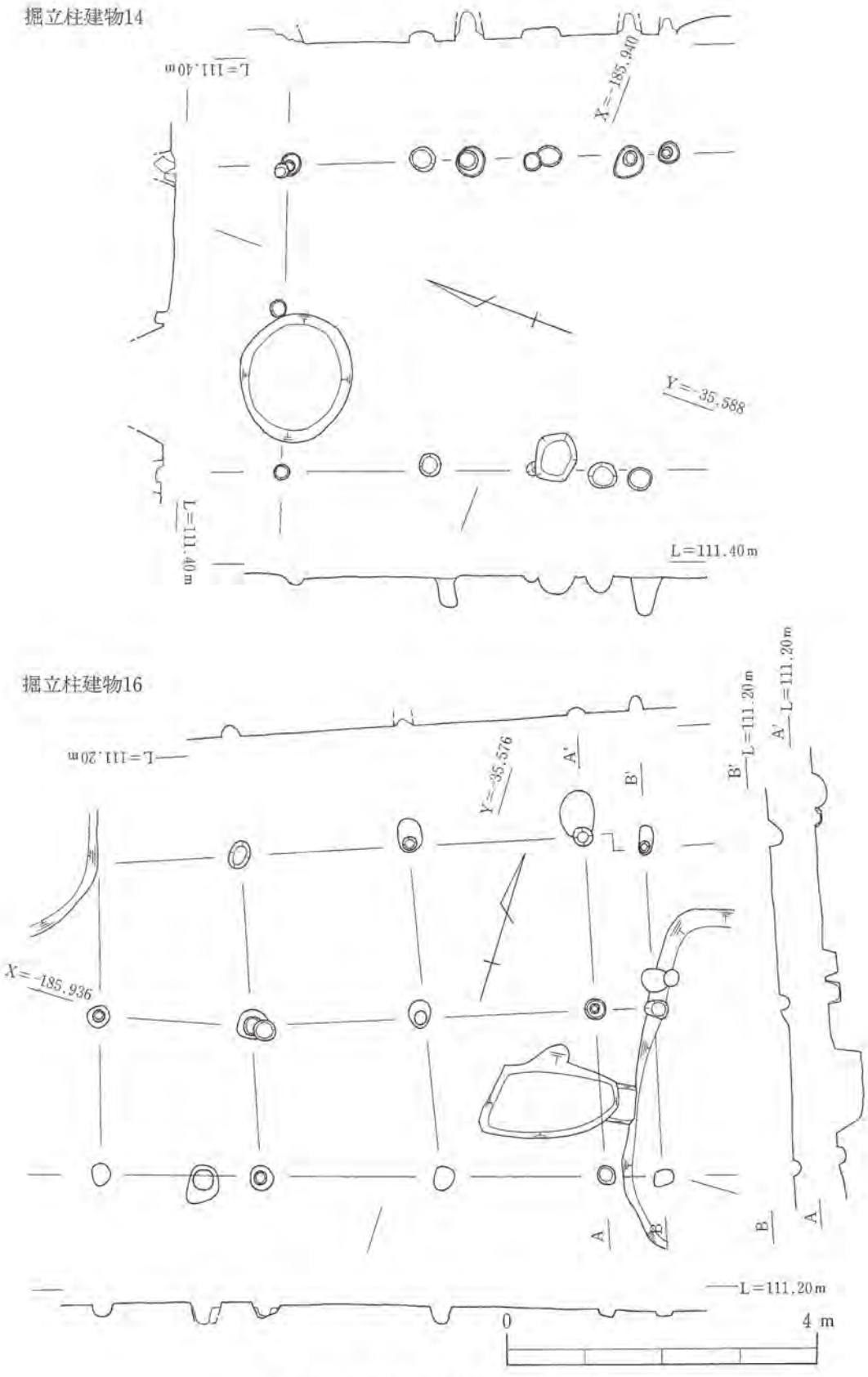
掘立柱建物15（PL.14）

調査区ほぼ中央で検出した南北棟の建物で、掘立柱建物14と並列するように位置する。規模は桁行3間（6.76m）×梁行1間（2.22m）としたが、建物の西側は攪乱や他の遺構によって削平されていることも想定でき、梁行は2間の可能性もある。主軸の方向はN－20.5°－Wである。間尺は桁行・梁行とも2.2m前後と整っている。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形で、直径27～61㎝で、深さは23～34㎝を測る。部分的に確認できた柱当たりから、柱の直径は20～30㎝程度であったと考えられる。東側柱の北から2基目の柱穴の底には扁平な面を上にして礎板となる河原石が置かれていた。この柱穴にだけ石が据えられている状況は、柱の寸法合せに用いた可能性が高い。

遺物は北東隅の柱穴から瓦器椀片・土師器皿片のほかサヌカイト剥片が出土している。西側柱の北から3基目の柱穴からは瓦器椀片が出土している。

掘立柱建物16（第37図、PL.14）

掘立柱建物15と重複して検出した総柱の建物である。柱穴の重複がないため新旧関係は不明である。東西棟の東庇の建物で、規模は桁行4間（7.26m）×梁行2間（4.27m）で、主軸の方向はN－20°－Wである。なお北側柱西端の柱穴は攪乱のため欠損する。平面プランは平行四辺形で、間尺は桁行・梁行とも2.0～2.2m、庇は幅80㎝程度である。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形で、直径30～43㎝で、深さは8～20㎝を測る。部分的に確認できた柱当たりから、柱の直径は12～24㎝程度であったと考えられる。遺物は瓦器椀片や土師器皿片が出土しているが、特に南西隅の柱穴と棟持柱列最東の柱穴からの量が多い。



第37図　掘立柱建物14・16実測図

3－23ピット（第38・39図、PL.14・71）

調査区西側北端で検出した。平面形状は不整楕円形で、規模は24cm×28cm、深さ約40cmを測る。埋土は単一層で10YR3/2黒褐色シルト層である。ピットの中位から完形の瓦器皿（50）が一枚伏せられた状態で出土した。地鎮遺構の可能性も考えられる。

3－48地鎮遺構（第38・39図、PL. 14・71）

調査区西端で検出した地鎮に関わると考えられる土坑である。平面形状は不整円形を呈し、直径は75～80cm、深さ13cmを測る。埋土は単一層で10YR3/2黒褐色シルト層である。ほぼ平坦な底中央に24cm×34cmの大きさの河原石を据え、その北側に土師器皿８枚（40～46）を折り重ねるように埋置していた。この遺構の周辺には建物がなく、また建物を想定させるような柱穴も検出されていないことから、屋敷地に関連する地鎮遺構の可能性が考えられる。

土師器皿のうち40～44は同じタイプである。直径8.5cm前後、高さ1.5cm前後を測り、円盤状の底部に粘土紐を足して体部・口縁部としたものである。45と46は同じタイプである。直径11.5cm余りで、外底部は指押え後ナデ調整されている。

3－60土坑（第39図）

掘立柱建物14の西隣で検出した不定形の土坑である。規模は1.1m×1.1mで、深さは東側の最も深い箇所で約20cmを測る。壁の立ち上がりは緩い。埋土は10YR3/2黒褐色シルト層の単一層である。

遺物は瓦質土器甕（58）が出土している。口縁部は外反し、端部の外面には擬凹線を施す。体部外面は細かい平行タタキ調整である。時期的には14世紀代と考えられる。

3－73ピット（第39図）

３－60土坑の東接で検出したピットで、掘立柱建物14の西側柱列と重なるが、柱穴との重複がないことから新旧関係は不明である。規模は約34cm×37cmで、形状は隅丸方形である。深さは36cmを測る。埋土は10YR3/2黒褐色シルトの単一層である。

遺物は瓦質土器甕（57）が出土している。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。体部外面は細かい平行タタキ調整である。時期は３－60土坑出土の58とほぼ同じである。

3－74土坑（第39図）

３―73ピットの東側で検出した土坑で、掘立柱建物14と重なるが、柱穴との重複がないことから新旧関係は不明である。南は調査区域外で全容は不明であるが、平面形状は長楕円形を呈すると考えられる。規模は長さ1.7m以上で、幅約60cm、深さ20～30cmを測る。埋土は10YR3/2黒褐色シルトの単一層である。

遺物は東播系須恵器捏鉢（59）が出土している。口縁端部が上下に肥厚する。時期的には13世紀前半と考えられる。

3－76土坑（第39図）

3－74土坑の北側で検出した土坑で、掘立柱建物14と重なり、柱穴の重複関係から掘立柱建物14より新しい。平面形状は楕円形を呈し、規模は60cm×52cm、深さは約10cmを測る。壁の立ち上がりは、東側は緩く、西側はほとんど垂直である。

遺物は瓦器椀（53）が出土している。口径は11.3cmと小さく、高台も消失した段階のもので、14世紀前半代と考えられる

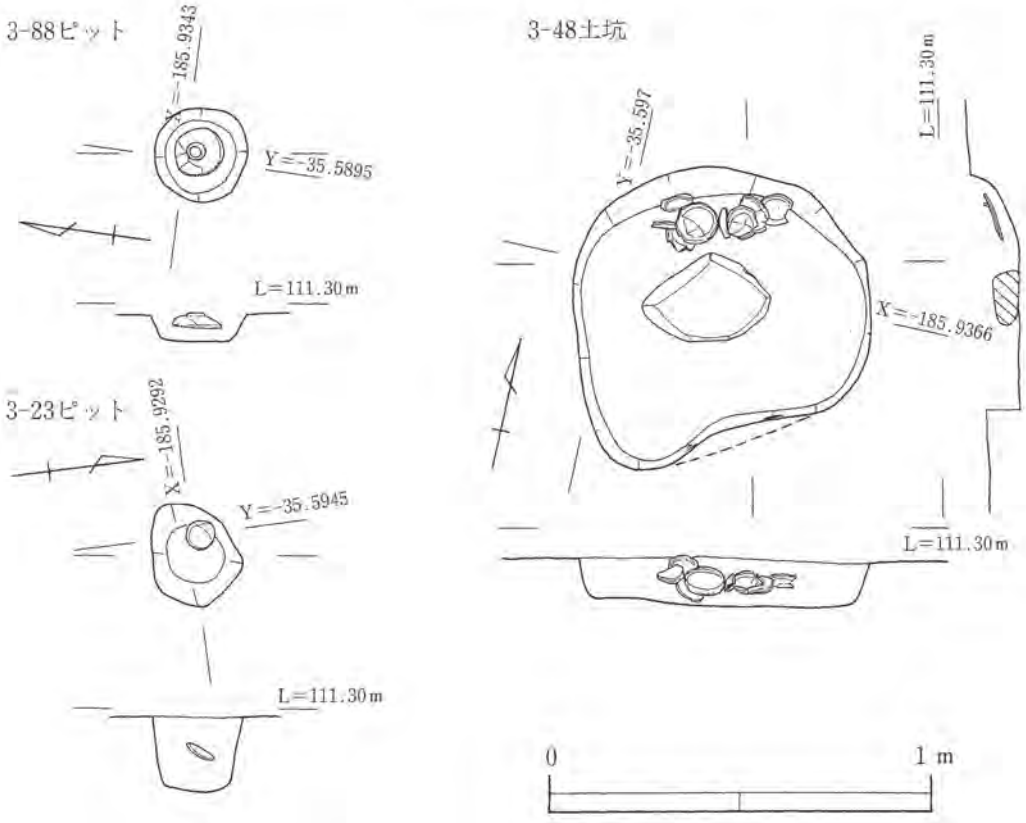
3－88ピット（第38・39図、PL.14）

調査区西側中央で検出したピットで、掘立柱建物14と重なるが、柱穴との重複がないことから新旧関係は不明である。平面形状は円形で、規模は直径25cm、深さ7cmを測る。ピットの中央からは完形の瓦器椀（55）が伏せた状態で出土しており、地鎮に関わる遺構である可能性がある。その場合、掘立柱建物14との関わりも考えられる。

55は断面三角形の低い高台を付す。口径は12.8cmと小さく、ミガキも認められないことなどから13世紀後半代に帰属すると考えられる。

3－106ピット（第39図）

調査区西側中央で検出したピットで、掘立柱建物14と重なるが、柱穴との重複がないことから



第38図　3区遺構実測図

新旧関係は不明である。平面形状は楕円形で、規模は25cm×18cm、深さ8cmを測る。

遺物は瓦器椀（51）が出土している。高台がない皿状のタイプで、内面にはミガキが施されている。瓦器の最終段階のもので、14世紀前半代であると考えられる。

3－112土坑（第39図、PL.71）

遺構76の東で検出した土坑で、掘立柱建物14と重なるが、柱穴との重複がないことから新旧関係は不明である。平面形状は楕円形で、規模は50cm×70cm、深さ約14cmを測る。断面形状は船底状を呈する。埋土は10YR3/2黒褐色シルト層の単一層である。

遺物は底から5cm程度上でほぼ完形の瓦器椀（54）が出土している。形骸化した断面三角形の低い高台を付すもので、帰属時期は13世紀後半代と考えられる。

3－130土坑

調査区の西側南端で検出した土坑で、掘立柱建物14と重なるが、柱穴との重複がないことから新旧関係は不明である。南側は調査区外となり、平面形状は長方形もしくは正方形を呈すると考えられ、規模は2.05m×1.0m以上、深さ25cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、埋土は単一層で10YR3/2黒褐色シルト層である。

遺物は土師器皿片・瓦器椀片が出土している。

3－171土坑

3－130土坑の東側に、同じ軸で並列するように位置する土坑で、掘立柱建物15・16と重なり、柱穴との重複関係からそれらより古い。南側は調査区外となり、平面形状は長方形もしくは正方形を呈すると考えられ、規模は4.60m×2.25m以上。深さ約25cmを測る。埋土は2層に分層でき、上層は遺構130と同一層で、下層は上層に黄褐色のシルトが斑点状に混ざる。

遺物は土師器皿片・瓦器椀片が出土している。

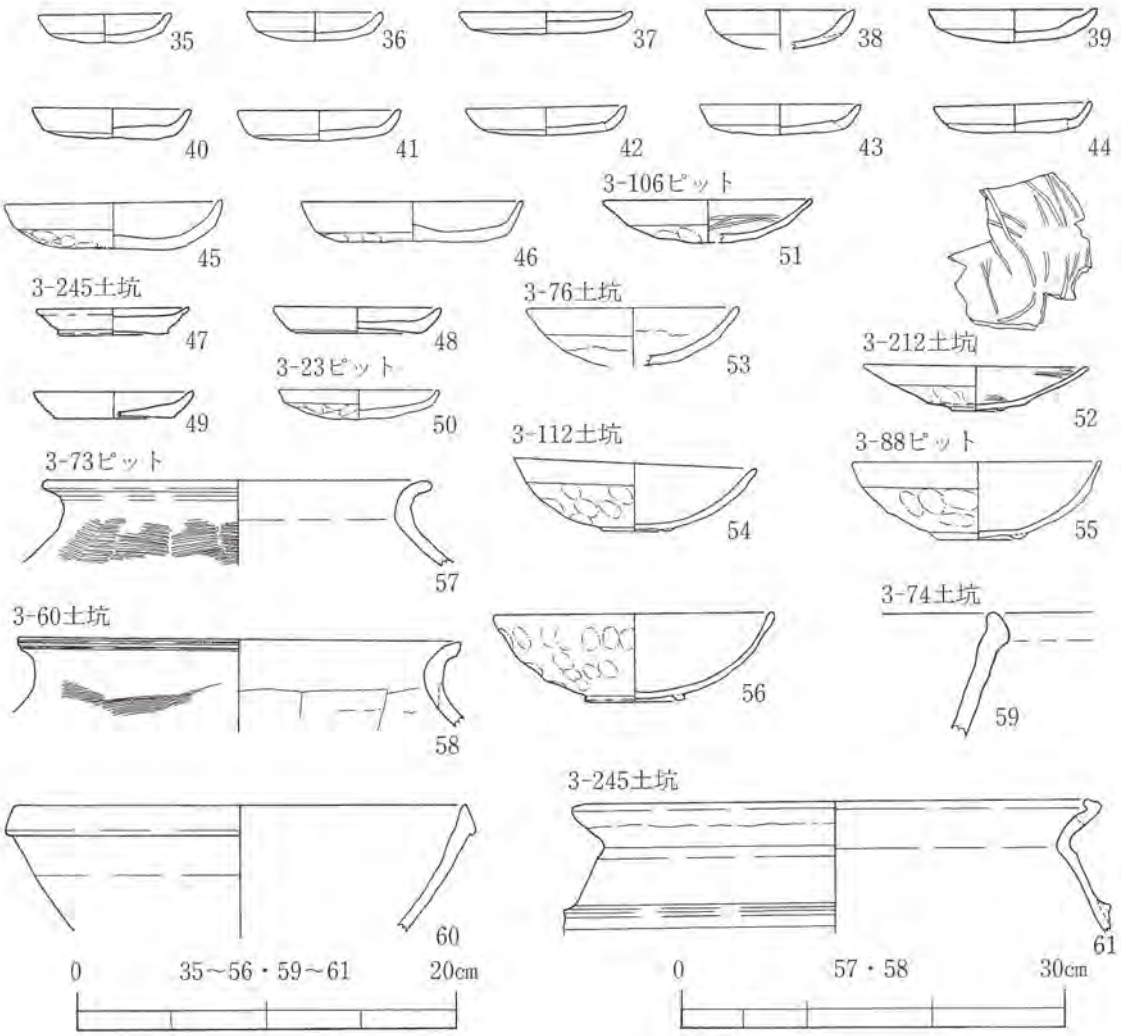
3－212土坑（第39図）

調査区中央付近で検出した土坑で、掘立柱建物16と重なり、柱穴との重複関係からそれより古い。平面形状は楕円形で、規模は40cm×65cm、深さは20～25cmで、南側が深くなる。北には20cm大の礫が入る。埋土は10YR3/2黒褐色シルト層である。

遺物は瓦器椀（52）と四面を研砥面とする砥石が出土している。52は形骸化した断面三角形の低い高台を付す。器壁は薄く、浅い器形で、体部・口縁部は直線的に開く。内面にはミガキが認められる。14世紀前半代に帰属すると考えられる。

3－245土坑（第39図、PL.71）

調査区中央部南端で検出した土坑で、掘立柱建物15・16と重なり、柱穴との重複関係からそれらより古い。南側が調査区域外となり、中央部を電柱で、西側を民家の井戸で攪乱されていた。平面形状は楕円形と考えられ、規模は2.2m×1.0m以上、深さ60cmを測る。埋土は10YR3/2黒褐色



35～39・56・60：第３層、40～46：3-48地鎮遺構、48・49：3-272ピット

第39図　３区出土遺物実測図

シルト層の単一層で、埋土の中には20～50cm大の砂岩と片岩が詰まっていた。この砂岩と片岩の配置を観察すると、元々は丸い砂岩を並べ、その上に扁平な片岩を敷き並べていたものと考えられる。この遺構の性格は不明である。

出土遺物には瓦器椀、土師器皿（47）・羽釜（61）などがある。47は小皿で、底部は回転ナデ調整である。口縁部は短く上方へ摘み上げている。61は口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部は内方に拡張する。体部上位には断面三角形の鍔を巡らす。13世紀半ばから後半頃の資料であると考えられる。

３－272ピット（第39図）

調査区中央北寄りで検出したピットで、掘立柱建物16と重なり、柱穴との重複関係からそれより古い。平面形状は楕円形で、規模は30cm×25cm、深さ約35cmを測る。埋土は10YR3/2黒褐色シルトである。

遺物は土師器皿（48･49）が出土している。口径8.5cm前後の同じタイプの小皿で、平坦な底部は静止糸切りの後ナデ調整されている。

3－304土坑（第33図）

調査区東側の北端で検出した埋桶遺構である。掘形の平面形状は円形を呈し、直径約90cmを測る。桶の据付は、掘形の底を船底状にやや深く掘り下げ、平坦に均した後におこない、周囲を黄色粘土で埋め戻している。桶の直径は約75cmで、木質の腐食したものが所々に残っていた。

出土遺物は桟瓦片や近世以降の陶器、ガラス小瓶がある。近代以降の遺構と考えられる。

4．4区の調査（第50図、巻頭図版3、PL.15）

3区と現有の道路を隔てて南側に位置する調査区である。現況は水田であった。

検出した遺構には弥生時代中期の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物・土坑、近世の埋桶遺構などがある。

包含層出土遺物（第44図、PL.71）

包含層からの出土遺物には土師質、瓦器、東播系須恵器、石鏃などがある。62は土師器小皿で、底部は静止糸切り調整である。71は瓦器皿で、内面のミガキは丁寧である。80は瓦器椀で、断面三角形の高台は、直径が3.4cmと小さい。摩滅が激しいが内面にはミガキが認められる。82は土師器土釜で、口縁部は「く」の字に屈曲し、口縁端部を上方に拡張する。83は東播系須恵器捏鉢で、口縁端部を上方へ拡張する。84は奈良時代の土師器高杯で、脚柱部を面取りしている。89は凹基型石鏃で、縄文時代に帰属するものである。

掘立柱建物17（第40図、PL.16）

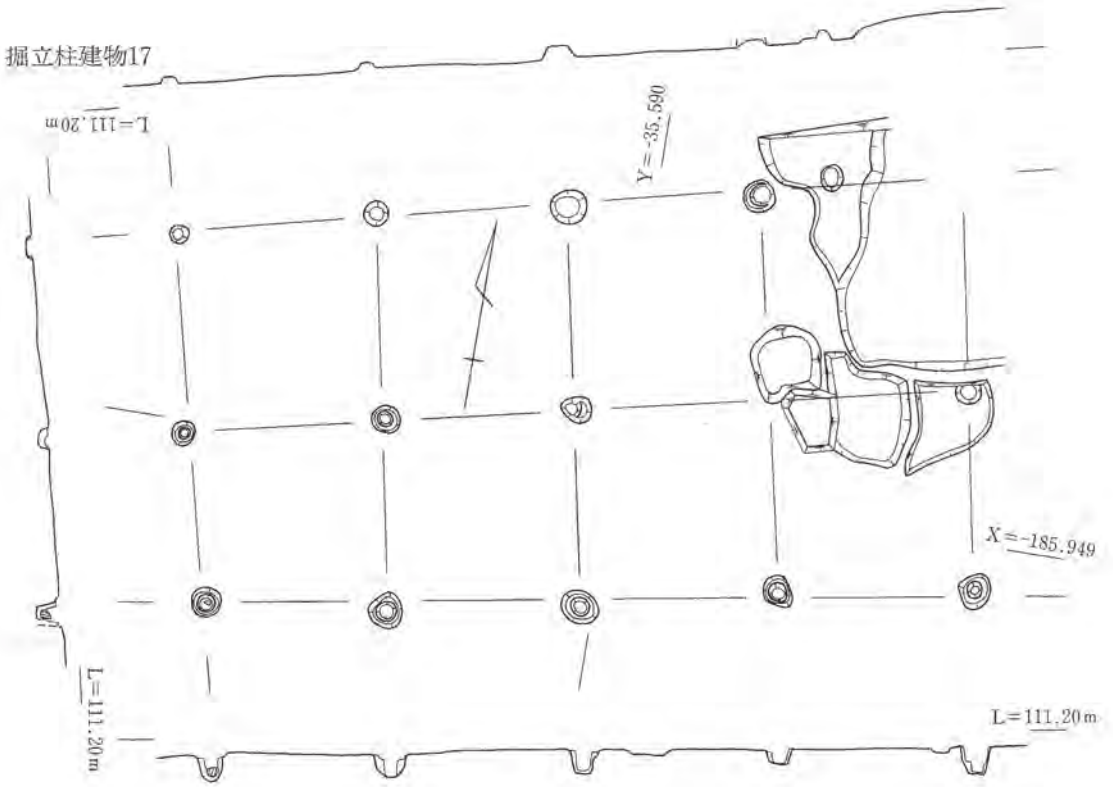
調査区の北西隅で検出した東西棟の総柱建物である。規模は桁行4間(8.12m)×梁行2間(3.92m)で、主軸の方向はN－11°－Wである。梁行方向の北側は調査区外のため不明であるが、あと1間分北に伸びる可能性もある。間尺は桁行・梁行ともおおよそ2.1m前後（7尺？）であるが、南西隅の桁行1間・梁行1間のみ短くなっている。このため平面プランもやや歪んでいる。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形に近く、直径25～43cmで、深さは7～28cmを測る。柱当たりから、柱の直径は16～22cm程度であったと考えられる。棟持柱列の東から2基目の柱穴は攪乱坑で、北東隅の柱穴は土坑状遺構と重複するため不明である。

遺物は南側柱列の両端の柱穴から瓦器椀片が出土している。

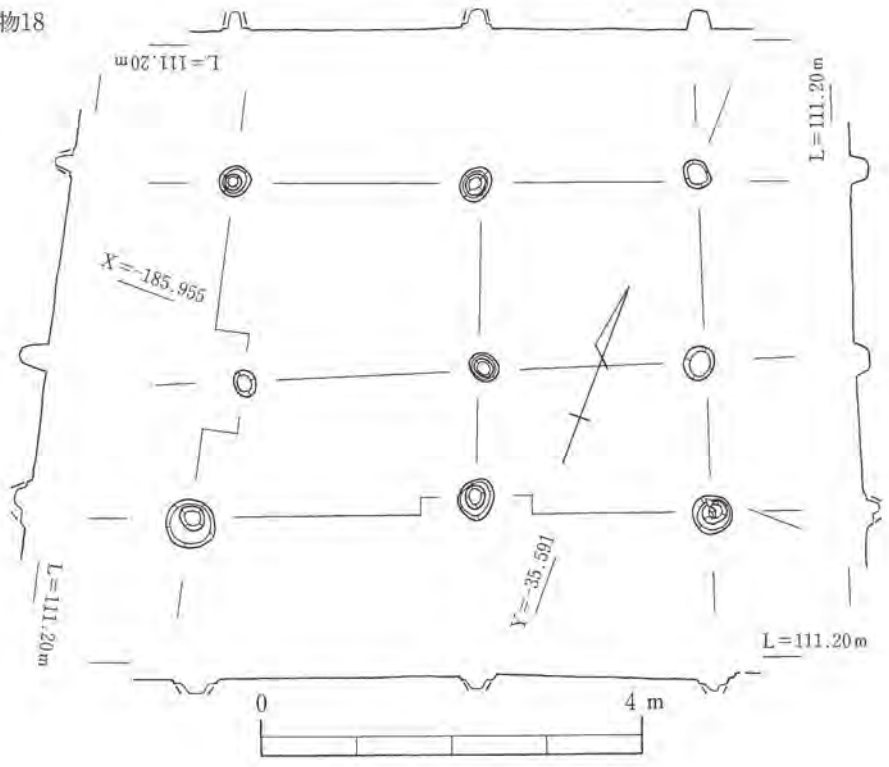
掘立柱建物18（第40図）

掘立柱建物17の南側で検出した総柱建物である。建物の規模は東西2間（5.44m）×南北2間（3.60m）で、主軸の方向はN－21°－Wである。南北方向の間尺に比べて東西方向が長いため東西棟の建物と考えられる。平面プランは北側の桁行が短くやや台形状を呈し、柱並びもやや乱れ

掘立柱建物17



掘立柱建物18



第40図　掘立柱建物17・18実測図

ている。間尺は一定でなく、桁行で20～40cm、梁行で約60cmの差異が認められる。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形で、直径23～51cmで、深さは12～35cmを測る。柱当たりから、柱の直径は18～28cm程度であったと考えられる。

遺物は棟持柱列の両端の柱穴から土師器皿片が出土している。

掘立柱建物19（PL.16）

調査区中央北側で検出した総柱建物である。規模は東西２間（4.35m）×南北２間（4.38m）で、平面プランはほぼ正方形である。主軸方向はＮ－21.5°－Ｗを指す。間尺は規則正しく、2.1m（７尺？）前後である。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形に近く、直径24～39cmで、深さは16～28cmを測る。柱当たりから、柱の直径は11～29cm程度であったと考えられる。２間×２間の方形あるいは方形に近い平面プランをもつ建物としては１区の掘立柱建物２や２区の掘立柱建物11がある。掘立柱建物19では、それらで検出している布掘溝は確認できなかったが、蔵・土蔵など同様な性格の遺構の可能性もある。

遺物は瓦器椀片・土師器皿片が北東隅、中央、南側中央の柱穴から出土している。

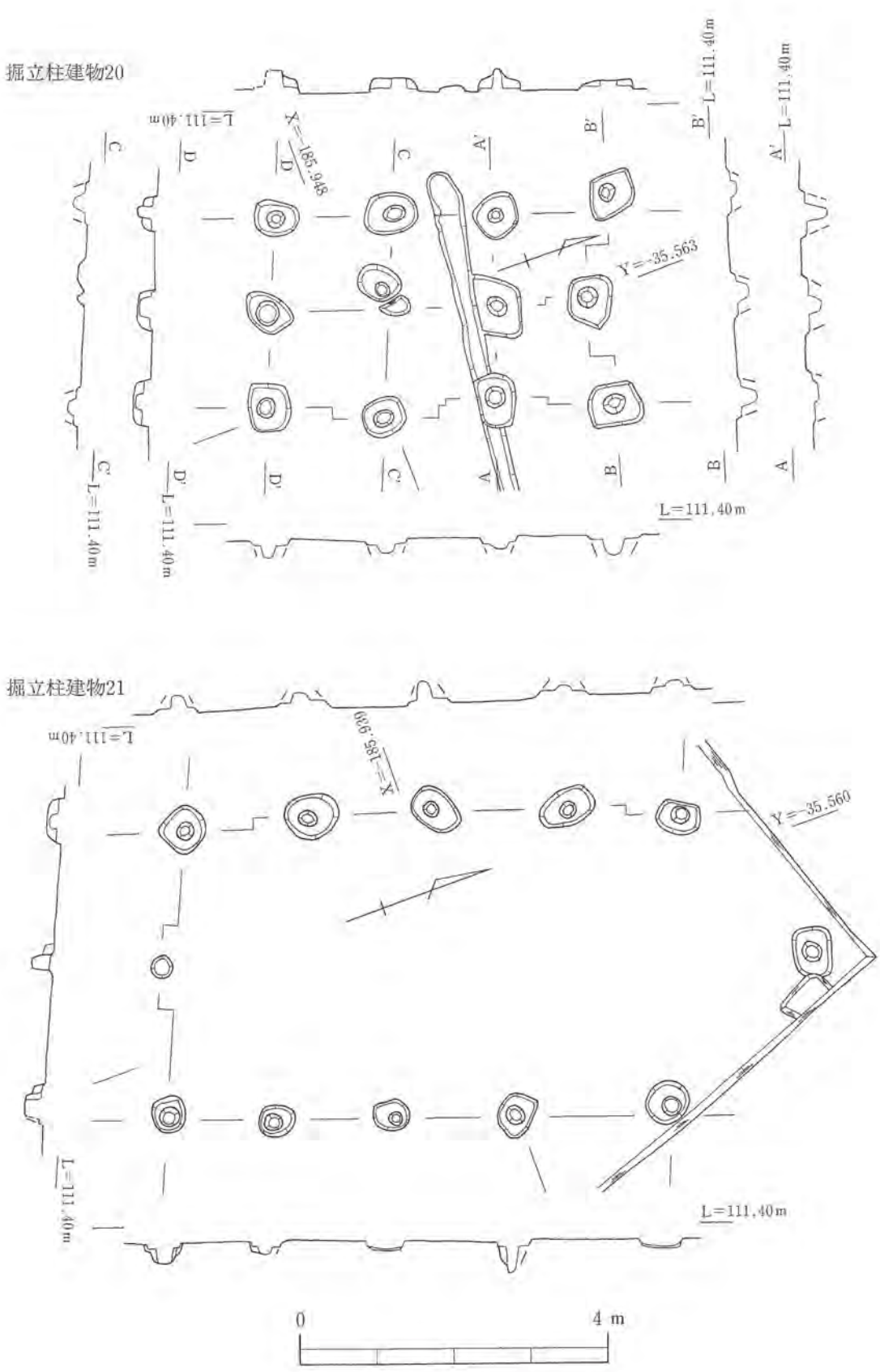
掘立柱建物19－２

掘立柱建物19と重複する形で検出した総柱建物である。規模は東西３間（6.90m）×南北３間（6.70m）で、主軸方向はＮ－21°－Ｗを指す。東西方向の間尺の方が長いことから東西棟の建物と考えられる。掘立柱建物19との新旧関係は、北西隅の柱穴の重複から当建物の方が古い。また、東側柱列が、1159・1160土坑と重複し、それらの土坑の方が新しい。平面プランは長方形で、間尺は桁行が2.1m前後と揃っているが、梁行はやや不規則となっている。柱穴掘形の形状は円形もしくは楕円形に近く、直径25～45cmで、深さは20cm前後を測る。柱当たりから、柱の直径は約20cm程度であったと考えられる。

遺物は柱穴から瓦器椀片や土師器皿片が出土している。

掘立柱建物20（第41図、PL.17）

調査区の東側で検出した南北棟の総柱建物である。規模は桁行３間（4.56m）×梁行２間（2.76m）で、主軸方向はＮ－21.5°－Ｅである。間尺は一定でなく、桁行1.34～1.56m、桁行1.17～1.60mと差異が認めされる。また、柱並びも乱れていることから平面プランも歪んでいる。柱穴の掘形は方形を意識していると考えられるが、検出した形状は楕円形や隅丸方形が多い。規模は47～75cmで、深さは13～27cmを測る。柱当たりから、柱の直径は21～33cm程度であったと考えられる。柱穴から遺物が出土しないことから時期を限定できない。ただ、周囲で検出している中世の掘立柱建物とは主軸がまったく異なること、柱穴掘形の規模が大きいことや形状が方形を意識していることに加えて、隣接する柱穴から奈良時代の遺物が出土していることなどから奈良時代の建物の可能性がある。



第41図　掘立柱建物20・21実測図

掘立柱建物21（第41図、PL.17）

掘立柱建物20の北側に縦列するように位置する南北棟の建物である。北側は調査区外となるため不明である。このため、北端で棟持柱のような柱穴を検出しているが、この柱穴が南側にも存在する棟持柱のような柱穴と対をなすものか、あるいは北方向にあと１間伸びるものかは不明である。規模は一応棟持柱をもつ建物と考えて、桁行４間（6.56m）×梁行２間（3.77m）としておく。主軸方向はＮ－23°－Ｅを指す。平面プランは長方形であるが、柱並びは乱れている。間尺は一定でなく、桁行では1.36～2.02mと差異が認められる。柱穴の掘形は隅丸方形または楕円形で、規模は44～73cmで、深さは14～43cmを測る。柱当たりから、柱の直径は18～31cm程度であったと考えられる。柱穴掘形の大きさや形状は掘立柱建物20と同じ様相を呈し、主軸方向もほぼ等しいことからも同時期の建物と考えられる。

柱穴からは遺物は出土していない。

４－984ピット（第44図、PL.71）

掘立柱建物20の南東に隣接して検出したピットである。平面形状は隅丸方形で、規模は長さ・幅約35cm、深さ約15cmを測る。

遺物は土師器甕（85）が出土している。長胴になるタイプで、口縁端部は内方に拡張する。体部外面はハケ後ナデ、体部内面は指押さえ後ナデ調整を施す。奈良時代に帰属するものと考えられる。

４－1051土坑（第44図）

調査区北側の中央やや東寄りで検出した。平面形状は楕円形を呈し、規模は75cm×90cm、深さ約60cmを測る。埋土は上層が7.5YR3/2黒褐色シルト層、下層は10YR4/4褐色シルト層である。

遺物ほぼ完形の土師器皿（63～70）が出土している。法量は口径8.4～9.2cm、器高1.3～1.9cmで、３－48地鎮遺構から出土したもの（40～44）と同様であるが、体部・口縁部を底部から摘み出しており、粘土紐を足して体部・口縁部を成形するそれらとは異なる。

４－1158ピット（第44図、PL.71）

調査区北側の中央で検出した。４－1159土坑と重複し、それより新しいが、出土遺物で見る限り時期差はあまりないものと考えられる。平面形状は円形で、直径約50cm、深さ約55cmを測る。

遺物は土師器（72・73）、瓦器（74・75）が出土している。72・73は小皿である。底部は平坦気味で、体部・口縁部は逆「ハ」の字に開く。74は口径8.4cmの小椀で、断面三角形の高台を付す。内面にはミガキが認められる。75は椀で、断面三角形の低い高台を付す。口縁端部内面には浅い沈線が巡る。摩滅が著しいが、内面にはミガキが認められる。これらは13世紀後半に帰属する遺物であると考えられる。

4－1159土坑（第42・44図）

調査区中央北側で検出した土坑で、重複する4－1158ピットより古い。平面形状は隅丸の長方形で、規模は南北約3.0m、東西約2.6mで、深さは中央部で12～14cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分層でき、上層は7.5YR3/2黒褐色シルト層、下層は10YR4/4褐色シルト層に0.5～5cm大の礫が多量に入る。

遺物は土師器皿（76・77）・羽釜、瓦器椀・皿などがある。76・77は小皿である。底部は平坦気味で、体部・口縁部は逆「ハ」の字に開く。

4－1160土坑（第42・44図、PL.18）

4－1159土坑の南側で検出した。平面形状は隅丸の長方形で、規模は東西3.66m、南北2.15m、深さ16～20cmを測る。埋土は2層に分層でき、上層は7.5YR3/2黒褐色シルト層、下層は10YR4/4褐色シルト層で、上・下層ともに細かい礫が疎らにはいる。4－1159土坑と形態が似ており、埋土も同じであることからも、時期・性格が同じ遺構であると考えられる。

遺物は土師器皿（78）・羽釜、瓦器椀（79）・皿が出土している。遺物内容に関しても4－1159土坑と同じである。78は小皿で、底部は平坦気味であり、体部・口縁部は逆「ハ」の字に開く。79は底部を欠く。摩滅が著しいが内面にはミガキが認められる。口径が12.8cmと小さいことなどから13世紀後半頃の資料であると考えられる。

4－1314土坑

4－1159土坑の東側で検出した。平面形状は隅丸の長方形で、規模は東西2.3m、南北1.4m、深さ5～18cmを測る。埋土は7.5YR3/2黒褐色シルト質である。4－1159・1160と一定間隔を空けて位置し、それらと大きさに違いがあっても似た形態で、しかも埋土が同じであることからも同じ性格の遺構であると考えられる。

遺物は瓦器椀片が1片出土しているのみである。

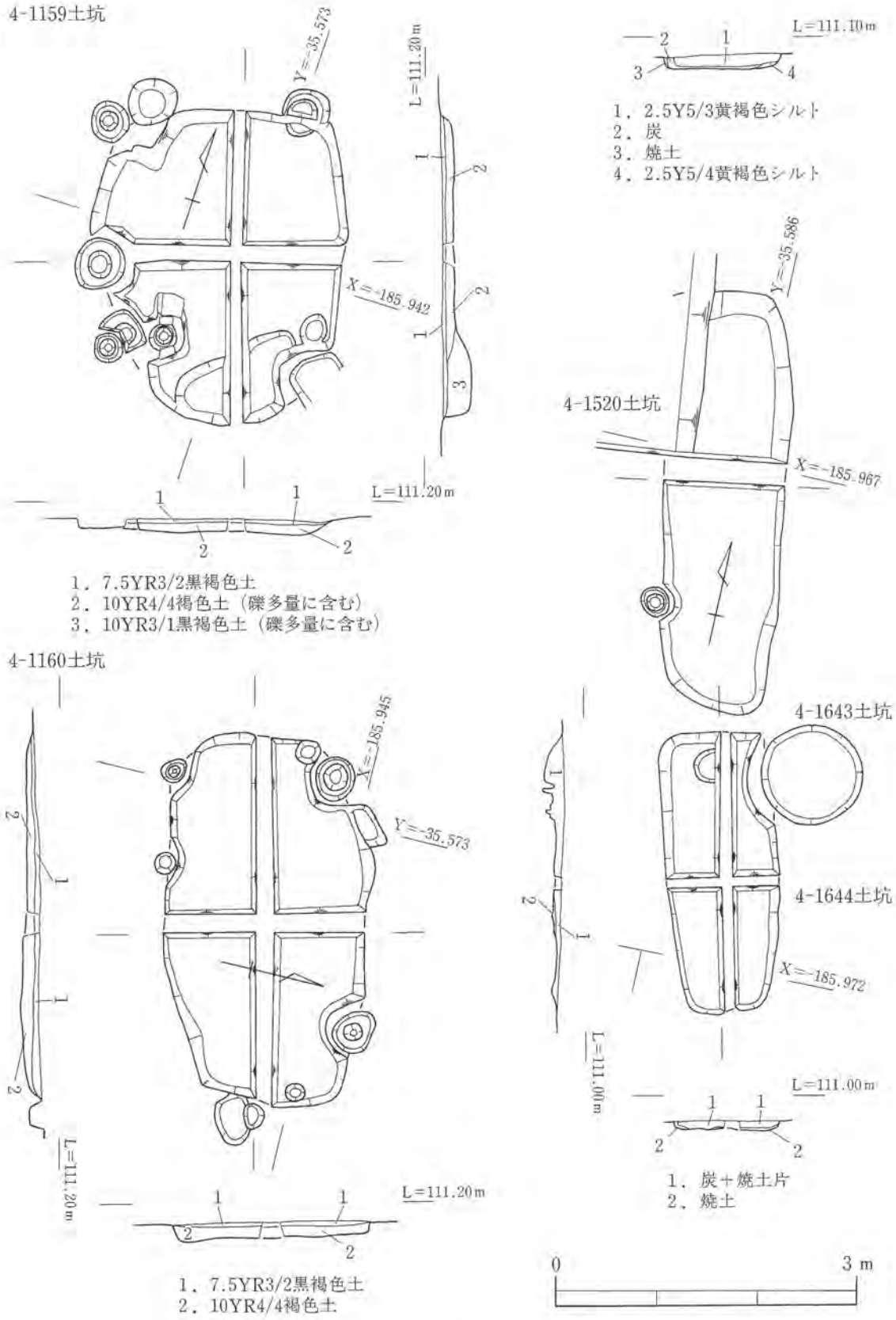
4－1394土坑

4－1400土坑の東側で検出した。北側は調査区外のため不明である。平面形状は長方形を呈すると考えられ、規模は東西約2.2m、南北約2.0m以上、深さ約24cmを測る。埋土は3層に分層でき、全てがシルト質である。上層は7.5YR3/2黒褐色、中層は7.5YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色が1：1の比率で混ざる。下層は10YR5/6黄褐色に7.5YR3/2黒褐色が7：3の割合で混ざる。

遺物は瓦器椀、土師器皿・羽釜などが出土している。

4－1400土坑（第44図、PL.71）

調査区北西隅からやや東寄りで検出した。北側は調査区外のため全容は不明である。掘立柱建物17と重複し、本遺構の方が新しい。平面形状は不整形を呈し、規模は東西約4.8m、南北4.0m以上で、深さは最も深い中央部で約24cmを測る。埋土の堆積は2層に分層でき、上層は7.5YR3/2黒



第42図　4区遺構実測図

褐色シルト質、下層は10YR4/4褐色シルト質である。上・下層ともに大きさ20～30cm大の礫が多量に入る。壁は緩やかに斜め上方に立ち上がる。

出土遺物には瓦器椀、土師器皿、瓦質土器羽釜(81)、備前焼がある。81は体部から口縁部にかけて内湾気味に続く。口縁端部は内方に拡張し、上方に面を有する。口縁部直下には鍔を巡らす。体部外面はケズリ、内面はハケ調整である。備前焼や羽釜から遺構の時期は15世紀代と考えられる。

4－1520土坑（第42図）

調査区南西隅で検出した。4－1664土坑の北側に縦列する。平面形状は隅丸の長方形を呈し、規模は南北約4.0m、東西1.16m、深さ16cmを測る。断面の形状は船底状で、壁面と床面の一部は火を受けて赤色化していた。主たる埋土は2.5Y5/3黄褐色シルト層であるが、底には0.5～1.0cmの厚みで炭層と焼土層が堆積していた。

遺物は瓦器椀片、土師器皿・羽釜片、須恵器甕片が出土している。

4－1643土坑（第33・42図、PL.18）

4－1644土坑と重複する埋桶遺構で、本遺構の方が新しい。掘形の平面形状は円形を呈し、底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。規模は直径1.15mで、残存の深さは28cmを測る。桶は厚さ2cmの側版の痕跡が残り、直径96cmであったと推定される。桶の据付は、まず掘形底面に厚さ2～4cm程度で2.5Y7/8黄色シルトを貼り、ほぼ中央に桶を置いた後、底と同じシルトで桶の周囲を埋め戻している。桶内の埋土はシルト層が水平に2層堆積し、上層は2.5Y5/4黄褐色、下層はN4.5/0灰色である。

遺物は桟瓦片、科学顔料の染付細片、白磁の唐子ミニチュア人形が出土している。遺物内容から近代以降の埋桶遺構であると考えられる。

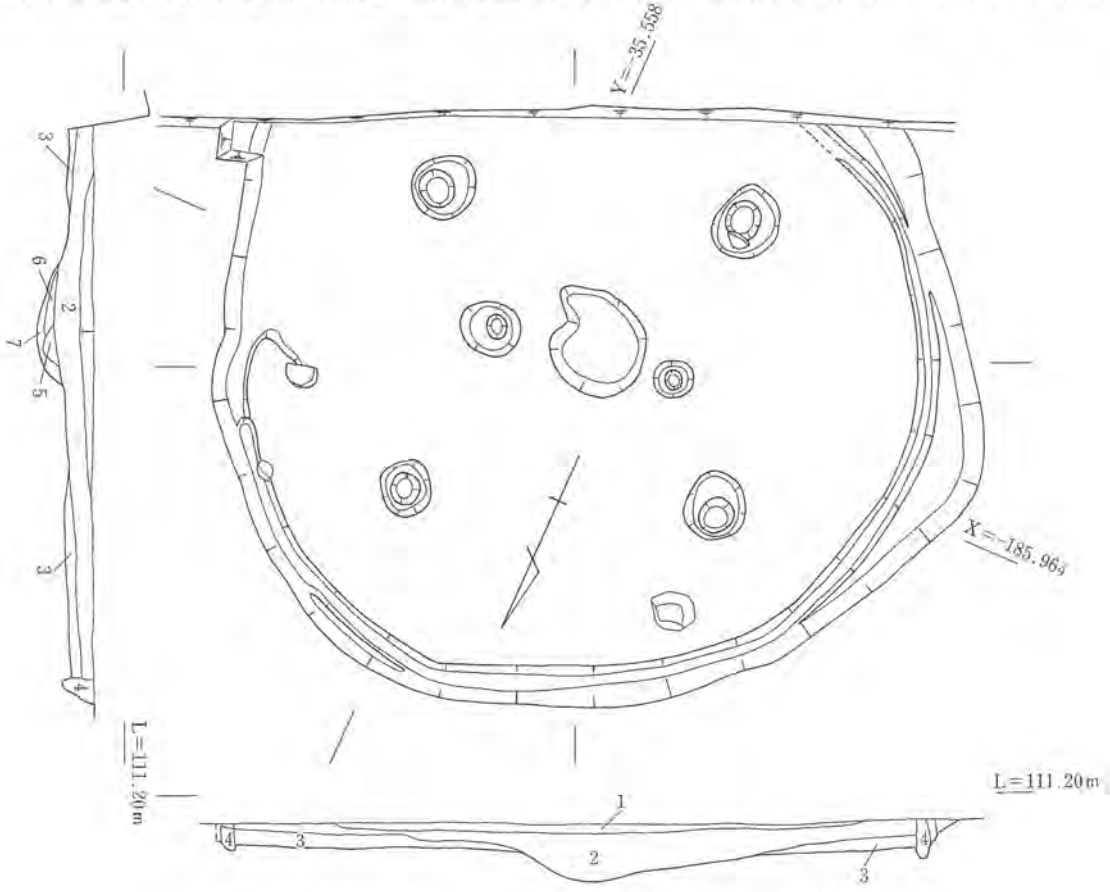
4－1644土坑（第42図、PL.18）

4—1520土坑の南に縦列する。形状は隅丸の長方形を呈し、規模は南北2.7m、東西1.06m、深さ4～20cmを測る。底は北側がやや深くなっている。断面の形状は船底状で、壁面と床面の一部は火を受けて赤色化していた。埋土は炭片と焼土塊の混層で、底には1～2cmの厚みで焼土層が堆積する。

遺物は土師器皿片、瓦器椀細片、須恵器甕片と木炭が出土している。

4－1180竪穴住居（第43・44図、PL.18）

調査区の南東隅からやや西寄りで検出した弥生時代中期の竪穴住居である。南側の約1/5は調査区外のため不明である。平面形状はやや不整形な円形を呈する。規模は東西方向で直径約5.80m、残存の深さは20～24cmを測る。壁は壁溝から外に緩やかに立ち上がる。主柱穴は4本で中央に炉をもつ。埋土は3層に分層できレンズ状の堆積を呈する。上層から2層目までの埋土には1～3cm大の礫が全体に若干含まれる。壁溝は全周し、幅10～20cm、深さ4～16cmを測る。主柱穴の掘形は直径40～50cmの円形で、深さは30～50cmを測る。柱は痕跡から20～25cm程度であったと考えられる。炉は円形に近い形状で直径75cm、深さ14cmを測る。炉の断面形状は船底状を呈し、埋土は3層に分層できる。上層には灰が凝縮したような5YR4/1褐灰色のシルト層が堆積する。底には1～5cmの玉砂利の層があるが、意図的に敷いた可能性も考えられる。床面直上からは約25～30cmの台石が3点検出された。炉の東側と西側で柱穴をそれぞれ1基検出した。東側の柱穴は炉の掘



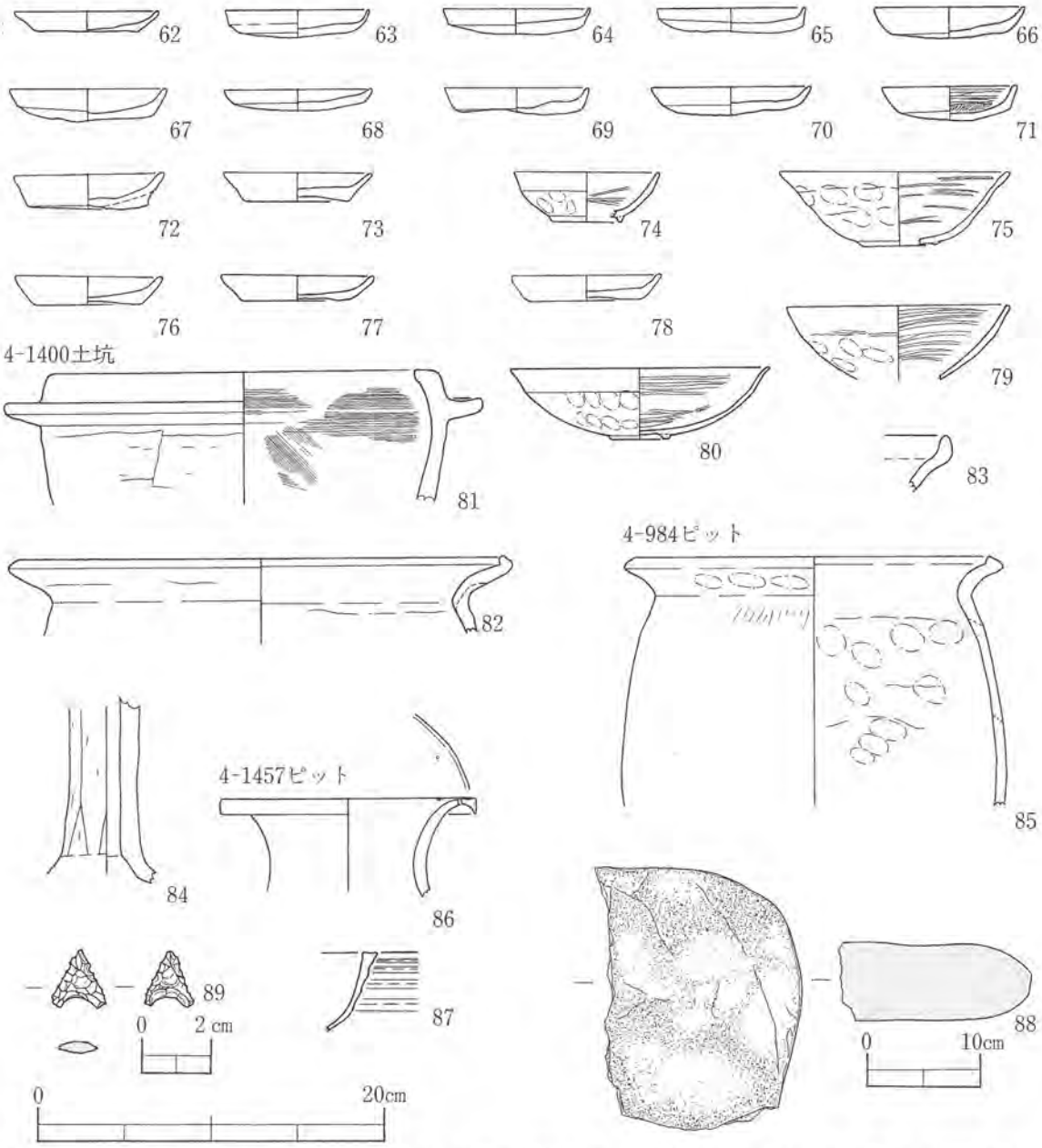
1．10YR3/1黒褐色シルト
2．5YR2/1黒褐色シルト（礫少量含む）
3．5YR4/1褐灰色シルト（礫少量含む）
4．7.5YR5/1褐灰色シルト
5．5YR4/1褐灰色シルト
6．5YR5/2灰褐色土
7．礫

0　4 m

第43図　4-1180竪穴住居実測図

形から12cm隔てて位置する。直径約30cmの円形を呈し、深さは約15cmを測る。西側の柱穴は炉の掘形から28cm隔てて位置する。30cm×40cmの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。これらの柱穴の柱当たりは直径10cm前後と細いことから、上屋を支える柱ではないと考えられ、炉に付随する施設の柱である可能性が考えられる。

4－1180竪穴住居は中央土坑の両脇に柱穴を持つ構造のみで言えば、いわゆる松菊里型住居である。中央土坑の両脇に柱穴を持つ住居は和歌山県内では弥生時代中期に多く見られ、その系譜



62・71・80・82～84・89：包含層、63～70：4-1051土坑、72～75：4-1158ピット、76・77：4-1159土坑、78・79：4-1160土坑、87・88：4-1180竪穴住居

第44図　4区出土遺物実測図

は後期前半まで確認することができる。

遺物は弥生土器（87）、台石（88）などが出土している。87は鉢で、口縁部外面に4条の凹線文を巡らす。口縁端部は内外に拡張し、上方に面を有する。88は砂岩製で、中央には擦痕が認められる。遺物から中期後半の住居であると考えられる。このほか弥生土器が出土する遺構としては、調査区の中ほどで検出した4－1457ピットがあり、中期後半頃の広口壺（86）が出土している。86は口縁端部が垂下し、外方に面をもつ。口縁部には紐穴が穿たれている。

5．5区の調査（第50図、巻頭図版3、PL.22）

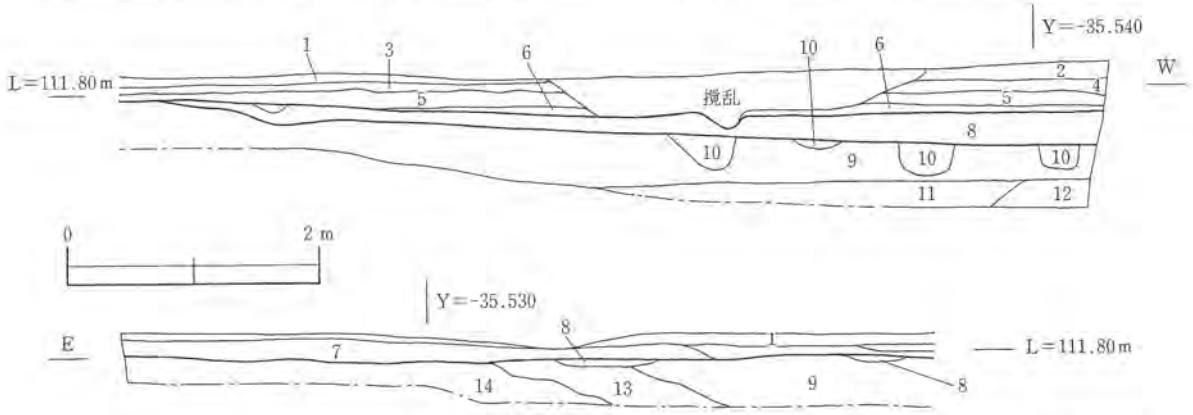
5区は里道を挟んで3区の東側に位置する調査区である。検出した遺構には掘立柱建物1棟、土坑、ピットがあるが遺構密度はやや希薄である。

遺物は古墳時代～飛鳥時代と思われる須恵器や中世の土師器が包含層などから出土しているが、図示できるものはない。

掘立柱建物22

調査区の北西端で検出した南北棟の建物で、検出したのは桁行2間（4.94m）以上×梁行2間（4.39m）であるが、北側に延びる可能性がある。主軸方向はN－11°—Wである。建物の平面プランはほぼ長方形で、間尺は桁行が2.6m前後、梁行が2.2m前後と比較的揃っている。柱穴の掘形は円形で、直径20～27cmとやや小振りで、深さは5～17cmを測る。

遺物は柱穴から古墳時代～飛鳥時代の土師器の細片が出土しているが、室町時代の包含層上面より切り込んで造られていることから、室町時代もしくはそれ以降の建物と言える。



1．盛土
2．耕作土
3．床土
4．2.5Y6/1黄灰色土
5．2.5Y5/1黄灰色土
6．5Y4/2灰オリーブ色土
7．5Y6/2灰オリーブ色土
8．10YR3/1黒褐色土（包含層）
9．10YR5/4にぶい黄褐色土
10．10YR3/1黒褐色土＋10YR5/4にぶい黄褐色土（遺構埋土）
11．10YR6/4にぶい黄褐色粘質土
12．10YR4/3にぶい黄褐色土（礫混）
13．7.5YR5/2灰褐色礫
14．7.5YR5/6明褐色礫

第45図　6区南壁面土層図

6．6区の調査（第45・50図、巻頭図版3、PL.19）

6区は幅2.5mほどの市道を挟んで前述の5区の南側に、また里道を挟んで4区の東側に位置する調査区である。検出した遺構には掘立柱建物4棟、土坑、ピットなどがある。3・4区と同様に遺構密度が高い。

包含層出土遺物（第48図、PL.72）

出土遺物には縄文土器、飛鳥時代の土師器皿、中世の土師器皿・瓦器・輸入陶磁器などがある。98は縄文時代晩期末の二条突帯深鉢の体部破片である。ほぼ直立する体部にD字状の刻み目を施す突帯を付す。突帯の上下には条痕状のケズリを施す。95は土師器皿である。内面体部から底面にかけて放射状の暗文を施す。奈良時代のものである。90は土師器小皿で、粘土紐を巻いて成形している。91は底部が回転糸切りである。90・91は中世の土器である。92は土師器杯で、平坦な底部に直線的に開く体部・口縁部をもつ。94は瓦器皿で、器高は1㎝と浅い。体部外面と内面にミガキを施す。内面のミガキは体部と見込み部を分割する。全体に丁寧なつくりである。97は須恵器杯Bである。高台は低く、やや外側に張り出している。平城Ⅲ期に併行する時期、8世紀中頃のものである。96は中国製青磁碗で、口縁端部の釉が削り取られている。93は製塩土器で、器壁は薄く椀形を呈する。全体的に指押え後ナデ調整を施す。99は鉛製品であり、鉄砲の弾である可能性が高い。

掘立柱建物23（第46図、PL.20）

調査区の北端で検出した東西棟の建物である。規模は桁行3間（4.93m）×梁行2間（3.50m）で、主軸方向はN－23°－Eである。建物の平面形状は整った長方形であるが、間尺は桁行で1.5～1.85m、梁行で1.69～1.81mとやや不揃いである。柱掘形の平面形状は円形もしくは楕円形で、規模は44～65㎝、深さは50㎝前後である。柱当たりから、柱の直径は20㎝程度であったと考えられる。堀形の埋土は基本的には包含層と同じ10YR3/1黒褐色土が上層で、下層は2.5Y5/2暗灰黄色土であるが、両者の混じった土を埋土としている柱穴も認められた。

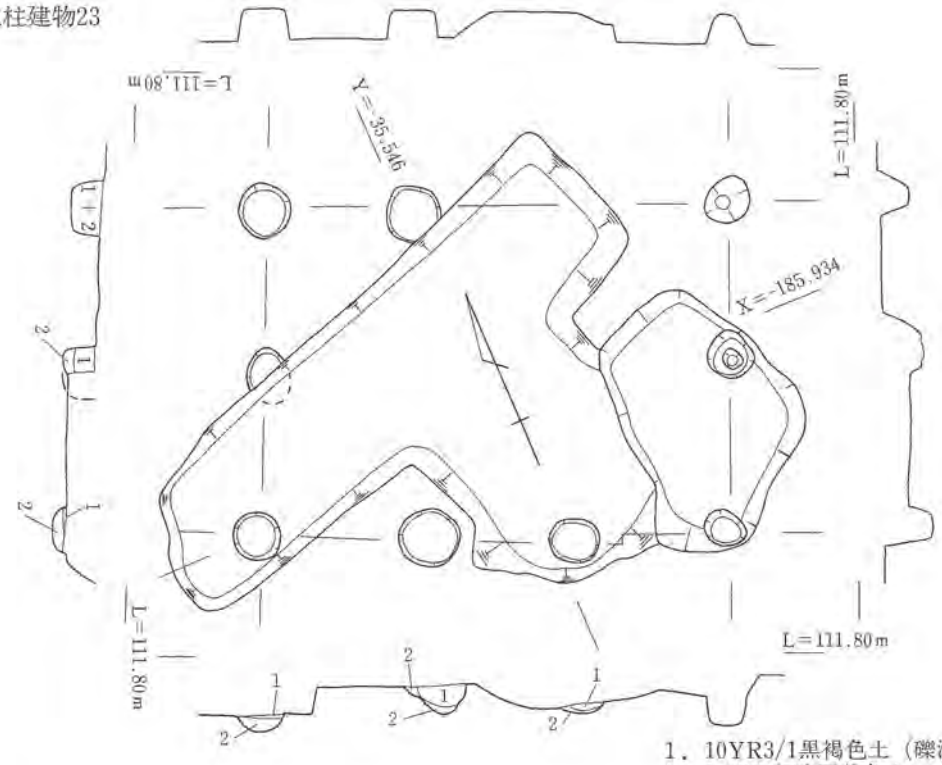
柱穴からは遺物はまったく出土しなかった。

掘立柱建物24（第46・48図、PL.20）

調査区の中央付近で検出した東西棟の総柱建物である。規模は桁行3間（6.42m）×梁行2間（4.52m）で、主軸方向はN－24°－Wである。建物の平面形状は北側の桁行が長くなっており、やや台形状を呈する。間尺は1.92～2.52mと不揃いである。柱掘形の平面形状は円形もしくは楕円形で、規模は33～66㎝、深さは19～36㎝である。柱当たりから、柱の直径は26～29㎝程度であったと考えられる。

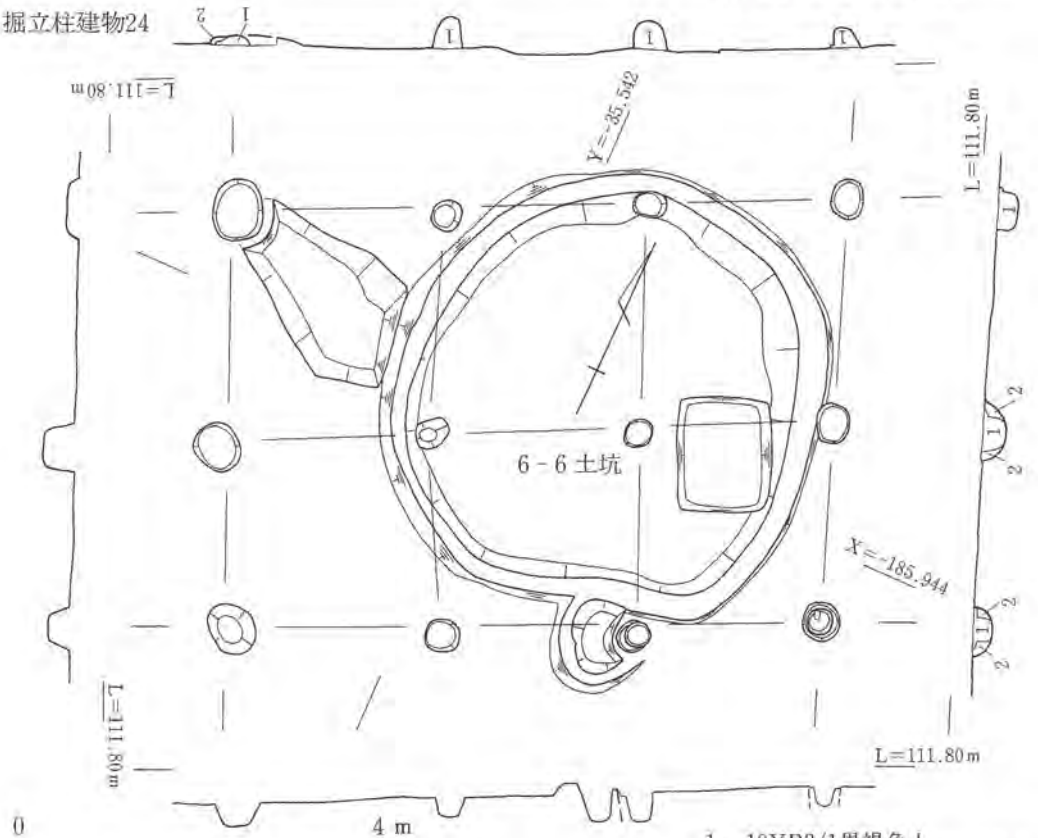
遺物は柱穴から土師器皿片や瓦器椀（102）が出土している。102は断面三角形の高い高台を付す。内面全体に細かいミガキを施す。12世紀後半～13世紀初頭頃に帰属すると考えられる。

掘立柱建物23



1．10YR3/1黒褐色土（礫混）
2．2.5Y5/2暗灰黄色土

掘立柱建物24



0　4 m

1．10YR3/1黒褐色土
2．1＋10YR5/4にぶい黄褐色土

第46図　掘立柱建物23・24実測図

掘立柱建物25（第47・48図、PL.21）

調査区の南西隅付近で検出した南北棟の総柱建物で、掘立柱建物24の南側に1.5m隔てて位置する。規模は桁行４間(7.93m)×梁行３間(6.01m)で、主軸方向はＮ－27°－Ｗである。面積は47.7㎡で、北馬場遺跡で検出した掘立柱建物の中で最大である。建物の平面形状は南側の梁行が短くなっており、やや台形状を呈する。間尺は桁行で1.82～2.15m、梁行で1.68～2.06mとやや不揃いである。柱掘形の平面形状はほぼ円形で、規模は22～34cm、深さは23～29cmである。柱当たりから、柱の直径は20cm程度であったと考えられる。掘形内の埋土は基本的に包含層に酷似した10YR3/1黒褐色土である。

遺物は柱穴から鎌倉時代の土師器皿や瓦器椀（101）が出土している。101は断面三角形の高台を付す。底部・体部の器壁は厚く、内面全体に細かいミガキを施す。13世紀前半頃の資料であり、出土遺物のみで判断すると、掘立柱建物25は北側に位置する掘立柱建物24に後続することになる。

掘立柱建物26（PL.21）

調査区の南端で検出した建物で、南側が調査区域外となり全容不明である。掘立柱建物25と重なるが、柱穴の重複はなく新旧関係は明らかでない。間尺は桁行・梁行とも2.1m前後で、比較的揃っている。規模は東西２間（4.52m）×南北１間（2.25m）以上で、主軸方向はＮ－23°－Ｗである。柱掘形の平面形状はほぼ円形で、規模は27～44cm、深さは17～32cmである。

遺物は柱穴から土師器細片が出土している。

６－６土坑（第46・48図、PL.20・72）

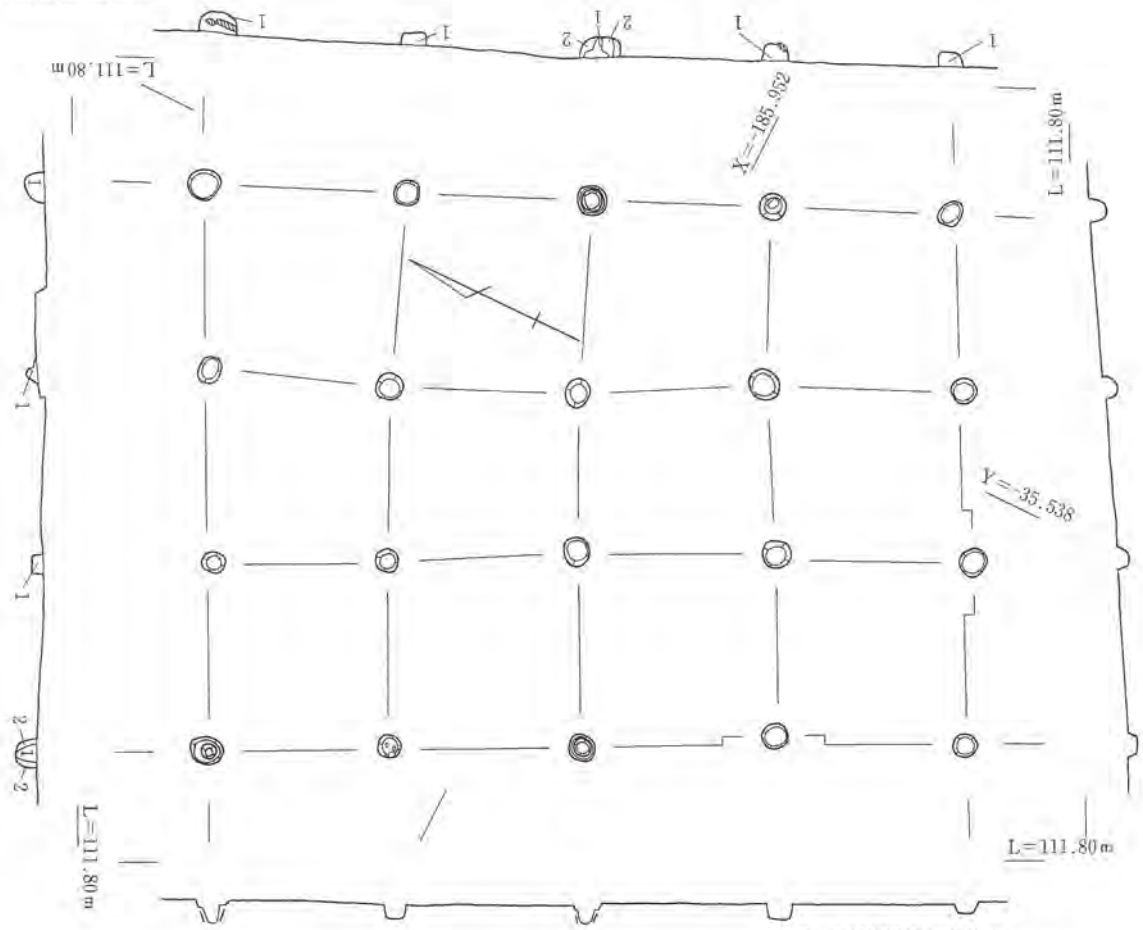
調査区の中央で検出した大型土坑で、平面形状は円形を呈し、皿状に窪む。包含層の上面で検出した遺構で、重なるように位置する掘立柱建物24より新しい。規模は直径約4.0mで、深さは最深部でも15cmほどと浅い。埋土は包含層に酷似した黒褐色土である。

遺物は須恵器、土師器、瓦器、輸入陶磁器などが出土している。104は土師器小皿で、底部は平坦気味であるが、やや上げ底状となっている。13世紀前半のものである。105・106は瓦器椀である。105は断面台形、106は断面三角形の高台を付す。摩滅が著しくミガキの詳細は不明だが、内面に細いミガキが認められる。12世紀後半～13世紀初め頃の資料であると考えられる。107は中国製の白磁碗である。体部上半を欠いているがおそらく口縁部はわずかに外反させ端部を丸く収めるタイプになるものと思われる。12世紀中頃～後半にかけての製品であろう。108・109は須恵器杯Ｂの蓋である。108の口縁部端部は下方に折り曲げ、端面を成している。おそらく109同様の宝珠様の摘みが付くものと思われる。平城Ⅲ期、８世紀中頃のものである。

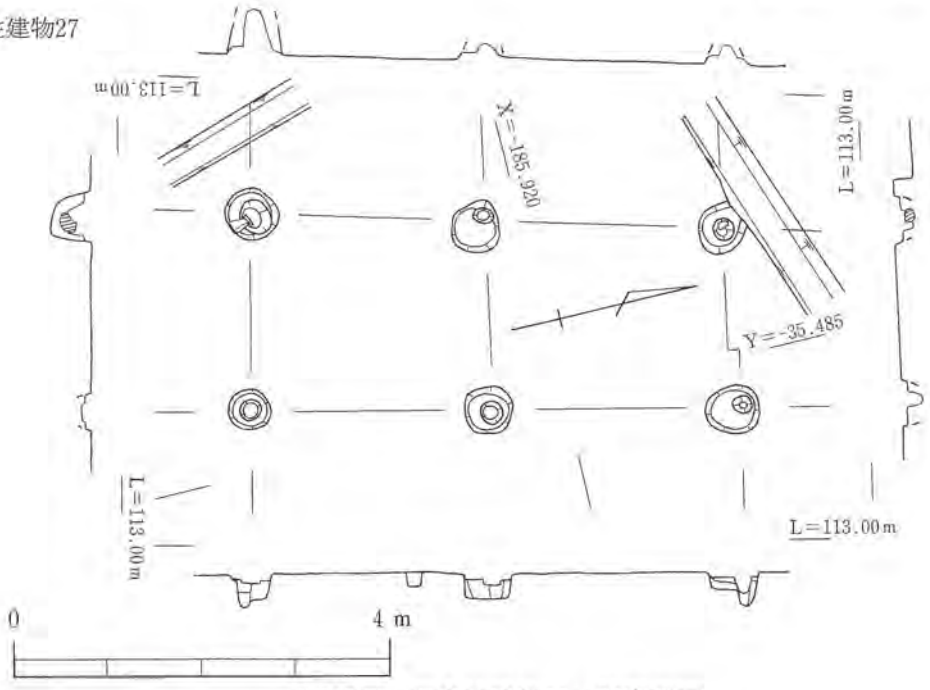
６－60ピット（第48図）

調査区の北端、掘立柱建物23の西側で検出したピットである。平面形状は楕円形で、規模は28cm×23cm、深さ30cmを測る。

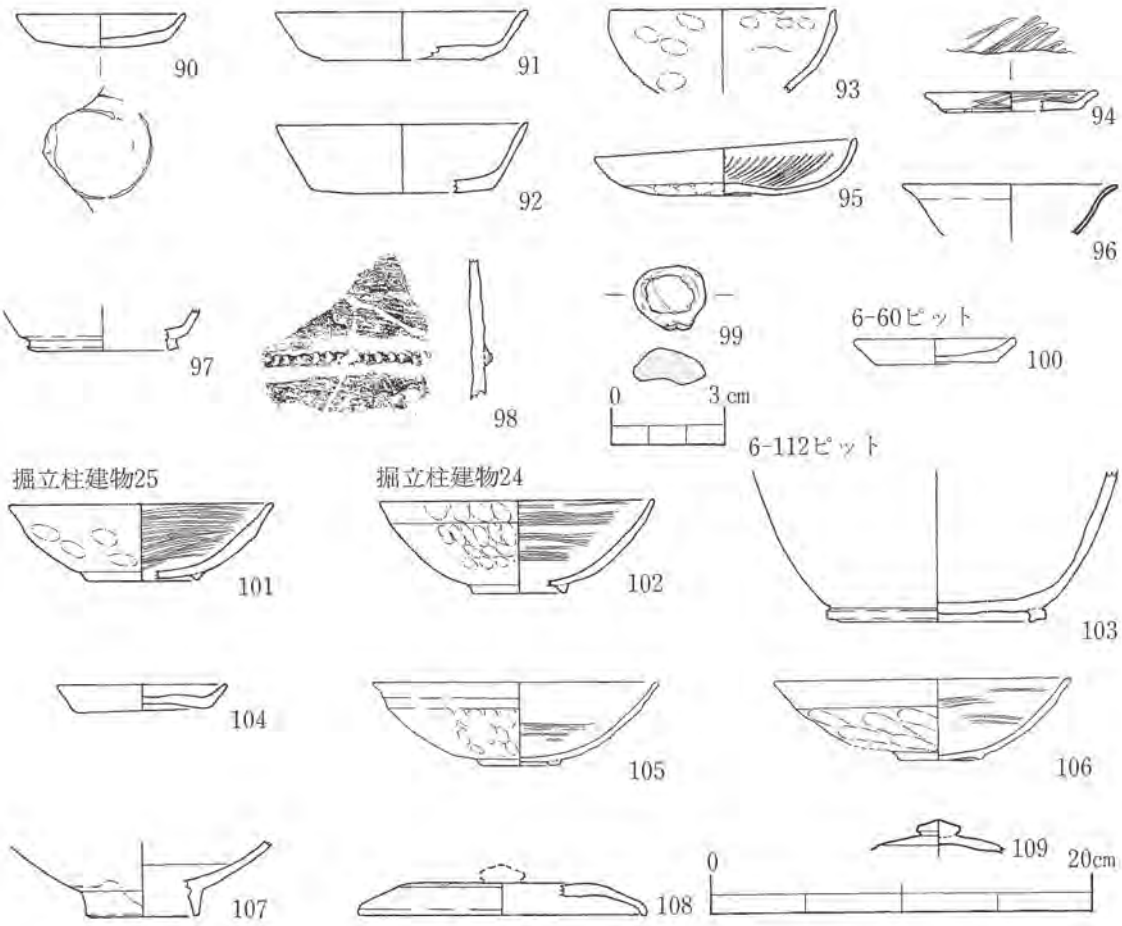
掘立柱建物25



掘立柱建物27



第47図　掘立柱建物25・27実測図



90～99：包含層、104～109：6-6土坑

第48図　6区出土遺物実測図

遺物は土師器小皿（100）が出土している。底部は回転糸切り調整である。

6－112ピット（第48図、PL.72）

調査区の北側で掘立柱建物23の南東に接するピットである。平面形状楕円形で、規模は48cm×35cm、深さ32cmを測る。直径25cmの柱当たりが確認されている。

遺物は須恵器壷（103）が出土している。6－6土坑出土の須恵器と同じ平城Ⅲ期、8世紀中頃のものであろう。

7．7区の調査（第50図、巻頭図版3、PL.22）

6区の東側に約20m隔てて位置する調査区で、現有の道路によって南北に分断される。

遺構検出は地山直上でおこなっている。遺構の残存状況などから、後世に削平を受けた可能性が高く、遺構面は本来もう少し上であった可能性がある。遺構は北西隅付近でのみ検出しており、直径30cm前後の柱穴と思われるものを10基ほど確認した。ただし具体的な建物を復元するには至らなかった。遺物は柱穴から出土しなかった。

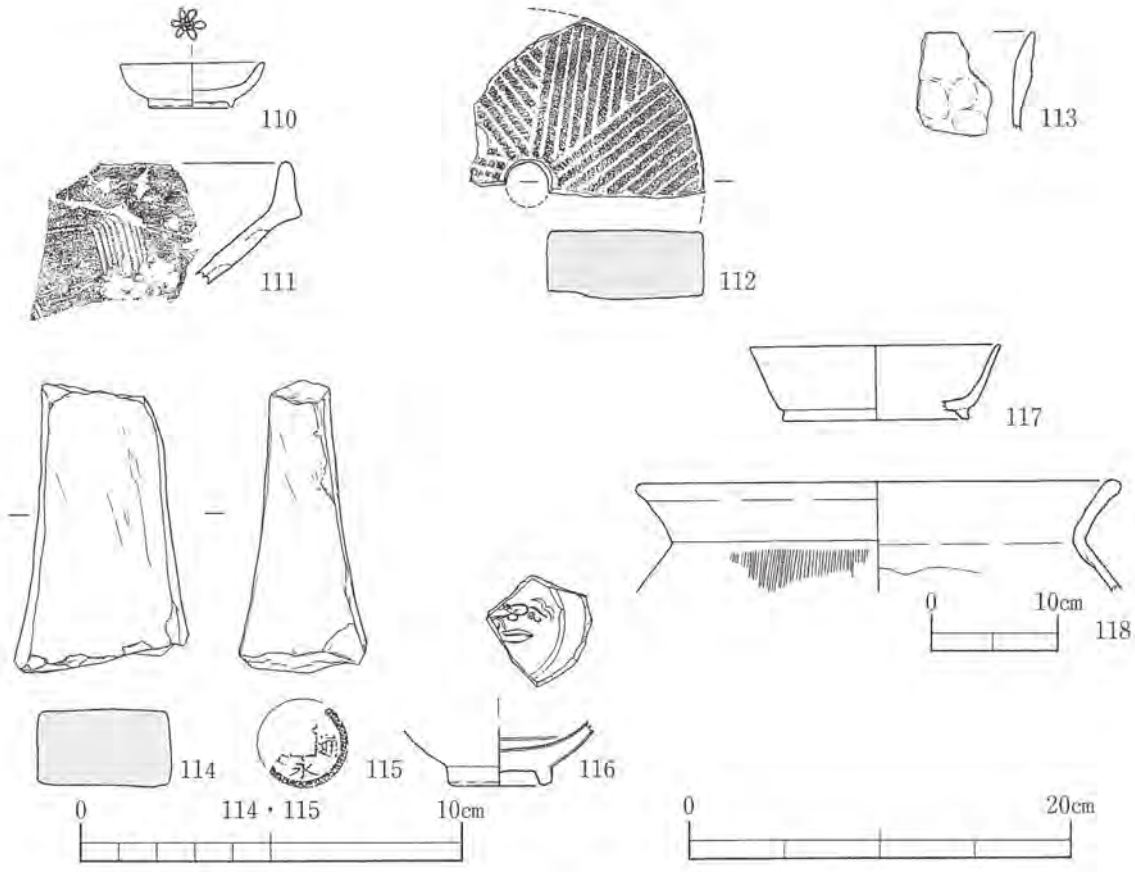
包含層出土遺物（第49図、PL.72）

瀬戸・美濃系陶器（110）、備前焼（111）などの国産陶器のほか茶臼（112）が出土している。110は灰釉の小椀で、淡い草緑色を呈する。内部底面には印花文が施こされる。111は擂鉢で、擂目は８本単位である。口縁部は上方に大きく拡張される。間壁編年ⅣＢ期後半の特徴を示す。これらの遺物については概ね15世紀代のものと言えよう。

８．８区の調査（第52図、PL.23）

７区の東側に約30m隔てて位置する調査区で、7区同様に現有の道路によって南北に分断される。北側を８－1区、南側を８－２区と呼称する。

検出した遺構には掘立柱建物・土坑などがある。遺構の埋土は全て単一層で7.5YR3/1黒褐色シルト質である。



110～112：７区包含層、113：８区第３層、114・115；9-513溝、116：９区包含層、117・118：11-673流路

第49図　７・８・９・11区出土遺物実測図



第50図　3～7区遺構配置図

包含層出土遺物（第49図、PL.72）

製塩土器（113）などが出土している。113は口縁部下で器壁が肥厚する。外面は指押さえ調整で、古代の遺物である。

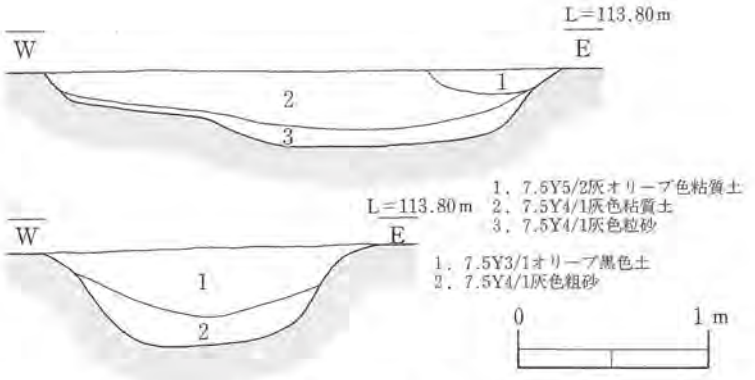
掘立柱建物27（第47図）

8－2区で検出した。北西側が調査区外となるため、棟方向とその規模は不明である。検出した規模は南北2間（5.19m）×東西1間（2.06m）で、主軸方向はN－9°－Eである。間尺は南北方向で2.5m前後、東西方向で2.0m前後と揃っている。柱掘形の平面形状は円形で、直径43～54cmと北馬場遺跡で検出した掘立柱建物としては大きい方である。深さは4～21cmで、柱当たりは直径22～38cmである。

遺物は柱穴から出土していない。

9．9区の調査（第52図、PL.23）

8区と10区の間で、それぞれ約30m隔てて位置する調査区で、7・8区同様に現有の道路によって南北に分断される。北側を9－1区、南側を9－2区と呼称する。9－1区では地山面において直径50cm前後の柱穴や土坑を検出している。出土遺物が少なく、時期や性格を把握できないものが多い。



第51図　9-513溝土層図

9－2区は9－1区に較べて1mほど低くなっており、低湿地の様相を呈していた。近世の整地土の上面において2条の溝を検出したものの、地山上では遺構は検出できなかった。

包含層出土遺物（第49図、PL.72）

中国製青磁（116）などがある。116は碗で、内底面に印刻花文を施す。高台内は露胎である。焼成がやや甘く露胎部は赤みを帯びる。

9－500土坑

9－1区で検出した。平面形状は隅丸の三角形を呈し、規模は85cm×62cmで、深さは10cmを測る。

遺物は古墳時代と考えられる土師器片が出土している。

9－513溝（第49・51図、PL.72）

9－2区で検出した北北東－南南西方向の溝である。幅は南方向に広がり0.55～1.8m、深さ20cmを測る。両端は調査区域外になるが、約8mを確認している。

遺物は砥石（114）、寛永通宝（115）が出土している。

9－514溝

9－2区で検出した溝で、9－513溝と平行に延びる。幅70cm、深さ20cmで、調査区内で約10mを確認した。

遺物は出土しなかった。

10．10区の調査（第52図、PL.24）

最も東に位置する調査区で、山裾部分に立地する水田が対象地区である。旧地形を確認したのみで、遺構は検出できなかった。

遺物は水田層から土師器の細片が出土している程度である。

11．11区の調査（第52図、PL.24）

最も北に位置する調査区で、現況は水田である。検出した遺構には溝、土坑、ピットなどがある。攪乱を受けた部分が非常に多い。

11－7流路

調査区の西側で、調査区に直交するように検出した。規模は幅約9.0～9.4m、検出延長は3.3mを測る。残存の深さは最も深い箇所でも16cmと非常に浅い。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりのシルト質の単一層である。

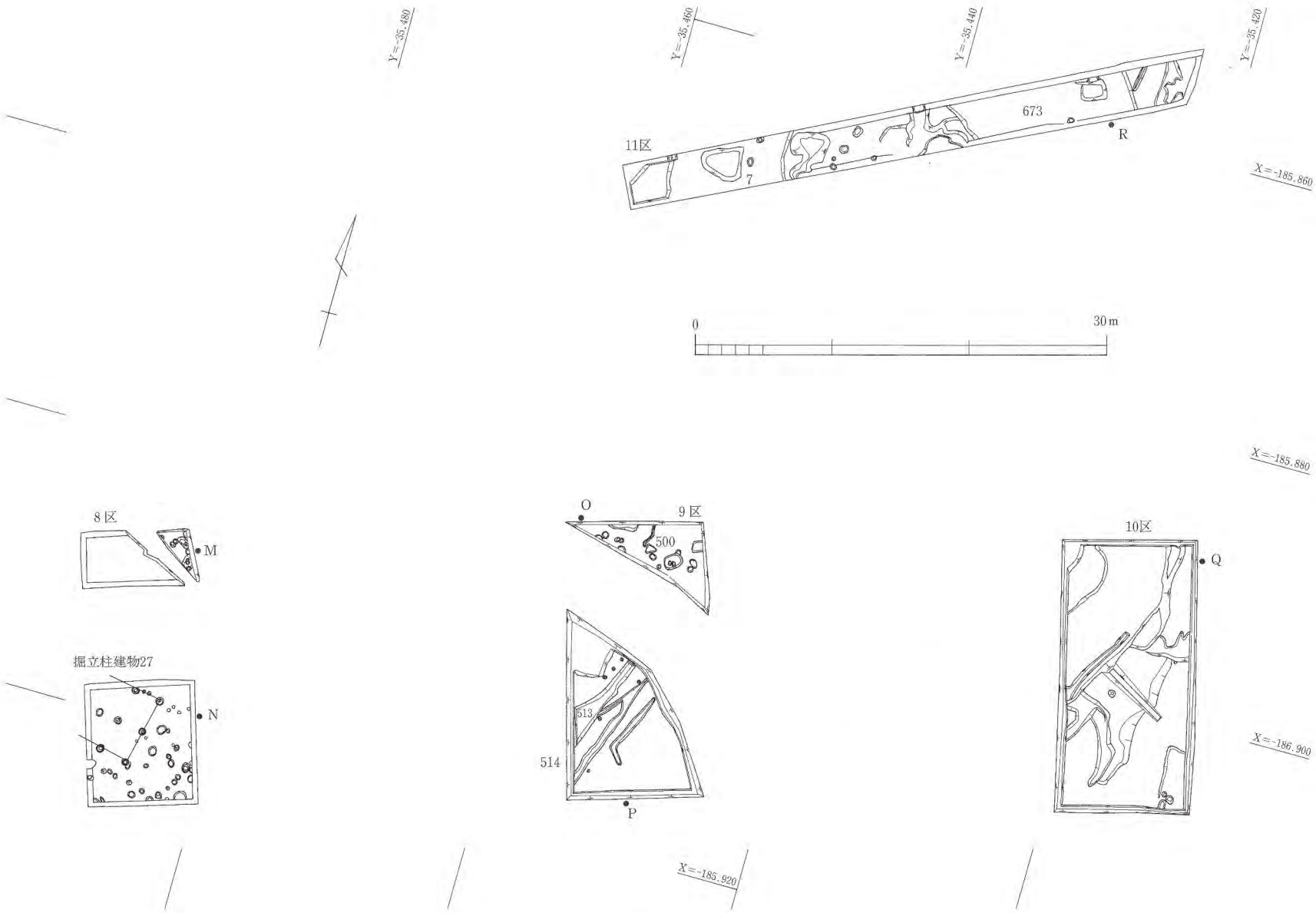
遺物は出土しなかった。

11－673流路（第49図、PL.72）

調査区の東側で検出した。規模は幅12.0～13.5mを測り、残存の深さは遺構7と同様に浅く、最も深いところで約20cmである。底は凸凹している。埋土は遺構7と同様の10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりのシルト質の単一層である。

遺物は須恵器（117・118）が出土している。117は須恵器杯Bの身である。底部端に高台を付す。118は甕で。口縁部は「く」の字に屈曲し、口縁端部はやや肥厚する。体部外面は縦方向の平行タタキを施したのちナデ調整を施す。時期的には8世紀と考えられる。

以上11－7・673は流路状遺構と判断したが、調査区の幅が3.4mと狭いため、落込みの可能性も考えられる。



第52図　8～11区遺構配置図

第4節　まとめ

北馬場遺跡の発掘調査では時期的にみると縄文時代中期、弥生時代中期、奈良時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺構・遺物を確認することができた。ここでは縄文時代、弥生時代、奈良時代、鎌倉時代における北馬場遺跡の位置付けについて若干触れておく。

（1）縄文時代（第53図）

縄文時代の遺構は、船元II式の土器が出土した土坑のみである。このほか時期が確定できる縄文土器としては、晩期末の突帯文土器があり、縄文時代に帰属すると考えられる石鏃が一定量出土していることからも、当時遺跡内で生活の営みがあったことが窺える。

北馬場遺跡周辺の和歌山県橋本市及び伊都郡内には、この遺跡を含め10ケ所の縄文遺跡が知られている。すなわち、紀の川右岸には、上流から橋本市芋生小島・血縄・野口・土居・北馬場・市脇・柏原遺跡が、紀の川左岸には、上流から橋本市恋野遺跡、かつらぎ町渋田遺跡が、紀の川の川中島であるかつらぎ町船岡山（蛇島）には、船岡山遺跡がある。

立地からみると、紀の川の河岸段丘上に位置する芋生小島・血縄・土居・市脇・渋田遺跡、南北の山脈から紀の川にむかって伸びる丘陵（支尾根）の先端付近で紀の川に注ぐ支流に接して位置する野口・北馬場・柏原・恋野遺跡、紀の川の川中島に位置する船岡山遺跡とに分けることができる。このうち芋生小島・血縄・市脇・北馬場・柏原・船岡山遺跡は、発掘調査が行われているが、竪穴住居跡は発見されておらず、縄文のムラの様子はよくわかっていない。

和歌山県内最古の縄文土器は、田辺市高山寺貝塚出土の縄文時代早期後半の土器を標式とする高山寺式土器で、紀の川流域では海草郡紀美野町西ノ窪遺跡から発見されている。伊都郡で最古の縄文土器は、船岡山遺跡から出土した高山寺式土器よりも少し新しい早期末の条痕文や竹管文が施された土器である（1～3）。船岡山遺跡は、後期前半の土器（19･21）が主体を占め、前期前半（4）、中期前半（6～8・10～13）、後期後半、晩期末の土器も出土しており、縄文時代のほぼ全般にわたって人々の生活の場となっていたことがわかる。次いで長い間営まれているのは市脇遺跡で、中期末から後期前半の土器（14・16～18・20・22・23・25～27）が主体を占め、前期前半（5・9）と晩期末（35・36・38～43）の土器が出土している。そのほか、血縄遺跡から晩期（31・32）、芋生小島遺跡から中期末から後期初頭（15・24）、渋田遺跡から後期末から晩期初頭の土器（28～30・33・34・37）が出土している。最近調査された柏原遺跡では晩期の土器が出土しているが出土量はわずかである。この遺跡から縄文時代の“まつり”に使われたとされる土偶が1点出土しており、県内では6例目となる。また、船岡山遺跡からは、主食であるドングリ類を粉にするための石皿や磨石、狩猟のための石槍や石鏃、硬玉製太珠などが発見されている。

硬玉製太珠は、県内では初めての出土で、新潟県糸魚川流域からはるばる運ばれてきたものであろう。野口・土居・恋野の3遺跡は、橋本市の遺跡地名表（橋本市教育委員会「平成4年度橋本市遺跡発掘調査概報－芋生小島遺跡－」橋本市埋蔵文化財調査概報第21集。1993年）では、いずれも散布地で、石鏃や縄文土器が出土したとあるが、出土遺物が公表されていないので詳細は不明である。このように、北馬場遺跡と同じく中期前半（船元II式土器の時期）に営まれていたのは、船岡山遺跡である。

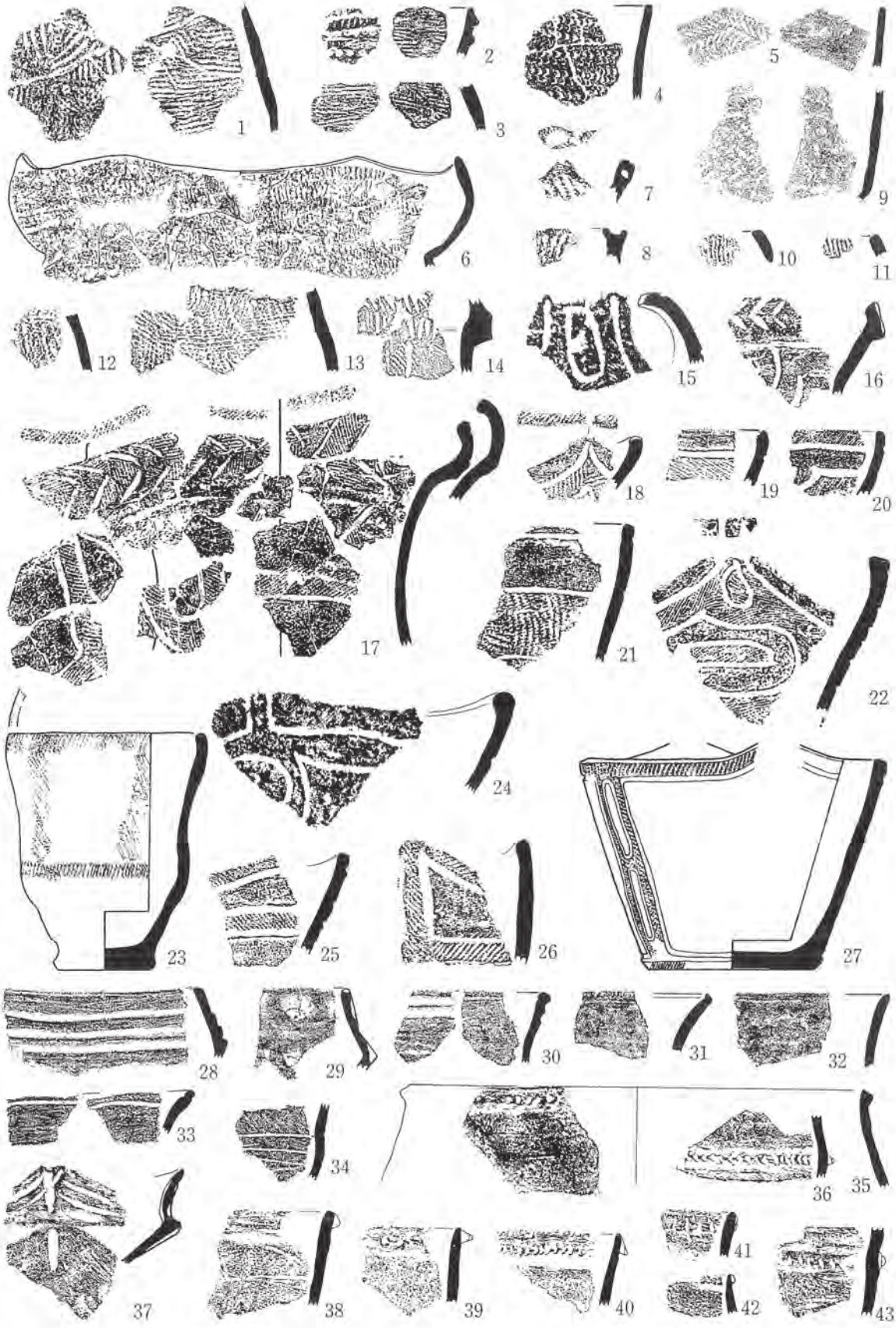
＊『船岡山遺跡発掘調査報告書－紀の川河川改修工事に伴う発掘調査』和歌山県教育委員会　1986年
＊『市脇遺跡ほか発掘調査概報』橋本市教育委員会　1984年
＊『市脇遺跡発掘調査概報第6次』橋本市教育委員会　1992年
＊『血縄遺跡緊急発掘調査報告書』和歌山県教育委員会・橋本市教育委員会　1973年
＊「芋生小島遺跡」『平成4年度橋本市遺跡発掘調査概報』橋本市教育委員会　1993年
＊『かつらぎ町史　通史編』かつらぎ町　2006年

（2）弥生時代

今回の発掘調査において弥生時代の遺構は中期の竪穴住居を1棟のみを検出したに留まった。調査を実施した地区は北馬場遺跡の台地でも最も北方に位置することから、この弥生時代中期の集落の本体は、今回調査した地点よりも南方に展開するものと予想される。

検出した竪穴住居は、中央土坑（炉）の両端に柱穴を置くという形態のみで言うと所謂「松菊里型住居」と呼ばれるものである。県下ではこの「松菊里型住居」が、弥生時代前期～後期前半までの時期幅で確認されている。また、中央土坑の両脇のみに主柱をもつ典型的な松菊里型住居は、前期前半のものが御坊市堅田遺跡で2棟検出されており、同遺跡では中央土坑の両脇以外にも周囲に柱穴をもつ松菊里型住居も前期前半と前期後半のものが1棟ずつ確認されている。このほか、御坊市小松原II遺跡で中期中頃、海南市野上中南遺跡で中期前半、海南市溝ノ口遺跡では前期末・中期中葉、亀川遺跡では中期後半、紀の川流域では和歌山市川辺遺跡で中期中頃・中期後半、かつらぎ町船岡山遺跡で後期前半のものが検出されており、本書に掲載する柏原遺跡でも中期中頃のものが見つかっている。松菊里型住居は朝鮮半島から弥生時代の早い段階で伝わった住居形態で、本来は工房跡であることが多いとされる。県下で多くみられる松菊里型住居を、初現期のものと同様に評価できないものの、中期を中心に県下一円に分布する意義を解明するのは今後の課題である。

北馬場遺跡の周辺にある弥生時代の遺跡としては、当遺跡の南東方約3㎞に拠点集落とされるである血縄遺跡が存在する。当該遺跡は紀の川北岸の河岸段丘に位置する東西に長い遺跡である。過去数度の発掘調査が実施され、時期的に弥生時代を中心とする遺跡であることが判明している。



第53図　伊都・橋本地域の縄文土器

第１次調査は遺跡の西方で弥生時代後期の遺構・遺物を、第２次調査においては弥生時代中期の遺構・遺物を検出している。このように遺跡の東西では時期差が生じ、このことから中期から後期にかけて社会情勢の変化によって東から西に生活域が移ったのではないかと考えられている。ほかには本遺跡から南約1.2kmの位置に市脇遺跡がある。時期的には縄文時代後期･晩期の遺跡として知られているが、第１次調査において弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式・第Ⅳ様式）の遺物も出土している。

それに当該遺跡の東約2.6kmの垂井女房が坪遺跡（堂ノ本遺跡）からは、昭和48年の県道の拡幅工事の際に弥生中期の甕棺が不時発見として報告されている。

本報告書掲載の北馬場遺跡と舌状の尾根を挟んで約2.2km西方に位置する柏原遺跡においても弥生時代中期の方形周溝墓群や竪穴住居が検出されている。

また紀ノ川南岸においては紀ノ川に向って突出した舌状の台地上に山田遺跡が存在する。山田遺跡は過去二回調査されているが、第１次調査において弥生時代中期の竪穴住居２棟、後期の竪穴住居１棟を検出している。

このように当該遺跡周辺には弥生時代中期の遺構・遺物が顕著に確認されている遺跡が点在する。北馬場遺跡については、今回は竪穴住居１棟だけの検出であるが、この時期の遺構の範囲が南方向に広がるものと考えられ、今後の調査に期待される。

（３）奈良時代

今回の調査では確実に奈良時代の遺構と考えられるのは、２区で検出した2-500土坑のみである。ほかに出土遺物は皆無であったが、２区で検出した掘立柱建物４や11、４区で検出した掘立柱建物18や19などは、他の建物との主軸方位の違いや、柱穴の掘形の規模が大きく、方形を意識している点などから考えて奈良時代の可能性がある。この時期もまた先述した弥生時代中期と同様に、本調査地の南側に広がる台地の調査に期待される。

周辺遺跡の既往の調査では、橋本市・伊都郡には、東から古佐田廃寺跡、神野々廃寺跡、名古曽廃寺跡、佐野廃寺跡などの白鳳時代から奈良時代にかけての寺院跡が点在するが、寺院跡以外の遺跡においては奈良時代の遺構は稀薄で、わずかに血縄遺跡の1973年度の第１次調査において包含層から須恵器杯蓋・杯身、土師器甕の口縁部が出土している。また同遺跡で1985年度調査において奈良時代の土坑を検出している。市脇遺跡の第４次調査では、遺構は確認されていないが「野中」と墨書された土師器皿と椀、須恵器瓶が出土している。本遺跡から南に約1.1km、市脇遺跡から東に約500mの地点に東家遺跡がある。この遺跡の橋本小学校運動場建設時の昭和59年度調査では古墳時代中期・後期の集落、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構が多数確認されているが、８世紀代の遺構・遺物の確認は皆無であったと報告されている。

以上のように、周辺遺跡における既往の調査では奈良時代の遺構は希薄ながら、紀の川流域の調査済みの寺院跡に付け加え、発見が期待される伊都郡衙跡、ならびに古代の畿内域であることなどを考え合わせると、今後の調査において大きな範囲でこの時期の遺構が検出される可能性も多々あると考えられる。

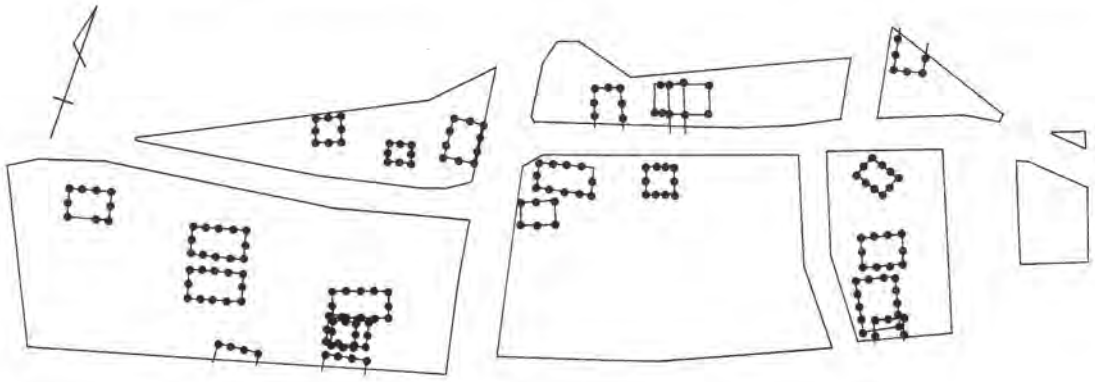
（４）鎌倉時代（第54図、表３）

本調査で検出した検出遺構ではとりわけ鎌倉時代の掘立柱建物が目立ち、出土遺物では瓦器椀・皿が突出する。また、これらの建物の特徴として全てが総柱建物である。時期的には出土遺物から13世紀前半から中頃と考えられる。

掘立柱建物は奈良時代と考えられる建物を除いて21棟の建物を検出した。規模としては４間×３間、４間×２間、３間×２間、２間×２間の大きさのもので、このほとんどが東西棟の建物である。また布掘溝をもつ２間×２間の建物を１区、２区、４区で各１棟を検出した。この建物は倉庫的なものと考えられるが、掘形からは壁土もしくは板材の痕跡が出土していないため、その構造は不明である。この倉庫的な建物は、総柱の掘立柱建物２・３棟と対を成すものと考えられ、主屋と倉庫という屋敷地の建物構成の１単位であると考えられる。

調査地は１区～６区とした地区を現有の道路が東西・南北に延びている。建物はこの道路に対して平行に建っていることから、この道路が中世の時期から踏襲され、集落の幹線道路であったと考えられる。例えば１区の建物３あるいは４区の建物15・16・17、５区の建物20、６区の建物23などは、現有道路に規制されるかのように道に面した位置に建っている。

このような状況を想定すると、道で区画された一つの屋敷地の中には、広場的空間や生活に欠かせない井戸などが存在してしかるべきである。広場的な空間は１区では建物１・２・３の北方向に、２区においては建物９の北方向に、４区においては建物17の南あるいは東方向に求めることができるが、今回の調査では井戸がまったく検出されていないのが実情である。この状況は、



第54図　北馬場遺跡中世掘立柱建物配置図

今回の調査では偶然にも井戸の検出に至らなかったのか、それとも標高110～111mの高所に存在する集落のため湧水脈が無く、集落の下に求めた可能性も考えられる。それに、一般的には一つの屋敷地の中は小溝などによって区切られている場合が多いが、ここ北馬場遺跡では屋敷地をさらに仕切るような溝は検出されていない。

以上、鎌倉時代前半～中頃の北馬場遺跡の村は、道により区画された範囲が屋敷地の１単位あるいは数単位と考えられ、これが集合して一つの集落を形成していたものと考えられる。ただ、馬場村の名称が文献史料に見えるのは室町時代（1377年）であるが、これ以前には村として存続していたのは出土遺物から確実と言える。

建物	区	間	規模(m)	面積(m²)	掘　形	柱当り		方　位
		東西×南北	東西×南北		規模(cm)	径(cm)	深さ(cm)	
1	1	2×2	3.99×4.02	16.0	30～37	16～25	30～33	N－22°－W
2	1	2×2	3.56×2.94	10.5	22～70	15～26	25～46	N－14°－W
3	1	2×3	4.64×6.09	28.3	27～48	15～22	21～50	N－4.5°－W
4	2	×4	×6.45		43～83	20～29	36～52	N－13°－W
5	2	3×2	6.39×4.32	27.6	26～42	18～27	17～28	N－14°－W
6	2	4×2	8.28×4.48	37.1	32～49	17～21	26～36	N－12.5°－W
7	2	4×2	8.37×4.45	37.2	29～53	16～24	20～37	N－14°－W
8	2	3×	6.37×		33～40	20～40	18～26	N－6.5°－W
9	2	4×2	8.68×4.06	35.2	24～50	17～37	20～36	N－18°－W
10	2	3×2	6.18×4.10	25.3	33～60	15～28	14～26	N－10.5°－W
11	2	2×2	3.62×3.72	13.5	28～53	20～28	38～58	N－12°－W
12	2	3×	6.47×		40～48	18～26	20～28	N－10.5°－W
13	2	2×2	3.11×3.76	11.7	54～78	22～32	20～58	N－0°－
14	3	2×(3)	3.97×(4.89)	(19.4)	19～29	19～34	2～15	N－17°－W
15	3	1×(3)	2.22×(6.76)	(15.0)	27～61	20～31	23～34	N－20.5°－W
16	3	4×2	7.26×4.27	31.0	30～43	12～24	8～20	N－20°－W
17	4	4×2	8.12×3.92	31.8	25～43	16～22	7～28	N－11°－W
18	4	2×2	5.44×3.60	19.6	23～51	18～28	12～35	N－21°－W
19	4	2×2	4.35×4.38	19.1	24～39	11～29	16～28	N－21.5°－W
20	4	2×3	2.76×4.56	12.6	47～75	21～33	13～27	N－21.5°－E
21	4	2×4	3.77×6.56	24.7	44～73	18～31	14～43	N－23°－E
22	5	2×(2)	4.39×(4.94)	(21.7)	20～27	－	5～17	N－11°－W
23	6	3×2	4.93×3.50	17.3	44～65	18～20	－16	N－23°－E
24	6	3×2	6.42×4.52	29.0	33～66	26～29	19～36	N－24°－W
25	6	3×4	6.01×7.93	47.7	22～34	17～20	23～29	N－27°－W
26	6	2×(1)	4.52×(2.25)	(10.2)	27～44	～	17～32	N－23°－W
27	8	(1)×2	(2.06)×5.19	(10.7)	43～54	22～38	4～21	N－ 9°－E

表３　北馬場遺跡掘立柱建物一覧表

第５章　柏原遺跡

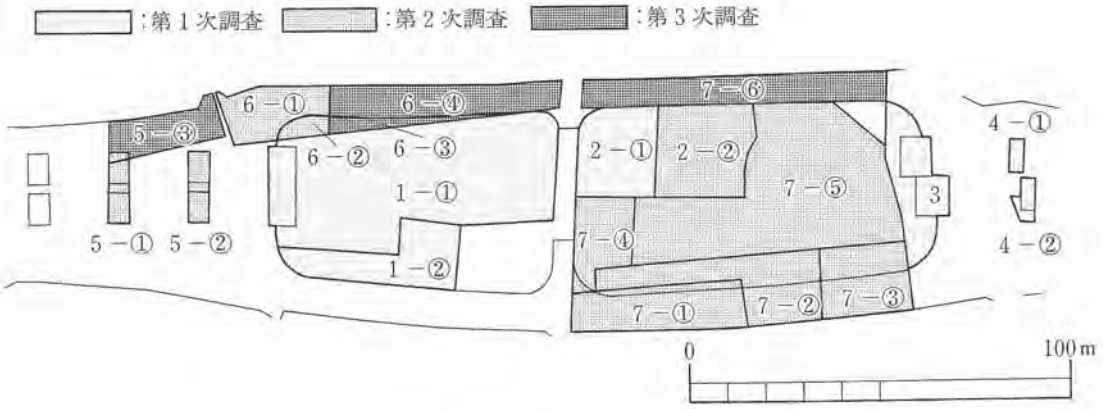
第１節　調査の経過（第55～57図、写真４～８）

柏原遺跡は紀の川の支流である山田川の西岸に位置する。周辺は北から南に向かって緩やかに下る平野部で、山田川が切り込んだ谷部とは約10mの高低差が認められる。遺跡の東西には平野部との比高差約30m前後の丘陵が南北に横たわっている。

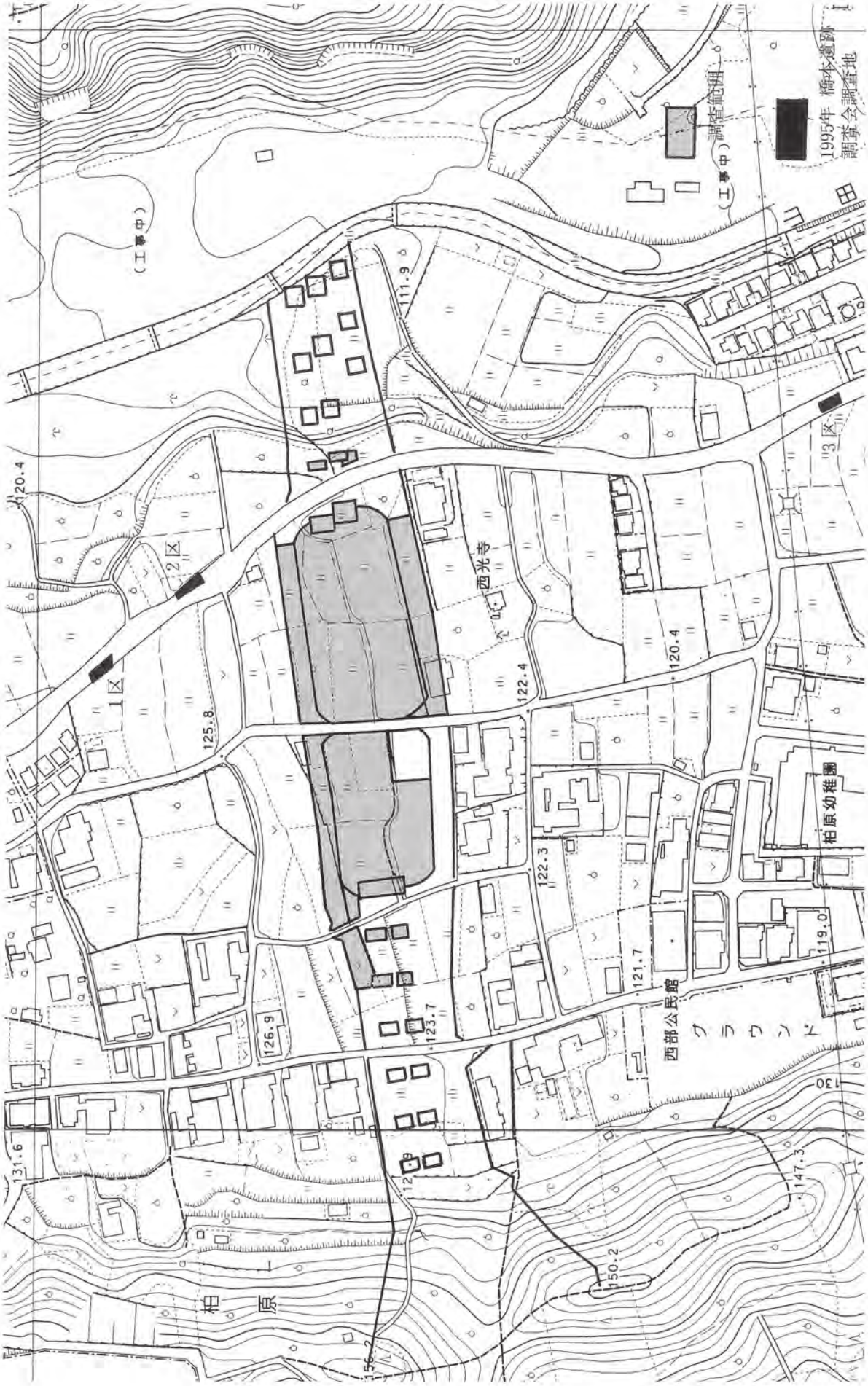
遺跡を横断するように自動車道が建設されることになり、予定地内を県教育委員会が試掘調査をおこなったところ遺構の存在が確認された。発掘調査は2002年度から３箇年（第１～３次）かけて実施しており、調査面積は第１次調査で3,540㎡、第２次調査で4,955㎡、第３次調査で1,566㎡である。

１．第１次調査（第55図）

調査対象地は４箇所に分かれる。このため、土置き場等の関係から、先ず１区（１－①）及び３区の調査を行い、次いで２区（２－①・②）と４区の調査を行う予定であった。しかし、後述するように１区の第２遺構面検出遺構が当初の調査対象地外へ延びることが確実となった。このため県教育委員会に国土交通省との協議を依頼したところ、１区調査区を拡張し（１－②）、２区の当初調査範囲を縮小することとなった（２－②）。これに伴って、調査工程の見直しを図り、１区・３区・４区の調査を並行して行った。面積が小さく比較的遺構の密度も低い３区及び４区の調査が終了した時点で埋め戻し作業を実施。引き続き、２区の調査に着手し、１区と並行して作業を進めた。また、１区の第１次遺構面調査の際、遺跡の西側丘陵部で行われる工事用進入路の一部が調査区の北西端を通ることになった。このため、当該地（６－②・③）は第２及び第３遺構面についての調査は行っていない。



第55図　柏原遺跡調査の範囲



第56図　柏原遺跡調査区位置図

2．第2次調査（第55図）

調査対象地は大きくは3箇所に分かれる（5－①・②、6－①・②、2－②・7－①～⑤）。この範囲には工事用車両の進入路部分も含まれていることから、当該地の調査を行うには、進入路を付け替える必要があり、また、5区は主に橋脚部分であるが、近々工事が開始される予定であった。このため、5区及び7区の南辺部（以下、進入路部と呼称）を先行して調査を実施し埋め戻しを行った。但し、7区は調査範囲（7－①）の東端で方形周溝墓の一部が検出されたため、2度にわたり調査区の拡張を行った（7－②･③）。6区についても、調査予定地西端に隣接する場所での橋脚工事が施工される事になり、更に、7区においても現有道路を跨ぐボックスカルバートの工事が急遽行われる事になった。この工事に伴って掘削される範囲の一部は調査区内に及んでいる。このため国土交通省及び県教育委員会と工程等について協議を行った結果、6区については、橋脚工事に隣接する部分（6－①・②）の調査を先ず行う事、7区に関してもボックスカルバート工事によって掘削される範囲（7－④、以下、カルバート部と呼称）及びその周辺の調査を先行して行い工事用に引き渡す事、また、土置場や各工事の日程との都合上、当初調査予定範囲の一部については次年度以降に調査を行う事になった。

3．第3次調査（第55図）

調査対象地は3箇所に分かれている（5－③、6－③･④、7－⑥）。この内、5－1区及び6区は前年度に調査を予定していたが、道路本体工事の開始等の理由により第3次調査として行うことになった調査区である。



写真4　調査前の状況



写真5　工事用仮説道設置状況



写真6　工事完了後

4．見学会等（写真７・８）

1）京奈和自動車道工事見学会（2003年11月24日）

国土交通省主催の工事見学会　参加者：柏原～神野々地区住民約30人

2）現地説明会（2004年２月14日）

見学者数：133人（名簿記載者）

3）西部小学校児童現地見学会（2004年２月19・20日）

2004年２月19日　西部小学校４・５年生現地見学：約120人

2004年２月20日　西部小学校６年生現地見学：約70人



写真７　現地説明会

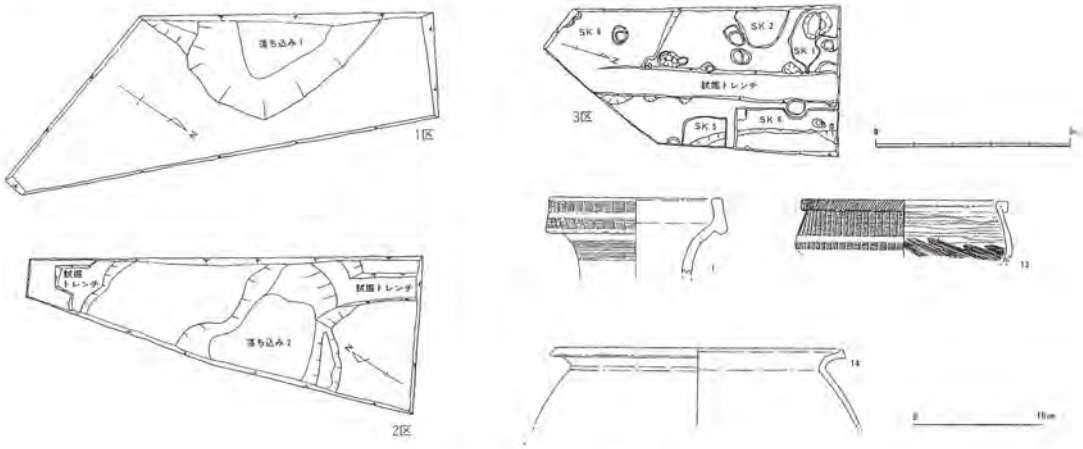


写真８　現地見学会

5．既往の調査（第57図）

柏原遺跡では、1995年度に道路改良工事に伴い橋本市遺跡調査会によって調査が実施されている。調査は、今回調査の３区と４区の間を南北に通る道路の拡幅部分に３箇所の調査区を設定して行われ、弥生時代及び中世の遺構と遺物が見つかっている。

＊『柏原遺跡発掘調査概報』橋本市遺跡調査会1996年



第57図　既往の調査

第２節　層序と遺構面（第58図）

１．５区

橋脚部分では水田の区画により一段低くなる南半部は、５－2区では床土直下が地山であるのに対し、５－1区には第３層が約20cmの厚さで堆積している。第３層は中世の遺物包含層で、弥生土器や中世の遺物が極少量出土している。遺構検出面は第３層掘削後の地山面である。

一方、側道部分（第55図５－③）の包含層は第３層と第４層の２層に分けられる。第３層は調査区全体に認められ、弥生土器や中世の遺物が少量出土する。第４層は調査区の中央部には無く東西部分に堆積し、弥生土器のみが出土している。遺構面は、重機にて第１・２層の掘削排土を行った後の第３層上面と第３層掘削後の２面である。第４層掘削後にも検出作業を行ったが遺構は遺存していなかった。

２．１・６区

１区：５区同様に水田の区画により南北で高低があり、現地表面では0.6～0.9mの比高差がある。第１層は表土及び耕作土、第２層は床土である。第３層は中世の遺物包含層で、弥生土器及び中世の遺物が出土している。第３層は調査区のほぼ全域に拡がり、南に向かうに従って厚くなる。第４層は当初弥生時代の包含層と考えていたが、調査の結果、７世紀代の遺物も含まれている事を確認した。第４層は調査区の全域ではなく主に南半部に認められるが、調査区西半の１段下がった範囲には遺存していない。また、場所により、その厚さは一定していない。遺構面は、重機にて第１・２層の掘削排土を行った後の第３層上面－第１遺構面、第３層掘削後の第２遺構面、第４層掘削後の地山面で検出した第３遺構面の３面がある。

６区：第３層は調査区全体に、第４層は６－2区の東側約1/3の範囲と６－1区にみられる。また、６－1区には、６－2区との境界である南端部及び東端部に整地層と考えられる礫層がある。礫層からは主として近世の陶磁器や瓦が出土する。第３層からは弥生土器・須恵器・土師器・瓦器等が出土している。この内、量が最も多いのは弥生土器である。第４層からの出土遺物は弥生土器と石器・剥片のみである。遺構の検出は、第１・２層の掘削を行った後の第３層上面、第３層掘削後の第４層上面及び地山面、第４層掘削後の地山面である。これらは、各々１区の第１～第３遺構面に相当する。

３．２・７区

包含層は概ね北東方向に向かうに従って削平の為に薄くなり、床土或いは旧の耕作土及び床土直下が地山面となる。第３層の上面までは基本的に機械により掘削排土を行い、以下は人力によ

って掘削した。但し、進入路部第２回拡張範囲（第55図７－③）では、包含層の極一部を除き機械によって掘削を行った。第３層は７－1区の一部を除きほぼ全域にみられ、中世の遺物と共に弥生土器や飛鳥時代の須恵器が出土する。第４層は７区の東部と南端部には遺存していない。出土遺物の内容は第３層とほぼ同じであるが、中世の遺物が占める割合は少なく全く含まれていない範囲もある。第４層とした層は地区によっては２層に分層が可能で、或いはこの内の下層の一部は次の第５層として取上げるべきであったかもしれない。第５層は主に２区及び７－1区と７－2区の西半部に堆積し弥生時代と飛鳥時代の遺物が出土する。遺構の検出は、第３層以下の各層の掘削後に行ったが、遺構が検出できたのは第４層掘削後の第５層上面と地山面である。

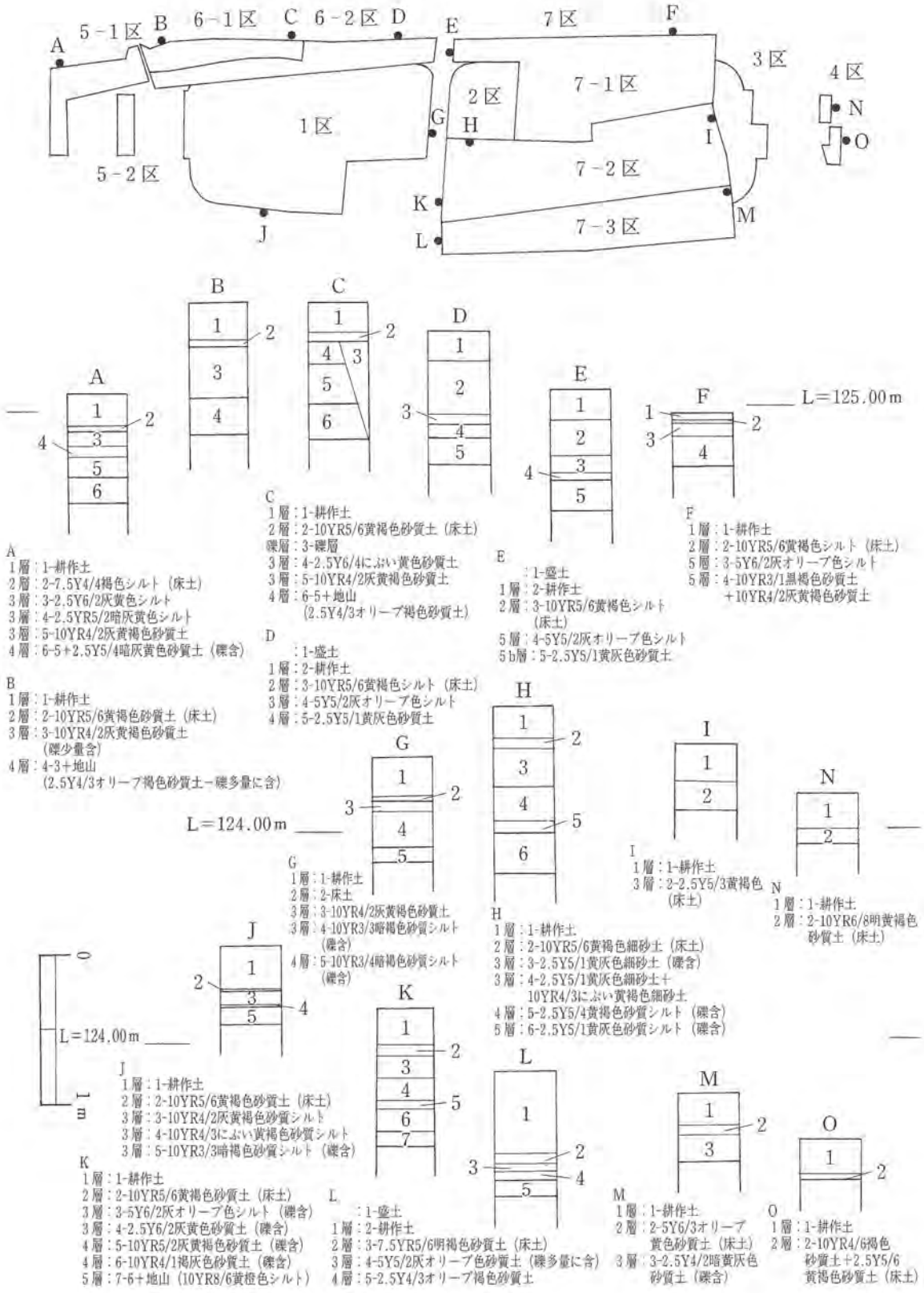
第３次調査範囲（第55図７－⑥）では基本的には第５層の１層のみであるが、調査区西端部にのみ第5b層が認められる。第５層からは、弥生土器を中心として少量の須恵器や土師器皿の他極少数ではあるが瓦器椀も出土している。第5b層からは弥生土器のみが出土する。出土遺物の内容から、第５層は６区の第３層に、第5b層は同じく第４層に相当するものである。遺構の検出は地山面で行ったが、第5b層のある範囲ではその上面においてもこれを実施している。

４．３区

３区は試掘結果では表土直下が地山面とされていたが、最も厚い部分で20㎝前後の包含層が遺存していた。包含層からは、弥生土器、中世の瓦器・土師器の他、７世紀から８世紀にかけての須恵器が他の区に較べ比較的大きな割合で出土しているが、遺物量はそれほど多くは無い。遺構の検出は、この包含層を掘削した地山面で行った。

５．４区

北側調査区の床土の下には礫層が存在するものの遺物が全く含まれていないことから、この層の上面で遺構の検出を行った。南側調査区の南半部には黄色系の砂質土（砂層）が堆積し、南に向かって落ち込んでいる。調査区の東辺に沿って掘削した側溝部分からは遺物は全く出土しておらず、自然の堆積層と考えられた。従って遺構検出はその上面で行った。



第58図　柏原遺跡土層柱状図

第３節　遺構と遺物

１．はじめに（第59・60図）

今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓と近世の土坑が多数検出されている。はじめに本書で使用するこれらの遺構の各呼称と数値の計測方法を記しておきたい。

・方形周溝墓（第59図）

「規模」は、後世の削平の度合いによって規模が変わる影響を避けるために、相対する周溝中央部の距離を計測した。「面積」はこの数値を基にしている。

「墳丘」の規模は、周溝の墳丘側立ち上がり地点から反対側の同地点までを計測する。

「周溝」の幅は、検出した数値とし、最小値と最大値を計測した。深さは断面図の最大値としている。

・近世土坑（第60図）

この土坑の多くは平面形が円形を呈する埋桶で、床面に粘質土（粘土）を貼り、桶等の裏込めに床と同質の粘質土を用いたものである。これらを「貼床」・「貼壁」と呼称し、その厚さを計測した。「規模」は貼壁の内側、「深さ」は貼床上面から検出面までを計測している。（表９に対応）

５区・６区・１区で計46基を検出しているが、貼壁と貼床の有無を基にＡ～Ｃの３タイプに大別した後、規模や貼壁・貼床の有無で細別し、計10タイプに分類した。規模による分類は、直径が100cm以上と未満のもので区分し、100cm以上はローマ字の大文字（Ａ・Ｂ・Ｃ）で、未満のものは小文字（ａ・ｂ・ｃ）で表記する。

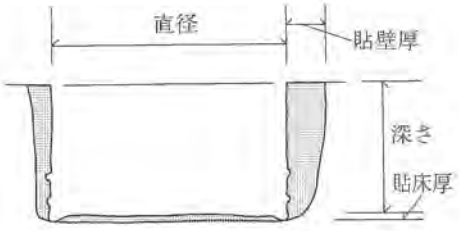
Ａタイプ：貼壁・貼床があるもの。壁面にタガ条の凹み（以下、「タガ」と記す）が廻るものをA1・a1タイプ、タガの廻らないものをA2・a2タイプに細分する。

Ｂタイプ：貼壁か貼床のどちらか一方を有するもの。貼壁のみ有するものをB1・b1タイプ、貼床のみのものをB2・b2タイプとする。

Ｃタイプ：貼壁及び貼床ともに確認できないが、埋土中に黄色系の粘質土や焼土・溶解炉片が含まれるもの。C及びcタイプに細分する。



第59図　方形周溝墓規模計測凡例

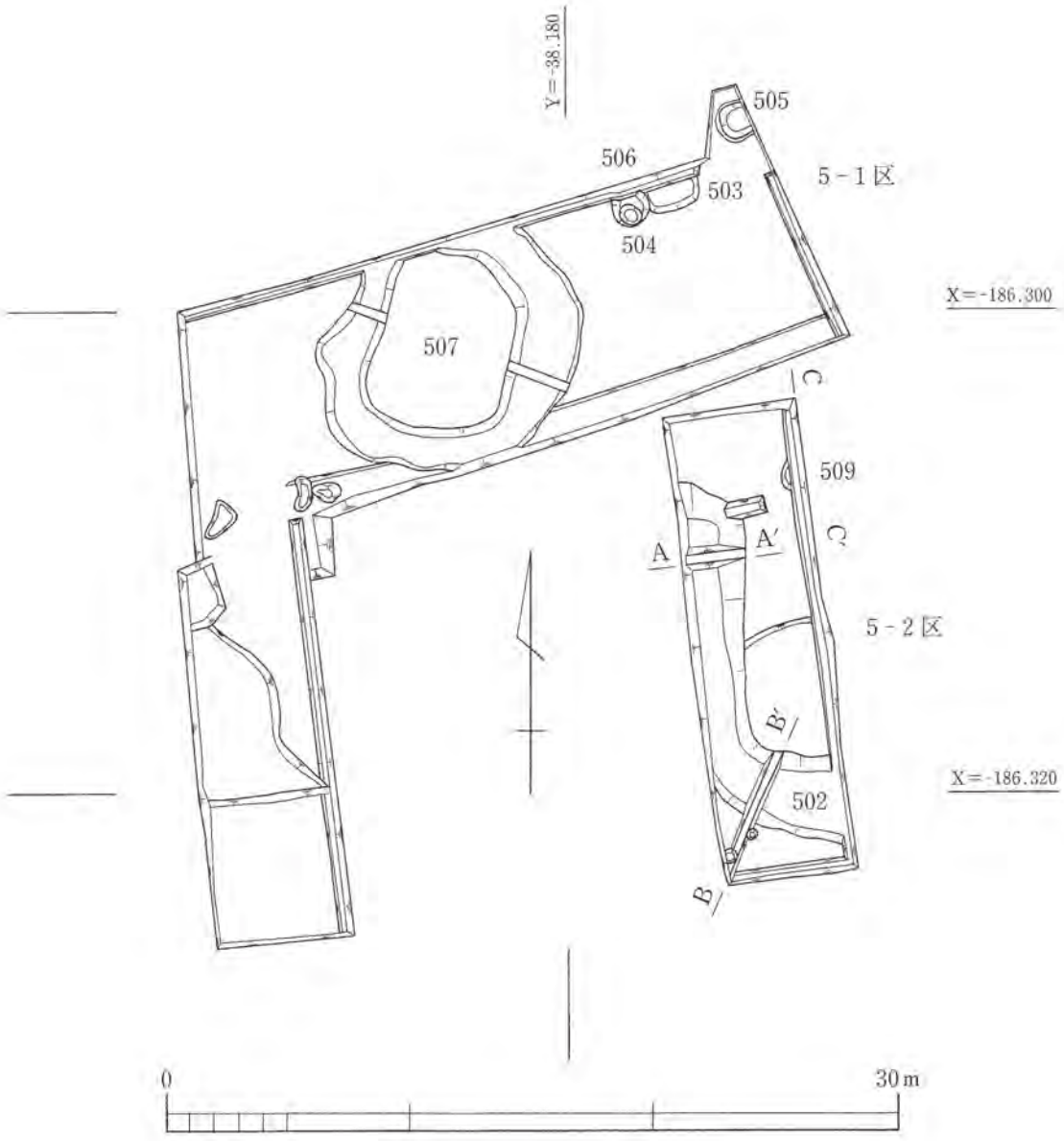


第60図　近世土坑規模計測凡例

2．5区の調査（第61図、PL.26・27）

もっとも西側の調査区で、側道部と橋脚部に相当する。調査は第2次と第3次でおこなっている。調査前の現状は、北から南に下がる棚田状の水田で、南北に3区画に分かれていた。北と南の比高差は約60cmを測る。

検出した遺構には、弥生時代の方形周溝墓2基（502・507）、近世末頃の土坑（503～506）がある。近世の土坑は全て調査区の北東部に集中している。調査区の南西部では遺構が検出できず、西に向かって下る自然の落ち込みを確認したのみである。



第61図　5区遺構配置図

包含層出土遺物（第62図、PL.73）

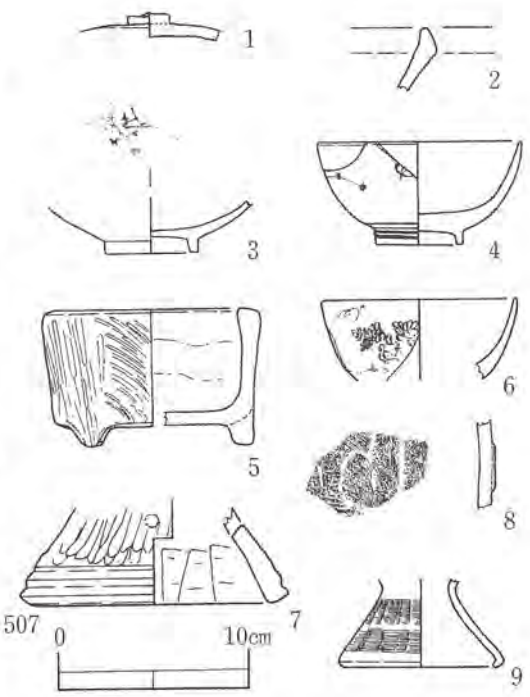
弥生土器、古墳時代から飛鳥時代の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器、中世の土師器・瓦器・東播系須恵器などが出土している。

1は奈良時代の須恵器杯蓋で、天井部に宝珠様のつまみを付す。2は東播系須恵器の捏鉢で、口縁部を上方に拡張する。

503土坑（第62図、PL.73）

北側が調査区域外となり、全容不明である。506土坑と重複し、それより古い。平面形状は隅丸方形もしくは隅丸の長方形を呈すると考えられ、規模は長さ2.3m、幅1.3m以上、深さ25cmを測る。

遺物は近世陶磁器や瓦が出土している。4は肥前系染付の碗である。器壁は厚く、見込み部は蛇の目釉剝ぎとなっている。



1・2：第3層、3：504土坑、4：503土坑、5・6：505土坑、8・9：502方形周溝墓、7：507方形周溝墓

第62図　5区出土遺物実測図

504土坑（第62・63図、PL.73）

506土坑と重なって検出した埋桶遺構で、当土坑の方が新しい。掘形の形状は楕円形で、長さ88cm、幅70cm、深さ40cmを測る。桶の痕跡は65cm×58cmで楕円形となっており、タガの跡が2条確認できた。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ4cmで灰白色粘質土を貼り、桶を中央に置いた後に淡黄色粘質土で周囲を埋め戻している。周囲に意図的に粘質土を用いている状況から桶の中には液体を入れた可能性がある。

遺物は近世陶磁器や瓦のほか、混入遺物として中世の土師器が出土している。3は肥前系京焼風陶器の碗で、釉は貫入が生じており、高台部は露胎である。

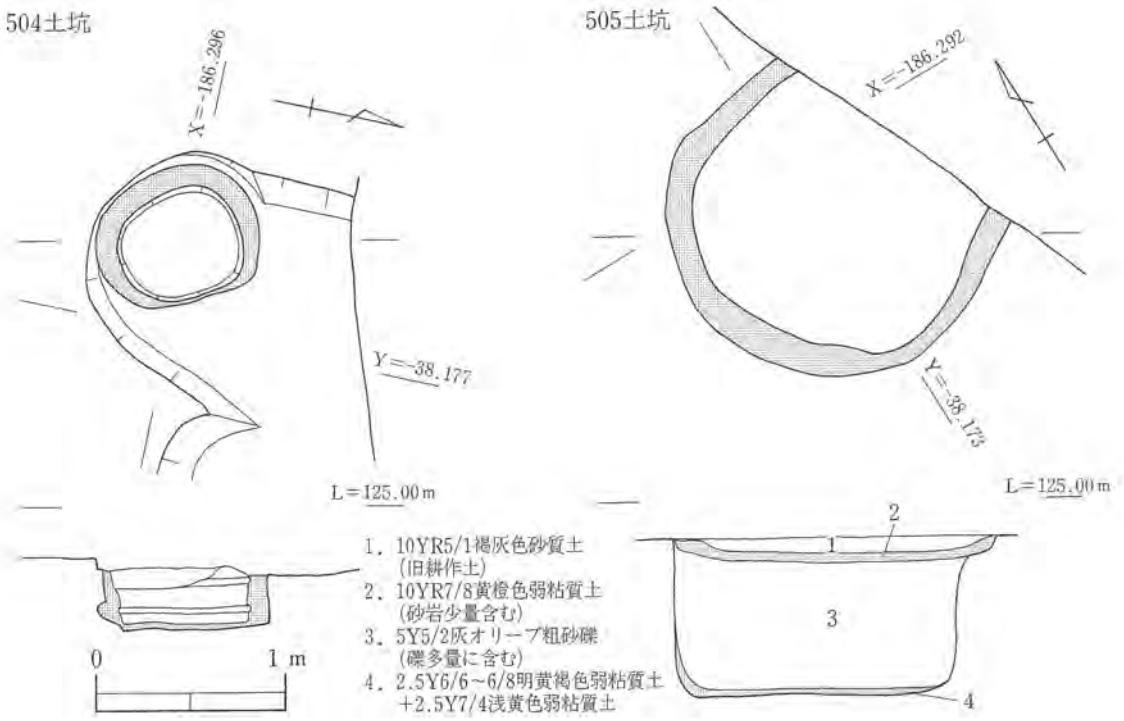
505土坑（第62・63図、PL.73）

北東隅で検出した土坑で、東側が調査区域外となり全容不明である。平面形状は円形を呈し、直径1.5m、深さ80cmを測る。底は平坦で壁が直に立ち上がる状況からも、埋桶遺構の可能性が高いが、桶の痕跡は確認することができず、抜き取っているものと考えられる。

遺物は近世陶磁器や瓦が多く出土しているほか、混入遺物として中世の土師器や瓦器の破片がある。5は瓦質土器の火舎で、器形は円筒形を呈し、底部に3足が付く。外面をミガキ調整している。6は肥前系染付の碗で、外面には花文を描く。

506土坑

504土坑と重複し、北側は調査区域外となる。平面形状はほぼ円形を呈し、直径1.7m、深さ45cm



第63図　504・505土坑実測図

を測る。遺物は出土していない。

502方形周溝墓・509土坑（第62・64図、PL.27・73）

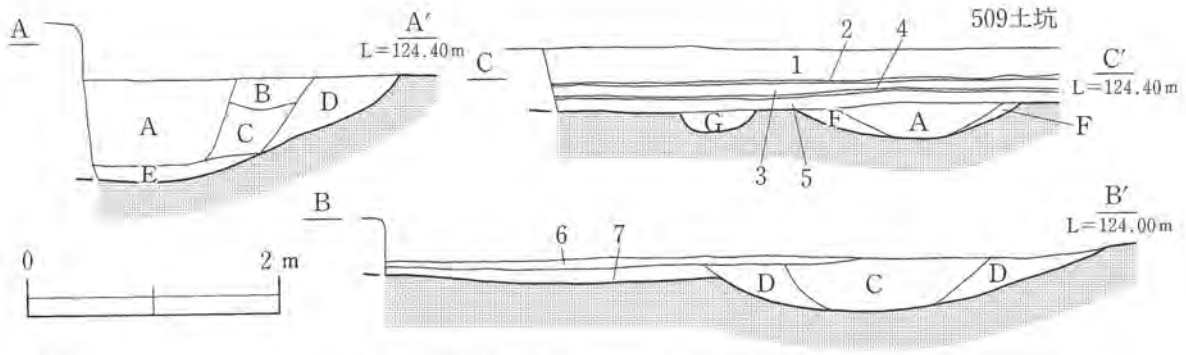
調査区南側で検出した方形周溝墓である。墳丘部と周溝部の西側を検出したのみで、全容は明らかでない。規模は南北13.9m、東西は4.9m以上である。周溝は幅2.8~3.7mで、深さは最も深い部分で50cmを測る。周溝の埋土中には礫が多量に含まれている。東の壁際で一部確認した509土坑の埋土が周溝の埋土と同じであり、これを、北辺の溝と考えた場合、墳丘部の規模が11m前後で北西隅を陸橋部とする方形周溝墓の可能性が考えられる。

遺物は弥生時代中期の土器（8・9）が少量出土している。8は壺で体部外面に貼付け浮文がある。9は脚台部で、「ハ」の字に開く端部を内側に拡張する。外面に簾状文を二条巡らす。

507方形周溝墓（第62・65図、PL.26・73）

調査区北側にある方形周溝墓で、墳丘部はやや長方形を呈し、南北9.3m×東西7.7mで、深さは30~60cmである。今回の調査で検出した方形周溝墓のうちで最も規模が小さい。周溝は幅1.3~2.8mで深さは20~30cmである。一部調査区外となる北西隅が陸橋部となる可能性もある。

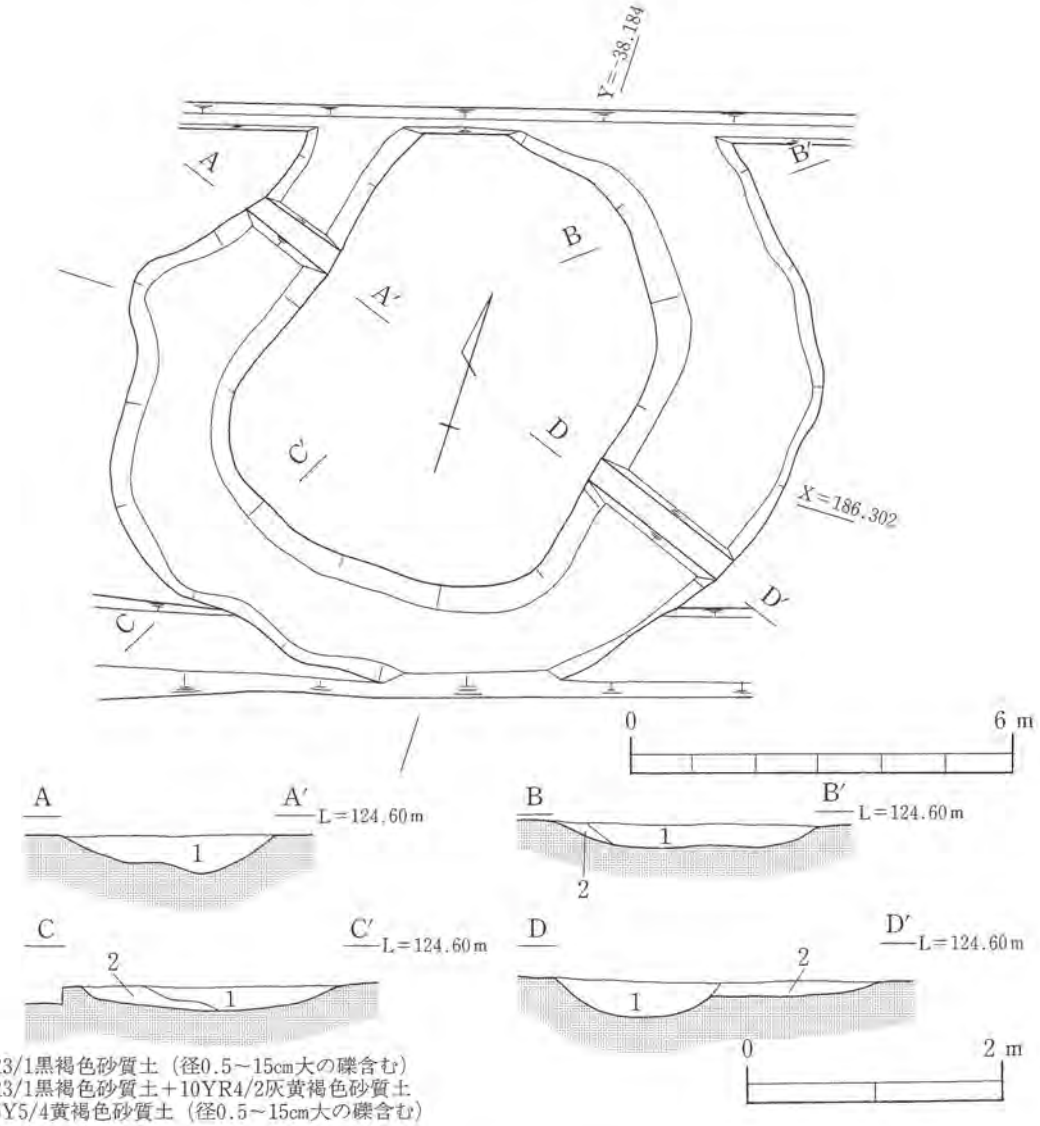
遺物は周溝から弥生土器（7）が少量出土する。7は紀伊Ⅳ－1様式の台付鉢の裾部で、裾端部付近に凹線文を2条巡らしている。台の外面をミガキ調整し、小孔をあけ、内面をケズリ調整する。



1．耕作土
2．床土：10YR5/6黄褐色砂質土（鉄分含む）
3．旧耕作土：5Y5/2灰オリーブ色砂質土
4．旧床土：2.5Y5/6黄褐色砂質土（鉄分含む）
5．2.5Y4/2暗灰黄色砂質土（礫含む）
6．2.5Y5/3黄褐色砂質土
7．10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（礫含む）

A．10YR3/2黒褐色砂質土（礫多量に含む）
B．10YR3/1黒褐色砂質土（礫多量に含む）
C．10YR3/2黒褐色砂質土（礫含む）
D．10YR3/3暗褐色砂質土（やや粘質）
E．10YR3/3暗褐色砂質土
F．10YR4/2灰黄褐色砂質土
G．5Y5/3灰オリーブ色砂質土

第64図　502方形周溝墓・509土坑土層図



1．10YR3/1黒褐色砂質土（径0.5～15cm大の礫含む）
2．10YR3/1黒褐色砂質土＋10YR4/2灰黄褐色砂質土
　＋2.5Y5/4黄褐色砂質土（径0.5～15cm大の礫含む）

第65図　507方形周溝墓実測図

3．1・6区の調査（第74・96図、巻頭図版6、PL.28・32～34）

第1次から第3次の3箇年で調査をおこなっており、さらに各年度の調査区もいくつかに分断されるが、一面で繋がっていることから同時に記述する。

遺構面は3面あり、第1遺構面が床土下の3層上面で、第2遺構面が4層上面、第3遺構面が4層下の地山直上となる。

遺物は遺構や床土・包含層などから縄文時代～中・近世にかけての遺物が多量に出土しており、なかでも弥生時代中期と中世前半の遺物が突出する。また、近世の鋳造関係の遺物が目立つのも特徴である。

礫層・第2～4層出土遺物（第66～68・97図、PL.73～77・98）

6－1区礫層（第58図柱状土層図Cに対応）　10は肥前系染付で、外面の圏線間に一重網目文を施す。全釉であるが、畳付は釉を削り取り露胎となる。11は唐津焼天目茶碗で、底部付近は露胎である。釉には細かい貫入が生じる。12は中国製染付の芙蓉手稜花皿で、口縁部は外反する。器壁は薄く、全釉であるが、畳付は釉を削り取り露胎となる。内面見込みには扇などの文様を、体部円窓には葉文や花文を配している。13～15は鋳造に係わる遺物である。13・14は鍋の鋳型で、内面には真土が残る。15は鋳造用具のジョウで、鋳込みの際、逆さまにした鍋などの鋳型を受けて固定するものである。原形はドーナッツ状、あるいは弧状を呈していたと考えられる。胎土には籾殻が多く含まれる。

6－2区第2層　16・17は弥生土器で、中期に帰属する。16は大型の細頸壺で、内湾する口縁部の外面に凹線文を6条巡らし、端部下に円形浮文を貼付する。17は甕で、口縁部はほぼ横方向に強く屈曲し、端部を丸く収めている。体部外面には縦方向のヘラミガキ調整を施す。18は奈良時代の須恵器杯蓋で、天井部には扁平な宝珠様のつまみを付す。口縁端部はやや下方に拡張する。19は6世紀代の甑で、体部中位に凹線文を2条引き、その間に櫛描列点文を施す。

6－2区第3層　20は土師器の蓋で、宝珠様のつまみを付し、周囲に直径約1.5cmの円穴を2箇所以上穿つ。軟質陶器の可能性もある。21は土師器甕で、口縁部は「く」の字に屈曲し、端部はわずかに上下に拡張する。体部外面はハケ調整である。20・21ともに古代の遺物である。

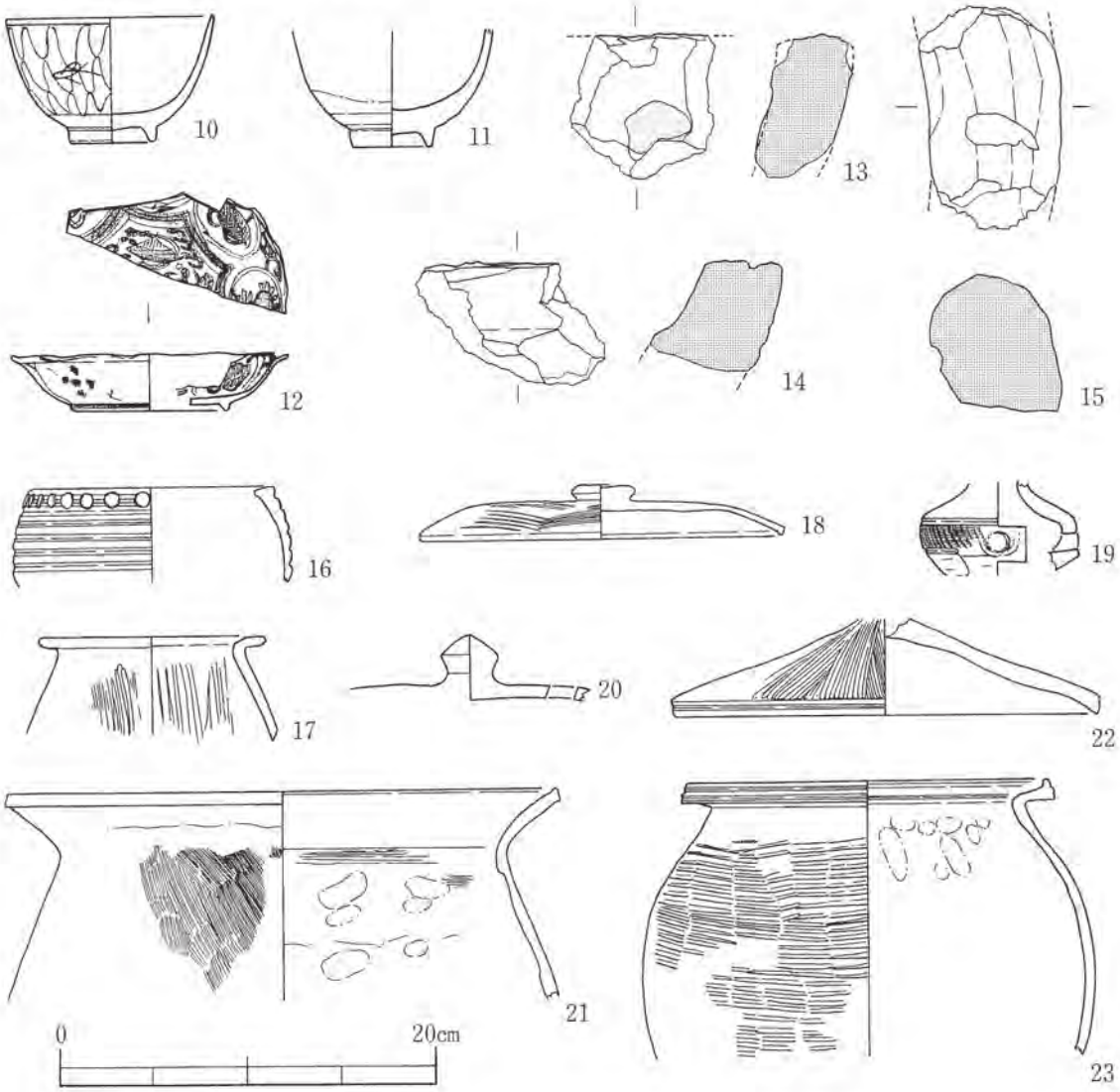
6－1・2区第4層　22・23は弥生時代中期の土器である。22は蓋で、口縁端部外面には1条の凹線文を巡らす。外面は丁寧なヘラミガキ調整である。23は甕で、口縁部は短く、ほぼ横方向に屈曲する。口縁端部は上方に拡張し、外面には2条の凹線文を巡らす。体部外面は横方向の平行タタキ調整である。

1区第3層　24～29は瓦器椀で、平安時代末の12世紀代に帰属する遺物である。口径は14.0～15.6cmで、器高は4.4～5.5cmを測る。摩滅により、ミガキ等の調整は不鮮明である。このうち26・28は半円形を呈し、口縁端部内面に沈線を巡らしており、大和型瓦器椀に近い形態であ

る。26・28とも高台の断面は三角形である。24は器壁が薄く、断面三角形の低い高台を付す。見込み部には格子状の暗文を施す。25は断面台形の高台を付し、見込み部の暗文はループ状である。27は器壁が薄く、断面台形の高台を付す。体部外面の指押さえが顕著である。29は器壁が薄く、低い断面三角形の高台を、底部中央より偏った位置に付す。

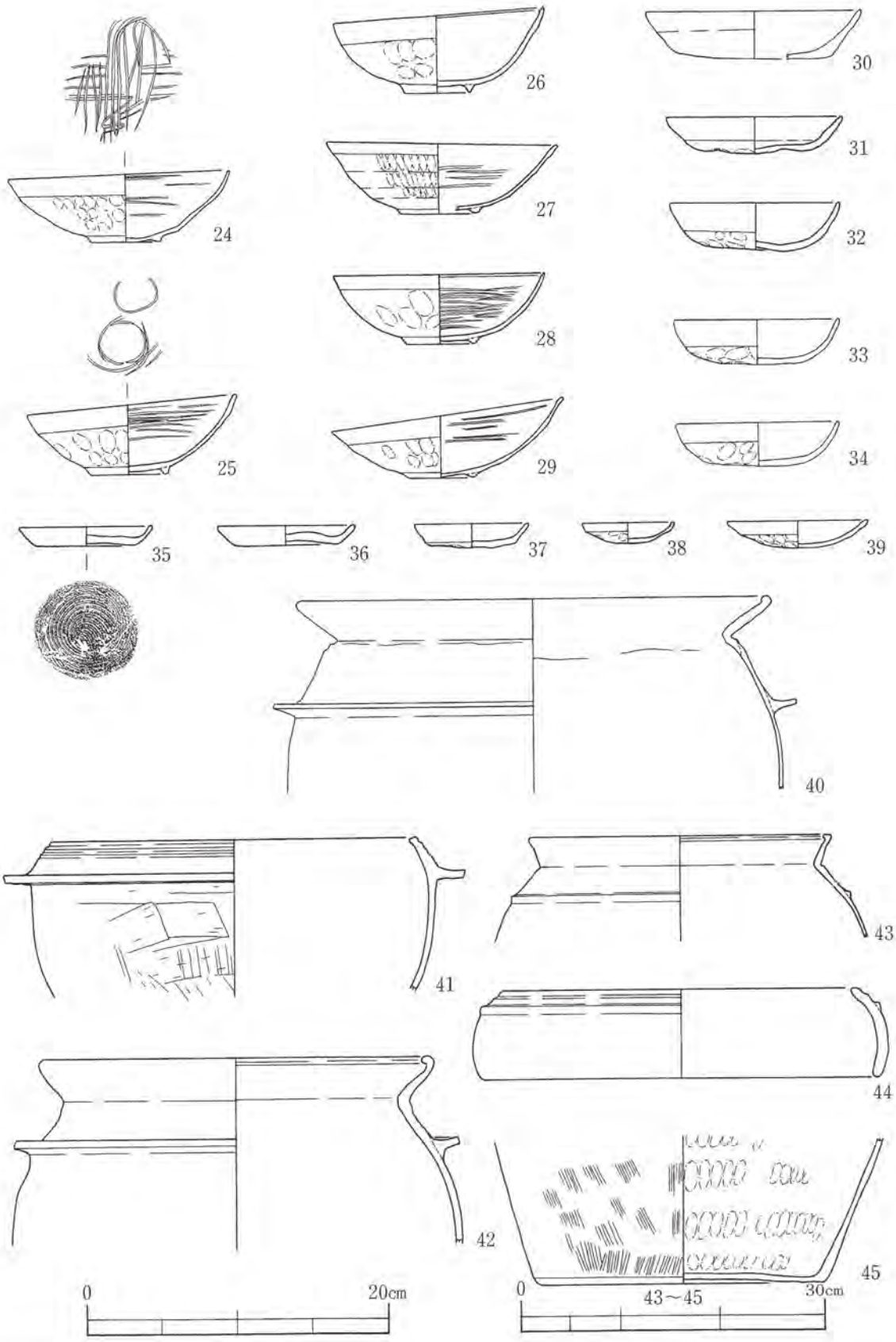
30～34は土師器皿である。30は底部が平坦で、体部・口縁部が斜め方向に立ち上がる。31は底部が指押さえ後ナデ調整で、凸凹が激しい。32～34は、口径が11cm前後、器高が3cm余りの同じタイプの皿である。底部は指押さえ調整で、やや丸みを帯びる。

35～38は土師器小皿である。このうち35・36は底部が回転糸切り調整で、体部・口縁部は短い。37は底部が指押さえ調整である。38は底部が丸く、指押さえ調整である。



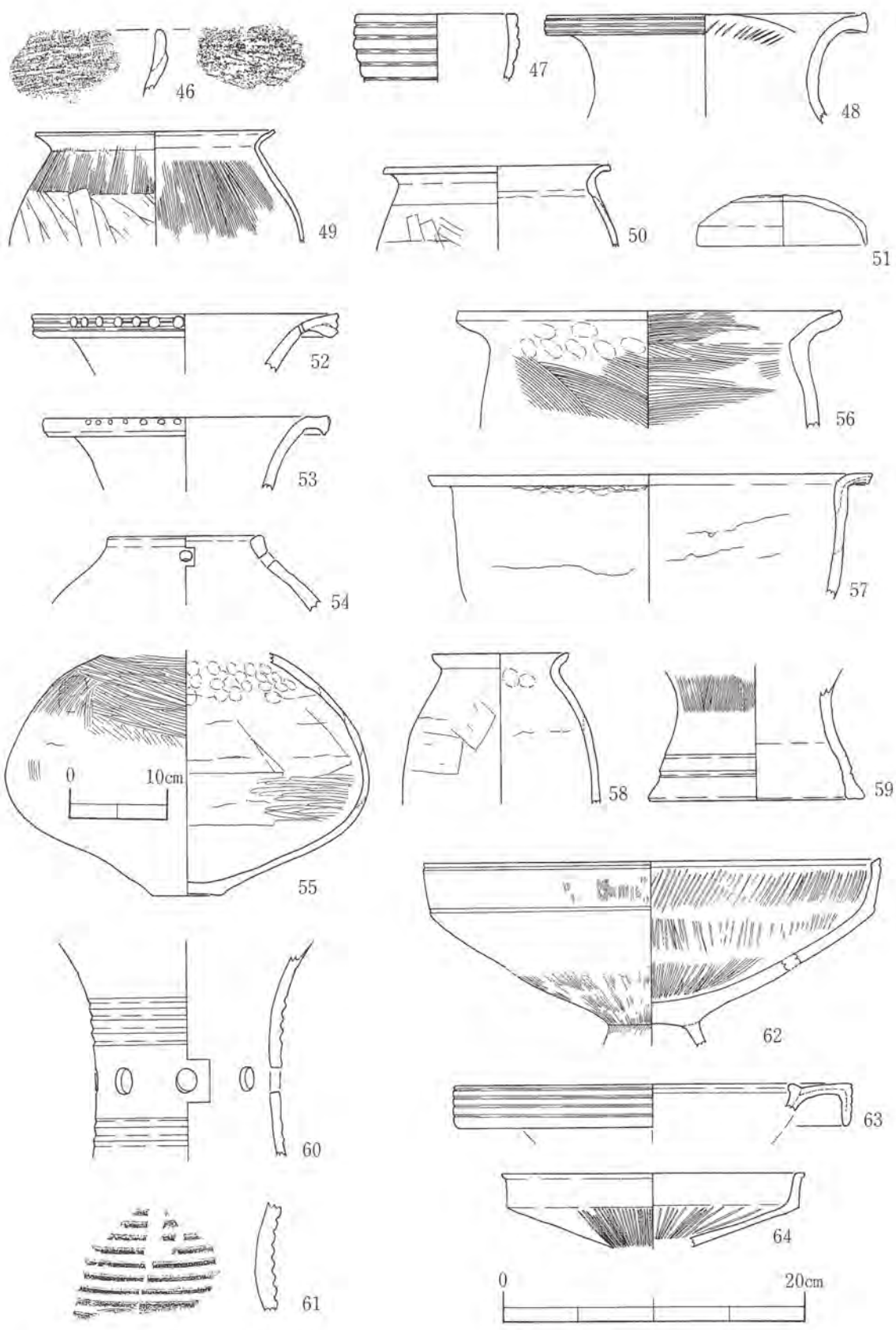
10～15：6-1区礫層、16～19：6-2区第2層、20・21：6-2区第3層、22：6-2区第4層、23：6-1区第4層

第66図　6区礫層・第2～4層出土遺物実測図



24～45：第３層

第67図　１区第３層出土遺物実測図



46～51：第3層、52～64：第4層

第68図　1区第3・4層出土遺物実測図

39は瓦器椀の最終段階の形態で、14世紀第2四半期に帰属するものと考えられる。口径は小さく、浅い皿形で高台を付していない。

40・42・43は土師器羽釜である。口縁部は「く」の字に屈曲し、口縁端部を内側あるいは斜め上方へ拡張する。40・42は体部上位に巡らす鍔が横方向に長く伸びる。これらは、24～29の瓦器に伴う時期のものであると考えられる。43は体部上位に断面三角形の高台を付す。13世紀後半頃の遺物である。

41・44・45は瓦質土器である。41は河内・和泉型の釜で、口縁部は内傾し、外面に数条の段を巡らす。口縁部下には横方向に開く鍔を付す。体部外面はヘラケズリ、内面はハケ調整である。

44は胴の張る筒状の用具で、内傾する口縁部の外面に低い突帯を巡らしている。煮炊きに使う用具で、組み合わせて使用するものと推定される。45は火鉢で、外面をタタキの後にナデ調整している。

46は縄文時代後期の深鉢で、外面を貝殻の腹縁で調整する。

47～50は弥生時代中期の土器である。47は細頸壺で、内湾する口縁部の外面に5条の凹線文を巡らす。口縁端部は上方に面をもつ。48は広口壺で、外反する口縁の端部が肥厚し、外面には3条の細い凹線文を巡らす。口縁部の内面にはヘラ先で連続する斜線文を刻む。49は器壁が薄く、口縁部は「く」の字に屈曲する。内面と外面体部上位はタテ方向のハケ調整、体部の中位以下はヘラケズリ調整を施す。50は口縁部が「く」の字に屈曲する。端部はわずかに上下に肥厚し、外方に面を有する。体部外面にはヘラケズリ調整を施す。

51は須恵器杯蓋で、II型式6段階のものである。

I区第4層　52～55、57～64は弥生土器である。52・53は中期の広口壺である。52は外反する口縁の端部に粘土を付加して拡張する。端部外面には2条の凹線文を巡らし、その上に円形浮文を貼付する。口縁部には2個一対の紐穴を穿つ。53は外反する口縁部が端部近くで水平方向に開く。口縁端部はわずかに下方に垂下させ、外面に円形浮文を貼付する。器台の可能性もある。54は中期の無頸壺で、内傾するする体部をわずかに上方へ持ち上げて口縁端部としている。端部下には円穴を穿つ。55は壺で、体部中位が広がることから扁平な器形となっている。外面は丁寧なヘラミガキ調整である。57・58は甕で、このうち57は口縁部が強く外反し、端部は外方に面をもつ。58は外反する口縁の端部を丸く収める。体部は縦長で、外面はヘラケズリ調整を施す。59は中期の脚台部で、裾部には2条の凹線文を巡らす。裾端部は内外に肥厚し、下方に面をもつ。60・61は中期の器台で、このうち60は中位に直径約2cmの円穴を一列7箇所にあけ、その上下に凹線文を巡らす。61は凹線文を連続して8条以上巡らす。62～64は高杯で、このうち62・63が中期、64が後期に帰属すると考えられる。62は脚部がラッパ状に開くタイプで、屈曲して上方へ伸びる口縁部の上下に凹線文を一条ずつ巡らしている。内面はヘラミガキ、外面はハケ調整である。63

は水平口縁で、垂下した口縁外面に凹線文を4条巡らしている。64は屈曲して直立する口縁の端部を外方に拡張する。内外面にヘラミガキ調整を施す。

56は古代の土師器甕で、混入品と考えられる。器壁は厚く、体部の内外面はハケ調整である。

S2～S4は石包丁で、このうちS4は未製品である。すべて欠損している。

第1遺構面検出の遺構と遺物（第74図、巻頭図版6、PL.28）

第1遺構面で検出した遺構には、溝状遺構（20溝）、石組遺構のほか、多数のピット・土坑がある。これらは調査区の北西－南東方向の幅約30mの範囲で集中しており、調査区の北東側および南西側では遺構は検出できない。土坑の規模は、直径1.0～1.5m前後のものが最も多いが、小さいものでは40cm前後のものも見受けられる。深さは様々であるが最も残りの良いもので70～80cm前後遺存している。土坑の中には床面が焼けて赤褐色を呈するものもある。第3遺構面で検出した遺構の帰属時期は、18世紀後半～19世紀前半頃で、調査区付近が水田となるのは、おおよそ近代になってからであると考えられる。

1土坑（PL.29）

調査区の北西部で検出した土坑で、2土坑の西側に接する。平面形状はほぼ円形を呈し、規模は直径約1.15mで、深さは28cmを測る。底はほぼ平坦であるが、底面北側が一段深く10cmあまり下がっている。埋土の中には2～4cm大の礫が多量に混入していた。

混入遺物として弥生土器片が出土している。

2土坑（第73図、PL.29・78）

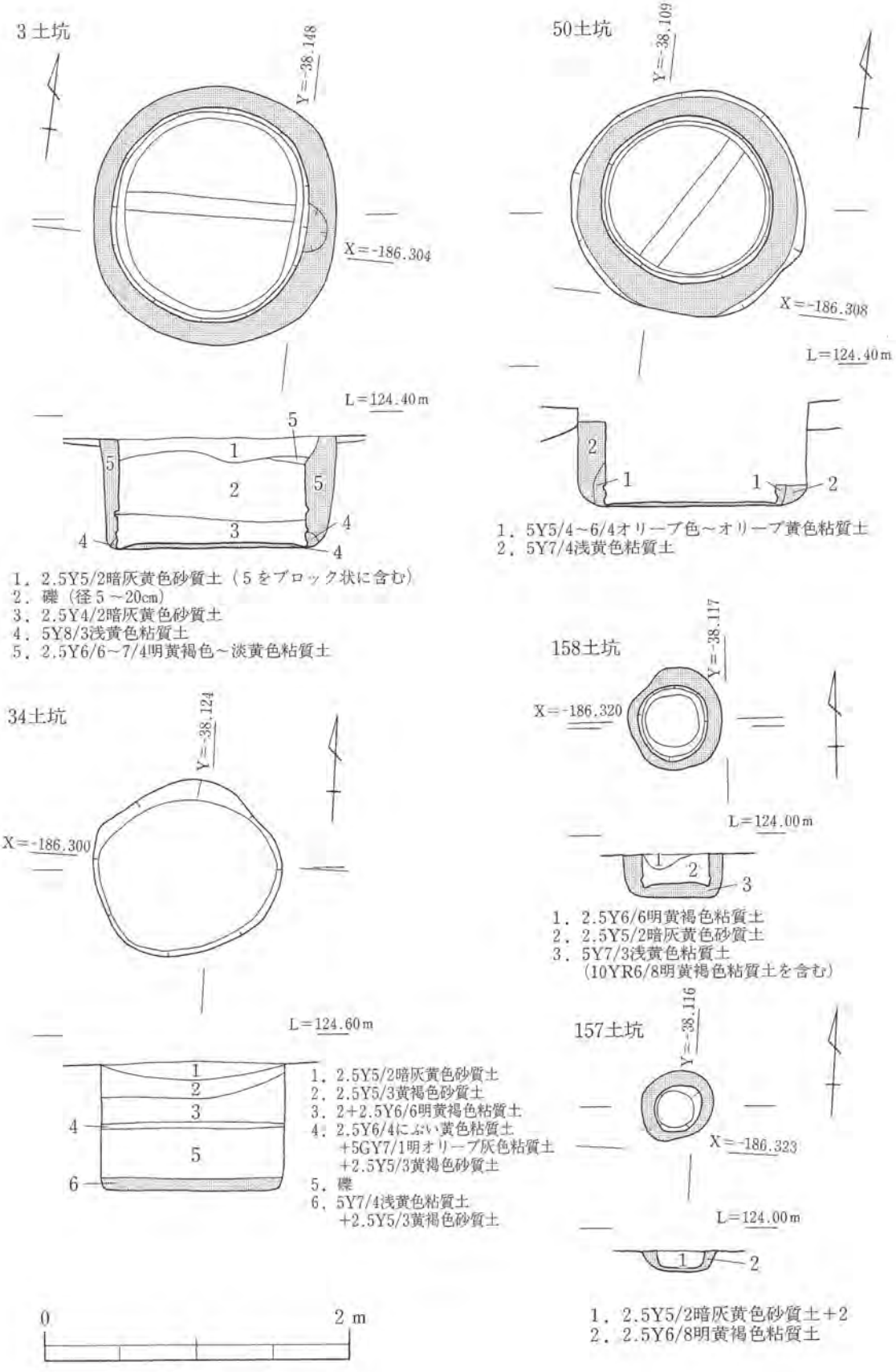
1土坑の東側で検出した。平面形状はほぼ円形を呈し、直径約1.0mで、深さは56cmを測る。断面形状は擂鉢状で、底面には黄褐色の粘質土を貼る。埋土の底付近には20cm前後の礫が集中していた。

遺物は近世の瓦のほか、鋳造関係の遺物で、鋳型を乾燥する際に使用する三叉状土製品（93）が出土している。

3土坑（第69・72図、PL.29・77・78）

調査区西端で検出した埋桶遺構である。掘形の平面形状はやや南北に長い楕円形で、規模は1.72m×1.60mで、深さは74cmを測る。桶は痕跡から直径約1.2mである。タガの痕が2条と底に側板の圧痕が確認できる。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ4cm程度で浅黄色粘質土を敷き、桶を中央に置いた後に明黄褐色・淡黄色粘質土で周囲を埋め戻している。桶内の埋土には5～10cm大の礫が多量に混入していた。

遺物は近世瓦、陶磁器、瓦質土器などが多く出土している。65は肥前系染付の鉢で、蛇ノ目凹形高台となる。66～68は瓦質土器で、このうち66は火鉢である。高い高台を付し、外面は丁寧な



第69図　1区近世土坑実測図1

横方向のヘラミガキ調整である。67・68は土釜で、幅広の鍔を巡らしている。内傾する口縁部の外面には、凹線文を4条巡らす。体部外面にはススが付着している。69は土師器小皿で、薄い釉を施す。底部は回転糸切り調整である。70は均整唐草文の軒平瓦で、中心飾りが橘文である。79～84は肥前系染付を直径1.9～2.5cmに丸く割り取った面子で、重さは1.84～4.18gである。

4土坑（第70・72図、PL.30・77）

調査区中央西寄りで検出した埋桶遺構で、5土坑の西側に接する。掘形の平面形状は円形で、規模は直径1.5m、深さ27cmを測る。桶は痕跡から直径1.2mで、タガの痕も1条確認できる。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ5cm前後で黄褐色粘質土を貼り、桶を中央に置いた後に黄色・明黄褐色粘質土で周囲を埋め戻している。桶内の埋土には10～20cm大の礫が多量に混入していた。

遺物は近世の陶磁器や瓦が多く出土している。74は浅い片口をもつ丹波焼擂鉢である。口縁部内面には段が巡る。擂目の櫛の単位は6本で、見込み部の擂目は渦巻状となっている。

5土坑（第70・73図、PL.30・78）

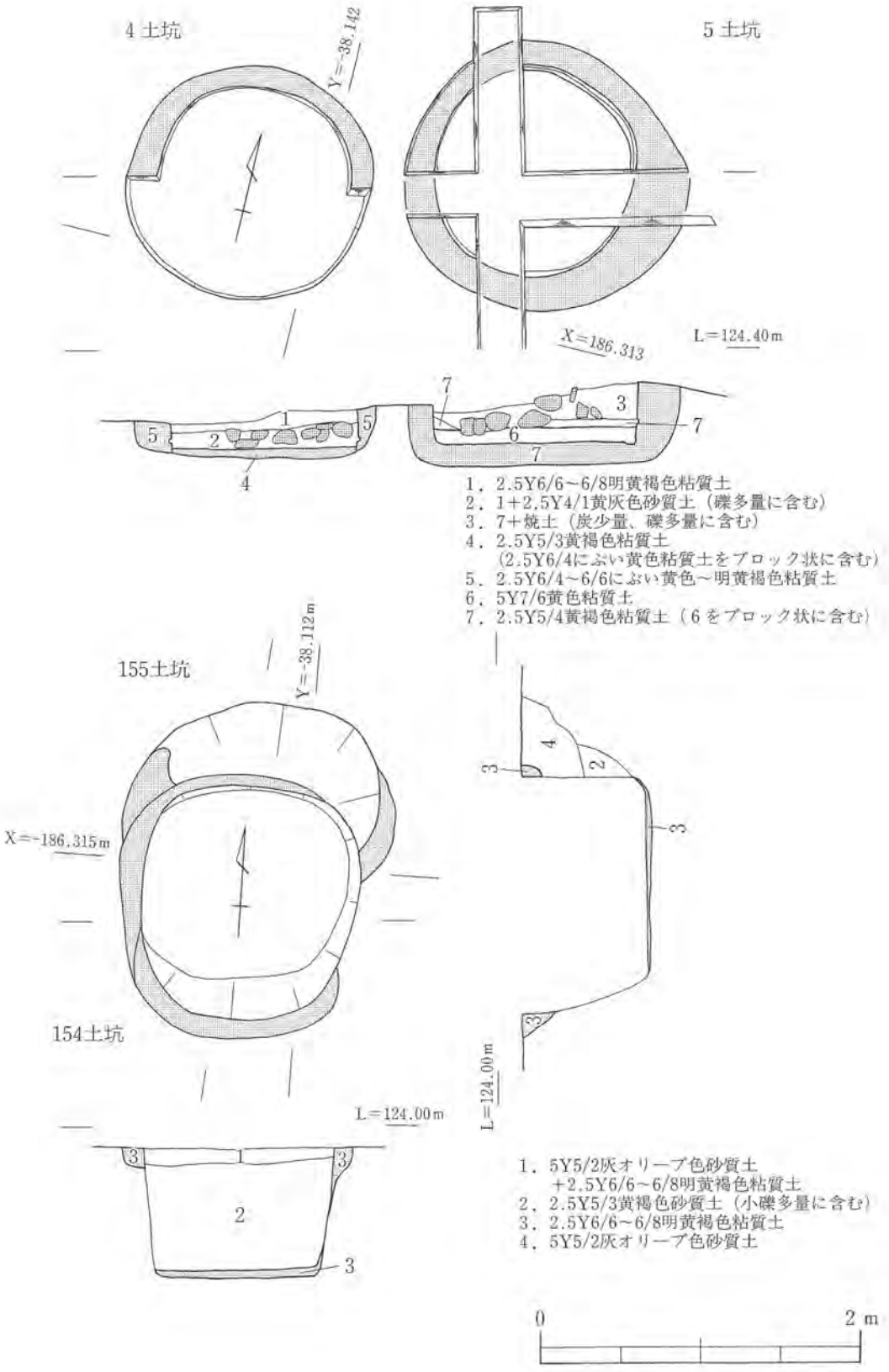
4土坑の東側に接する埋桶遺構である。他の埋桶遺構についても2基一対で存在することが多く、4土坑と5土坑についても対になるものと考えられる。掘形の平面形状はやや東西に長い楕円形を呈し、規模は1.8m×1.7mで、深さは50cmを測る。桶は痕跡から直径約1.28mである。タガの痕が1条と底に側板の圧痕が確認できる。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ14cm程度で黄褐色粘質土を敷き、桶を中央に置いた後に、底と同様な土で桶の周囲を埋め戻している。桶内の埋土には5～20cm大の多量の礫をはじめ、被熱土や溶解炉片が混入する。

遺物は近世の陶磁器が多く出土している。85は丹波焼擂鉢で、口縁部は端部付近で肥厚し、内面に段を有する。擂目の櫛の単位は7本で、見込み部は円内に三方向の擂目がある。同一個体の破片が20溝からも出土している。86は瓦質土器の広口甕で、口縁部はわずかに外反し、端部はわずかに外方に肥厚する。同一個体の破片が55ピットからも出土する。87は肥前系陶器の碗で、高台畳付には砂目痕が4箇所認められる。88は瀬戸・美濃系陶器の天目碗で、底部付近は露胎である。89は土師器小皿である。

29土坑（第72図）

調査区の中央付近で検出した土坑である。平面形状は円形で、規模は直径1.6m、深さ70cmを測る。底は平坦で、壁が直に立ち上がる状況からも、埋桶遺構の可能性もあるが、桶の痕跡もなく、底には厚さ20～30cm程度で明黄褐色・灰オリーブ色の粘質土を貼っていることからも、性格が異なる遺構の可能性も考えられる。埋土には5～20cm大の礫が混入する。

遺物は近世の陶磁器類や瓦が多く出土している。73は唐津焼の刷毛目大皿である。高台は高く、底部付近は露胎である。



第70図　1区近世土坑実測図2

30土坑（第72図、PL.30・78）

調査区の中央付近で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、規模は2.4m×2.1mで、深さは55cmを測る。底が平坦である状況からも埋桶遺構の可能性もあるが、桶の痕跡は確認できない。底には厚さ4cm程度でにぶい黄色・明黄褐色の粘質土を貼っている。埋土には5～10cm大の礫が多量に混入する。

遺物は近世の土師器や陶磁器・瓦などが多く出土している。72は肥前系染付の皿で、口縁部は外反する。見込み部には草花文を、高台内には2条の圏線を描く。75は唐津焼の刷毛目碗で、全釉であるが畳付が露胎となる。

34土坑（第69図）

調査区の中央付近で検出した土坑で、33土坑の南西側に接する。平面形状はほぼ円形で、直径1.25m、深さ85cmを測る。底が平坦で、壁が垂直に立ち上がる状況からも埋桶遺構の可能性もあるが、桶の痕跡は確認できない。底には厚さ8cm程度で浅黄色粘質土と黄褐色砂質土が混じる土を貼っている。埋土には5～10cm大の礫が多量に混入する。埋土はほぼ水平に層位をなし、底近くには厚く礫が詰まっていた。

遺物は近世の陶磁器類や瓦が多く出土している。

39土坑（第71・72図、PL.77）

調査区の中央付近で検出した埋桶遺構で、426土坑・427土坑を切り込み、40土坑の西側に接する。掘形の平面形状はほぼ円形を呈し、規模は直径1.8mで、深さは1.0mを測る。桶は痕跡から直径約1.48mである。タガの痕が2条と底に側板の圧痕が確認できる。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ15cm程度で浅黄色粘質土を敷き、桶を中央に置いた後に、底と同様な土で桶の周囲を埋め戻している。

遺物は近世の陶磁器が多く出土しており、ほかに銭貨・寛永通宝（71）がある。

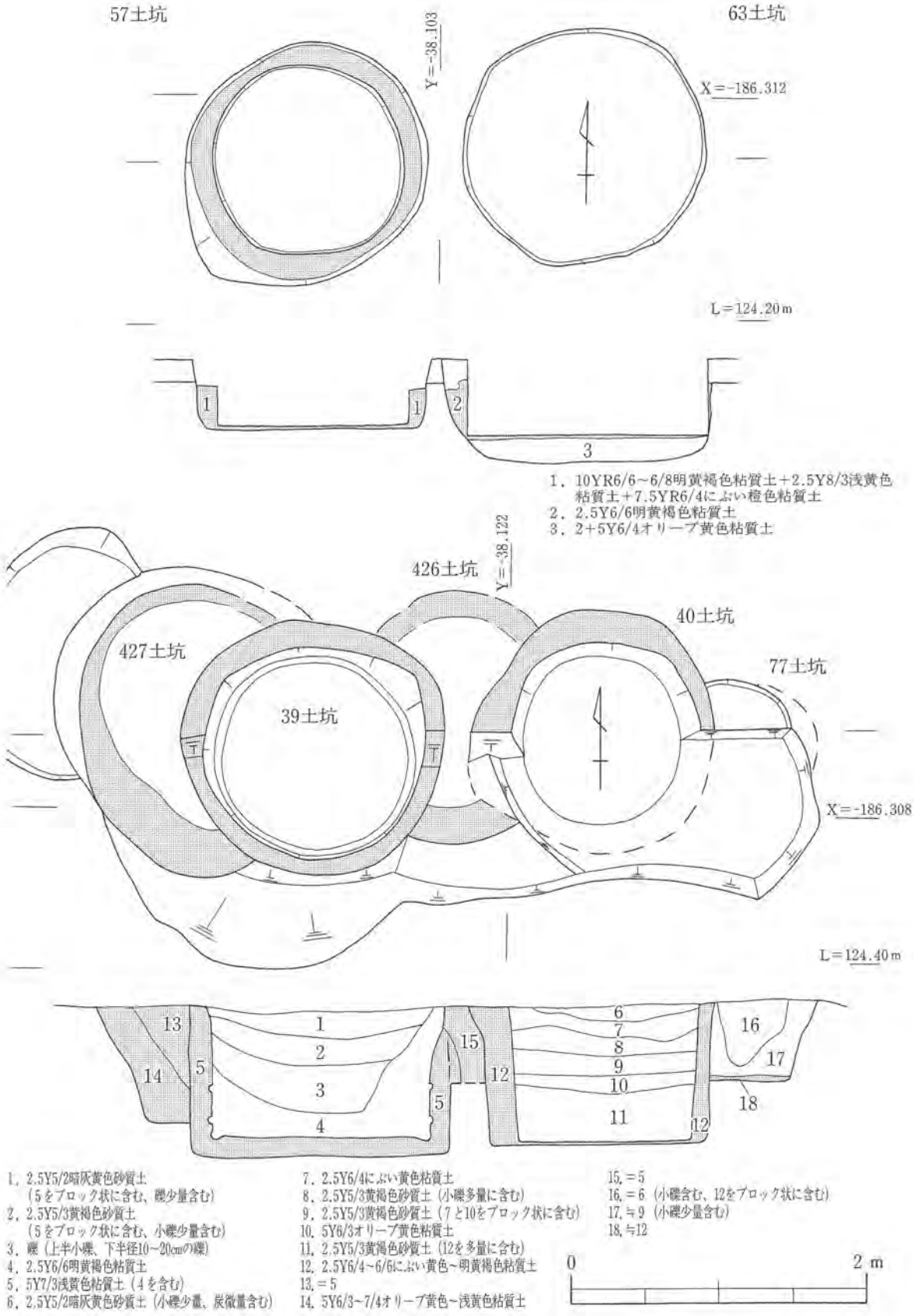
40土坑（第71図）

調査区の中央付近で検出した埋桶遺構で、426土坑・77土坑を切り込む。39土坑の東側に接すし、それと対をなしていたと考えられる。掘形の平面形状はほぼ円形を呈し、規模は直径1.5mで、深さは95cmを測る。桶は痕跡から直径約1.2mであったと考えられる。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ2cm程度でにぶい黄色・明黄褐色粘質土を敷き、桶を中央に置いた後に、底と同様な土で桶の周囲を埋め戻している。

遺物は近世の陶磁器が多く出土している。

50土坑（第69図、PL.30）

調査区中央東寄りで検出した埋桶遺構である。掘形の平面形状は円形で、規模は直径1.5m、深さ70cmを測る。桶は痕跡から直径1.1mで、タガの痕も1条確認できる。桶の据付は、まず平坦な



第71図　1区近世土坑実測図3

底に厚さ2㎝前後でオリーブ色・オリーブ黄色の粘質土を貼り、桶を中央に置いた後に浅黄色粘質土で周囲を埋め戻している。桶内の埋土には10～20㎝大の礫が多量に混入していた。

遺物は近世の土師器・陶磁器・瓦などが出土している。

57土坑（第71図、PL.31）

調査区南東部にある埋桶遺構で、63土坑の西側に接する。掘形の平面形状は円形で、規模は直径1.6m、深さ50㎝を測る。桶は痕跡から直径1.3mであったと考えられる。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ2㎝前後で黄色系の粘質土を貼り、桶を中央に置いた後に底と同じ粘質土で周囲を埋め戻している。

遺物は近世の土師器・陶磁器・瓦などが出土している。

63土坑（第71図、PL.31）

57土坑の東側に接する埋桶遺構で、57土坑と対をなしていたと考えられる。掘形の平面形状は円形で、規模は直径1.8m、深さ70㎝を測る。桶は痕跡から直径1.6mであったと考えられる。桶の据付は、まず船底状を呈する底に厚さ16㎝程度でオリーブ黄色の粘質土を貼り、さらに明黄褐色粘質土を薄く貼った後に桶を掘形の東寄りに置き、明黄褐色の粘質土で周囲を埋め戻している。

遺物は近世の陶磁器などが出土している。

77土坑（第71図）

調査区の中央付近で検出した土坑で、40土坑と重複し、それより古い。平面形状は円形を呈していたと考えられ、直径は復元すれば約1.0mであったと考えられる。底は平坦で、厚さ3㎝程度で黄色系の粘質土を貼っている。埋桶遺構の可能性もある。

混入遺物として中世の陶器が出土している。

154・155土坑（第70図）

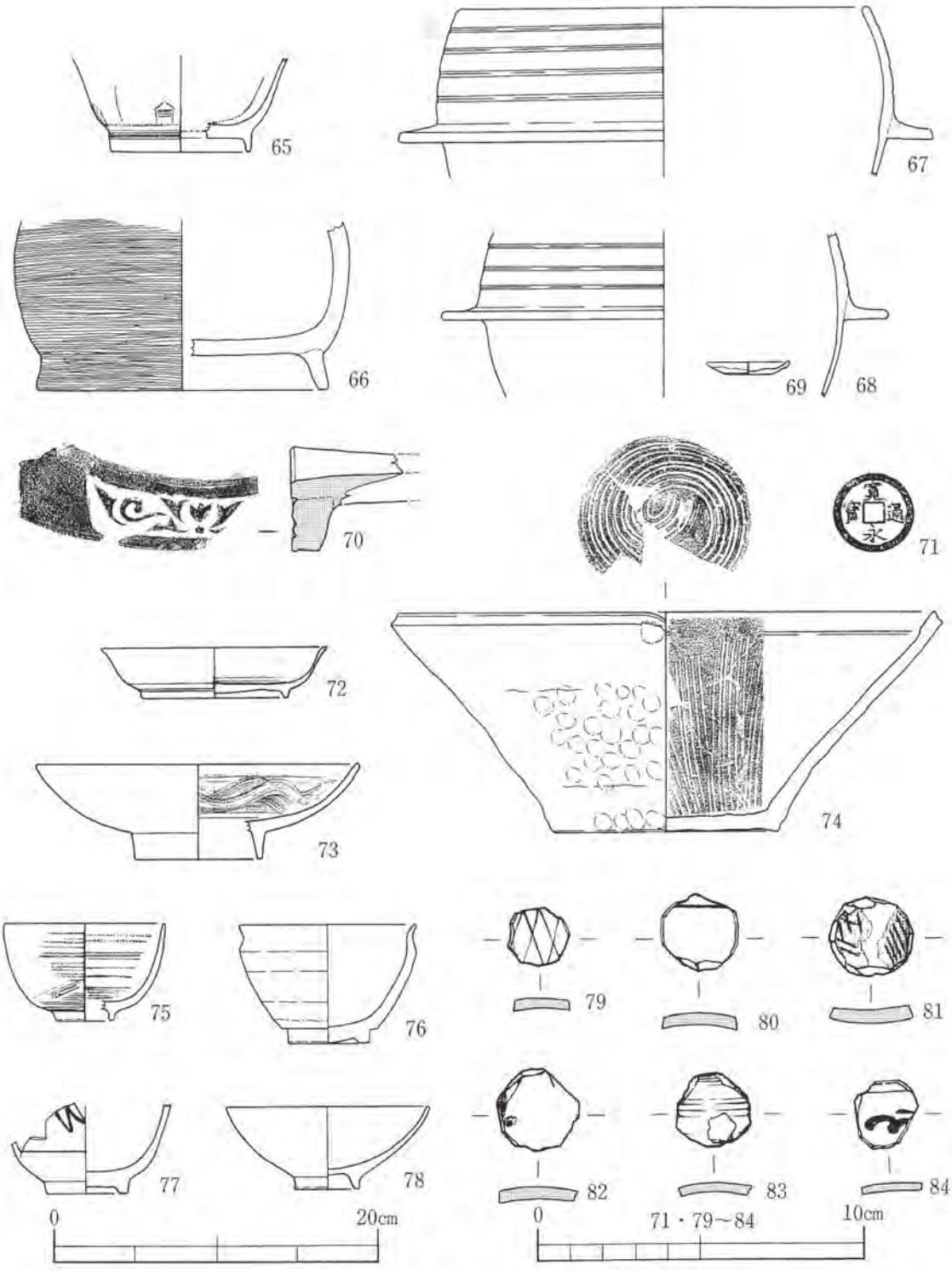
調査区の南側で検出した土坑で、154土坑が155土坑を切り込む形で検出しているが、同一遺構の可能性もある。

154土坑は平面形状が南北にやや長い楕円形を呈する。規模は1.45m×1.35mで、深さ80㎝を測る。底は平坦で、壁もほぼ直に立ち上がることから埋桶遺構の可能性もあるが、桶の痕跡は確認できなかった。底には厚さ5㎝程度で明黄褐色の粘質土を貼っている。遺物は近世の陶磁器・土師器が出土している。

155土坑は、単一の遺構と考えた場合、直径1.6mの円形土坑に復元できる。混入遺物として中世の土師器が出土している。

156土坑（第72図）

調査区南側で検出した埋桶遺構で、154土坑の西側に位置する。掘形の平面形状は円形で、規模は直径1.6m、深さ80㎝を測る。桶は痕跡から直径1.3mであったと考えられる。桶の据付は、まず



65～70・79～84：3土坑、71：39土坑、72・75：30土坑、73・29土坑、74：4坑、76・77：602土坑、78：156土坑

第72図　1区近世土坑出土遺物実測図

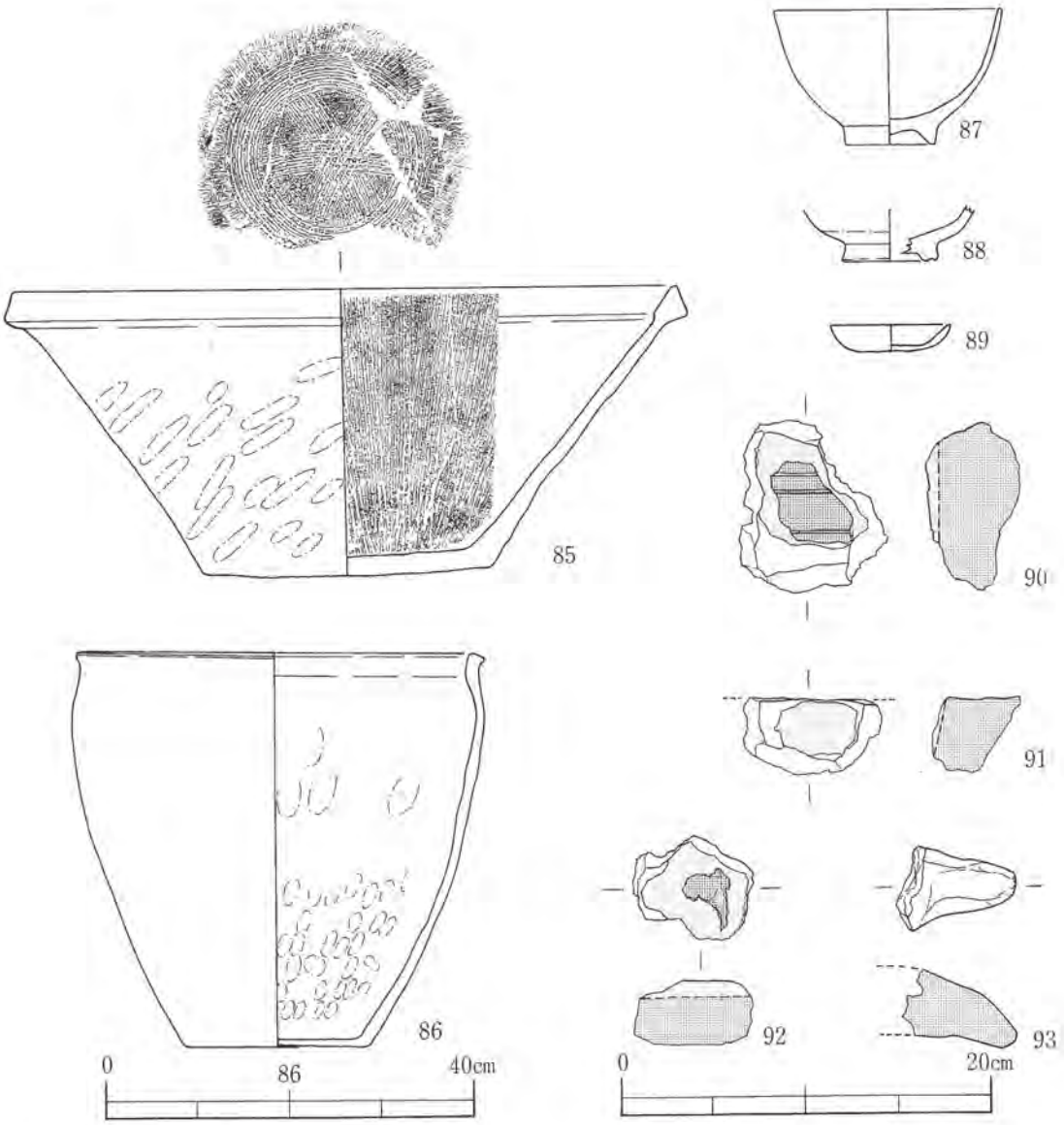
平坦な底に厚さ6㎝程度で黄色系の粘質土を貼り、桶を中央に置いた後に底と同じ粘質土で周囲を埋め戻している。

遺物は近世の陶磁器などが出土している。78は国産陶器の碗で、全釉であるが畳付は露胎となる。見込み部には砂目が3箇所に認められる。

157土坑（第69図）

調査区の南側検出した土坑で、156土坑の北に位置する。平面形状は楕円形を呈し、規模は50㎝×45㎝、深さ14㎝を測る。底・壁に明黄褐色の粘質土を貼る。

混入遺物として中世の土師器が出土している。



85～：89：5土坑、90～92：20溝、93：2土坑

第73図　近世土坑出土遺物実測図



第74図　1・6区第1遺構面遺構配置図

158土坑（第69図）

157土坑の北側に位置する埋桶遺構である。掘形の平面形状はやや南北に長い楕円形で、規模は68cm×60cm、深さ30cmを測る。桶は痕跡から直径44cmと小さい。タガの痕や側板の圧痕が確認できる。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ8cm前後で黄色系の粘質土を貼り、桶を中央に置いた後に底と同じ粘質土で周囲を埋め戻している。

遺物は出土していない。

426・427土坑（第71図）

調査区の中央付近で検出した土坑で、426土坑は39・40土坑と、427土坑は39土坑と重複し、ともにそれらより古い。39・40土坑が対になるように、426・427土坑も東西に並んで対をなしていたと考えられる。遺構の重複により全容は明らかでないが、旧状は直径1.8m程度の埋桶遺構で、39・40土坑を作る際に、桶を抜いて埋め戻したものと考えられる。

どちらの土坑からも遺物は出土していない。

602土坑（第72図、PL.77・78）

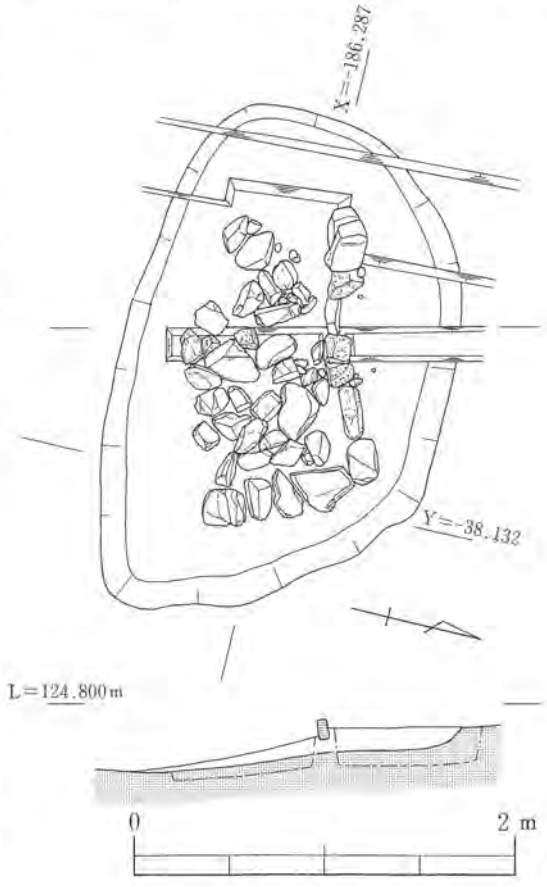
調査区北西隅付近で検出した埋桶遺構である。掘形の平面形状は円形を呈し、規模は直径1.5mで、深さは55cmを測る。桶は痕跡から直径約1.1mである。タガの痕が2条と底に側板の圧痕が確認できる。桶の据付は、まず平坦な底に厚さ5cm程度で黄色系の粘質土を貼り、桶を中央に置いた後に底と同じ土で周囲を埋め戻している。

遺物は近世の土師器や陶磁器が出土している。76は瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗で、口縁部を絞っている。底部付近は露胎である。補修の漆継ぎ痕が認められる。77は中国製染付の碗である。全釉で、高台内には離れ砂が付着する。

20溝（第73図、PL.78）

調査区の中央付近で検出した南北方向に走る溝で、規模は幅0.5～1.5m、深さ約15cmで、長さ17mを検出した。

遺物は近世の陶磁器や瓦の他、鋳造関係の遺物が多く出土している。90～92は鋳型で、90は羽釜、91は鍋、92は挌先のものである。真土や黒味が残っている。93は三叉状土製品である。



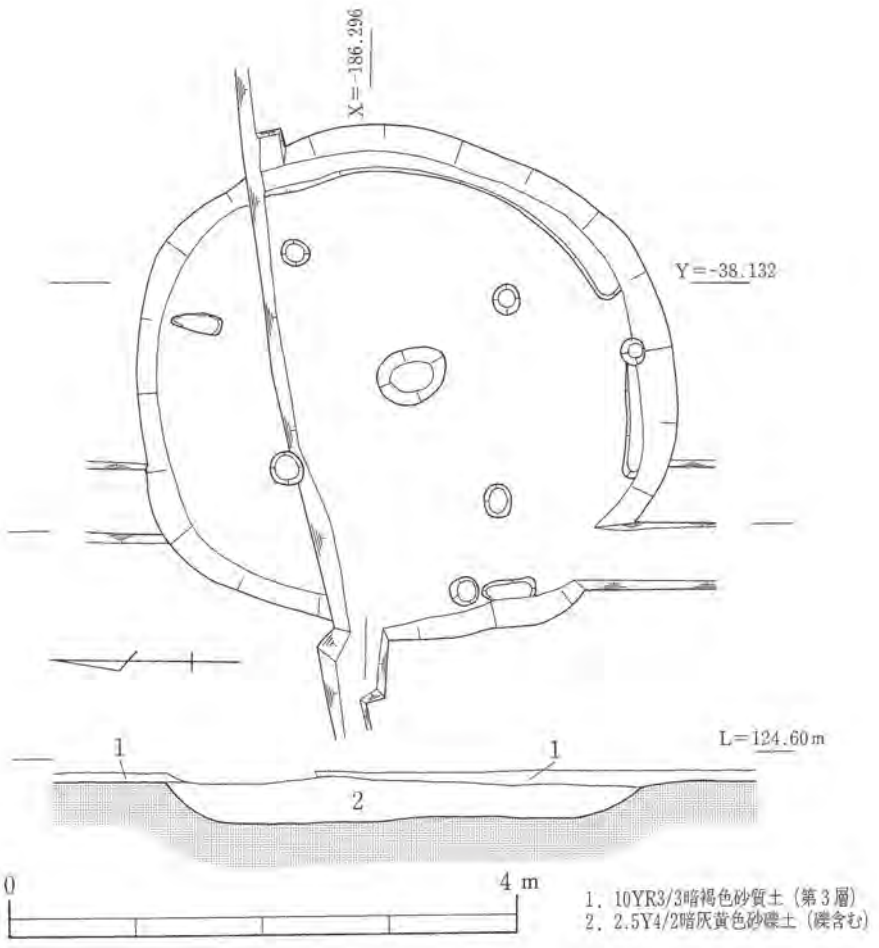
第75図　671石組遺構実測図

671石組遺構（第75図、PL.31）

調査区の北側中央で検出した遺構で、L字状に川原石を組み並べたものである。部分的に2段積んだ箇所があるが、ほとんどが1段分しか残らない。多くの川原石が浮いた状態で出土していることから、四周に石を積み上げて桝状にしていたと考えられる。残存する北辺は1.4m、東辺は0.75mを測る。

第2遺構面検出の遺構と遺物（第96図、PL.32～34）

第2遺構面で検出した遺構は、弥生時代、飛鳥時代、中世の3時期に大別できる。弥生時代の遺構には、竪穴住居5棟（79・80・134・174・631）、方形周溝墓3基（89～91）、土坑・溝等が、飛鳥時代の遺構には竪穴住居2棟（119･122）、掘立柱建物（1～5）が、中世の遺構には土坑等がある。弥生時代の遺構は、出土遺物から、何れも中期（紀伊Ⅲ～Ⅳ様式）と考えられる。中世の遺構は、鎌倉時代が主で、一部室町時代のものがある。



第76図　134竪穴住居実測図

134竪穴住居（第76・79図、PL.79）

調査区中央からやや北西寄りで検出した小型の円形住居で、規模は直径約3.93～4.35m、深さ約30cmである。中央に炉があり主柱は4本で、南と東に壁溝が認められる。周囲の壁は緩やかに立ち上がる。炉は平面形状が楕円形を呈し、規模は58cm×46cmで、深さは9cmと極浅く、埋土に炭が混じる。柱穴は平面形状が円形もしくは楕円形で、径20～24cm、深さ23～28cmである。壁溝は幅10～20cmで、床面からの深さは2～6cm程度と浅い。床面の北側壁際に台石が残されていた。

遺物は弥生土器（94～104）が多く出土している。94・95は壺体部で、外面に直線文・波状文を巡らす。96は鉢で、口縁端部を内側に肥厚させ、外面に粘土を貼って拡張する。外面はタタキ調整である。97・98は高杯である。97は口縁部が屈曲して上方へ立ち上がる。端部は上方に面をもつ。内外面はヘラミガキ調整である。98は裾部の破片で、端部を上下に突出させ、二個一対の円孔を6箇所に穿つ。99・100は甕で、口縁部を「く」の字に屈曲させ、端部をわずかに上方へ摘み上げる。体部外面の調整は、99がタテ方向のハケ、100が横方向の平行タタキである。101～104は壺底部である。103は外面をヘラミガキ調整し、104は外面をヘラケズリ調整する。弥生土器の時期はおおよそⅣ様式前半頃を中心とする。ただ、97のようにⅤ様式の特徴をもつ土器も含まれているが、これらは埋没する過程で混入したものであると考えられる。

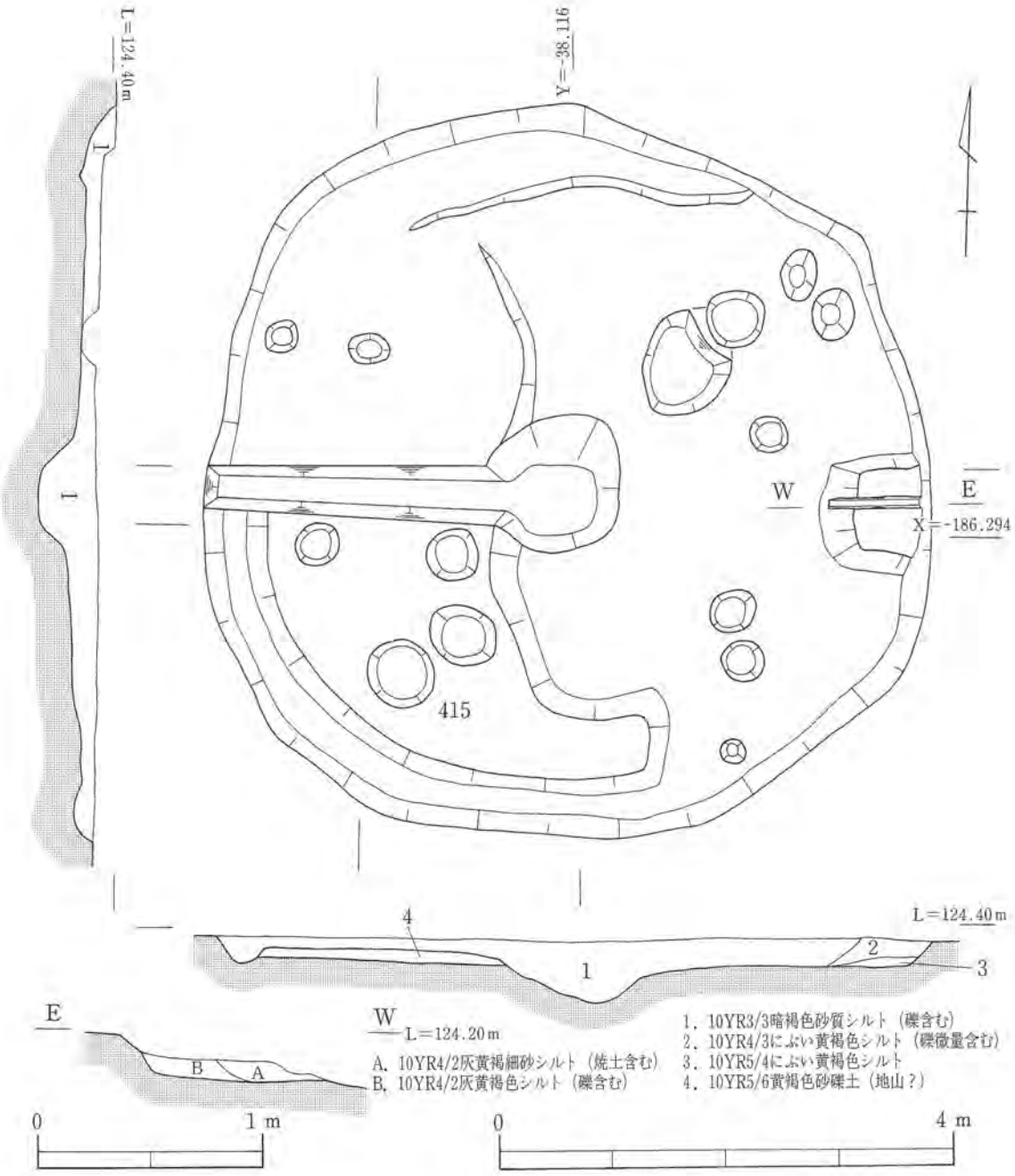
80竪穴住居（第77・79図、PL.35・79）

調査区中央のやや北寄りで検出した円形住居である。規模は直径約6.45～6.69m、深さ21～27cmであり、床面は東側半分が1段下がる。中央に位置する炉は平面形状が不整形を呈し、規模は1.26m×1.70mで、深さ30cmを測る。埋土には炭や灰を殆ど含まない。主柱は4本であったと考えられ、南西・南東・北東の柱が対をなしていることから、建て替えを想定することができる。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、直径33～63cm、深さ37～66cmを測る。壁溝は南西と北側で確認でき、幅30～42cm、深さ7～14cmである。

遺物は弥生土器（105～107）が多量に出土しており、ほかに砥石、サヌカイト剥片等がある。105・106高杯である。105は水平口縁を持ち、端部が垂下する。106は裾部の破片で、端部が上下に突出する。107は415ピットから出土したミニチュア台付鉢の脚部で、「ハ」の字に開く脚部の端部付近に1条の凹線文を巡らし、その上に小孔を密に巡らす。弥生土器の時期は、おおよそⅢ様式の終わり頃からⅣ様式前半頃であると考えられる。

174竪穴住居（第78・79・97図、PL.35・79・98）

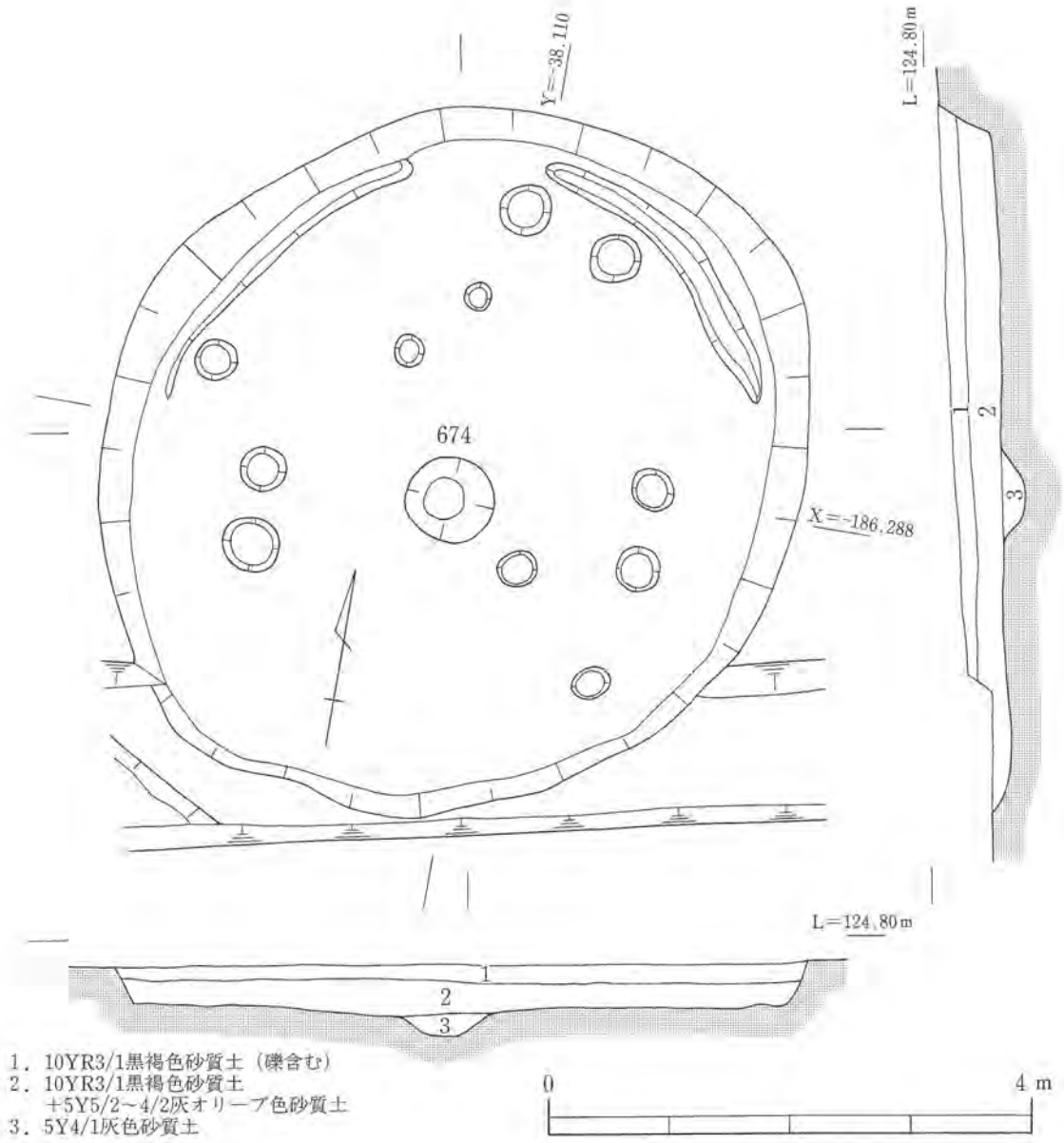
調査区中央の北寄りで検出した円形住居で、80竪穴住居の北東側に約35cm隔てて位置する。平面形状は楕円形を呈し、規模は直径約5.73～6.45mで、深さは30～45cmと比較的残りは良い。中央に位置する炉は平面形状がほぼ円形で直径約70cm、深さ20cmを測る。埋土には炭や灰・焼土を含まない。壁溝は北側で一部検出しており、幅18～30cmで、床面からの深さは5cm程度である。



第77図　80竪穴住居実測図

遺物は弥生土器が多く出土しており、ほかに石鏃・サヌカイト剥片等がある。108～111は壺で、このうち109～111は体部の破片である。108は広口壺で、外反する口縁の端部を上下に拡張し、外面に波状文を巡らす。口縁部の内面には、２列の櫛描列点文を巡らす。二個一単位の紐穴が穿たれる。109は簾状文の上に円形浮文を貼付する。110は斜格子文の下に簾状文を巡らす。111は直線文の間に斜格子文を施す。

112・114・115は高杯である。112は杯体部から内湾気味に続く口縁部の外面に３条の凹線文を



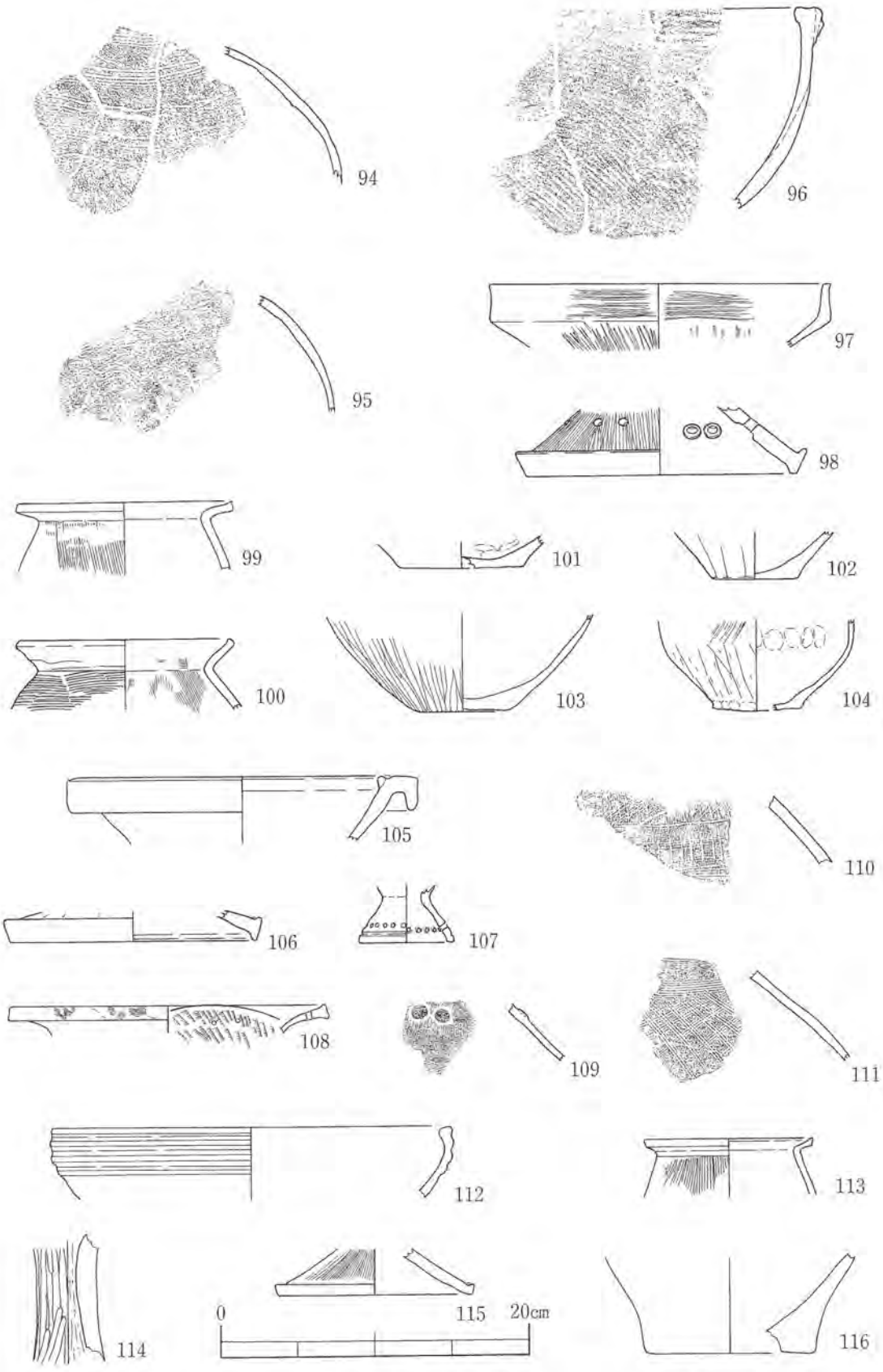
第78図　174竪穴住居実測図

巡らす。114は脚柱部で、外面はヘラミガキ調整で、内面にはシボリ痕がある。115は裾部の破片で、端部を上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整である。

113・116は甕で、このうち116は底部の破片である。113は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部をわずかに上方へ拡張する。体部外面はハケ調整である。

S1は有茎尖基式の石鏃である。

弥生土器の時期は、109～111のようにⅢ様式の中頃に帰属するものがある一方で、高杯などにⅣ様式に下るものが見られる。80竪穴住居とはわずかしか離れておらず、二つの建物が同時に存在したとは考えられないため、必然的に新旧関係を求めなければならない。80竪穴住居との遺物



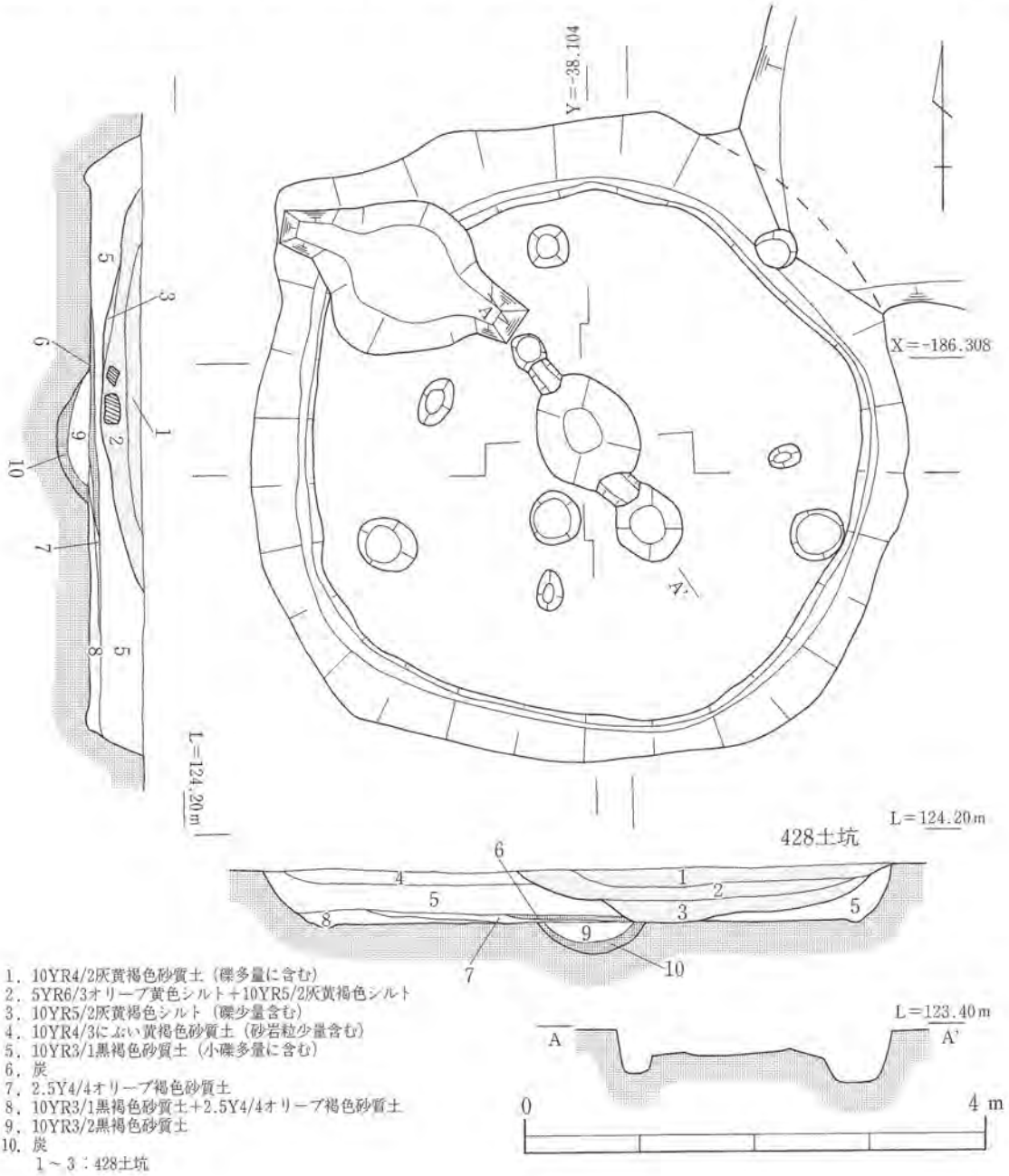
94～104：134竪穴住居、105・106：80竪穴住居、107：415ピット、108～116：174竪穴住居

第79図　134・80・174竪穴住居出土遺物実測図

と対比した場合、遺物の時期はかなり重なり合うが、当住居の方により古い遺物が含まれ、80竪穴住居の方により新しい遺物が含まれる。これらの状況から、当住居が80竪穴住居に先行すると考えたい。

79竪穴住居（第80・82図、PL.36・79）

調査区中央の東寄りで検出した円形竪穴住居で、埋土を中世の428土坑が切り込む。住居の規模は直径5.82～6.00m、深さ45～48cmである。中央にある炉は平面形状が楕円形で、規模は95cm×115



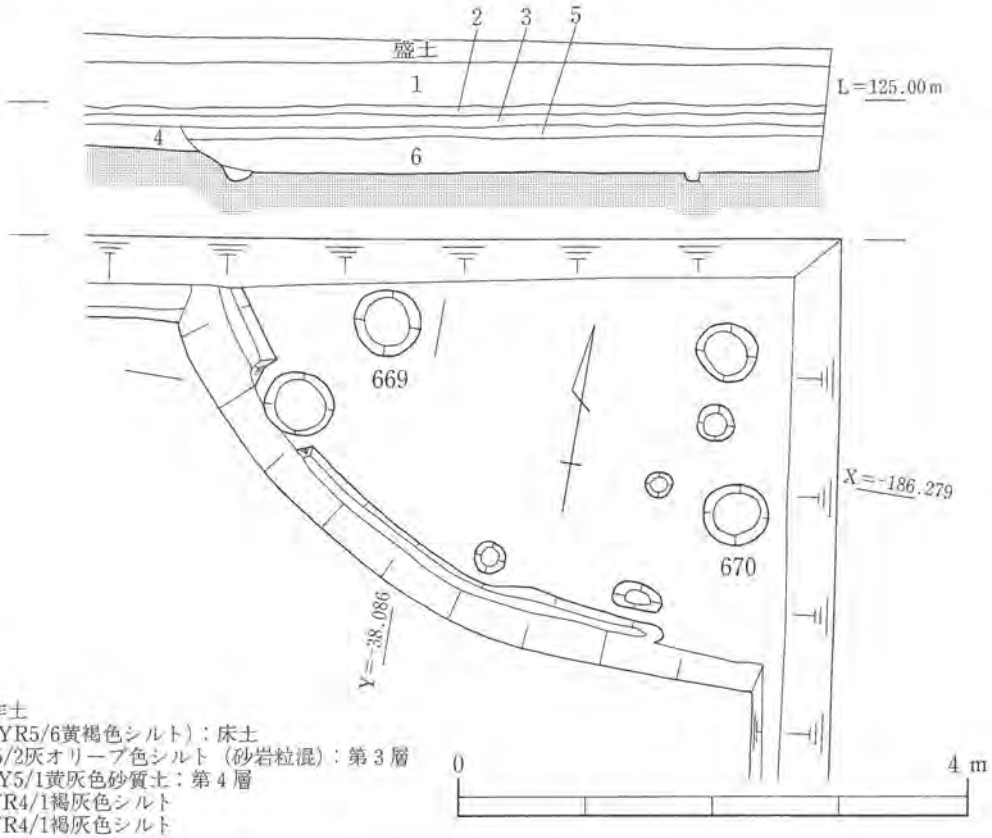
第80図　79竪穴住居実測図

cm、深さ25cmである。炉の北西と南東の両脇にピットを有しており、ピットと炉を繋ぐ溝が存在する。炉の底には炭が堆積していた。床面上からは直径36～49cm、深さ９～30cmの規模のピットをいくつか検出しているが、浅いものが多いことや位置関係から主柱は明確でない。壁溝はほぼ全周しており、幅10～20cmで、床面からの深さは５～８cmを測る。

遺物は弥生土器が多量に出土しているのをはじめ、石鏃、スクレイパー、サヌカイト剝片などが出土している。117～120・125は弥生土器壺で、このうち117～119は細頸壺、120は付加状口縁壺、125は底部の破片である。117は口縁端部を丸く収める。口縁外面には簾状文・直線文を巡らす。118は口縁端部上方に面をもつ。外面には直線文・波状文を巡らす。119は頸部付近に直線文と簾状文を巡らす。120は口縁部を「く」の字形に内傾させ、外面に簾状文を２段巡らしている。125は外面を丁寧なヘラミガキ、内面はハケ調整である。

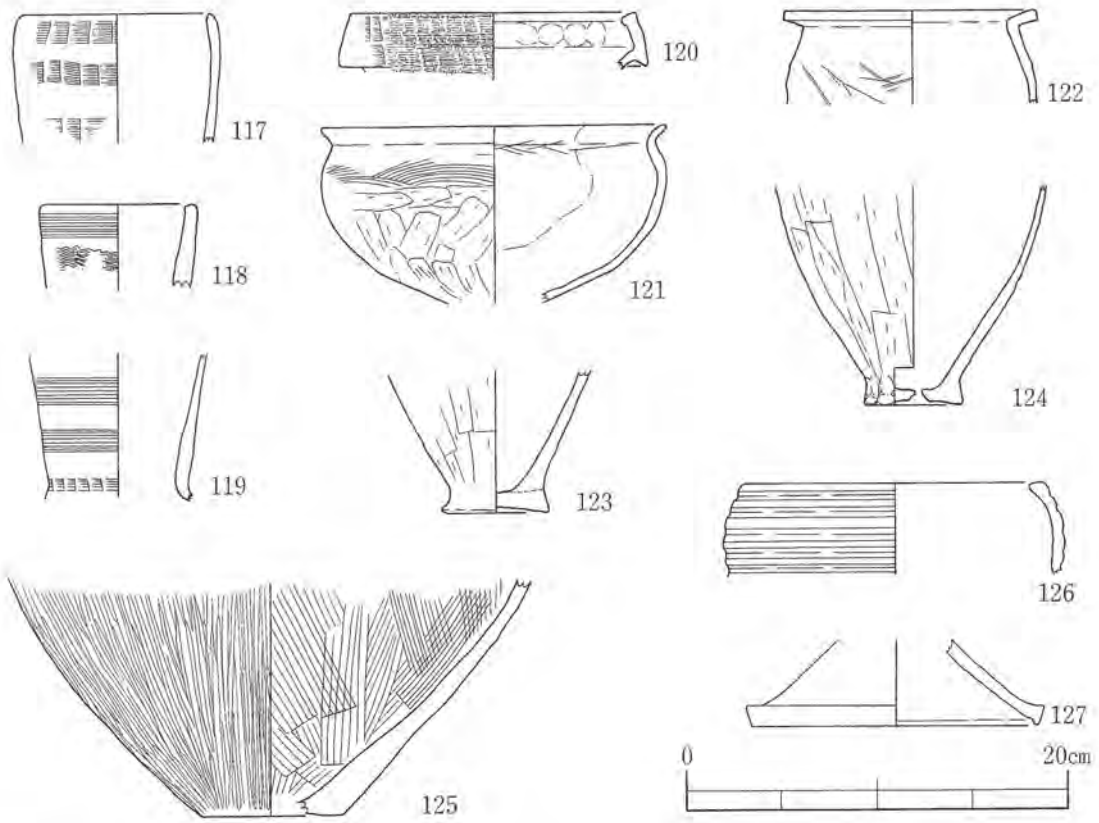
121は鉢である。椀状の体部に短く湾曲する広口の口縁が付く。肩部をハケ、体部をヘラケズリ調整している。脚台が付くものと考えられる。

122～124は甕である。122は口縁部が「く」の字に強く屈曲し、端部は外方に面を有する。体部外面はヘラケズリのちナデ調整をしている。122・123は底部の破片で、底部端を外方に拡張している。外面はヘラケズリ調整で、124は焼成後に底部中央を穿孔している。



1．耕作土
2．(10YR5/6黄褐色シルト)：床土
3．5Y5/2灰オリーブ色シルト（砂岩粒混）：第３層
4．2.5Y5/1黄灰色砂質土：第４層
5．10YR4/1褐灰色シルト
6．10YR4/1褐灰色シルト

第81図　631竪穴住居実測図



117～125：79竪穴住居、126・127：631竪穴住居

第82図　79・631竪穴住居出土遺物実測図

弥生土器はⅢ様式中頃からⅣ様式にかけてものである。また、炉の両脇に柱穴をもつ住居は、その形態から松菊里型住居と呼ばれるものであり、柏原遺跡で数棟、北馬場遺跡でも１棟検出されている。

631竪穴住居（第81・82・97図、PL.37・98）

調査区北東隅で検出した円形住居で、全体の3/4以上は調査区外となる。規模は推定で直径約10m、深さ36～39cmを測る。調査区内では炉は検出されておらず、壁溝は幅12～20cmで、深さは床面から６～11cmを測る。主柱は4本以上であると考えられ、柱穴は直径50～54cmを測る。

遺物は弥生土器（126・127）の他、サヌカイト剝片や石斧（S５）が出土している。126は大型の細頸壺で、内傾する口縁部外面に凹線文を５条巡らしている。127は高杯の脚裾部である。端部を上下に拡張する。Ｓ５は柱状片刃石斧である。

119竪穴住居（第83・95図、PL.37・83）

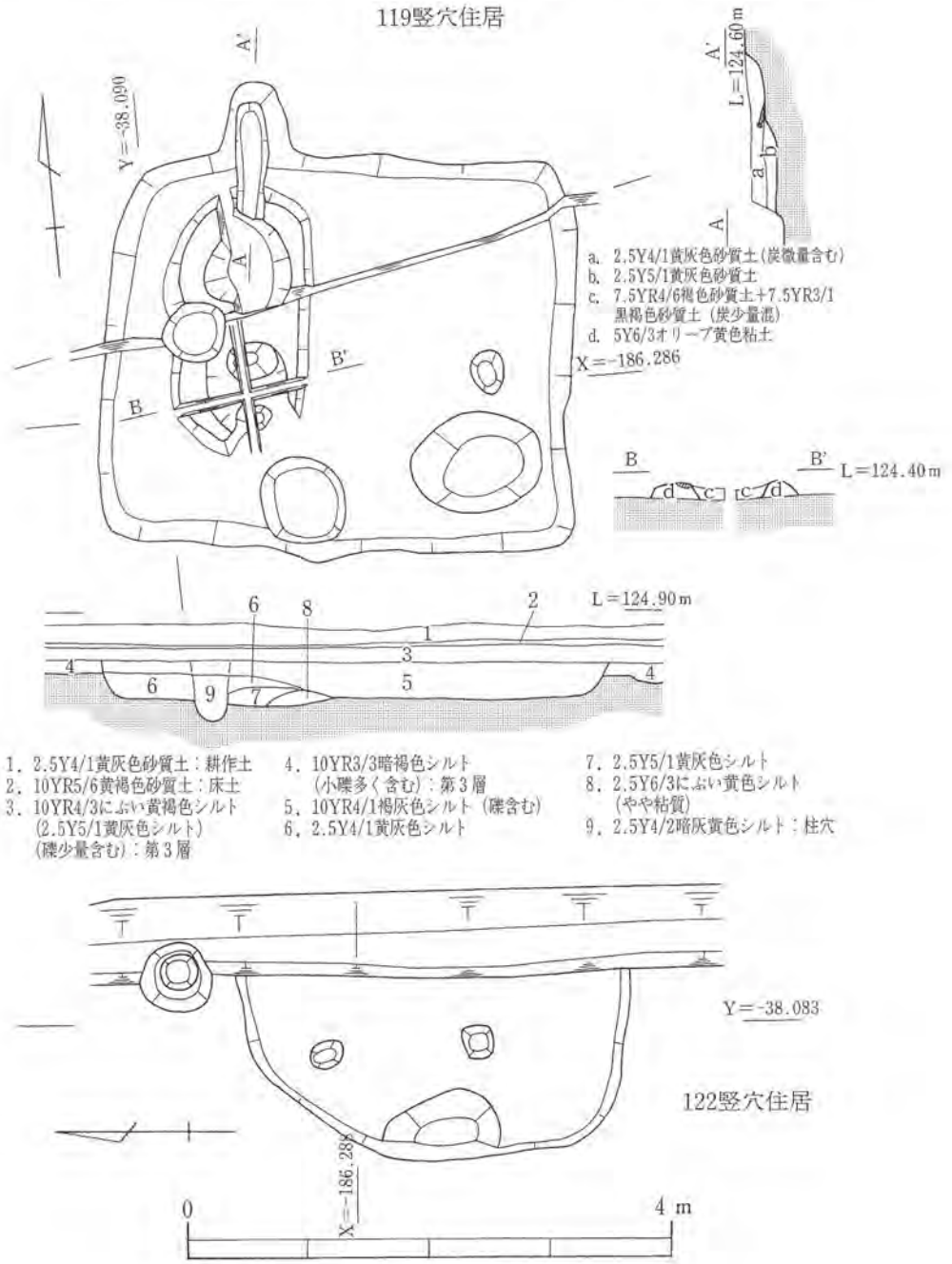
調査区北東隅で検出した方形住居で、掘立柱建物２と重複し、それより古い。住居の平面形状は長方形を呈し、東西3.9m×南北3.3mで、深さは約30cmである。主柱は明らかでない。カマドは床面の西寄りに設け、煙道が北方向の屋外へ延びる。

遺物は須恵器（199）や土師器（200・201）が出土している。199は杯身で、底部をヘラケズリ

調整している。200は皿で、底部はヘラケズリ後ナデ調整を施す。201は把手で、舌状を呈し上に反る。遺物の時期から7世紀代の住居であると考えられる。

122竪穴住居（第83、PL.36）

119方形竪穴住居の東側4mで検出した方形住居で、東半部が調査区外である。平面形状はやや隅丸で、規模は推定一辺約3.27m、深さ約6～10cmである。主柱は、炉などは明らかでない。遺物は弥生土器の細片が出土しているが、覆土等から飛鳥時代に所属するものと考えられる。



第83図　119・122竪穴住居実測図

91方形周溝墓（第84～86図、PL.38・80・81）

調査区北西隅で検出した方形周溝墓で、南東部で90方形周溝墓と溝を共有する。規模は東西11.2m×南北17.4mで、周溝の幅は北辺部で約3.5m、深さは40cm前後である。水田造成時の削平で東・西辺の溝が途切れる。墳丘部の平面形状は不整な長方形で、東西8.8m×南北16.1mである。陸橋部は北西隅にあった可能性がある。墳丘の盛土は削平され、主体部も検出できなかった。

遺物は多量の弥生土器（128～166）が出土している。弥生土器はⅢ様式の中頃からⅣ様式の前半頃にかけてのものである。

128～134・136は広口壺で、このうち128・129、131～133は端部を下方に折り曲げる。128・129は口縁端部外面と口縁部から頸部にかけて簾状文を巡らす。ともに胎土に金雲母が含まれる。131～133は口縁端部外面に櫛描列点文を、このうち131・132は口縁部外面に簾状文を巡らす。133は胎土に金雲母が含まれる。130・134は口縁端部を上下に拡張し、外端面に波状文を巡らす。130は口縁部内面に波状文と櫛描列点文を、134は口縁部内面に扇形文を施す。136は口縁部から頸部にかけて波状文と簾状文を施す。135は細頸壺で、内湾する口縁部の外面に凹線文を巡らす。137～147は壺の頸部あるいは体部の破片である。137は頸部から体部にかけて簾状文を、138は頸部に直線文を巡らす。139は体部上位から頸部にかけて直線文を施す。140・141は体部上位で、140は斜格子文の上下に直線文と波状文を、141は斜格子文の上に直線文を巡らす。142は頸部に凹線文を巡らし、その下に波状文を巡らす。143は頸部付近に直線文を巡らす。胎土に金雲母が含まれる。144は体部上位に斜格子文の下に簾状文と波状文を巡らす。145は綾杉文を施す。146・147は体部上位に簾状文を巡らし、その上に二個一単位で円形浮文を貼付する。胎土に角閃石が含まれ、生駒西麓産である。

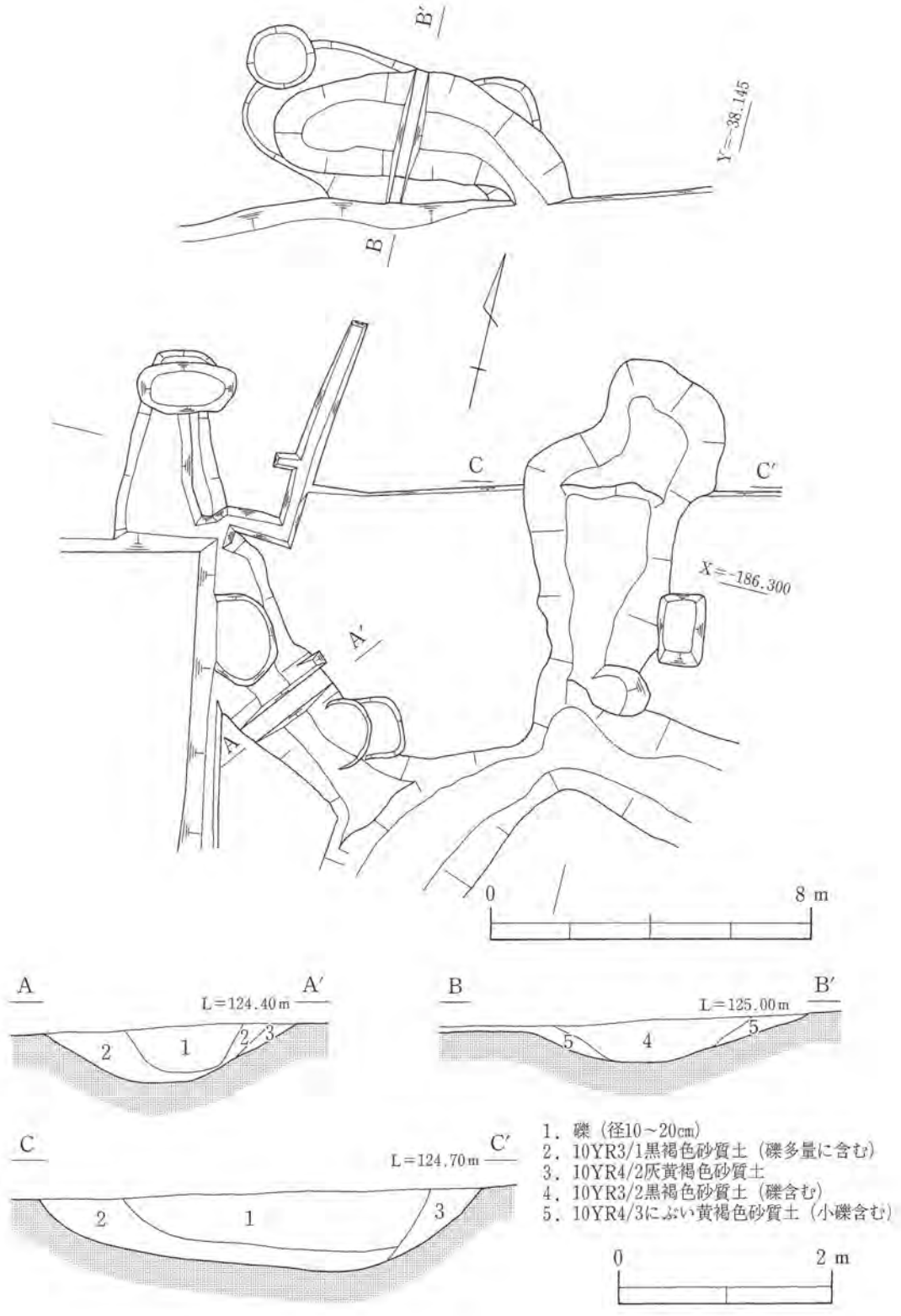
148・149は甕底部、151～153・166は壺底部である。150は底部端に粘土を足して上底状にしている。

154は水差形土器で、体部は最大径が下位にあり尻すぼみの形態である。口縁部はわずかに外傾して内湾気味に立ち上がり、外面に2条の凹線文を巡らす。肩部には把手を付す。体部外面の調整は上半部がヘラミガキ、下半部がヘラケズリである。

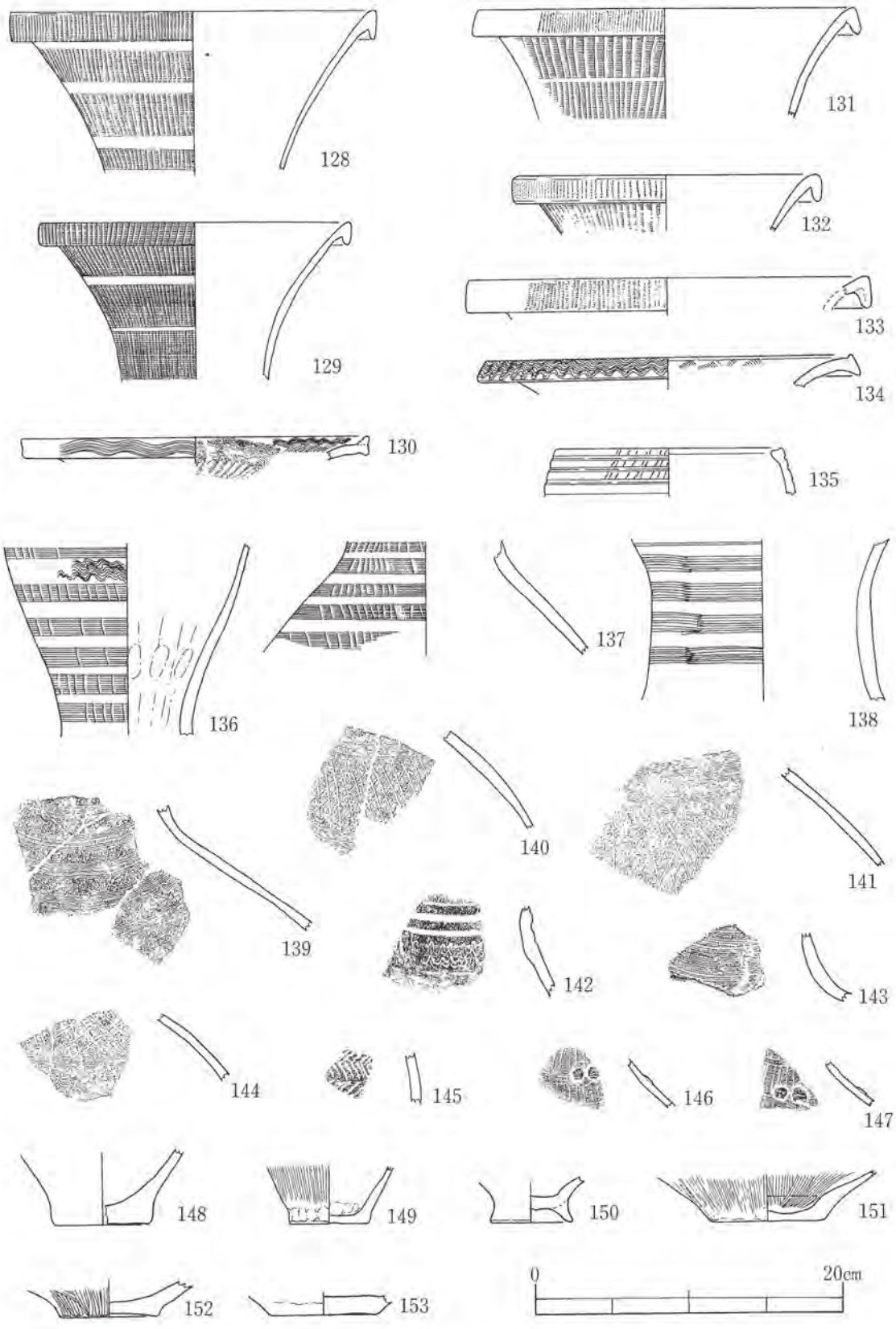
155～158は甕である。155は口縁端部を丸く収め、体部外面をヘラミガキ調整する。胎土に角閃石が含まれる。156は口縁端部が外方に面をもつ。体部外面は横方向の平行タタキ調整である。157は口縁端部が外方に面をもち、体部外面はヘラミガキ調整である。158は口縁端部を上方へ摘み上げる。体部外面はナデ調整である。

160・161は高杯である。160は内傾する口縁部の外面に4条の凹線文を巡らす。161は裾端部を上下に拡張する。外面はヘラミガキ調整である。

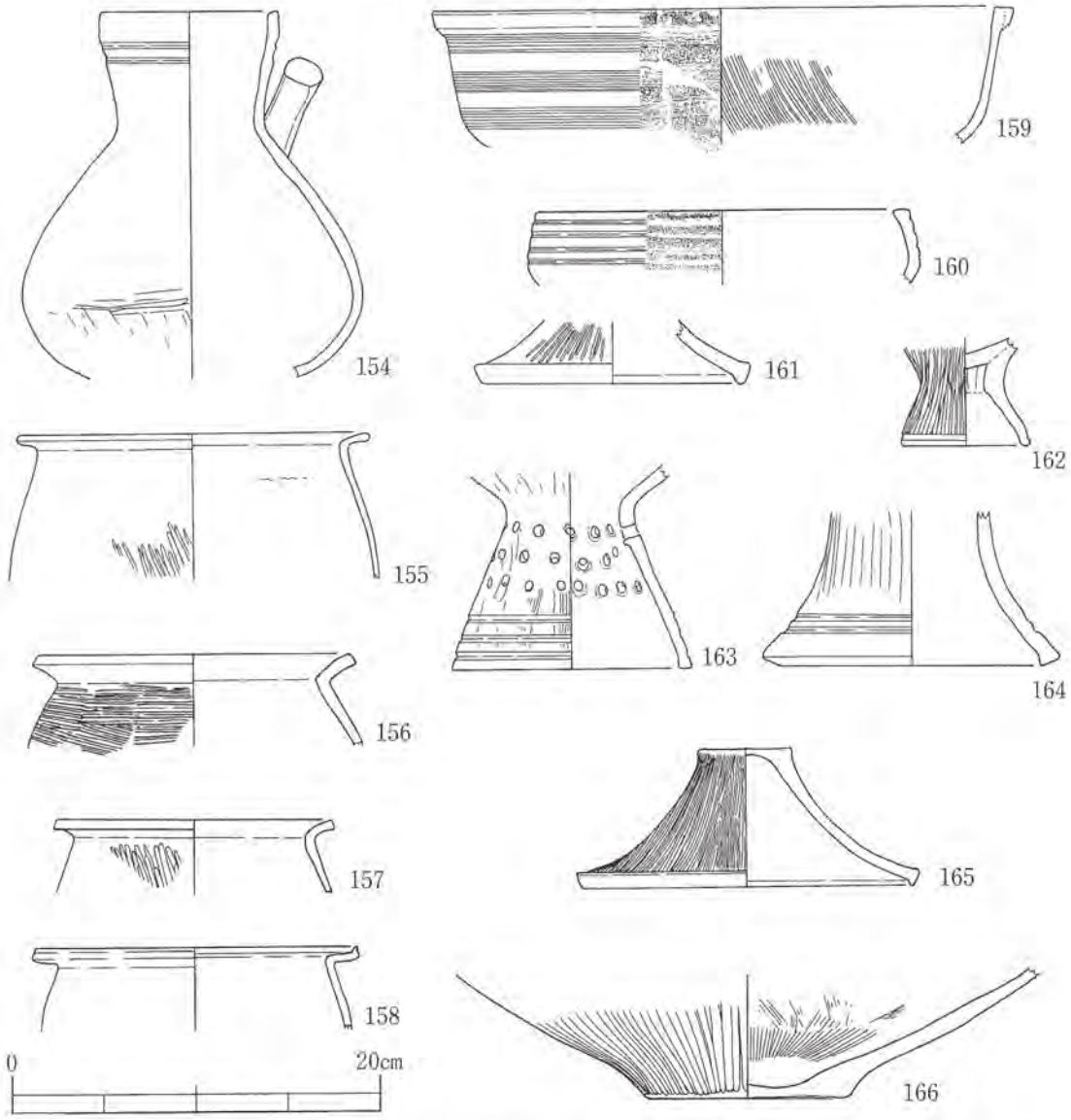
159・162・164は鉢である。159は口縁端部外面に貼り付段が付加される。口縁部から体部にか



第84図　91方形周溝墓実測図



第85図　91方形周溝墓出土遺物実測図



第86図　91方形周溝墓出土遺物実測図

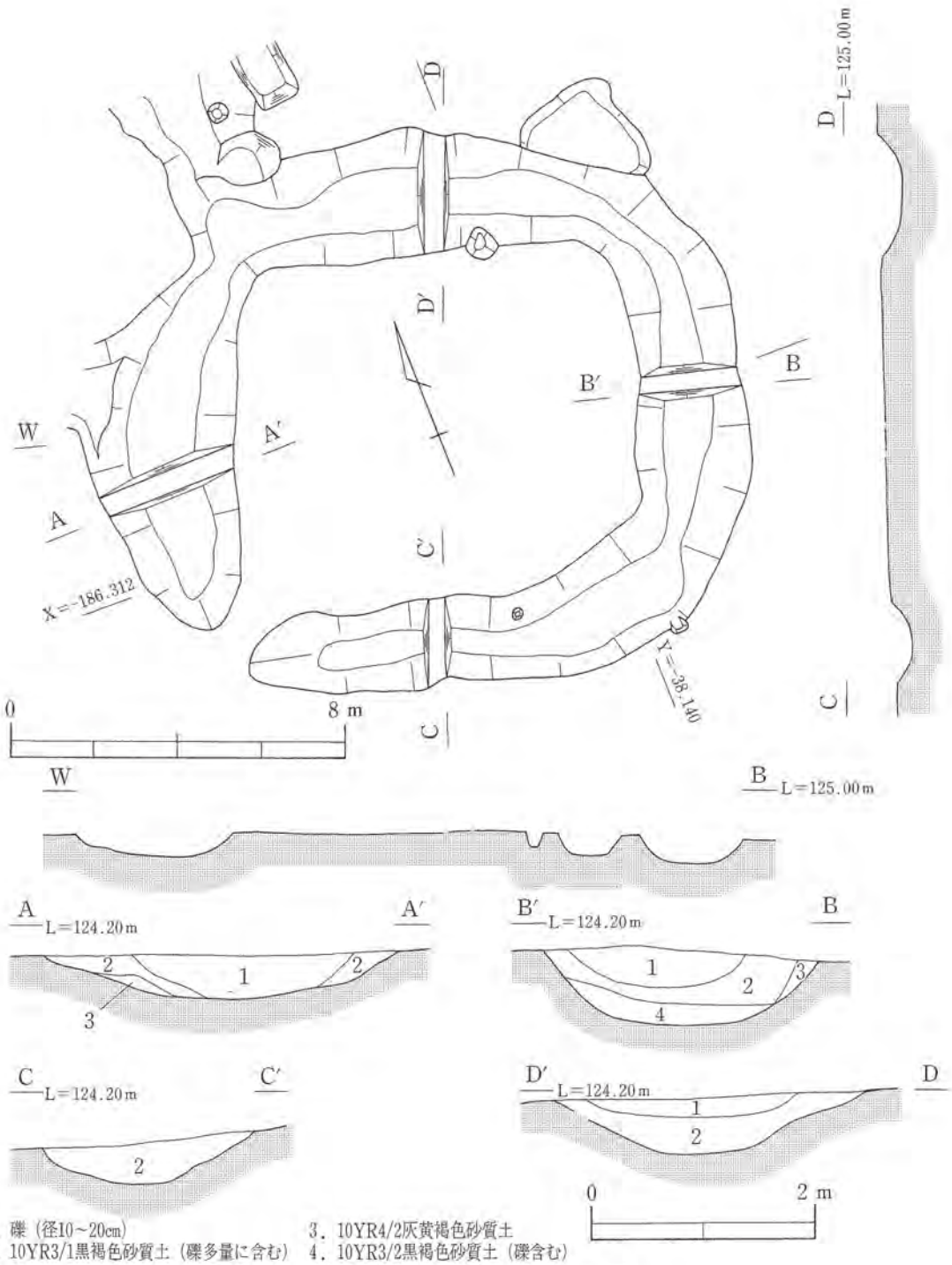
けて直線文を3条巡らす。162･164は脚台部である。162は内湾気味開く裾部の端部付近に凹線文を1条巡らす。外面は丁寧なヘラミガキ調整である。胎土に金雲母が含まれる。164は裾部に2条の凹線文を巡らす。

163は器台で、外面下方に凹線文を3条、上方に小孔を3段にわたり巡らしている。

165は甕蓋で、裾端部はわずかに拡張する。外面は縦方向のハケ調整である。

90方形周溝墓（第87・88・97図、PL.38・39・81・82・98）

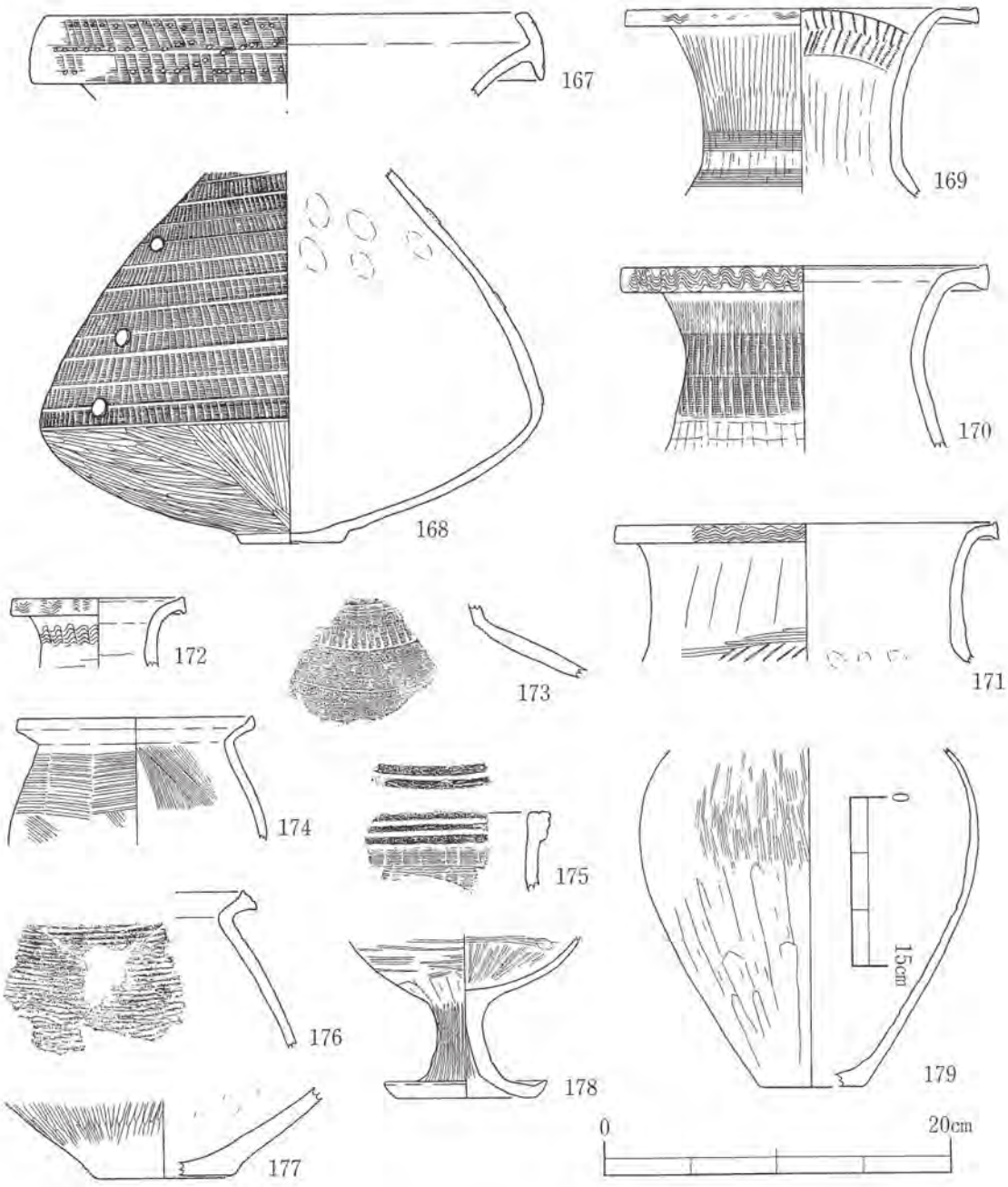
調査区の西部にある方形周溝墓で、北西部で91方形周溝墓と溝を共有する。規模は東西12.8m、南北10.8mで、周溝の幅は1.6～3.2m、深さは40～70cmを測る。南西隅の一部を掘り残し陸橋部としている。周溝の埋土中には多量の礫が含まれていた。墳丘の平面形状は隅丸の長方形で、比較的整っており、東西11.3m、南北9.8mを測る。墳丘盛土は削平されており、埋葬施設は検出でき



第87図　90方形周溝墓実測図

なかった。

周溝からはコンテナ約4箱分の弥生土器（167～179）や石器（S6･7）が出土している。土器は東辺と西辺から比較的多く出土し、胎土中に角閃石･金雲母を含む所謂生駒西麓産が全体の20～25％を占める。土器の時期はⅢ様式中頃からⅣ様式前半に帰属し、溝を共有する91方形周溝墓とほぼ同時期であり、新旧関係は明らかでない。



第88図　90方形周溝墓出土遺物実測図

167・168は生駒西麓産の土器である。167は付加状口縁壺で、上下に大きく拡張した口縁端部外面に２条の簾状文を巡らし、その上に３列の棒状工具による刺突紋を施す。168は体部の最大径が下位にある尻すぼみの形態である。外面上半部は簾状文を12段巡らし、その上に円形浮文を貼付し、下半部はヘラミガキ調整している。169～172は広口壺で、このうち172は小型である。169は口縁部を横方向に折り曲げ、端部をわずかに拡張する。外端面には波状文を巡らす。口縁部内面には２段の櫛描列点文を配する。頸部外面には直線文を巡らす。170～172は口縁端部を上下に拡

張し、外端面に波状文を巡らす。170は頸部に簾状文を、172は頸部に波状文を巡らす。173は体部破片で、肩部に簾状文と直線文を巡らす。177は壺底部である。

174・176・179は甕である。174は口縁端部をわずかに摘み上げる。体部外面は横方向の平行タタキ調整である。176は口縁端部を上下に拡張し、外端面に細い凹線文を巡らす。体部外面は横方向の平行タタキ調整である。179は体部上半がヘラミガキ、体部下半がヘラケズリ調整である。

175は鉢で、口縁部に貼り付段が付加される。口縁端部上面と外面に凹線文を、その下部には簾状文を巡らす。

178は高杯で、裾端部は上方へはね上がる。外面は杯体部がヘラケズリで、他の部分はヘラミガキ調整である。

S 6は小型環状石斧の破片で、復元すれば直径約7.2cmで、中央の孔は約1.8cmである。S 7は磨製の円板状石製品で、紡錘車の未製品の可能性がある。

89方形周溝墓（第94図、PL.39・82）

調査区南部で検出した方形周溝墓であろうと思われる溝で、L字状に屈曲し、その屈曲する部位の一部を掘り残している。規模は東西9.8m×南北7.2mである。周溝の幅は0.8～2.2mで、深さは50～80cmあり、断面は逆三角形を呈する。

遺物は弥生土器（180～192）が多く出土する。土器はⅣ様式の前半を中心と時期のもので、90・91方形周溝墓より後出するものと考えられる。

180・181は広口壺で、口縁端部を拡張する。頸部外面はハケ調整である。180は外端面に細い凹線文を巡らす。181は口縁部に小孔を1箇所あけている。189は壺底部である。

182・192は甕で、このうち182は口縁部が強く外反し、端部はやや丸みを帯びる。体部外面はハケ調整である。192は体部の破片で、外面に横方向の平行タタキ調整を施す。

183・184は鉢である。183は口縁部が屈曲して上方へ立ち上がり、端部外面に貼り付段を付加する。口縁部下には簾状文を2条巡らし、屈曲部には櫛描列点文を配する。体部下半部外面はミガキ調整である。184は生駒西麓産で、口縁部は屈曲して内傾気味に立ち上がる。口縁端部外面には貼り付段を付加し、櫛描列点文を施す。口縁端部下から屈曲部にかけては、簾状文と櫛描列点文を巡らし、その上に刻み目をもつ棒状浮文を数個一単位として貼付する。また屈曲部にも刻み目を施す。

185～188は高杯である。185は水平口縁で、端部は屈曲して垂下する。杯体部外面はヘラミガキ調整である。186は杯部が椀形で、外面は丁寧にヘラミガキ調整する。187・188は脚部で、裾端部が上方へ突出する。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリである。

190・191は台付鉢の脚部で、端部はやや肥厚し、その上位に凹線文を1条巡らし、さらにその上位に円穴を穿つ。内面はヘラケズリ調整である。191は裾部付近に凹線文を4条巡らし、その上

位に円穴を上下に穿つ。外面はヘラケズリ調整である。

掘立柱建物1（第89図、PL.40）

調査区北東隅で検出した東西2間（3.71m）×南北3間（4.25m）の総柱建物である。棟方向は南北で、主軸はN－27°－Wを指す。柱間は桁行が1.30～1.62m、梁行が1.80～2.15mで、梁行の柱間の方が総体的に長い。掘形の平面形状は円形もしくは楕円形で、直径49～98cmとバラつきが見られ、深さは最大40cmである。柱痕は判然としない。

遺物は柱穴から須恵器や土師器の破片が出土しており、混入品として弥生土器がある。

掘立柱建物2（第89・95図、PL.40）

調査区北東隅で検出した東西4間（5.48m）×南北4間（7.85m）の側柱建物で、掘立柱建物1の東側に並列する。竪穴住居119と重複し、それより新しい。棟方向は南北で、主軸はN－32°－Wを指す。柱間は桁行が1.64～2.11m、梁行が1.24～1.46mで、梁行の柱間がかなり短くなっている。掘形の平面形状は円形もしくは楕円形で、直径36～73cmとバラつきが見られ、深さは15～37cmである。部分的に確認できた柱当たりから、柱は直径19～29cm程度であったと考えられる。

遺物は柱穴から須恵器（202）が出土するほか、混入品として弥生土器がある。202は7世紀中頃の捏鉢底部である。

掘立柱建物3（第90図）

調査区の東部で検出した東西2間(3.58m)×南北2間(3.65m)の総柱建物で、主軸はN－14°－Eを指す。掘形の平面形状は円形もしくは楕円形で、直径42～112cmとバラつきが見られ、深さは最大で40cm程度である。柱痕は判然としない

遺物は柱穴から弥生土器の破片が出土している。古代以降の遺物が出土していないことや、飛鳥時代の掘立柱建物とは方位が違っていることなどから、弥生時代の建物の可能性もある。

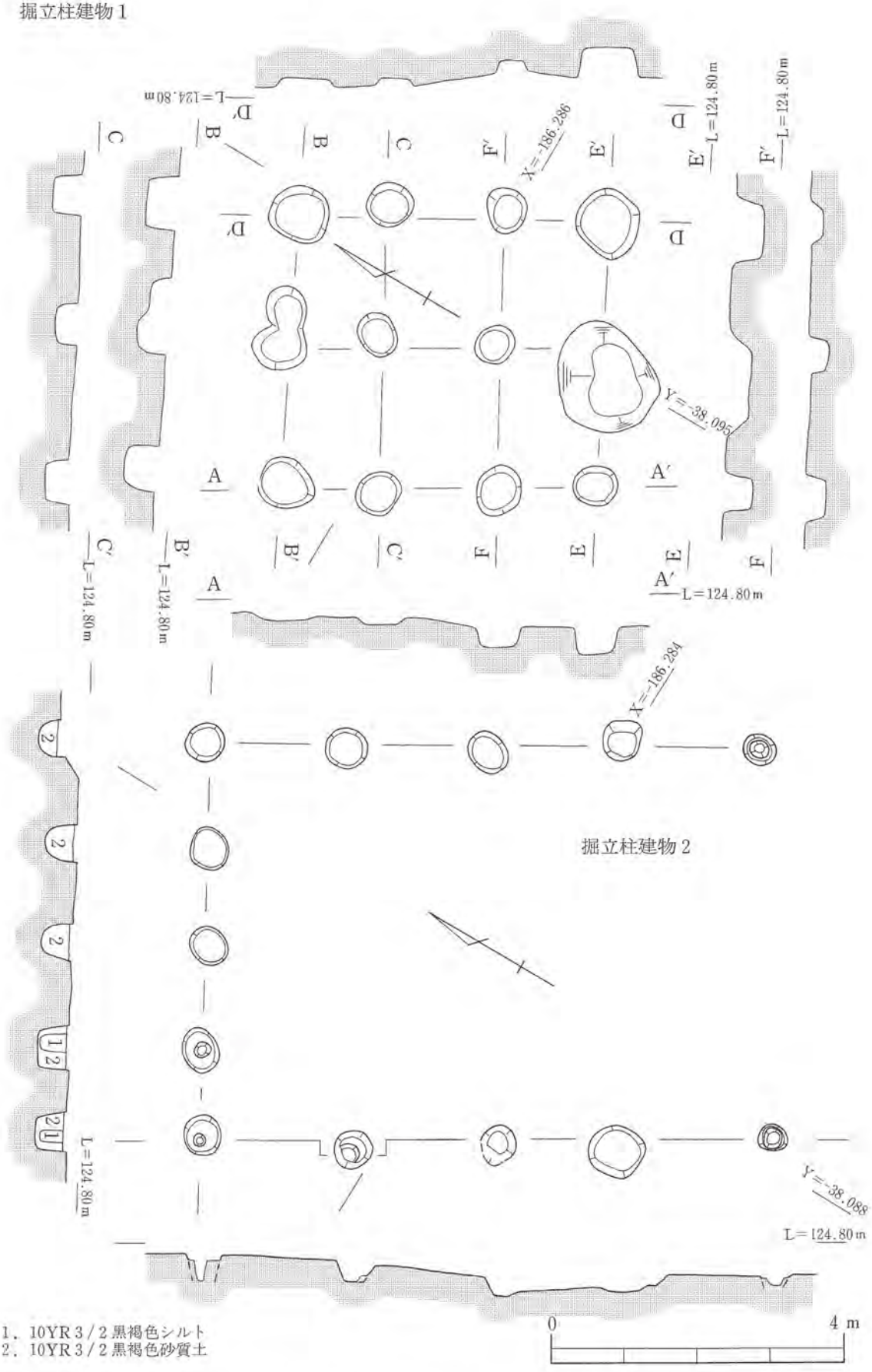
掘立柱建物4（第91図、PL.40）

調査区の東部で検出した東西2間（3.93m）×南北3間（4.71m）の総柱建物である。棟方向は南北で、主軸はN－22°－Wを指す。柱間は桁行が1.31～1.80m、梁行が1.78～2.04mで、梁行の柱間の方が総体的に長い。掘形の平面形状は円形もしくは隅丸方形で、直径33～92cmとバラつきが見られ、深さは35～52cmである。部分的に確認できた柱当たりから、柱は直径30cm前後であったと考えられる。

遺物は柱穴から須恵器の破片と、混入遺物として弥生土器片が出土している。

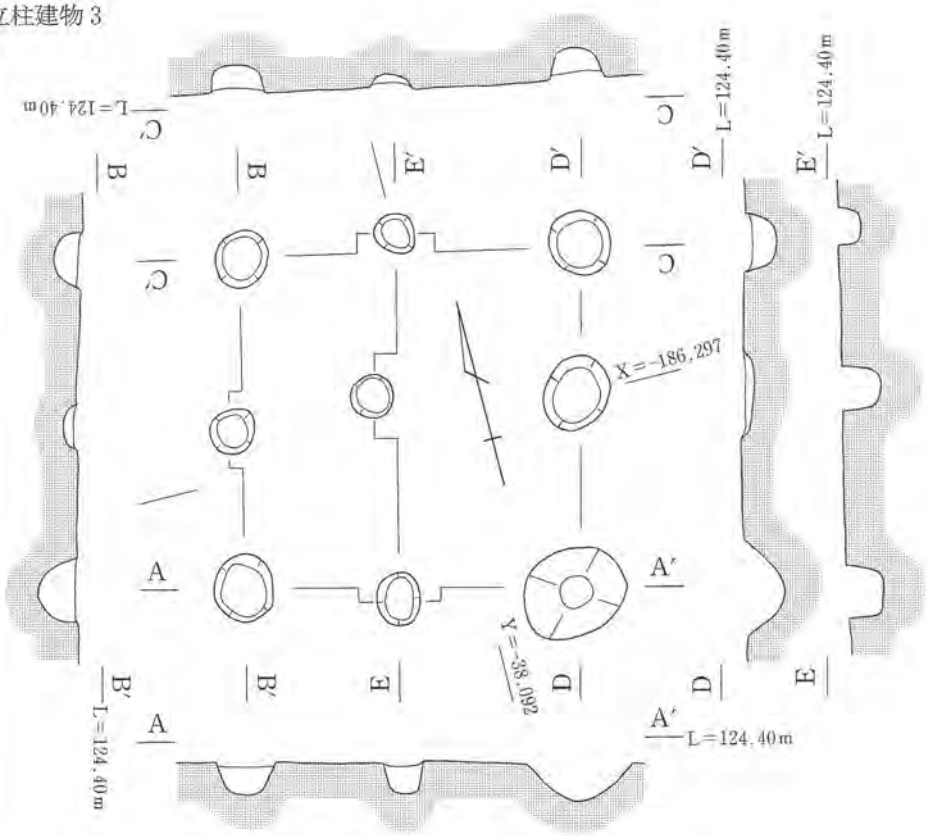
掘立柱建物5（第90図）

調査区東部で検出し2間（4.36m）×3間（3.94m）の掘立柱建物である。棟は北東－南西方向で、主軸はN－45°－Eを指す。建物プランは平行四辺形となっている。柱間は桁行が1.30～1.64m、梁行が1.74～2.09mで、梁行の柱間の方が総体的に長い。掘形の平面形状は円形もしくは隅丸

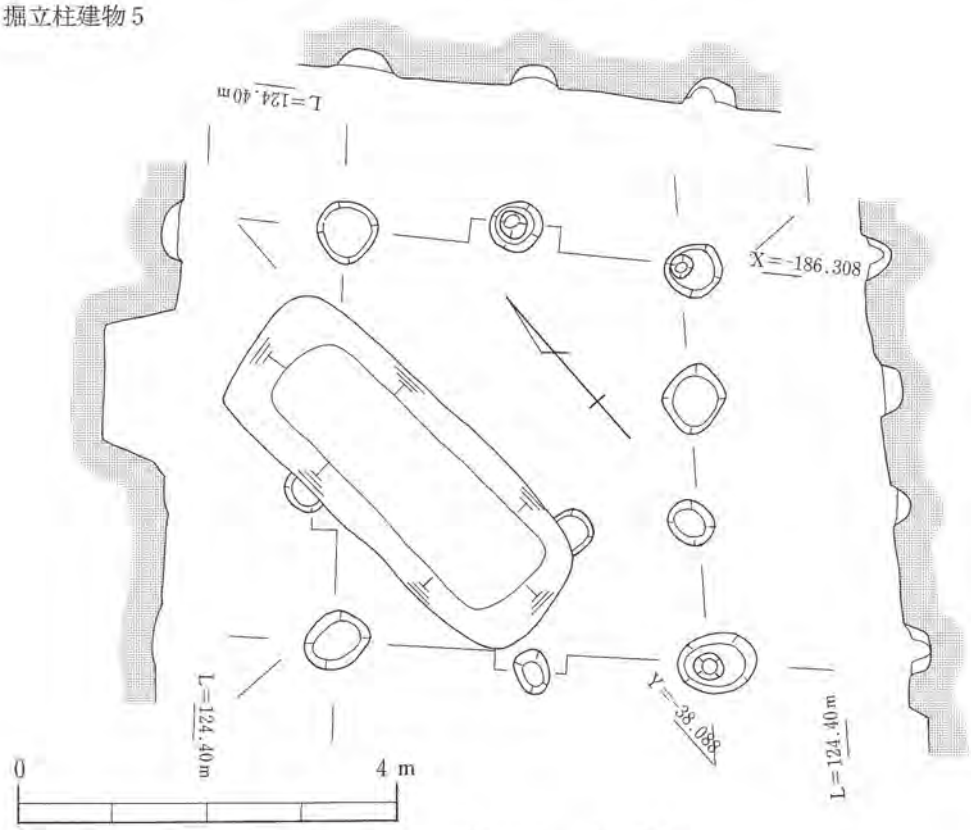


第89図　掘立柱建物1・2実測図

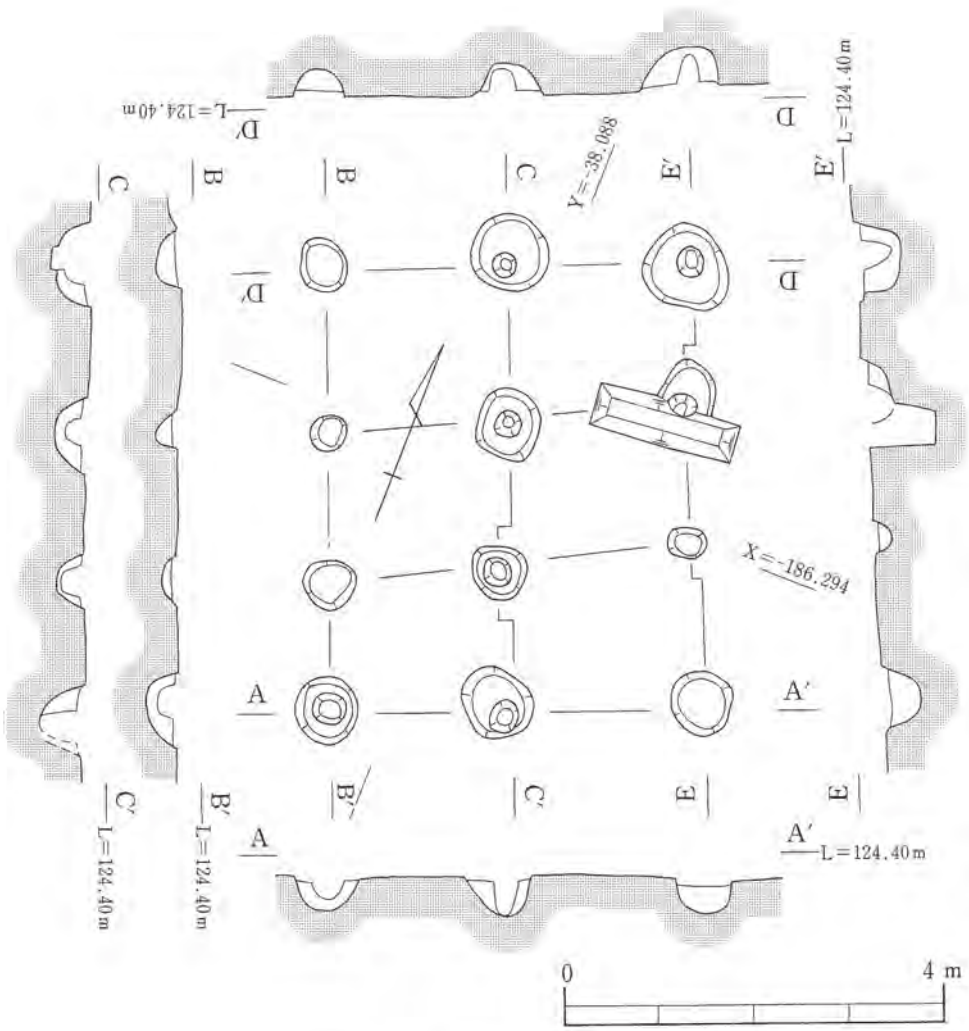
掘立柱建物３



掘立柱建物５



第90図　掘立柱建物３・５実測図



第91図　掘立柱建物４実測図

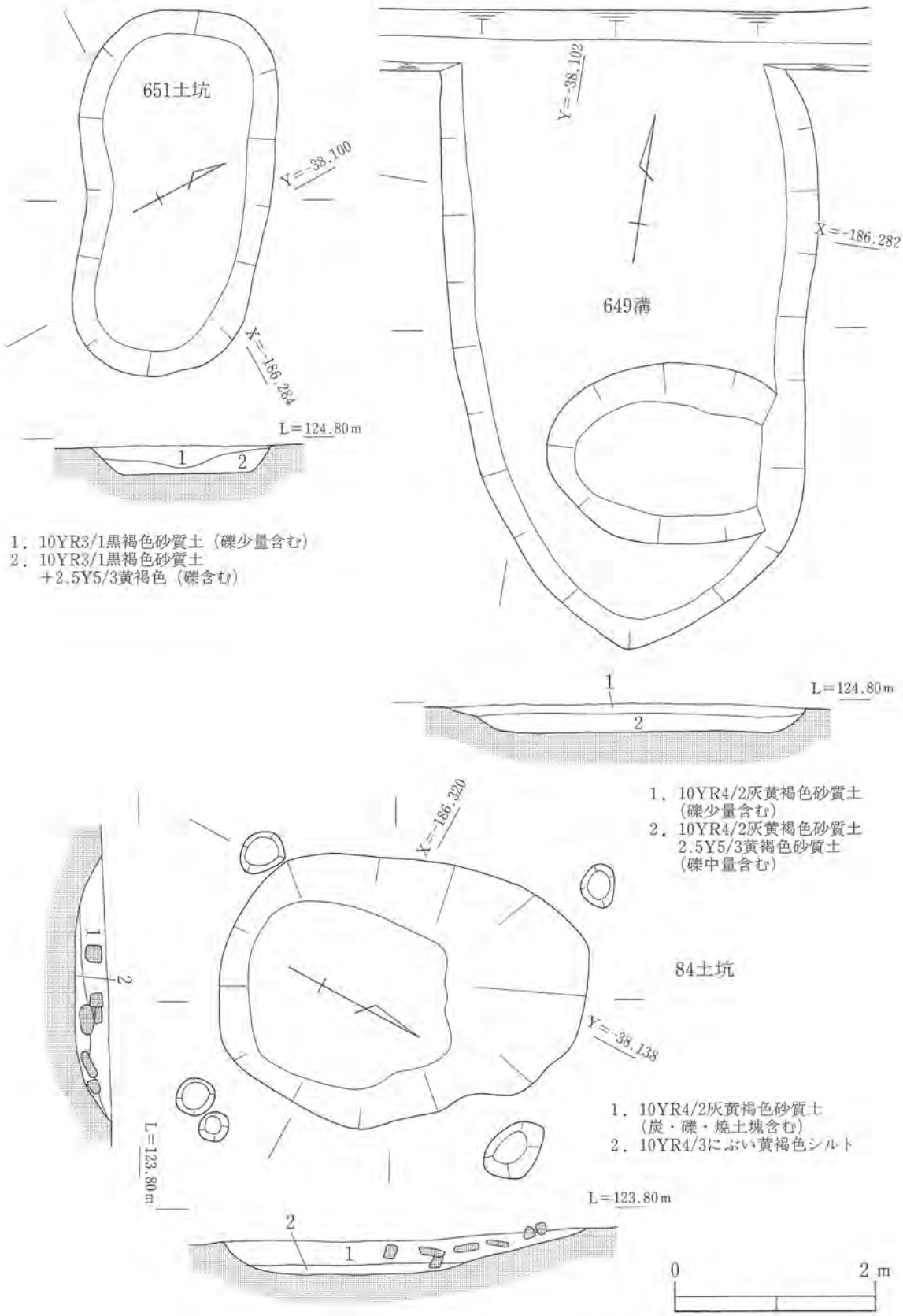
方形で、直径35～84cmとバラつきが見られ、深さは29～32cmである。部分的に確認できた柱当たりから、柱は直径25～34cm程度であったと考えられる。

遺物は柱穴から弥生土器の破片が出土している。掘立柱建物３と同様に弥生時代の建物の可能性もある。

651土坑（第92・94図、PL.41）

調査区北端で検出した平面形状が楕円形を呈する土坑で、長さ3.72m、幅1.90m、深さ29cmを測る。断面の形状は船底状を呈する。

遺物は縄文土器(193)、弥生土器の破片やサヌカイト剥片が出土している。193は晩期末の突帯文土器の深鉢で、直立する口縁端部外面に刻み目をもつ断面台形の突帯を付す。



第92図 651土坑・649溝・84土坑実測図

160溝（第94図）

調査区南端で検出した東西方向に伸びる溝で、南西側は調査区域外となる。調査区内で約22m分確認しているが、東端は北方向に折れて終わっている。幅1.0～2.5mで、深さは10～20cm程度である。

遺物は弥生土器（194）、須恵器が出土している。194は甕で、外面をナデ調整している。

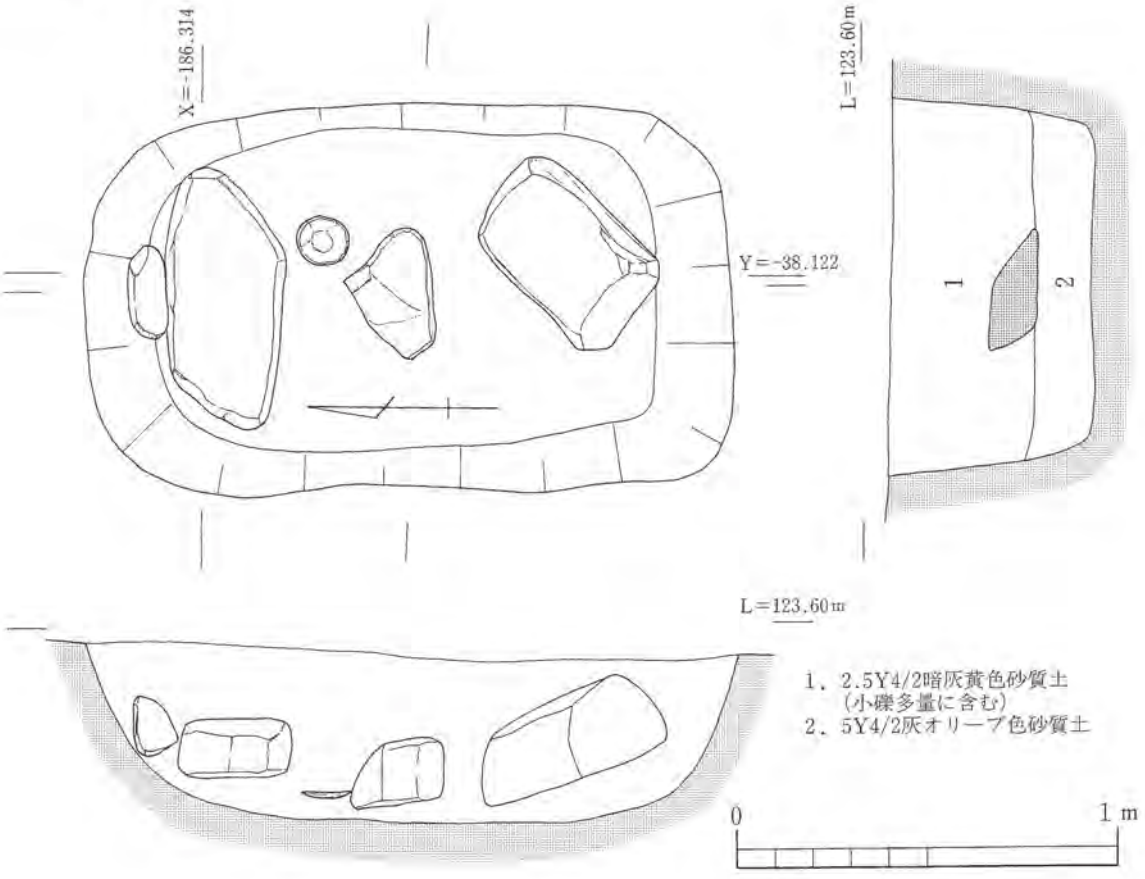
649溝（第92・94図、PL.41）

調査区北東部で検出した南北方向に延びる溝で、北側が調査区外となる。幅3.9m、深さ30cmで、長さ6.5mを確認している。

遺物は弥生土器（195～197）、サヌカイト剥片が出土している。195は甕で、体部外面をヘラミガキ調整する。196･197は広口壺で、外反する口縁部の端部が垂下する。196は外面に凹線文を4条巡らし、その上をヘラ先で縦方向に刻む。上面には櫛描列点文を巡らす。

630ピット（第94図、PL.82）

調査区北東部、649溝の東隣で検出したピットである。平面形状は楕円形で、38cm×23cm、深さ10cmを測る。



第93図　92土坑実測図

遺物は弥生土器（198）が出土する。口縁端部はやや肥厚し、外方に面がある。体部外面上半部は平行タタキ調整、下半部はケズリ調整する。周囲に破片が散乱しているものの、小ピットからほぼ1個体に復元できる土器が出土することから甕棺であった可能性もある。

428土坑（第95図、PL.83）

調査区中央東寄りで、79竪穴住居の埋土上面で検出した、楕円形を呈する土坑である。規模は3.6m×3.2mで、深さは約50cmを測る。

遺物は土師器（203～212・215）、瓦器、中国製白磁（213）・青磁（214）などが出土している。

203～208は皿である。底部がやや丸みを持ち、口縁端部を丸く収めているものが多く、底部下面を指押さえの後にナデ調整している。口径は10.0～11.0cmと小さい。209～212は小皿で、底部は指押さえ・ナデで、口径は8cm前後である。215は土釜で、口縁端部を上方へ大きく拡張する。体部外面はナデ調整である。

213は皿で、底部は露胎となる。214は碗で、高台内の中央が露胎となる。

84土坑（第92・95図、PL.83）

調査区南西部、90方形周溝墓の南東で検出した土坑である。平面形状は不整楕円形で3.68m×2.70m、深さ33cmを測る。埋土は2層に分けられるが、上層には礫・焼土・炭が多く含まれる。

遺物は土師器、瓦器、瓦質土器（216）などが出土している。216は和泉D1型の14世紀に所属する釜で、内湾する口縁部の下に段を2段作り出している。内外面は大きくナデ調整し、口縁部内面には部分的にハケ調整を施す。

92土坑（第93・95図、PL.41・83）

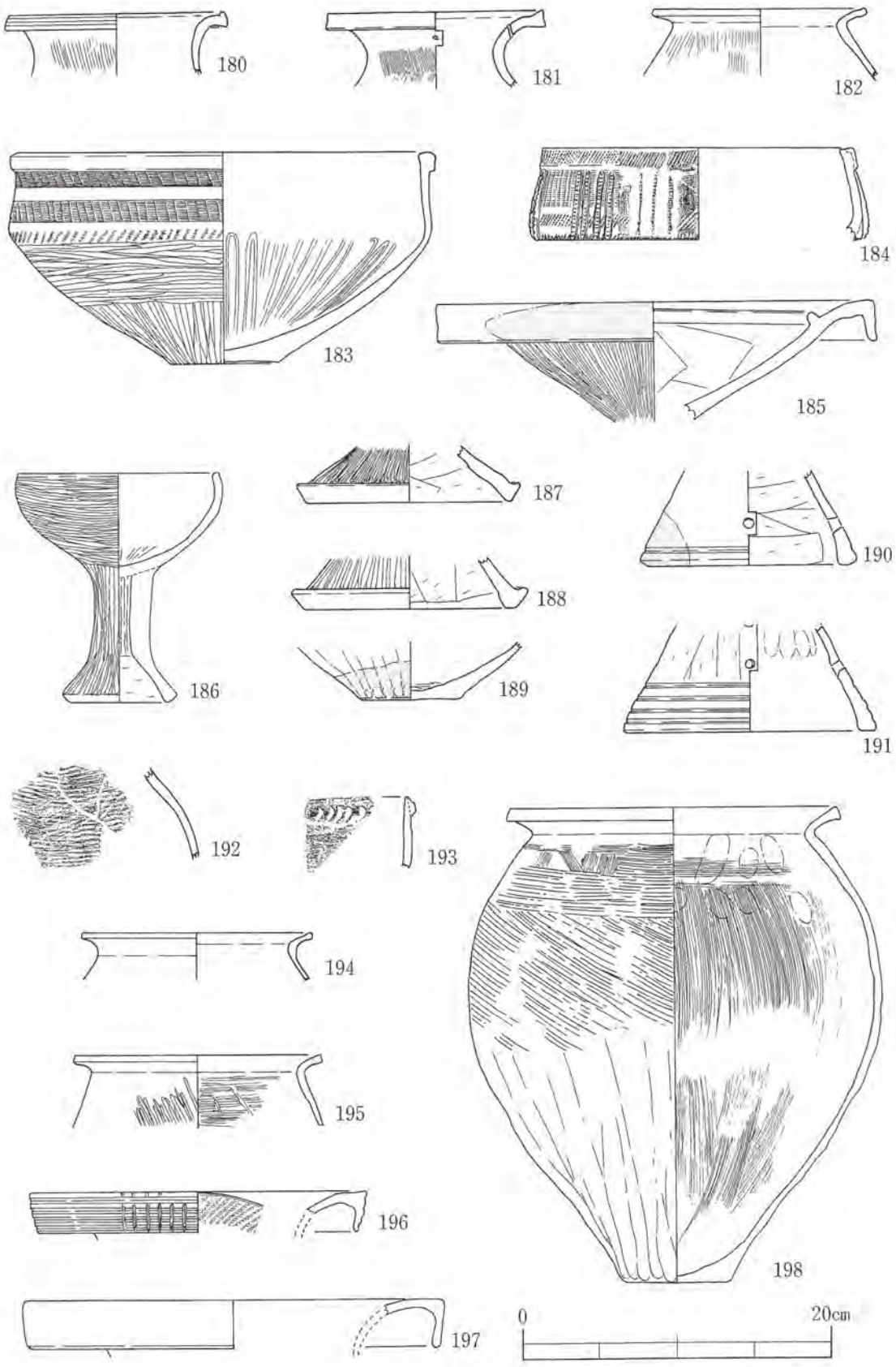
調査区の中央付近で検出した土坑である。平面形状は隅丸の長方形で長さ1.7m、幅1.0m、深さ40cmを測る。床面よりやや上には、25～70cmの大きさの川原石4個が置かれ、瓦器椀の完形品1点が出土している。

217は断面三角形の高台を付す。口縁部は外反し、内面にはミガキが認められる。13世紀後半代に帰属する遺物である。

668土坑（第95図、PL.83）

調査区北中央部付近で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は66cm×48cm、深さ7cmを測る。

遺物は瓦器椀が3点、瓦器皿4点が出土しており、うち皿3点は完形品である。出土状況から埋納していた可能性もある。218は瓦器椀で、低い断面三角形の高台を付す。内面にはミガキを密に施す。219～222は瓦器皿で、底部は指押さえとナデ調整である。椀は口径が13.5cm、皿は口径が8～8.5cmで、13世紀前半から中頃に帰属する遺物であると考えられる。

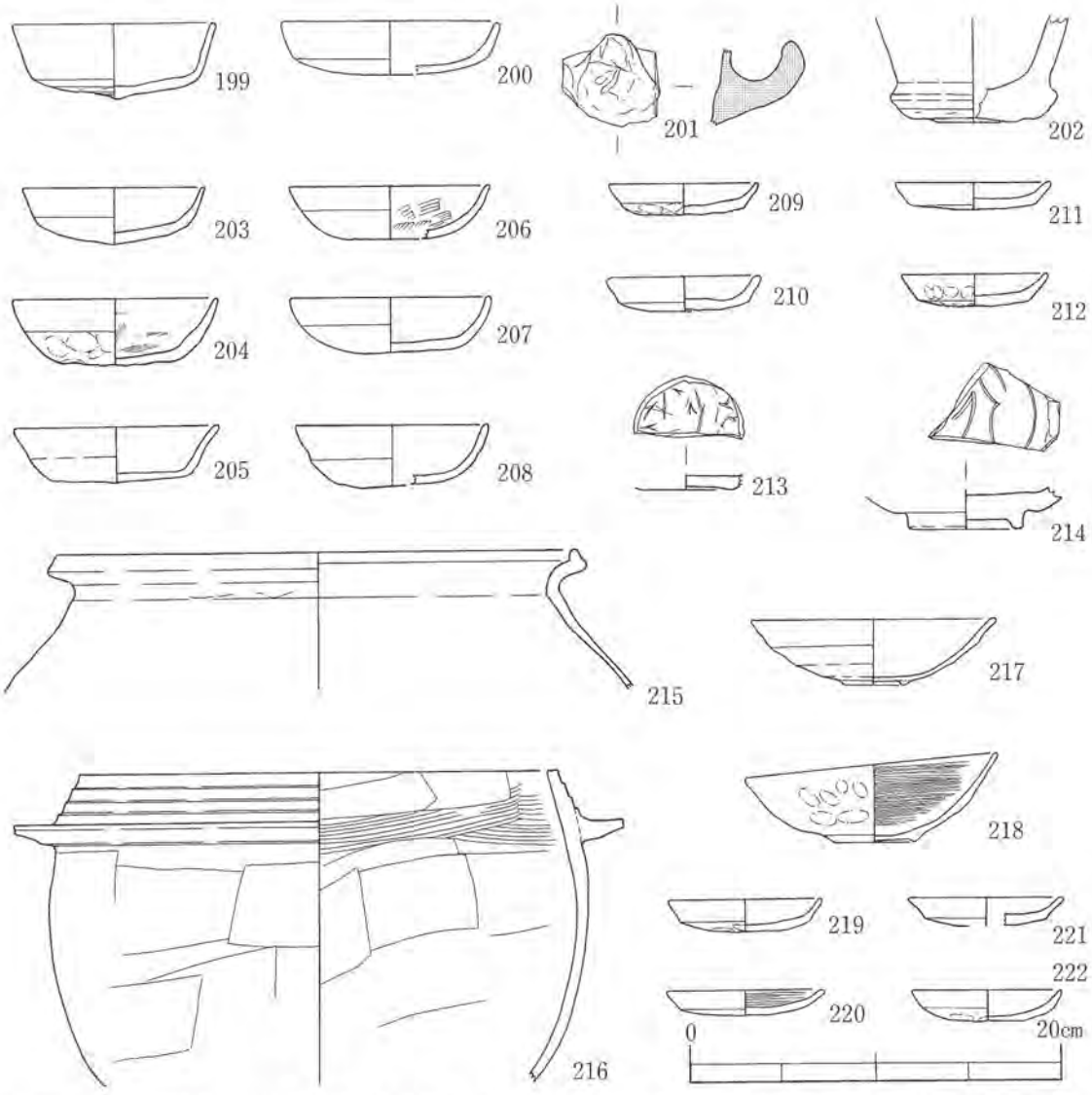


180～192：89方形周溝墓、193：651土坑、194：160溝、195～197：649溝、198：630ピット

第94図　1・6区遺構出土遺物実測図

第3遺構面検出の遺構（PL.41）

検出した遺構は小規模な土坑数基とピットのみである。但し、遺構は第4層を掘削した範囲全体から検出されている。時期はその殆どが弥生時代に属すると考えられる。

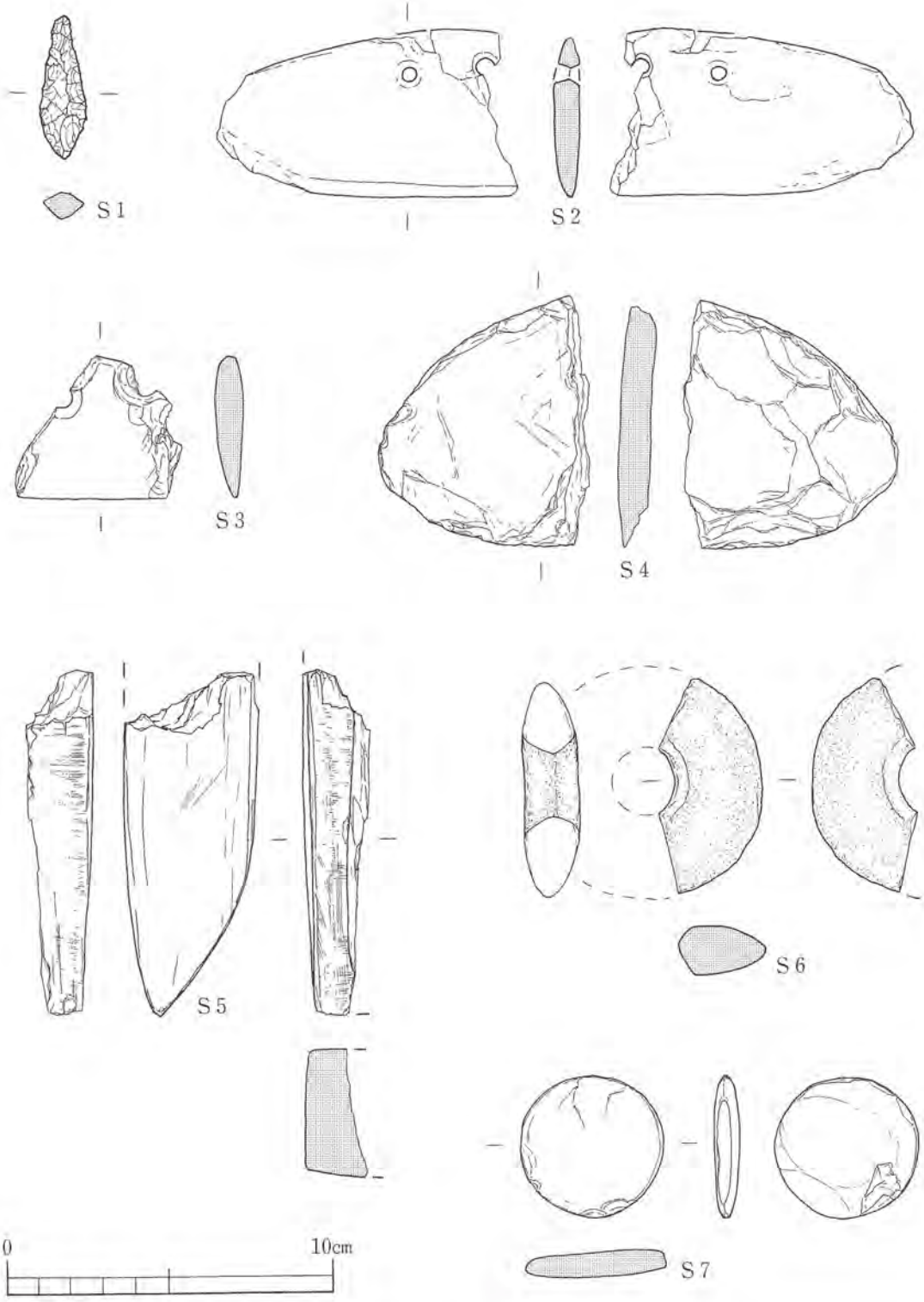


199～201：119竪穴住居、202：掘立柱建物2、203～215：428土坑、216：84土坑、217：92土坑、218～222：668土坑

第95図　1・6区遺構出土遺物実測図



第96図　1・6区第2遺構面遺構配置図



S1：174竪穴住居、S2：1区第4層、S3：1区、S4：6区、S5：631竪穴住居、S6・7：90方形周溝墓

第97図　1・6区出土石器実測図

4．2・7区の調査（第137図、巻頭図版5、PL.42～45）

1・6区と同様に第1次から第3次の3箇年で調査をおこなっており、さらに各年度の調査区もいくつかに分断されるが、一面で繋がっていることから2・7区を同時に記述する。調査区の現状は、宅地・水田・果樹畑であり、水田は段差をもって造られている。

第5層上面と地山直上で遺構検出をおこなっている。第5層上面の遺構の時期は、基本的には飛鳥時代と考えられるが、中世の時期のものが含まれている可能性がある。この面で検出した遺構には、掘立柱建物や小石室墓の他土坑数基がある。地山面で検出した遺構の時期は、その殆どは弥生時代と飛鳥時代であるが、包含層の遺存していない範囲で検出された遺構に関してはそれ以降の時期のものも含まれていると思われる。検出した遺構は、竪穴住居、方形周溝墓、土坑等がある。

包含層等出土遺物（第98～100・134図、PL.84～86・99）

第3層　223～225は弥生土器である。223はⅠ様式新段階の広口壺で、頸部は直立する。口縁部は外反し、端部を丸く収める。頸部には7条の沈線文を巡らす。224はⅢ様式の広口壺で、外反する口縁部の端部を拡張し、外面に波状文、内面に扇形文を巡らす。外面の頸部から口縁部にかけては縦方向のハケ調整で、頸部には直線文を巡らす。225は中期の高杯で、脚柱部は円筒状で、大きく広がる裾の端部が上下に突出する。外面はヘラミガキ調整である。

226～228は須恵器である。226は杯蓋で、丸みを帯びる天井部の2/3は回転ヘラケズリ調整である。口縁端部は丸く収める。227は口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸い。底部外面の2/3を回転ヘラケズリ調整である。226・227は6世紀末頃に帰属する。228は杯身で、底部は回転ヘラケズリ調整である。7世紀中頃に帰属する。

229は土師器羽釜である。「く」の字に屈曲する口縁部の端部を内側に拡張する。肩部に断面三角形の低い突帯を巡らす。13世紀後半頃に帰属すると考えられる。

230・231は白磁碗で、口縁部は玉縁状である。232・233は青磁碗で、232は高台内が、233は高台内の一部が露胎である。

234は備前焼擂鉢で、間壁編年ⅣA期に相当し14世紀末頃に帰属する。

235・236は縄文時代晩期末の突帯文土器深鉢である。235は口縁端部外面に刻み目を付す断面三角形の突帯を貼付する。刻み目は小さいD字状である。236は二条突帯をもつタイプで、屈曲する体部に刻み目を付す突帯を巡らす。

237・238は弥生土器の甕底部で、底部端が外方へ突出する。237はやや上げ底状である。238は、底部中央に焼成前の穿孔がある

239・240は土師器羽釜である。239は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部は拡張しない。肩部に付した鍔は横方向に長く延びる。12世紀中頃に帰属すると考えられる。240は口縁部が「く」の字

に屈曲し、端部をわずかに上下に拡張する。肩部に断面三角形の低い鍔を貼付する。13世紀後半頃の土器と考えられる。

241・242は土師器皿である。241は底部がやや丸みを呈する。242は小皿で、体部・口縁部は短く斜め上方へ立ち上がる。底部は回転糸切り調整である。

243は奈良時代の杯身で、底部端に高台が付く。

244は平瓦の破片で、凸面に縄席文、凹面に布目痕がある。

第3層から出土する遺物は、縄文時代晩期末から室町時代の14世紀代の遺物までが含まれており、層の形成された時期は中世前半頃であると考えられる。

機械掘削時　245・246は縄文時代晩期末の突帯文土器深鉢である。口縁端部外面に低い断面三角形の突帯を付す。突帯上には刻み目を施す。245は口縁端部にも細かい刻み目を施す。体部外面には条痕がみられる。

第4層　247・248は土師器甕で、口縁部は「く」の字に屈曲する。247は口縁端部が外方に面をもつ。外面は斜め方向のハケ調整で、内面にも横方向のハケ調整が認められる。248は口縁端部を丸く収める。口縁部内面は横方向のハケ調整である。ともに古代の遺物である。
249は須恵器の無蓋高杯で、杯部底に2箇所段が巡る。

250は平瓦で、凹面に布目痕が、凸面にナデ調整痕がある。

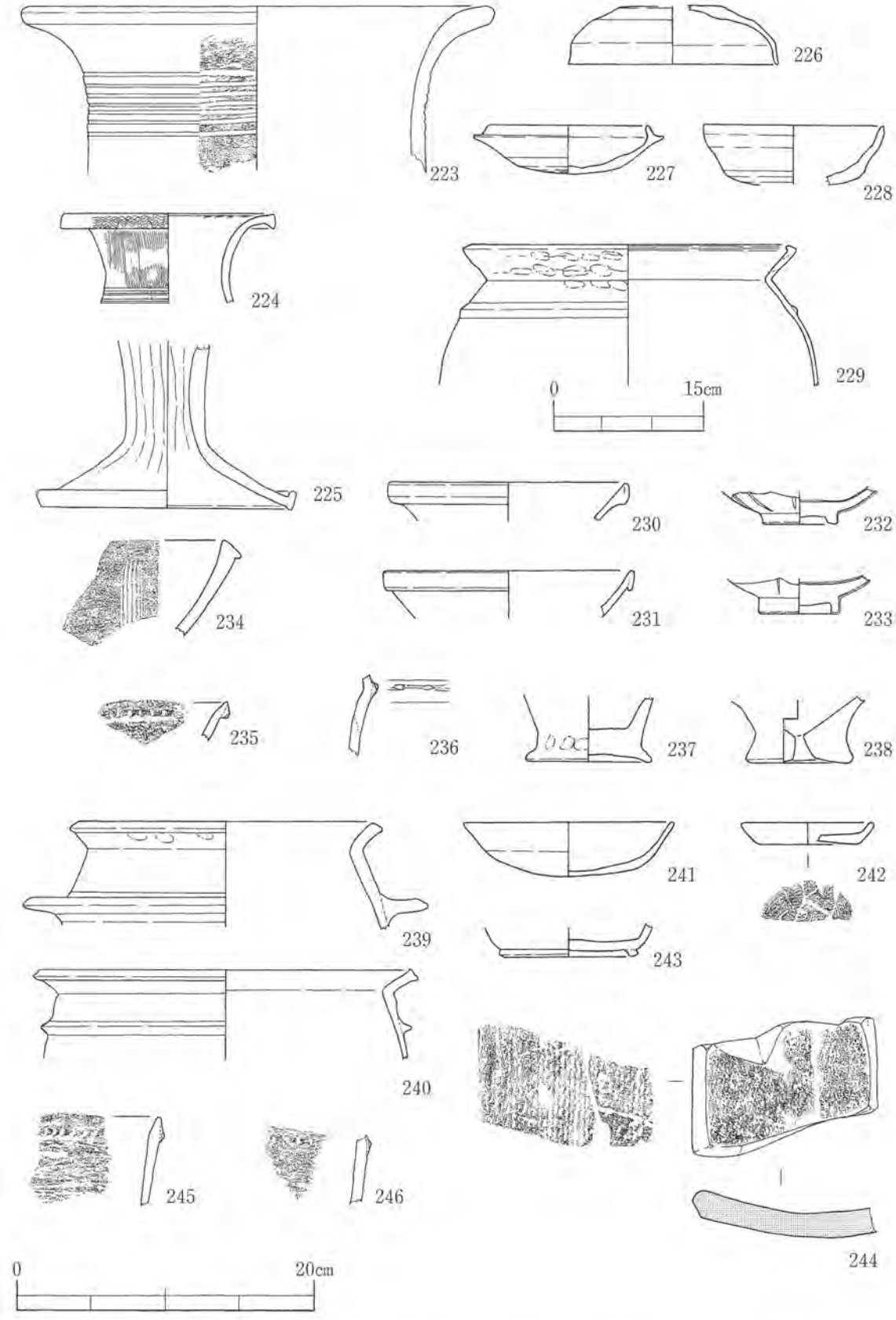
251～253は弥生土器である。251は中期の甕で、口縁部がゆるく外反し、外面をナデ調整している。252・253はIII様式の壺体部破片で、肩部の外面に直線文と扇形文によって擬似流水文を施す。

254～256は土師器で、このうち254は甕で、口縁は「く」の字形に外反する。体部外面は斜め方向のハケ調整である。255・256は皿で、器高が低く大型であり、口縁端部を丸め内側に返している。底縁部には低い高台を付けている。内外面ともナデ調整している。9世紀に所属するものと思われる。

257～260は古墳時代後期の須恵器である。257は壺で口縁端部を丸く収めている。体部外面を平行タタキの後ナデ調整している。258は細頸壺で、口縁端部を上方に拡張する。259は高杯の脚部で、裾端面を平らに面取りしている。260は壺で、口縁端部を外側に拡張し、外面に沈線文と波状文を巡らしている。

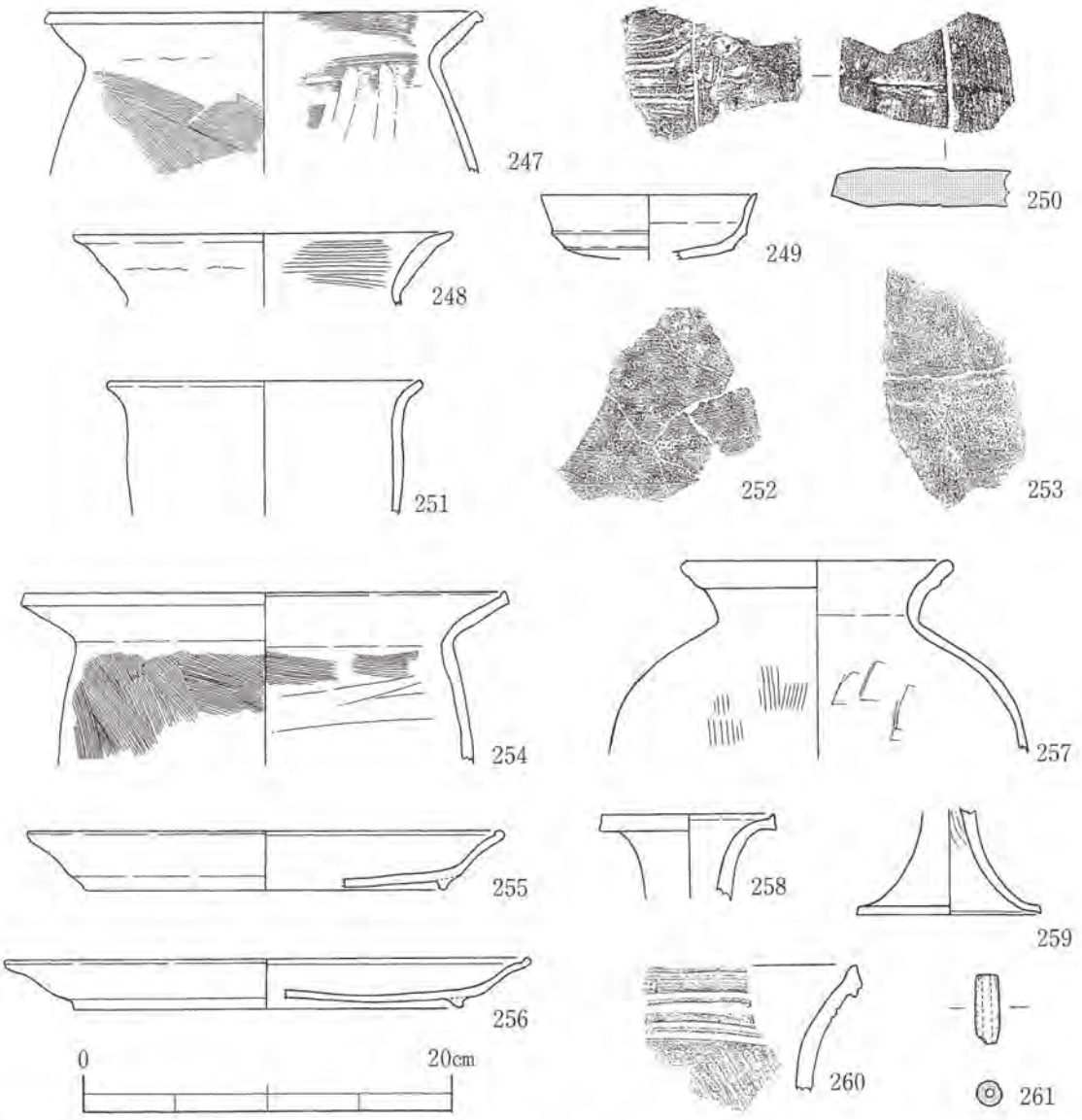
261は土師質の管状土錘である。

第5層　262～273は弥生土器である。262・263は広口壺で、このうち262は口縁部が垂下する。端部外面および頸部に簾状文を巡らす。263は口縁端部に粘土を付加して上下に大きく拡張し、端部外面に簾状文を2段巡らしている。簾状文の上にはヘラ先による刺突文が認められる。264・265・267は細頸壺で、このうち264は内湾気味に長く延びる口縁部をもち、端部は上方に面を有する。口縁端部下には櫛描列点文を綾杉状に刻み、その下位には直線文1条・波状文1条・直線文



223～244：第３層／223～228：7-1区、229～235：7-2区、236～244：7-3区、245・246：機械掘削時

第98図　7区包含層等出土遺物実測図



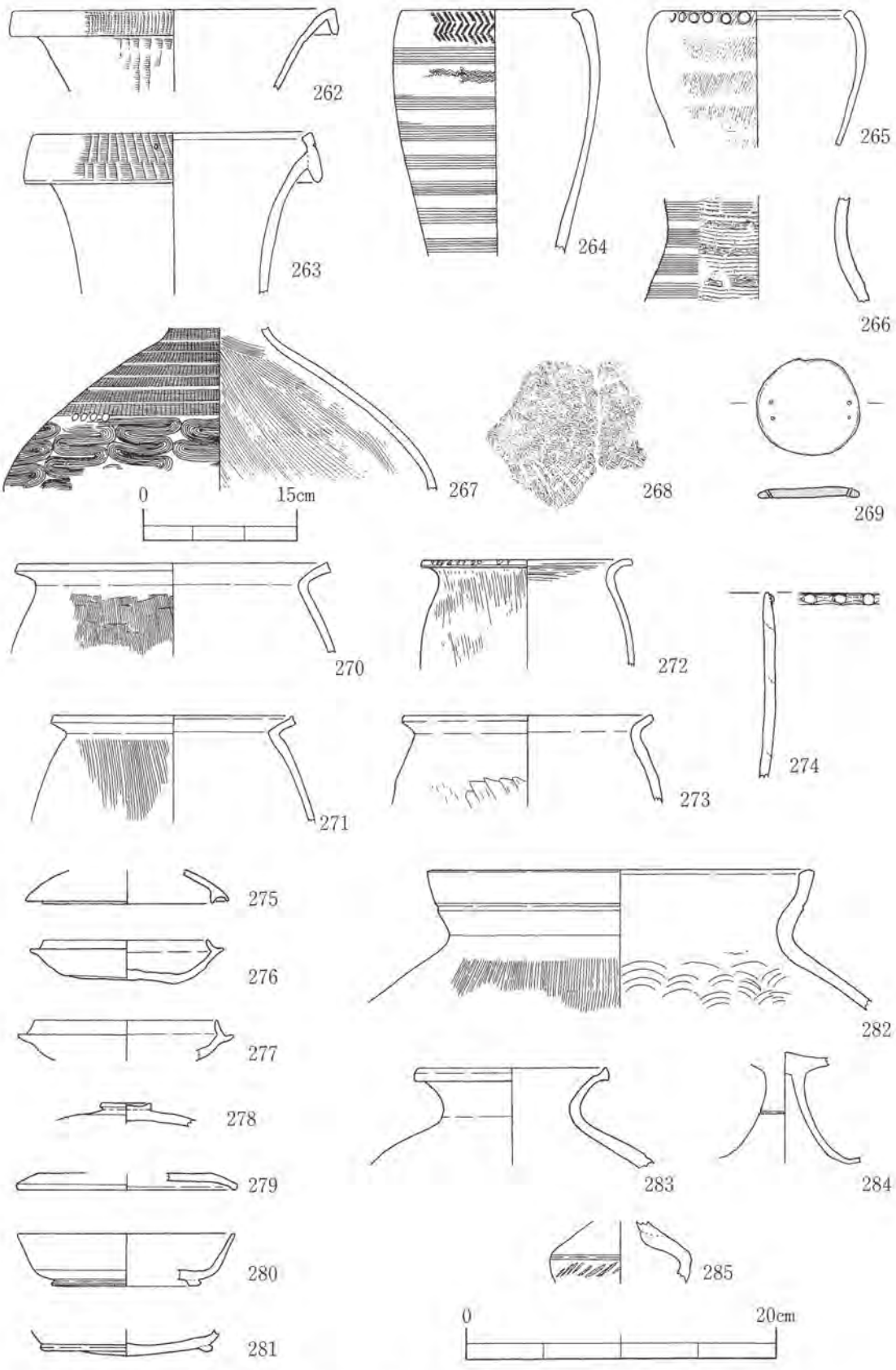
247～261：第４層／247～250：7-1区、251～261：7-2区

第99図　７区包含層出土遺物実測図

６条を連続して巡らす。265は内湾する口縁部の外面に櫛描列点文を５段巡らし、端部下には円形浮文を貼り巡らしている。胎土から生駒西麓産の土器と考えられる。267は頸部から体部上位にかけての破片で、外面に簾状文７条とその下位に流水文を巡らす。文様の境目には四個一単位の円形浮文を貼付する。266は広口壺で、頸部に幅広の直線文を４条以上巡らす。268は体部上位の破片で、外面に直線文と斜格子文を巡らす。

269は円盤状を呈する壺蓋で、小孔を左右に二個一対斜めにあけている。

270～273は甕である。270・271は、口縁部が「く」の字に屈曲し、端部は外方に面を有する。体部外面を縦方向のハケ調整を施す。胎土に金雲母を含む。272は口縁部が外方に屈曲し、丸く収



269・281・283：7-2区第5層、他は7-1区第5層

第100図　7区包含層出土遺物実測図

めた端部に刻み目を施す。体部外面は縦方向、口縁部内面は横方向のハケ調整である。胎土に金雲母を含み、形態などからも大和からの搬入品と考えられる。273は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部は外方に面を有する。体部外面は中位のやや上より縦方向のケズリ調整である。

弥生土器はⅢ様式からⅣ様式前半代のものが多いが、それらの中にあって、266・272はやや古い様相を呈する。

274は縄文時代晩期末の突帯文土器深鉢である。体部から口縁部にかけて直立し、口縁端部外面に突帯を貼付け、押圧状の刻み目を施す。

275～285は須恵器である。275は杯蓋で、内面のかえりは、蓋の口縁端部よりも下方に延びている。276・277は杯身である。口縁部は短く立ち上がり内傾する。276は底部外面の1/2はヘラケズリ調整である。外面に自然釉が付着する。278･279は杯蓋である。278のつまみは扁平である。279は口縁端部が玉縁状に肥厚する。280・281は杯身で、底部外縁部に高台を付けている。

282は甕で、内湾気味に広がる口縁部の中ほどに凹線文を巡らす。端部は上方に面を有する。肩部外面は縦方向の平行タタキ調整で、内面に同心円状の当具痕がある。口縁部から肩部にかけて自然釉が付着する。

283は壺で、外反する口縁の端部が上下に肥厚する。肩部に凹線文を巡らす。口縁部から肩部にかけて自然釉が付着する。

284は高杯で、ラッパ状に開く脚部外面中央に凹線文を１条巡らす。

285は長頸壺で、体部中位に凹線文を1条巡らし、その下に斜め方向の刻み目を施す。

須恵器のうち、275～277・283～285は古墳時代末から飛鳥時代に、278～282は奈良時代以降のものである

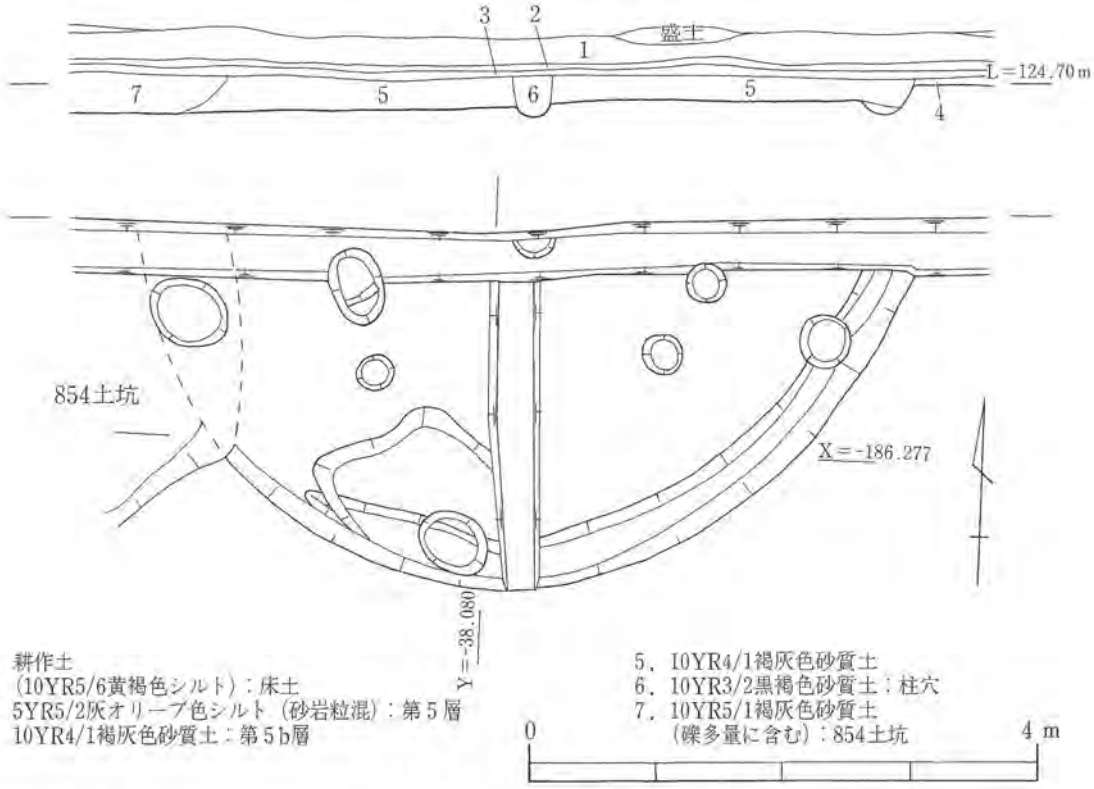
S40は打製石剣で、基部を丸くなるように調整している。

838竪穴住居（第101・103・133図、PL.56・86・98）

調査区北西隅で検出した円形竪穴住居で、854土坑と重複し、それより古い。北半分が調査区外に及ぶため全容は不明であるが、直径6.32mで、深さは最も残りの良い部分で27cmを測る。主柱は４本柱であったと考えられ、近接して二個一で検出できたことから、建て替えをおこなっている可能性がある。柱穴は円形もしくは楕円形で、径30～34cm、深さ21～30cmを測る。壁溝は幅16～40cmで、深さは床面から３～10cmを測る。炉は検出できなかった。

遺物は弥生土器の他、石鏃・石錐を含む石器やサヌカイトの剝片等が45点出土した。

286～288は弥生土器で、Ⅲ様式後半からⅣ様式前半に帰属するものである。286は鉢で、口縁端部に粘土帯を付して拡張し、外面中央部に凹線文を巡らし、頂部に櫛描列点文を外縁部に刻み目を入れている。口縁部下に直線文と波状文を巡らしている。287・288は壺の体部上位の破片で、このうち287は外面に直線文を連続して巡らす。288は外面に上から波状文・扇形文・直線文の順



第101図　838竪穴住居実測図

で連続して巡らす。289は小孔を持つ不整形の土製円盤で、土器破片を転用したものである。

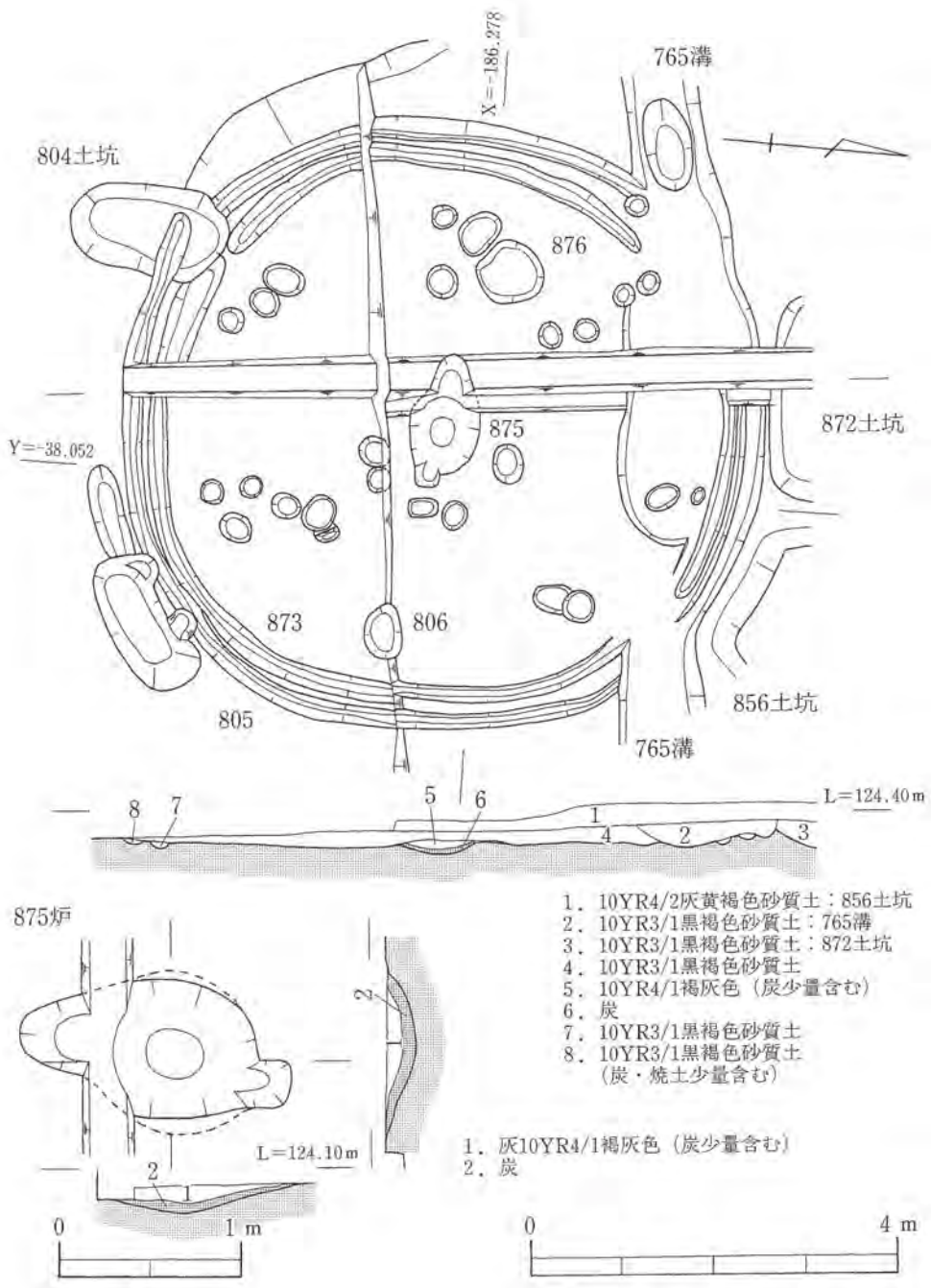
S8・S9は凸基有茎式石鏃である。

760竪穴住居（第102・103・133図、PL.46・86・98）

調査区北側の西寄りで検出した円形住居で、765溝と重複し、それより古い。壁溝が二重に検出できたことから、同心円状に拡張が一回行われたことが窺え、各々の規模は760－1が直径6.48～6.94m、760－2が6.72～7.08mである。遺構の遺存度は悪く、最も残りの良い部分で深さは約10cmである。壁溝は幅10～38cmで、深さは床面から５cm前後である。柱穴は数多く検出できたが、配置から主柱は５本以上であったと考えられる。柱穴の形状は円形もしくは楕円形で、径は25～40cm程度である。住居のほぼ中央に東西1.5m×南北0.8mの炉があり、拡張以前の炉をそのまま利用していると考えられる。東西の両肩部が浅く掘り窪められており、１区の79竪穴住居のように松菊里型住居に類するものであろうか。炉の深さは20cm程で炭層は認められたが底は焼けていなかった。

遺物は弥生土器の他、石器及びサヌカイトの剥片等が50点以上出土している。石器には石鏃２点・石匙１点・管玉１点がある。

290は弥生土器甕で、口縁部が短く外方に湾曲し、端部を丸く収めている。外面は縦方向のハケ



第102図　760竪穴住居実測図

調整である。

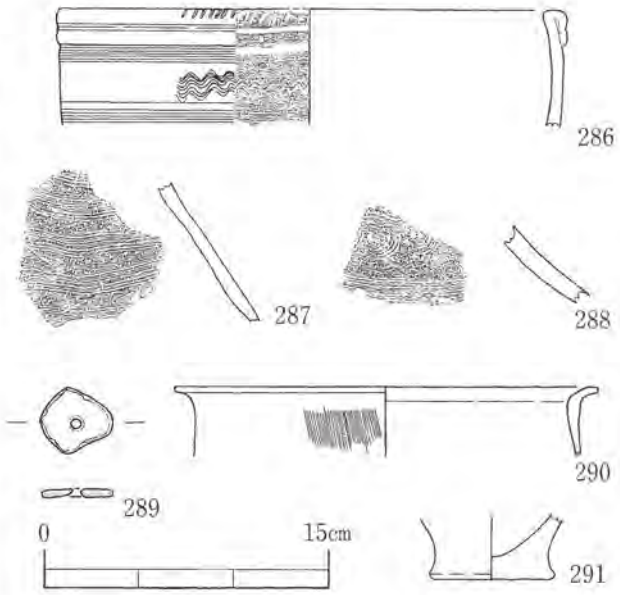
S10～S13は石鏃で、S10は平基無茎式、S11・S12は凸基無茎式、S13は凸基有茎式である。

S14は石匙で、上部の摘まみ部分は欠損している。

S24は碧玉製管玉である。長さ2.1cm、径0.8cmで、両端より穿孔している。

821竪穴住居（第104図、PL.47）

調査区北西にある219方形周溝墓の墳丘部内で検出し円形住居で、822竪穴住居と重複し、それより新しい。平面形状はやや楕円形を呈し、規模は4.65m×5.10mで、深さは大きく削平され5㎝程度しか残っていなかった。壁溝は西側でのみ検出した。幅6～8㎝で、深さ2～3㎝程度とごく浅い。中央で検出した炉は平面形状が不整楕円形を呈し、規模は80㎝×92㎝で、深さ35㎝を測る。炉の東西に近接して柱穴が存在し、松菊里型住居に類するものであろうか。床面上から多くの柱穴を検出しているが、主柱は4本であったと考えられ、径、深さとも20㎝余りである。



286～289：838竪穴住居、290：760竪穴住居、291：822竪穴住居

第103図　838・760・822竪穴住居出土遺物実測図

遺物は弥生土器のほかサヌカイト剥片が出土している。

822竪穴住居（第103・104図、PL.47）

調査区北西で821竪穴住居・219方形周溝墓と重複する。古い順から822竪穴住居・821竪穴住居・219方形周溝墓となる。822竪穴住居は平面形状が楕円形を呈し、規模は6.09m×7.56mである。依存状態は悪く、深さは5㎝前後である。西側でのみ検出した壁溝は、幅5㎝前後で、深さは1・2㎝とごく浅い。中央部で検出した炉は平面形状が不整楕円形で、90㎝×100㎝、深さ45㎝を測る。柱穴は床面上でいくつか検出しているが、主柱は5本以上であったと考えられる。

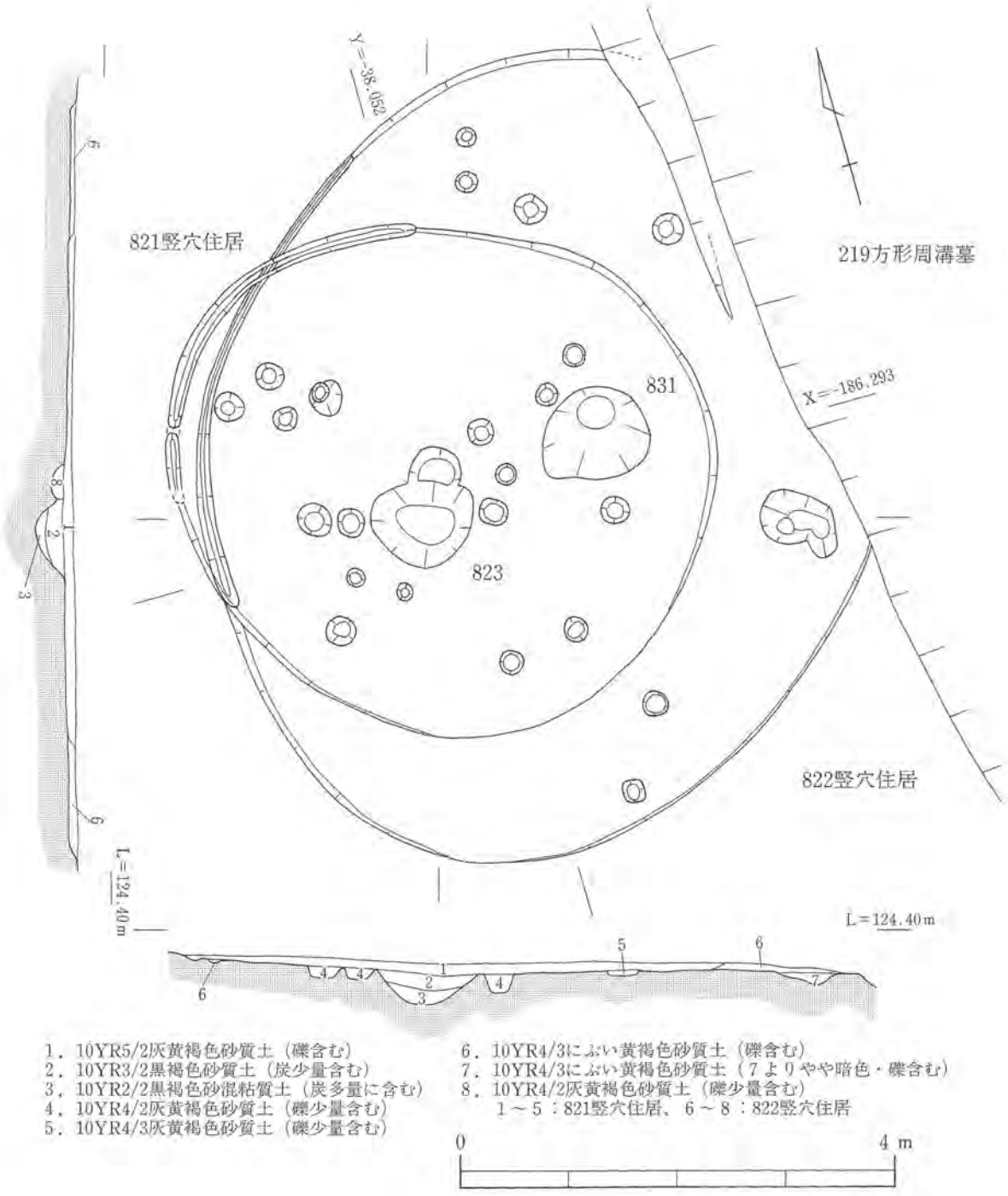
遺物は弥生土器が出土している。291は甕で、底部端が外側へ突出する。

219方形周溝墓（第105・106・133図、PL.49・87・98）

調査区北西にある南北に長い方形周溝墓で、規模は南北18.1m×東西13.1mを測る。周溝は幅1.8～2.8mで、四周を巡り陸橋部はない。周溝の断面形状は船底状を呈し、最も深い部分で50㎝を測る。墳丘の規模は南北17.2m×東西12.3mで、盛土は削平され埋葬施設は検出できなかった。

周溝から出土した遺物には弥生土器、石錐、サヌカイト剥片などがあり、このほか周溝への混入遺物として土師器・須恵器が出土している。弥生土器では生駒西麓産の土器が30%以上を占めている。

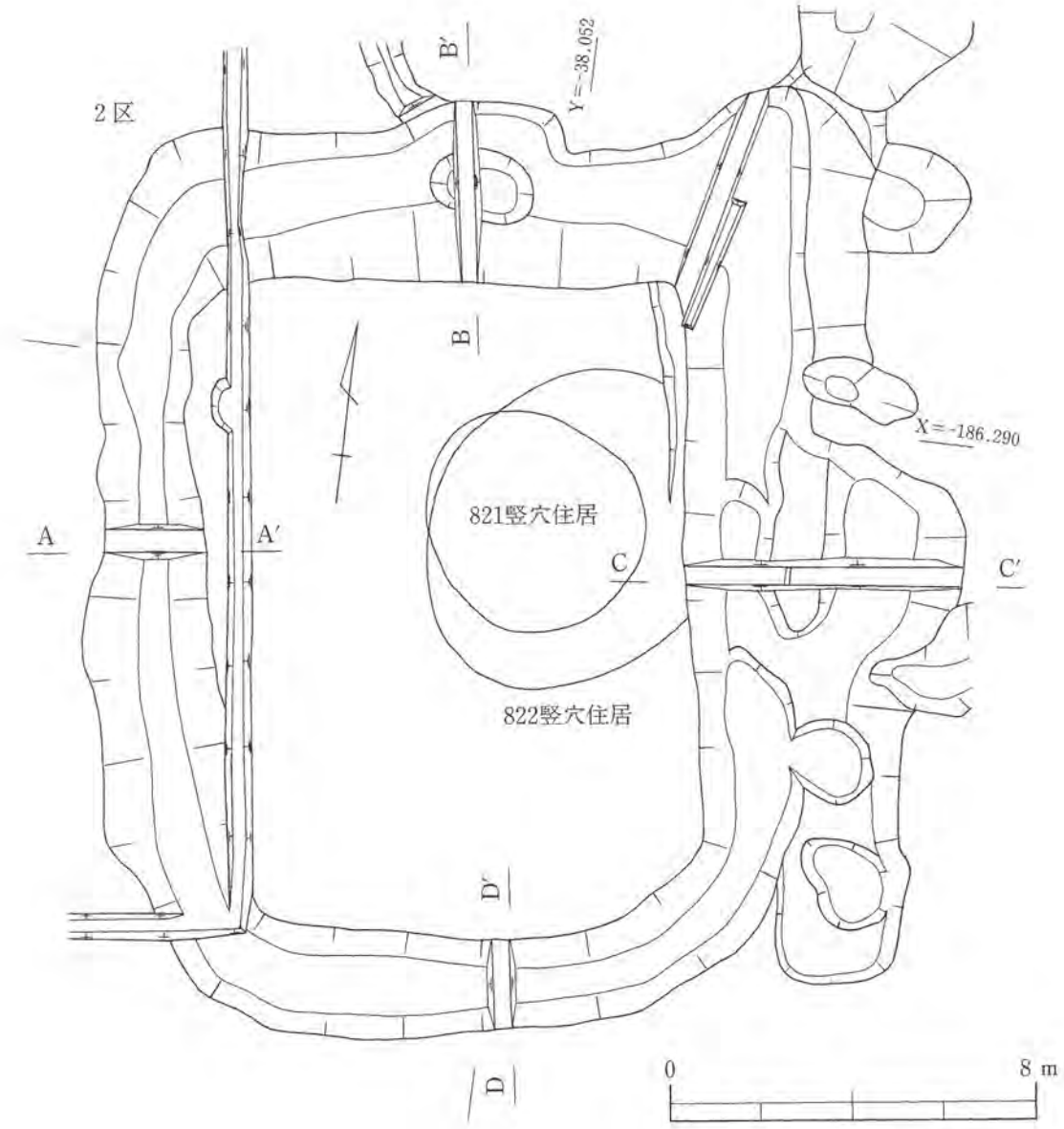
292～296、298～302は弥生土器である。292・295は広口壺で、このうち292は口縁端部を上下に拡張し、外端面に凹線文を3条巡らす。端部の内側には二個一単位の紐穴を穿つ。頸部には凹線

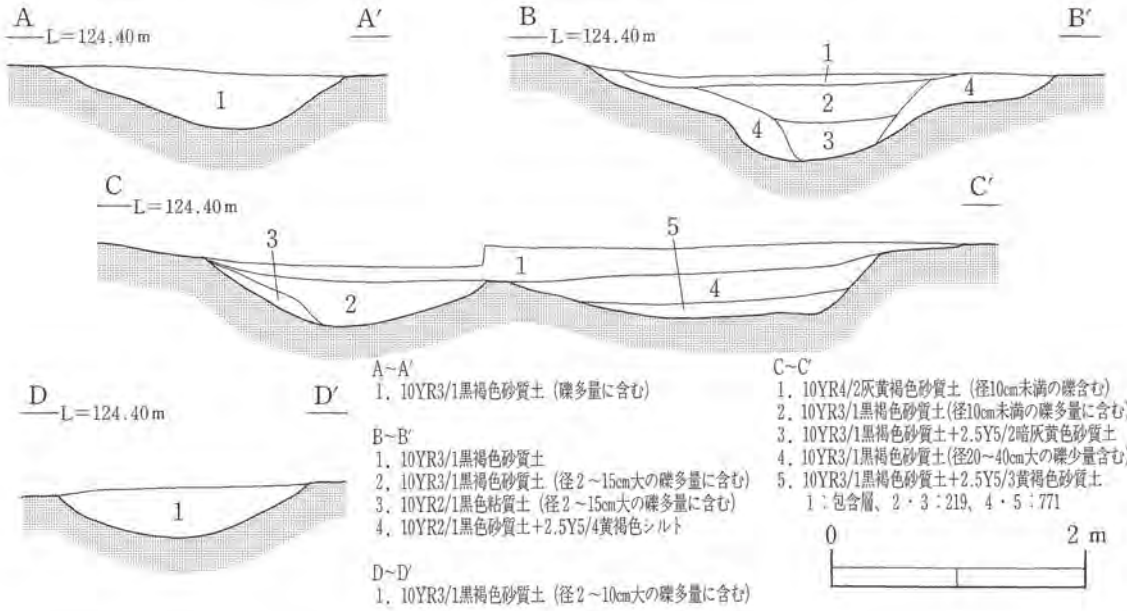


第104図　821・822竪穴住居実測図

文を4条巡らし、その直下から体部中位にかけて上から波状文1条・直線文3条・波状文1条を連続して巡らす。体部下半はヘラミガキ調整である。295は口縁部が外反し、端部は外方に面をもつ。端部内側に紐穴を穿つ。胎土に金雲母が含まれる。

293はミニチュアの手捏土器甕で、口縁部と底部の指押えが顕著である。





A~A′
1. 10YR3/1黒褐色砂質土（礫多量に含む）

B~B′
1. 10YR3/1黒褐色砂質土
2. 10YR3/1黒褐色砂質土（径2～15cm大の礫多量に含む）
3. 10YR2/1黒色粘質土（径2～15cm大の礫多量に含む）
4. 10YR2/1黒色砂質土+2.5Y5/4黄褐色シルト

D~D′
1. 10YR3/1黒褐色砂質土（径2～10cm大の礫多量に含む）

C~C′
1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（径10cm未満の礫含む）
2. 10YR3/1黒褐色砂質土（径10cm未満の礫多量に含む）
3. 10YR3/1黒褐色砂質土+2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
4. 10YR3/1黒褐色砂質土（径20～40cm大の礫少量含む）
5. 10YR3/1黒褐色砂質土+2.5Y5/3黄褐色砂質土

1：包含層、2・3：219、4・5：771

第105図　219方形周溝墓実測図

294は高杯で、杯部は椀形を呈しの口縁部は内湾して上方へ立ち上がる。口縁端部は内側に拡張し、上方に面をもつ。脚柱部は円筒形で、裾部は「ハ」の字に広がり、端部は上下に突出する。外端面には、凹線文を3条巡らしている。杯部内面と口縁部外面はナデ、外面下半部はヘラミガキ調整である。

296は甕で、口縁部は「く」の字に短く外反する。体部外面は縦方向のハケ調整である。

298は器台で、裾部に凹線文を5条巡らし、その上方に円穴を6箇所にあけている。

299～301は壺体部の破片、302は壺底部の破片である。299は簾状文と斜格子文を、300は流水文を、301は直線文と波状文を巡らす。

弥生土器はⅢ様式からⅣ様式にかけてのものである。

297は土師器高杯で、椀形の杯部にハの字形に開く脚部が付き、裾は横方向に開く。杯部の内面に放射状の暗文がある。古墳時代の遺物であると考えられる。

303～306は古墳時代末頃から古代にかけて須恵器である。303～305は甕で、このうち303は口縁部が短く外反し、端部は外方向に面をもつ。体部外面は縦方向の平行タタキ調整の後に横方向のカキメを施している。体部内面に同心円状の当具痕がみられる。304は口縁部が内湾し、外面に凹線文を2条巡らす。口縁端部は上方に面をもつ。体部外面は縦方向の平行タタキを軽くナデ消す。体部内面には同心円状の当具痕がみられる。305は外反する口縁の端部がわずかに横に開き、外方に面をもつ。

306は杯身で、底部外縁に低い高台が付く。

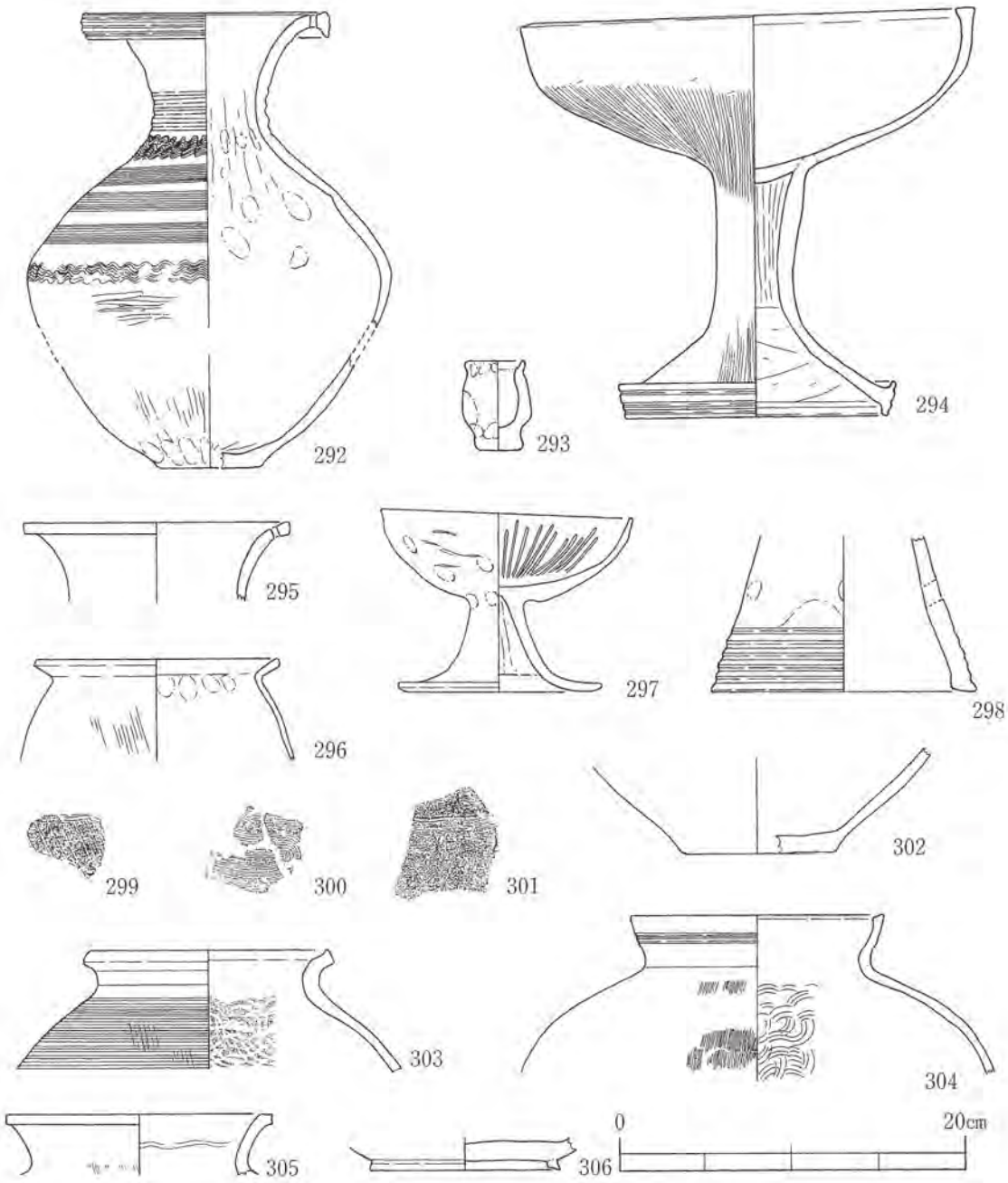
S15は石錐と思われるが、下部の刃部にもみきりの痕がみられない。

719方形周溝墓（第107・108・133図、PL.49・88・89・98）

219方形周溝墓の南にあり、規模は南北17.7m×東西14.0mを測る。周溝の幅は2.4～4.3m、深さは30～60cmで、北西隅と南溝の中央やや西よりの位置に陸橋部がある。西溝の北端は西方向に広がっている。墳丘部は南北に長い長方形で、南北16.0m×東西12.6mである。盛土は削平されていたが、3基の土坑（761・762・764土坑）を検出した。

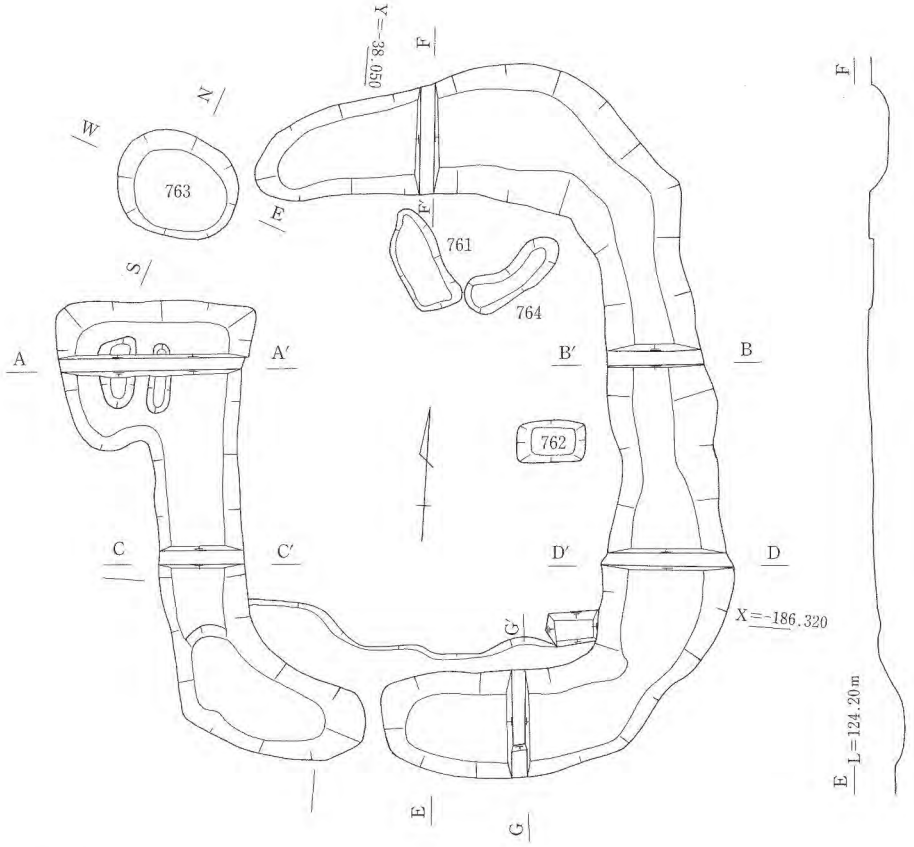
761土坑は北溝に沿う位置にあり、形状は不整楕円形を呈し、規模は3.20m×1.40m、深さ約20cmを測る。762土坑は東溝に沿う位置にあり、形状は隅丸方形を呈し、規模は2.20m×1.27m、深さ約20cmを測る。764土坑は北東コーナー付近に位置し、761土坑と接する。形状は不整楕円形で、規模は3.28m×1.20m、深さ約40cmを測る。それぞれの土坑からは弥生土器が出土しており、埋葬施設であった可能性もある。また、拡張された西溝の底で、楕円形を呈する2.1m×0.7～1.05m、深さ25～30cmを測る土坑を2基検出しているが、周溝墓に伴うものか明らかでない。

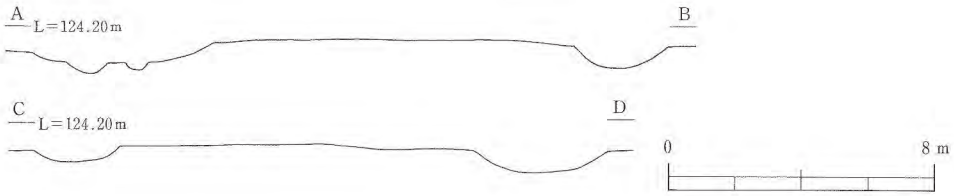
遺物は周溝から弥生土器のほかに石鏃やサヌカイト剥片が出土しており、このほか混入遺物として須恵器や土偶がある。

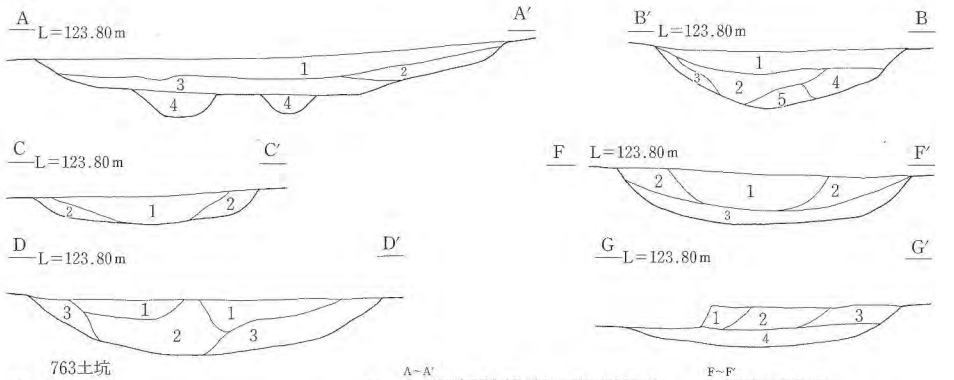


第106図　219方形周溝墓出土遺物実測図

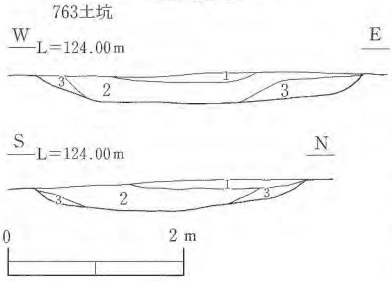
307～314は弥生土器である。307・308・311・313・314は壺で、このうち307は広口壺である。外反する口縁の端部を上方に拡張する。外面は縦方向のハケ後ヘラミガキ調整である。308は段状口縁壺で、屈曲してやや内傾する口縁の端部は上方に面をもち、外縁には刻み目を施す。頸部付近はタテ方向のハケ調整である。311は体部の破片で、外面に簾状文を巡らす。313・314は底部の破片で、このうち313は底部端が高台状に突出し、上げ底となっている。314は外面がヘラケズリ調整である。







763土坑



A～A′
1．10YR3/1黒褐色砂質土(径5㎝未満の礫多量含む)
2．10YR3/1黒褐色砂質土＋2.5Y5/4黄褐色粗砂礫
3．10YR3/2黒褐色砂質土(径5㎝未満の礫含む)
4．10YR3/3暗褐色砂質土

B～B′
1．10YR3/1黒褐色砂質土(径10㎝未満の礫多量に含む)
2．10YR3/2黒褐色砂質土(径15㎝未満の礫多量含む)
3．10YR3/2黒褐色砂質土＋2.5Y5/3黄褐色砂質土
4．10YR3/2黒褐色砂質土
＋2.5Y5/4にぶい黄褐色粗砂礫
5．10YR3/2黒褐色砂質土

C～C′
1．10YR3/1黒褐色砂質土(径2～20㎝大の礫多量に含む)
2．10YR3/1黒褐色砂質土
＋2.5Y4/2暗灰黄砂質土

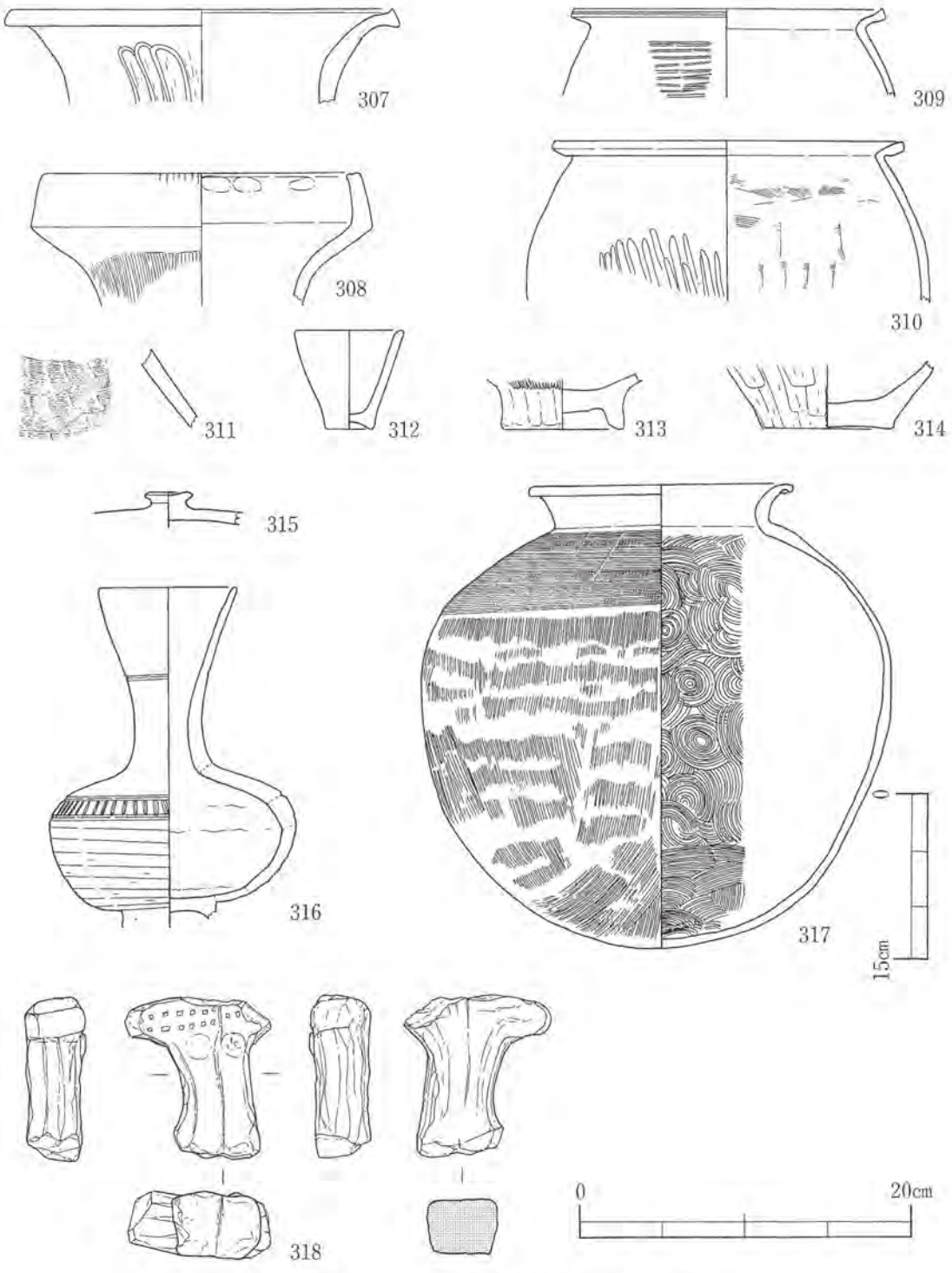
D～D′
1．10YR3/1黒褐色砂質土(径5㎝未満の礫含む)
2．10YR3/1黒褐色砂質土
(径2～20㎝大の礫多量に含む)
3．10YR3/1黒褐色砂質土＋2.5Y5/4黄褐色粗砂礫

F～F′
1．10YR3/1黒褐色砂質土
(径5～30㎝大の礫多量に含む)
2．10YR3/1黒褐色砂質土
(径5～10㎝大の礫、炭微量を含む)
3．10YR3/1黒褐色砂質土＋2.5Y5/4黄褐色粗砂礫

G～G′
1．10YR3/1黒褐色砂質土
(径5～20㎝大の礫多量に含む)
2．10YR3/1黒褐色砂質土＋10YR4/2灰黄褐砂質土
(径2～10㎝大の礫少量含む)
3．10YR4/3オリーブ褐色砂質土
＋10YR4/3灰黄褐色砂質土
4．10YR3/2黒褐色砂質土

763土坑
1．2.5Y4/1黄灰色砂質土
2．2.5Y4/1黄灰色砂質土
(2～10㎝大の礫多量に含む)
3．2.5Y4/2暗灰黄色砂質土

第107図　719方形周溝墓・763土坑実測図



第108図　719方形周溝墓出土遺物実測図

309・310は甕で、口縁部は「く」の字に屈曲する。309は口縁端部外面に細い凹線文を巡らす。体部外面は平行タタキ調整である。310は口縁部が全体的に肥厚する。体部外面下半をミガキ調整する。

315～317は須恵器である。315は杯蓋で、天井中央部に扁平な宝珠様のつまみを付す。316は台付長頸壺で、扁平な体部に長い尻すぼみの頸部が付き、中ほどに凹線文を1条巡らす。台部は欠損する。肩部には2条の凹線文を巡らし間に縦方向の刻みを入れる。下半部は回転ヘラケズリ調整である。317は甕で、球形に近い体部に、外反する口縁部が付く。口縁端部は細くなってわずかに垂下する。肩部外面には横方向のカキメ、体部中位から底部にかけてはタタキ調整の後にナデ調整を加えている。内面には同心円状の当具痕が付く。315・317は古代、316は古墳時代の遺物である。

318は縄文時代中期後半と考えられる土偶である。頭部はソケット式に差し込むタイプであるが欠失する。胴部は方柱状で、左右を分けるように正中線を刻む。両側面、背面に凹線を施す。乳房は椀状で、先端部は欠損する。乳房の上から両腕にかけて2列の押し引きを施す。横方向に突出する腕は、左腕が途中で欠損する。脚は胴部下端を突出させることで表現し、右足端は欠損する。胎土などから搬入品の可能性がある。

S16・S50は凸基有茎式の石鏃である。

763土坑（第107・133図、PL.98）

調査区の西側、719方形周溝墓の北西陸橋部で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、規模は3.80m×3.10mで、深さは約40cmである。

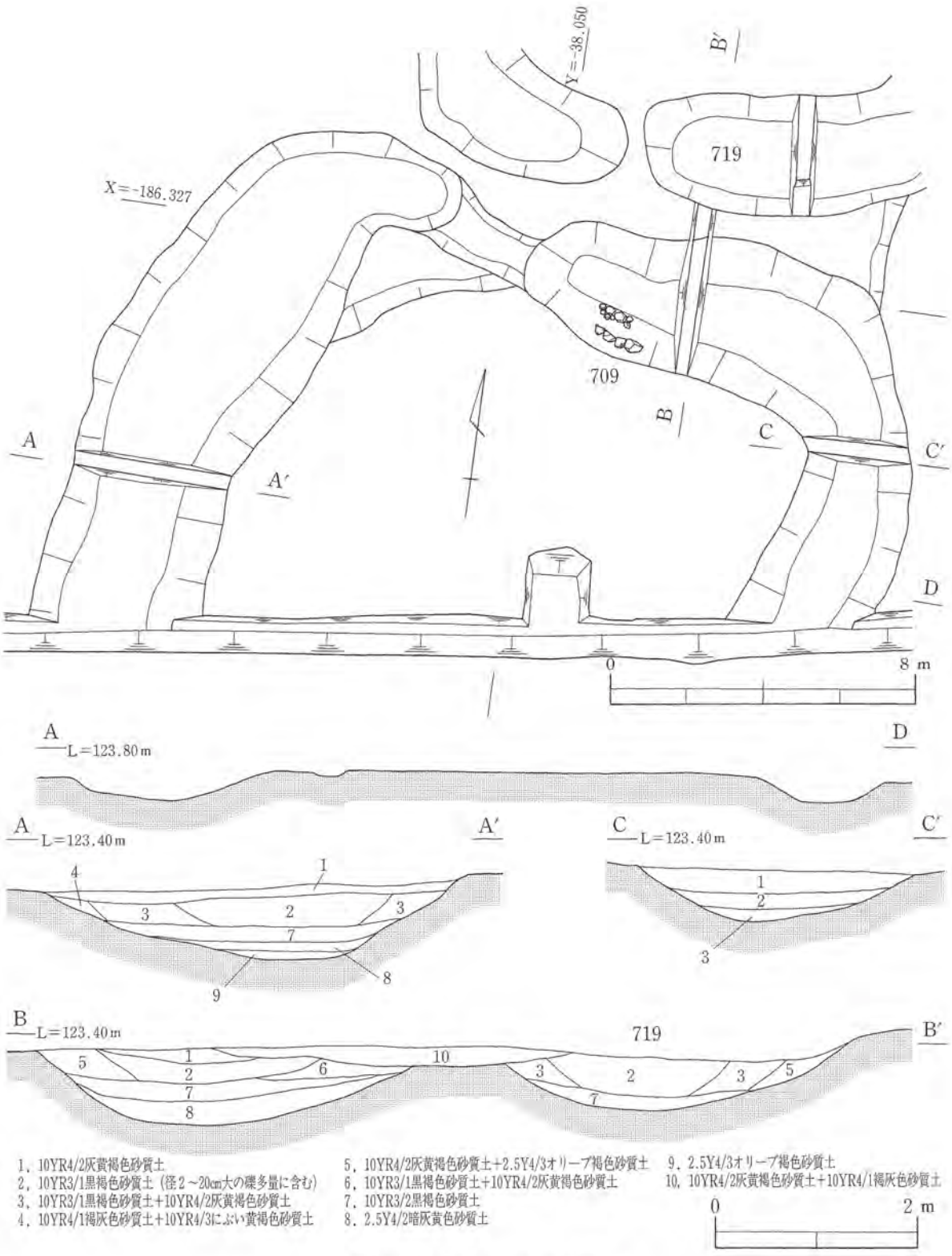
遺物は弥生土器のほか、石剣（S17）、サヌカイト剥片が出土している。S17は先端部が欠損する。

702方形周溝墓（第109～111・133図、PL.50・89～91・98・100）

調査区の南西部にあり、南側が調査区外に拡がっている。規模は東西17.3m、南北14.9m以上を測る。周溝の幅は2.0～4.9m、深さ約80cmで、北西隅のやや東に陸橋部がある。陸橋部には浅い溝が掘られる。墳丘の形状は方形または長方形であったと考えられ、東西14.9mを測る。盛土は削平されており、埋葬施設も検出できなかった。

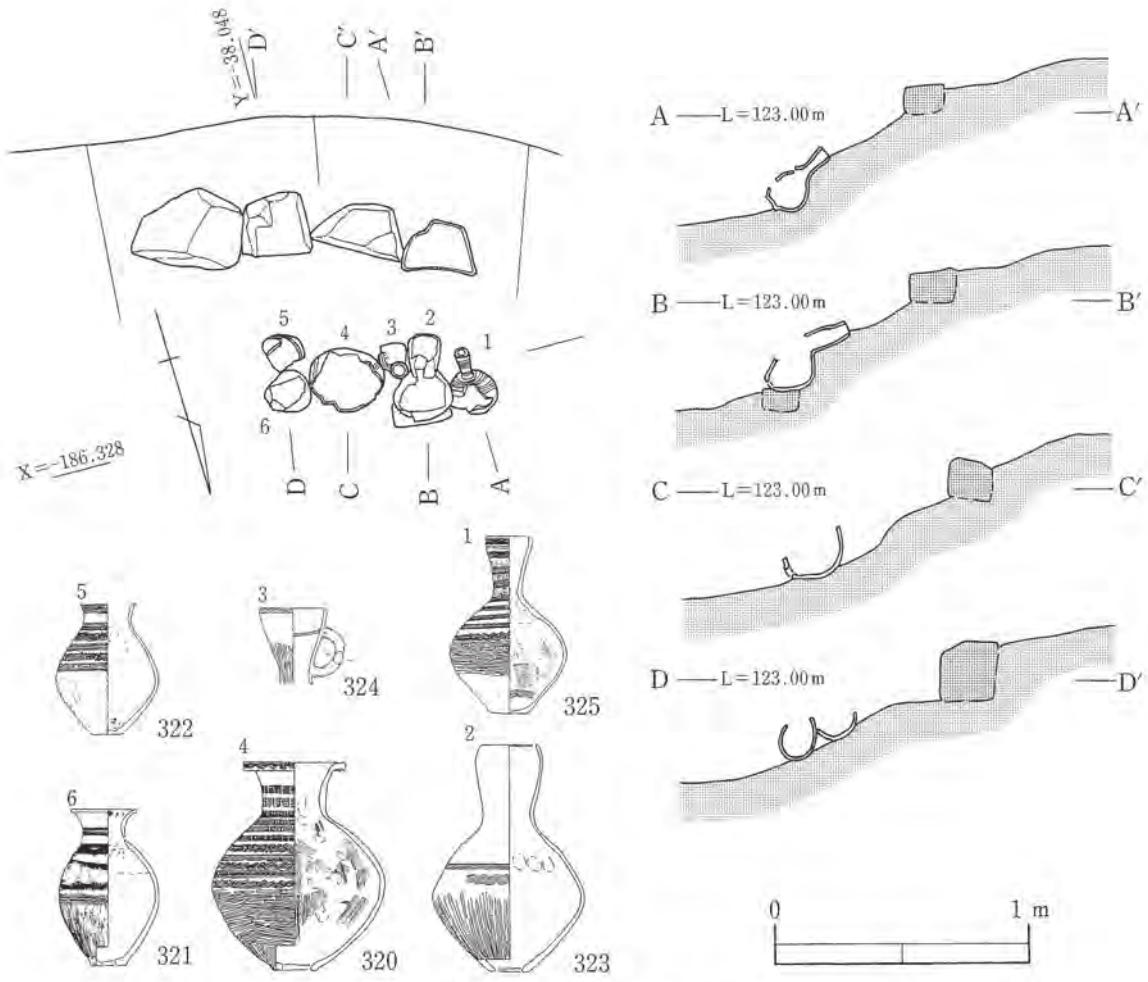
北辺溝の中央付近で、底近くから供献土器の壺5個体と鉢1個体が出土した（遺構709）。壺は何れも口縁部を上にして併置された状態で出土している。壺の内3点は底部中央に穿孔されている。また、供献土器から約40cm上部の周溝斜面部に比較的扁平な面を上にした状態で4個の川原石が据えられており、供献に伴うものと考えられる。このほか周溝部から出土する遺物としては、多くの弥生土器や石鏃、叩石、サヌカイト剥片がある。

319～325は弥生土器で、このうち320～325は遺構709に伴う供献土器である。319～323・325は



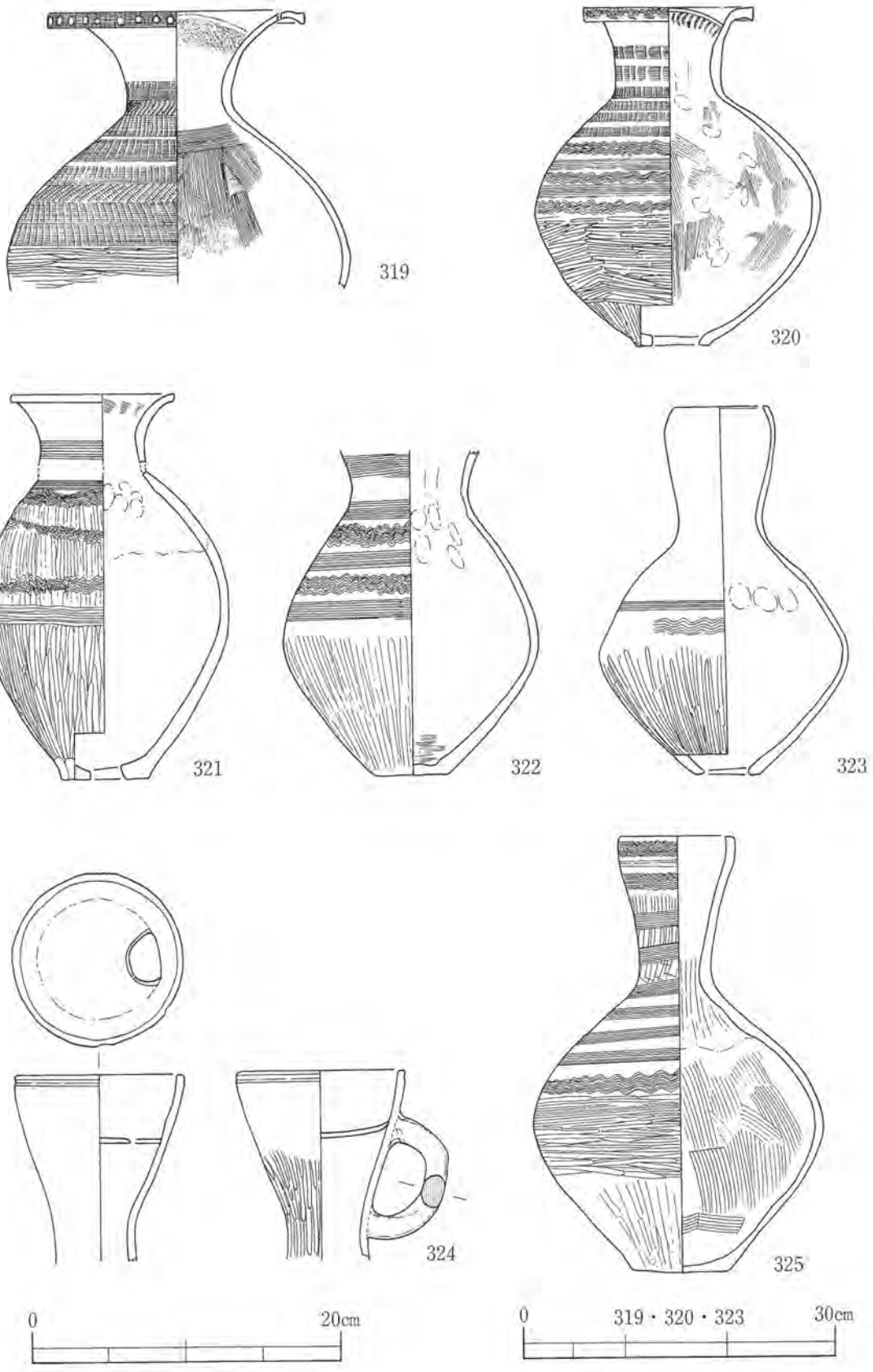
1，10YR4/2灰黄褐色砂質土
2，10YR3/1黒褐色砂質土（径2～20cm大の礫多量に含む）
3，10YR3/1黒褐色砂質土＋10YR4/2灰黄褐色砂質土
4，10YR4/1褐灰色砂質土＋10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
5，10YR4/2灰黄褐色砂質土＋2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
6，10YR3/1黒褐色砂質土＋10YR4/2灰黄褐色砂質土
7，10YR3/2黒褐色砂質土
8，2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
9，2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
10，10YR4/2灰黄褐色砂質土＋10YR4/1褐灰色砂質土

第109図　702方形周溝墓実測図



第110図　遺構709遺物出土状況図

壺で、このうち319～322は広口壺である。319は口縁部が大きく外反し、端部をわずかに上下に拡張する。外端面には簾状文を巡らしその上に円形浮文を貼付する。上面には櫛描列点文を綾杉状に巡らしている。また、その文様に沿うように、紐穴が二個一単位で三方向に明けられていたと考えられる。外面は頸部から体部上半にかけて上から簾状文、櫛描列点文、簾状文３条、櫛描列点文、簾状文２条を連続して巡らし、下半部は横ヘラミガキ調整する。体部内面はハケ調整である。320は横方向に折れる口縁の端部をわずかに上下に拡張し、外端面に波状文、上面に櫛描列点文を巡らす。頸部から体部上半にかけて上から簾状文６条、波状文、直線文、波状文、直線文、波状文の順で連続して巡らす。体部下半はヘラミガキ調整で、体部内面はハケ後ナデ調整である。底部中央を焼成後に丸く穿孔する。321は縦長の体部で、口縁部は外反し、端部は外方に面をもつ。口縁部の内面には扇形文を巡らす。頸部から体部上半にかけて上から直線文２条、波状文３条、直線文の順に巡らす。波状文はやや不規則である。体部下半部は縦方向のヘラミガキ調整である。底部中央を焼成後に丸く穿孔する。322は外面の頸部から体部上半にかけて直線文と波状文を巡らす。体部下半は縦方向のヘラミガキ調整である。323・325は細頸壺である。323は内湾する



320～325：遺構709

第111図　702方形周溝墓出土遺物実測図

口縁部と頸部には文様を描かず、外面の体部中位付近に直線文と波状文を巡らす。体部下半は縦方向のヘラミガキ調整である。底部中央を焼成後に丸く穿孔する。325は内湾気味に立ち上がる口縁の端部は上方に面をもつ。口縁部の外面は1条の凹線文の上下に波状文を巡らす。頸部には3条の直線文、肩部には3条の直線文と波状文を巡らす。体部下半の外面はヘラミガキ調整、内面はハケ調整である。

324は把手付の台付鉢で、裾部を破損するが鼓形を呈していたと考えられ、縦位置に把手を付す。鉢部分は浅く、粘土板を接合して底部としており、半円状に穴があく。口縁端部下には凹線文を巡らす。脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整である。

弥生土器の時期はIII様式中頃～後半段階のもので、遺構709の供献土器は、良好な一括資料といえる。

S18は平基無茎式石鏃で、S26は砂岩製の叩石である。

862方形周溝墓（第112図、PL.51・91）

調査区北端の中央部にあり、北側が調査区外に拡がっている。規模は東西約18.1mで、南北9.0m以上を測る。南辺溝は775方形周溝墓と共有し、幅4.0～5.0m、深さ約80cmを測る。東・西辺溝の幅は1.3～2.6mと他の周溝墓に比べ狭く、深さは20～50cm前後である。調査区内では陸橋部は検出されていない。墳丘は方形あるいは長方形と考えられ、東西17.2mを測る。盛土は削平されており、埋葬施設も検出できなかった。

遺物は周溝から弥生土器（326～333）が出土している。326～329は壺で、このうち326～328は広口壺である。拡張した口縁端部外面に波状文を巡らし、口縁上面には326が扇形文、327が櫛描列点文、328が波状文を巡らす。326は頸部に直線文を巡らす。329は直口壺あるいは短頸壺に分類される壺で、丸く収めた口縁端部下に、凹線文から転化したと考えられる2つの段が巡る。体部外面はヘラミガキ調整である。

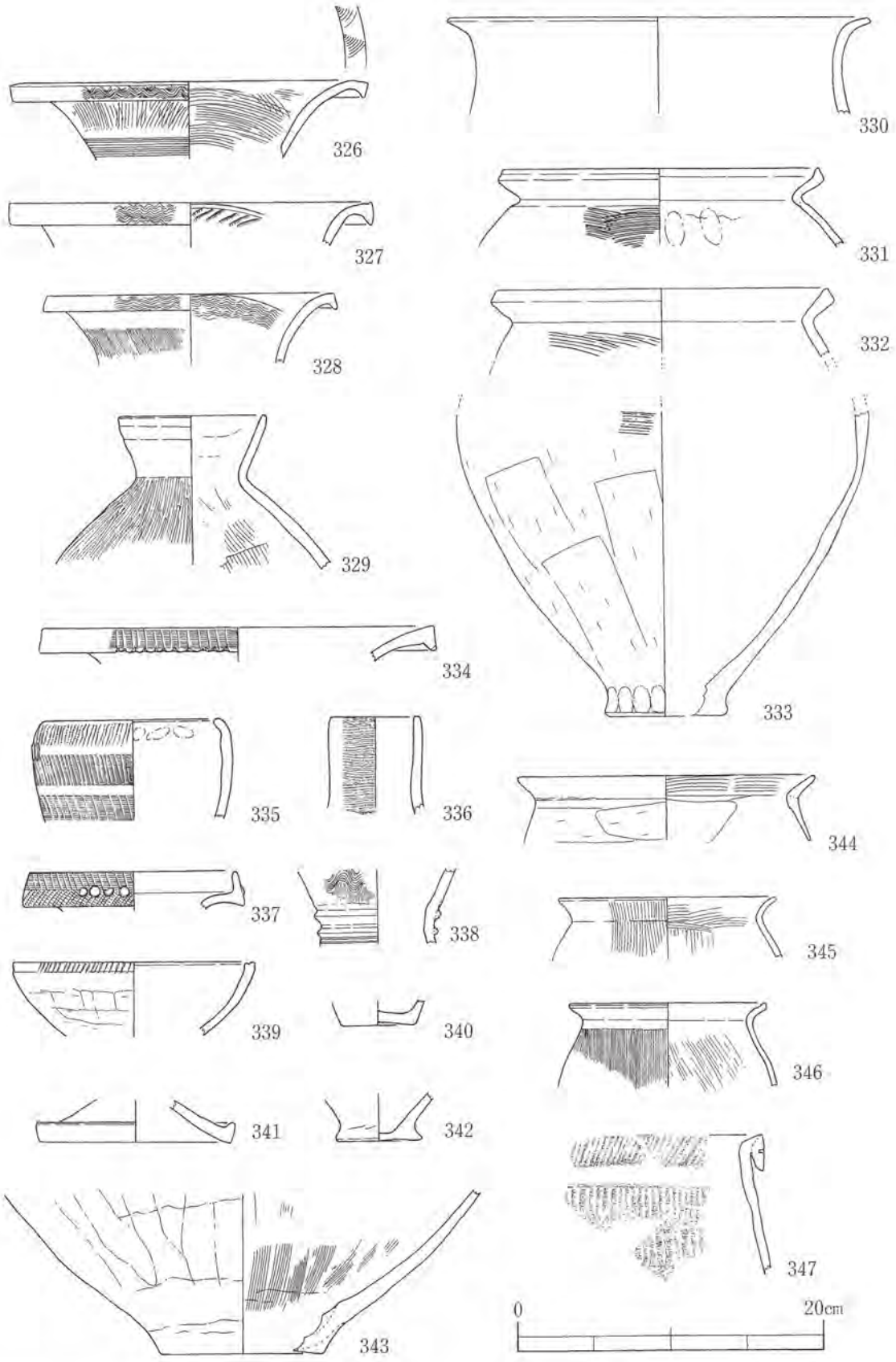
330～333は甕で、このうち330は紀伊型である、口縁部は緩やかに外反し、内外面ともナデ調整である。331・332は、口縁部が「く」の字に屈曲し、端部をわずかに上方に拡張する。体部外面は平行タタキ調整である。333は甕底部で、外面をヘラケズリ調整する。

弥生土器はIII様式後半頃を中心とするが、330はII様式で、329はやや新しい様相を呈する。

781土坑（第112・133図、PL.91・98）

調査区北側中央で検出した土坑で、形状は不整楕円形を呈する。規模は4.60m×3.40mで、深さ約60cmを測る。

遺物は弥生土器（334～347）のほか、石剣、楔形石器、管玉、サヌカイト剥片などが出土する。334～338・343は壺で、このうち334・337・338は広口壺である。334は外反する口縁の端部が垂下し、外端面に簾状文を巡らす。337は口縁端部を上方へ大きく拡張し、外端面に簾状文と櫛描列点



326～333：862方形周溝墓、334～347：781土坑

第112図　862方形周溝墓・781土坑出土遺物実測図

文を巡らし、その境目に円形浮文を4個貼付する。338は頸部に断面三角形の突帯文を2条巡らし、その上位に波状文を描く。335･336は細頸壺で、このうち335は内湾気味の口縁部をもつ。丸く収めた口縁端部下には櫛描列点文を配し、その下位には二個一単位の円形浮文を貼付する。さらにその下には簾状文を2条巡らす。336は口縁部が筒状で、外面に直線文を3条巡らす。334・335は胎土に角閃石を含み、生駒西麓産である。また、336は金雲母を含み搬入品と考えられる。

339･347は鉢で、このうち339は椀形を呈する。口縁端部は上方に面をもち、端面に凹線文を巡らす。外端面には刻み目を施す。体部はヘラケズリ調整である。347は内傾する口縁の端部に粘土を付加して拡張し、外端面に櫛描列点文を巡らし、その上に棒状工具による刺突列点文を配する。口縁部から体部にかけて簾状文を連続して巡らす。

341は高杯の脚裾部で、端部を上方に突出する。

340・342・344～346は甕で、このうち340・342は底部の破片である。342は底部端が横方向に突出する。344～346は口縁部が「く」の字に屈曲する。344は体部外面がケズリ調整、345･346は体部外面が縦方向のハケ調整である。345は胎土に金雲母を含む。

弥生土器の時期は、Ⅲ様式からⅣ様式の前半にかけてのものである。

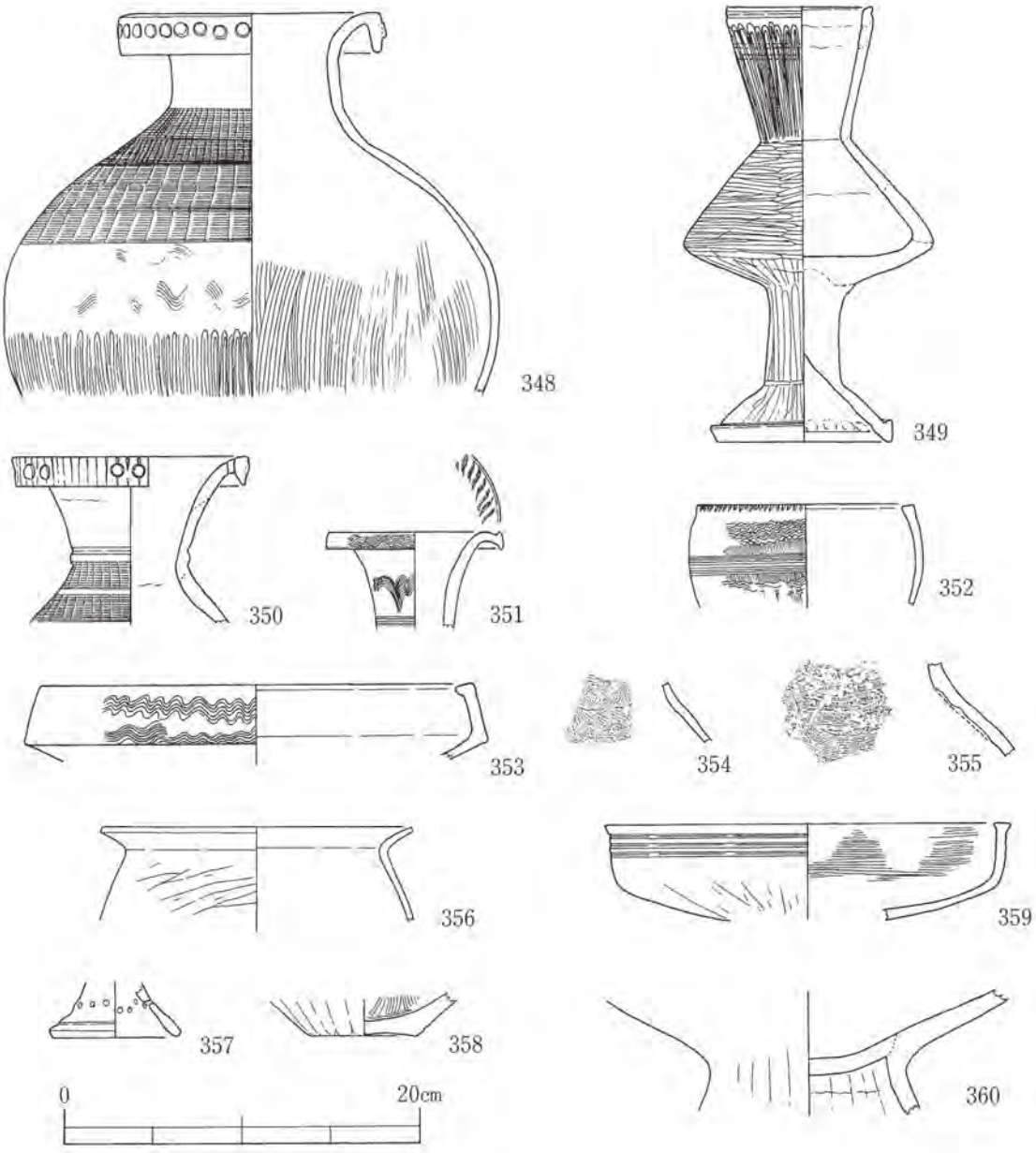
S19は石剣で、先端部が欠損する。S22は楔形石器で、縦方向の加工痕がある。S23は碧玉製管玉である。長さ2.5㎝、径0.85㎝で、両端から穿孔している。伴出遺物から弥生中期に所属するものと考えられる。

775方形周溝墓（第113・133図、PL.51・98）

調査区中央北側にあり、北接する862方形周溝墓と周溝を共有する。南接する771方形周溝墓と周溝が重複するが、それより新しい。西辺溝は明確でないが、西接する219方形周溝墓の周溝や768土坑が西側を区切る役割を果たしていたと考えられ、その場合、陸橋部は北西・南西コーナー付近となる。規模は東西18.2m×南北12.9m、周溝は幅2.5～3.8mで、断面の形はほぼ逆三角形を呈し、深さは最も深い部分で80㎝を測る。墳丘は長方形と考えられ、東西16.9m×南北11.1mを測る。盛土は削平されており、埋葬施設は検出できなかった。

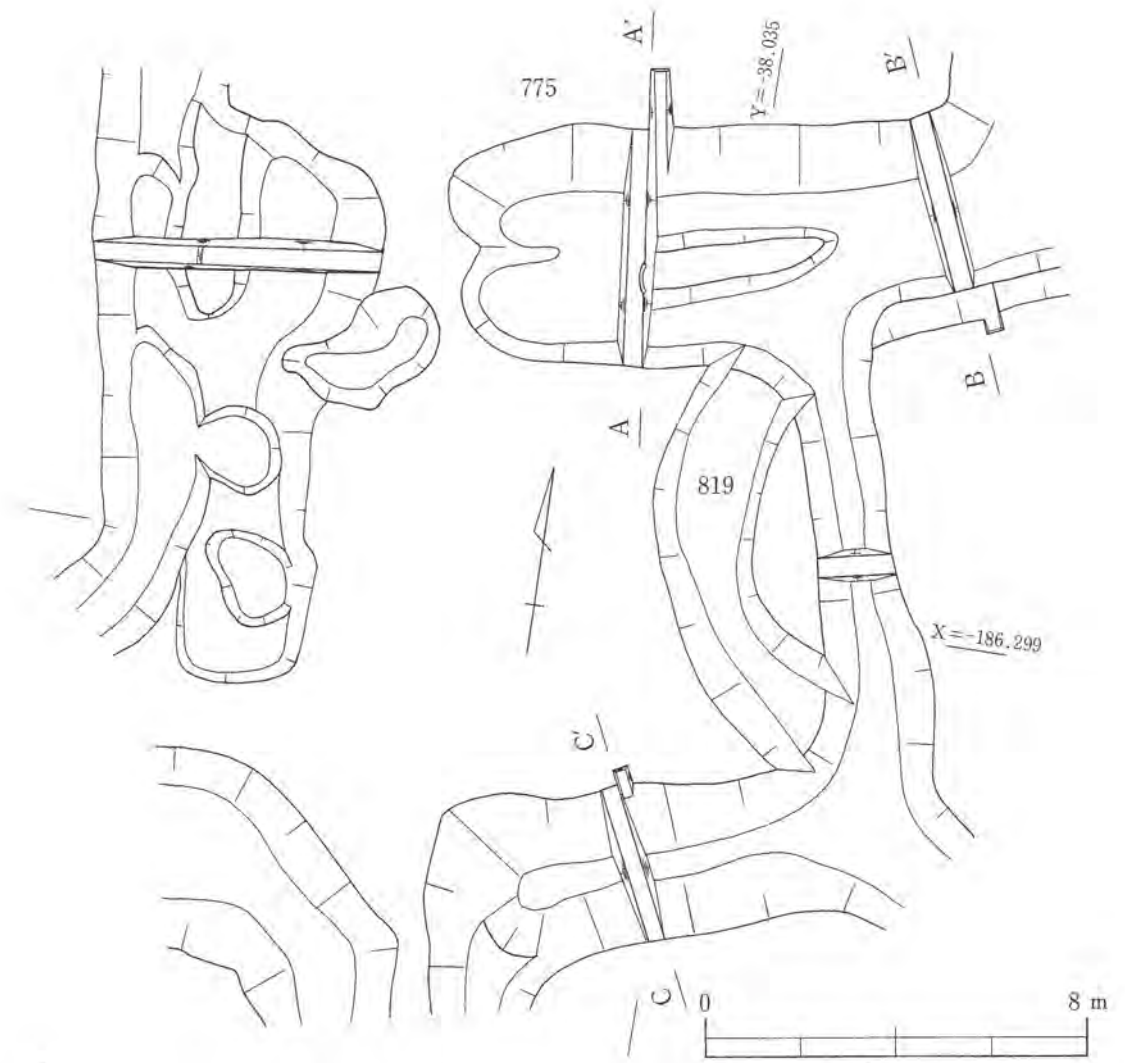
遺物は周溝から出土しているが、弥生土器の破片点数は柏原遺跡で検出した方形周溝墓の中で最も多い。このほかの遺物としては、石鏃・石錐、磨石、サヌカイト剥片などがある。

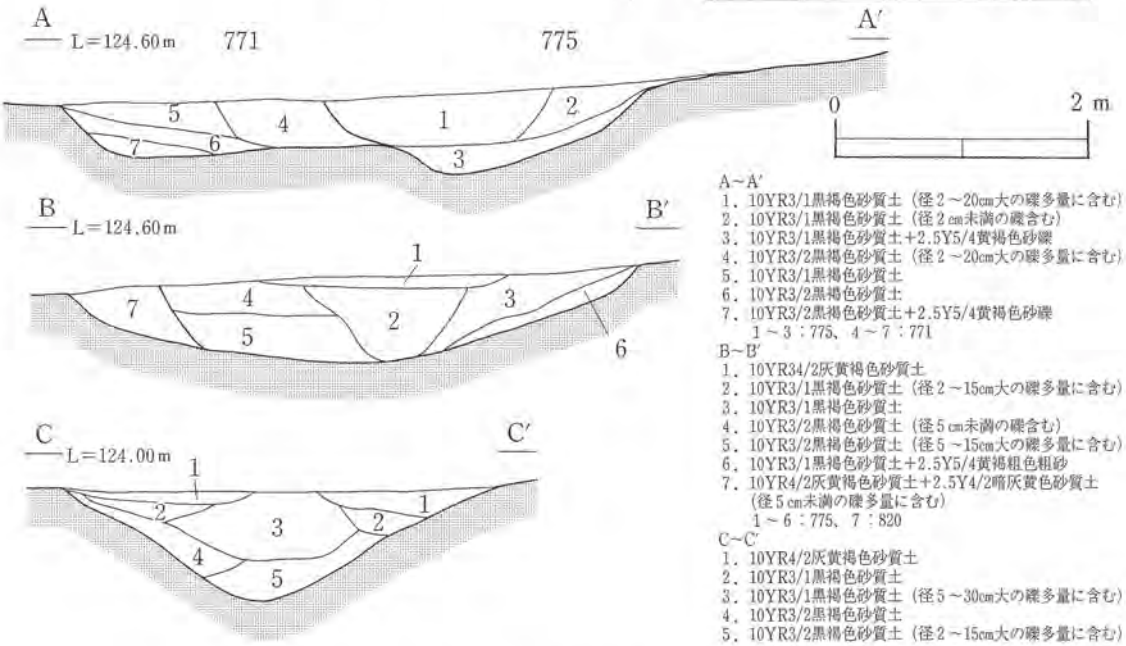
348～360は弥生土器で、このうち348～355・358は壺である。348・350・351は広口壺である。348は口縁端部を下方に垂下拡張し、外面に円形浮文を連続して貼付する。頸部から体部上位にかけては簾状文を5条、体部中位には波状文2段巡らす。体部下半部は縦方向のヘラミガキ、内面はハケ調整である。350は口縁端部が垂下し、外端面に縦方向の刻み目を施し、その上に円形浮文を二個一単位で5箇所に貼付する。また、端部の内側には、二個一単位で3箇所に紐穴を穿つ。頸部には凹線文を2条とその下に簾状文を巡らす。351は口縁部が端部近くで強く外反させ、端部



第113図　775方形周溝墓出土遺物実測図

を上下に拡張する。外端面には波状文を巡らし、上面には櫛描列点文を巡らす。頸部に波状文を巡らし、その下部に直線文を施す。349は脚台付直口壺で、体部は算盤玉形に張り出す。脚柱部は円柱形で、裾部は「ハ」の字に開く。口縁端部外面に凹線文を1条巡らす。外面はヘラミガキ調整である。352は細頸壺で、内湾する口縁の端部は上方に面をもち、外縁には刻み目を施す。口縁部外面は波状文と直線文を巡らす。353は段状口縁壺で、口縁部は「く」の字に屈曲して内傾し、端部を内側に拡張する。口縁部外面には波状文を2条巡らす。354・355は体部の破片で、外面の文





A～A′
1．10YR3/1黒褐色砂質土（径2～20cm大の礫多量に含む）
2．10YR3/1黒褐色砂質土（径2cm未満の礫含む）
3．10YR3/1黒褐色砂質土+2.5Y5/4黄褐色砂礫
4．10YR3/2黒褐色砂質土（径2～20cm大の礫多量に含む）
5．10YR3/1黒褐色砂質土
6．10YR3/2黒褐色砂質土
7．10YR3/2黒褐色砂質土+2.5Y5/4黄褐色砂礫
1～3：775、4～7：771

B～B′
1．10YR34/2灰黄褐色砂質土
2．10YR3/1黒褐色砂質土（径2～15cm大の礫多量に含む）
3．10YR3/1黒褐色砂質土
4．10YR3/2黒褐色砂質土（径5cm未満の礫含む）
5．10YR3/2黒褐色砂質土（径5～15cm大の礫多量に含む）
6．10YR3/1黒褐色砂質土+2.5Y5/4黄褐粗色粗砂
7．10YR4/2灰黄褐色砂質土+2.5Y4/2暗灰黄色砂質土（径5cm未満の礫多量に含む）
1～6：775、7：820

C～C′
1．10YR4/2灰黄褐色砂質土
2．10YR3/1黒褐色砂質土
3．10YR3/1黒褐色砂質土（径5～30cm大の礫多量に含む）
4．10YR3/2黒褐色砂質土
5．10YR3/2黒褐色砂質土（径2～15cm大の礫多量に含む）

第114図　771方形周溝墓実測図

様は354が櫛描列点文による綾杉文と直線文、355が流水文である。

356は甕で、体部外面はヘラケズリ調整である。胎土に金雲母が含まれる。

357・359は高杯である。357は裾端部近くの外面に凹線文を1条巡らし、その上に小孔を横位置に18箇所あける。359は杯部の口縁部がカーブを描いて上方へ立ち上がり、端部は内外に拡張して上方に面をもつ、口縁部外面には凹線文を3条巡らす。

360は台付鉢である。大型で円錐台形の台をもつタイプであると考えられる。

弥生土器はおおよそⅢ様式後半からⅣ様式前半のものである。

S21は凸基有茎式石鏃である。

771方形周溝墓（第114・121・133図、PL.52・92・98・100）

調査区の中央付近にあり、819方形周溝墓を壊して築かれている。西接する772方形周溝墓、南接する775方形周溝墓と周溝を共有する。また、北接する766方形周溝墓と周溝が重複し、それより古い。規模は東西13.2m×南北12.3m、周溝は幅1.6～2.7mで断面の形はほぼ逆三角形を呈し、深さは最も深い部分で約60cmを測る。陸橋部は南西隅と北西隅にある。墳丘の形状は隅丸方形で、東西11.8m×南北11.1mである。盛土は削平されており、埋葬施設は検出できなかった。

遺物は周溝から弥生土器のほか、石刀、投弾、サヌカイト剥片が出土している。368は段状口縁壺で、口縁部が屈曲して直立し、外面に簾状文と棒状工具による刺突列点文を巡らす。Ⅲ様式後半のものであると考えられる。

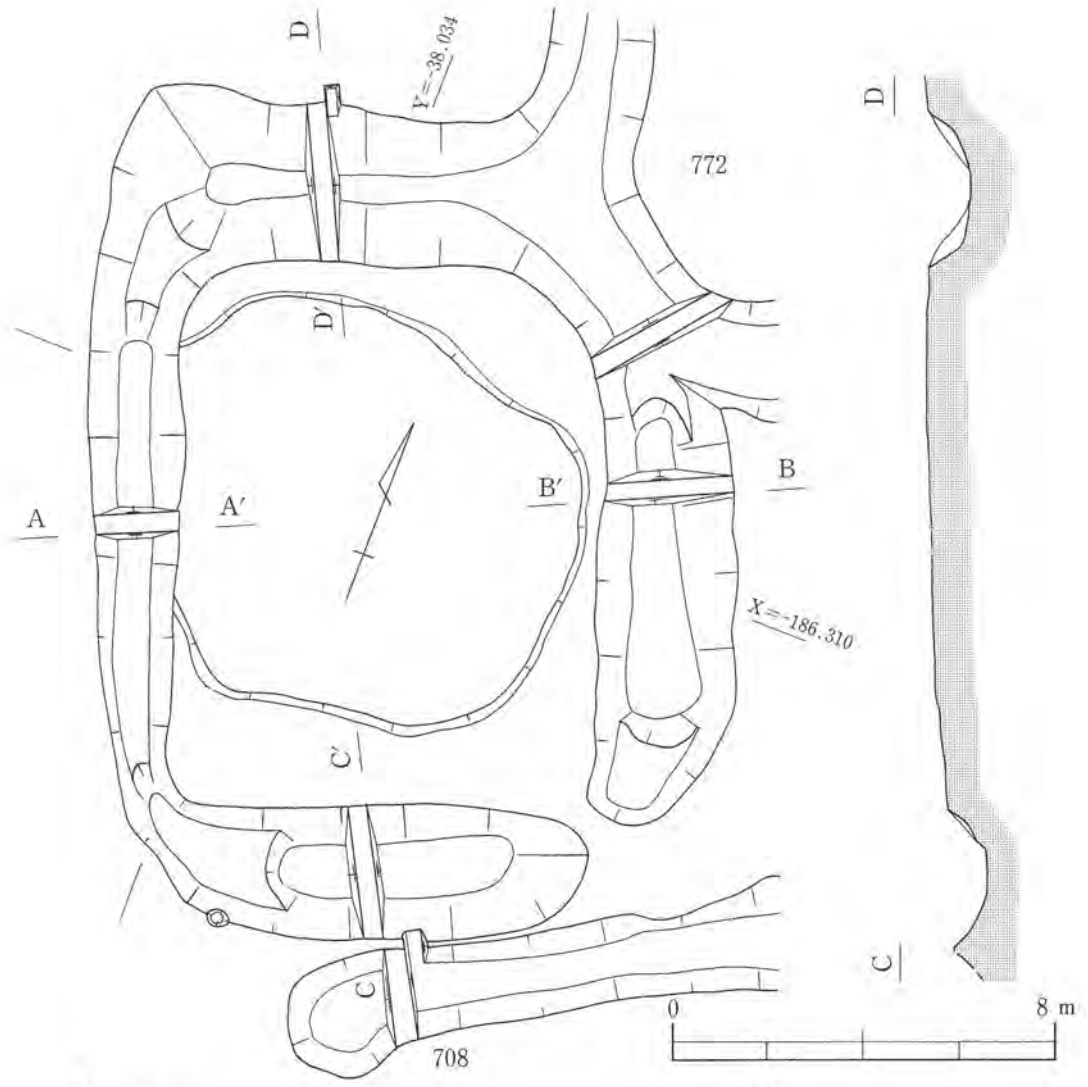
S20は表面を研磨した石刀の破片で、2条の線を巡らす。S25は砂岩製の投弾である。

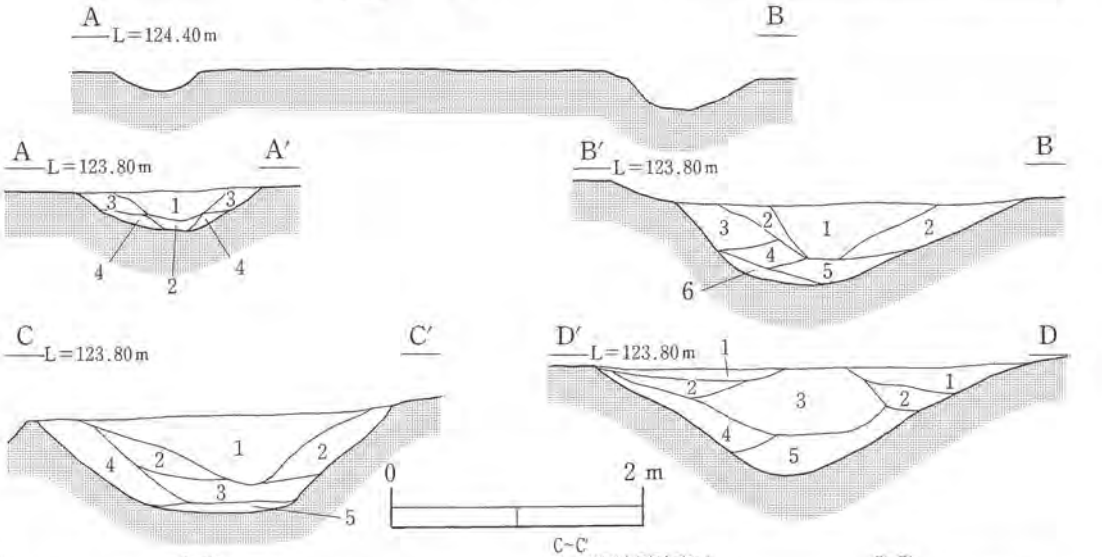
766方形周溝墓（第115・121図、PL.52・92・93）

調査区の中央のやや南寄りにあり、北接する771方形周溝墓と北東に接する772方形周溝墓と周溝を共有する。東西11.0m×南北14.5mの規模で、周溝の幅は1.0～3.0mと場所により異なり、深さは30～90cmで溝の底は凹凸が著しい。断面の形も逆台形やV字形と様々である。南東隅に陸橋部がある。墳丘の形状は隅丸の長方形で、東西10.1m×南北13.6mである。墳丘の中央付近は周溝肩付近より一段高くなっている。盛土は削平されており、埋葬施設は検出できなかった。

遺物は周溝から弥生土器（361～367）、サヌカイト剥片などが出土している。361～365は壺で、このうち361・362は細頸壺である。361は内湾する口縁の端部を内側に拡張する。凹線文を多用し、口縁部に9条、頸部に4条以上巡らす。端部下には竹管文を押す円形浮文を貼付する。362は口縁部が内湾している。凹線文を多用し、口縁に5条、頸部に2条以上巡らし、その間に波状紋を描く。363は広口壺で、拡張した口縁端部外面にヘラ先で綾杉文を刻む。頸部付近には直線文を巡らす。364は付加状口縁壺で、口縁部が内傾し、外面に斜格子文を巡らす。365は底部の破片で、外面がヘラミガキ調整である。

366は椀形を呈する鉢で、口縁端部が上方に面をもち、外縁に刻み目を施す。





A~A'
1. 10YR3/1黒褐色砂質土 (径2～10cm大の礫多量に含む)
2. 10YR3/1黒褐色砂質土
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質土
4. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 +2.5Y5/3～5/4黄褐色砂質土

B~B'
1. 10YR3/1黒褐色砂質土 (径2～10cm大の礫多量に含む)
2. 10YR3/1黒褐色砂質土 (径5cm未満の礫含む)
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質土
4. 10YR3/2黒褐色砂質土
5. 10YR3/2黒褐色砂質土 (径5～10cm大の礫多量に含む)
6. 10YR3/2黒褐色粘質土

C~C'
1. 10YR3/1黒褐色砂質土 (径5～20cm大の礫多量に含む)
2. 10YR3/1黒褐色砂質土 (径2cm未満の礫含む)
3. 10YR3/2黒褐色砂礫
4. 10YR3/1黒褐色砂質土 +2.5Y5/3～5/4黄褐色砂礫
5. 10YR3/2黒褐色砂質土+2.5Y5/4黄褐色砂礫 +2.5Y6/6明黄褐色シルト

D~D'
1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土
2. 10YR3/1黒褐色砂質土
3. 10YR3/1黒褐色砂質土 (径5～30cm大の礫多量に含む)
4. 10YR3/2黒褐色砂質土
5. 10YR3/2黒褐色砂質土 (径2～15cm大の礫多量に含む)

第115図　766方形周溝墓実測図

367は高杯で、脚は筒状で、裾が短く開き、円穴を4箇所にあける。

弥生土器の時期はおおよそⅢ様式後半からⅣ様式前半のものである。

708方形周溝墓（第116・121図、PL.53・93・100）

調査区中央南端にあり、南辺溝は調査区外である。規模は東西16.7m×南北15.2m以上、周溝は幅1.7～4.1mで断面の形はほぼ逆三角形を呈し、深さは最も深い部分で約60cmである。北西隅に陸橋がある。墳丘は隅丸方形で、東西15.0m×南北14.6m以上を測る。盛土は削平されており、埋葬施設は検出できなかった。周溝の東南コーナー付近では、5～20cm大の川原石が意図的に埋められた状態で出土する。

遺物は周溝内から弥生土器（369･370）のほかに、叩石やサヌカイト剥片が出土する。369は壺の体部破片で、外面に簾状文と櫛描綾杉文を巡らす。370は甕の底部である。

S56は砂岩製の叩石である。

772方形周溝墓（第117・121・134図、PL.53・99）

調査区中央にあり、819方形周溝墓を破壊して築造されている。766･771方形周溝墓と周溝を共有し、775方形周溝墓とは周溝が重複して、それより古い。規模は東西12.8m×南北14.7m、周溝は幅1.6～3.0mで断面の形はほぼ逆三角形を呈し、深さは最も深い部分で約50cmを測る。陸橋部は南東隅に存在する。墳丘部は隅丸の長方形で、東西11.8m×南北13.6mを測る。盛土は削平されており、埋葬施設は検出できなかった。

遺物は周溝から弥生土器（372）、石鏃、石包丁、サヌカイト剥片が出土する。

372は甕で、外反する口縁の端部を丸く収める

S29は石包丁で、両端が欠損する。

819方形周溝墓（第117・121図、PL.52）

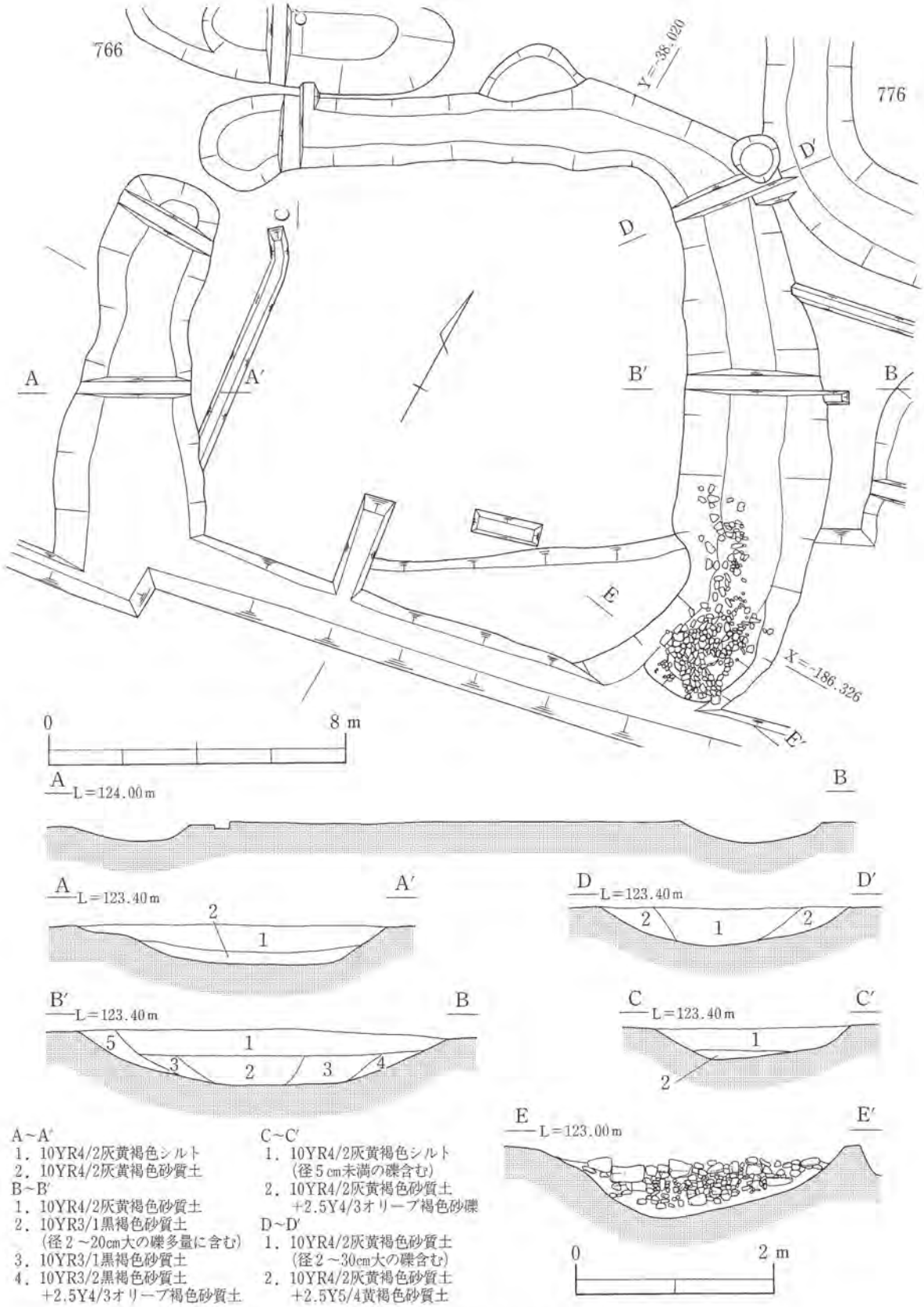
771・772方形周溝墓により、西側の溝を一部残して、大部分が破壊される。残存する周溝は、幅1.8～2.3m、深さ約50cmである。

遺物は弥生土器（374・375）、石鏃、サヌカイト剥片が出土している。374・375は壺底部である。

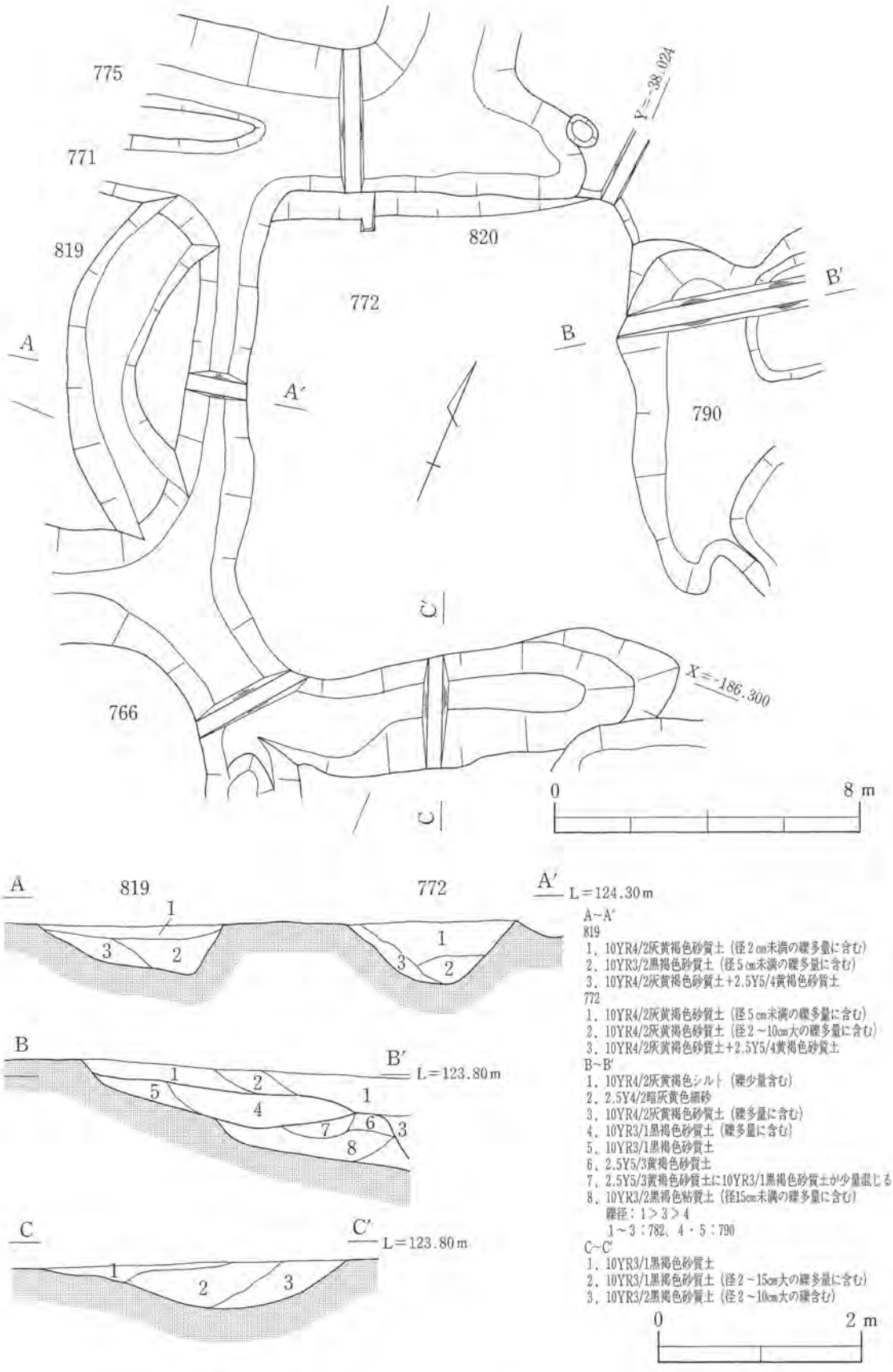
776方形周溝墓（第118図、PL.54）

調査区中央のやや南西にあり、東辺溝の大半が流路によって抉られる。規模は東西12.3m×南北12.9m、周溝は幅2.1～3.1mで断面の形は船底状を呈し、深さは最も深い部分で約30cmを測る。陸橋部は北東隅に存在する。墳丘部は隅丸の平行四辺形で、東西10.9m×南北11.7mを測る。盛土は削平されており、埋葬施設は検出できなかった。

遺物は周溝から弥生土器、サヌカイト剥片が出土する。

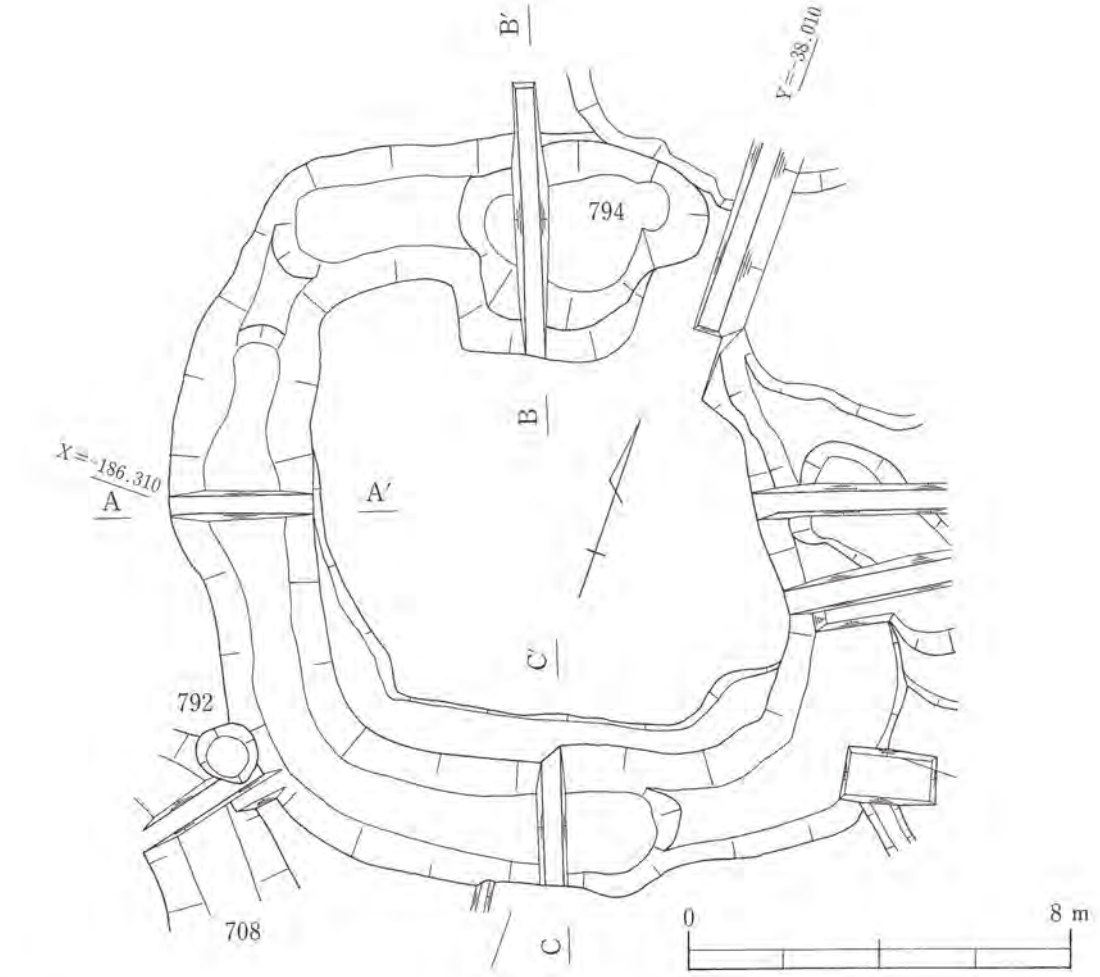


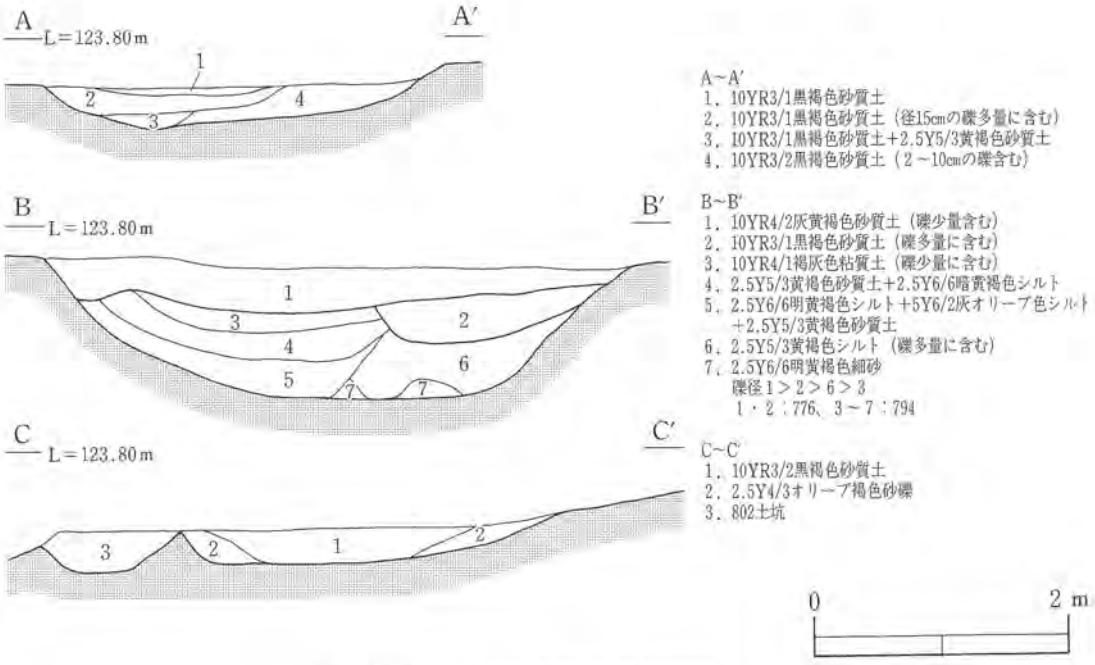
第116図　708方形周溝墓実測図



A~A′
819
1．10YR4/2灰黄褐色砂質土（径2㎝未満の礫多量に含む）
2．10YR3/2黒褐色砂質土（径5㎝未満の礫多量に含む）
3．10YR4/2灰黄褐色砂質土+2.5Y5/4黄褐色砂質土
772
1．10YR4/2灰黄褐色砂質土（径5㎝未満の礫多量に含む）
2．10YR4/2灰黄褐色砂質土（径2～10㎝大の礫多量に含む）
3．10YR4/2灰黄褐色砂質土+2.5Y5/4黄褐色砂質土
B~B′
1．10YR4/2灰黄褐色シルト（礫少量含む）
2．2.5Y4/2暗灰黄色細砂
3．10YR4/2灰黄褐色砂質土（礫多量に含む）
4．10YR3/1黒褐色砂質土（礫多量に含む）
5．10YR3/1黒褐色砂質土
6．2.5Y5/3黄褐色砂質土
7．2.5Y5/3黄褐色砂質土に10YR3/1黒褐色砂質土が少量混じる
8．10YR3/2黒褐色粘質土（径15㎝未満の礫多量に含む）
礫径：1＞3＞4
1～3：782、4・5：790
C~C′
1．10YR3/1黒褐色砂質土
2．10YR3/1黒褐色砂質土（径2～15㎝大の礫多量に含む）
3．10YR3/2黒褐色砂質土（径2～10㎝大の礫含む）

第117図　772・819・820方形周溝墓実測図





A~A′
1．10YR3/1黒褐色砂質土
2．10YR3/1黒褐色砂質土（径15㎝の礫多量に含む）
3．10YR3/1黒褐色砂質土＋2.5Y5/3黄褐色砂質土
4．10YR3/2黒褐色砂質土（2～10㎝の礫含む）

B~B′
1．10YR4/2灰黄褐色砂質土（礫少量含む）
2．10YR3/1黒褐色砂質土（礫多量に含む）
3．10YR4/1褐灰色粘質土（礫少量に含む）
4．2.5Y5/3黄褐色砂質土＋2.5Y6/6暗黄褐色シルト
5．2.5Y6/6明黄褐色シルト＋5Y6/2灰オリーブ色シルト＋2.5Y5/3黄褐色砂質土
6．2.5Y5/3黄褐色シルト（礫多量に含む）
7．2.5Y6/6明黄褐色細砂
礫径1＞2＞6＞3
1・2：776、3～7：794

C~C′
1．10YR3/2黒褐色砂質土
2．2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫
3．802土坑

第118図　776方形周溝墓実測図

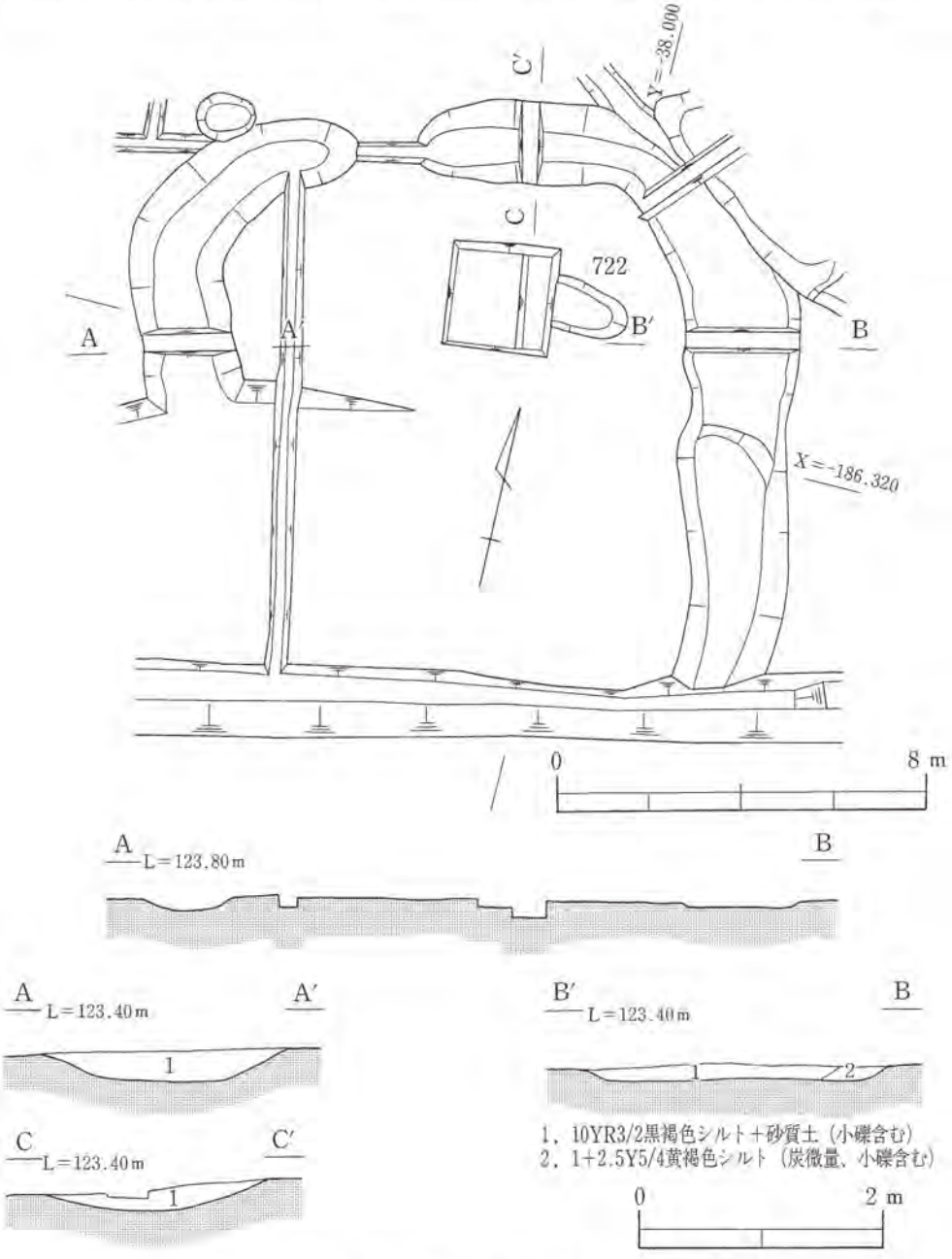
794土坑（第118・121図、PL.54・93）

776方形周溝墓の北辺溝と重複し、それより古い。平面形状は不整楕円形で、長さ5.4m、幅4.0mで、深さ70cmを測る。

遺物は弥生土器（371・373）、サヌカイト剥片が出土する。371は広口壺で、口縁端部を拡張し、外端面と上面に波状文を巡らす。373は甕底部である。

721方形周溝墓（第119図、PL.54）

調査区南東部分にあり、南側は調査区外に拡がる。削平が著しく西辺溝の南部分は遺存しない。規模は東西9.5m×南北10.5m以上で、周溝は幅1.8～2.5m、深さ約10cmである。陸橋部は北西隅



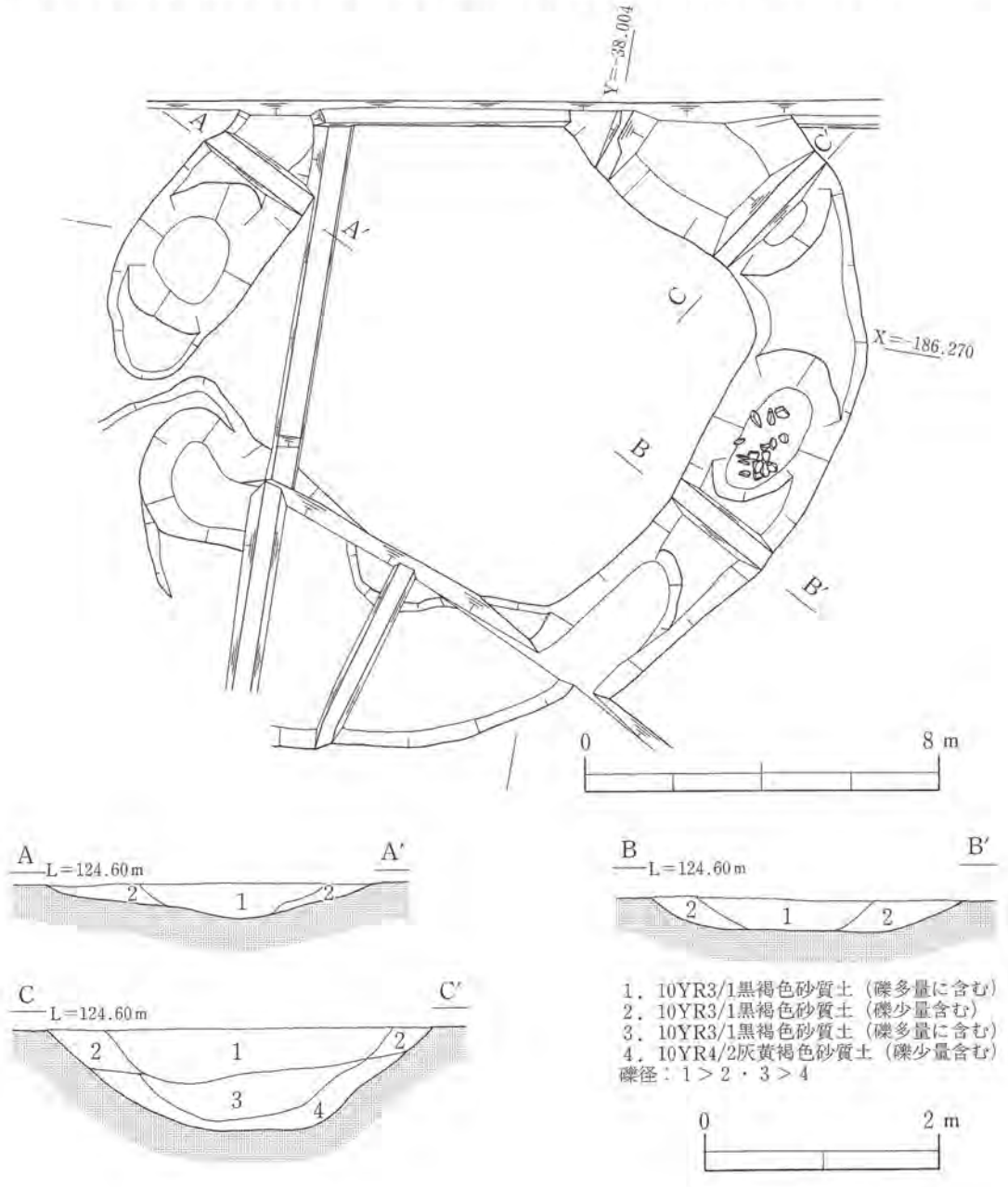
第119図　721方形周溝墓実測図

よりやや東寄りに存在する。墳丘部は隅丸の長方形で、東西10.5m×南北11.3m以上を測る。墳丘上で722土坑を検出しているが、埋葬施設であるか明らかでない。722土坑は長さ1.8m以上、幅1.15m、深さ25cmで、弥生土器片が出土している。

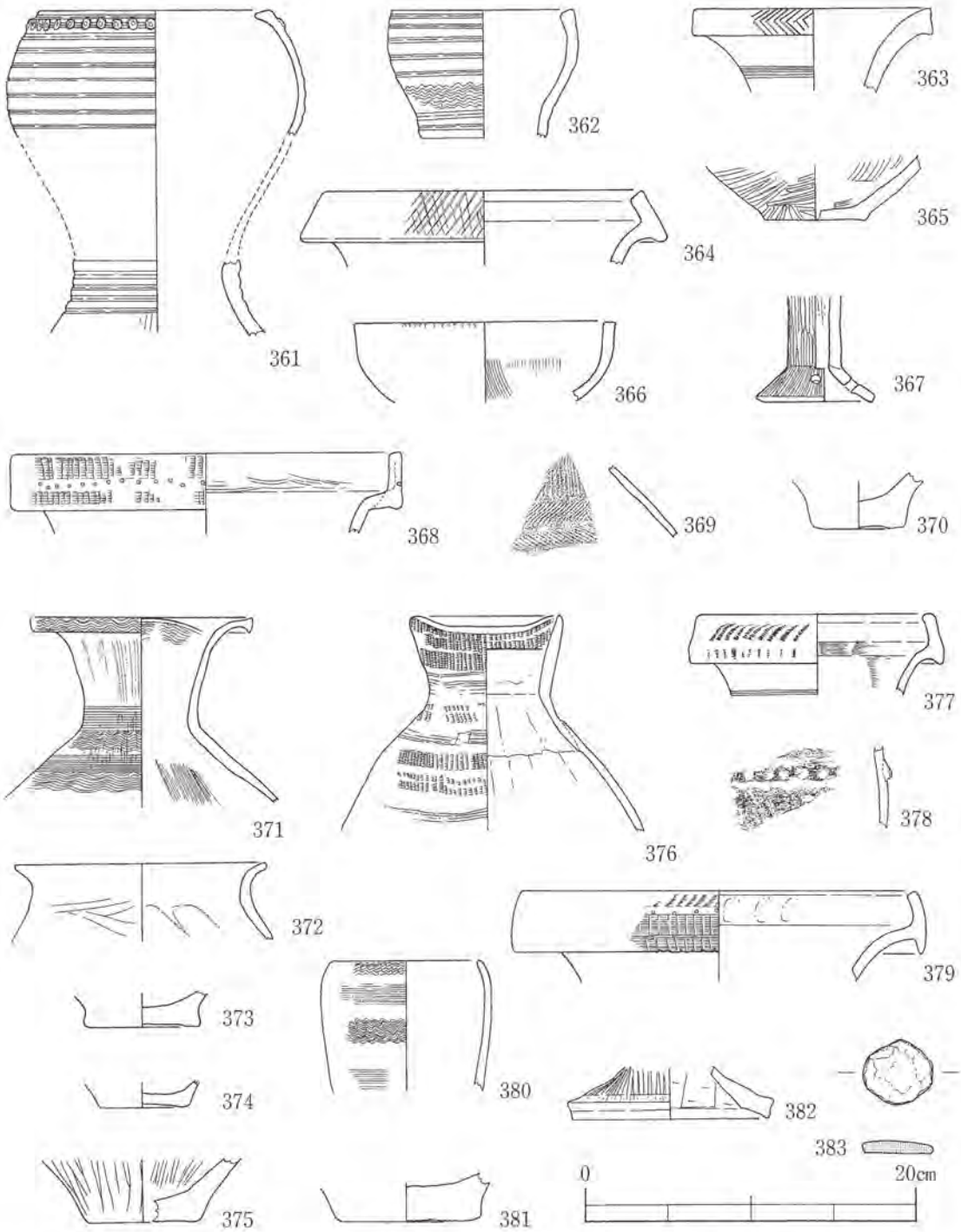
遺物は周溝から、弥生土器、サヌカイト剥片が出土する。

868方形周溝墓（第120・121・134図、PL.55・93・98・99）

調査区の北東隅にあり、北側は調査区外に拡がる。規模は東西10.5m×南北10m、周溝の幅は1.6～3.1mで、断面形は逆台形を呈し、深さは0.3～1.4mを測る。南西隅に陸橋部がある。周溝内



第120図　868方形周溝墓実測図



361～367：766方形周溝墓、368：771方形周溝墓、369・370：708方形周溝墓、371・373：794土坑、
372：772方形周溝墓、374・375：819方形周溝墓、376～383：868方形周溝墓

第121図　2・7区方形周溝墓出土遺物実測図

には部分的に深い箇所があり、埋土中には多量の礫が含まれる。墳丘部は隅丸方形で、東西12.0m×南北11.6mを測る。盛土は削平されており、埋葬施設は検出できなかった。

遺物は周溝から弥生土器、土製品、石器、石製品、サヌカイト剥片などが出土する。376・377・379～382は弥生土器である。376は水差形土器で、口縁端部を片口状に浅く窪ませ、口縁部及び頸部外面に簾状文と直線文を巡らす。胎土に金雲母を含む。377・379は付加状口縁壺で、口縁端部を上下に拡張する。377は外端面に櫛描列点文を、頸部外面に直線文を巡らす。面に簾状文・列点文・刺突文を巡らしている。379は外端面に櫛描列点文1条と簾状文を2条巡らし、それぞれの条の境目に棒状工具による刺突列点文を施す。また、下外端面を細かく刻む。生駒西麓産と考えられる。380は細頸壺で、内湾する口縁部の外面に波状文と直線文を交互に巡らす。胎土に金雲母を含む。381は底部の破片で、胎土に金雲母を含む。382は高杯の脚裾部で、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整である。

378は縄文時代晩期末の突帯文土器深鉢で、二条突帯タイプの体部破片である。突帯上の刻みはD字状である。

383は土器片を再利用した円盤型土製品である。

S27は石剣の基部に当る部分と思われる。

S30は石包丁で縦に半折している。

S28は円盤状の石製品で、中央に両端から穿孔を試みているが貫通していない。紡錘車の未成品の可能性がある。

掘立柱建物6（第122図、PL.56）

調査区北西隅で検出した建物で、調査区内で検出したのは東西1間（3.85m）×南北2間（4.35m）であるが、北と南方向には拡がる可能性がある。主軸方向はN－22°－Wで、柱間は2.04～2.29mである。柱の掘形は円形もしくは楕円形で、32cm×49cm、深さ10～32cmを測る。一部で確認できた柱当たりから、柱は直径17～20cm程度であったと考えられる。

遺物は柱穴から弥生土器やサヌカイト剥片などが出土する。

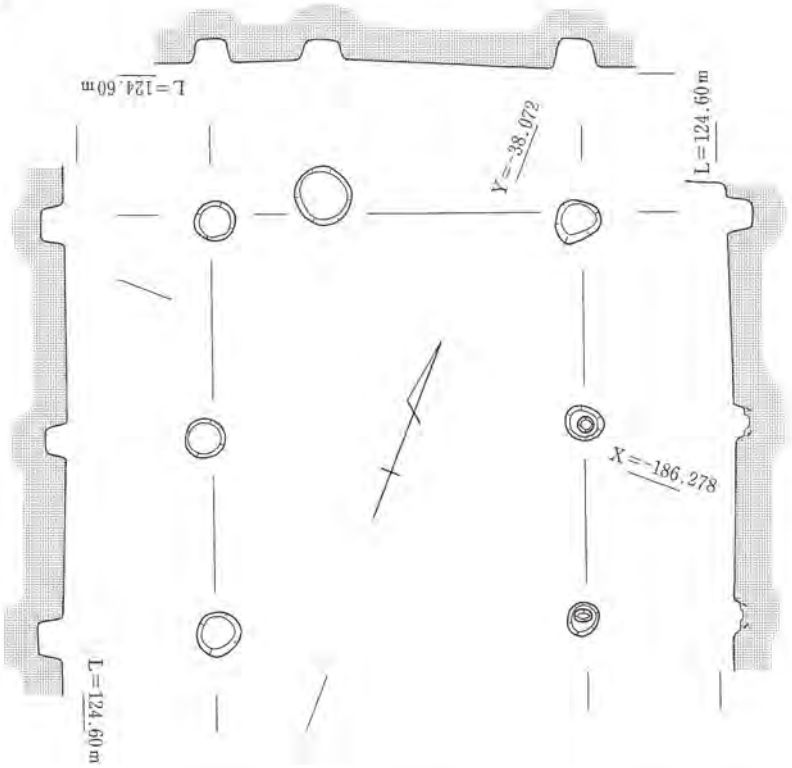
掘立柱建物7（第122・127図、PL.56・93）

調査区北西で検出した建物で、東西2間（3.06m）×南北2間（4.47m）の南北棟の建物で、主軸方位はN－35°－Eである。柱間は桁行が1.95～2.31m、梁行が1.39～1.72mで、桁行の方が総体的に長い。柱の掘形は円形もしくは楕円形で、38cm×84cm、深さ28～44cmを測る。一部で確認できる柱当たりは、直径40cm程度である。

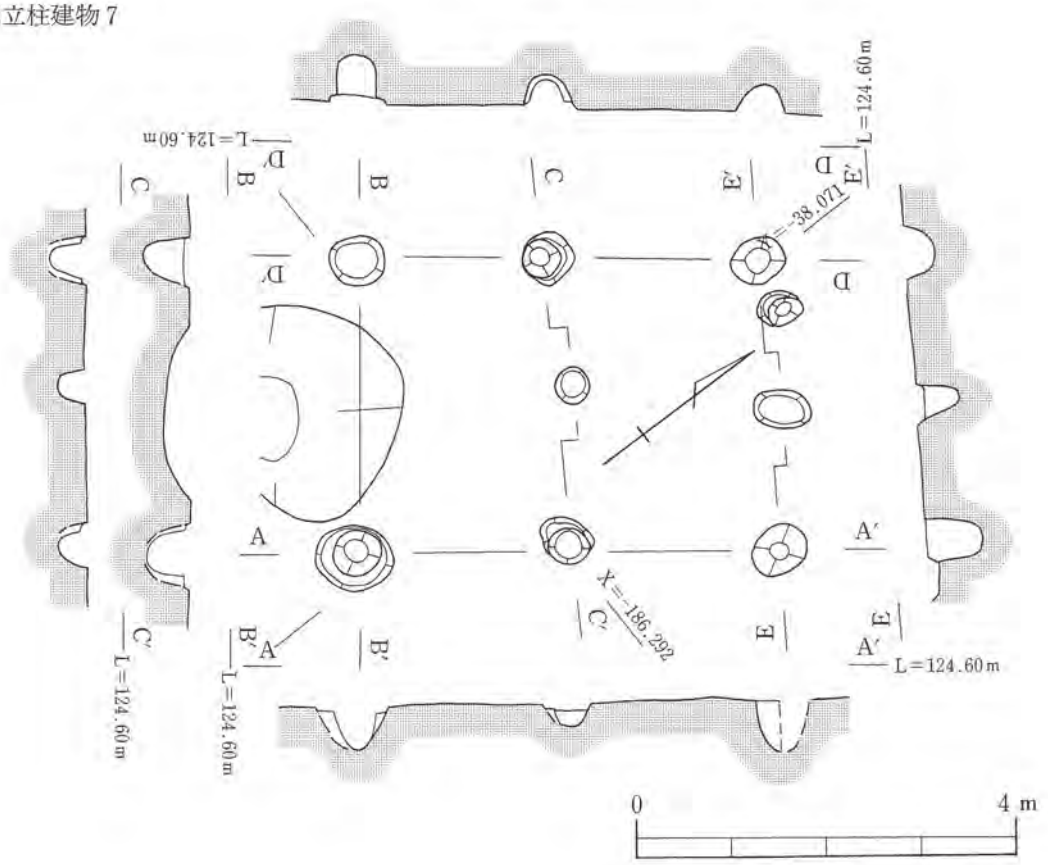
遺物は柱穴から須恵器（384・385）、　弥生土器が出土する。

384は杯あるいは椀と考えられる。385は古墳時代末頃の杯身である。

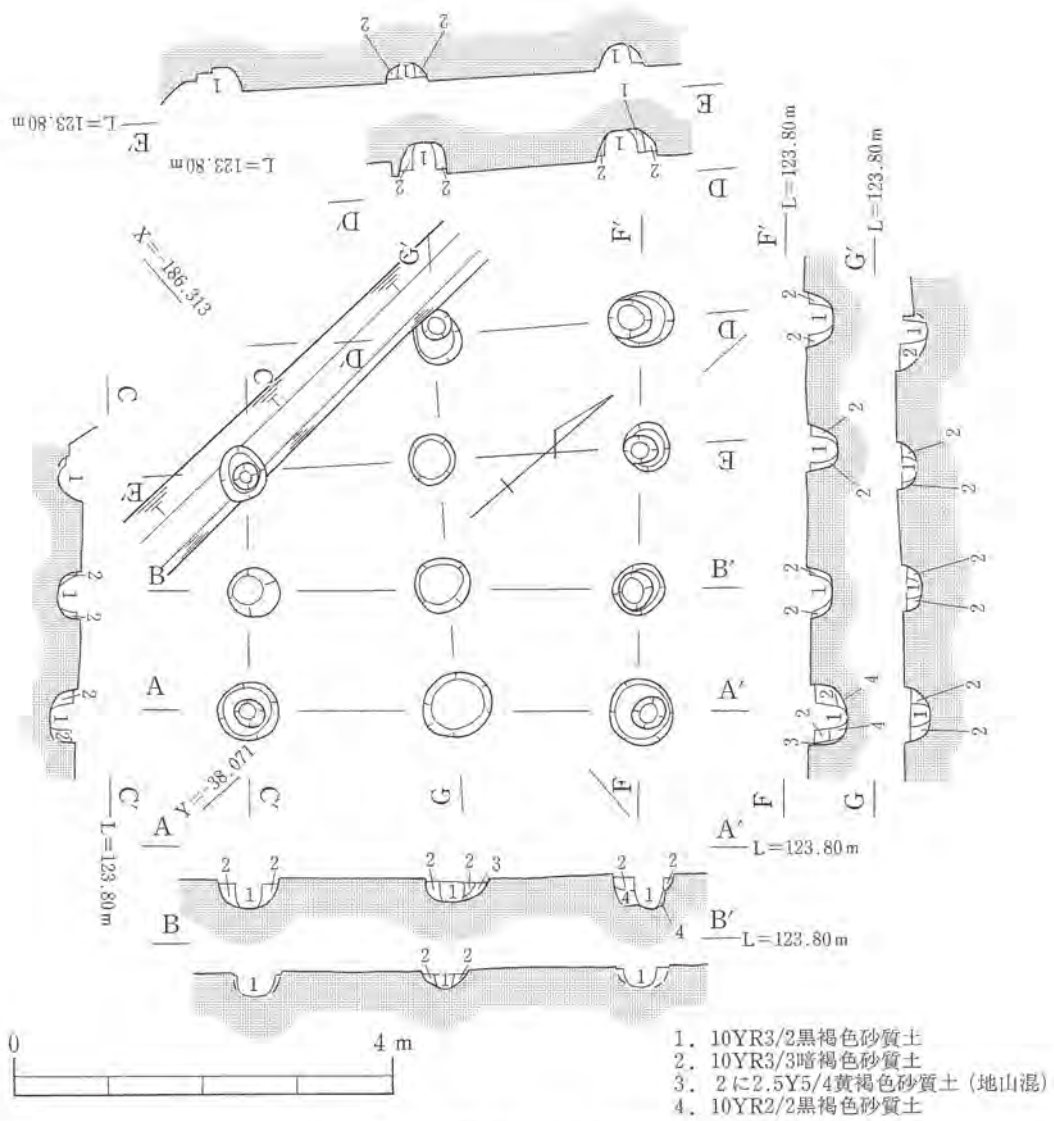
掘立柱建物6



掘立柱建物7



第122図　掘立柱建物6・7実測図



第123図　掘立柱建物 8 実測図

掘立柱建物 8（第123図、PL.56）

調査区西端で検出した建物で、西端の柱穴１基が調査区外になる。ほぼ正方形プランの総柱建物で、桁行３間（4.22m）×梁行２間（4.24m）、主軸方位はＮ－45°－Ｗである。柱の掘形は円形もしくは楕円形で、47cm×69cm、深さ24～31cmを測る。一部で確認できる柱当たりは、直径30～45cm程度である。柱間は桁行に比べ、梁行が長い。

遺物は柱穴から須恵器、土師器、弥生土器などが出土する。

757ピット（第127図、PL.93）

掘立柱建物８の東側で検出した円形を呈するピットで、直径64cm、深さ10cmを測る。

遺物は須恵器（386）・土師器が出土する。386はⅡ型式５段階の杯身である。口縁部の立ち上がりは短く内傾する。

746ピット（第134図、PL.56）

調査区の南西、702方形周溝墓の西側で検出した円形を呈するピットで、直径34cm、深さ20cmを測る。

遺物は弥生土器、石匙、サヌカイト剥片が出土する。S38は縦型の石匙で、先端に向かって反っている。

735石室墓（第124・127図、巻頭図版6、PL.57・94）

調査区南西で検出した竪穴系小石室で、石室内に箱式石棺を置く。墳丘・周溝は検出できなった。石室の掘形は形状が隅丸方形で、長さ2.37m、幅1.62m、残存する深さ約45cmを測る。石室は掘形いっぱいに構築されており、内法は長さ1.40m、幅0.7m、深さ約60cmで、長軸はほぼ南北方向である。石材は和泉砂岩で、南北両小口と東側壁は石材の長い方を立てるように使用し、小口は2石で築かれる。東側壁は南東隅の石材が抜かれており、5石が残存するが、もともとは6石で築かれていたと考えられる。一方、西側壁は石材の長い方を横方向に使用し、基本的に4列2段で築かれる。石室の天井部は残存せず、構造は明らかでない。

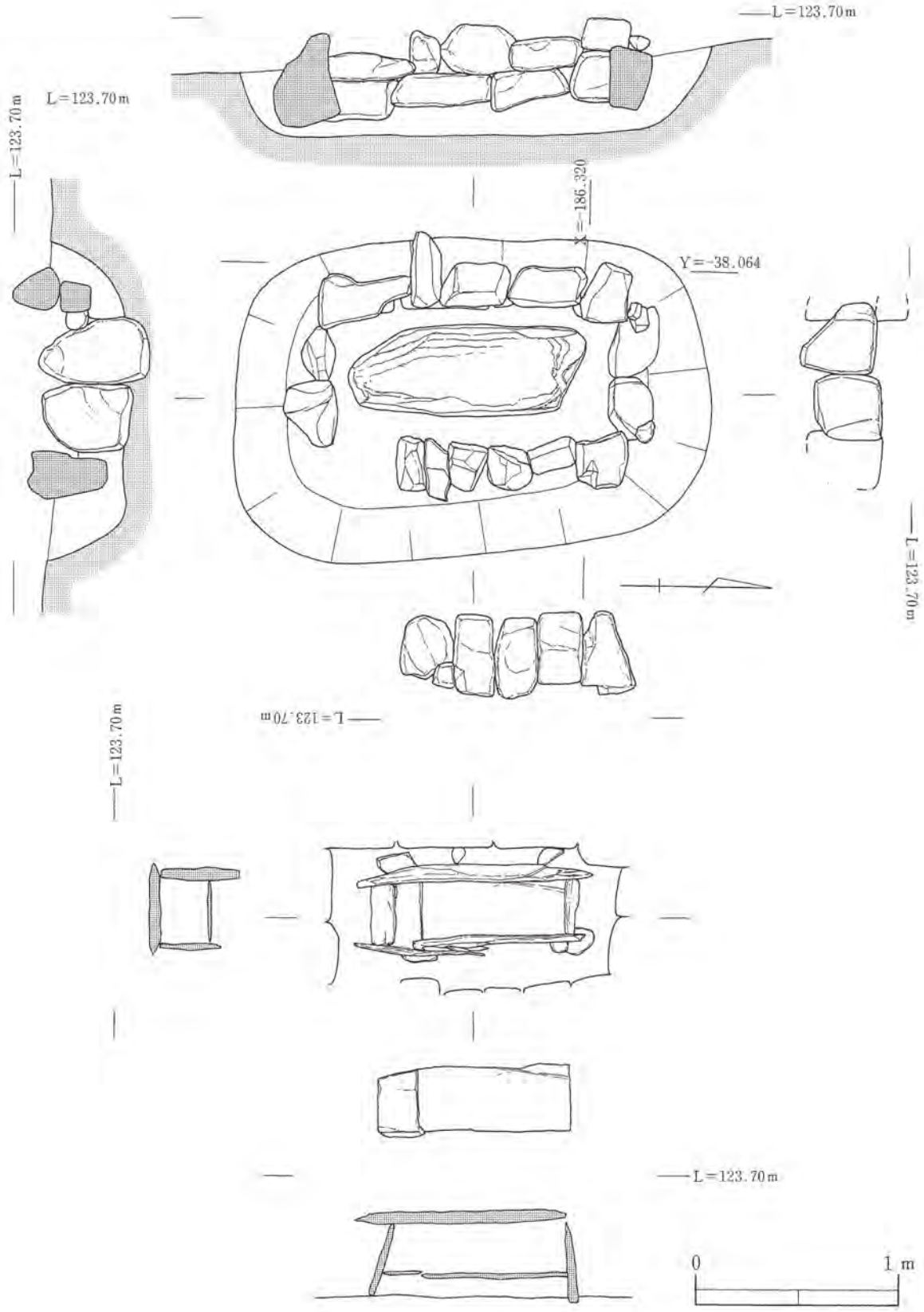
石棺は結晶片岩の板石を組み合わせた箱式石棺で、規模は長さ0.95m、幅0.30m、深さ25cmである。石棺は蓋石と南北両小口・西側面は1石、東側面と底は2石で作られる。石棺の設置は、両小口の石材を東西両側の石材で挟み、底石は石棺内側に嵌るようにして、結晶片岩の割り石で補強しながら埋め戻して固定する。

遺物は石棺内から歯数点及び骨片と耳環2点（393・394）が出土しているのみである。393・394は金銅製耳飾りで、外径は2.2cm、環の直径は0.4cmである。これらは飛鳥時代に所属すると考えられる。

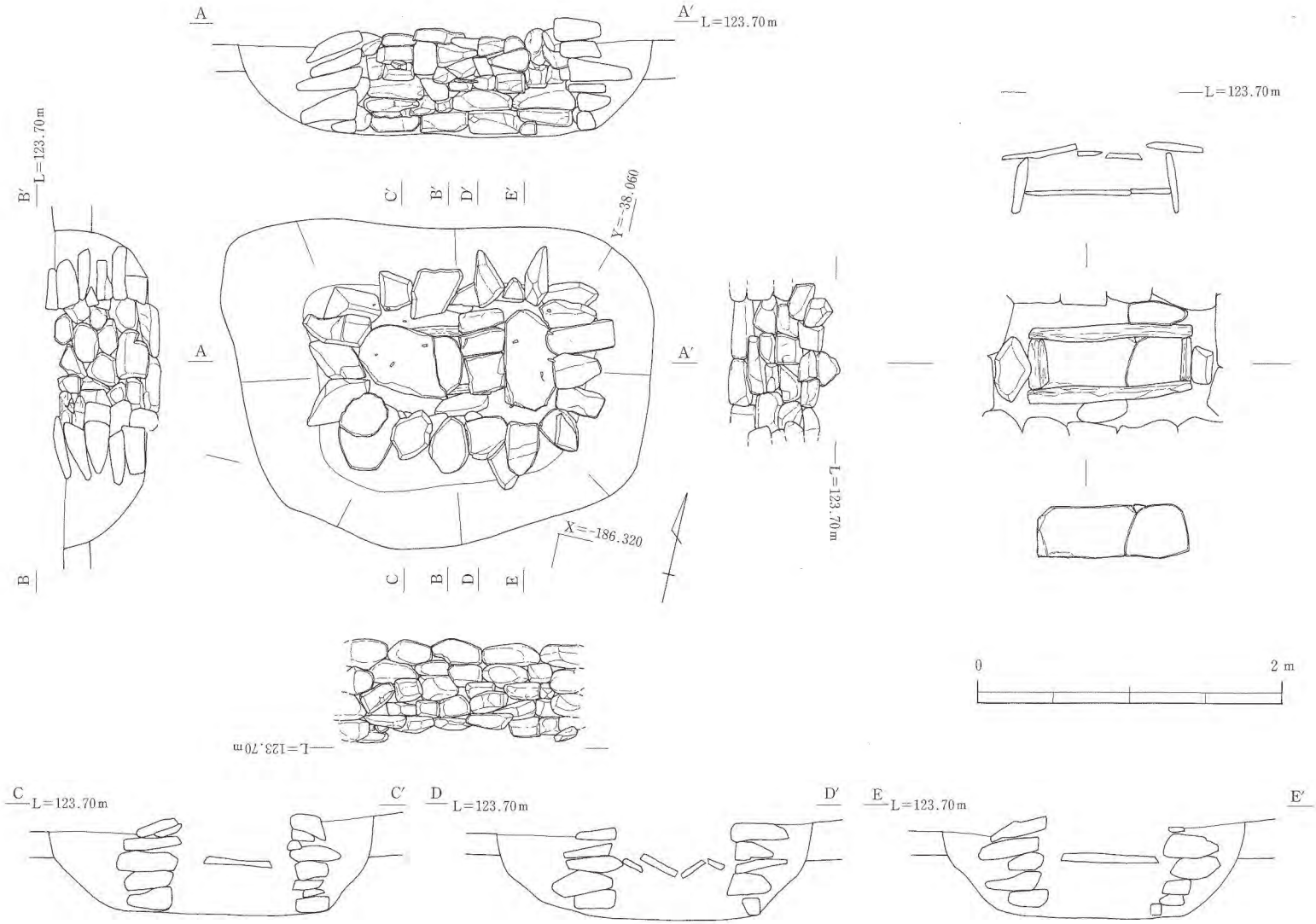
734石室墓（第125図、PL.58）

調査区南西で検出した竪穴系小石室で、石室内に箱式石棺を置く。墳丘は・周溝は検出できなかった。北東にある735石室墓とは間隔が約50cmと近接する。石室の掘形は隅丸方形に近い形状で、長さ2.85m、幅2.10m、残存する深さ約65cmを測る。石室の内法は基底部付近で長さ1.40m、幅0.8m、深さ約75cmで、長軸はN－78°－Eである。石材は和泉砂岩で、四周の壁面とも小口積みを基本として5・6段を四方からやや持ち送りながら積み上げる。石室の天井部は残存せず、構造は明らかでない。

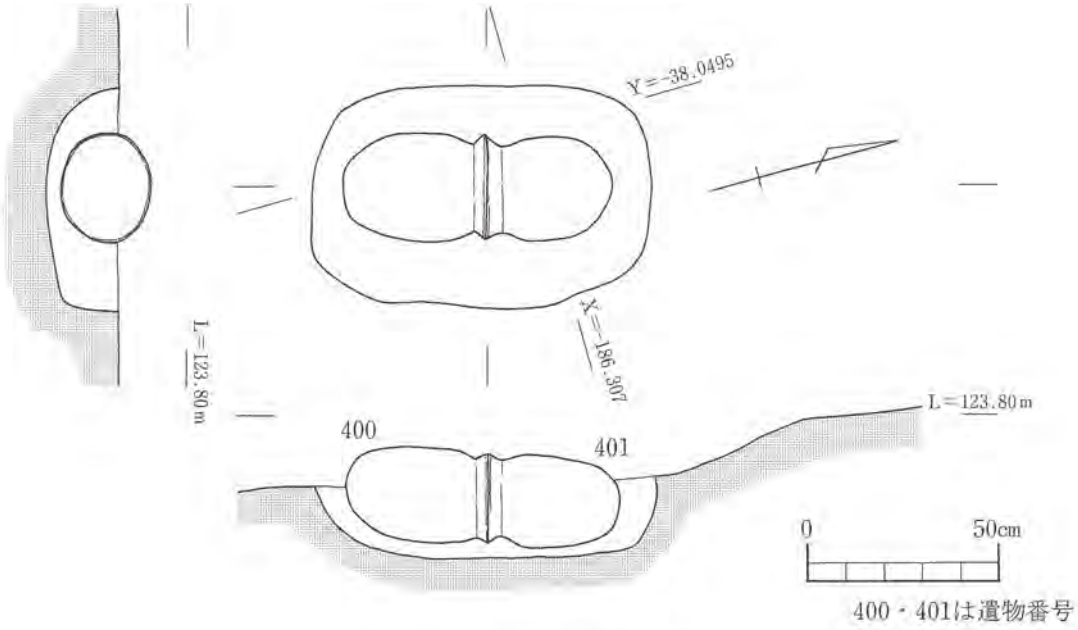
石棺は結晶片岩の板石を組み合わせた箱式石棺で、規模は底付近で長さ0.95m、幅0.30m、深さ25cmと、735石室墓と同じ規格で作られている。東西両小口の石材は内側に倒れている。石棺は蓋石を除いて1石で作られており、蓋石は破損するものの3石であったと考えられる。石棺の設置は、両小口の石材を南北両側の石材で挟み、底石は石棺内側に嵌るようにしており、石棺と石室の間に石室石材と同様な石を込んで棺材を固定している。



第124図　735石室墓実測図



第125図　734石室墓実測図



第126図　783土器棺墓実測図

遺物は石棺蓋石の上から釘が12点出土している。このほかに骨や土器等の遺物は出土していないが、飛鳥時代に所属すると考えられる。

783土器棺墓（第126・127図、PL.59・94）

719方形周溝墓北辺溝の上面で検出した土器棺墓である。土師器の甕２個体（400・401）の口縁部を合わせて土器棺としたものである。掘形は隅丸の長方形で、規模は0.9m×0.6m、残存する深さ約20cmを測る。主軸はＮ－15°－Ｅである。

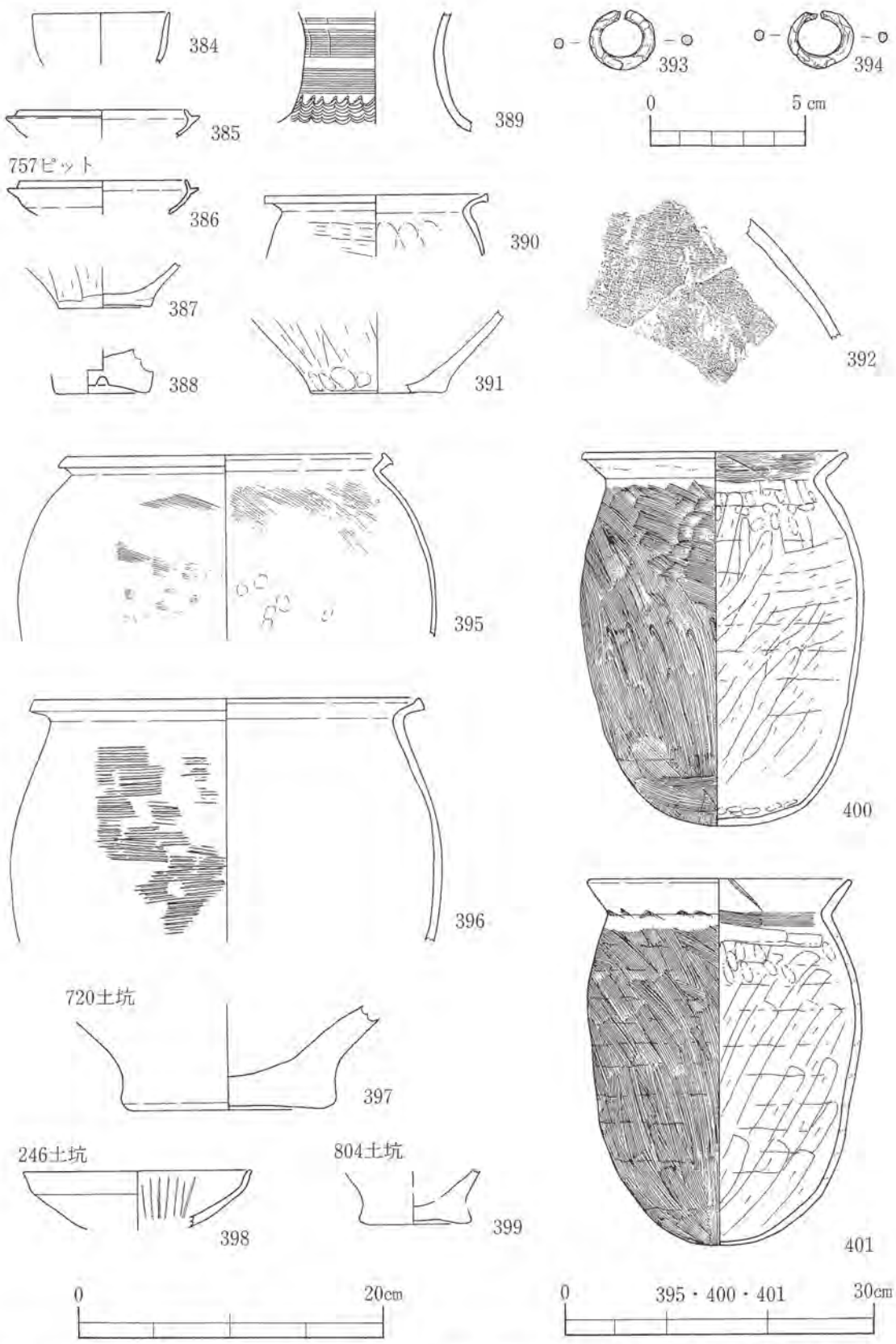
甕の内部には骨等は遺存しておらず、副葬品等も出土しない。

400・401は丸底・長胴の甕で、口縁部が「く」の字形に外反する。体部外面を斜め方向のハケ、内面をヘラケズリ調整する。７世紀に所属するものと考えられる。

856土坑（第127・128図、PL.93・94）

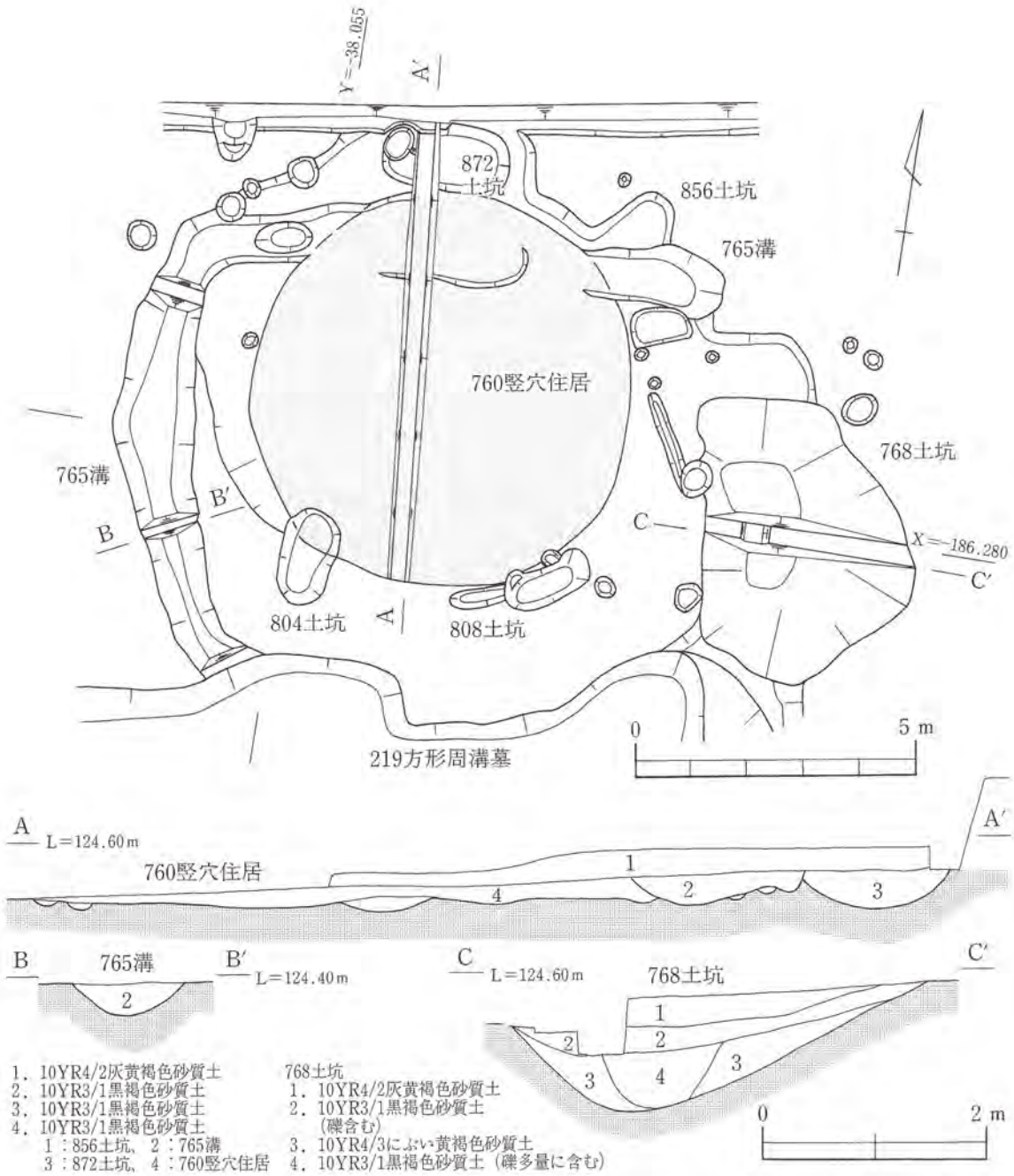
調査区の北西で検出した土坑で、760竪穴住居の北東にあって765溝と重複し、それらより新しい。

遺物は弥生土器（387～390・395）のほかに、石鏃、石錐、スクレイパー、サヌカイト剥片などの石器類が多く出土する。387・388は底部の破片である。389は壺頸部で、外面に簾状文・直線文・波状文を巡らす。390・395は甕で、このうち390は口縁部が「く」の字に外反し、端部は上下に拡張する。体部外面はヘラケズリ調整である。395は口縁部が「く」の字に短く屈曲し、端部を上下に拡張する。



384・385：掘立柱建物７、387～390・395：856土坑、391・392・396：765溝、393・394：735石室墓、400・401：783土器棺墓

第127図　２・７区遺構出土遺物実測図



第128図　765溝・768土坑他実測図

765溝（第127・128図、PL.93・94）

調査区の北西で検出した溝で、L字状に折れて南側が219方形周溝墓によって削平される。760竪穴住居と重複し、それより新しい。溝としているが、方形周溝墓の可能性があり、768土坑も一連のものと考えた場合、墳丘規模は約10m程度となる。溝の規模は幅0.85～1.50m、深さ約30cmを測る。溝内には部分的に深い箇所が認められる

遺物は弥生土器（391・392・396）が出土する。391は底部の破片である。392は壺体部の破片で、外面に簾状文・波状文を巡らす。396は甕で、「く」の字に屈曲する口縁の端部を上方へ拡張

する。体部外面は横方向の平行タタキ調整である。

872土坑（第128図）

調査区の北西、760竪穴住居の北に接する土坑である。平面形状は楕円形で、2.30m×1.30mで、深さ40cmを測る。遺物は弥生土器が出土する。

804土坑（第127・128図）

調査区の北西で検出した土坑で、760竪穴住居と重複し、それより新しい。形状は楕円形を呈し、1.80m×1.00m、深さ25cmである。

遺物は弥生土器（399）、サヌカイト剥片が出土する。399は甕底部の破片である。

768土坑（第128図）

調査区の北西で検出した大型土坑で、760竪穴住居の南東に位置する。形状は不整形で、5.00m×3.80mで、深さ1.15mを測る。中央付近に落ち込むような状態で多くの礫が出土している。

遺物は弥生土器、サヌカイト剥片が出土する。

225土坑（第129図、PL.59）

調査区の西端で検出した土坑で、掘立柱建物7と重なるが柱穴との重複がないので新旧関係は不明である。形状は不整楕円形で、規模は2.45m×2.10m、深さ80cmを測る。断面の形状は擂鉢状である。

遺物は弥生土器、飛鳥時代の須恵器・土師器が出土する。

246土坑（第127・129図）

調査区の西端で検出した土坑で、225土坑と重複し、それより古い。平面形状は楕円形で、1.25m×0.70m以上、深さ45cmを測る。

遺物は土師器（398）、須恵器が出土する。398は高杯で、杯部内面に放射状の暗文を施す。

720土坑（第127・129図、PL.59）

調査区の南東隅で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は3.70m×2.35m、深さ60cmを測る。土坑の中央からは2～15cm大の礫が密集して出土した。

遺物は弥生土器（397）が出土する。397は壺底部の破片である。

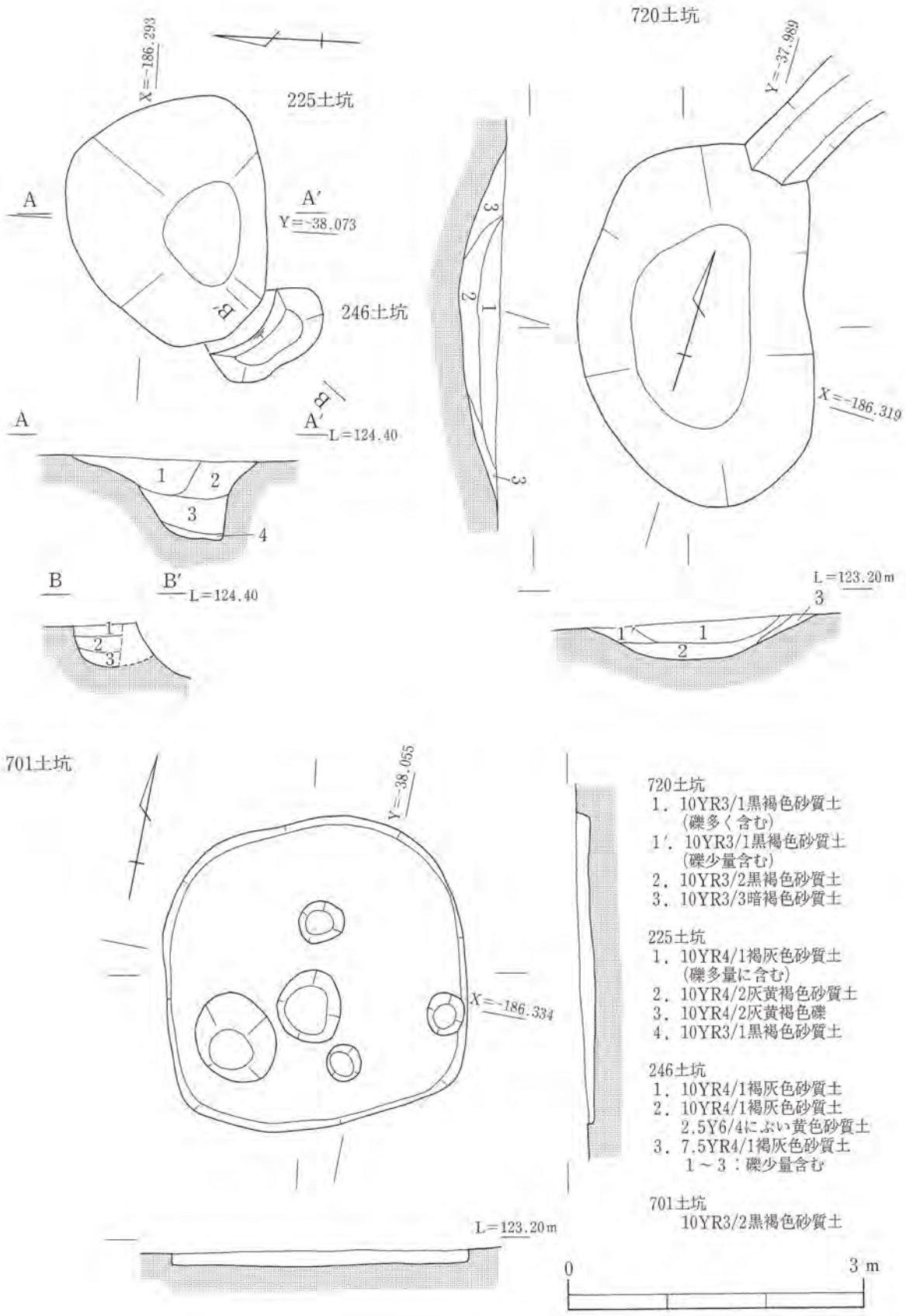
701土坑（第129・134図、PL.59・99）

調査区の南西で検出した土坑で、702方形周溝墓の墳丘内に位置する。新旧関係は明らかでない。平面プランは隅丸方形で、3.10m×3.00m、深さ20cmを測る。平坦な底で、35～95cmの楕円形の土坑を5基検出している。

遺物は弥生土器、石鏃（S37）、サヌカイト剥片などが出土する。S37は凸基有茎式石鏃である。

773土坑（第130図）

調査区中央北寄り、775方形周溝墓と771方形周溝墓の周溝が重なる付近で検出した土坑である。



第129図　225・246・720・701土坑実測図

周溝墓との前後関係は明らかでない。形状は隅丸の長方形で、90cm×70cm、深さ27cmを測る。断面の形状は船底状で、底には5～10cmの厚さで炭が溜まる。周囲の壁は被熱して赤色化・黒色化することから、炉の性格をもつ遺構であると考えられる。

遺物は弥生土器、サヌカイト剥片などが出土する。

791土坑（第130図、PL.59）

調査区中央東寄りで検出した土坑で、776方形周溝墓の東に位置する。周囲には複雑に流路が入り組んでいる。平面形状は隅丸の長方形を呈し、88cm×63cm、深さ20cmで、底はほぼ平坦で壁は垂直に立ち上がる。底には厚さ10cmあまりで炭が溜まり、壁面や底面が被熱して赤色化する。773土坑と同様な性格の遺構であると考えられる。

遺物は弥生土器、土師器が出土する。

778土坑（第130図）

調査区中央西寄り、719方形周溝墓と219方形周溝墓の間で検出した土坑である。平面は隅丸の長方形に近い形状で、78cm×66cm、深さ20cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土には炭を多く含み、壁は被熱して赤色化する。

遺物は出土しない。

797土坑（第130図）

調査区中央北寄り、772方形周溝墓の北で検出した土坑である。平面形状は楕円形で、89cm×71cm、深さ15cmで、断面の形状は船底状である。埋土の下層には炭が多量に含まれる。

遺物は弥生土器が出土する。

792土坑（第130図）

調査区中央南東寄で検出した土坑で、708方形周溝墓、776方形周溝墓と重複し、それらとの新旧関係は不明である。平面形状は不整円形で、直径1.30m、深さ40cmを測る。断面形状は船底状で、埋土は2層に分けられ、上層は5～20cm程度の礫を多く含み、下層は炭・灰を多く含む。

遺物は出土しない。

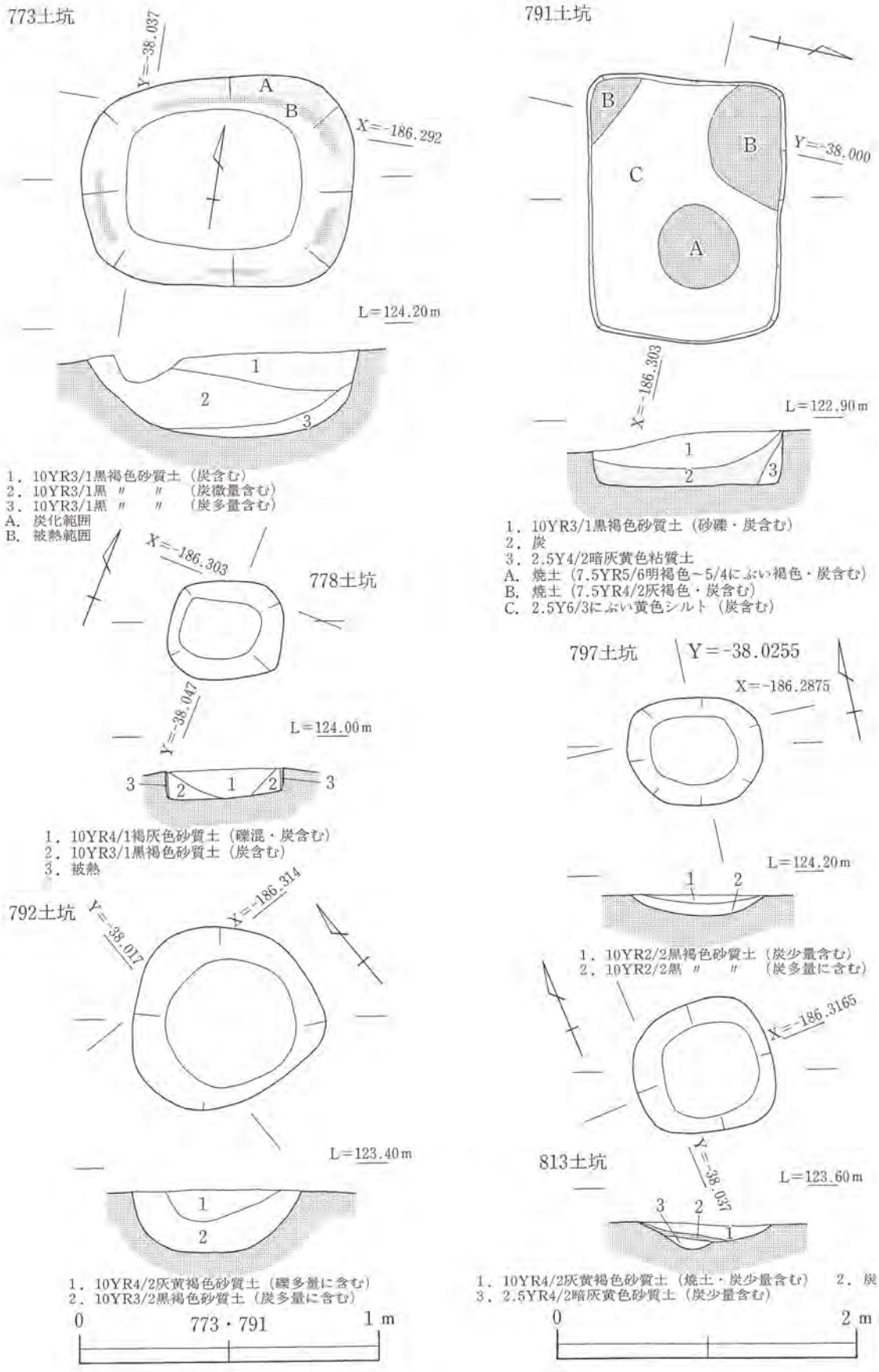
813土坑（第130図）

調査区中央南寄り、766方形周溝墓と719方形周溝墓の間で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形で、90cm×90cm、深さ18cmを測る。埋土の中ほどには炭が溜まり、上層には焼土がブロック状に混入する。

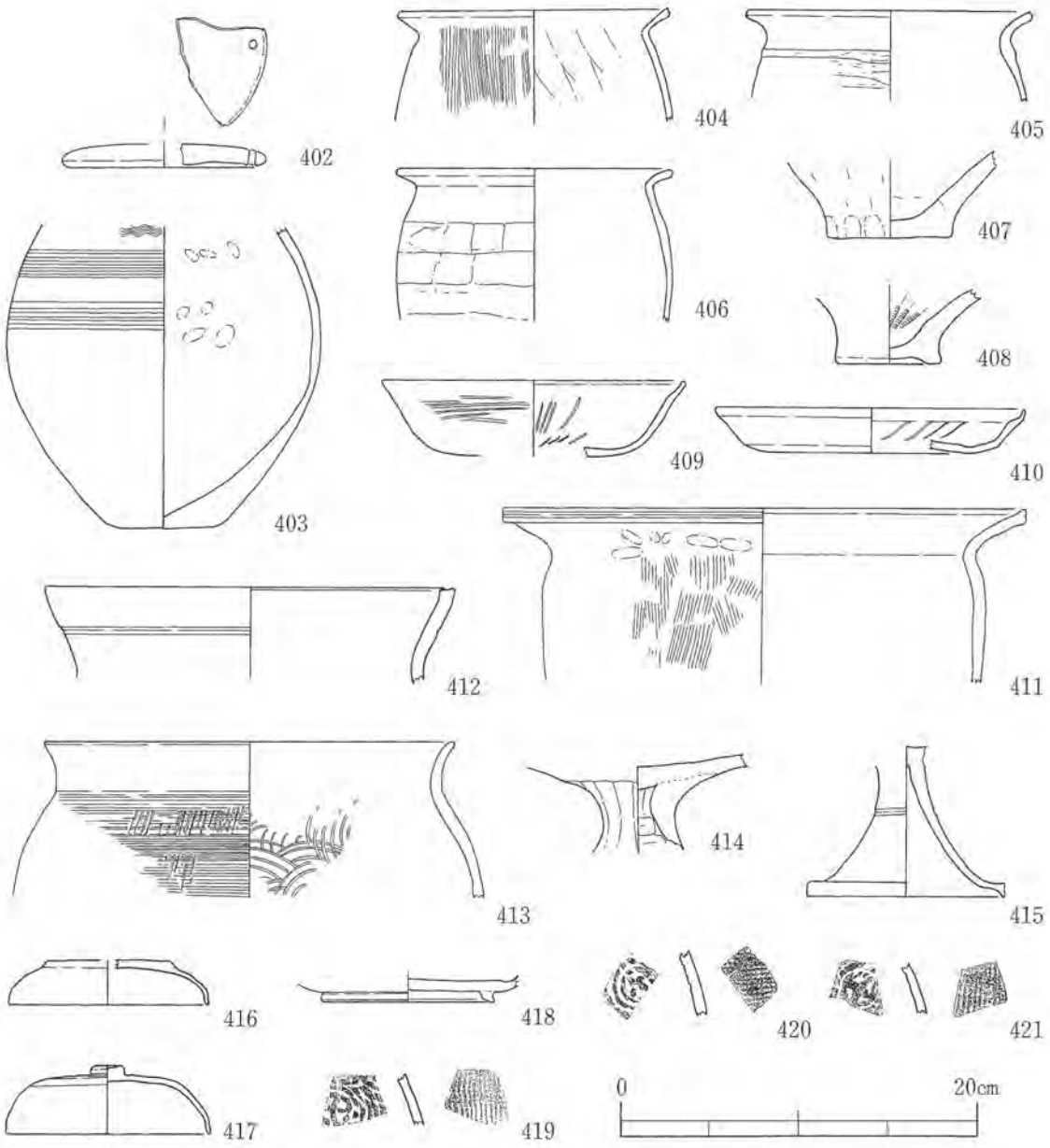
遺物は出土しない。

782流路（第131・134～136図、PL.60・61・94・95・99・100）

調査区の東部で検出した南北に延びる溝状の遺構である。幅は最大で18m、底は凹凸があり最も深い部分で約1.2mである。自然流路の深くなった部分が窪地として残されたものと考えられる。



第130図　7区土坑実測図



第131図　782流路出土遺物実測図

遺物は主に下位層から弥生土器が多量に、上位層からは飛鳥時代の須恵器・土師器が多量に出土している。このほかの遺物としては、石鏃、石包丁、石錐、石棒、スクレイパー、サヌカイト剥片や鉄片が出土する。

402～408は弥生土器である。402は円盤形を呈する壺蓋で、紐穴が穿たれる。403は壺体部で、上位外面に波状文と直線文を巡らす。

404～408は甕で、口縁部が「く」の字に外反する。404の体部外面は縦方向のハケ調整である。405・406は口縁端部を丸く収める。体部外面はヘラケズリ調整である。407・408は底部の破片である。407は外面をヘラケズリ調整する。

409～411・414は奈良時代に帰属すると考えられる土師器である。409は杯で、口縁端部を僅かに内側に押えている。内面に放射状、外面に横方向の暗文を施す。410は皿で、口縁端部を上方へ立ち上げる。内面に放射状の暗文を施す。411は甕で、「く」の字に屈曲する口縁の端部を上方に拡張する。外端面には凹線文を巡らす。体部外面は縦方向のハケ調整である。414は高杯で、脚部外面は面取りを行い、内面は横方向のヘラケズリ調整である。

412・413・415～421は須恵器で、417は古墳時代、それ以外は古代に帰属すると考えられる。

412・413は甕で、口縁端部は上方に面があり、やや窪んでいる。外面に凹線文を1条巡らす。413は外反する口縁の端部は丸く収める。体部外面は縦方向の平行タタキ調整後カキメで、内面には同心円状の当て具痕がある。415は基部の細い長い脚部をもつ高杯で、中央部に１条の凹線文を巡らす。裾端部は下方に突出する。416・417は杯蓋で、このうち416の天井部は平坦となる。417は高杯蓋で、天井部中央に扁平な、中心が凹面をなすつまみを付す。天井部は回転ヘラケズリ調整である。418は杯身で、底部端に低い高台を付す。419～421は甕破片で内面の当て具は車輪文となっている。

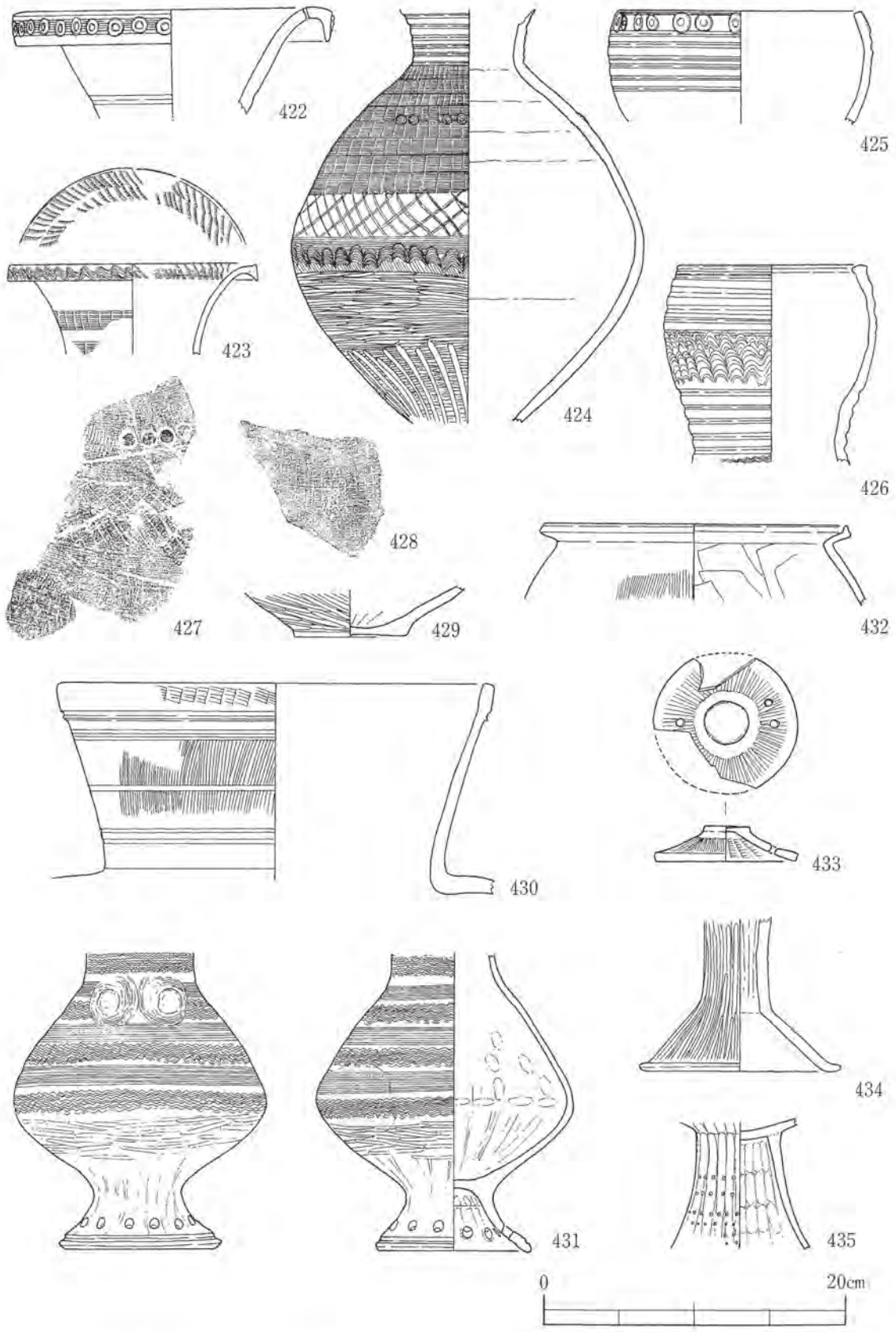
S（31・32・33・34・36・35・54）は石鏃、S41は石包丁、S46は叩石、S39は石棒である。

786土坑（第132図、PL.61・96）

調査区の東側で検出した大型の土坑で、782流路と重複し、それより古いと考えられる。平面形状は不整形で、規模は9.00m×5.30mで、深さは最大で1.45mを測る。

遺物は弥生土器が多量に出土している。弥生時代以降の遺物としては古代の須恵器が１点出土しているが混入品と考えられる。422～429は弥生土器の壺で、このうち422・423は広口壺である。422は口縁端部が垂下し、外端面に凹線文を３条巡らし、その上に竹管文を押す円形浮文を配する。頸部には凹線文を１条巡らす。423は外反する口縁の端部を下方に拡張する。外端面に波状文を、上面には櫛描列点文を２条巡らす。頸部には２条の簾状文を巡らす。424は頸部から体部にかけての破片で、頸部には６条以上の凹線文を巡らす。頸部から体部中位にかけては上から８条の簾状文、斜格子文、直線文、波状文の順で連続して文様を配し、さらに簾状文の上には竹管文を押す円形浮文を一列貼付する。体部下半は丁寧なヘラミガキ調整である。425・426は細頸壺で、このうち425は内湾する口縁部に凹線文を７条巡らし、端部下に竹管文を押す円形浮文を貼り巡らす。426内湾する口縁部に凹線文７条と波状文２条、頸部に凹線文を５条と波状文を巡らす。427・428は体部破片で、このうち427は簾状文、櫛描列点文、斜格子文を連続して巡らし、上部に円形浮文を貼付する。428は簾状文を連続して巡らす。円形浮文の剝落した痕跡がある。429は底部の破片で、外面はヘラミガキ調整である。これらの弥生土器はおおよそⅢ様式後半に帰属すると考えられる。

430は須恵器甕で、外傾する口縁の端部を帯状に拡張する。外端面には簾状文を巡らし、その下



422～430：786土坑、431～435：825土坑

第132図　786土坑・825土坑出土遺物実測図

に凹線文を巡らす。口縁部から頸部にかけては5条の凹線文を巡らす。

825土坑（第132図、PL.96）

調査区の東側で検出した土坑で、782流路と重複し、それより古い。土層観察用のアゼにより、全容は明らかになっていないが、平面形状は楕円形を呈すると考えられる。規模は3.60m×1.20m以上、深さ35cmを測る。

遺物は弥生土器（431～435）が多量に出土している。431は台付水差形土器で、体部は算盤玉形を呈する。肩部の把手は欠損する。頸部から体部中位にかけて波状文と直線文を交互に巡らす。脚台は「ハ」の字に開き、裾端部に凹線文を1条巡らし、その上位に円穴を穿つ。432は甕で、口縁部が「く」の字に外反し、端部をわずかに上方に拡張する。体部外面は縦方向のハケ調整である。433は平らな天井部をもつ傘形の蓋である。縁部外面には放射状にヘラミガキ調整する。縁部には二個一単位の紐穴を対称に穿っていたと考えられる。434・435は高杯の脚部で、このうち434は脚柱部が筒状で、裾部がラッパ状に開く。外面は縦方向のヘラミガキ調整である。435は脚柱部の基部が太く、裾部に向かって緩やかに広がる。外面は幅広の縦方向のヘラミガキ調整で、棒状工具による小さな刺突列点文を6段にわたって巡らす。

784土坑

調査区の東側にある723流路内で検出した土坑で、流路より古い。形状は不整楕円形で、3.95m×2.80m、深さ75cmを測る。遺物は弥生土器が出土する。

795土坑

調査区の東側にある776方形周溝墓の南東隅に接する。形状はそら豆状で、長さ2.55m×1.60m、深さ33cmを測る。遺物は弥生土器が出土する。

796土坑

調査区の東側にある782流路内のやや高い箇所で検出した土坑である。形状は円形で、1.20m×1.15m、深さ18cmを測る。遺物の出土はない。

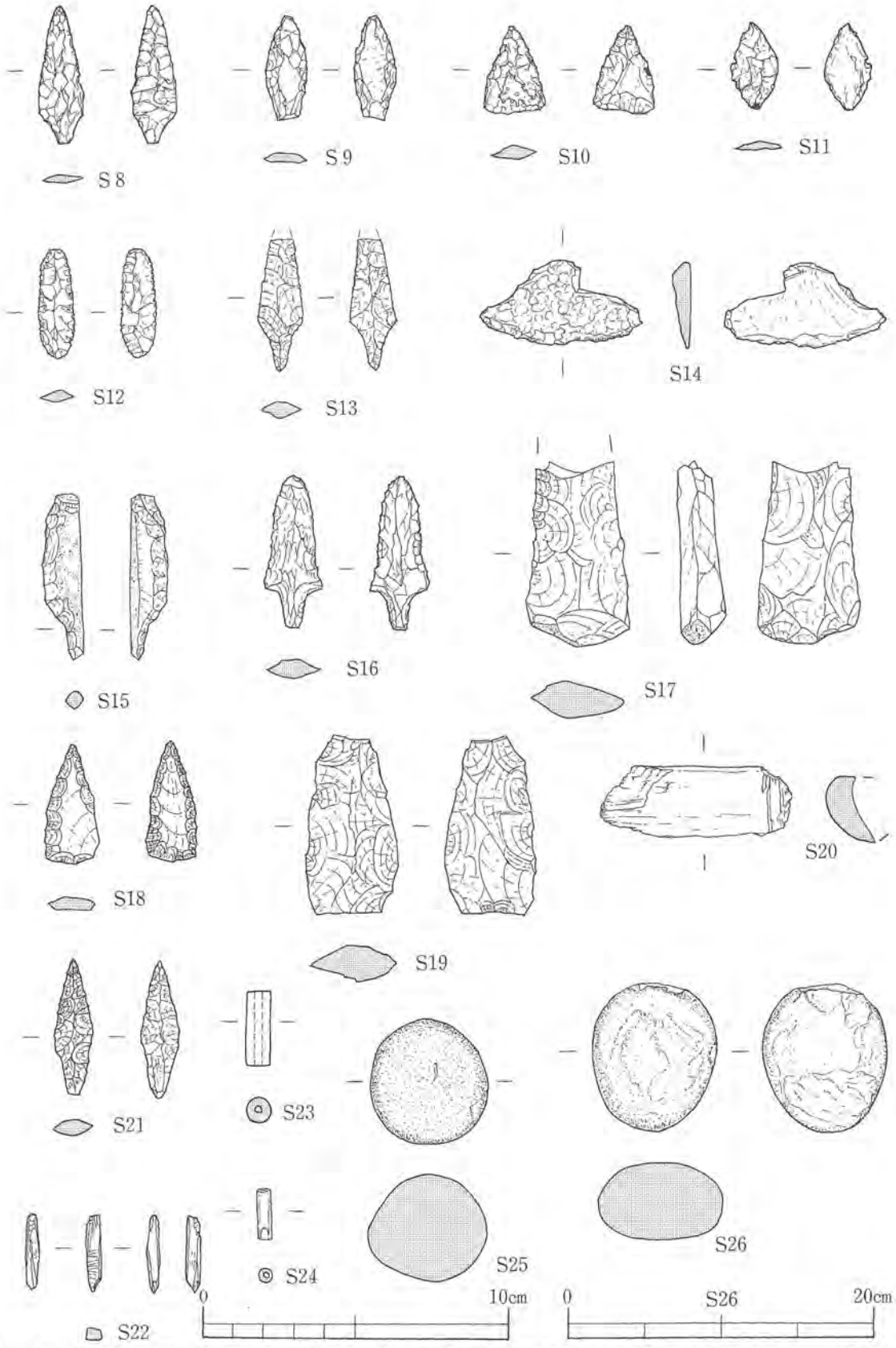
723流路

調査区南東部に位置し、782流路の南端付近より北東に延びる溝である。幅3.50m、深さ45cmを測る。

遺物は弥生土器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・瓦器などが出土する。

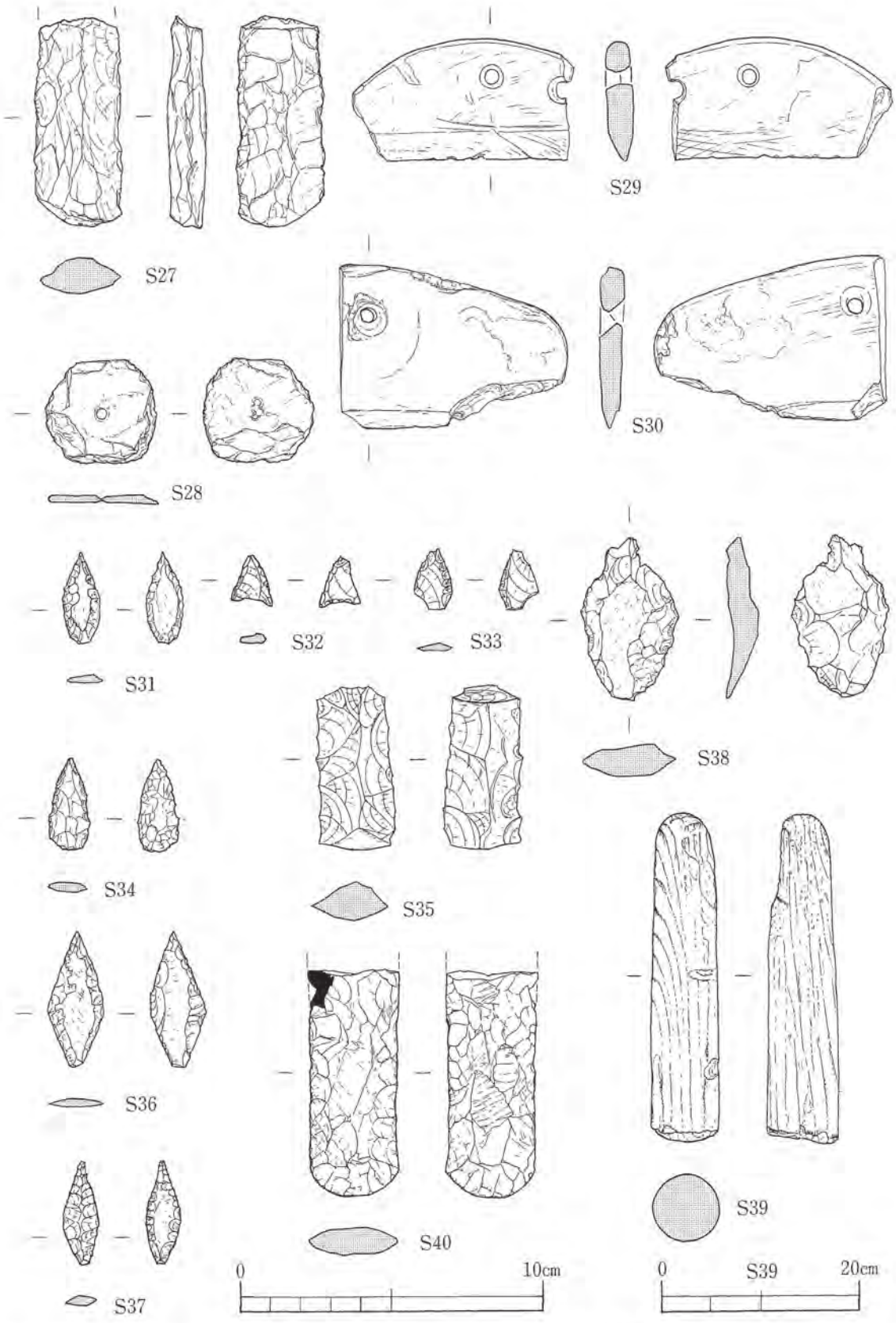
5．3区の調査（第136・137図、PL.62）

7区の東側に接する調査区で、検出した遺構には石室墓、溝状遺構、土坑などがある。その他、ピットを30基余り検出しているが、建物を構成するには至らない。ピットからの出土遺物は殆ど無く時期の特定は難しいが、その多くは中世のものと考えられる。



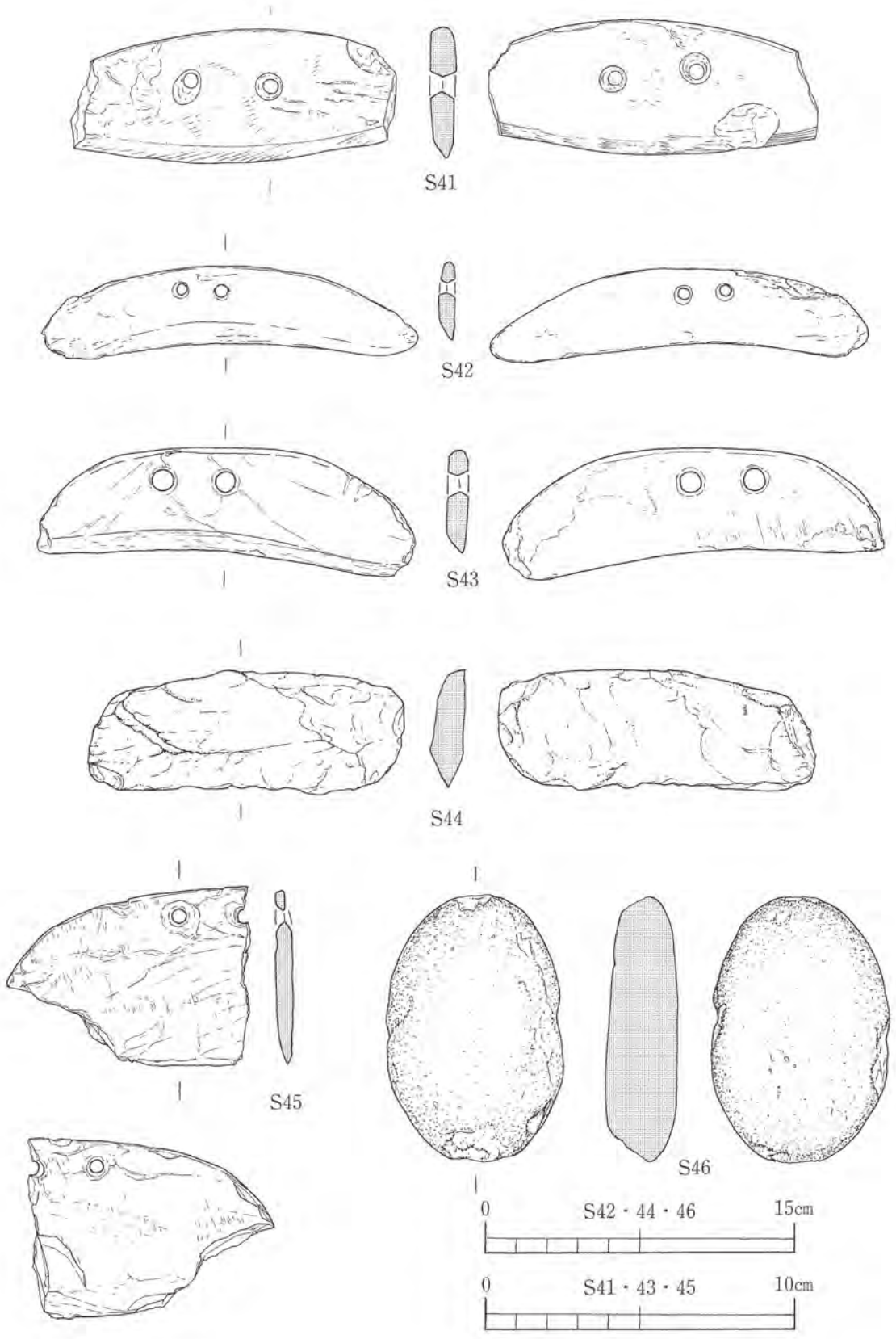
S8・9：838竪穴住居、S10～14：760竪穴住居、S15：219方形周溝墓、S16：719方形周溝墓、S17：763土坑、S18・26：702方形周溝墓、S19・22・23：781土坑、S20・25：771方形周溝墓、S21：775方形周溝墓、S24：760竪穴住居

第133図　7区出土石器実測図



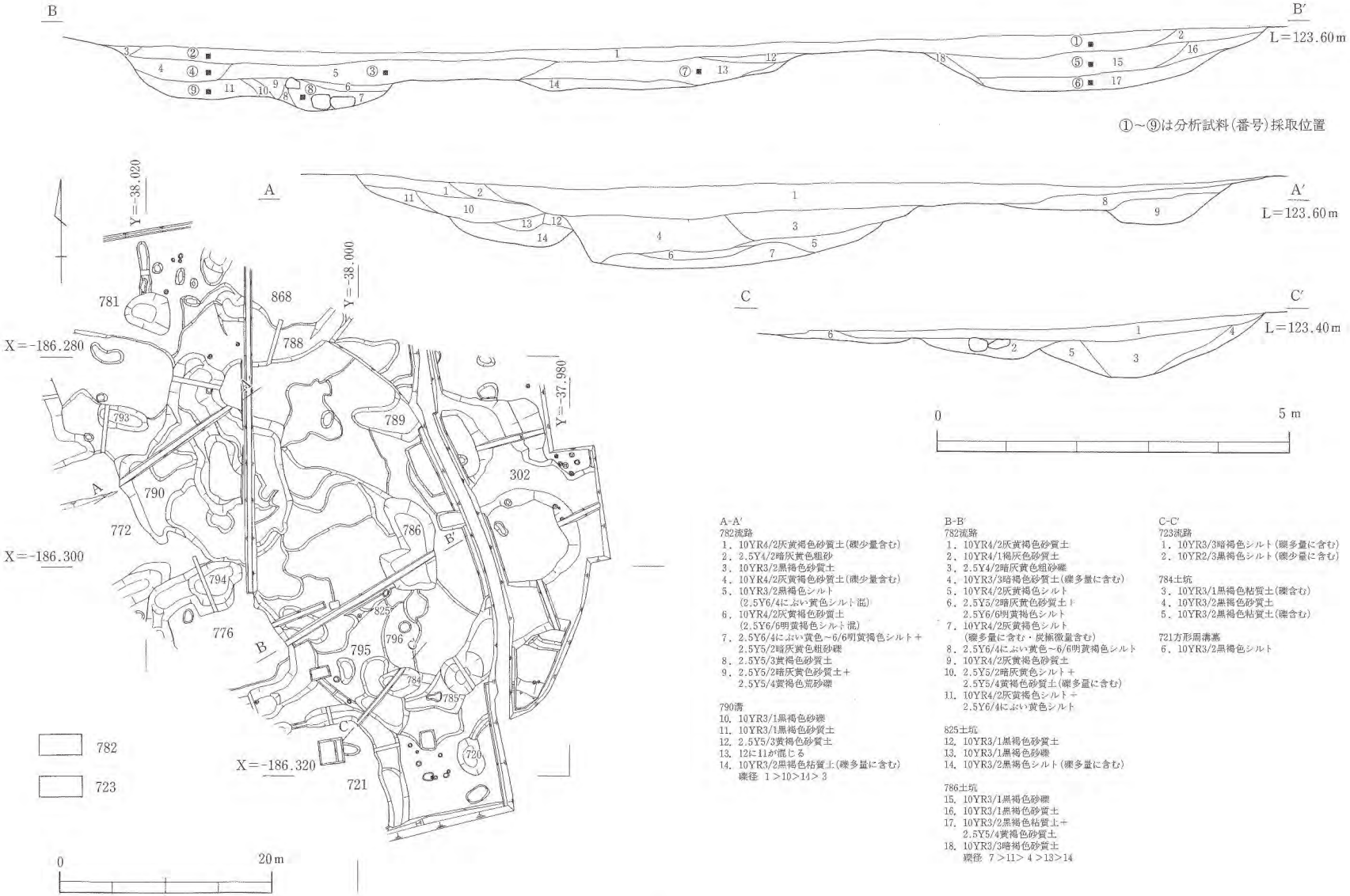
S27・28・30：868方形周溝墓、S29：790方形周溝墓、S31～S36・39：782流路
S37：701土坑、S38：746ピット、S40：7-2区第5層

第134図　7区出土石器実測図



S41・46：782流路、S42：7-3区第4層、S43・44：7-1区第5層、S45：7-3区第3層

第135図　7区出土石器実測図



A-A′
782流路
1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土(礫少量含む)
2. 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
3. 10YR3/2黒褐色砂質土
4. 10YR4/2灰黄褐色砂質土(礫少量含む)
5. 10YR3/2黒褐色シルト
(2.5Y6/4にぶい黄色シルト混)
6. 10YR4/2灰黄褐色砂質土
(2.5Y6/6明黄褐色シルト混)
7. 2.5Y6/4にぶい黄色～6/6明黄褐色シルト＋
2.5Y5/2暗灰黄色粗砂礫
8. 2.5Y5/3黄褐色砂質土
9. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土＋
2.5Y5/4黄褐色荒砂礫

790溝
10. 10YR3/1黒褐色砂礫
11. 10YR3/1黒褐色砂質土
12. 2.5Y5/3黄褐色砂質土
13. 12に11が混じる
14. 10YR3/2黒褐色粘質土(礫多量に含む)
礫径 1＞10＞14＞3

B-B′
782流路
1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土
2. 10YR4/1褐灰色砂質土
3. 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂礫
4. 10YR3/3暗褐色砂質土(礫多量に含む)
5. 10YR4/2灰黄褐色シルト
6. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土＋
2.5Y6/6明黄褐色シルト
7. 10YR4/2灰黄褐色シルト
(礫多量に含む・炭極微量含む)
8. 2.5Y6/4にぶい黄色～6/6明黄褐色シルト
9. 10YR4/2灰黄褐色砂質土
10. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト＋
2.5Y5/4黄褐色砂質土(礫多量に含む)
11. 10YR4/2灰黄褐色シルト＋
2.5Y6/4にぶい黄色シルト

825土坑
12. 10YR3/1黒褐色砂質土
13. 10YR3/1黒褐色砂礫
14. 10YR3/2黒褐色シルト(礫多量に含む)

786土坑
15. 10YR3/1黒褐色砂礫
16. 10YR3/1黒褐色砂質土
17. 10YR3/2黒褐色粘質土＋
2.5Y5/4黄褐色砂質土
18. 10YR3/3暗褐色砂質土
礫径 7＞11＞4＞13＞14

C-C′
723流路
1. 10YR3/3暗褐色シルト(礫多量に含む)
2. 10YR2/3黒褐色シルト(礫少量に含む)

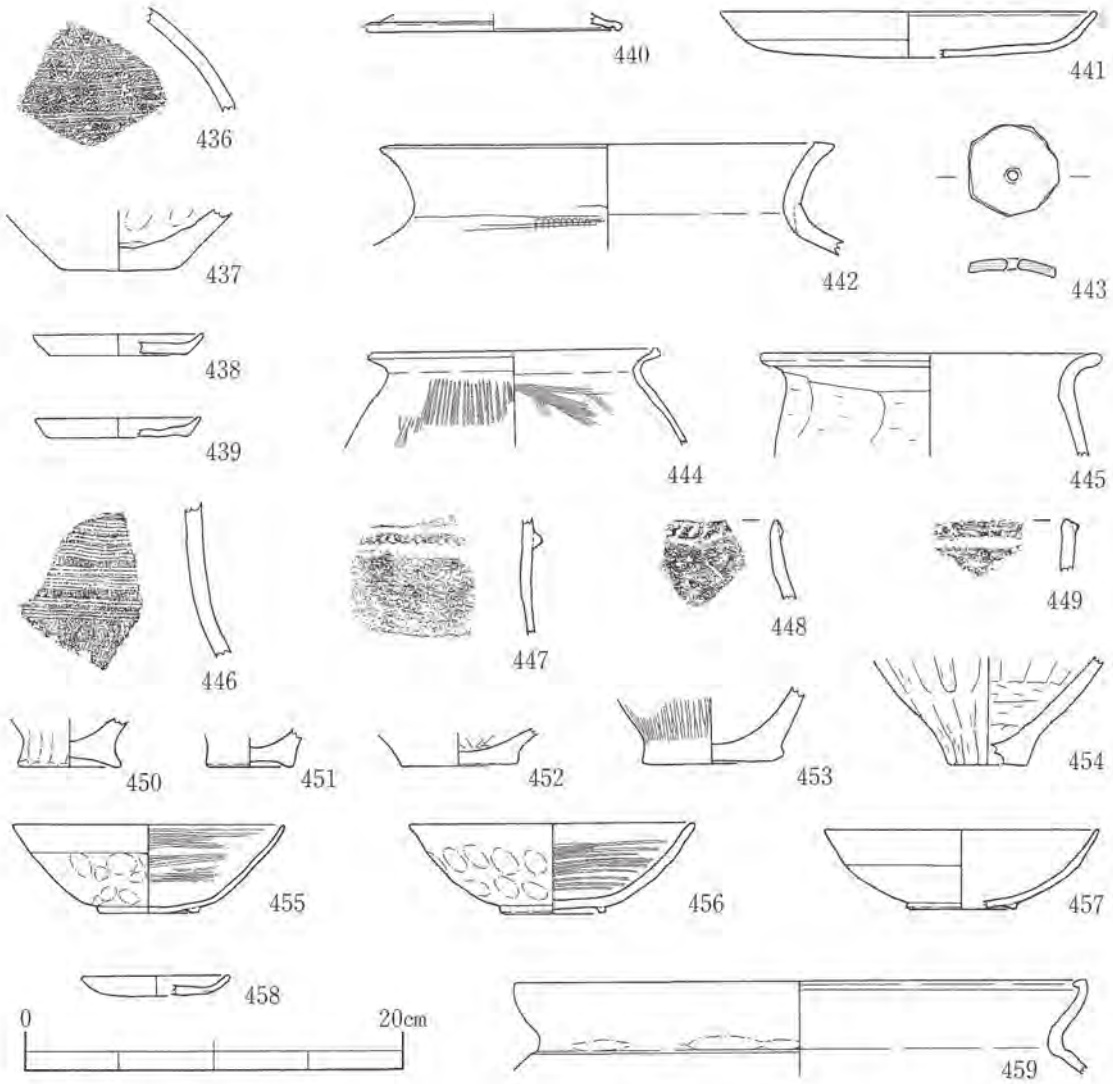
784土坑
3. 10YR3/1黒褐色粘質土(礫含む)
4. 10YR3/2黒褐色砂質土
5. 10YR3/2黒褐色粘質土(礫含む)

721方形周溝墓
6. 10YR3/2黒褐色シルト

第136図　782・723流路他実測図



第137図　2・7・3区遺構配置図



436～439：第３層、440～443：301石室墓、444～448・450～459：302溝、449：306土坑

第138図　３区出土遺物実測図

包含層出土遺物（第138図）

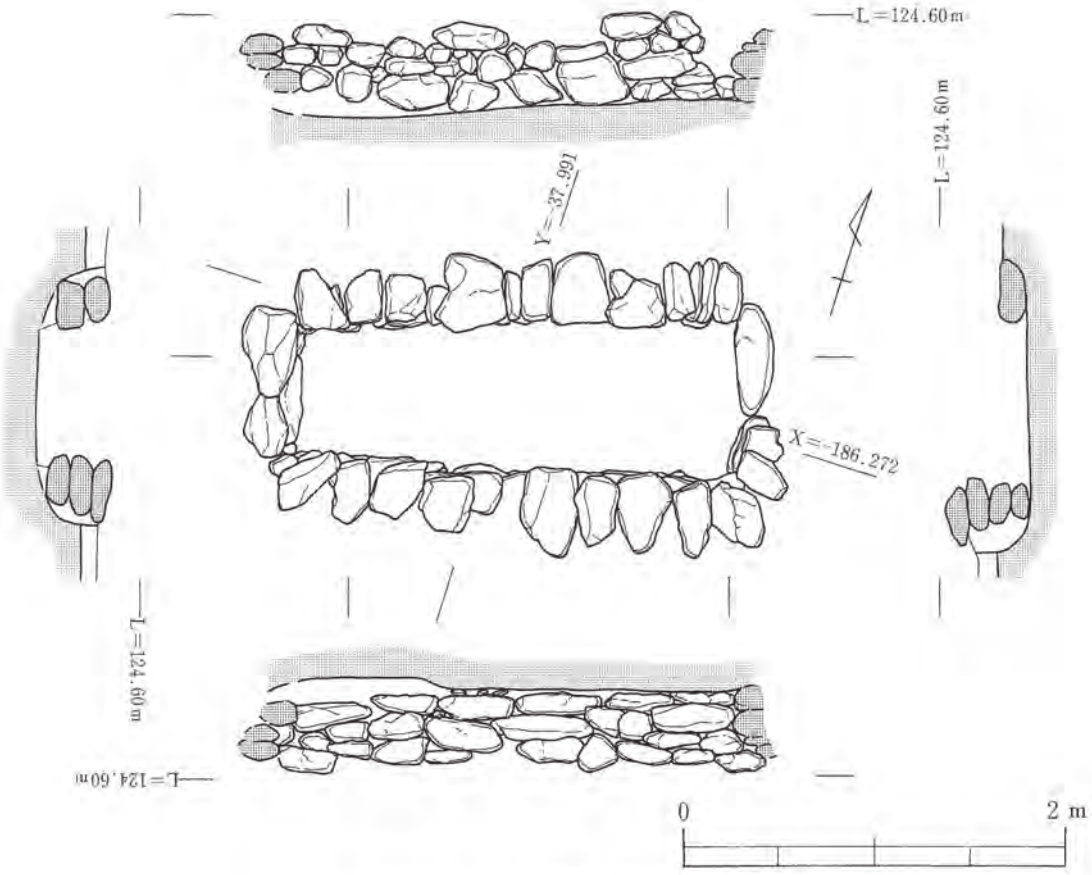
第３層から出土した遺物には弥生時代から中世までのものがあり、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などが出土している。

436・437は弥生土器で、このうち436は壺体部の破片である。外面に直線文と斜格子文を施す。437は底部の破片である。

438・439は土師器小皿で、平坦な底部に短く立ち上がる口縁部をもつ。

301石室墓（第138・139図、PL.63・97）

調査区の北東隅で検出した竪穴系小石室で、墳丘・周溝は検出できなかった。石室掘形は隅丸の長方形を呈し、長さ2.84m、幅1.46m、深さ約40cmを測る。石室は掘形いっぱいに構築されてお



第139図　301石室墓実測図

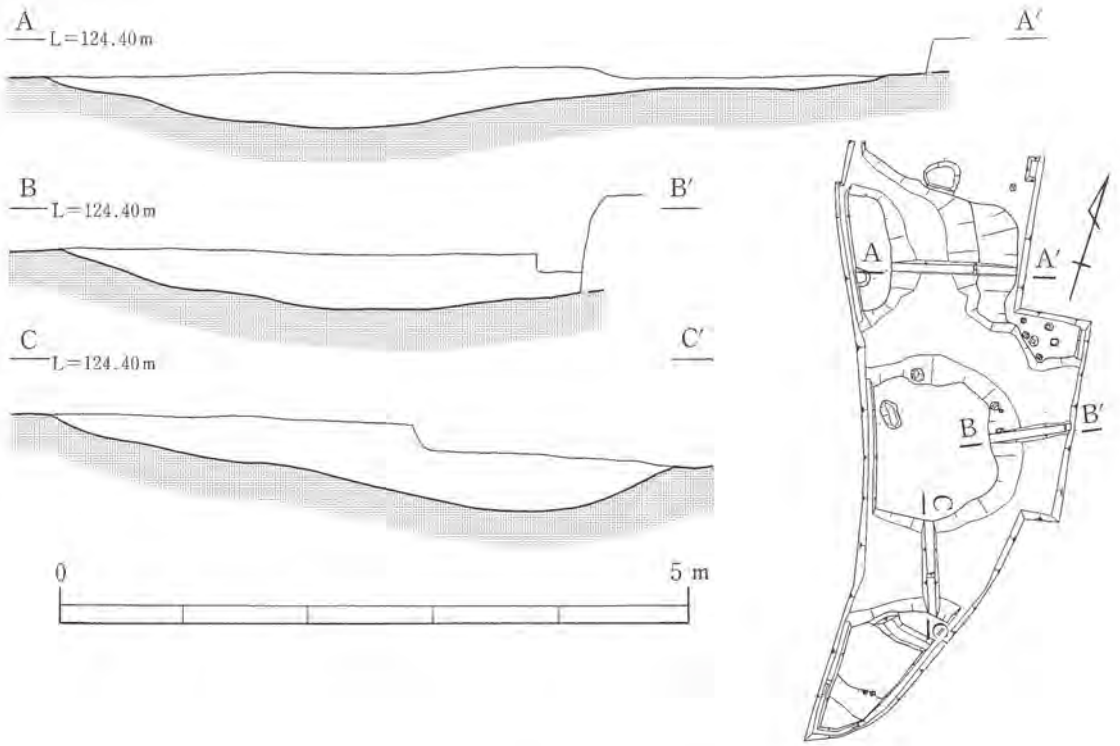
り、規模は長さ2.3mで、幅は西端で0.6m、東端で0.8mと東に向かって広がる。石室の主軸はN－72°－Eである。石材は和泉砂岩で、石積みは3段分（部分的に4段）が遺存していた。側壁の上方では小口積みを基本としているが、東西両小口は平積みしている。また、側壁下方では南側が平積みを基本としているのに対して、北側は小口積みが基本となっている。

遺物は検出時に古代の須恵器・土師器が出土している。440・442は須恵器で、このうち440は杯蓋である。口縁端部は下方へ拡張し、玉縁状になる。442は外反する口縁の端部が上方に面をもつ。441は土師器皿であり、口縁端部を丸くし、僅かに内側にかえしている。443は土器片を転用した紡錘車と考えられる。

734・735石室墓同様に飛鳥時代に帰属するものであり、奈良時代の遺物は、墓の破壊時期を示すものであると考えられる。

302溝（第138・140図、PL.63・97）

調査区の北から南に向かって蛇行して流れる流路である。その形状から、元は方形周溝墓の周溝であったとも考えられる。幅は2.5m前後であるが一部東肩の広がる部分がある。深さは最大約40cmを測る。



第140図　302溝土層図

遺物は縄文土器、弥生土器のほか中世の土師器や瓦器が多く出土する。444～446・450～454は弥生土器で、このうち446は壺体部の破片である。外面に直線文を連続して巡らす。444・445は甕で、このうち444は外反する口縁の端部を上方へ拡張する。体部外面は縦方向のヘラミガキ調整である。445は器壁が厚く、外湾する口縁の端部を丸く収める。体部外面は横方向のヘラケズリである。450～454は壺あるいは甕の底部である。

447・448は縄文時代晩期末の突帯文土器深鉢である。447は二条突帯タイプで、直立する体部の突帯上に逆D字状の刻み目を施す。448は口縁部が内傾する。突帯は小さく、刻み目はD字状である。449は口縁部がほぼ直立する。突帯は小さく、刻み目は小D字状である。

455～457は瓦器椀で、断面台形の高台を付す。455・456の見込み部ミガキは連結輪状と考えられる。458は瓦器皿で、浅い器形である。

459は土師器土釜である。口縁部は「く」の字に外反し、端部を内側に拡張する。

306土坑（第138図、PL.97）

調査区東部中央にある高まりで検出した土坑である。平面形状は不整楕円形で、長さ80cm、幅40cmを測る。

遺物は弥生土器、縄文土器が出土する。449は縄文時代晩期末の突帯文土器深鉢で、口縁部がほぼ直立する。突帯は小さく、刻み目は小D字状である。

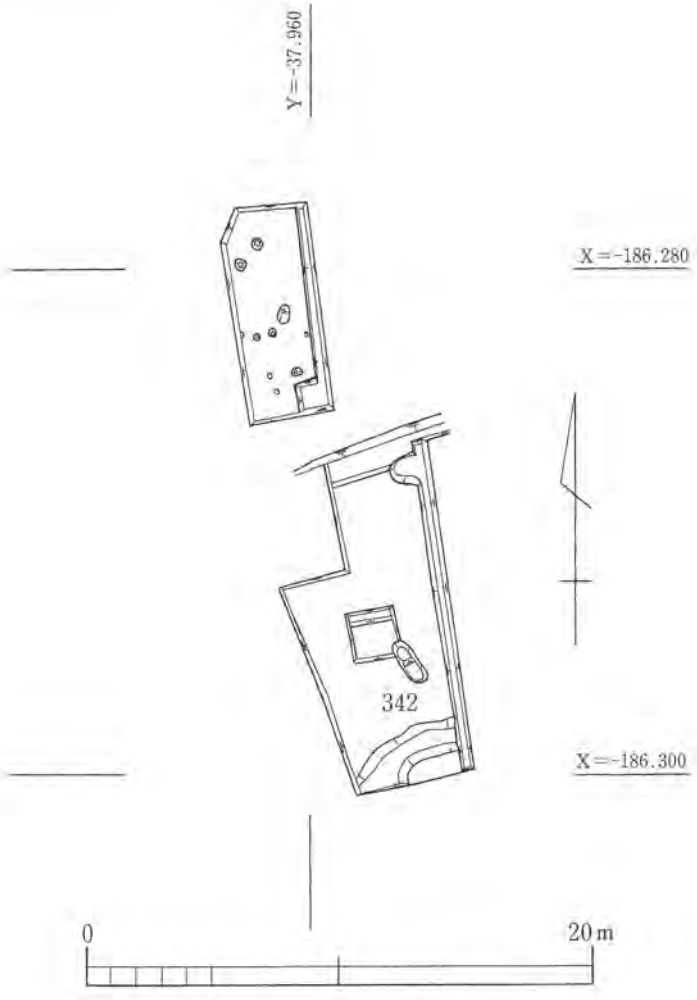
6．4区の調査（第141図、PL.62・64）

南北2箇所に調査区が分かれ、高低差が約1mある。北側調査区では礫層上面で遺構の検出を行い、検出した遺構は径10～20cm前後のピット数基である。南側調査区では黄色系砂質土（砂層）の上面で遺構検出を行った。遺構は少なく、土坑2基と溝状の遺構を検出したのみである。

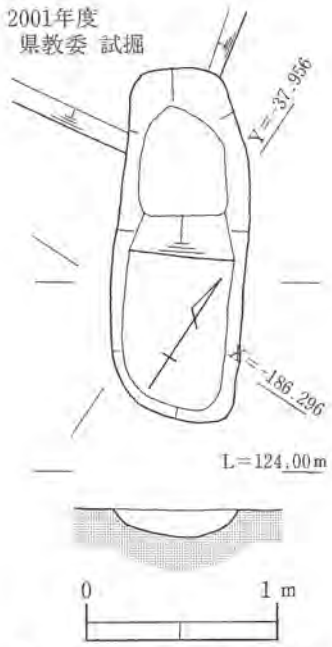
342土坑（第142・143図、PL.97）

南側の調査区中央付近で検出土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長さ1.9m、幅0.7m、深さ14cmを測る。

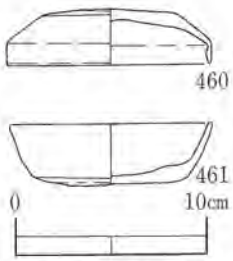
遺物は須恵器（460・461）が出土する。460は杯蓋で、口縁部は薄く垂直に折れる。天井部は回転ヘラケズリ調整である。461は杯身で、ほぼ平坦な底部は回転ヘラケズリ調整である。



第141図　4区遺構配置図



第142図　342土坑実測図



第143図　342土坑出土遺物実測図

第4節　理化学的分析

1　珪藻分析

黒澤　一男（パレオ・ラボ）

1．はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小（0.01～0.5㎜程度）ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは和歌山県橋本市の柏原遺跡から採取された堆積物試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

2．試料及び分析方法（表1）

分析試料には、計9試料を用いた（表1）。これらの試料に対し以下の珪藻分析をおこなった。

表1　分析試料

試料番号	遺構等	区	地区	採取地点	層位	登録番号
1	782	7	I 11	セクションベルト	1	2-2947
2	782		K14	第136図のB－B′	1	2-2948
3	782		J 13		5	2-2953
4	782		K14		4	2-2952
5	786		I 11		15	2-2957
6	786		I 11		17	2-2958
7	825		J 12		13	2-2965
8	782		K13		7	2-2955
9	782		K14		11	2-2954

① 試料を湿潤重量で約1.5ｇ程度取り出し、秤量した後にトールビーカーに移し、30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

② 反応終了後、水を加え、１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。

③ ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。

④ マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。

⑤ 各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、今回分析した試料には珪藻化石が少なかったため、プレパラート全面について精査した。

3．珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤（1990）により設定された環境指標種群に基づいた。安藤（1990）は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については広布種として、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に安藤（1990）において設定された環境指標種群の概要を記す。

上流性河川指標種群（J）　河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。

中～下流性河川指標種群（K）　中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

最下流性河川指標種群（L）　最下流域の三角州の部分に集中して出現する種群。

湖沼浮遊性指標種群（M）　水深が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。

湖沼沼沢湿地指標種群（N）　湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。

沼沢湿地付着生指標種群（O）　水深が1m内外で、湿地および植物が一面に繁茂している沼沢、ならびに湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。

高層湿原指標種群（P）　ミズゴケを主とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。

陸域指標種群（Q）　前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群（陸生珪藻）。

4．珪藻化石群集の特徴とその堆積環境（図1、表2、図版1）

検出された珪藻化石は、33分類群17属24種1亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め3種群である。以下に堆積物中の珪藻化石群集の特徴とその堆積環境について述べる。

【Ⅰ帯・Ⅲ帯】

検出された珪藻殻数が7個以下と少ないため、珪藻化石より堆積環境を推定することはできない。

【Ⅱ帯】

堆積物1g中の珪藻殻数は5.27×10^4個、完形殻の出現率は約43%となる。この試料からは沼沢湿地付着生指標種群*Pinnularia viridis*や*Pinnularia gibba*などのが特徴的に出現し、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が随伴して出現する。

このことから陸域を伴う沼沢湿地環境と推定される。

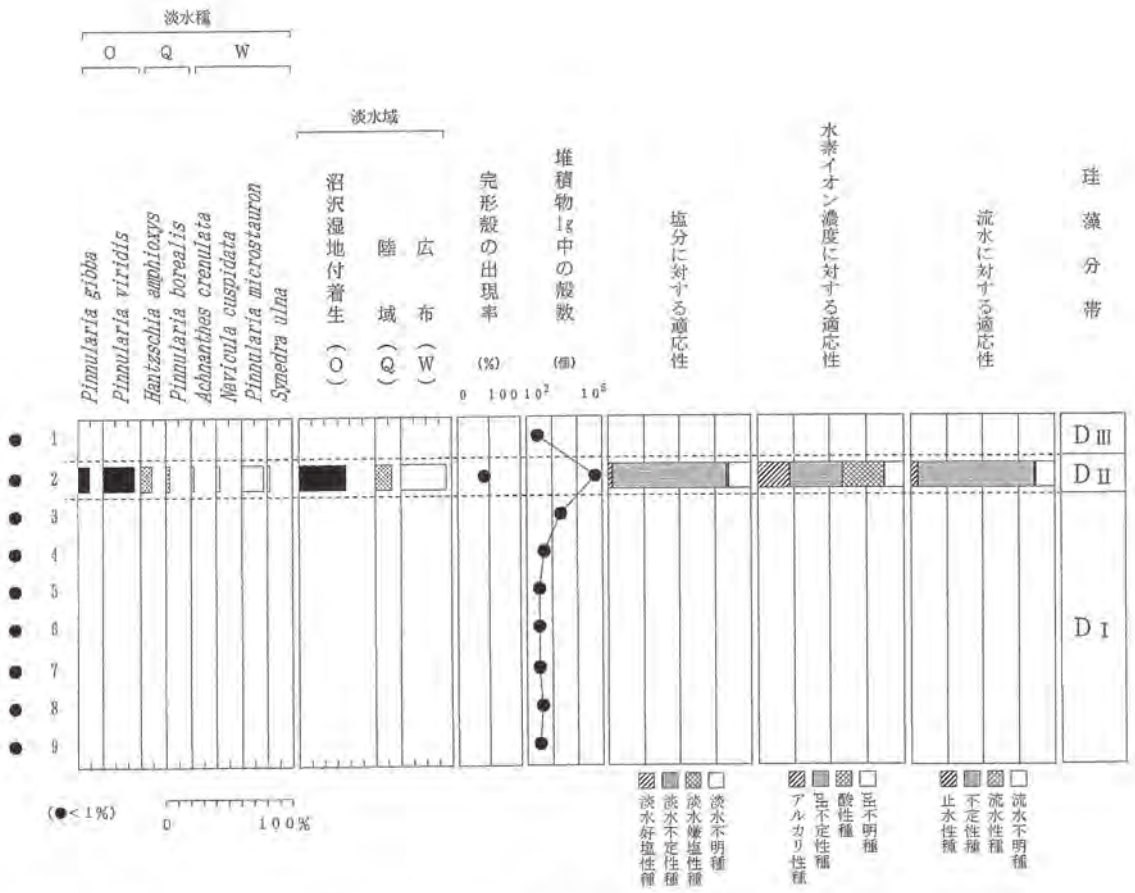


図1　柏原遺跡堆積物中の珪藻化石分布図（2％以上の分類群を表示）

5．おわりに

柏原遺跡の堆積物中に含まれる珪藻化石について分析を行った結果、試料2を除く8試料については珪藻化石がほとんど検出されず、検討にいたらないという結果になった。珪藻は水生植物であるため、水のない環境下では生育できない。そのため、今回検出されなかった8試料については乾燥した陸域環境であることが考えられる。同一の試料を用いて花粉化石の分析も行われ、その結果、花粉化石はほとんど検出されなかった。花粉化石は水のない環境下では保存されにくいという特徴をもっている。このことを考慮すると、堆積環境が乾燥した陸域環境であることに矛盾はない。

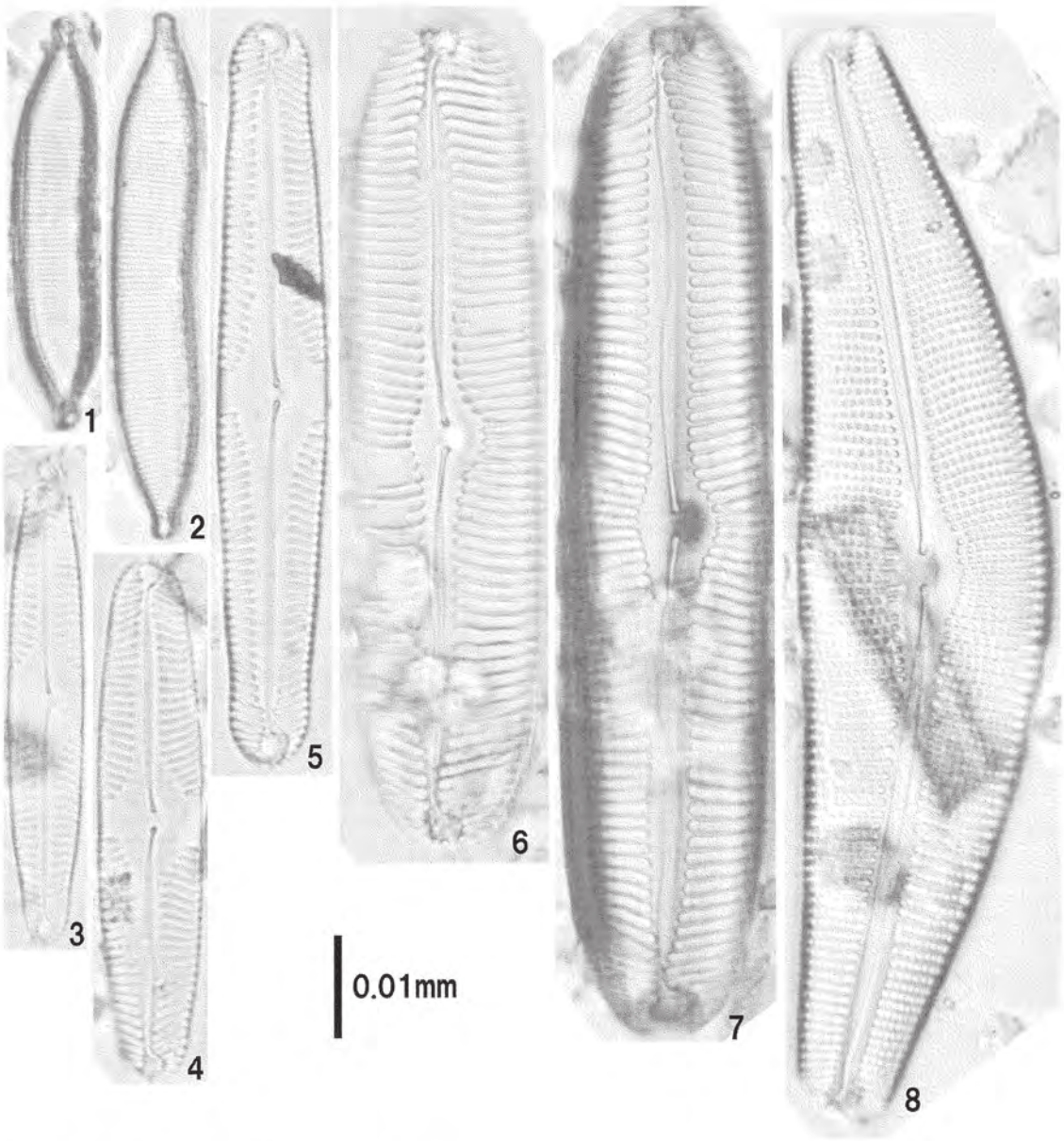
唯一多くの珪藻化石が検出された試料2の堆積環境は、陸域を伴う沼沢地もしくは湿地環境と推定された。この試料からは花粉化石がほとんど検出されていないこと、同一の層位から採取された試料1からは珪藻化石が検出されず、乾いた陸域と推定されていることを考慮すると、常時水のある環境ではなく、一時的に湿るような環境下であったと考えられる。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

表 2　柏原遺跡検出珪藻化石産出表（種群は安藤（1990）に基づく）

分類群	種群	1	2	3	4	5	6	7	8	9
Achnanthes crenulata	W	-	3	-	-	-	-	-	-	-
Amphora ovalis var.libyca	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis bacillum	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella aspera	O	-	1	-	-	-	-	-	-	-
C.　cistula	O	-	-	-	1	-	-	-	-	-
C.　minuta	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-
C. spp.	?	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis finnica	W	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	?	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema clevei	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-
G.　gracile	O	-	1	-	-	-	-	-	-	-
G.　parvulum	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-
G. spp.	?	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma spp.	?	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys	Q	-	14	-	-	-	-	-	-	-
Melosira spp.	?	-	2	-	-	1	-	-	-	-
Navicula cryptocephala	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-
N.　cuspidata	W	-	4	-	-	-	-	-	-	-
N.　mutica	Q	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Neidium bisulcatum	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-
N.　iridis	O	-	1	-	-	-	-	-	-	-
N. spp.	?	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis	Q	-	4	-	-	-	-	-	-	-
P.　gibba	O	-	14	-	-	-	-	-	-	-
P.　microstauron	W	-	26	-	-	-	-	-	-	-
P.　subcapitata	O	-	2	-	-	-	-	-	-	-
P.　viridis	O	-	37	-	-	-	-	-	-	-
P. spp.	?	-	7	1	-	-	-	-	-	-
Rhopalodia gibberula	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis anceps	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-
S. spp.	?	-	5	-	-	-	1	-	-	-
Synedra ulna	W	1	3	5	1	-	-	1	1	1
Tabellaria flocculosa	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-
沼沢湿地付着生　（O）		-	56	-	1	-	-	-	-	-
陸域　（Q）		-	20	-	-	-	-	-	-	-
広布種　（W）		1	54	6	1	-	-	1	1	1
不明　（?）		-	21	1	-	1	1	-	-	-
珪藻殻数		1	151	7	2	1	1	1	1	1



図版 1　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真

1・2．*Hantzschia amphioxys*　　3．*Pinnularia microstauron*
4・5．*Pinnularia gibba*　　6・7．*Pinnularia vilidis*
8．*Cymbella aspera*

2　花粉分析

新山　雅広（パレオ・ラボ）

1．はじめに

柏原遺跡は、橋本道路関連遺跡に含まれる１遺跡であり、橋本市柏原地内に所在する。本遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓、竪穴住居をはじめ近世に至る遺構が検出された。ここでは、弥生時代の谷地形堆積層を試料とし、当時の古植生および古環境を明らかにする一端として、花粉化石群集の検討を行った。

2．試料（表１）

花粉化石群集の検討は、７区で検出された谷地形堆積層より採取された合計９試料（表１）について行った。各試料の簡単な記載は、次の通りである。試料１（782流路）は灰黄褐色砂質シルト。試料２（782流路）は灰黄褐色砂質シルト。試料３（782流路）は灰黄褐色シルト。試料４（782流路）は暗褐色砂質シルト。試料５（786土坑）は黒褐色砂質シルトで礫（最大径1.5cm程度）を含む。試料６（786土坑）は暗灰黄色シルト。試料７（825土坑）は黒褐色砂質シルト。試料８（782流路）は灰黄褐色シルトで炭化物片を僅かに含み、礫（最大径２cm程度）を含む。試料９（782流路）は黄褐色砂質シルト混じり暗灰黄色シルトで礫（最大径３cm程度）を含む。なお、これら９試料は珪藻化石群集の検討も行われた。

3．方法

花粉化石の抽出は、試料約２～３ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理･化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定･計数した。

4．花粉化石群集の記載（表３、図版２）

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉１、草本花粉１、形態分類で示したシダ植物胞子１である（表３）。いずれの試料も産出した花粉化石は極めて少ないため、花粉化石分布図として示すことができなかった。産出したのは、試料３のコナラ亜属１点、試料４のオナモミ属１点、試料５の三条型胞子１点であり、その他の試料は花粉･胞子化石を全く産出しなかった。

表3　花粉化石産出一覧表

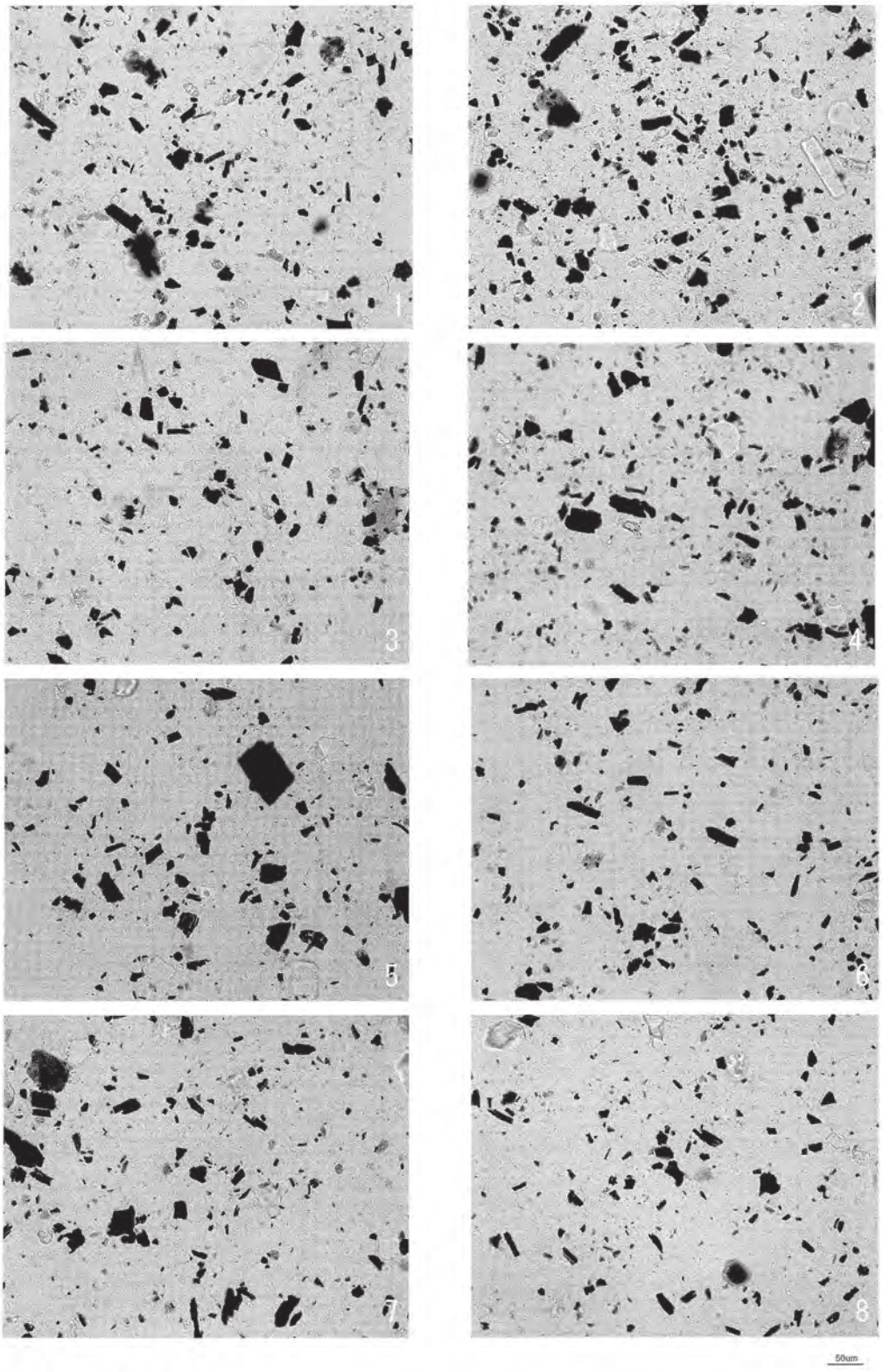
和　名	学　名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
樹木										
コナラ属コナラ亜属	*Quercus subgen. Lepidobalanus*	−	−	1	−	−	−	−	−	−
草本										
オナモミ属	*Xantium*	−	−	−	1	−	−	−	−	−
シダ植物										
三条型胞子	Trilete spore	−	−	−	−	1	−	−	−	−
樹木花粉	Arboreal pollen	0	0	1	0	0	0	0	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	0	0	0	1	0	0	0	0	0
シダ植物胞子	Spores	0	0	0	0	1	0	0	0	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	0	0	1	1	1	0	0	0	0
不明花粉	Unknown pollen	0	0	0	0	0	0	0	0	0

5．考察

検討した試料は、花粉・胞子化石の産出個数が極めて少ないか全く産出しなかったため、古植生について推定することはできなかった。プレパラート状況では、炭化物片（燃焼により炭化した植物片）が比較的多く見られ、人為が関わった堆積物であることが予想される。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉化石が殆ど産出しないことから、少なくとも水成環境で安定して堆積したものとは考え難く、土壌の可能性が考えられる。堆積環境の詳細については珪藻分析を参照されたいが、花粉分析から見る限りでは、試料が採取された谷地形堆積層は、常時滞水した環境ではなく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったことが予想される。この谷地形堆積層は、周辺部に発達した土壌が堆積した可能性が考えられる。

6．おわりに

検討した試料は花粉化石が良好に保存されていなかったため、古植生について推定することはできなかった。試料が採取された谷地形堆積層は、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境で堆積したものと予想された。



図版 2　プレパラート状況

1．試料 1　　2．試料 3　　3．試料 4　　4．試料 5
5．試料 6　　6．試料 7　　7．試料 8　　8．試料 9

3　土器胎土分析

藤根　　久・長友　純子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。

一方、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが予想される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら３分の１程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根、1996；車崎ほか、1996）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層と予想される。このように、胎土中の混和材は、砂層の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。

土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

ここでは、柏原遺跡、北馬場遺跡、垂井女房が坪遺跡から出土した弥生土器および瓦器について、その胎土材料を検討した。

2．試料と方法（表４）

試料は、柏原遺跡、北馬場遺跡から出土した弥生土器14試料、柏原遺跡、北馬場遺跡、垂井女房が坪遺跡から出土した瓦器６試料である（表４）。

これら試料は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02㎜前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

試料は、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

表4　分析試料

分析No.	種　類	器　種	時　期	遺　跡	遺　構	区
1	弥生土器	壺	弥生時代	柏原	90方形周溝墓	1
2	弥生土器	底部	弥生時代	柏原	90方形周溝墓	1
3	弥生土器	高杯	弥生時代	柏原	90方形周溝墓	1
4	弥生土器	甕	弥生時代	柏原	90方形周溝墓	1
5	弥生土器	壺	弥生時代	柏原	90方形周溝墓	1
6	弥生土器	壺	弥生時代	柏原	90方形周溝墓	1
7	弥生土器	甕	弥生時代	柏原	91方形周溝墓	6
8	弥生土器	甕	弥生時代	柏原	91方形周溝墓	6
9	弥生土器	壺	弥生時代	柏原	91方形周溝墓	6
10	弥生土器	壺	弥生時代	柏原	91方形周溝墓	6
11	弥生土器	甕	弥生時代	柏原	775方形周溝墓	7
12	弥生土器	甕	弥生時代	柏原	775方形周溝墓	7
13	弥生土器	壺	弥生時代	北馬場	4-1180竪穴住居	4
14	弥生土器	壺	弥生時代	北馬場	4-1180竪穴住居	4
15	瓦器	椀	中世	柏原	302溝	3
16	瓦器	椀	中世	柏原	668土坑	6
17	瓦器	椀	中世	垂井女房が坪	包含層(第3層)	1A
18	瓦器	椀	中世	垂井女房が坪	包含層(第3層)	1A
19	瓦器	椀	中世	北馬場	6-6土坑	6
20	瓦器	椀	中世	北馬場	6-6土坑	6

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

［植物珪酸体化石］

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

［胞子化石］

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO_2%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剝がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO_2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO_2%が少ない深成岩、SiO_2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO_2%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO_2%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO_2%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

［ガラス質］

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

［複合鉱物類］

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

［複合石英類］

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01㎜未満のものを微細、0.01～0.05㎜のものを小型、0.05～0.1㎜のものを中型、0.1㎜以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06㎜以上のものを砂岩質とし、約0.06㎜未満のものを泥岩質とする。

［不透明・不明］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

3．結果（表5）

土器胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1㎜前後以上の鉱物･岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、表5の微化石類および砂粒の出現頻度は、◎が特徴的に多い、○が多い、△が少ない、空欄は検出されないことを示す。鉱物は、＋＋＋が特徴的に多い、＋＋が多い、＋が少ないが含まれている、である。

No.1：180μm-1.1㎜、最大粒径2.6㎜。複合石英類（微細）＞片理複合石英類＞石英･長石類＞複合石英類、砂岩質、雲母類、斜方輝石、微細輝石多産

No.2：120-800μm、最大粒径1.7mm。複合石英類（微細）＞石英・長石類＞複合石英類、雲母類、斜方輝石、ガラス質、角閃石類、ジルコン、骨針化石やや多い、植物珪酸体化石

No.3：150-750μm、最大粒径2.1mm。ガラス質》石英・長石類＞複合石英類＞角閃石類やや多い、ジルコン、単斜輝石、雲母類、凝灰岩質、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群*Pinnularia nodosa*、淡水種*Eunotia monodon*、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

No.4：200μm-1.2mm、最大粒径3.0mm。複合石英類（微細）＞片理複合石英類＞石英・長石類＞複合石英類、褐色粒子多い、砂岩質、ガラス質、単斜輝石、雲母類、斜方輝石、角閃石類、珪藻化石（淡水種*Eunotia biareofera*、*Eunotia*属、*Pinnularia*属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.5：70-700μm、最大粒径1.5mm。角閃石類＞石英・長石類＞複合石英類＞斜長石（変形双晶）、雲母類、単斜輝石、ジルコン、[ガラス質]、胞子化石、植物珪酸体化石

No.6：130μm-1.1mm、最大粒径1.8mm。角閃石類》石英・長石類＞複合石英類＞斜長石（変形双晶）、単斜輝石、ガラス質、雲母類、尖った岩片多い

No.7：70-600μm、最大粒径1.7mm。角閃石類》石英・長石類＞複合石英類＞斜長石（双晶）、雲母類、単斜輝石、ジルコン、植物珪酸体化石、尖った岩片多い

No.8：90-750μm、最大粒径1.6mm。角閃石類》石英・長石類＞複合石英類＞斜長石（双晶）、雲母類、単斜輝石、植物珪酸体化石少量、尖った岩片多い

No.9：80-700μm、最大粒径2.0mm。角閃石類》石英・長石類＞複合石英類＞斜長石（双晶）、ガラス質、単斜輝石、植物珪酸体化石少量、尖った岩片多い

No.10：90-750μm、最大粒径1.2mm。角閃石類》石英・長石類＞複合石英類＞斜長石（双晶）、雲母類、単斜輝石、植物珪酸体化石少量、尖った岩片多い

No.11：90-900μm、最大粒径2.9mm。石英・長石類＞複合石英類＞赤褐色粒子多い、雲母類、角閃石類多い、[ガラス質]、珪藻化石（淡水種*Diploneis*属多い、*Pinnularia*属、*Gomphonema*属、*Surirella*属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.12：150μm-1.1mm、最大粒径3.2mm。石英・長石類＞複合石英類＞雲母類、角閃石類多い、単斜輝石、[ガラス質]、ジルコン、胞子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

No.13：290μm-1.2mm、最大粒径2.1mm。複合石英類（微細）＞片理複合石英類＞石英・長石類＞雲母類、単斜輝石多い

No.14：150-750μm、最大粒径2.8mm。複合石英類（微細）＞石英・長石類＞砂岩質＞片理複合石英類、複合石英類、雲母類、角閃石類、斜方輝石多い

No.15：50-600μm、最大粒径2.0mm。石英・長石類＞複合石英類（微細）＞片理複合石英類、雲母類、斜方輝石多い

No.16：50-400μm、最大粒径700μm。石英・長石類》複合石英類（微細）〉雲母類、ガラス質、ジルコン、骨針化石、植物珪酸体化石

No.17：60-700μm、最大粒径2.7mm。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉片理複合石英類、雲母類、斜方輝石多い、ガラス質、角閃石類

No.18：40-210μm、最大粒径500μm。石英・長石類》複合石英類（微細）、雲母類、斜方輝石、ガラス質、角閃石類、ジルコン、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群*Melosira granulata*、淡水種*Rhopalodia gibberula*、*Eunotia*属、*Melosira*属、*Pinnularia*属、*Cymbella*属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

No.19：50-300μm、最大粒径900μm。石英・長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、ガラス質、角閃石類、ジルコンやや多い、骨針化石、植物珪酸体化石

No.20：50-300μm、最大粒径400μm。石英・長石類》複合石英類（微細）〉片理複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、斜方輝石、ジルコン、微細緑色粒子多産

4．考察（表5・6、図2、図版3・4）

i）微化石類による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μm程度）、骨針化石が10～100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。

なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれているものの、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類および砂粒の特徴により、a）淡水成粘土を用いた胎土、b）水成粘土を用いた胎土、c）断層ガウジを用いた胎土、d）その他の粘土、に分類された。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

a）淡水成粘土を用いた胎土（4胎土）

この胎土中には、淡水種珪藻化石の*Pinnularia*属や*Cymbella*属などが含まれていた。特に、試料No.3の胎土中には、沼沢湿地付着生指標種群*Pinnularia nodosa*が含まれ、また、No.2の胎土中には、湖沼浮遊生指標種群*Melosira granulata*などが含まれていた。

b）水成粘土を用いた胎土（3胎土）

これらの胎土中には、骨針化石が含まれていた。

c）断層ガウジを用いた胎土（7胎土）

これらの胎土は、生駒西麓産土器あるいは河内土器などと呼ばれる土器胎土と同様の特徴を示す。すなわち、角閃石類や石英・長石類などの粒子が尖った外形を呈し、斜長石（双晶）においてその双晶面のたわみが見られるなど、断層岩の特徴を示している（藤根・小坂、1997）。断層岩は、一般的に断層ガウジあるいは断層粘土と呼ばれ、粘土と破片粒子との混合物である。なお、検討した土器胎土は、構成する鉱物としては角閃石類が特徴的に多く含まれ、母岩は角閃石斑れい岩など塩基性岩石と推定される。

周辺地域では、和泉山脈から金剛山地北部あるいは生駒山地中部西麓地域あるいは笠置山地南部地域の角閃石斑れい岩およびガブロノーライト（図1の凡例記号Gb）が分布している。このうち、断層が接している地域としては和泉山脈北東部と生駒山地中部西麓地域が挙げられる。なお、生駒山地西麓地域の大阪市四条町地内において断層内物質起源と思われる粘土を焼成したところ生駒西麓産の土器と類似したものが完成したとしている（藤根・小坂、前出）。

d）その他粘土を用いた胎土（6胎土）

これら胎土あるいは粘土塊中には、水成起源を指標する珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。

ii）砂粒組成による分類

ここで使用した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表5）。岩石の推定は、砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類が深成岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）、斑晶質が火山岩類、凝灰岩質が凝灰岩岩類である。推定した起源岩石は、表6の組み合わせに従って分類した。

土器胎土中の砂粒組成は、深成岩類を主体としたB群（8胎土）、堆積岩類を主体としたC群（8胎土）、堆積岩類を主体として片岩類などを伴うCa群（3胎土）、テフラを主体として深成岩類などを伴うGb群（1胎土）であった。

iii）胎土材料

粘土材料としては、微化石類あるいは砂粒の特徴記載から、淡水成粘土を用いた胎土（4胎土）、水成粘土を用いた胎土（3胎土）、断層ガウジを用いた胎土（7胎土）、その他粘土を用いた胎土（6胎土）に分類された。また、砂粒の特徴から、深成岩類を主体としたB群（8胎土）、堆積岩類を主体としたC群（8胎土）、堆積岩類を主体として片岩類などを伴うCa群（3胎土）、テフラを主体として深成岩類などを伴うGb群（1胎土）が分類された。

表 5　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴

試料No	器種	粘土の特徴						砂粒の特徴						鉱物の特徴				植物珪酸体化石	その他特徴
		分類	種類	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	堆積岩類	深成岩類	テフラ	片岩類	凝灰岩類	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類	出現頻度	
1	壺		その他					Ca	○1	△		○2				+++	+		微細輝石類高密度
2	底部	■	水　成			○		C	○	△	△			+	+	+	+	○	
3	高杯	●	淡水成	○	△		△	Gb		○	◎		△	+	++	+	+	○	
4	甕	●	淡水成	○		△	△	Ca	○1	△	△	○2		+	++	+	+	△	
5	甕	◆	断層ガウジ				△	B		○	△			+	+++	+	+	○	
6	壺	◆	断層ガウジ					B		◎	△				+++	+	+		
7	甕	◆	断層ガウジ					B		◎				+	+++	+	+	△	
8	甕	◆	断層ガウジ					B		◎					+++	+	+	△	
9	壺	◆	断層ガウジ					B		◎					+++	+	+	△	
10	壺	◆	断層ガウジ					B		◎					+++	+		△	
11	甕	●	淡水成	○	△	△	○	B		○	△				+++		+	◎	
12	甕		断層ガウジ？				△	B		○	△			+	+++	+	+	○	
13	壺		その他					Ca	○1			○2				+++	++		
14	壺		その他					C	◎	△		△			+	+++	++		
15	瓦器椀		その他					C	◎			△				+++	+		
16	瓦器椀	■	水　成			△		C	○		△				+		+	○	
17	瓦器椀		その他					C	◎			△			+	+++	++		
18	瓦器椀	●	淡水成	○	○	△		C	○		△			+	+	+	+	○	
19	瓦器椀	■	水　成			△		C	○	△	△			++				○	
20	瓦器椀		その他					C	○			△		+	+	+			微細緑色粒子高密度

表6　試料中の岩石片の分類と組み合わせ

岩石の分類群			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

このうち、断層ガウジを用いた胎土は、大半が深成岩類を主体としたB群の砂粒から構成され、その他の起源の砂粒はほとんど含まれていない。このことは、粘土と破片粒子との混合物である断層ガウジをそのまま使用したことを示している。なお、製作地は、現在生駒西麓産土器として知られている生駒西麓域の可能性が高いものの、角閃石類を多く含む断層ガウジという特徴のみでは断定はできない。

試料No.1やNo.4あるいはNo.13の弥生土器胎土中には、堆積岩類を主体として片岩類を伴うCa群であるが、遺跡周辺部では、苦鉄質片岩（図2の凡例Ms）や泥質片岩（図2の凡例Ps）など片岩類が基盤として分布する地域であることから、最も在地的な材料を使用した土器と考えられる。また、堆積岩類を主体としたC群に分類された瓦器あるいは試料No.14の弥生土器においても量的には少ないものの片岩類を伴うことから、同様の材料と考えられる。

試料No.3の胎土では、火山ガラスと思われるガラス質が多量に含まれているが、これらはテフラ層として堆積する火山灰を混和材として混入した可能性が高い。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれる土器群である（藤根、1996；車崎ほか、1996）。候補としては、周辺地域に分布する大阪層群（図2の凡例O_1やO_2）中のテフラ層の可能性が考えられる。この点については、テフラを同定するなどさらに検討が必要である。

5．おわりに

ここでは、柏原遺跡、北馬場遺跡から出土した弥生土器14試料、柏原遺跡、北馬場遺跡、垂井女房が坪遺跡から出土した瓦器6試料について、土器の胎土材料について調べた。

その結果、淡水成粘土を用いた胎土、水成粘土を用いた胎土、断層ガウジを用いた胎土、その他粘土を用いた胎土に分類された。

また、遺跡周辺地域では基盤層として片岩類が分布することから、片岩類を含む弥生土器や瓦器は、最も在地的材料と推定された。さらに、混和材として大阪層群中のテフラ層を使用した土器も抽出された。なお、これらの特徴を示す土器の製作地は、地質調査あるいはテフラの同定な

ど、さらに詳細な検討が必要である。

引用文献

安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理、42,2,73-88.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』、平凡社、1612p.

地質調査所（1998）20万分の1地質図幅「和歌山」

藤根　久・小坂和夫（1997）生駒西麓（東大阪市）産の縄文土器の胎土材料―断層内物質の可能性―．第四紀研究、36：55-62.

藤根　久（1998）東海地域（伊勢―三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．第6回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108-117.

藤根　久・今村美智子（2001）第3節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．「波志江中宿遺跡」、日本道路公団・伊勢崎市・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団、p. 262-277.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究、27,1-20.

車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料―粘土の起源を中心に―．日本考古学協会第62回大会研究発表要旨、153-156.

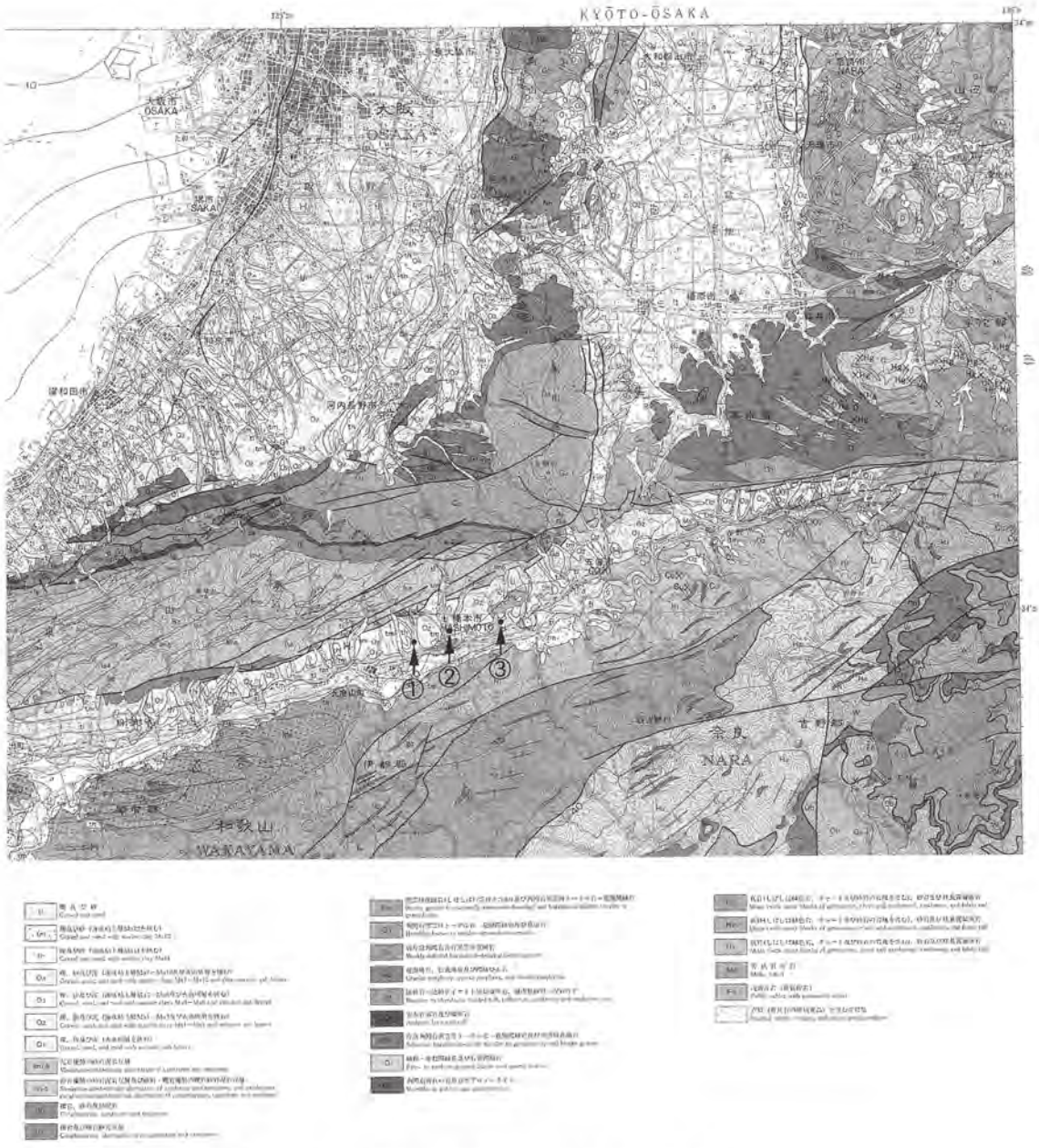
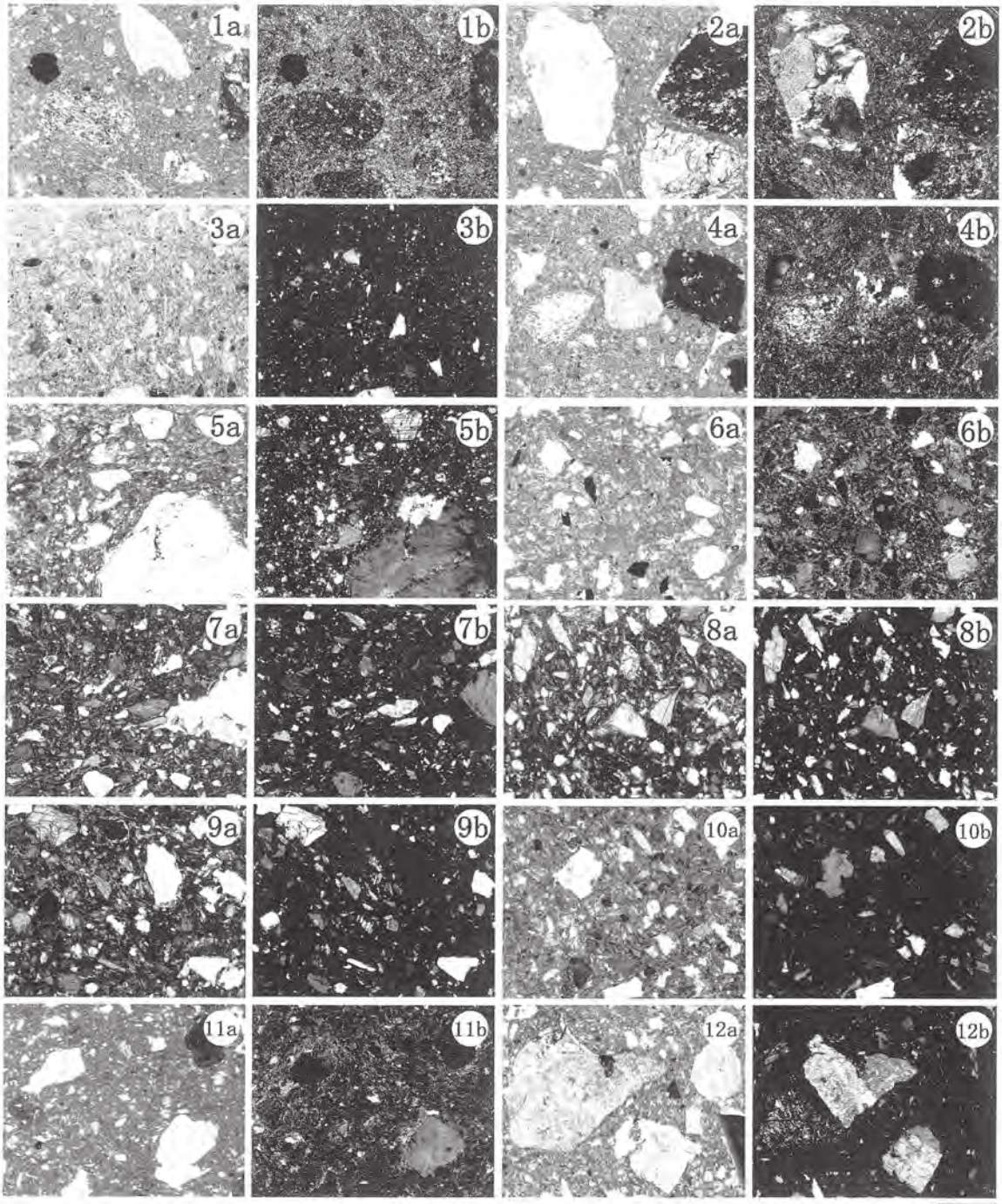
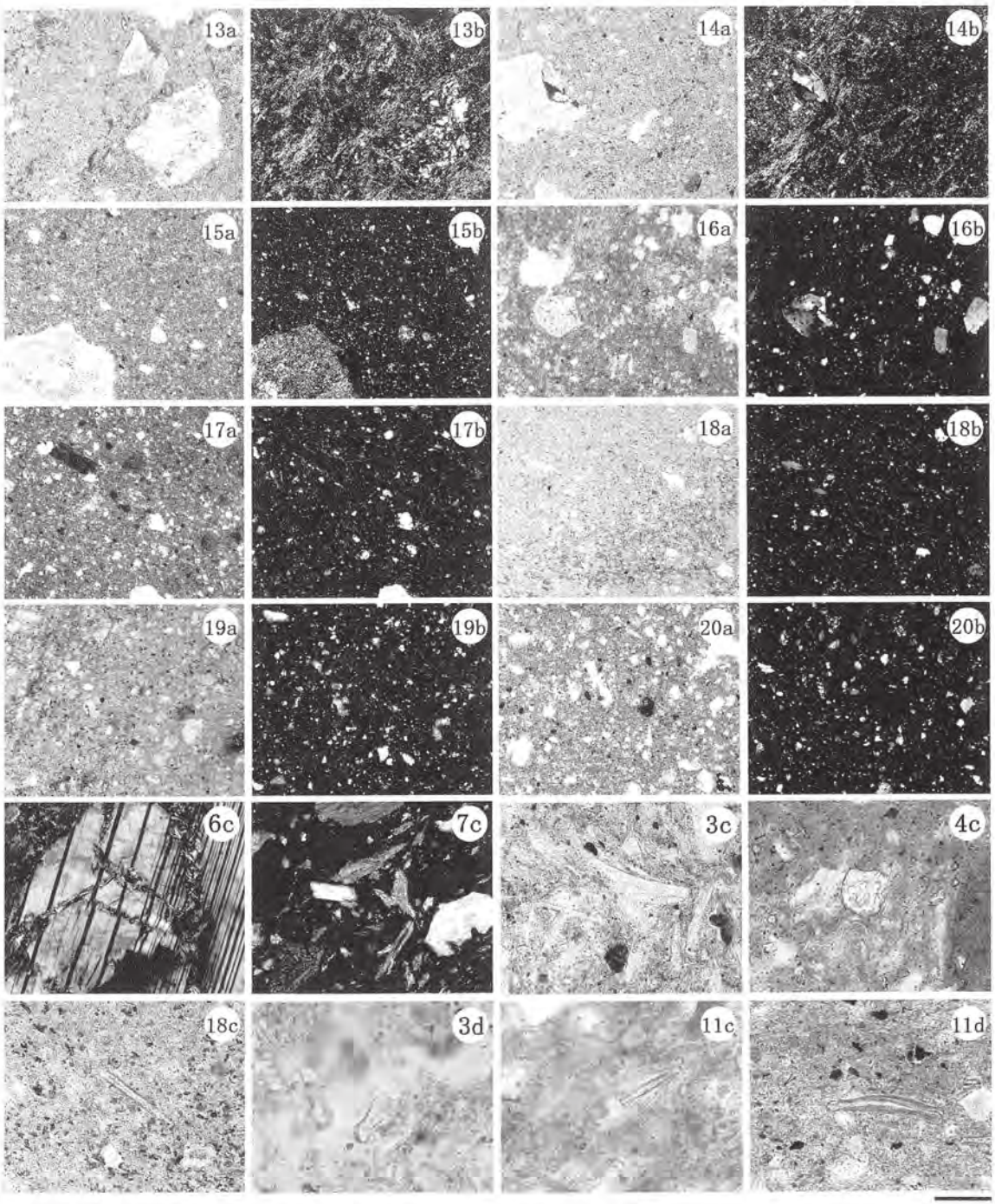


図 2　遺跡周辺の地質図（地質調査所（1998）の一部を抜粋・改編）
①；柏原遺跡、②；北馬場遺跡、③；垂井女房が坪遺跡



図版 3　弥生土器胎土の顕微鏡写真

番号は試料番号に対応する（a；開放ニコル、b；直交ニコル、スケール；500μm）



図版 4　弥生土器および瓦器胎土の顕微鏡写真

番号は試料番号に対応する（a；開放ニコル、b；直交ニコル、13a-20bのスケール；500μm）
6c；斜長石（変形双晶） 100μm　7c；尖った角閃石類 100μm　3c；ガラス質 100μm
4c；植物珪酸体化石 50μm　18c；骨針化石 100μm　3d；珪藻化石*Pinnularia nodosa* 20μm
11c；珪藻化石*Diploneis*属 20μm　11d；珪藻化石*Eunotia*属 50μm

第５節　まとめ（第144～149図、表４～９）

柏原遺跡で検出した主な遺構は、弥生時代中期の集落跡（円形竪穴住居跡・方形周溝墓など）と飛鳥時代の屋敷地（方形竪穴住居と土器棺墓・石室墓など）、それに近世の土坑群である。

以下、時期別に遺構と遺物について整理し、まとめとする。

１．弥生時代中期の集落（第144～146図、表４～７）

（１）竪穴住居

調査範囲の中央部北寄りで弥生時代中期の円形竪穴住居10棟を検出した。この竪穴住居群のある区域を居住区域とする。竪穴住居は、その配置から見て、東群（631・760-1・760-2・821・822・838竪穴住居跡）と西群（80・79・134・174竪穴住居跡）とに分けられる。631竪穴住居と838竪穴住居の間の竪穴住居は、2003年度に和歌山県教育委員会文化遺産課がボックスカルバート工事に伴い調査したものであり、東群に含まれる。これらの東西群の竪穴住居は居住区の中の小単位をなしていると推測される。竪穴住居の規模は、西群では、30㎡以下は３棟、31～40㎡は１棟である。これに対して東群では、30㎡以下は２棟、31～40㎡は３棟、41㎡は１棟であり、東群の竪穴住居には西群の竪穴住居に比較してやや規模の大きなものが多い。821・822竪穴住居は219方形周溝墓と重なっているが、その重複関係から見て、822竪穴住居の廃絶後に同位置に821竪穴住居が建てられ、この住居が廃棄された後に219方形周溝墓が築造されたことが分かる。また、760竪穴住居は同心円状に拡張が行われている。竪穴住居が同位置に建て替えられていることは、この位置を変えられない理由が何かあったものと思われる。竪穴住居の廃絶後の下層堆積土をみると、黒褐色砂質土（79・80・174・760）の場合とそれ以外の灰黄色砂質土（134・821）・褐灰色砂質土（838）・褐灰色シルト（631）の場合とが認められる。前者の埋土は方形周溝墓の周溝の上・中層の埋土と同じであり、有機物質を多く含んでいると考えられることから、後者は前者より早く廃棄された可能性が高い。ちなみに、後者の631・838竪穴住居検出面の上の土層（包含層第5層）は、灰オリーブ色シルト層である。

竪穴住居出土の弥生土器は、ほとんどが弥生時代中期の紀伊Ⅲ・Ⅳ様式に所属している。竪穴住居のほとんどから弥生土器破片が100点以上出土しており、最も多く出土したのは79竪穴住居で333点である。これらの弥生土器の主なものは、廃屋になってから後に窪みに投棄されたもとその後に周囲から流入したものである。

石器の中で装飾品として用いられた碧石製管玉が、760竪穴住居及び781土坑より各１点出土している。両者とも東地区より出土していることは注目される。これらの管玉は石川県小松市菩提地区産原石が使用されていることが原材産地分析により明らかにされており、弥生中期における

管玉の流通・交易圏の一端が明らかになってきた。出土土器の他に、注目すべき遺物に竪穴住居から出土したサヌカイトの剥片がある。サヌカイトは和歌山県下にはその産地がなく、恐らく奈良県の二上山から採掘され、石器の原材料として運ばれてきたものであろう。サヌカイトの剥片が760竪穴住居より50点以上、838竪穴住居（1/2が調査区外）より30点以上出土しており、東群の竪穴住居内で石器が製作されていたことを示している。

遺構番号	区	形態	規模(m)	面積(m²)	深さ(cm)	壁溝(cm)		柱穴(cm)			炉(cm)	
						幅	深さ	本	径	深さ	径	深さ
134	1	円	3.93~4.35	13.45	27~33	10~20	2~ 6	4	20~24	23~28	46~ 58	9
174	1	円	5.73~6.45	29.11	30~45	18~30	3~ 5	4?	24~50	3~ 5	70~ 74	20
80	1	円	6.45~6.69	33.88	21~27	30~42	7~14	4	33~63	37~66	126~170	30
79	1	円	5.82~6.00	27.42	45~48	10~20	5~ 8	4?	36~49	9~30	90~115	25
631	1	円	~(10.06)	(79.44)	36~39	12~20	6~11	6?	50~54	9~10	~	
119	1	方	3.30~3.90	12.87	30~33	~	~		~	~	~	
122	1	方	~3.27		6~10	~	~		~	~	~	
838	7	円	~(6.32)	(31.35)	15~27	16~40	3~10	4?	30~34	21~30	~	
760-1	7	円	6.04~6.48	30.76	~	20~38	3~ 7	4?	25~35	6~53	~	
760-2	7	円	6.72~7.08	37.37	10~18	10~20	2~ 3	4?	26~43	6~43	80~ 90	16
821	7	円	4.65~5.10	18.66	4~ 6	6~ 8	2~ 3	4	20~26	9~30	80~ 92	35
822	7	楕円	6.09~(7.56)	(36.51)	4~ 6	4~ 6	1~ 2	6?	24~32	4~13	90~100	45

表4　柏原遺跡竪穴住居一覧表

（2）方形周溝墓

発掘調査地の東西両地区で弥生時代中期の方形周溝墓を総数18基検出した。その総数は県内最大である。この居住区域の外側に築造された方形周溝墓群のある区域を墓域とする。方形周溝墓の墳丘築成土はすべて削平されており、埋葬主体部である木棺あるいは墓壙は残存していない。

1）方形周溝墓の規模

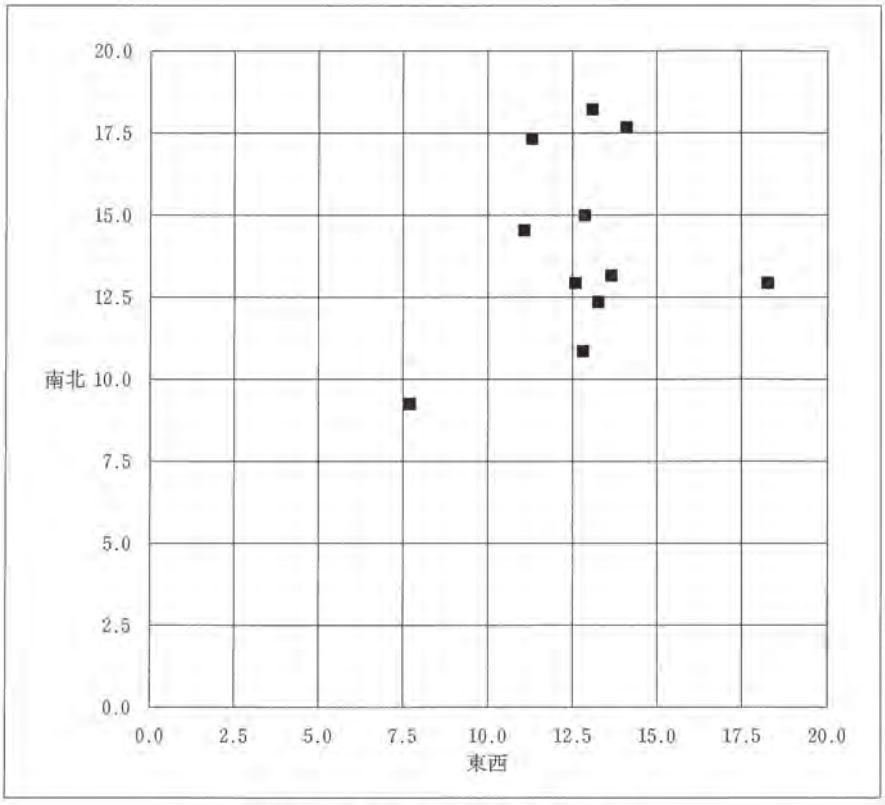
面積は、100m²以下の小規模2基、100～200m²の中規模8基、200m²以上の大規模5基の3つに大別でき、また周溝の深さは、0.2～0.5mの浅い7基、0.6～0.8mのやや浅い9基、1m以上の深い1基の3つに大別できる。このように、それぞれの墓に面積の大小、周溝の深浅は認められるが、特定の墓に際立った優位性は認められない。

2）方形周溝墓の配置

方形周溝墓は、その配置から見て、墓域の東側と西側に分かれて築造されたと推測され、東地区で13基（219・702・708・719・721・768・771・772・775・776・819・862・868）と西地区で5基（89・90・91・502・507）検出した。特に東地区には多数まとまって相接するかのように近接して築造されている。方形周溝墓自体が重複している例は819方形周溝墓の1例のみである。方形周溝墓の築造時期は、2・7区においては、出土土器及び重複関係・配置からみて、新しい順から219＞702・719・775、708・(862)＞766・771・(776)、(721)・868＞819と推測され、集落住民が死亡した順に埋葬されたものと思われる。方形周溝墓の周溝堆積土の断面土層をみると、上・

遺構番号	区	規模(m)		面積(㎡)	墳丘規模(m)		周溝(m)		方位	陸橋部位置	
		東西	南北		東西	南北	幅	深さ			
507	5	7.7	9.3	71.6	6.1	7.9	1.3~2.8	0.3	N−16°−E	北西？	
502	5	4.9+	13.9	68.1+	4.4	11.8	2.8~3.7	0.5	N−2°−W	北西	
91	1	11.2	17.4	194.9	8.8	16.1	2.1~4.8	0.7	N−24°−W	北西	北東？
90	1	12.8	10.8	138.2	11.3	9.8	1.6~3.2	0.7	N−16°−E	南西	
89	1	9.8+	7.2+	70.5+	9.4+	7.0+	0.8~2.2	0.8	N−26°−E	北西？	
219	2	13.1	18.1	237.1	12.3	17.2	1.8~2.8	0.5	N−10°−W	なし	
719	7	14.0	17.7	247.8	12.6	16.0	2.4~4.3	0.6	N−2°−W	北西	南中西
702	7	17.3	14.9+	257.8	14.9	14.4+	2.0~4.9	0.8	N−19°−E	北中西	
862	7	18.1	9.0+	162.9	17.2	7.9+	1.3~2.6	0.6	N−3°−E		
775	7	18.2	12.9	234.8	16.9	11.1	2.5~3.8	0.8	N−6°−W	北西？	南西？
771	7	13.2	12.3	162.4	11.8	11.1	1.6~2.7	0.6	N−14°−W	南西？	
766	7	11.0	14.5	159.5	10.1	13.6	1.0~3.0	0.8	N−18°−W	南東	
708	7	16.7+	15.2+	253.8+	15.0+	14.6+	1.7~4.1	0.6	N−31°−W	北西	
772	7	12.8	14.9	190.7	11.8	13.6	1.6~3.0	0.5	N−18°−W	南東？	
819	7	−	−	−	−	−	1.8~2.3	0.5	N−25°−W		
776	7	12.3	12.9	158.7	10.9	11.7	2.1~3.1	0.3	N−23°−W	北東？	
721	7	12.0	11.8+	141.6+	10.5	11.3+	1.8~2.5	0.2	N−13°−W	北中西	
868	7	13.6	13.1	178.2	12.0	11.6	2.3~3.8	1.4	N−32°−E	南西	

表 5　柏原遺跡方形周溝墓一覧表



第144図　方形周溝墓規模分布図

中層は小礫を多量に含む黒褐色砂質土、下層は黒色砂質土あるいは灰黄褐色砂質土であり、地山は小礫を多く含む黄褐色シルトあるいはオリーブ色シルトであることから、周溝は、集落及びその周辺からの有機物を含む黒褐色砂質土の流入土により埋没しており、周溝を掘削した時の地山

の土を積み上げて築造した墳丘の崩壊土あるいは、墳丘の削平土により埋没したものではないものと思われる。

3）方形周溝墓出土の土器

方形周溝墓の周溝出土の弥生土器についてみると、弥生時代中期の紀伊Ⅲ・Ⅳ様式を中心としており、その前後の様式にわたっているが、後の混入や溝の再掘削及び新方形周溝墓の築造の際に混入した土器があるものと考えられる。方形周溝墓の周溝から出土した弥生土器破片数をみると、17基の内、1000点以上出土しているのは4基、1000点以下500点以上出土しているのは3基、500点以下100点以上出土しているのは7基、100点以下は3基である。最も多いのは775方形周溝墓で、1670点にものぼる。特に居住地域に接する位置にある方形周溝墓（西地区の90・91、東地区の219・775）の周溝からはいずれも弥生土器破片が1000点以上出土しており、その外周の方形周溝墓からの弥生土器破片の出土点数はやや少なくなっている。ここで注目されるのは、方形周溝墓出土の弥生土器破片点数が竪穴住居出土の弥生土器破片点数よりもはるかに多ことである。これらの土器の組成を見ると壺・高杯・甕が主であり、日常生活容器として使用されたものであり、その多くは破損している。これらの弥生土器の中には供献土器の他に、862方形周溝墓のように周溝底部付近から弥生土器が集中して出土している例があり、埋葬に際して破棄され、投棄された弥生土器もあったかもしれない。しかし、弥生土器と共に石器も出土していることから見て、後の混入あるいは後に投棄された土器がかなりあったものと思われる。さらに、7区における同一の方形周溝墓の周溝出土弥生土器破片点数が周溝のどの方位から多く出土しているのかについて検討すると（重複が多い819・771・772・775方形周溝墓や調査区外に大きく広がっている702・862・721方形周溝墓を除く）、北側の周溝からの出土点数が相対的に多く（6表）、南側に少ない傾向が見られる。これは弥生土器が、居住区域の竪穴住居から廃棄されたものであることを示しており、方形周溝墓が墓域の外周から順次内周に寄って築造されたことを示しているものと見られる。但し868方形周溝墓の場合は、西寄りに居住区があるため、西側の周溝からの出土点数が多い。このことに関連して、弥生集落廃絶後の排棄弥生土器破片について包含層下層（第5層）の弥生土器破片出土分布と点数について、4mグリッドごとに検討したところ、居住区に近接する219・775方形周溝墓付近が特に多かった。このことは、遺構に多く遺物か含まれる個所では、この上の遺構を覆う下層包含層にも遺物が多く含まれていることを示している。しかし、その上の中層包含層では遺物が特定の個所に集中することはなく、少量、広範囲にわたり広がって出土していることから見て、遺構を覆う下層の土は、ある程度攪乱を受けているが、遠くまで動かされていないことを逆に示している。

出土弥生土器の中で特に注目されるのは、90方形周溝墓出土土器の20～25%が生駒西麓産の土器であり、同じく219方形周溝墓出土土器の30%以上が生駒西麓の土器であることである。これら

の土器は大阪の河内から運ばれたもので、河内と紀伊北部の人々の間に文物の交易、あるいは人々の移動があったことを示している。この生駒西麓の土器が多量に出土した方形周溝墓が東側の墓域の219方形周溝墓、西側の墓域の90方形周溝墓であることは興味深い。

4）方形周溝墓の被葬者

方形周溝墓に埋葬されたのは1人であるのか、複数人であるのかについては墳丘主体部が削平されているので不明である。複数埋葬する方形周溝墓の規模については、藤井整氏が指摘する「80㎡で単数埋葬と複数埋葬の境界がみとめられた」（註1）というように規模が大きい方形周溝墓は、あらかじめ埋葬される複数の人々が決まっていたものと思われる。柏原遺跡においては、方形周溝墓の規模は大半が80㎡であり、それぞれがあらかじめ複数人々を埋葬するためにその位置が決まっていたのか、あるいはその規模が大きくても単数埋葬であったのかどうかについては明

区	遺構番号	周構の位置			
		西	北	東	南
2・7	219	276	412	207	44
	719	106	189	130	118
	702	178	256	(120)	?
	766	96	131	(87)	41
	788	(36)	260	67	?
	776	32	71	20	15
	868	(386)	(154)	37	44

表6　方形周溝墓周溝出土弥生土器破片数

区	遺構番号	Ⅲ－1	Ⅲ－2	Ⅲ－3	Ⅳ－1	Ⅳ－2	破片数
5	507				○		3
	502			○			8
1・6	91		○	○	○		1662
	90		○	○	○		1609
	89		○	○		○	454
2・7	219	○	○	○		○	1010
	719	○		○			603
	702		○	○		○	581
	862		○	○	○		268
	775		○	○	○		1670
	819・(820)	○?	○?				269
	771・(772)			○			313
	766		○	○	○	○	360
	708			○			394
	776						146
	721						10
	868		○	○	○		779

表7　方形周溝墓出土弥生土器の様式

らかでない。しかし方形周溝墓の築造の配置や、重複及び周溝出土弥生土器破破数からみると、あらかじめ埋葬位置が決まっていたのではなく、死亡した人の順に方形周溝墓が築造され埋葬された可能性が高い。その中に複数埋葬する人々の方形周溝墓も含まれていたものとも考えられる。複数人が埋葬された方形周溝墓については、複数の竪穴住居単位の血縁関係を示していると思われる。ただし、集落の全構成員が方形周溝墓に埋葬されたのか、あるいは伝統的な成人の土壙墓が集落から離れた地点に存在するのかについては不明である。但し紀中・紀南においては、海岸砂丘に墓地が造られており、ここでは土壙墓が発見されているので、これから見つかる可能性もある。柏原遺跡の竪穴住居の数とその推定人数及び方形周溝墓の数からみれば、すべての人々が方形周溝墓に埋葬されたとはいえないとしても、大半の人々が方形周溝墓に埋葬されたものと考えられる。以上のことから考えて、方形周溝墓は集落内の首長を中心とする特定の人々の墓ではなく、居住区域各グループ単位の構成員の新様式墓であり、身分階層という制度的な格差に基づく墓制ではないものと思われる。

以上記してきた墓域の方形周溝墓とは別に、居住区域の西群にある630ピットについては土器棺墓の可能性がある。とすると乳幼児は竪穴住居の近くに埋葬されたことになり、成人を埋葬する墓域とは、区別されていたものと思われる。

（3）集落構造

柏原遺跡の発掘調査範囲は、東西に長い道路敷の10,061㎡でやや広い面積で、今回検出したのは墓域を含む集落の一部であり、その北側及び南側への続きは不明であるが、この台地の中央部分が居住区域で、その外周に墓域が形成されたと考えられ、今回検出したのは、居住区域の南端にあたり、集落への道はこの位置に繋がるものと想定される。

この居住区域の中でも竪穴住居が東群と西群に分けられ、これに伴う方形周溝墓も東地区及び西地区に分かれて造営されており、東地区の方形周溝墓の規模は大半が西地区の方形周溝墓より大きい。最初に築造された819方形周溝墓は、後に連続して築造された方形周溝墓と重複している。通常は同時期の方形周溝墓墳丘自体の重複は見られず、819方形周溝墓の場合は意図的に破壊・消去された可能性が高い。その原因は居住地区東群竪穴住居の人々の間での問題であったのかもしれない。さらに居住区域と墓域の関係についてみると、821･822竪穴住居の廃屋の跡に219方形周溝墓が築造されたのは、墓域が居住区域の北側まで拡大してきたことを示しているものと推測される。

一方、集落の生活用具の一つである出土石器についてみと、石包丁・柱状片刃石斧・叩石・磨石・砥石・石錐・石錘・石棒・投弾・石刀・石槍の他に石鏃が多数出土している。特にサヌカイトの剝片が760・838竪穴住居内より多数出土していることは農耕の他に狩猟も積極的に行われていたことを示している。生産区域である水田については未検出であるが、集落に近接する場所で

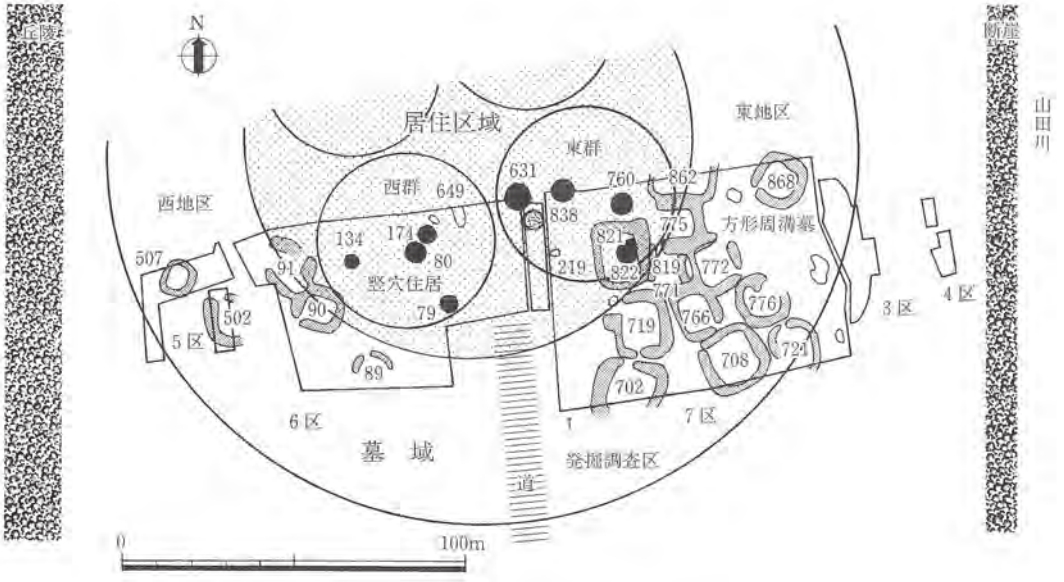
の雑穀等の畑作の存在についても考えてゆかねばなるまい。

このように、柏原遺跡は、台地上に形成された弥生時代中期を中心とした集落であり、居住区域は、いくつかのグループから構成され、それぞれ数棟の竪穴住居からなっている。各グループがその外周にそれぞれ方形周溝墓を持っており、かつグループ間に竪穴住居・方形周溝墓の規模及び碧玉製管玉・石器原材料のサヌカイト等の所有に優劣があったことが明らかになった。

最後に、この柏原集落が弥生時代後期初めになぜ廃絶し、どこに移住したのかは不明であるが、そこには社会的・気候的な要因があったものと推測される。前者の要因としては、集落間の緊張の中で高地に居住地を求めた、いわゆる高地性集落を形成したとも考えられ、後者の要因としては、和歌山市田屋遺跡で確認されたように、気候の変動にみられる集落の動向と関連するものと推測され(註２)、弥生時代後期には紀の川の氾濫原に集落を移し、水利の管理しやすい生産の場と一体となった集落が形成されたためとも考えられる。

２．飛鳥時代の掘立柱建物群と墓（第146図、表８）

柏原遺跡の弥生時代中期の集落は、弥生時代後期初めに廃村となり、その後引き続いて人々が居住することはなかった。しかし、飛鳥時代になって再び人々が住み始めており、弥生時代の居住区のあった場所から119方形竪穴住居・122方形竪穴住居2棟と掘立柱建物９棟が検出された。119方形竪穴住居の面積は12.8㎡であり、弥生時代時代中期の竪穴住居の最も小さい134竪穴住居よりも小さい。北西壁寄りにカマドを設置しており、この竪穴住居が埋没した後に掘立柱建物２が建てられているので、掘立柱建物は竪穴住居より後に建てられたことが分かる。掘立柱建物の床面



第145図　弥生時代集落模式図

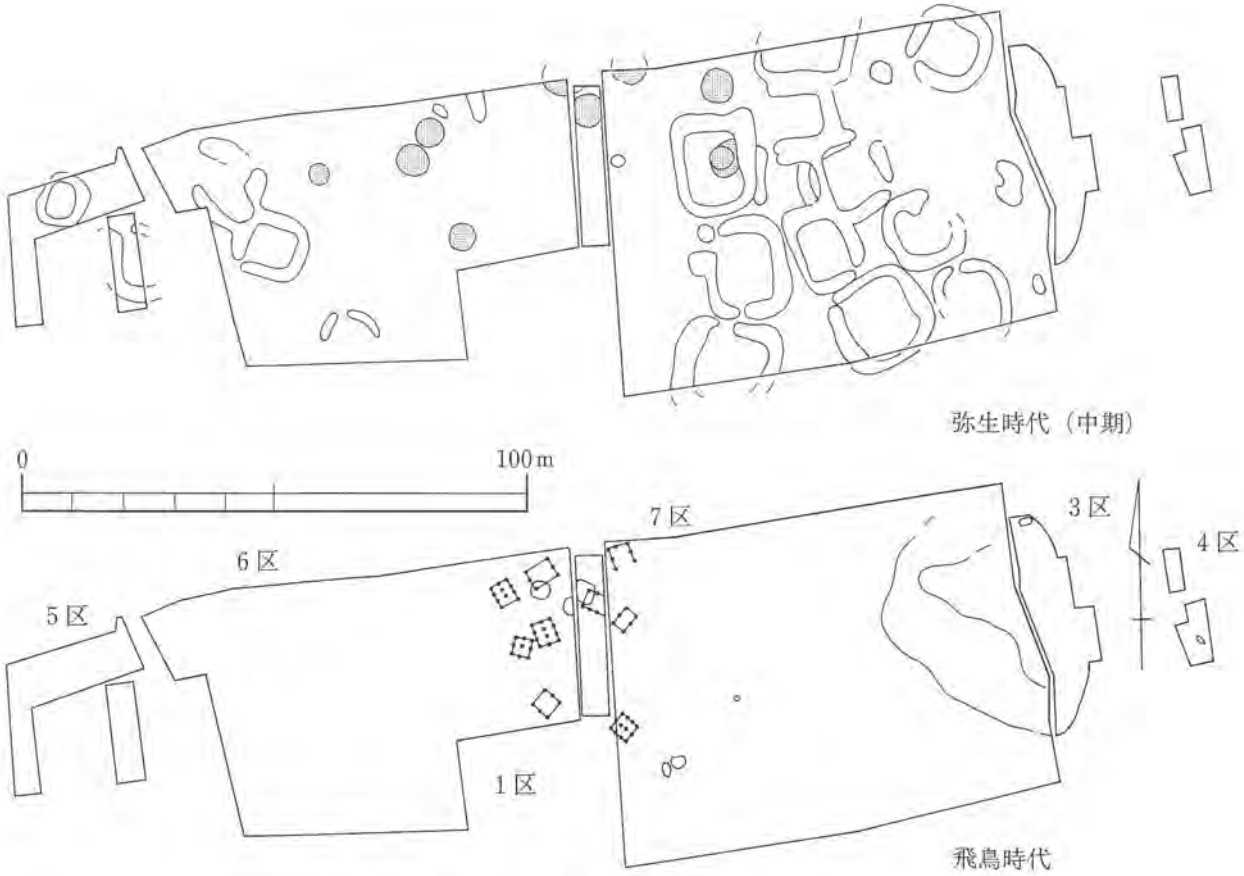
積についてみると、検出した８棟の内７棟が20㎡であり、大部分が弥生時代中期の竪穴住居の面積より小さく、掘立柱建物の中で総柱建物については倉庫とも考えられる。掘立柱建物の配置から見て、数時期にわたって建てられたものであるが、面的な広がりを持たなかった。

墓地は居住区に接して南東側に石室墓２基、土器棺墓１基が、やや東側に離れた場所にも石室墓が１基築かれる。土器棺墓は小児を埋めたものと思われるが、734・735石室墓についても、納められた石棺の長さが１m未満で、子供を埋葬した可能性がある。また、734石室墓の石棺蓋石上からは釘がまとまって出土しているが、これについては木製容器や木棺の存在が考えられる。容器であった場合は、石棺の埋葬に伴うものである可能性が高いが、木棺であった場合は小石室への複次葬も考えられ、埋葬形態を考える上で興味深い。これらの墓の他に、調査の東端、４区で検出した342土坑については、中から飛鳥時代の須恵器が出土しており、土壙墓の可能性が高いが、断定はできない。今回検出した範囲でみると、方形竪穴住居及び掘立柱建物は屋敷墓を含む小家族グループの敷地とみられる。

建物	区	間	規模(m)	面積(㎡)	掘　形	柱当り		方　位
		東西×南北	東西×南北		規模(cm)	径(cm)	深さ(cm)	
1	1	2×3	3.71×4.25	15.8	49～98	～	～	N－27°－W
2	1	4×4	5.48×7.85	43.0	36～73	19～29	15～37	N－32°－W
3	1	2×2	3.58×3.65	13.1	42～112	～	～	N－14°－E
4	1	2×3	3.93×4.71	18.5	33～92	26～37	35～52	N－22°－W
5	1	3×2	4.36×3.94	17.2	35～84	25～34	29～32	N－45°－E
6	7	(1)×(2)	(3.85)×(4.35)	(16.7)	32～49	17～20	10～32	N－22°－W
7	7	2×2	3.06×4.47	13.7	38～84	40～53	28～44	N－35°－E
8	7	3×2	4.22×4.24	17.9	47～69	30～46	24～31	N－50°－W

表８　柏原遺跡掘立柱建物一覧表

７区における、飛鳥時代に所属する須恵器の出土状況について見ると、飛鳥時代の居住区に近接する方形周溝墓の周溝上層からも少量出土しているが、これは後世に混入したものと考えられる。また219方形周溝墓の東側から318点出土しているが、これは遺構ではなく飛鳥時代に窪みとなっていたところと考えられる。それ以東では飛鳥時代に所属する782流路から須恵器破片が213点出土している。この間には飛鳥時代の遺構はなく、方形周溝墓周辺からの須恵器破辺の出土点数はきわめて少ないのである。さらにこれらの遺構を覆う包含層下層（第５層）からの須恵器破片出土分布と点数について、４mグリッドごとに検討したところ、同様に、飛鳥時代の居住区に近接する地点から121点と782流路から185点出土しており、その間における須恵器破片出土点数は少ない。さらに、弥生時代中期の方形周溝墓の周溝に墳丘の築成土の流入はなく、飛鳥時代に所属する783土器棺墓が719方形周溝墓の周溝埋土上層で検出されていることから考えると、飛鳥時代には方形周溝墓の墳丘は、まだ削平されず饅頭のように並んで存在していたものと推測される。このことは、さらに734・735石室墓の石室の石組及び蓋石が残存していたことにより、飛鳥時代以降も地山は大きく削平されていないことを裏付けている。



第146図　弥生時代・飛鳥時代主要遺構変遷図

3．近世の円形土坑（第147～148図、表９）

土坑を５区・６区・１区で計46基を検出しているが、特に集中しているわけではない。この土坑の規模は、直径１～1.5m前後のものが最も多いが、小さいものでは40cm前後のものも見受けられる。深さは様々であるが最も残りの良いもので70～80cm前後遺存している。この土坑の特徴は、その多くが平面形は円形を呈し、壁面及び床面に黄色系の粘土を貼付けていることである。また、数基では床面の外周が凹状に窪んだものや、側壁にタガの痕跡と思われる凹状の窪みが数条周っているものがある（３・41土坑)。土坑内には岩塊や礫及び瓦が多量に含まれており、おそらくは、これらの土坑が放棄される際に投げ込まれたものであろう。５土坑の構造はこれらの土坑と基本的には同じであるが、焼土塊や金属の溶融片及び溶融片が融着したスサ入りの赤化した炉体（？）の壁片が多量に出土し、また、東壁面は赤く焼け締まり、その外側は還元し青灰色化している。これらのことや、20溝他から鋳型が数点出土していることなどを考え合わせると、これらの土坑群は鋳造に関連した遺構であると推測される。これらの土坑の所属時期は、土坑内から出土した陶磁器等から、18世紀後半から19世紀前半と判断される。文献によれば、柏原地区には14

世紀代から18世紀の初頭まで鋳物師が工房を営んでいたとの記録があるが、工房跡と推定されているのは今回の調査地から北へ約400mの場所である。今回検出した遺構が文献に記された鋳物師集団とどのような関係にあるかは今後の課題である。

柏原遺跡以外でも同様の近世土坑が県内の日高郡みなべ町大塚遺跡b区で24基検出されている（註３）。この遺構は、円形土坑で直径が80～210cmまであり、その内直径が150～170cmのものが最も多く側壁はやや開き気味に立ち上がる。土坑内面には、漆喰状のものが全面あるいは側面に貼り付けているもの、または漆喰状のものを貼り付けてはいないが、底部に粘質土が塗られているものなどがある。

いずれも、やや狭い範囲にまとまっていること、近世に所属すること、鋳型が出土していることからみて、鋳造関係に係る遺構と推測される。

［註］

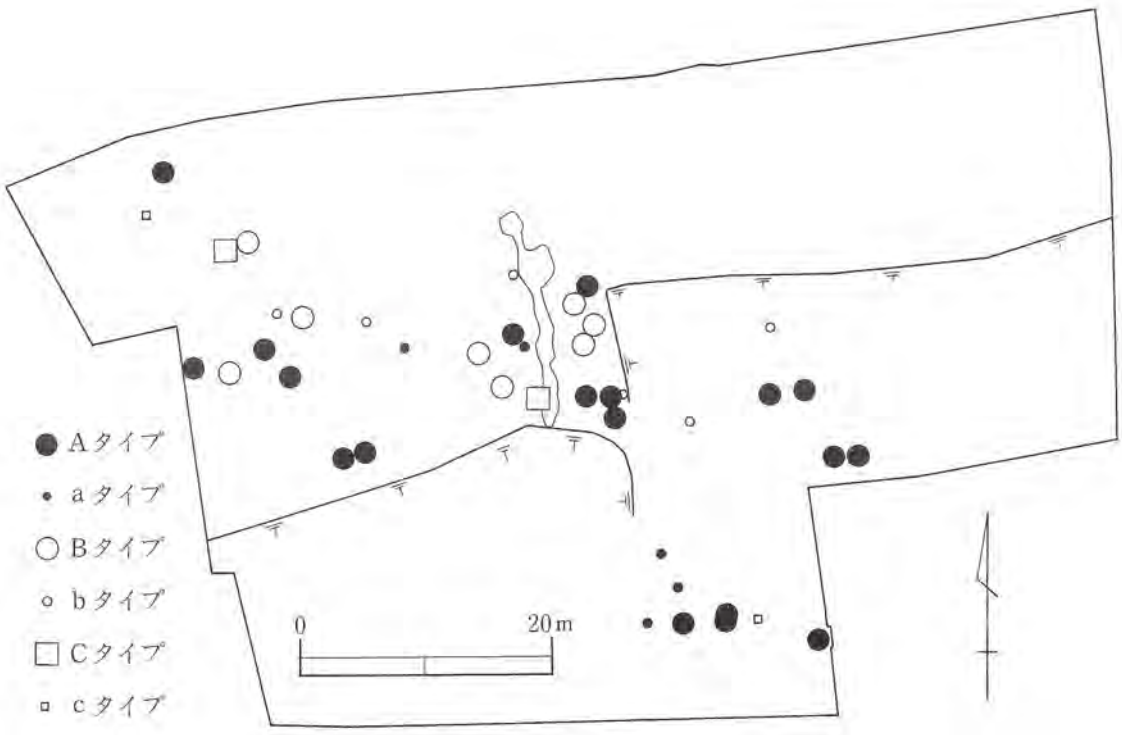
1　藤井整「下植野南遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第35冊　2004

2　「まとめ」『田屋遺跡発掘調査報告書』㈶和歌山県文化財センター　1990年

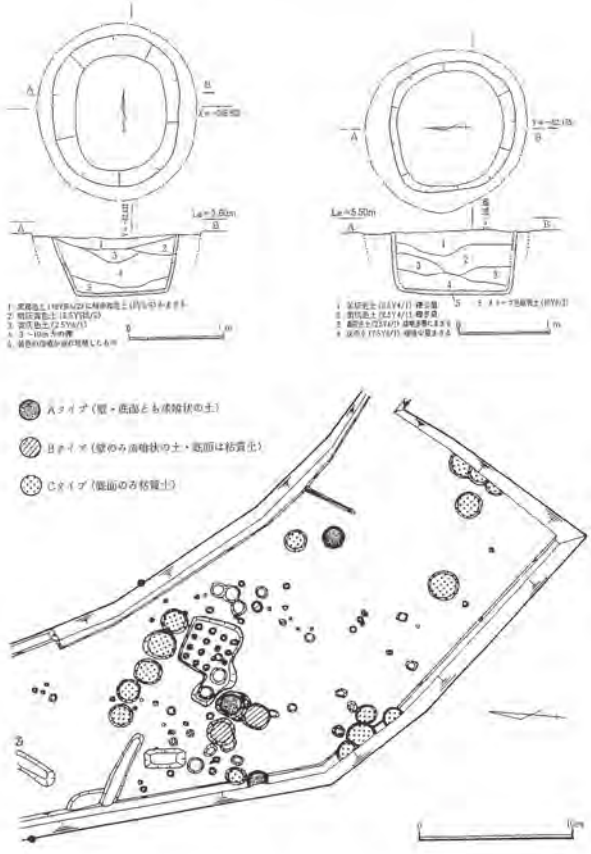
3　「大塚遺跡」『高田土居城跡・徳蔵地区遺跡・大塚遺跡』㈶和歌山県文化財センター　2006年

	遺構番号	区	地区	平面形	規模			深さ	タイプ	貼壁		貼床	
										色調	厚さ	色調	厚さ
1	504	5	I57	円／方？	56	×	66	30	a 1	淡黄色	12	灰白色	4
2	505	5	H56	方？	130	×	140	80	B 2			明黄褐色	4
3	602	6	G52	円	114	×		52	A 1	明黄褐色	12	明黄褐色	8
4	603	6	H52	円	84	×		4	c				
5	75	1	K51	円	90＋	×		58	A 1	浅黄色	10	浅黄色	4
6	2	1	H50	円	100	×		56	B 2			黄褐色	3
7	1	1	I50	円	110	×		28	C				
8	3	1	J50	円	124	×		70	A 1	明黄褐色	20	浅黄色	4
9	6	1	K50	円	150	×		56	B 1	明黄褐色	16		
10	8	1	J49	方	68	×	94	22	b 2			黄灰色	2
11	9	1	J49	楕円	160	×	190	44	B 2			黄褐色	6
12	7	1	K49	円	102	×		38	A 1	明黄褐色	12	明黄褐色	4
13	12	1	J48	円	20	×		6	b 2			暗灰色	2
14	5	1	L48	円	128	×		28	A 1	黄褐色	26	黄色	14
15	4	1	M48	円	116	×		24	A 1	明黄褐色	22	黄褐色	6
16	16	1	J47	円	70	×		14	a 2	明黄褐色	14	明黄褐色	6
17	24	1	I45	楕円	50	×	70	26	b 2			明黄褐色	2
18	28	1	J45	楕円	120	×	146	14	A 2？	明黄褐色＋オリーブ黄色	2	明黄褐色＋オリーブ黄色	5
19	76	1	J45	円	36	×		28	a 2	オリーブ黄色	10	オリーブ黄色	4
20	29	1	K45	円	150	×		70	B 1	明黄褐色	12		
21	30	1	K45	楕円	218	×	230	50	B 2			灰オリーブ	4
22	34	1	J44	円	124	×		78	B 2			浅黄色	8
23	65	1	L44	楕円	216	×	236	78	C				
24	33	1	I44	円	138	×		34	A 2	明黄褐色	1弱	明黄褐色	2
25	36	1	J43	楕円	120	×	174	44	B 1	明黄褐色	1弱		
26	38	1	J43	円	150	×		70	B 1	明黄褐色	20		
27	427	1	K44	円	130	×		54	？	浅黄色＋オリーブ色	26？	浅黄色＋オリーブ黄色	22？
28	39	1	K43	円	148	×		90	A 1	浅黄色	15	浅黄色	14
29	40	1	K43	円	126	×		94	A 2	暗黄褐色	20	暗黄褐色	2
30	77	1	K43	円	70＋	×		54	b 2			明黄褐色	2
31	426	1	K43	円	130	×		54	？				
32	41	1	L43	円	112	×		76	A 1	浅黄色	6	浅黄色	2
33	157	1	O42	円	32	×		12	a 2	明黄褐色	10	明黄褐色	2
34	158	1	O42	円	44	×		20	a 1	浅黄色	12	浅黄色	10
35	64	1	P42	円	80＋	×		22	a 2	浅黄色	12	浅黄色	10
36	156	1	P42	円	132	×		72	A 2	浅黄色＋明黄褐色	22	浅黄色＋明黄褐色	7
37	49	1	L41	円	60	×		60	b 1	明黄褐色	15		
38	154	1	P41	円	118	×		76	A 2	明黄褐色	12	明黄褐色	6
39	155	1	P41	円	50＋	×		70＋	A 2	明黄褐色	18	明黄褐色	4
40	67	1	J40	円	55	×		16	b 2			明黄褐色	4
41	50	1	K40	円	110	×		64	A 1	浅黄色	20	オリーブ色	2
42	159	1	P40	円	70	×		31	c				
43	53	1	K39	円	110	×		78	A 1	浅黄色	20	浅黄色	2
44	153	1	P39	円	120	×		90	A 2	浅黄色＋明黄褐色	8	浅黄色＋明黄褐色	1弱
45	57	1	M38	円	130	×		46	A 2	浅黄色＋明黄褐色	14	浅黄色＋明黄褐色	2
46	63	1	M38	円	162	×		52	A 2	明黄褐色	14	オリーブ黄色	2

表 9　柏原遺跡近世土坑一覧表



第147図　1区近世土坑配置図



第148図　大塚遺跡の近世土坑

報告書抄録

ふりがな	たるいにょうぼうがつぼいせき・のぐちいせき・きたばばいせき・かせばらいせき
書名	垂井女房が坪遺跡・野口遺跡・北馬場遺跡・柏原遺跡
副書名	―一般国道24号京奈和自動車道（橋本道路）建設工事に伴う発掘調査報告書―
編著者名	村田弘・佐伯和也・井石好裕
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8404 和歌山県和歌山市湊字堤内坪571番1　TEL 073-433-3843
発行年月日	西暦2007年3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
垂井女房が坪	和歌山県橋本市隅田町垂井	30203	3	34度 20分 6秒	135度 38分 49秒	第1次調査 19990119～ 19990329 第2次調査 19990917～ 20000324	2,243 602	一般国道24号京奈和自動車道橋本道路建設工事に伴う事前調査
野口	和歌山県橋本市隅田町中島	30203	44	34度 20分 1秒	135度 38分 25秒	19990917～ 20000324	302	同上
北馬場	和歌山県橋本市北馬場	30203	46	34度 19分 34秒	135度 36分 38秒	第1次調査 19990917～ 20000324 第2次調査 20010606～ 20010810 第3次調査 20020517～ 20020814	4,001 898 437	同上
柏原	和歌山県橋本市柏原	30203	48	34度 19分 12秒	135度 35分 11秒	第1次調査 20020823～ 20030314 第2次調査 20030528～ 20040228 第3次調査 20040421～ 20040819	3,540 4,955 1,566	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂井女房が坪	散布地	弥生 古墳 平安～鎌倉 近世	包含層 竪穴住居　1棟 掘立柱建物　1棟 掘立柱建物　1棟 土坑 流路 石垣	弥生土器 土師器・須恵器 瓦器・土師器 陶磁器・瓦	2－318土坑出土の瓦器は、県内で最古段階の一群に属する。
野口	散布地 集落	古墳	溝　4条	土師器	
北馬場	散布地 集落	縄文 弥生 奈良 中世 （鎌倉～室町） 近世	土坑　1基 竪穴住居　1基 掘立柱建物　4棟 土坑 掘立柱建物　23棟 土坑 土坑 溝	縄文土器・石鏃 弥生土器 土師器 瓦器・土師器・陶磁器 瓦 陶磁器・銭貨（寛永通宝）・石臼	縄文土器は中期（船元II式）の深鉢で、埋甕遺構の可能性が考えられる。 中世の掘立柱建物の殆どは総柱建物で、13世紀代。
柏原	散布地 集落	縄文 弥生 （中期） 飛鳥 中世 近世	遺物包含層 竪穴住居　10棟 方形周溝墓　18基 土坑 竪穴住居　2棟 掘立柱建物　8棟 土壙墓　1基 土器棺墓　1基 石室墓　3基 土壙墓　1基 土坑 土坑 溝	縄文土器（晩期）・土偶 弥生土器・石器 土師器・須恵器・耳環 瓦器・土師器・陶磁器 陶磁器・鋳型・溶解炉・瓦	土偶は、方形周溝墓の埋土上層から出土。 弥生時代中期後半の方形周溝墓群は、集落の東及び西側の範囲に造営されている。弥生時代に属するものとしては、県内の遺跡で最も検出数が多い。 石室墓2基は、石室の内側に箱式石棺を構築する。

要約

一般国道24号京奈和自動車道（橋本道路）の建設工事に先立ち、1998年度から2004年度にかけて橋本市内に所在する4遺跡で発掘調査を実施した。　垂井女房が坪遺跡では、古墳時代・平安時代・江戸時代の遺構や流路を検出した。出土した瓦器の一部は県内で最古段階の一群に位置付けられる。また、周辺に瓦器焼成窯の存在も想定される。　北馬場遺跡では、縄文時代から江戸時代にいたる各時代の遺構を検出した。縄文時代中期の土坑は埋甕遺構の可能性がある。掘立柱建物は主として鎌倉時代の中世集落の一部を形成するものである。　柏原遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居・方形周溝墓、飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物・土壙墓・土器墓棺・石室墓、中世の土壙墓、近世の土坑等を検出した。方形周溝墓は弥生時代に属するものとしては県内の遺跡で最も検出数が多い。出土遺物には、縄文時代及び弥生時代の土器や石器、古墳時代から中世にかけての土器や陶磁器類、近世の鋳型・溶解炉片等がある。また、2003年度の調査で方形周溝墓の周溝埋土上層から県内では出土例の少ない土偶が出土している。

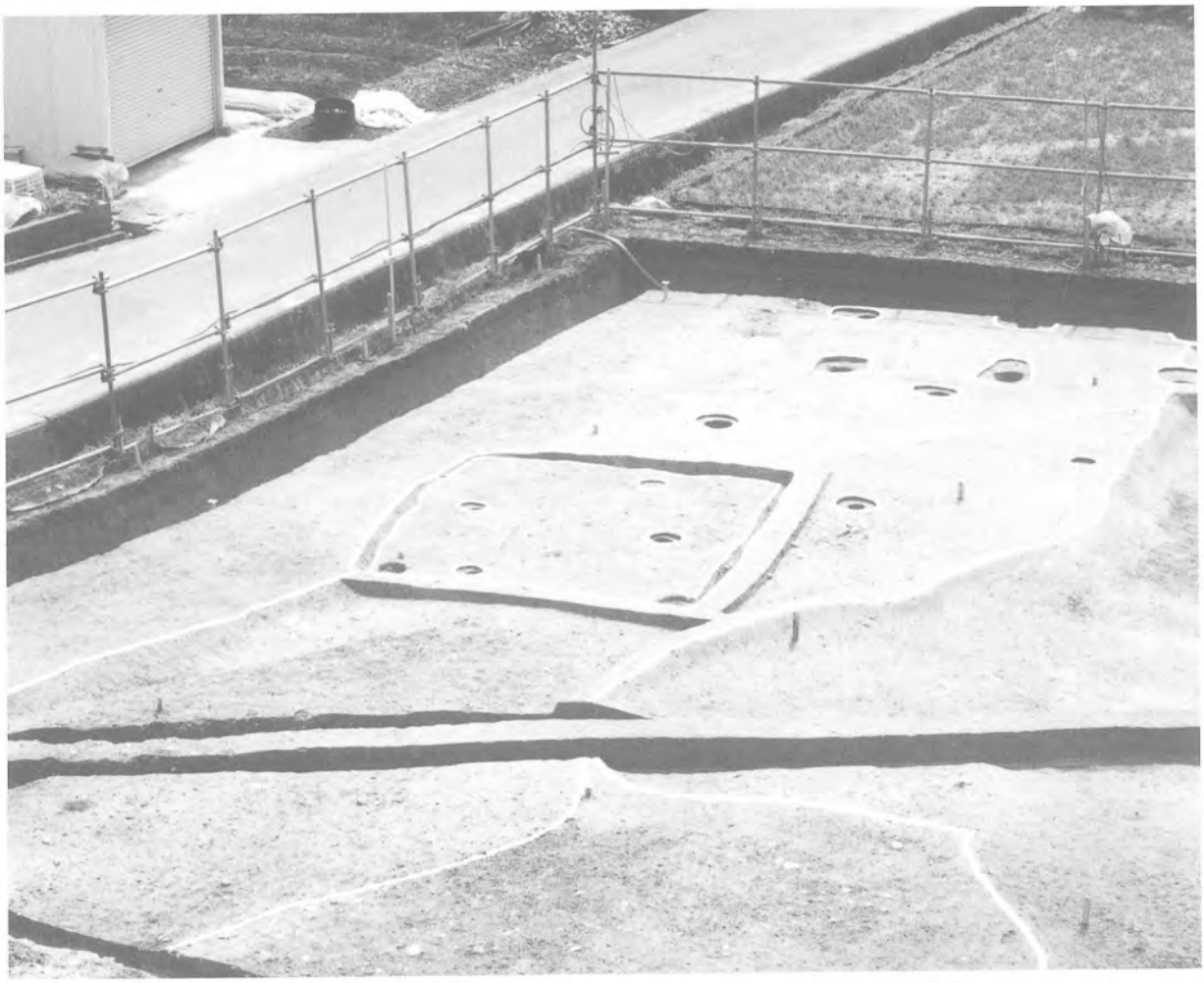
図　版



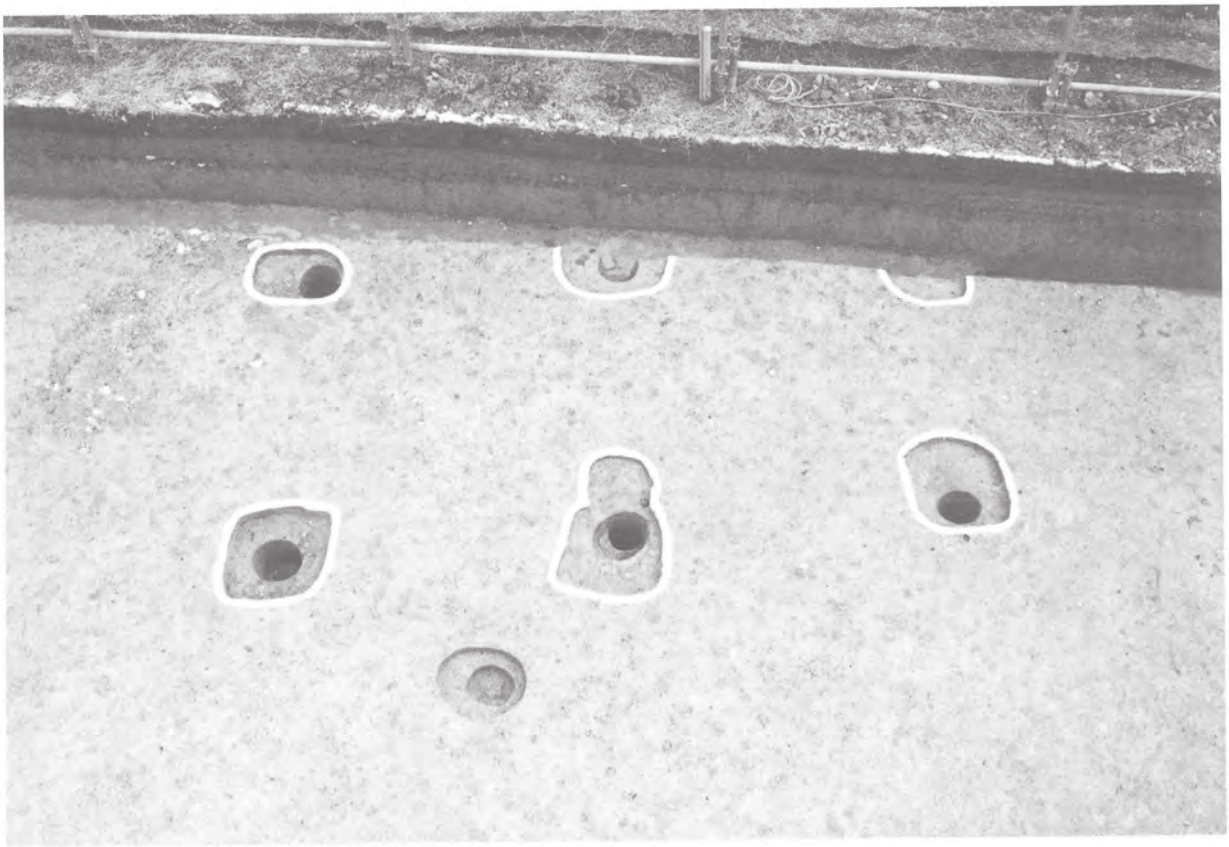
1. 1A区 全景（航空写真・上が北）



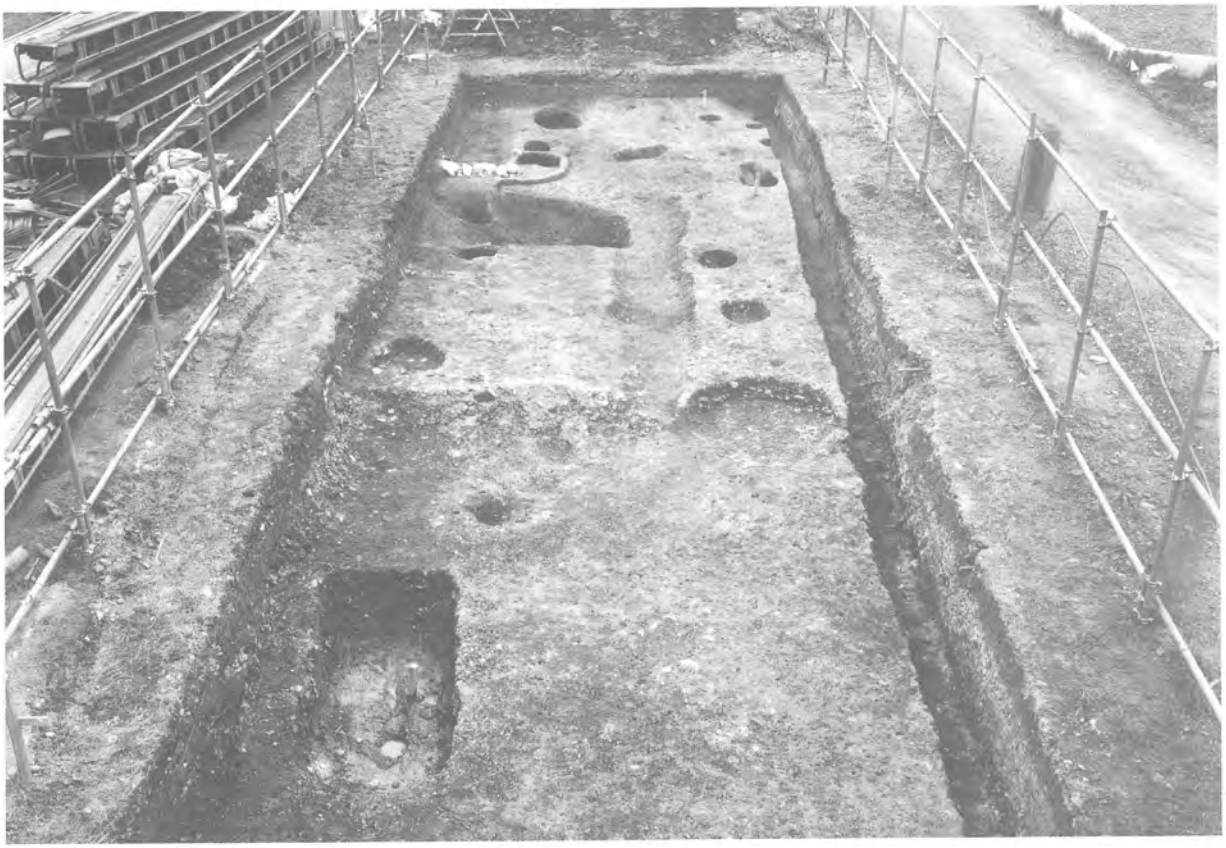
2. 1B区 全景（航空写真・上が北）



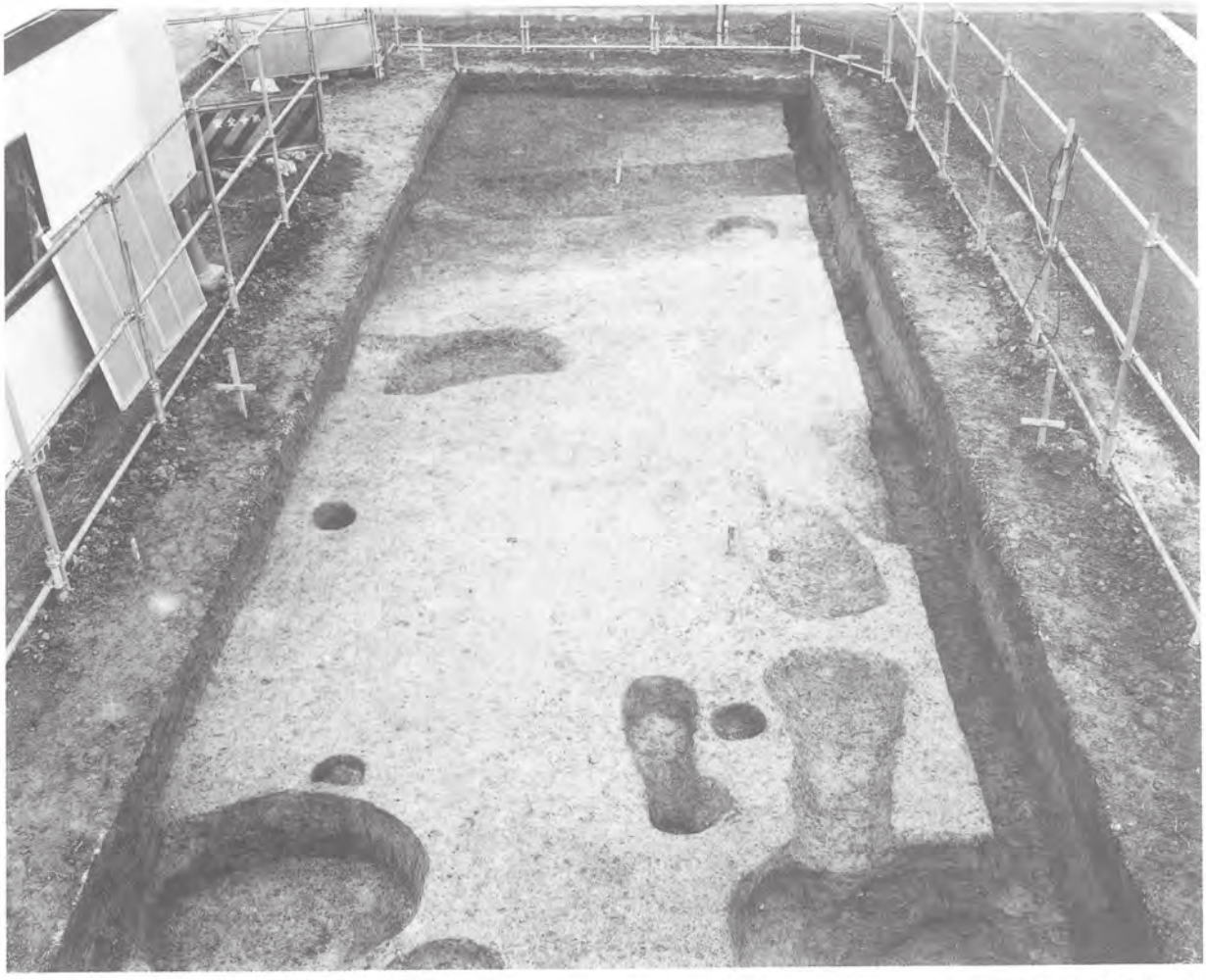
1. 1B区 東半部（北西から）



2. 掘立柱建物 1 （北西から）



1．2区 東半部（東から）



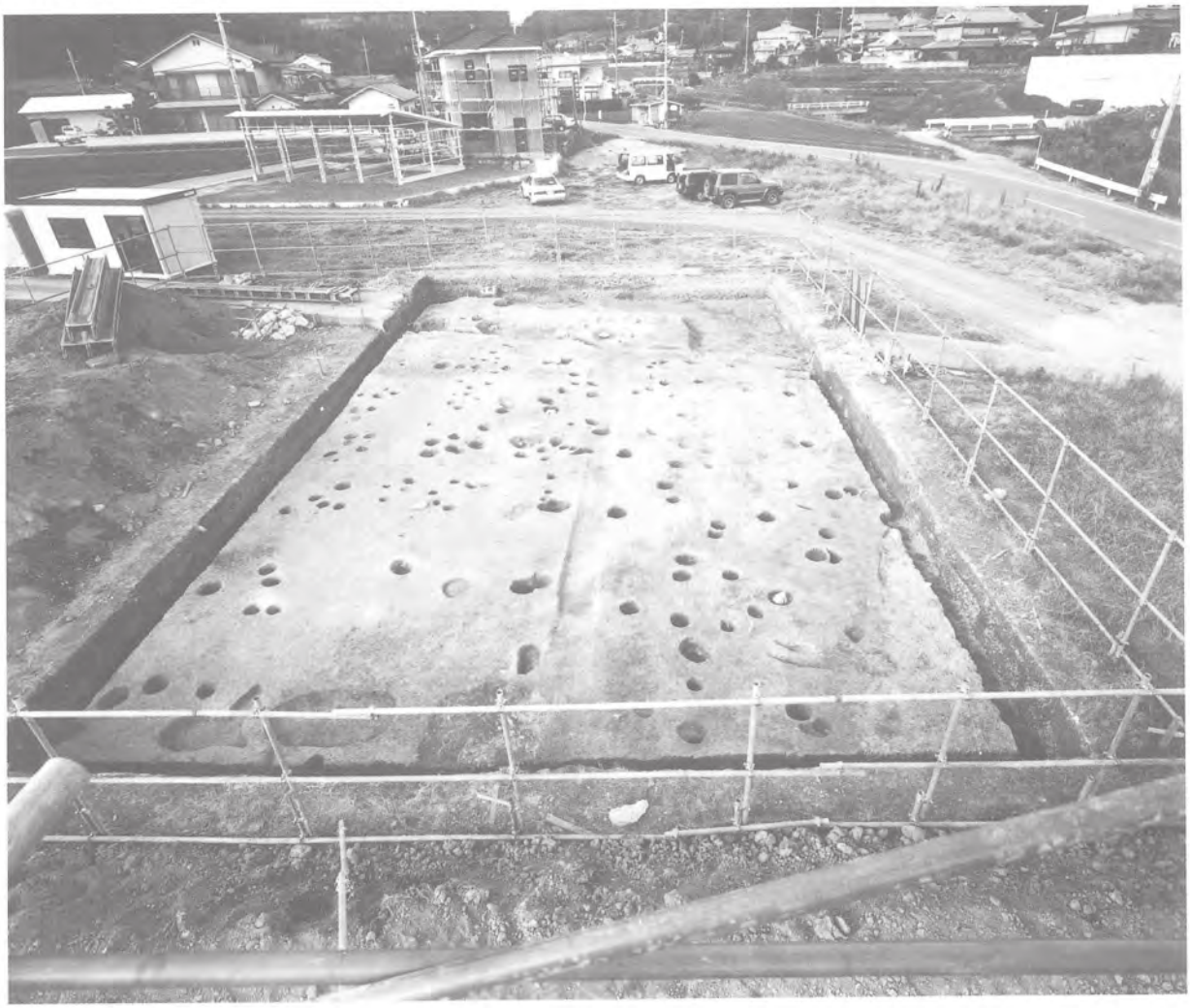
2．2区 西半部（東から）



1. 2-306土坑（東から）



2. 2-338石垣（西から）



1．3区 全景（南から）



2．2-324土坑 土器出土状況



1. 4区 全景
（東から）



2. 3-1土坑 土器出土状況



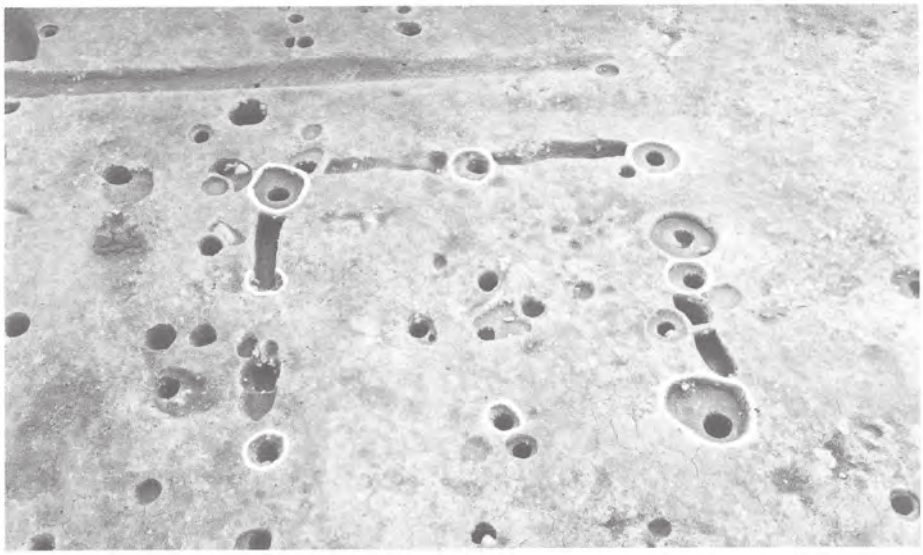
1. 全景（南から）



2. 4溝（南から）



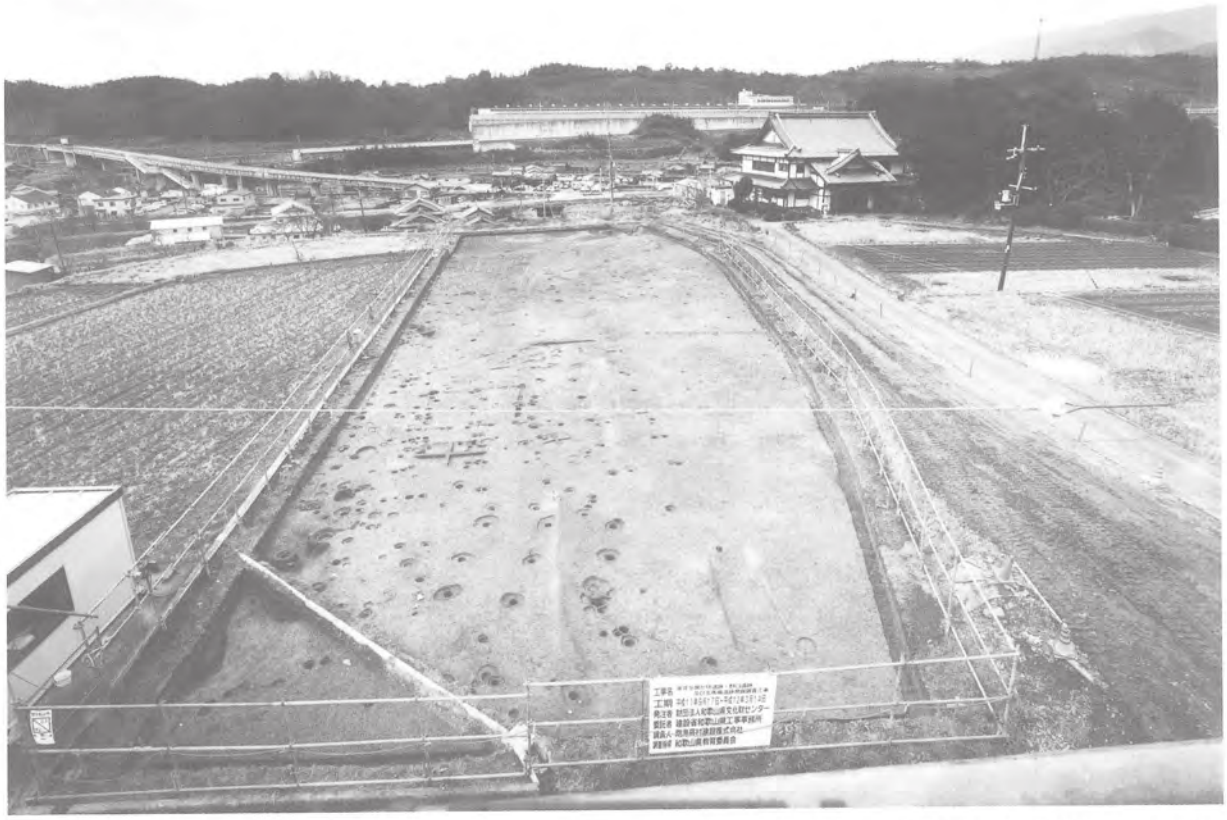
1. 1区 全景
（東から）



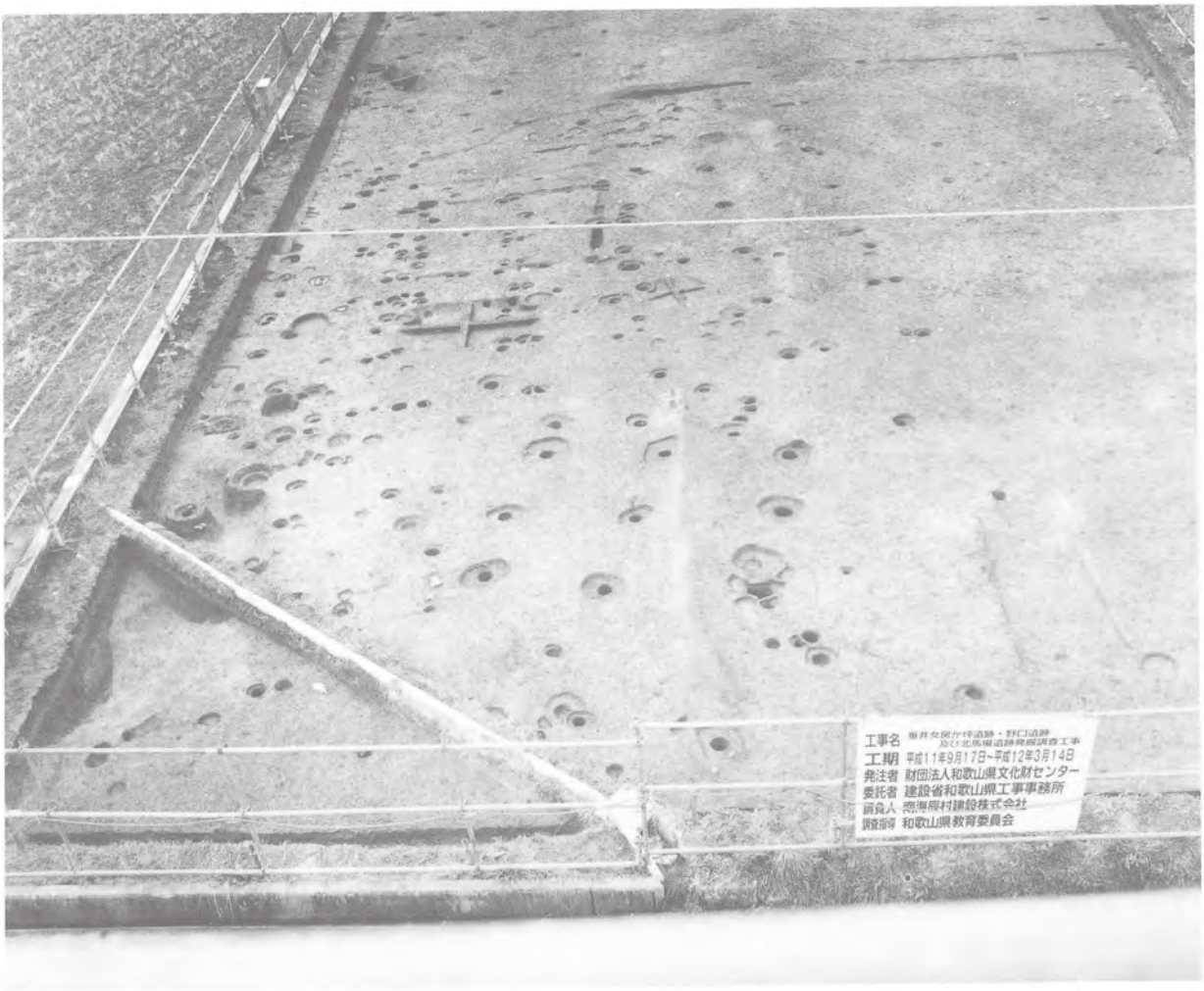
2. 掘立柱建物 2
（南から）



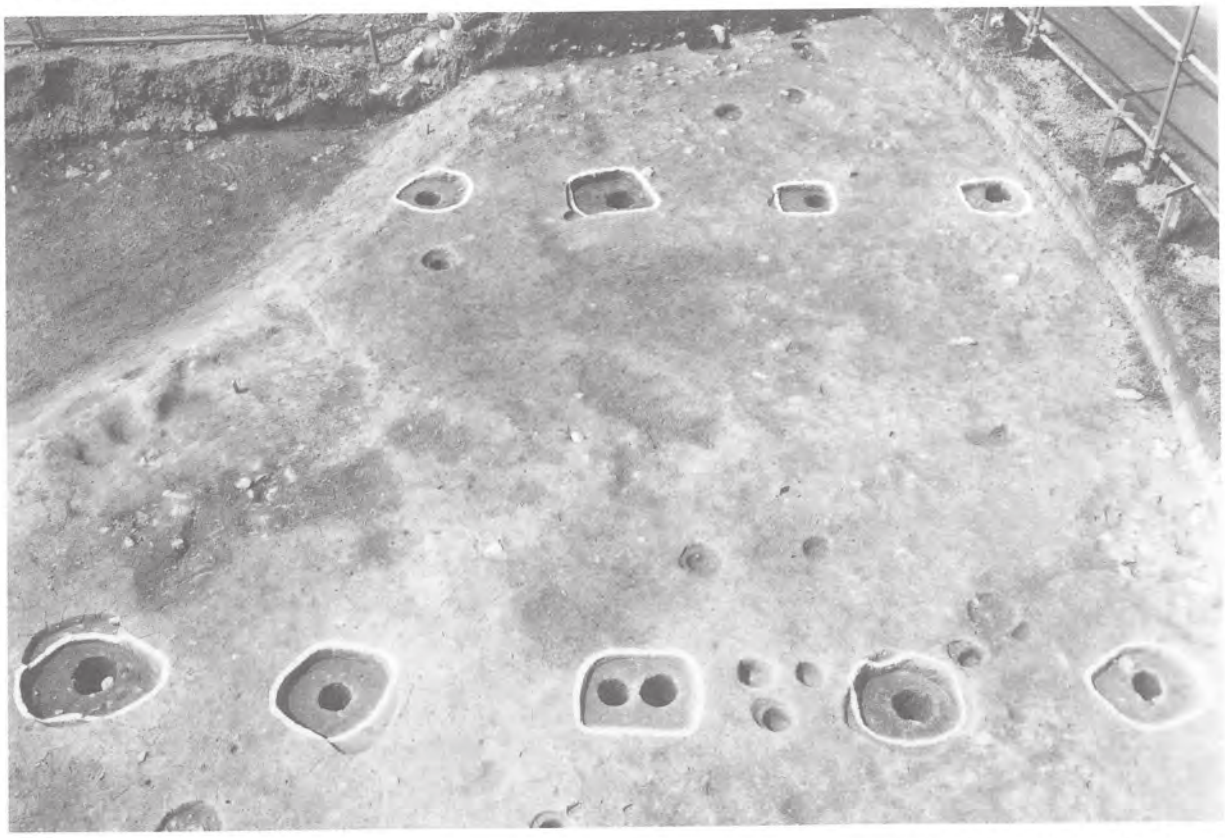
3. 掘立柱建物 3
（西から）



1．2区（1次A区）全景（東から）



2．2区 南東部（東から）



1. 掘立柱建物 4（東から）



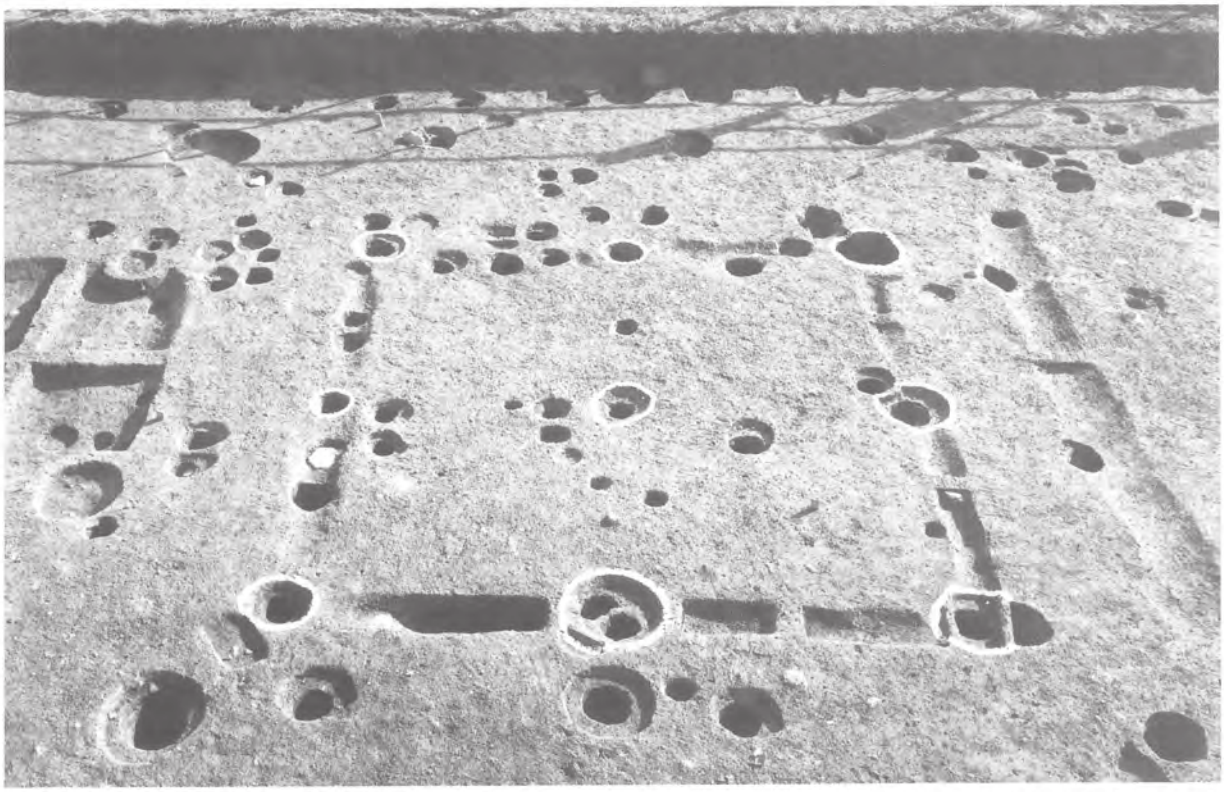
2. 掘立柱建物 6・7（南から）



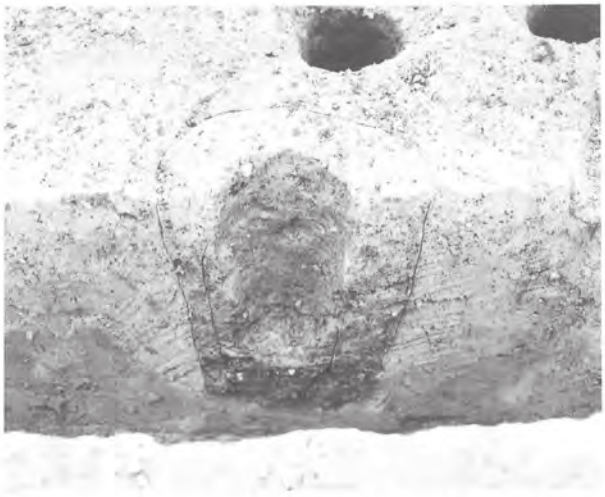
3. 掘立柱建物 8（北から）



1. 掘立柱建物 9 （北から）



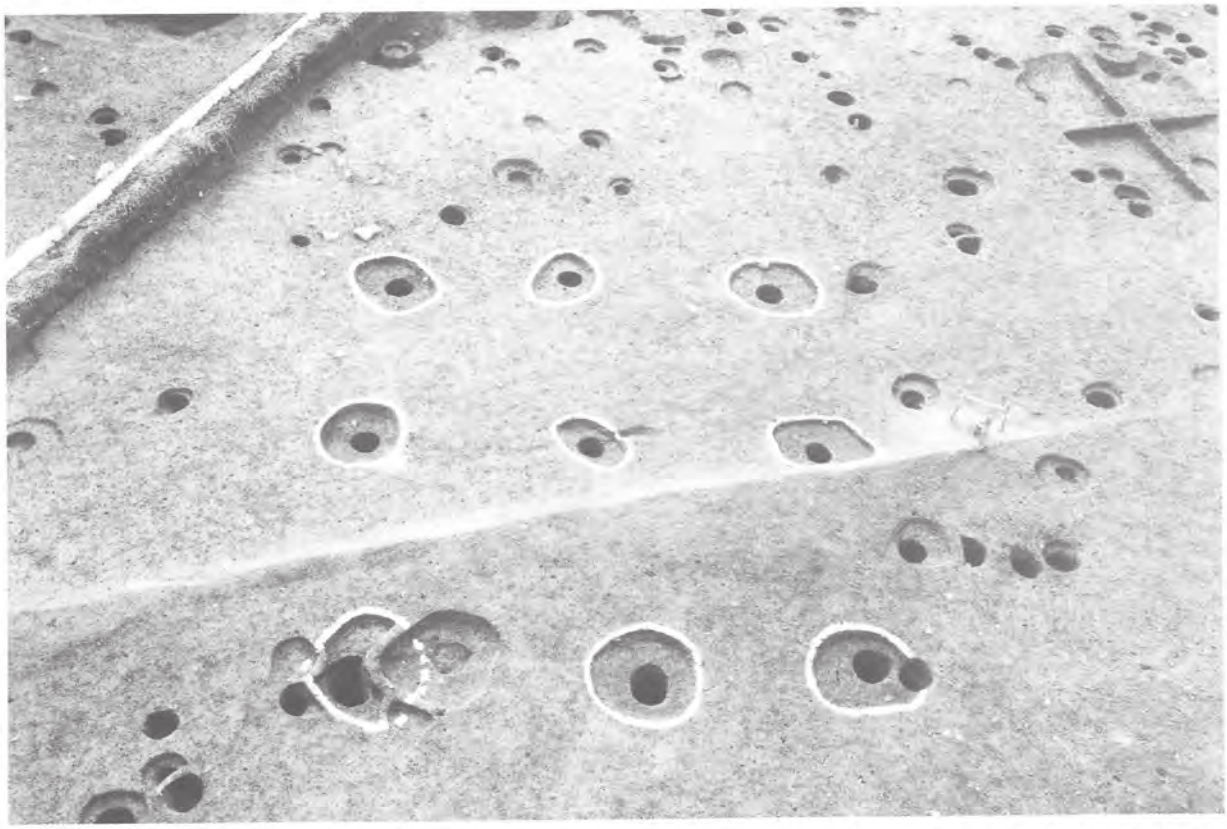
2. 掘立柱建物10･11 （北から）



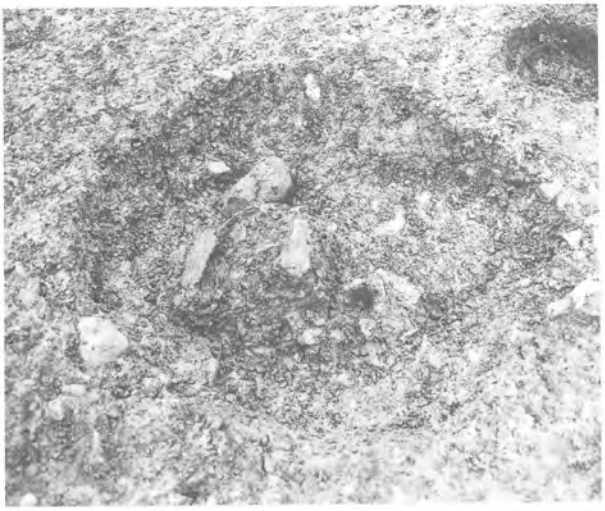
3. 掘立柱建物11 柱穴断面



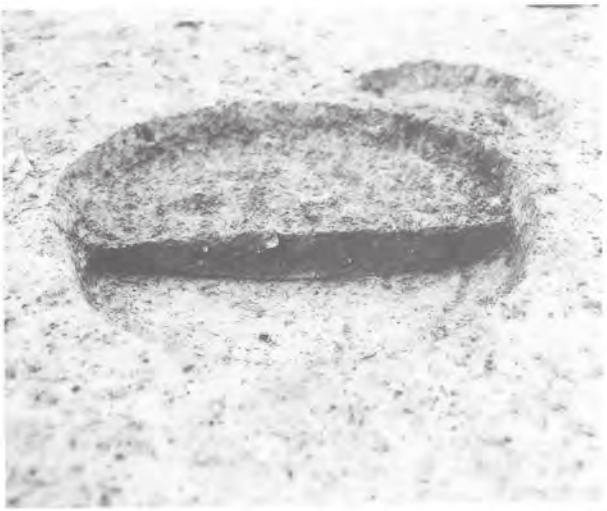
4. 掘立柱建物11 柱穴断面



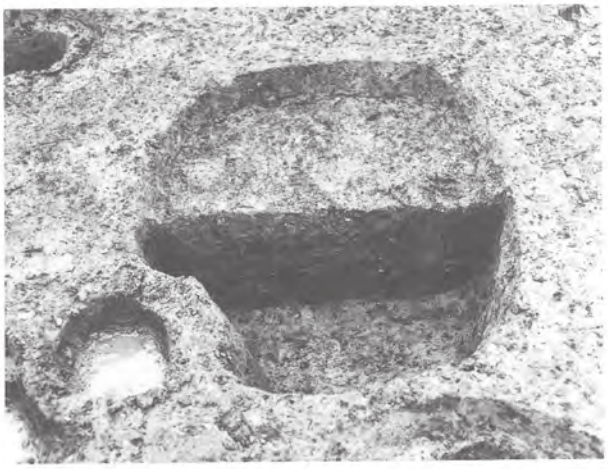
1. 掘立柱建物13（北から）



2. 2-254土坑 土器出土状況



3. 2-451土坑（西から）



4. 2-512土坑（西から）



5. 2-67土坑（東から）



1．3区 全景（東から）



2．3区 西半部（東から）



1. 掘立柱建物14（東から）



2. 掘立柱建物15（東から）



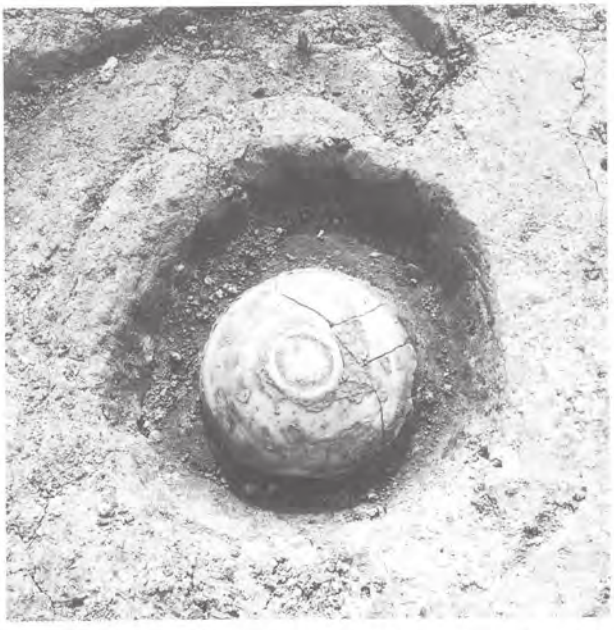
3. 掘立柱建物16（東から）



4. 3-23ピット（北から）



5. 3-48地鎮遺構（西から）



6. 3-88ピット（東から）



1．4区 全景（西から）



2．4区 北西部（南から）



1. 掘立柱建物17（南から）



2. 掘立柱建物19（南から）



1. 掘立柱建物20（南西から）



2. 掘立柱建物21（南西から）



1. 4-1180竪穴住居（北西から）



2. 4-1160土坑（南東から）



3. 4-1644土坑（南西から）



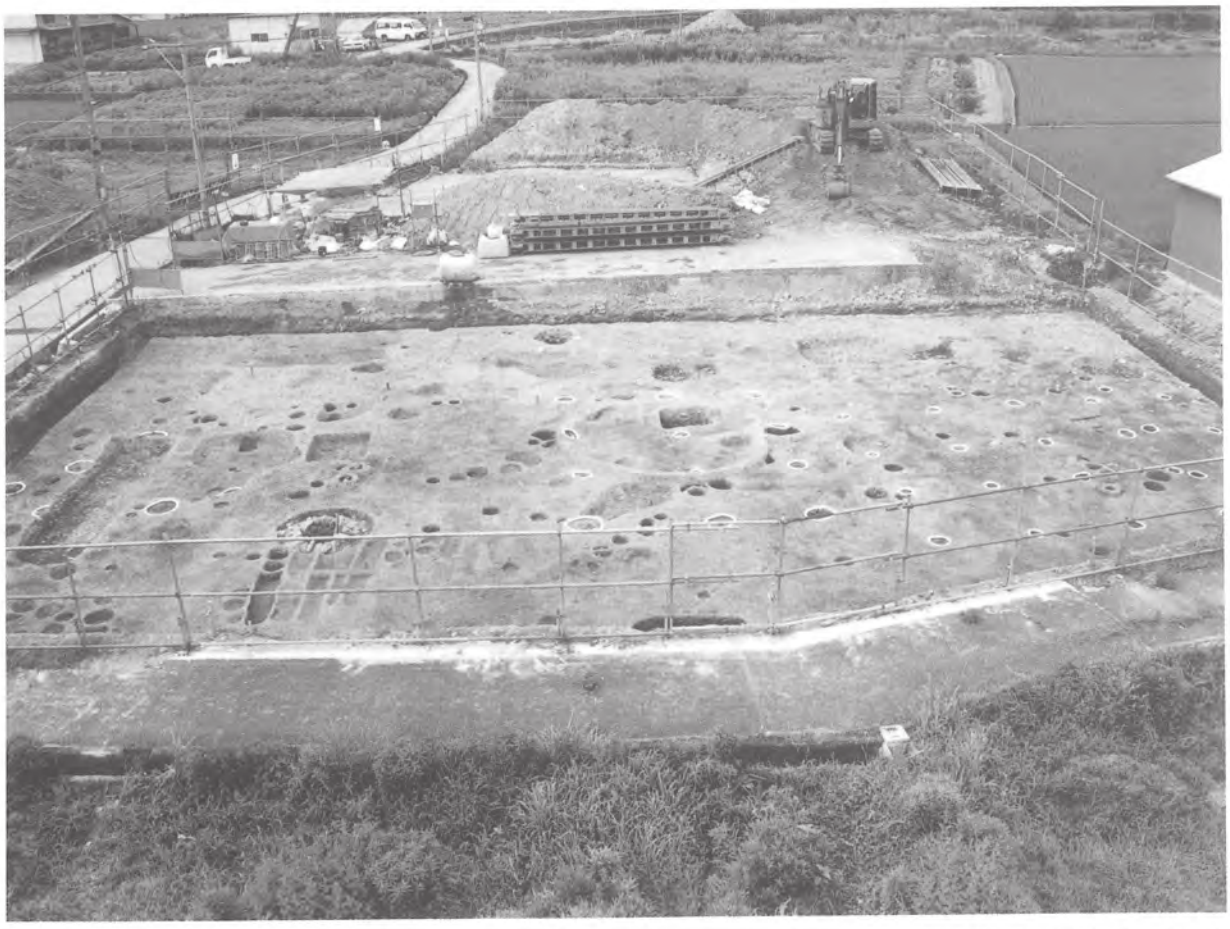
4. 4-1643土坑（東から）



5. 4-1643土坑断面



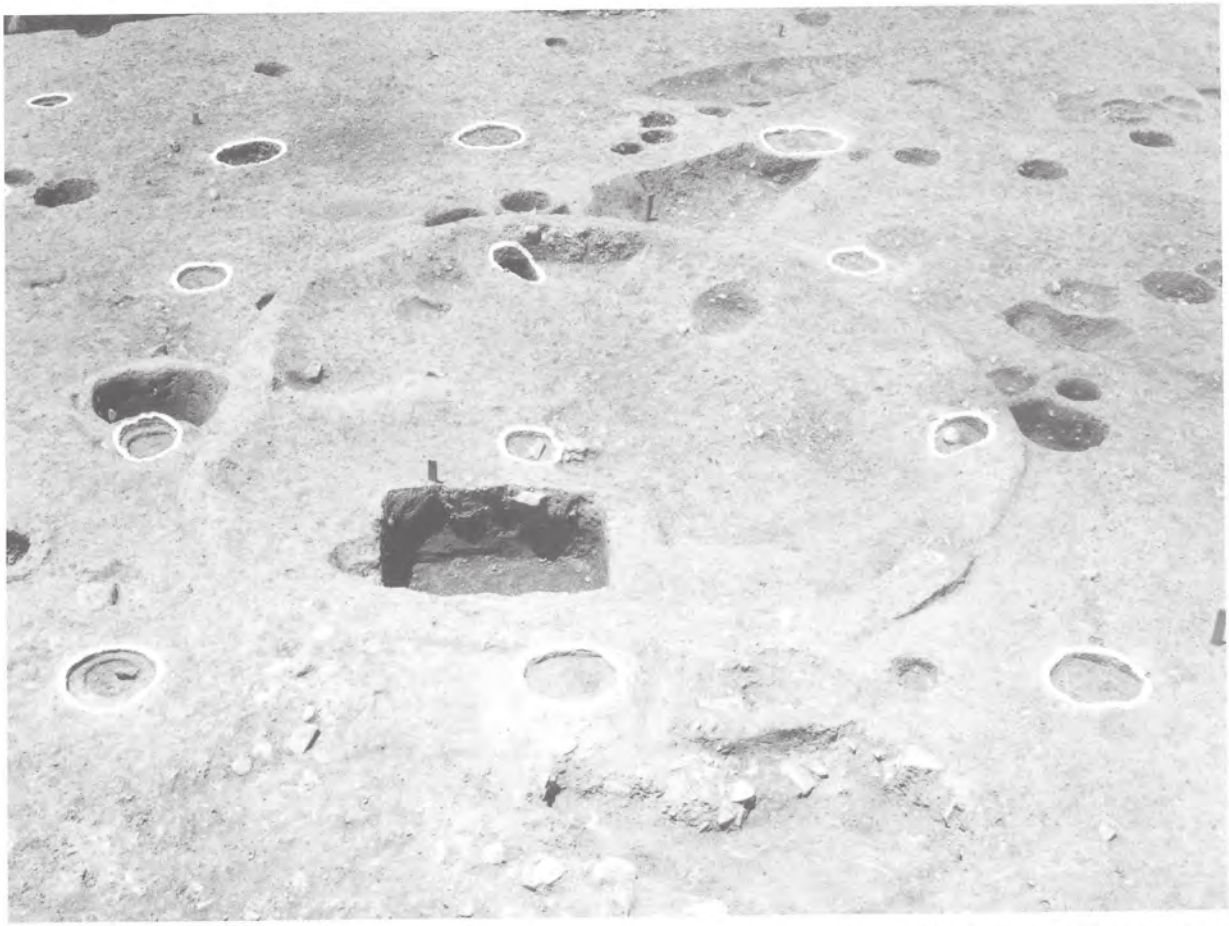
1．6区 全景（北から）



2．6区 全景（西から）



1. 掘立柱建物23（南西から）



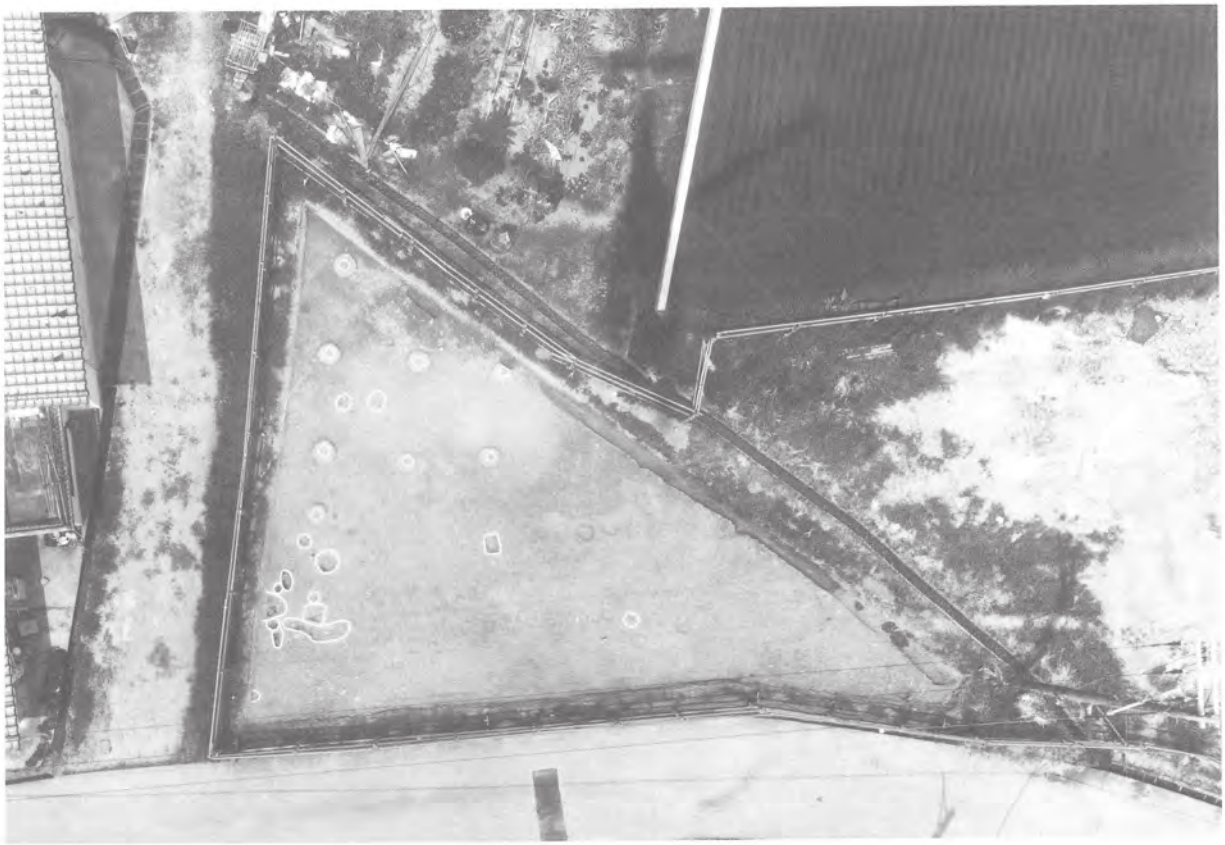
2. 掘立柱建物24･6-6土坑（東から）



1. 掘立柱建物25（北から）



2. 掘立柱建物26（北から）



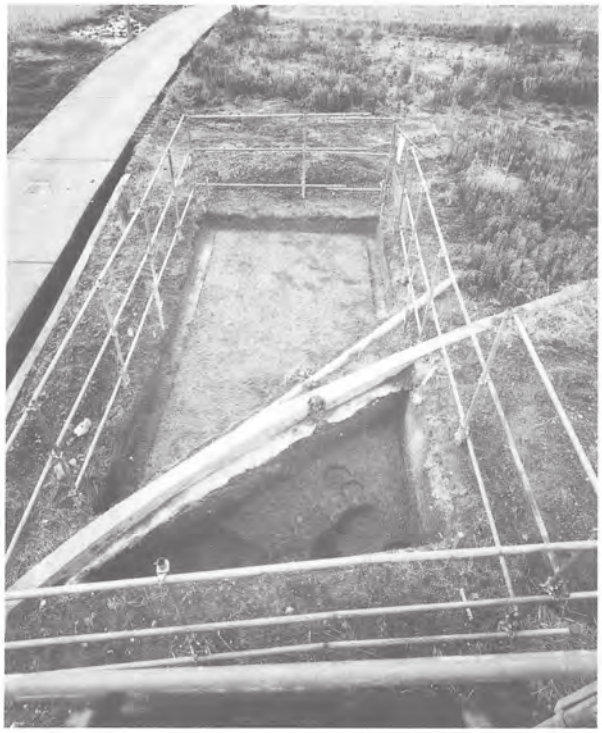
1．5区 全景
（航空写真・上が北）



2．7区 全景
（航空写真・上が北）



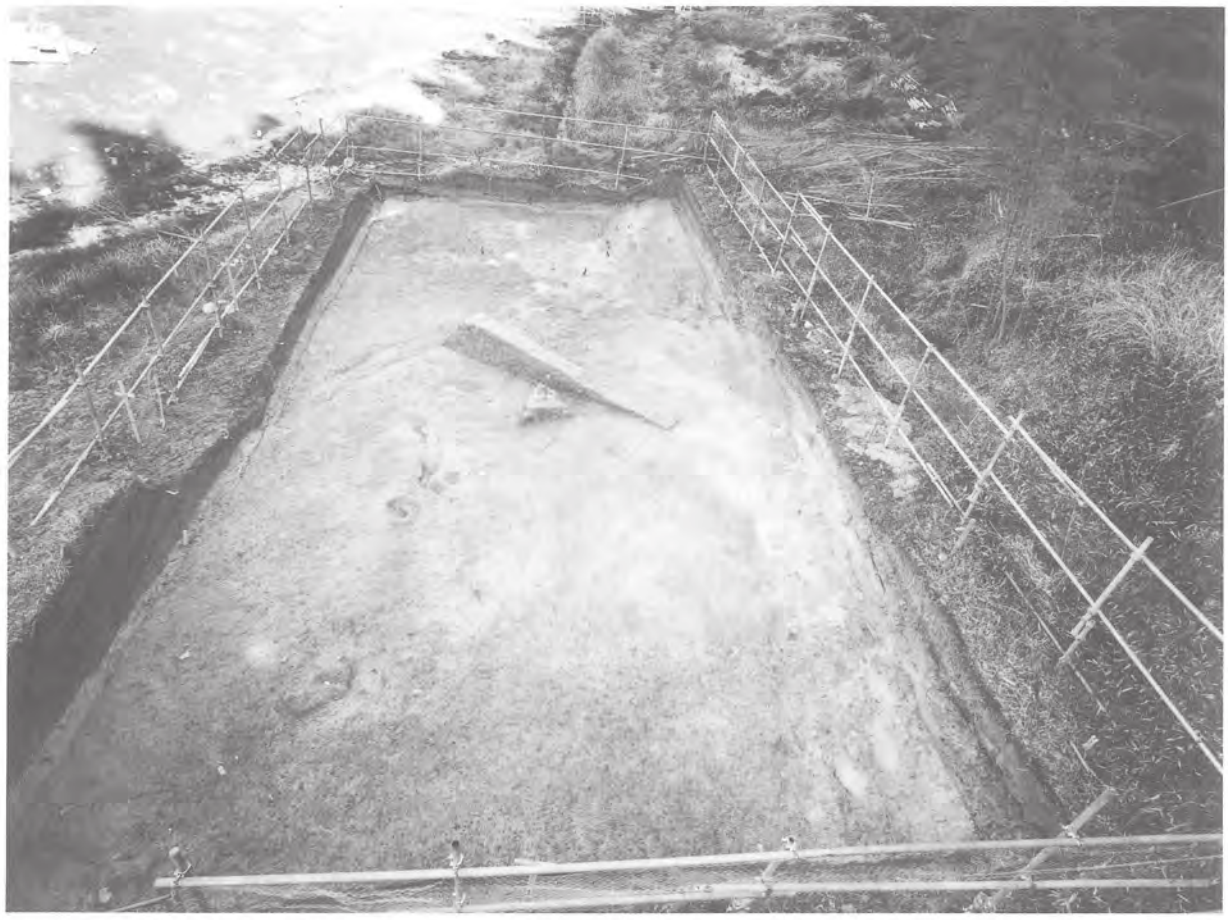
1．8区（S）全景（東から）



2．8区（N）全景
（東から）



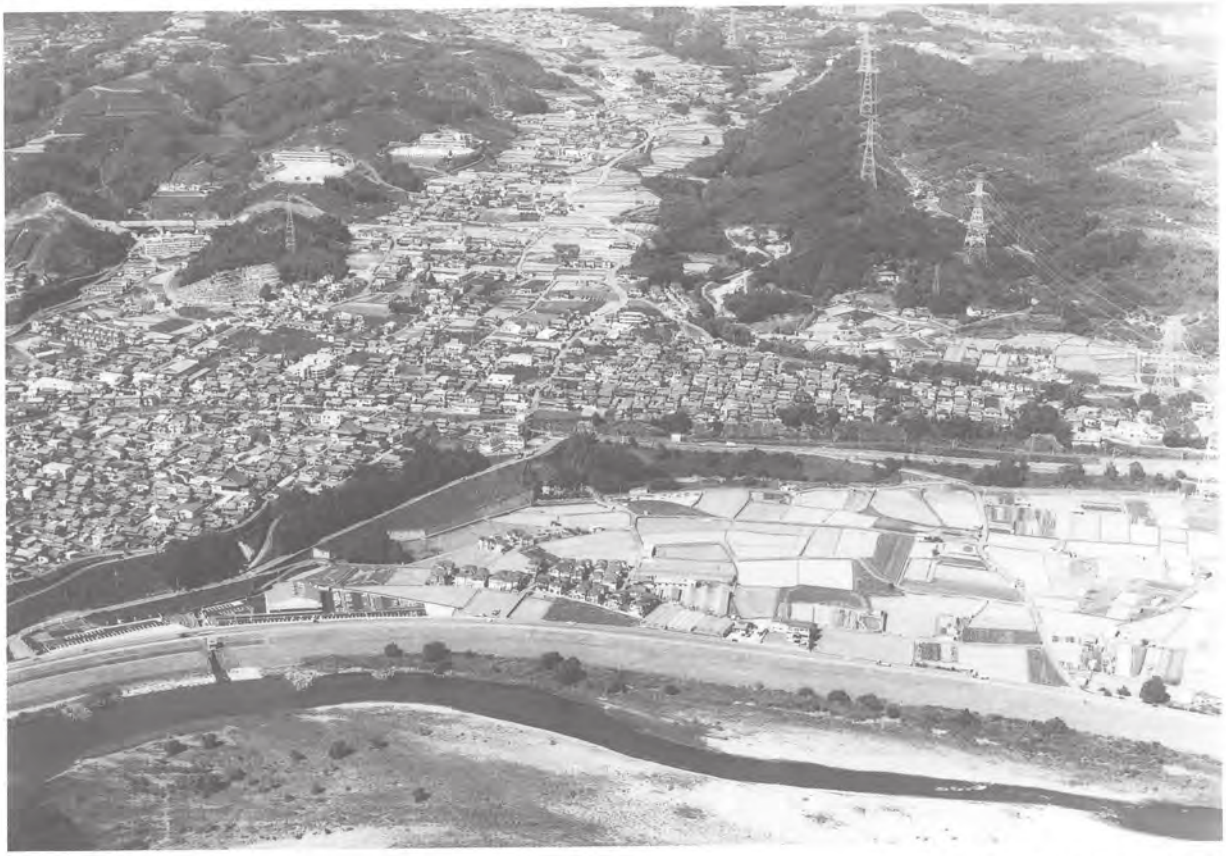
3．9区 全景（航空写真・上が北）



1. 10区 全景
（南から）



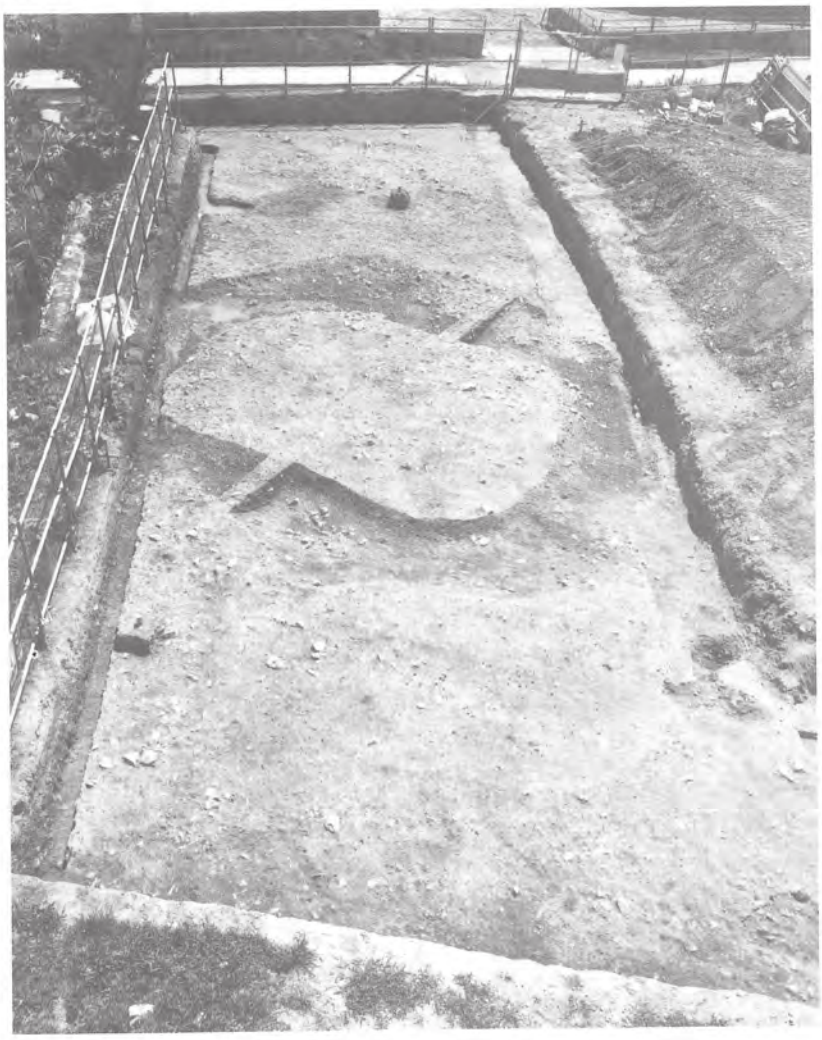
2. 11区 全景
（南西から）



1. 遺跡遠景（南から）



2. 調査地全景（北から）



1. 5-1区 側道部
（西から）



2. 507方形周溝墓（東から）



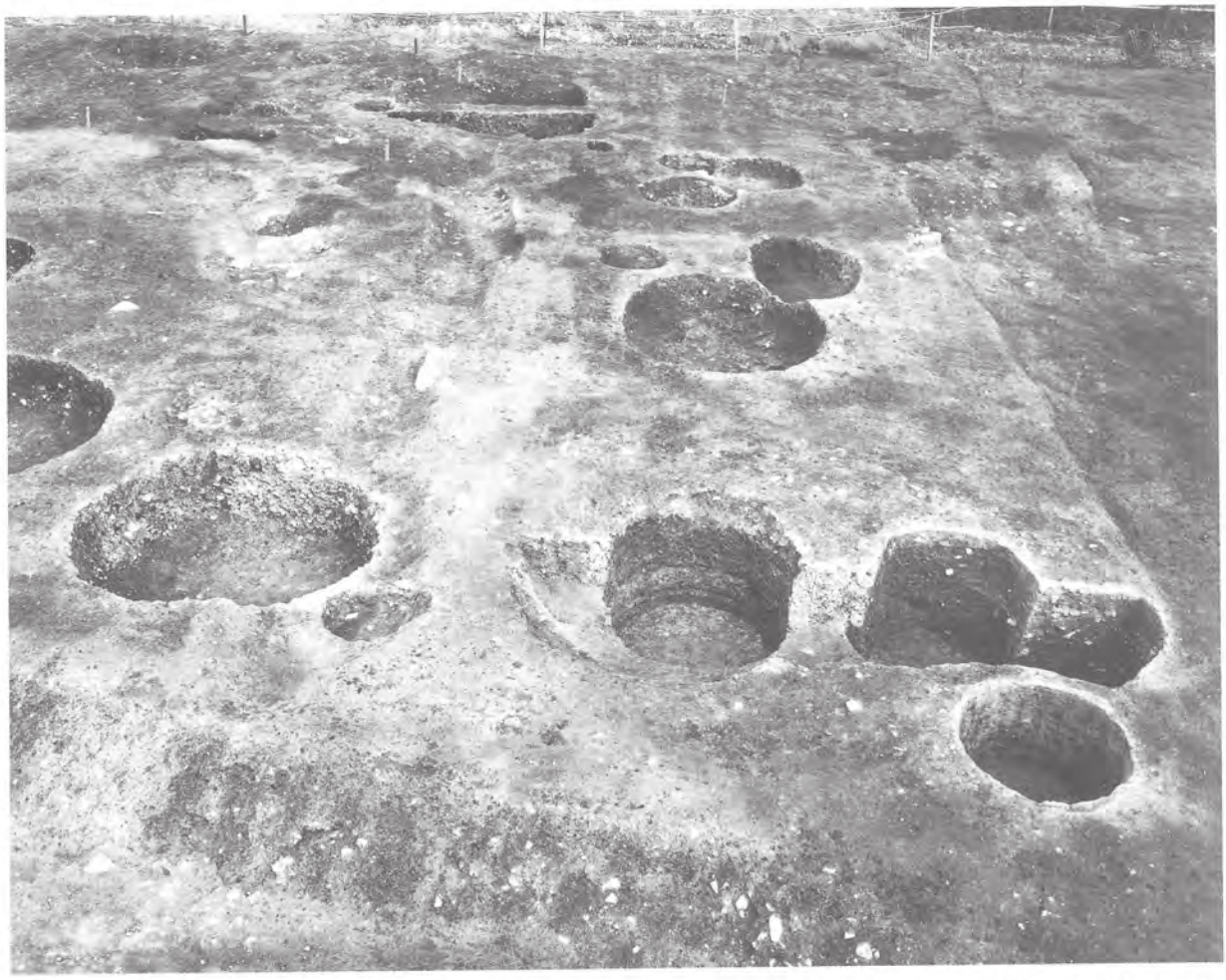
1. 5-1区 全景（南から）



2. 5-2区 全景（南から）



3. 502方形周溝墓土層



1．1区 第1遺構面検出遺構（南から）



2．同（南から）



1．1・2土坑（北東から）



2．3土坑土層



6．5土坑検出状況（北西から）



3．3土坑（北西から）



4．3土坑断面



5．同 細部



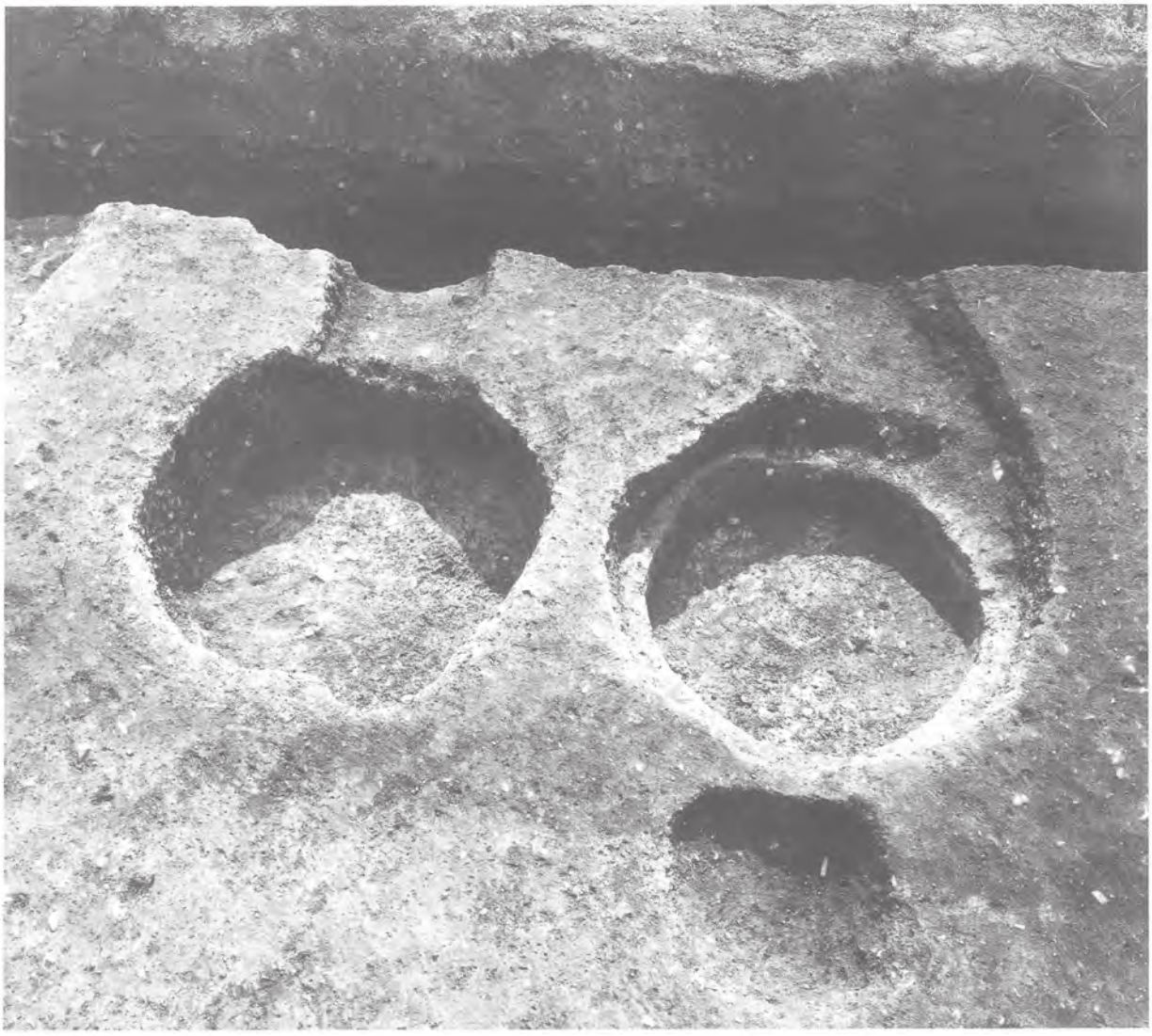
7．5土坑断面



1．4・5土坑（西から）



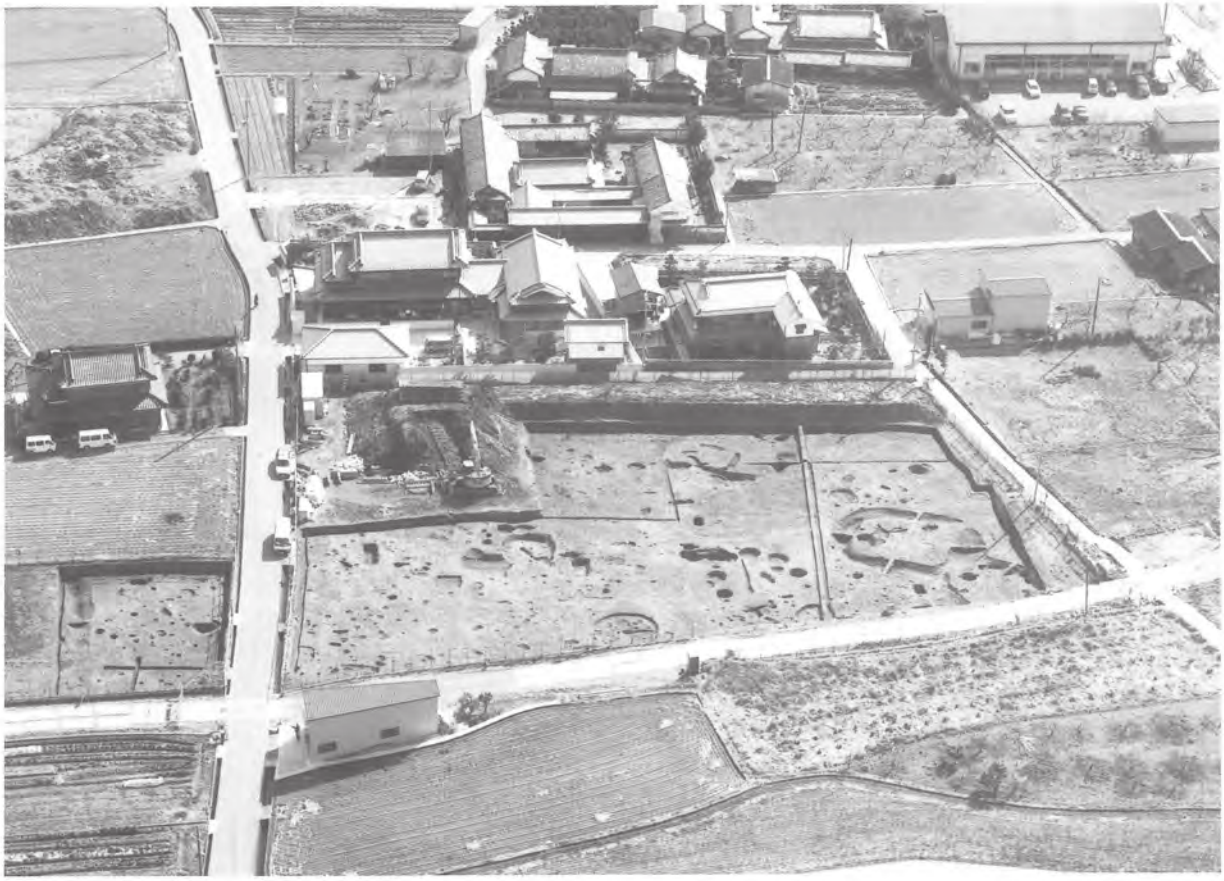
1．50～53土坑（西から）



1．57･63土坑（北から）



2．671石組遺構（南から）



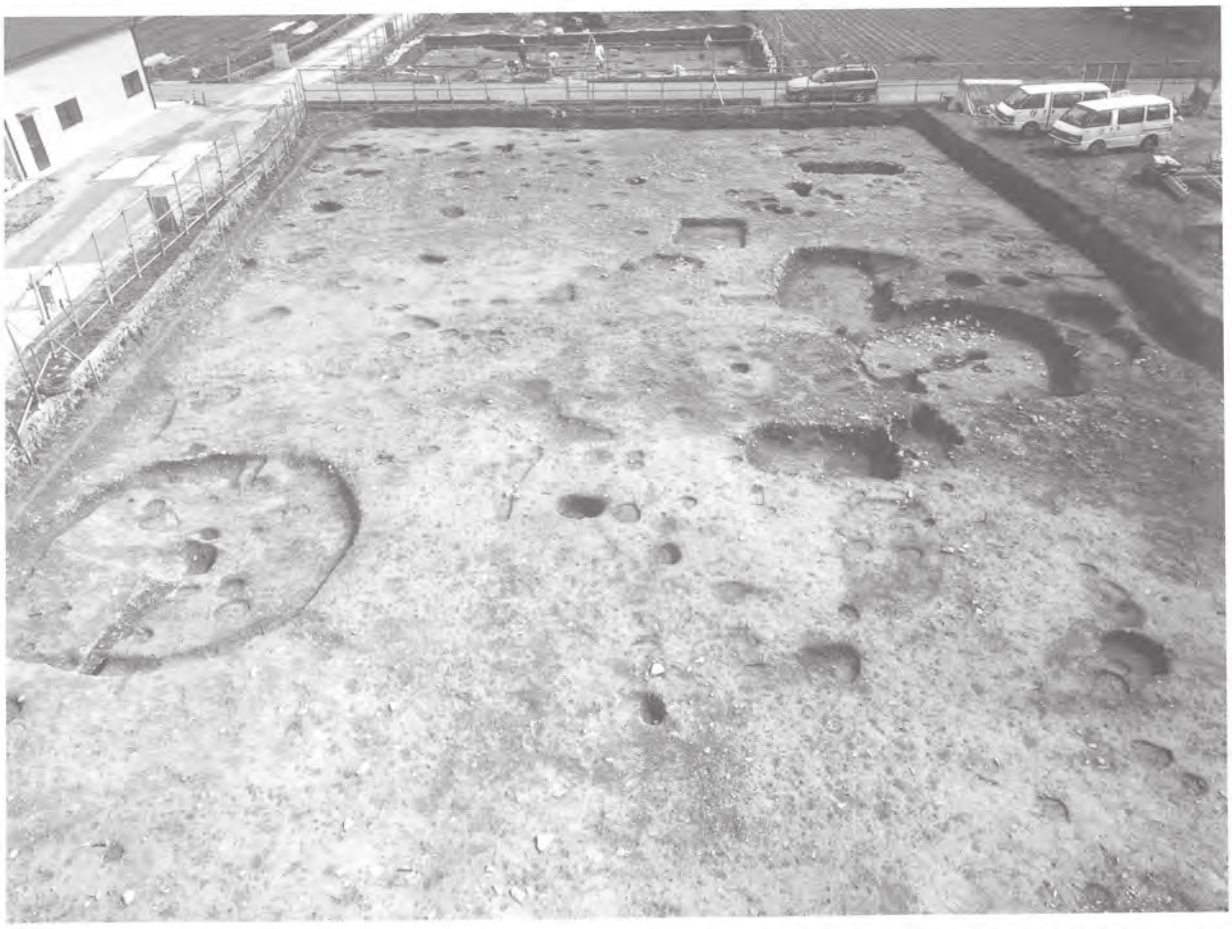
1．1・2区 第2遺構面 全景（上空北から）



2．同（航空写真・上が北）



1．6区（第2次調査）第2遺構面 全景（東から）



2．1区 第2遺構面 東半部（西から）



1．6区（第3次調査）
東半部（西から）



2．同 西半部（東から）



1．80竪穴住居（西から）



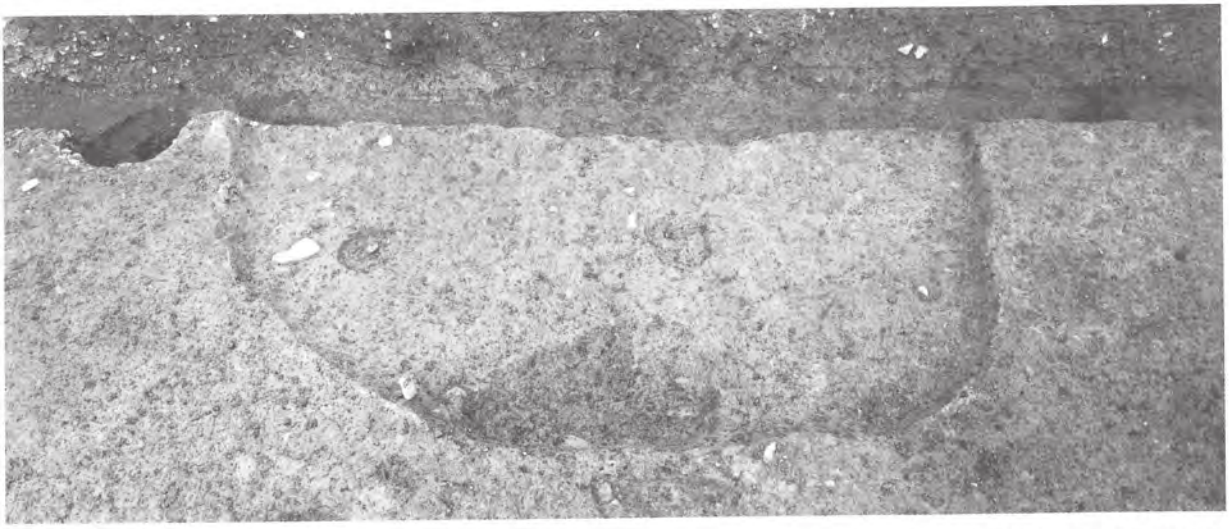
2．174竪穴住居（南から）



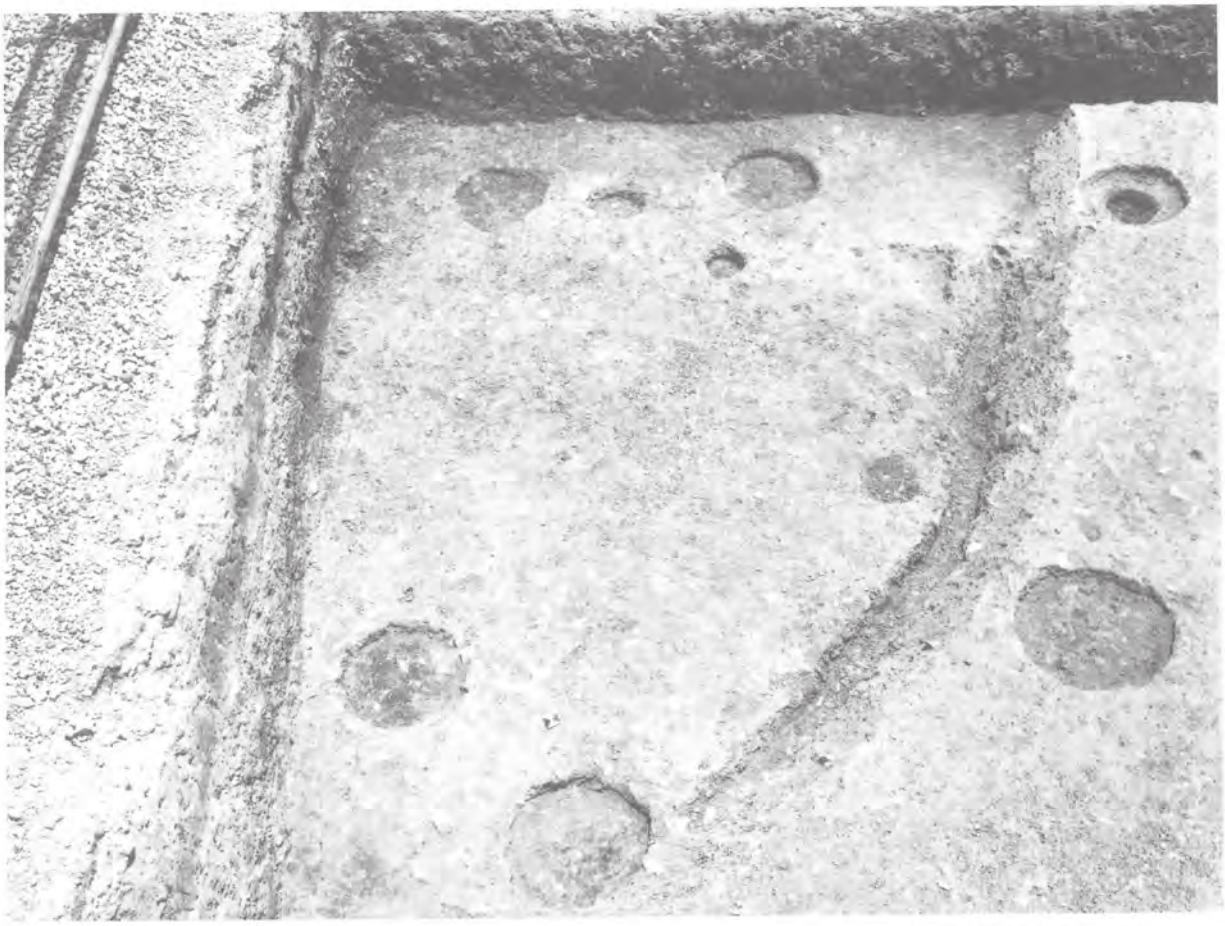
1．79竪穴住居（北東から）



2．同 土層



3．122竪穴住居（西から）



1．631竪穴住居（西から）



2．119竪穴住居（南から）



1. 90・91方形周溝墓（北東から）



2. 91方形周溝墓（第２次調査・東から）



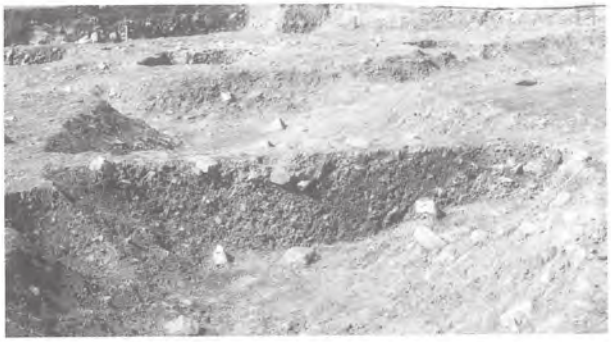
1. 90方形周溝墓（東から）



2. 同 土層（B'-B）



3. 同 土層（C-C'）



4. 同 土層（D'-D）



5. 89方形周溝墓（西から）



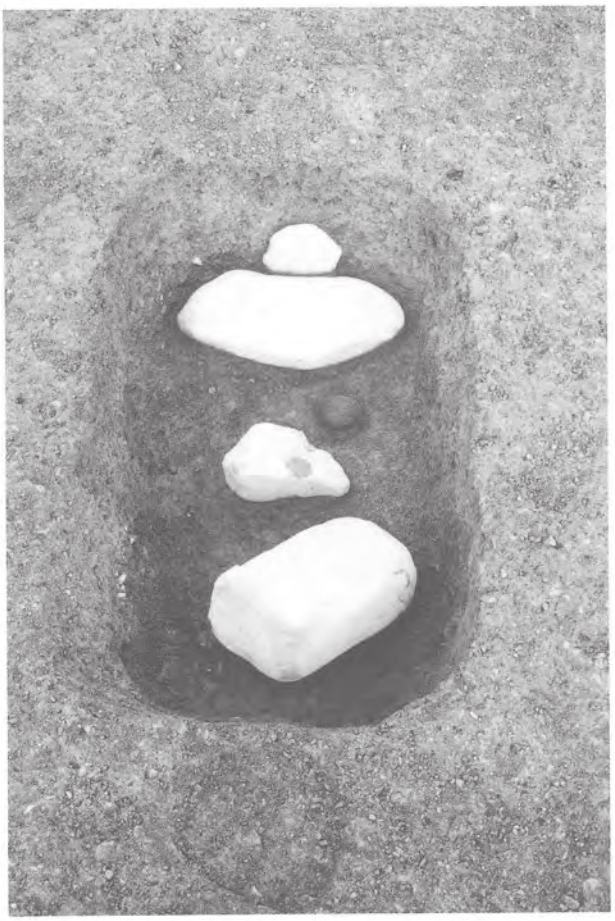
1. 掘立柱建物 1・2（西から）



2. 掘立柱建物 4（西から）



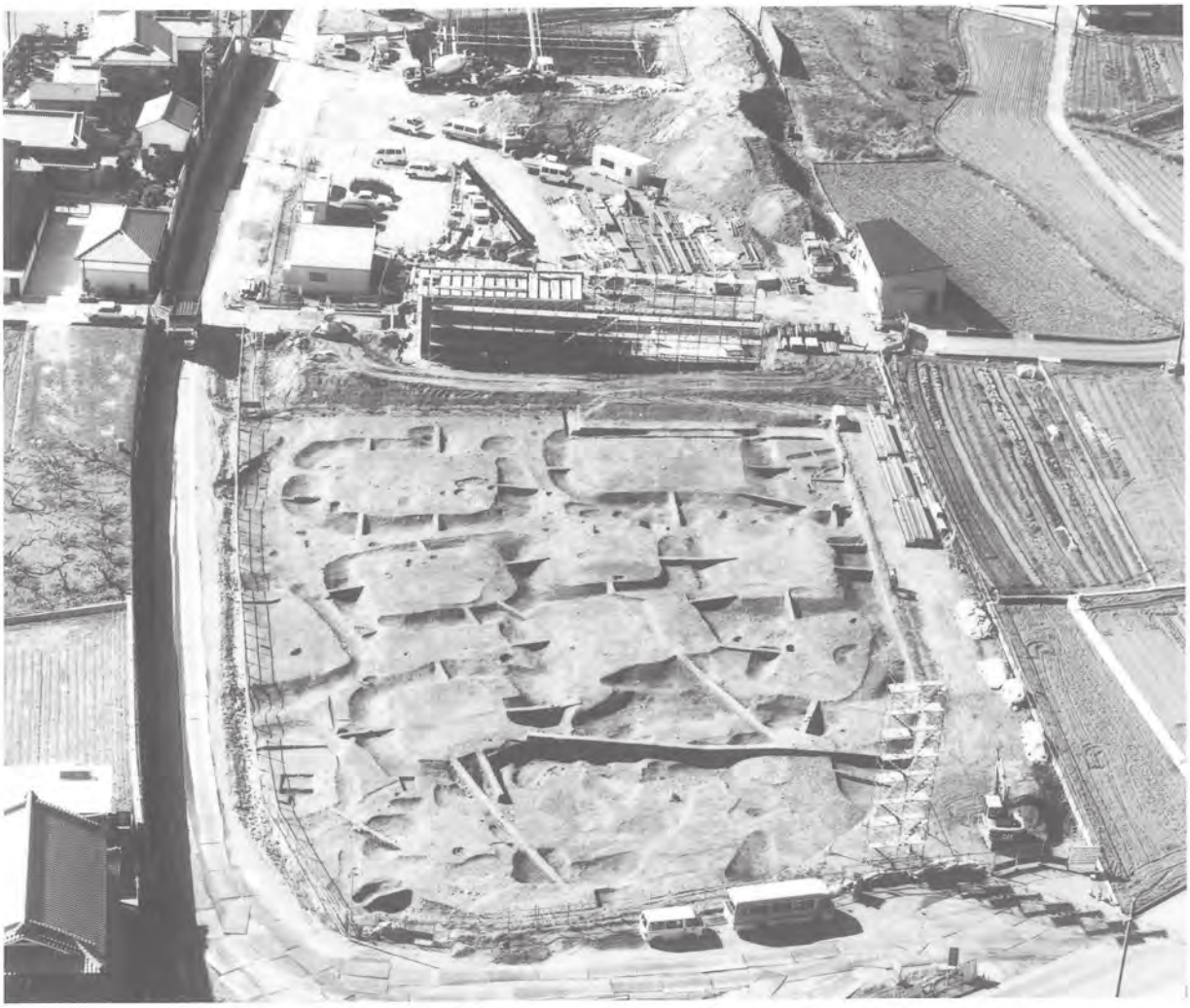
1．651土坑・649溝（東から）



2．92土坑（南から）



3．1区 第3遺構面 全景（西から）



1．7区（第2次調査・上空東から）



2．同（航空写真・上が北）



7区 進入路部 全景（上空東から）



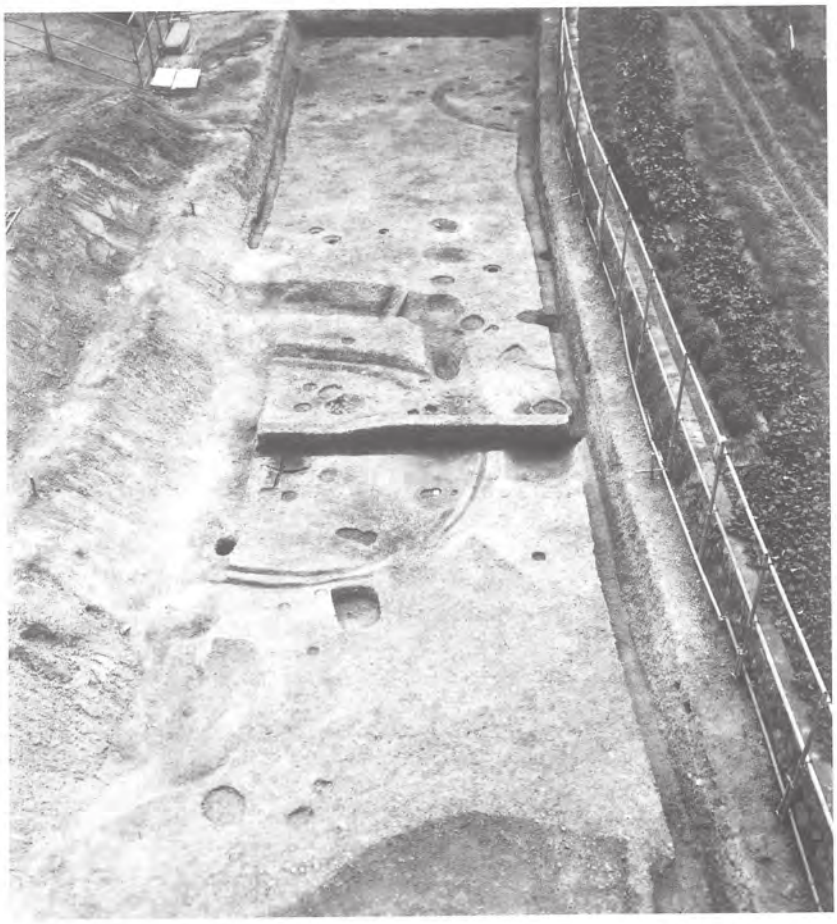
1．2区 全景（東から）



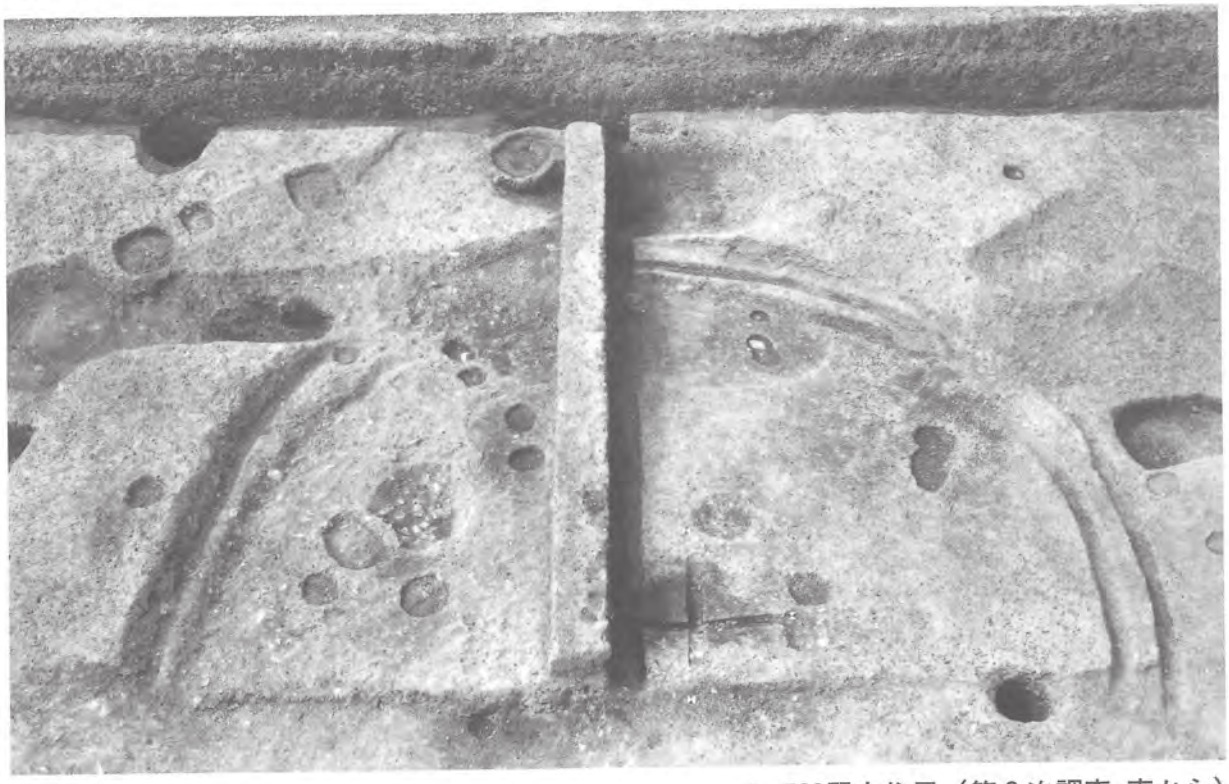
2．7区 カルバート部 全景（北から）



1．7区（第3次調査）東半部（西から）



2．同 西半部（東から）



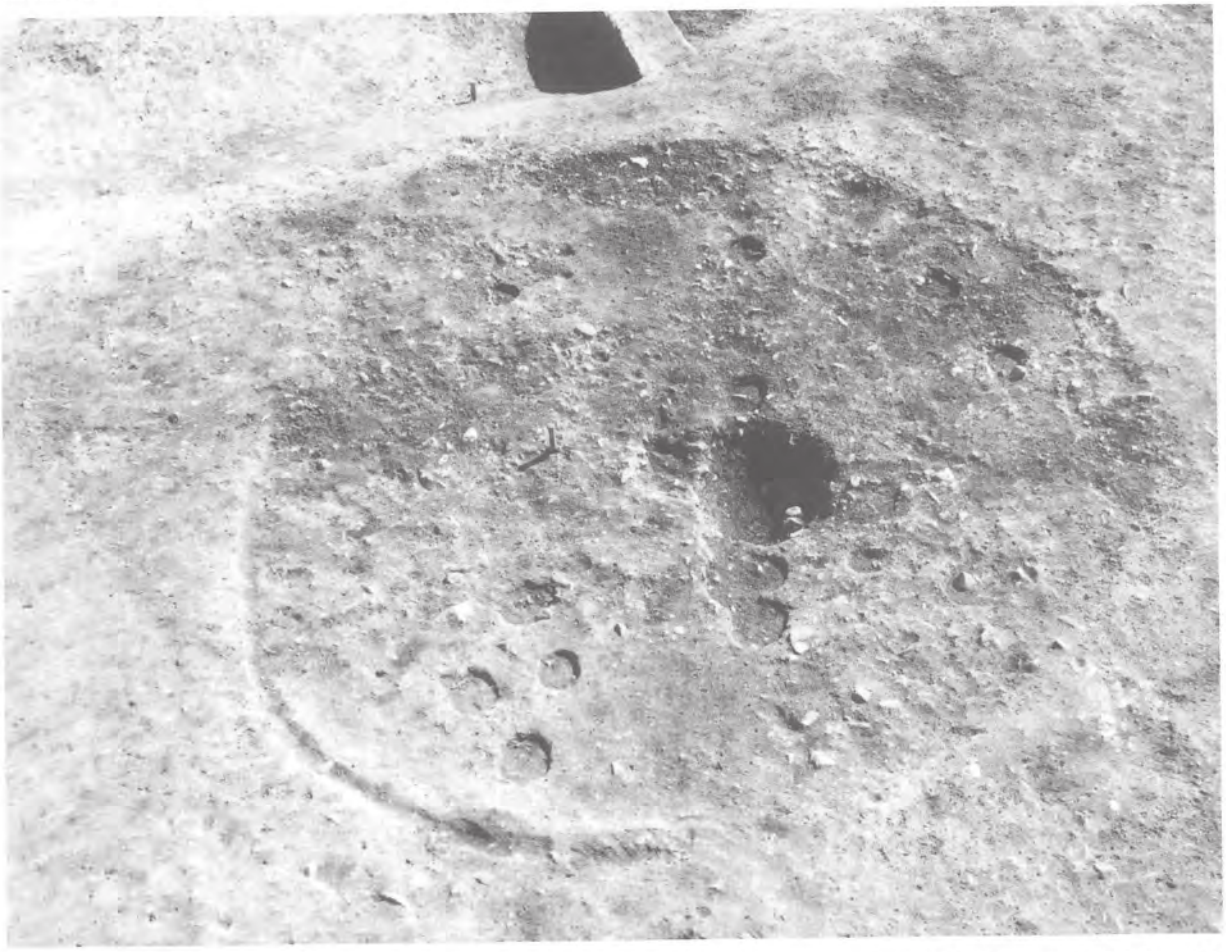
1. 760竪穴住居（第3次調査・南から）



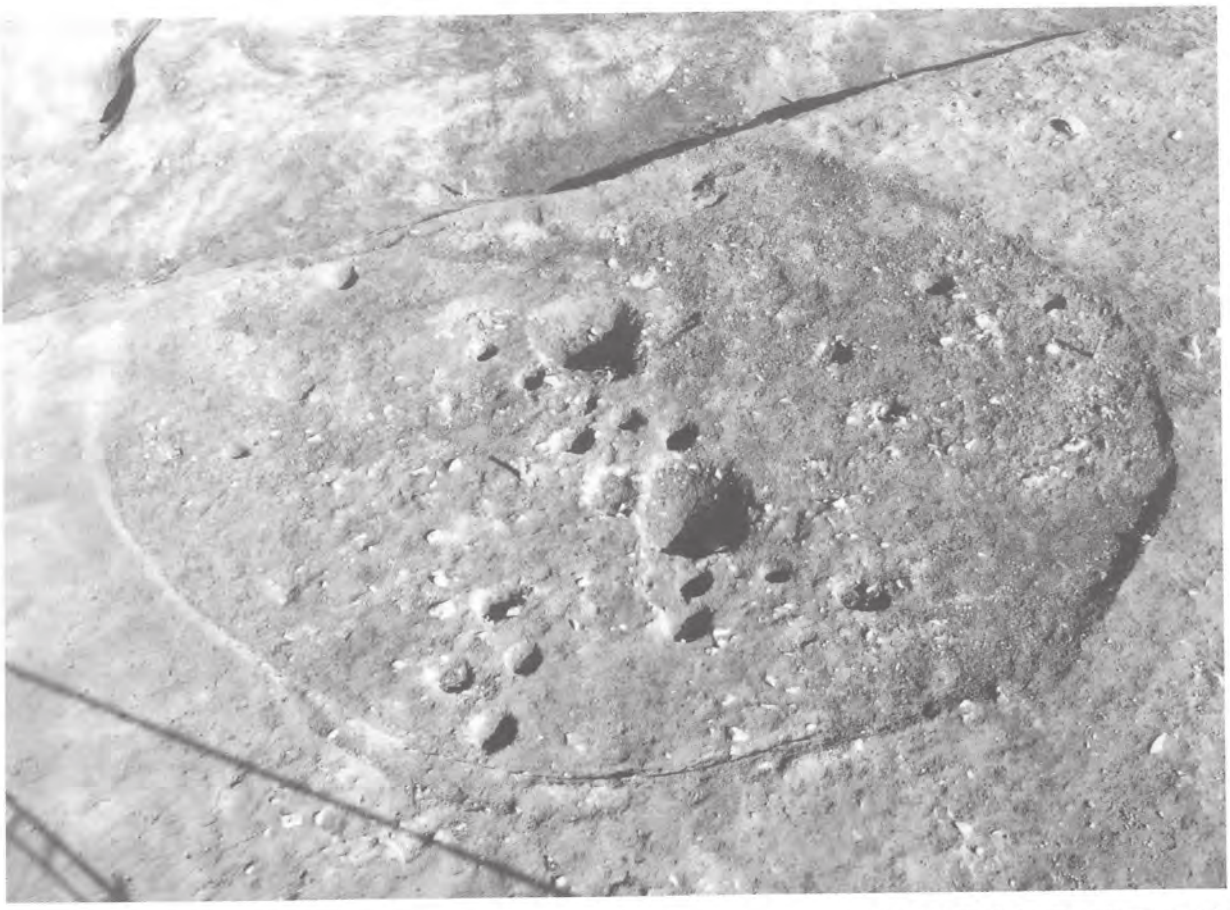
2. 同（第2次調査・北から）



3. 同 土層（第2次調査）



1. 821竪穴住居（北西から）



2. 822竪穴住居（北西から）



1．7区 方形周溝墓群 西半部（北東から）



2．同 東半部（北西から）



1．219方形周溝墓（南東から）



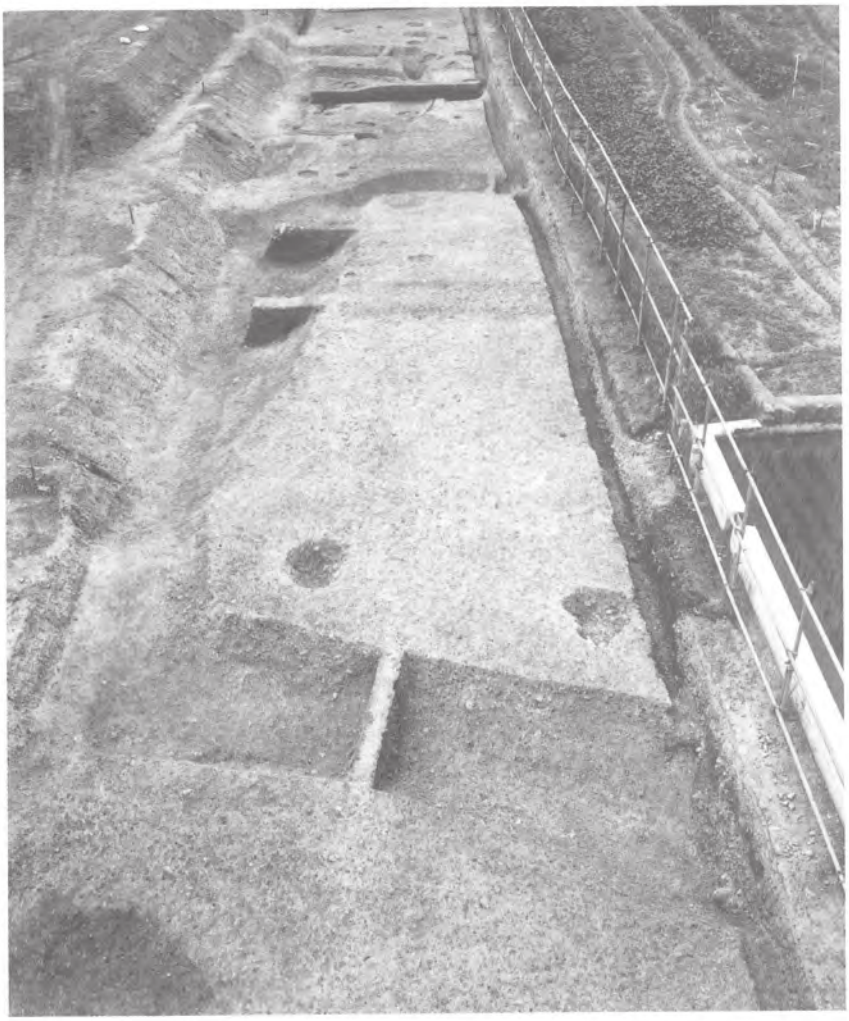
2．719方形周溝墓（北から）



1．702方形周溝墓（北東から）



2．遺構709土器出土状況（北から）



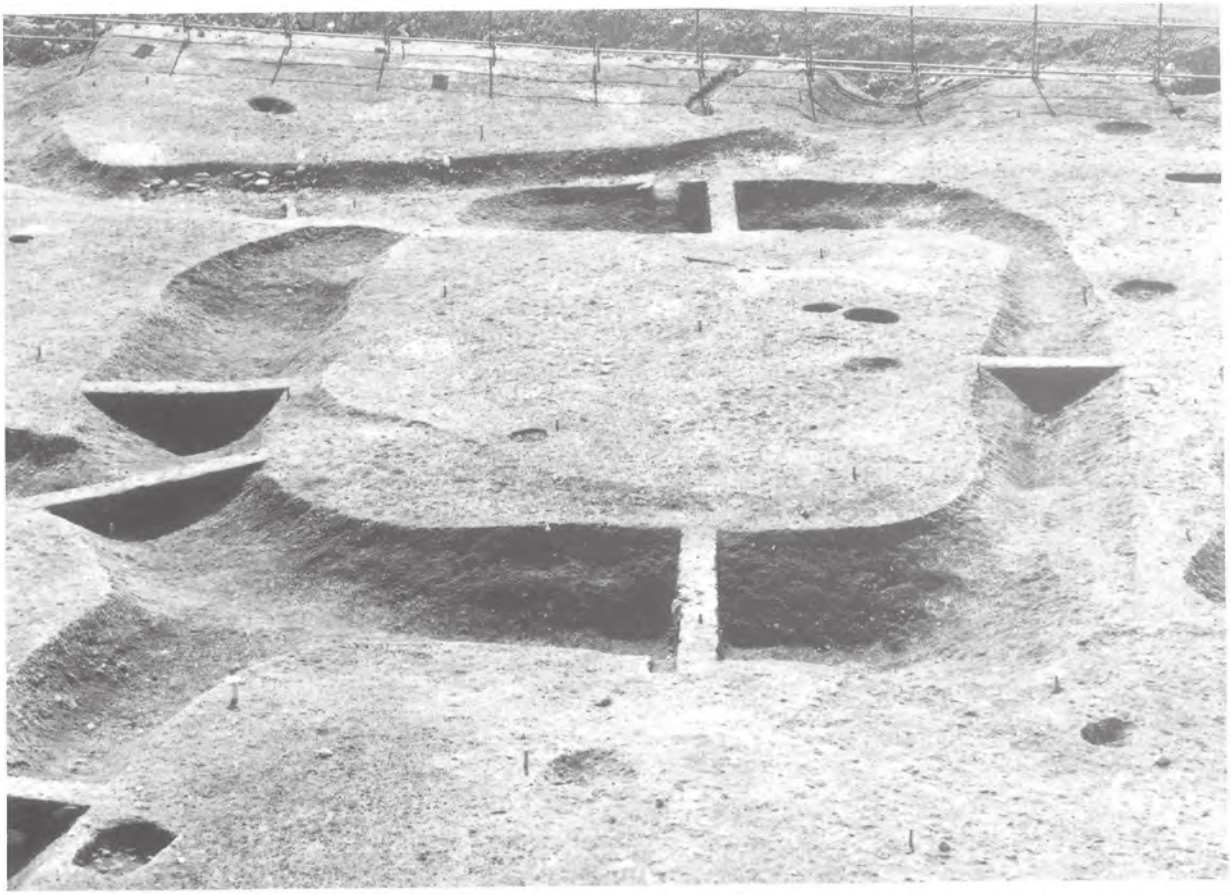
1．862方形周溝墓
（東から）



2．775方形周溝墓（北東から）



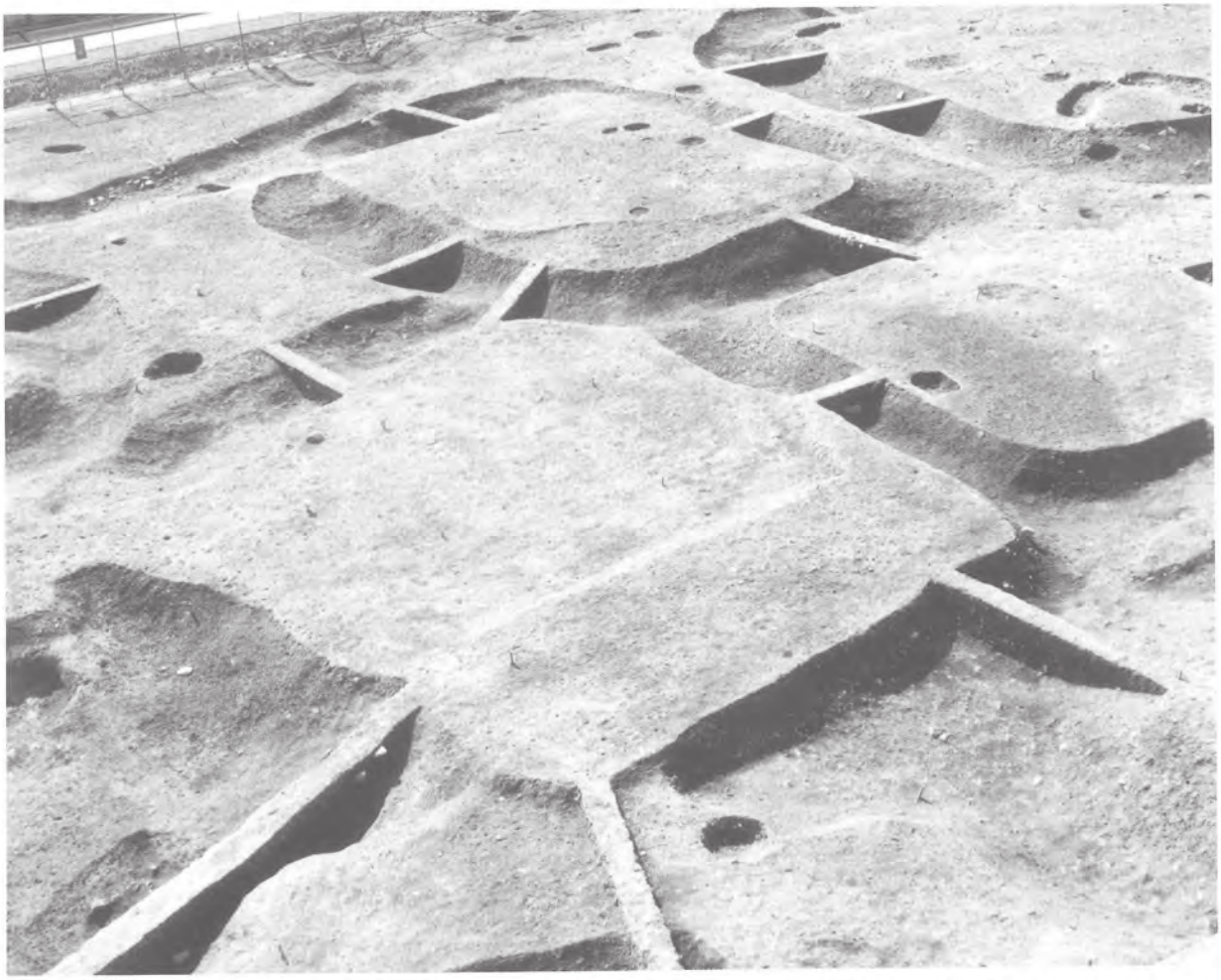
1．771・819方形周溝墓（北から）



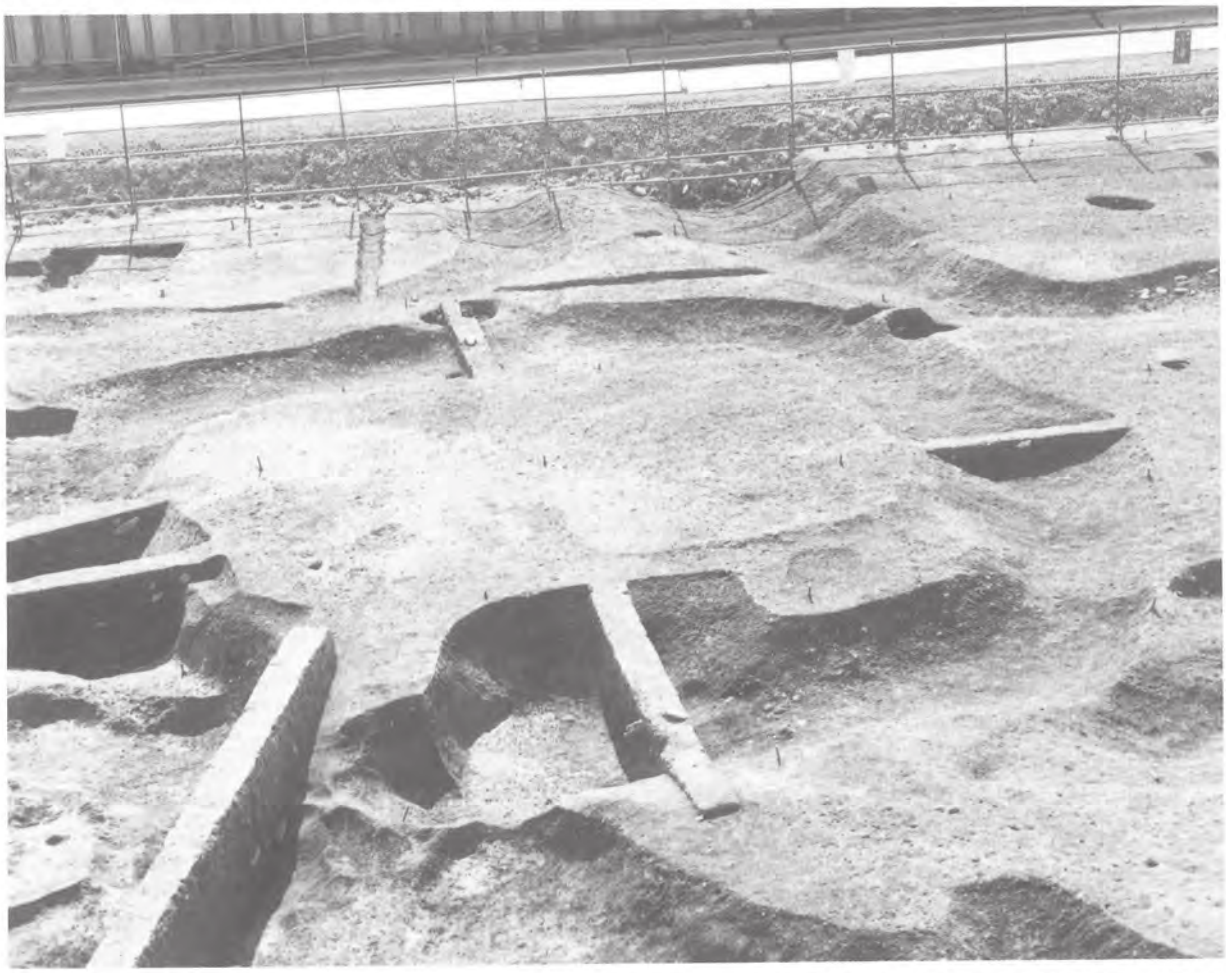
2．766方形周溝墓（北西から）



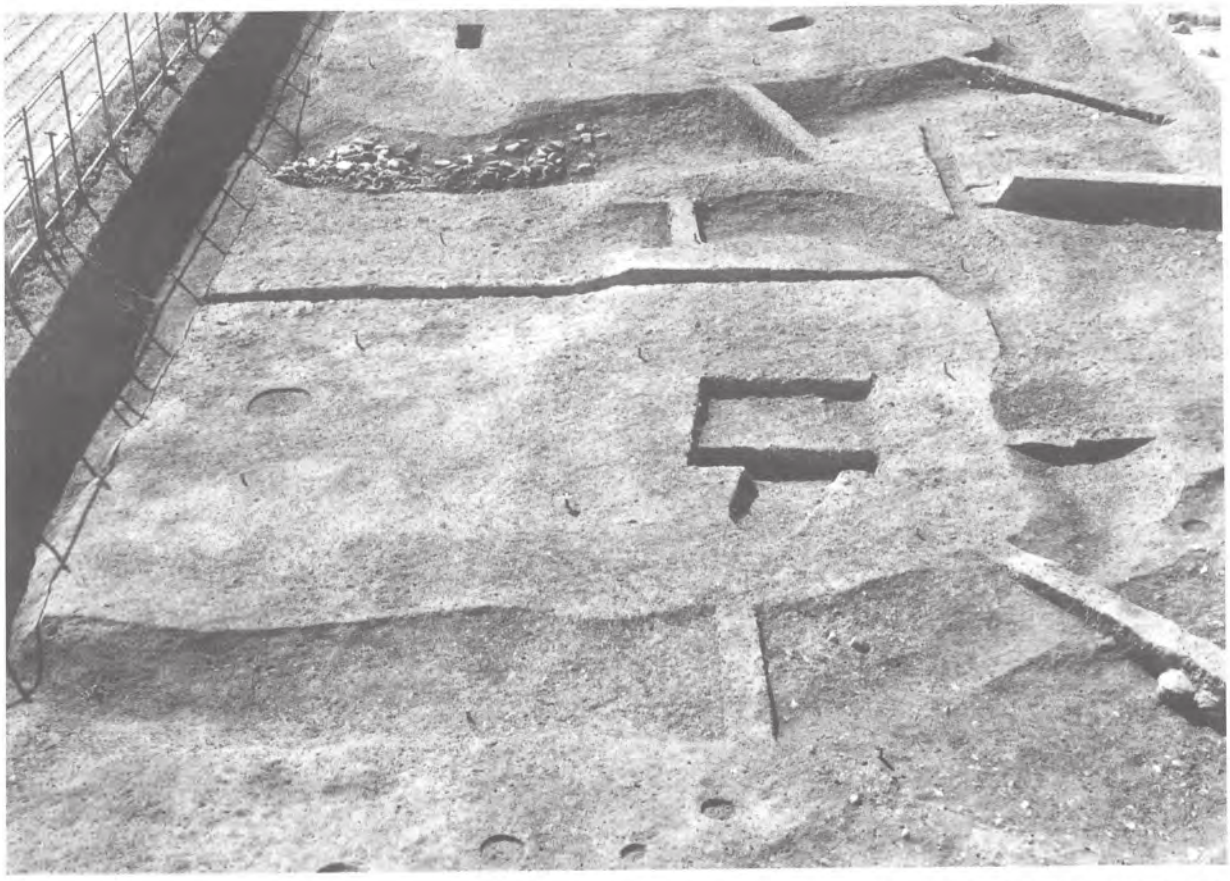
1．708方形周溝墓（北西から）



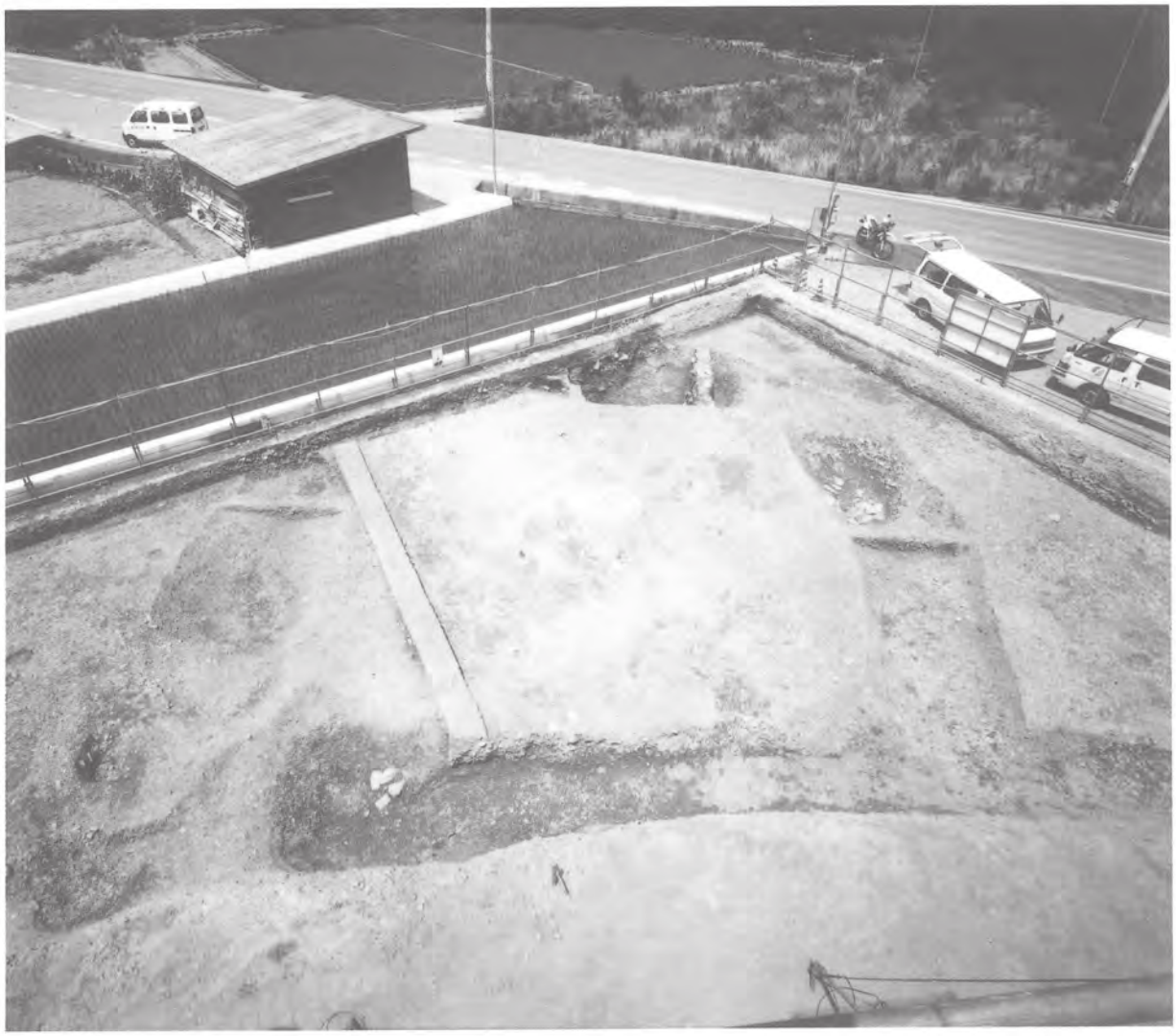
2．772・766方形周溝墓（北東から）



1．776方形周溝墓・794土坑（北から）



2．721方形周溝墓（東から）



1．868方形周溝墓（南西から）



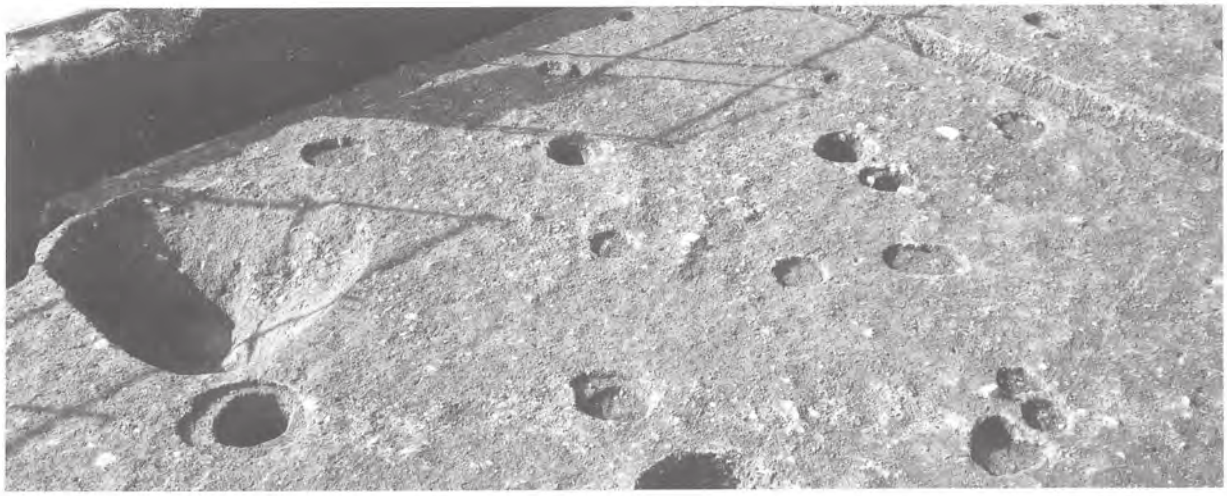
2．708方形周溝墓 集石部（北西から）



3．868方形周溝墓 集石部（東から）



1. 掘立柱建物 6・838竪穴住居（東から）



2. 掘立柱建物 7（南東から）



3. 掘立柱建物 8（北東から）



1. 735石室墓（西から）



2. 同 石棺検出状況（北から）



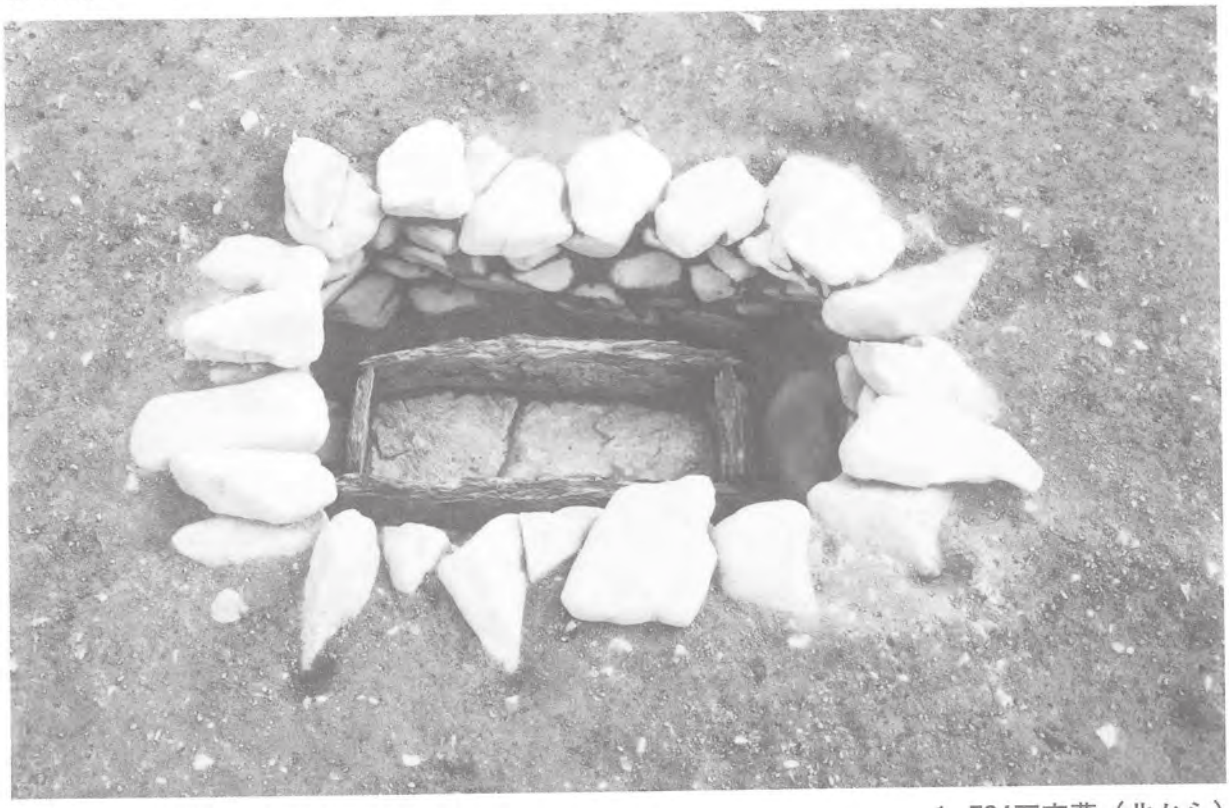
3. 同 石棺南半部分細部



4. 同 石室と石棺底石（西から）



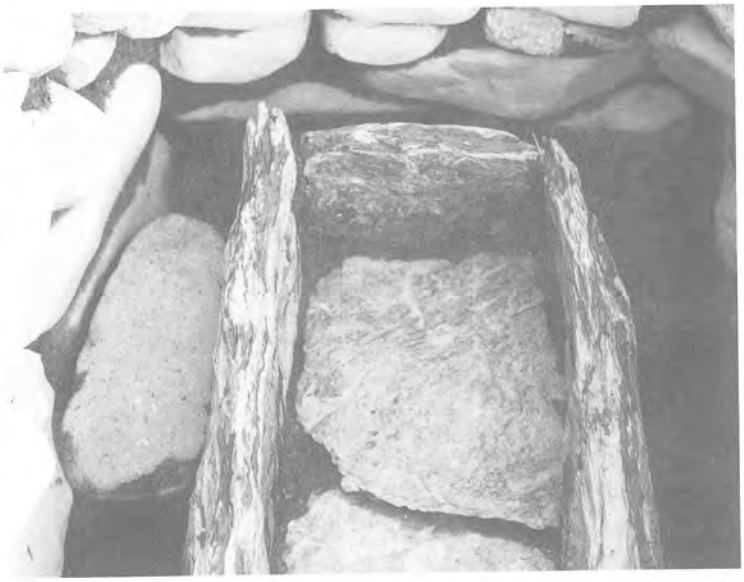
5. 同 掘形検出状況（西から）



1. 734石室墓（北から）



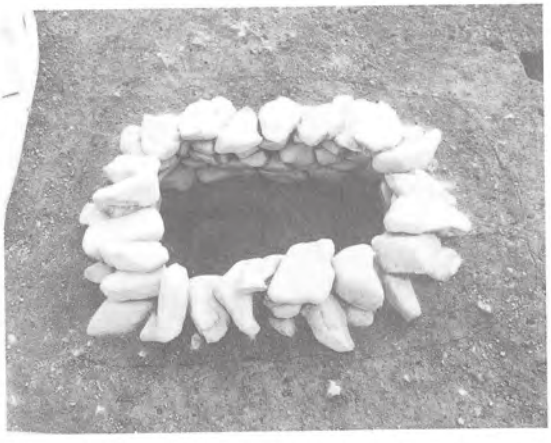
2. 同 石棺検出状況（西から）



3. 同 石棺東半部分細部



4. 同 石棺蓋石と釘検出状況（北から）



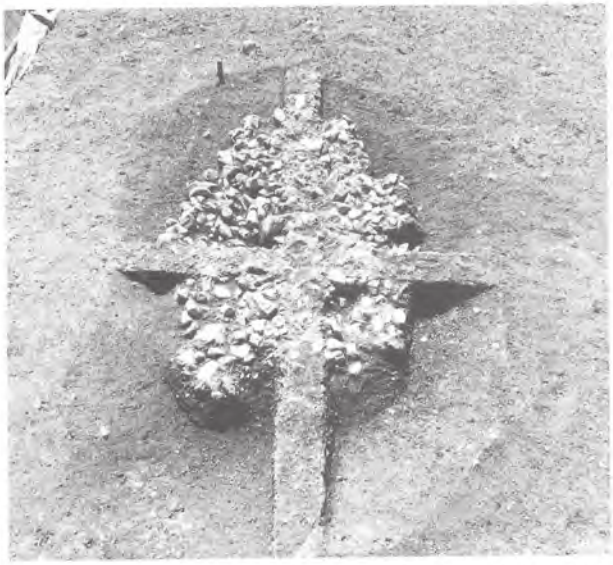
5. 同 掘形検出状況（北から）



1．783土器棺墓（北西から）



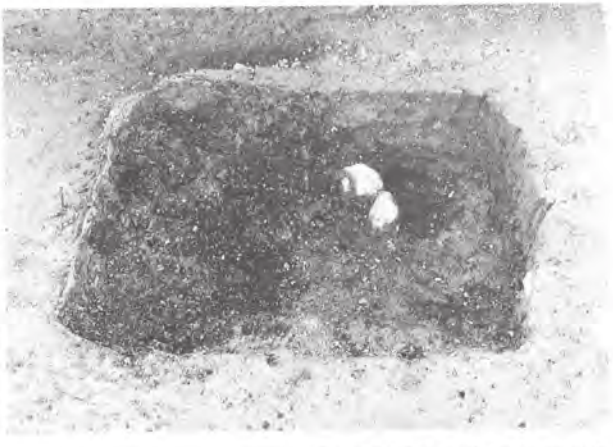
2．225土坑（北東から）



3．720土坑（北から）



4．701土坑（北東から）



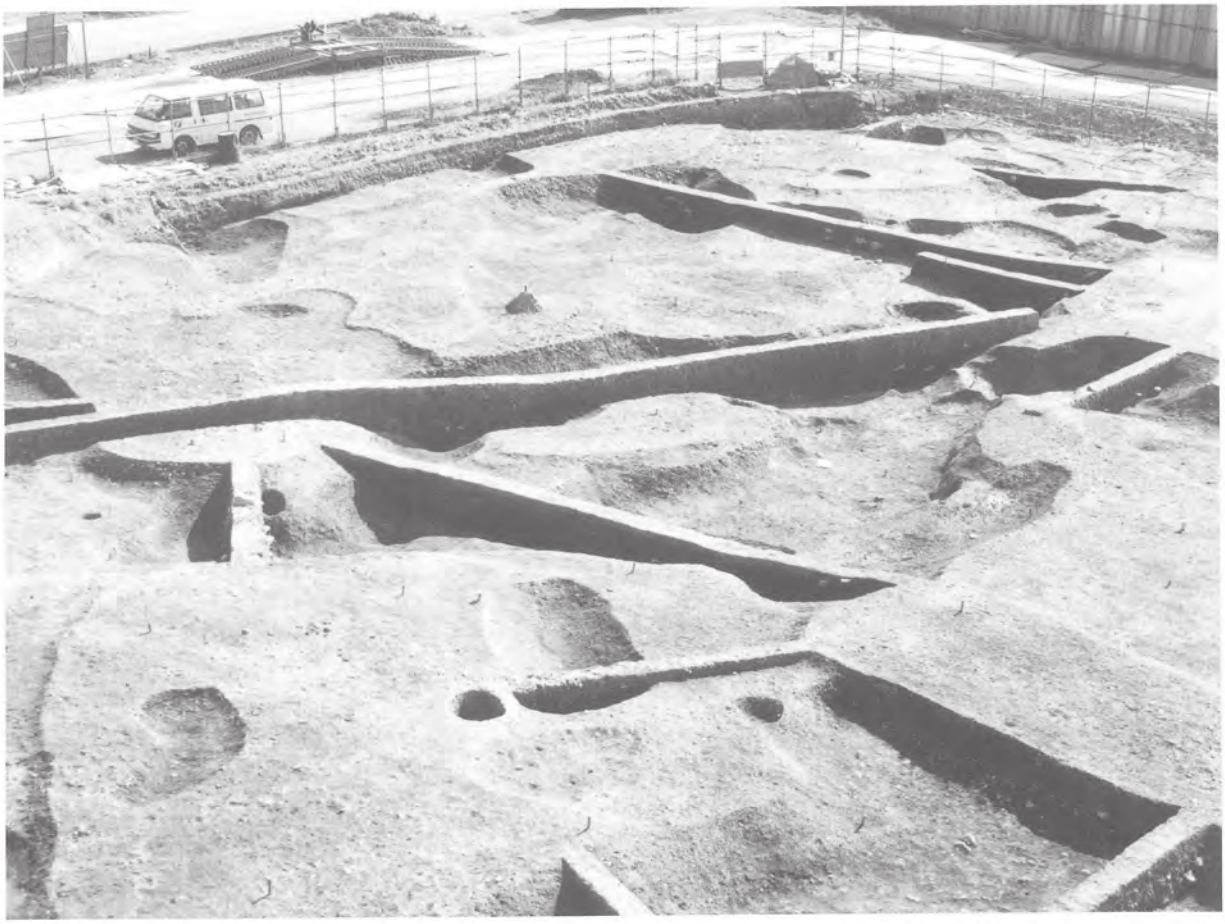
5．791土坑（北西から）



1．782流路（北から）



2．782流路土層（A-A’）



1．782流路南半部（北西から）



2．782・723流路、786土坑（北から）



1．3・4区 全景
（上空北から）



2．3区 全景
（南から）



1．301石室墓（南から）



2．302溝（北西から）



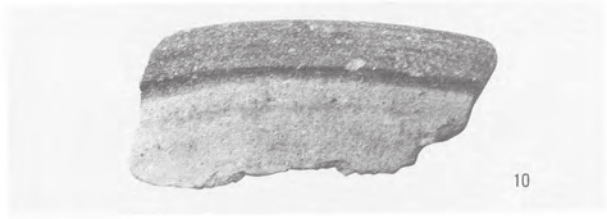
1．4区 全景
（北から）



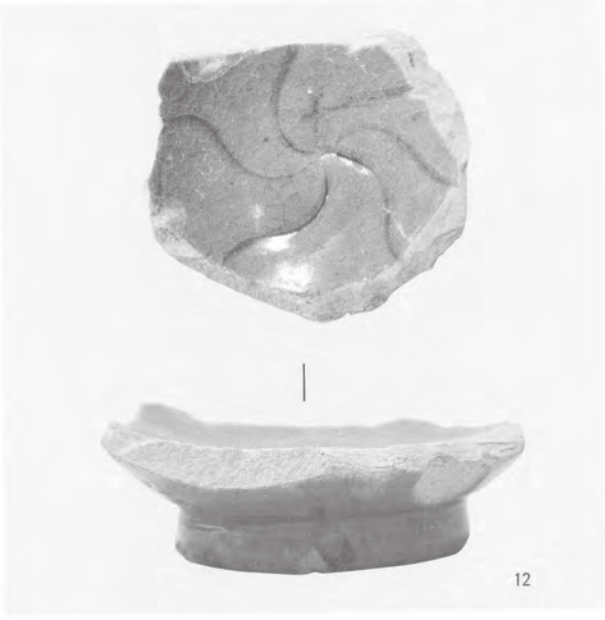
2．4区（S）全景
（南から）

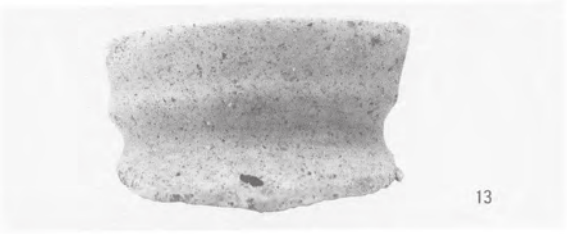

1


9

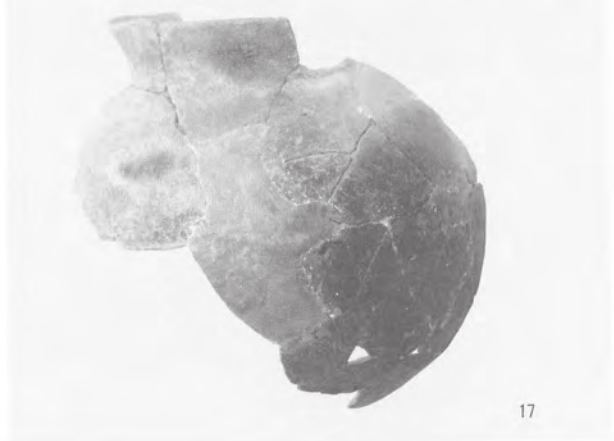

10


11


12


13


16


17


21


22


25



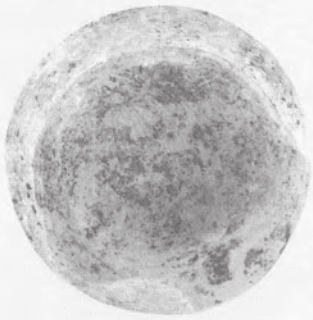
28



31



34





35



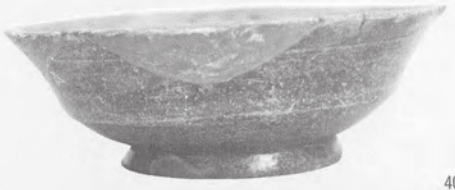
36



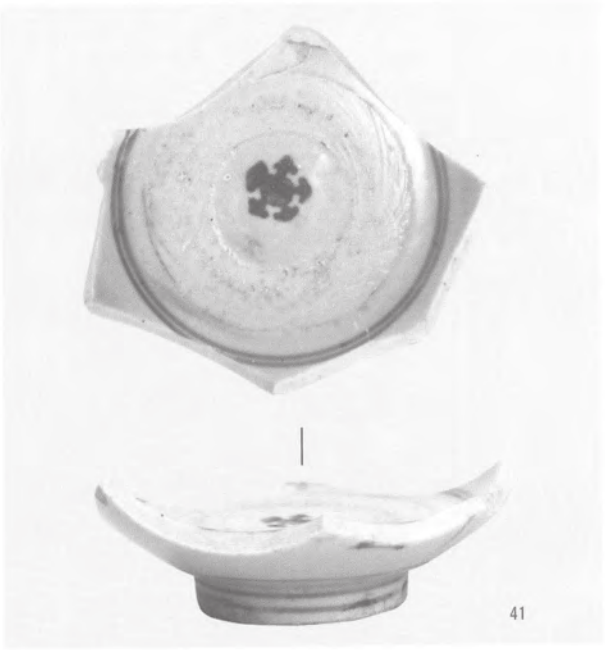
38



39



40



41



48



61



63



42



60



62



66



70



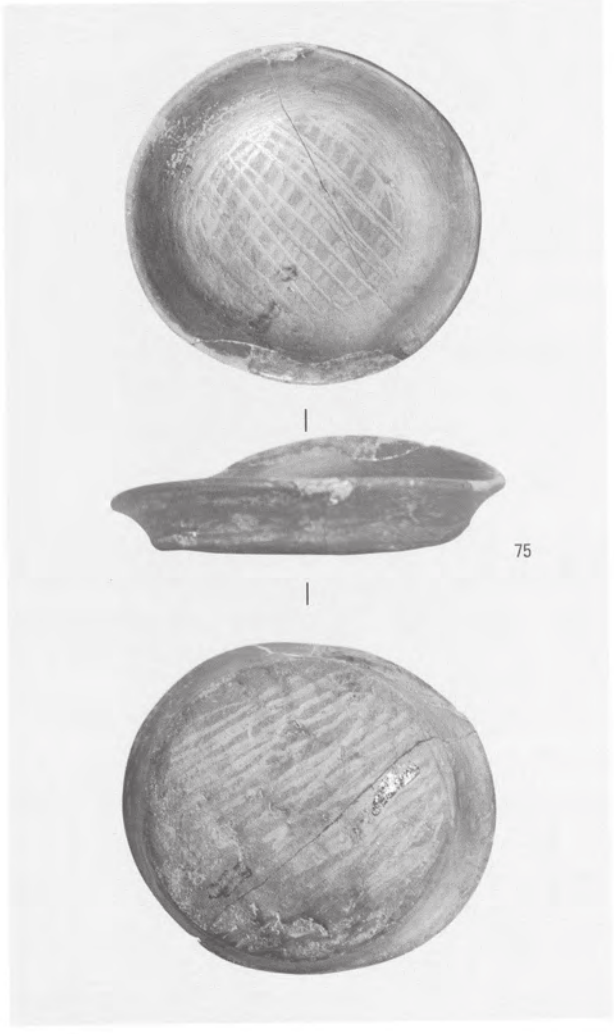
71



72



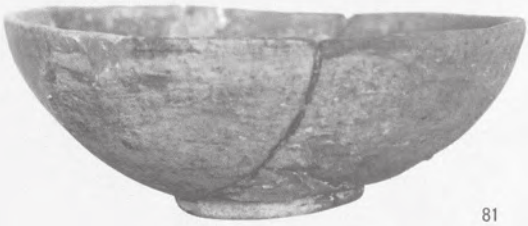
73



75



80



81



87



90



100



110



98



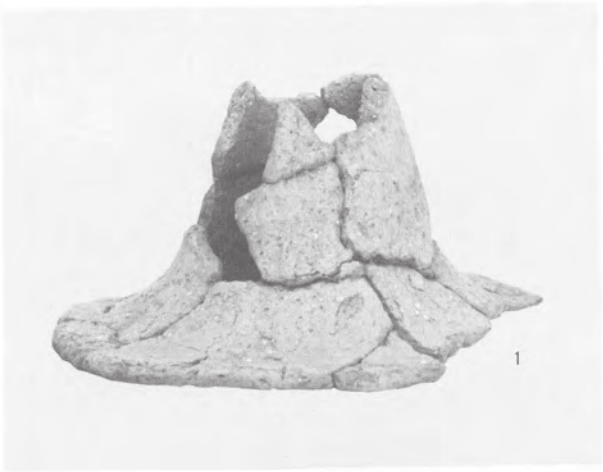
103



104



111


1


2

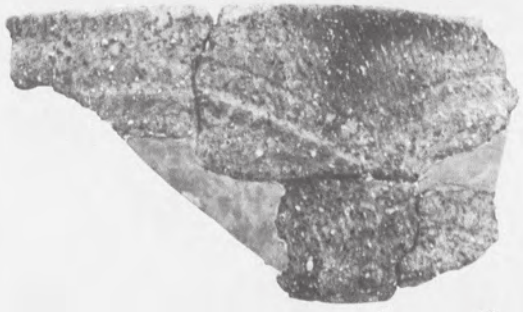

8


23


15


25


18


28


29 31 32


33

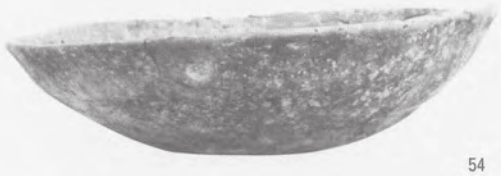

34

1・2区 出土遺物

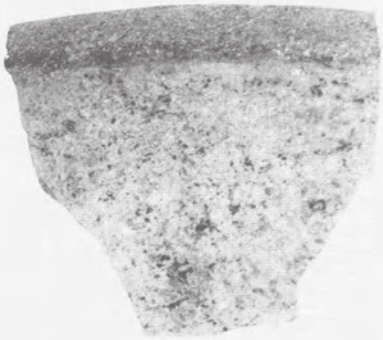

35

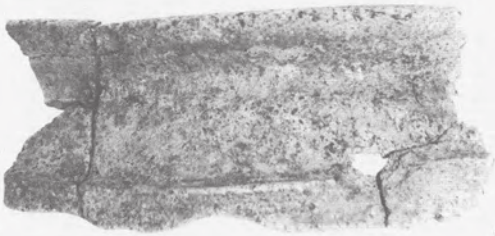

50

37


54


45


60


61


73




81

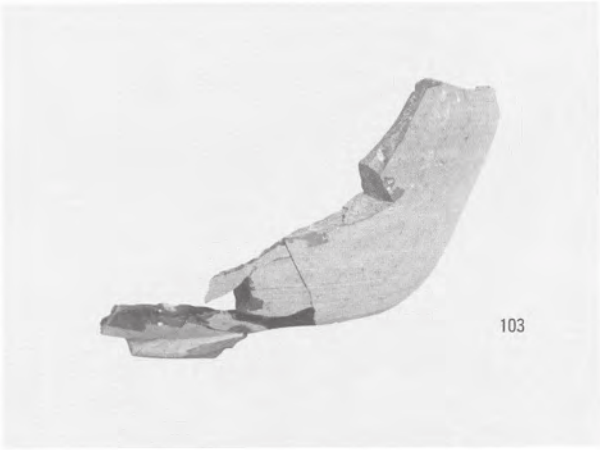

74

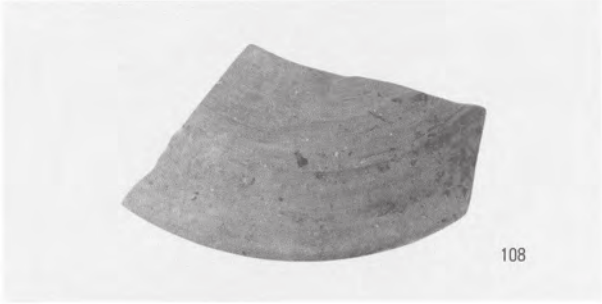

85


89

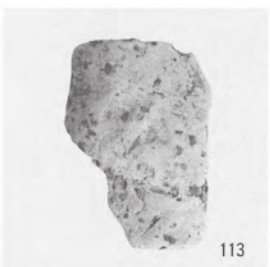

91

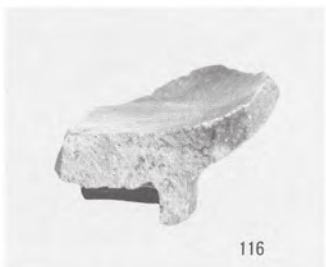

95


103

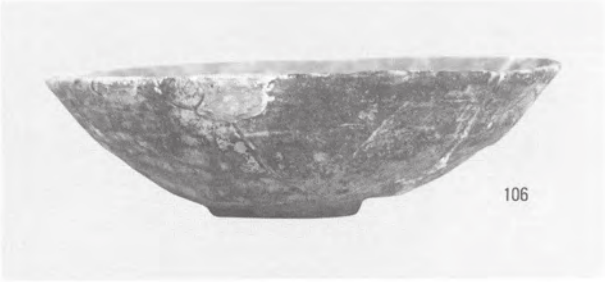

108


114

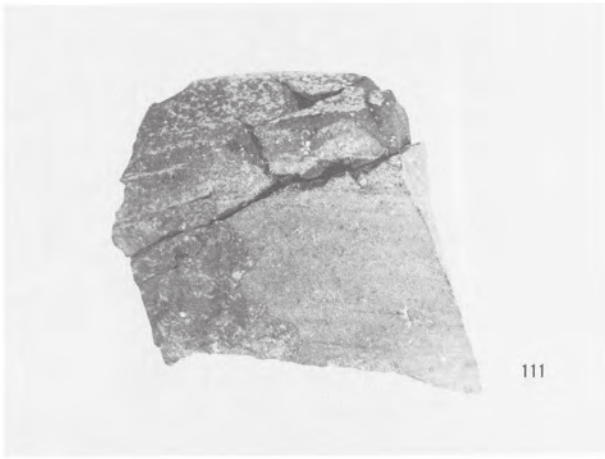

113


116

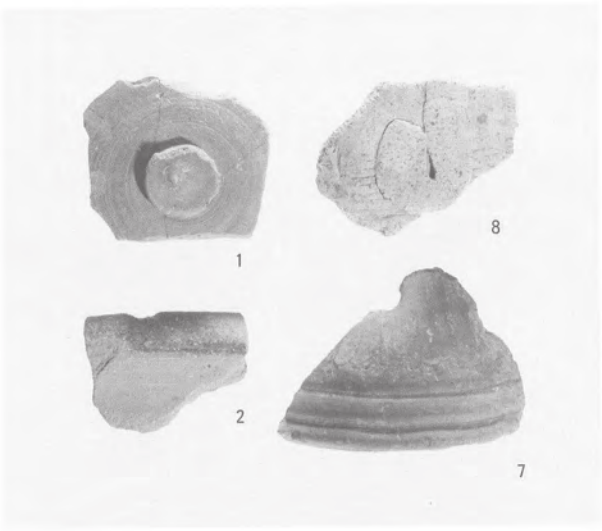

98


106


110


111

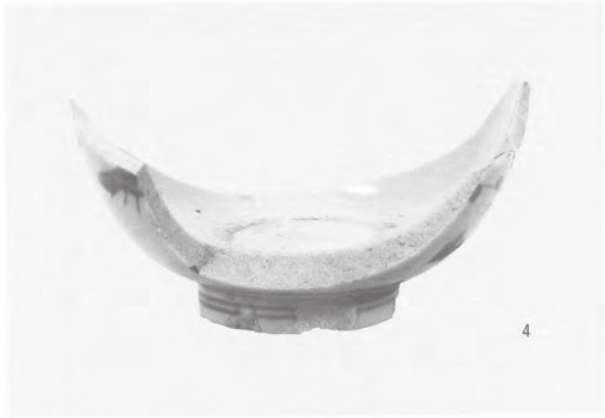

117

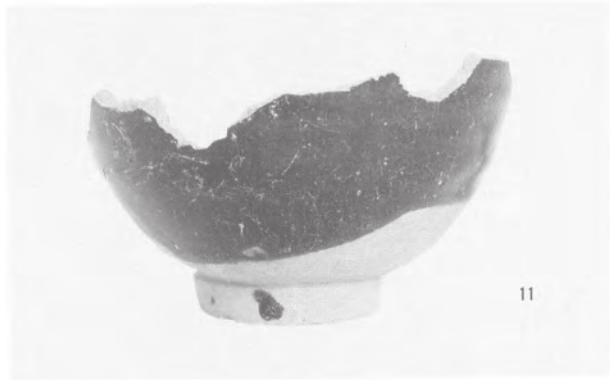


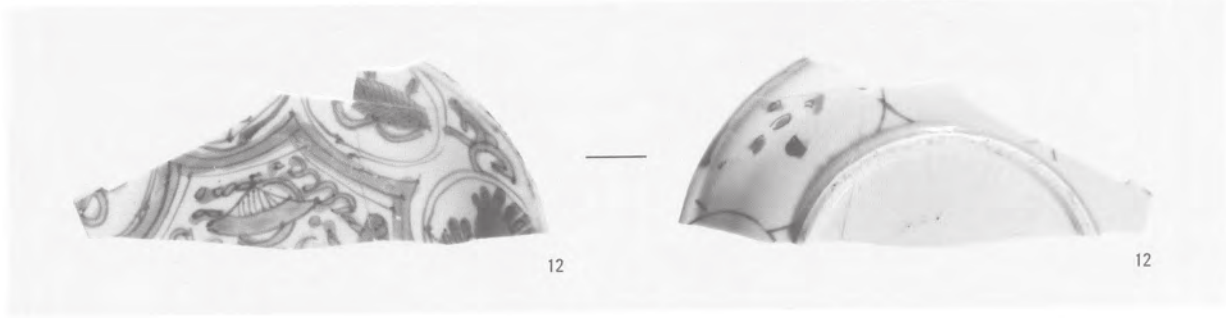


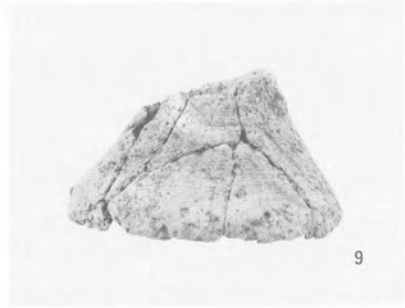


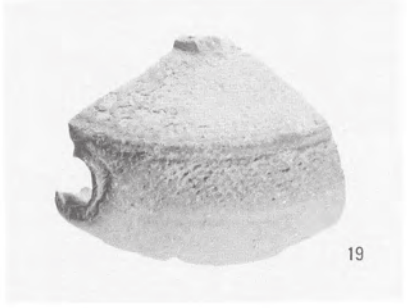






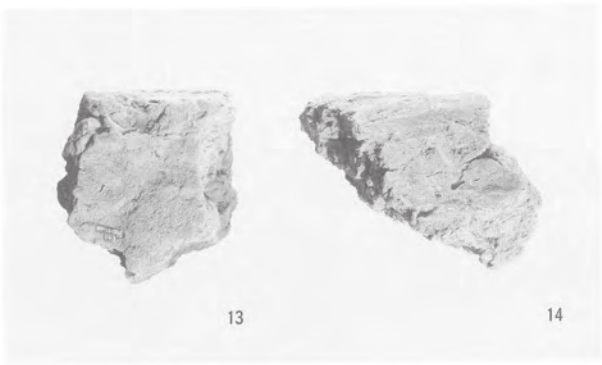








5区
6区 包含層　出土遺物



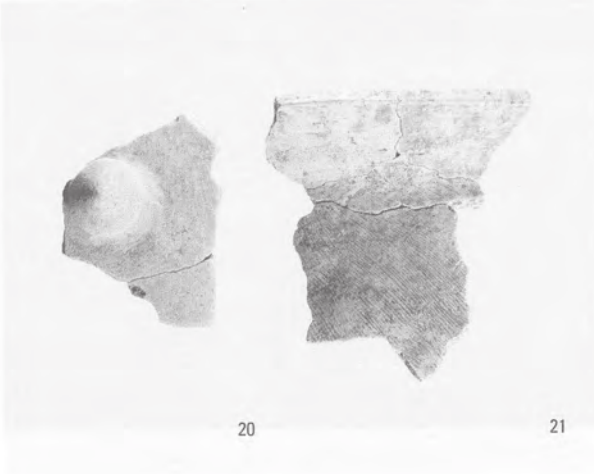
13 14



15



18



20 21



22 23



24



25



26



27



28

6・1区 包含層出土遺物


29

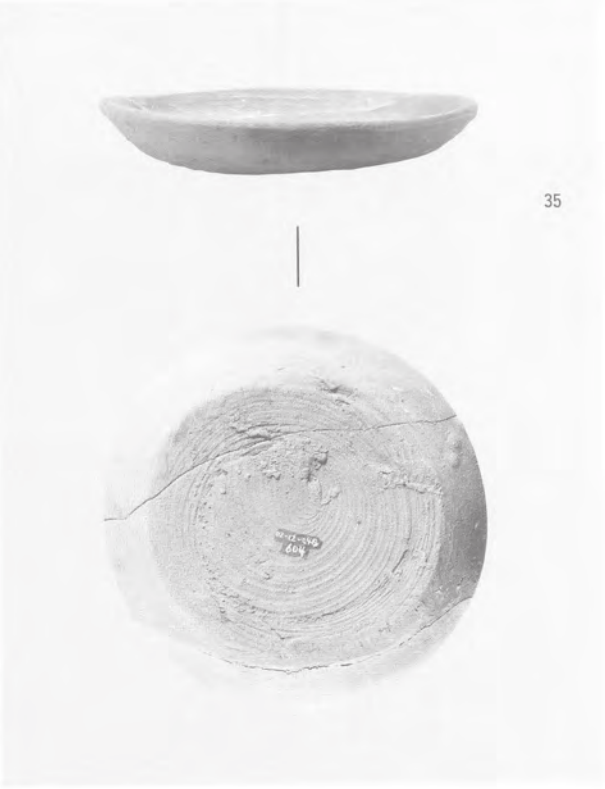

30


31


32


33


34


35


40


41


36


38

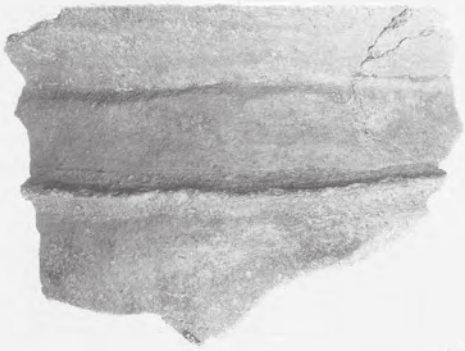

39



42



51



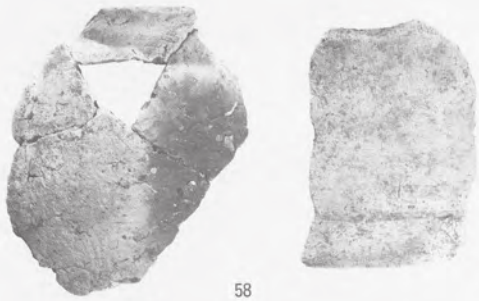
43



55

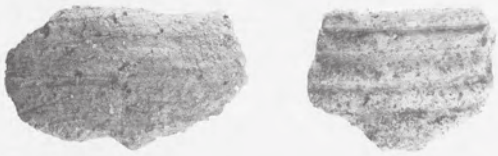


44



58

59



46

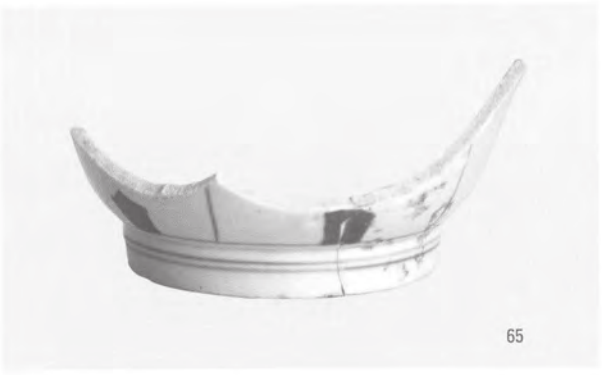
47



49



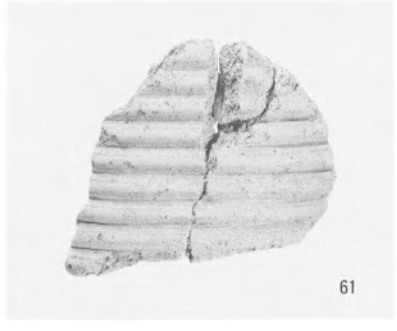
60


65


66


67


68


61


72


74


76

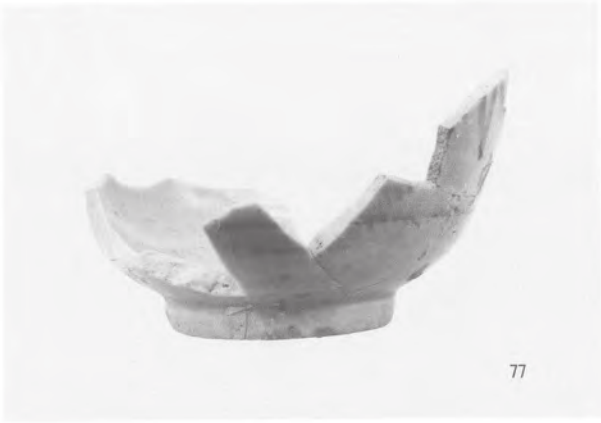

70



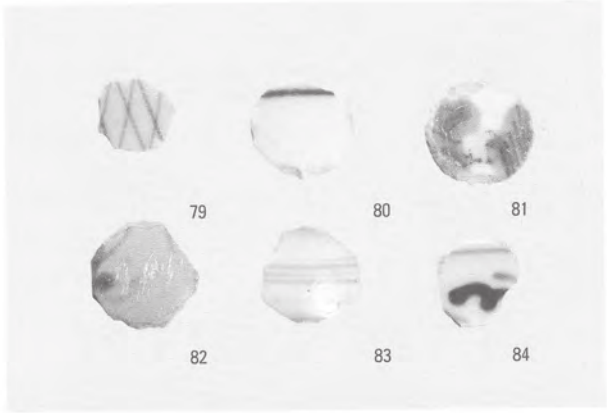
71

1区 包含層
1・6区 近世土坑

出土遺物



77



79 80 81

82 83 84



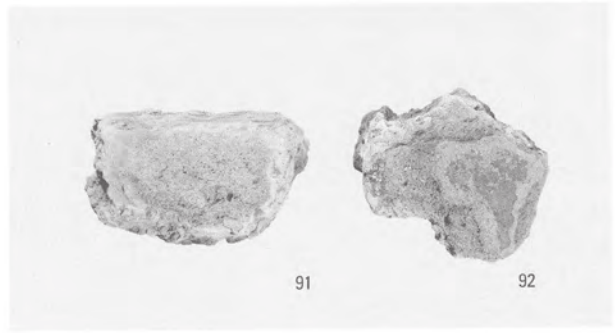
86



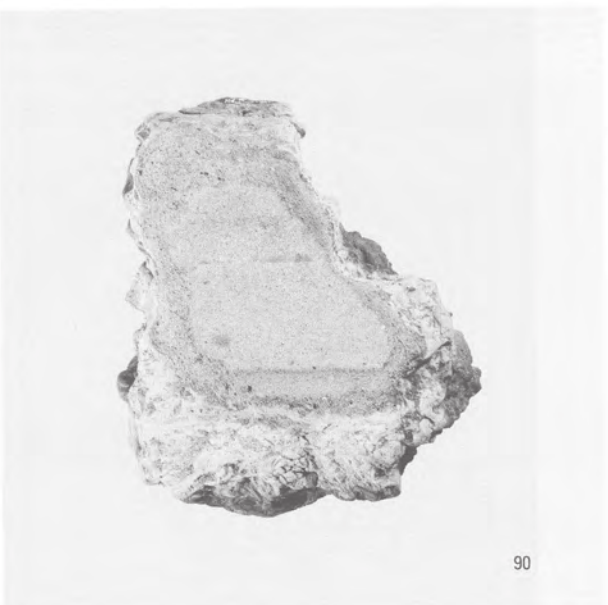
87



85



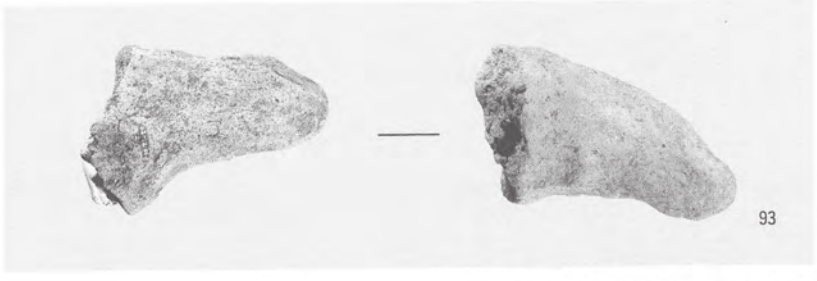
91 92



90

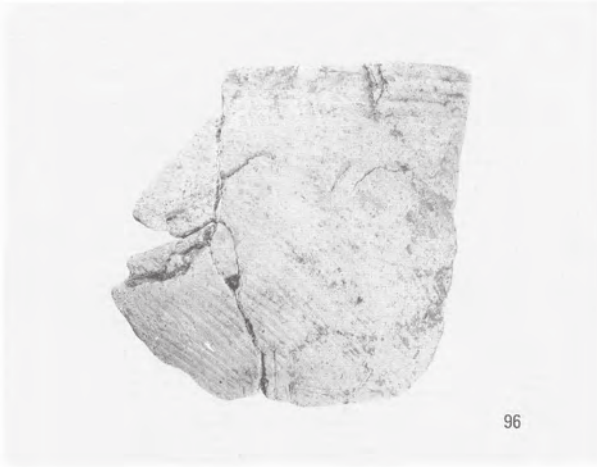


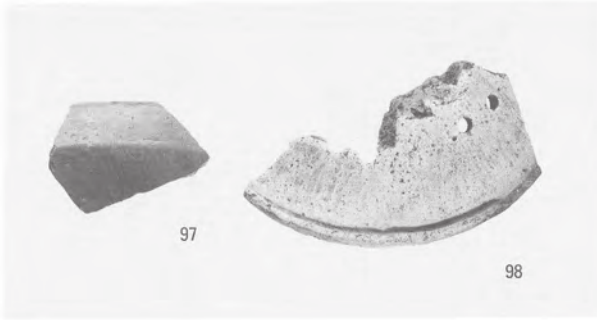
88



93

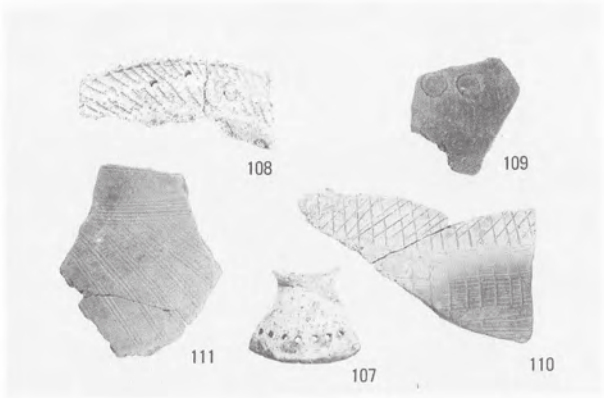

94
95

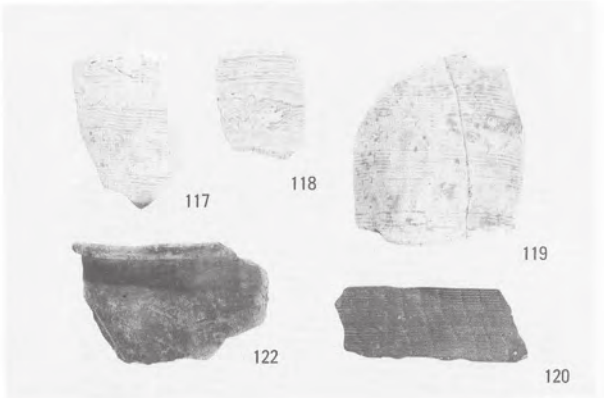

96


97
98


103


104


108
109
111
107
110


117
118
119
122
120

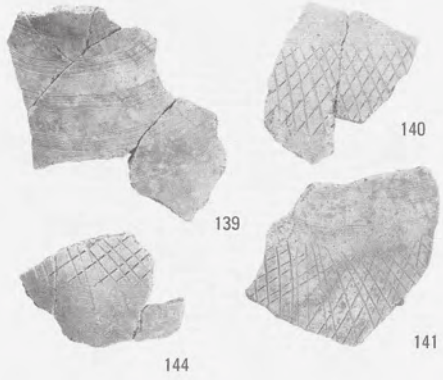

121

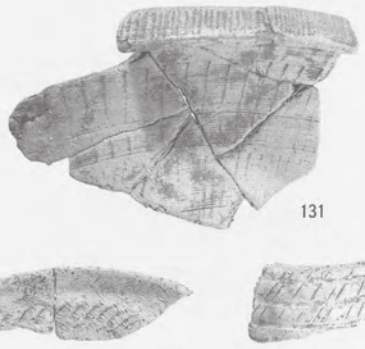

124

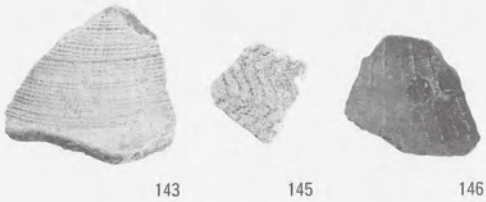

128


154

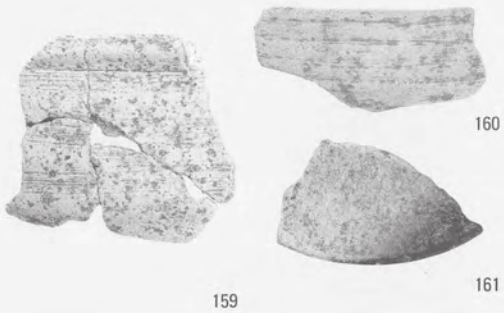

129


140
139
141
144


131
130
135


143
145
146


136
138


160
161
159



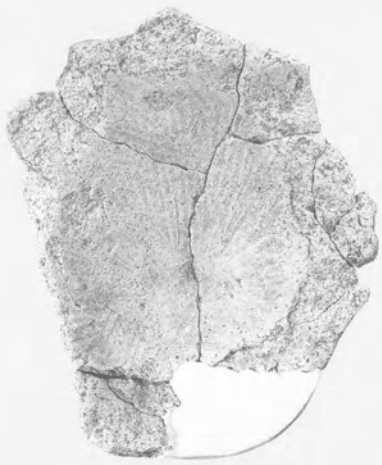
165



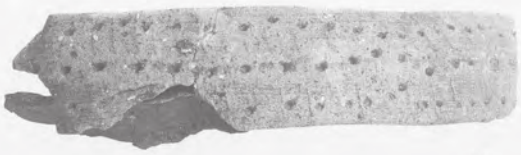
163 164



162



166



167



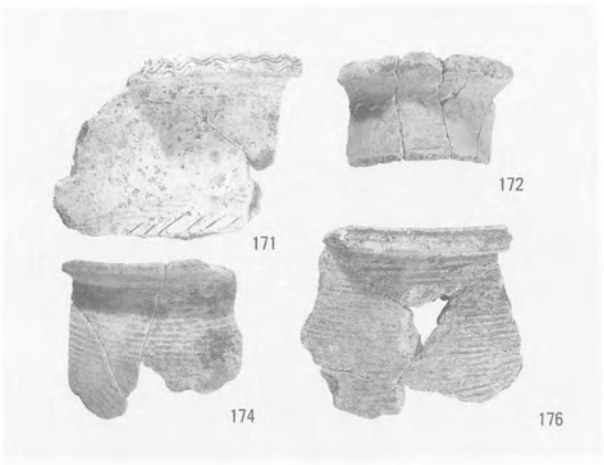
168



169

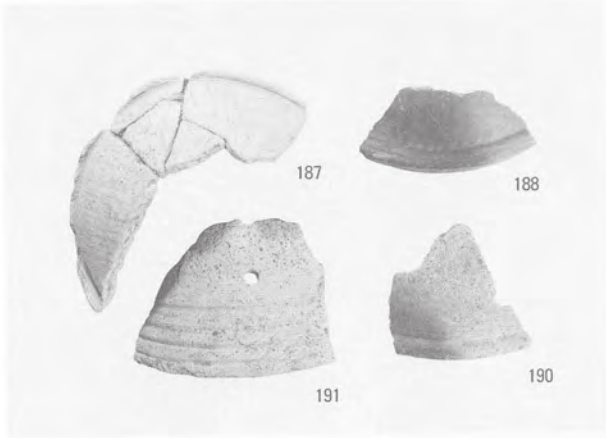


170


172
171
174
176

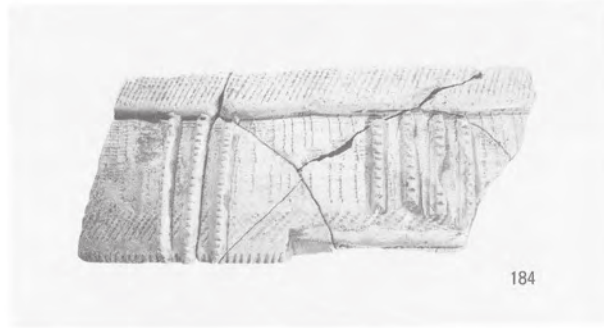

186


178


187
188
191
190


183


198

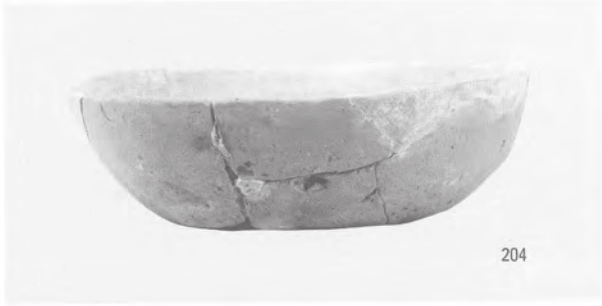

184


198


185

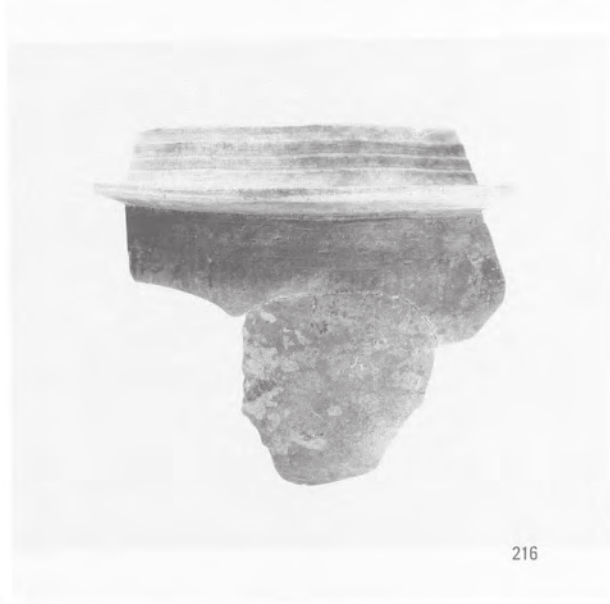

199


207


204

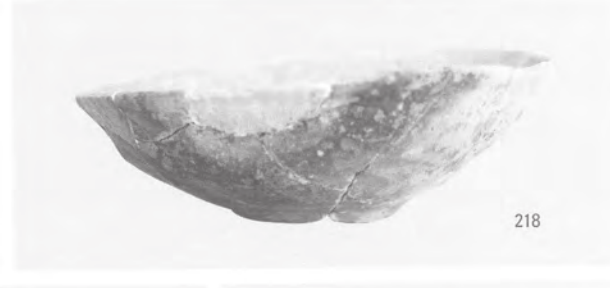

208


205


216


206

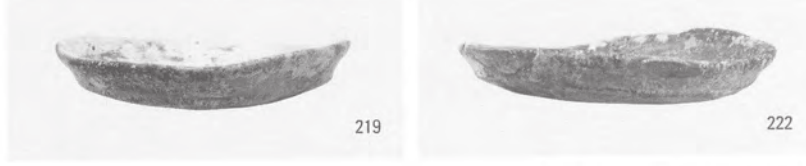

217


218


209

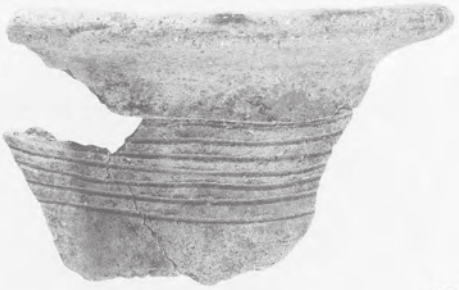

210


212

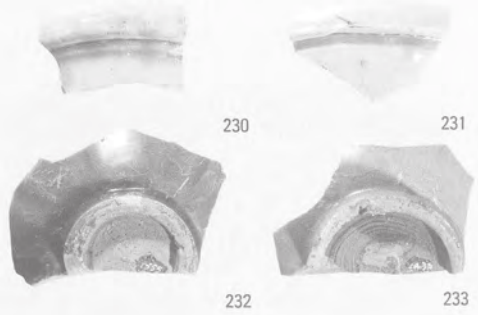

219

220

222



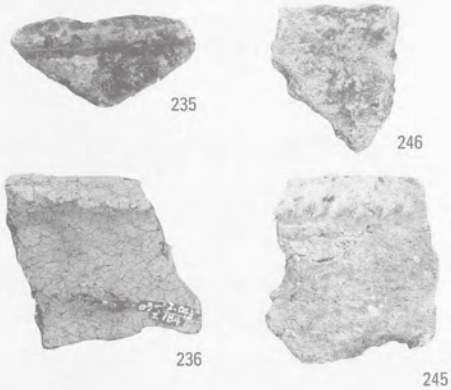
223



230 231 232 233



225



235 246 236 245



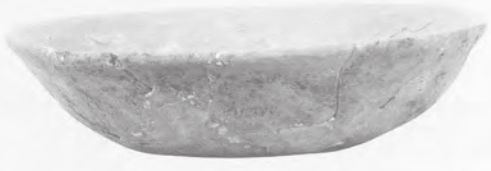
226 227 228



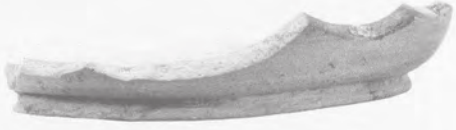
239 240



229



241



243



244

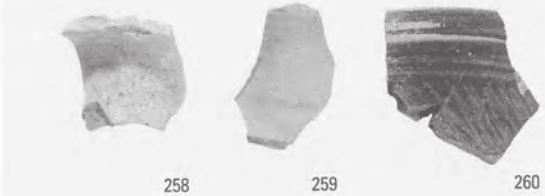


250

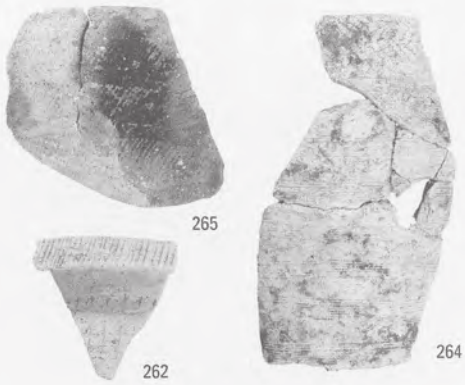


255

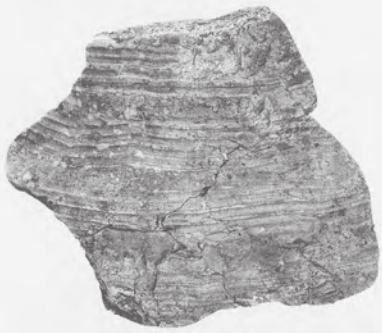
256



258 259 260



265 262 264



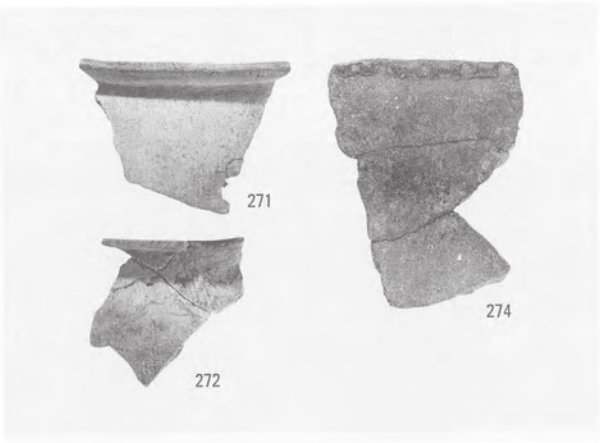
266



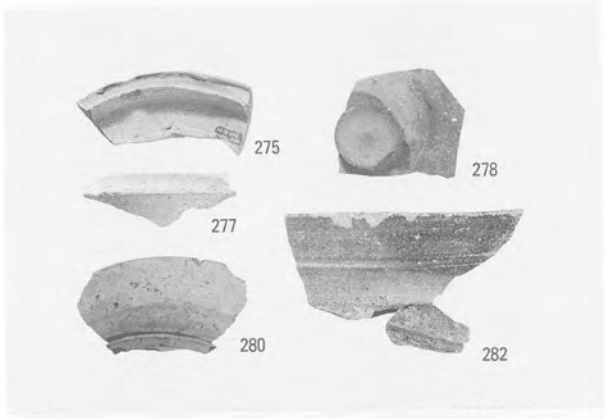
267



269

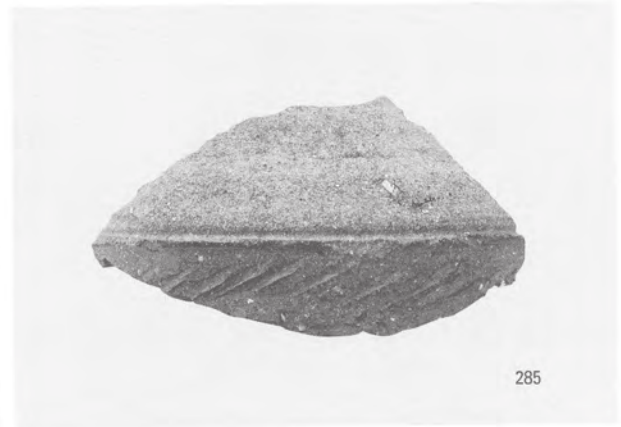

271
272
274


283

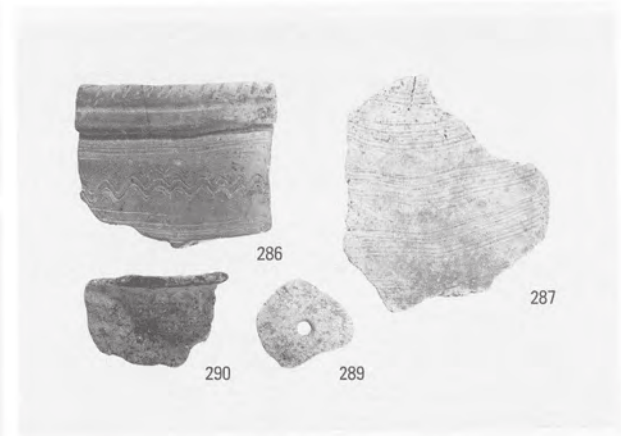

275
277
278
280
282


284


278


285


280


286
287
290
289


281



292



294



293



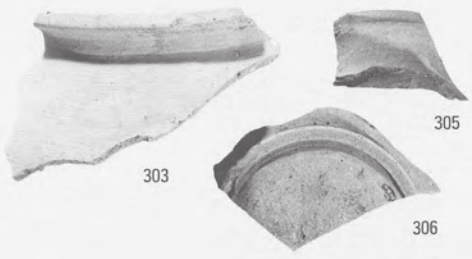
297



295



304



303

305

306



306



318



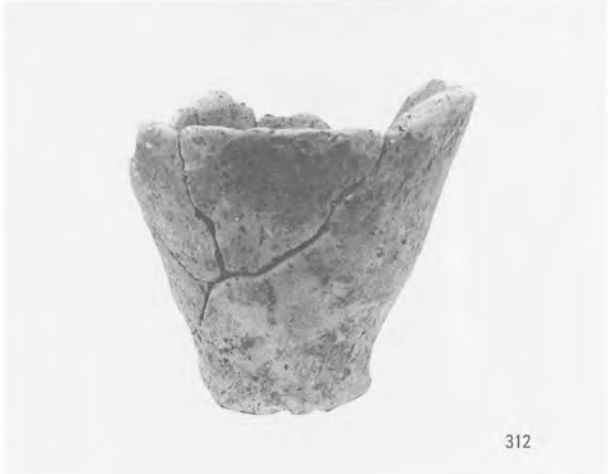
318



318



308 310 309 311 315



312



313



314



316



317



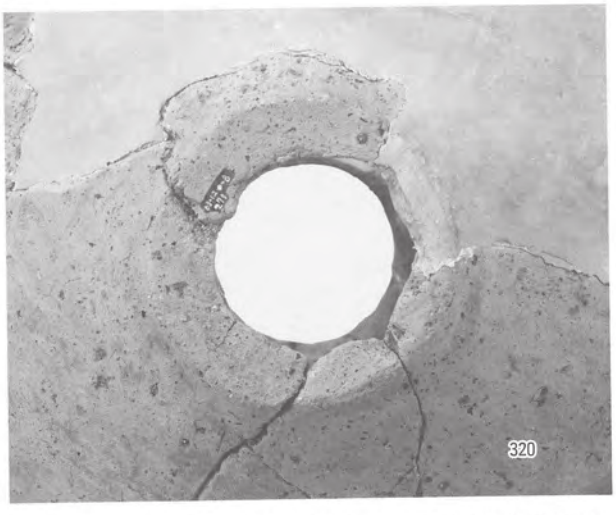
319



320



319



320

719・702(709)方形周溝墓出土遺物



321



322

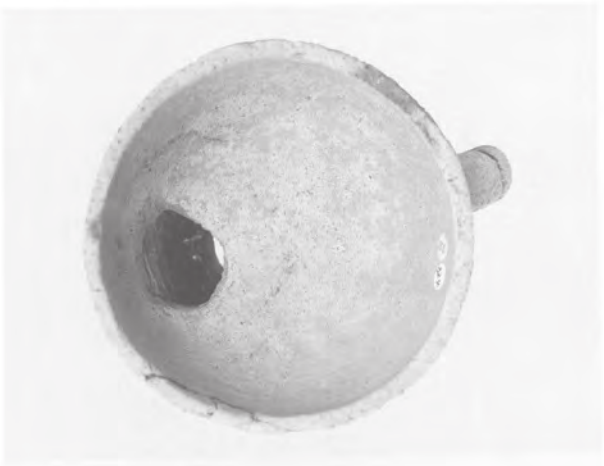


323



325

702(709)方形周溝墓出土遺物

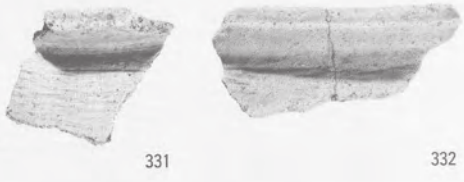




329



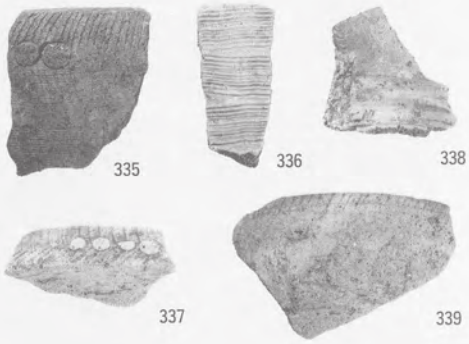
324



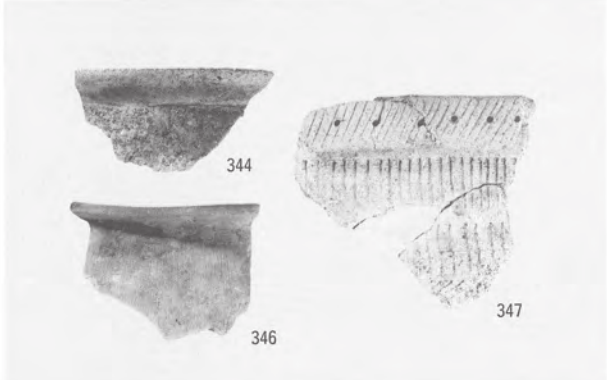
331 332



326 327 328



335 336 338 337 339



344 347 346



333

702(709)・862方形周溝墓
781土坑

出土遺物



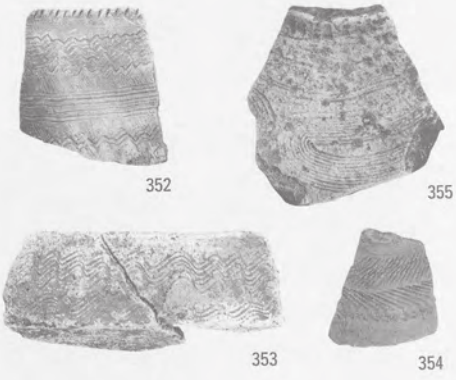
348



349



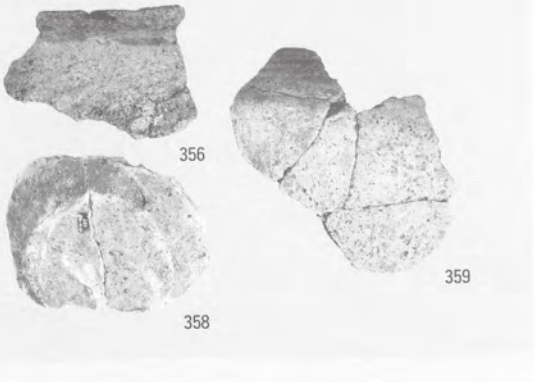
350



352 355 353 354



362

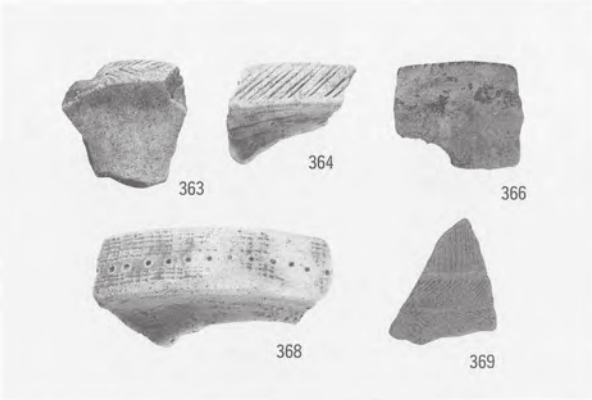


356 359 358



357

775・766方形周溝墓出土遺物

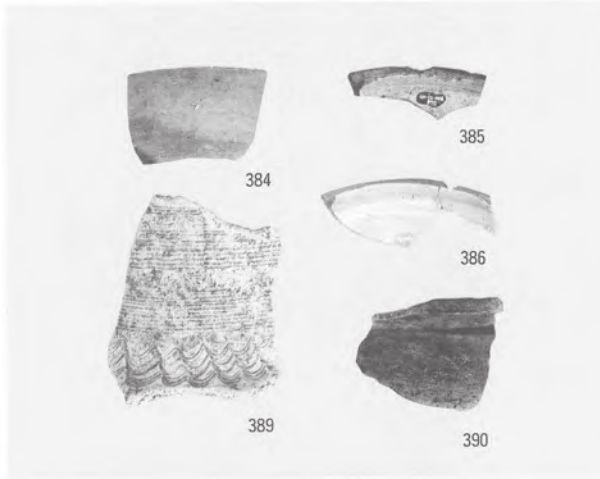

363
364
366
368
369


376


367


376


371


384
385
386
389
390

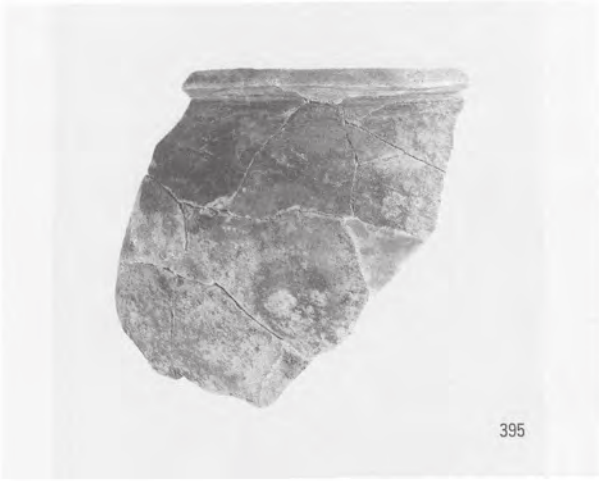

378
380
382
379


387
388
391

7区 遺構出土遺物



393　394



395



396



403



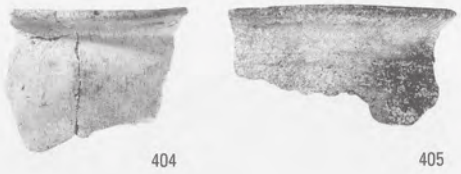
400



401

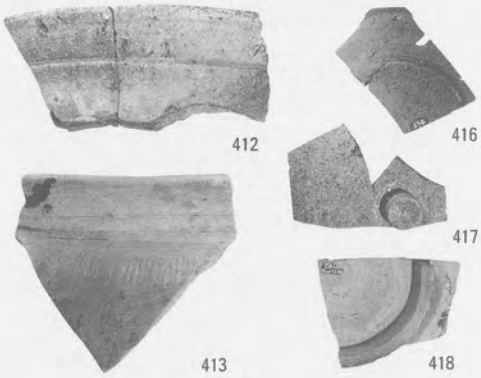


402


404 405

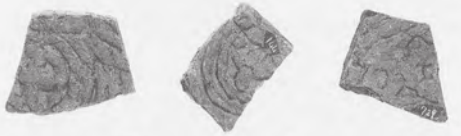

406


411


412 416 413 417 418


414


415

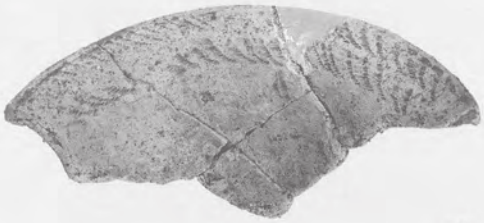

419 420 421


407


408



422



423



426



430



431



433

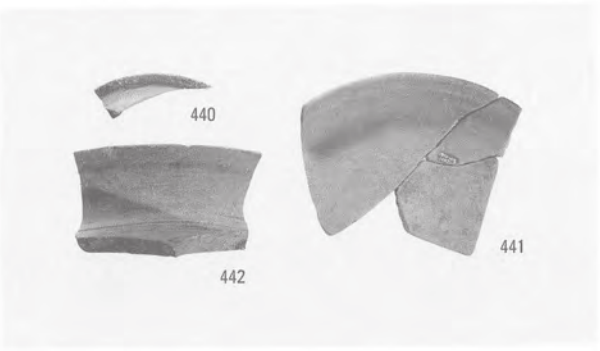


435



429

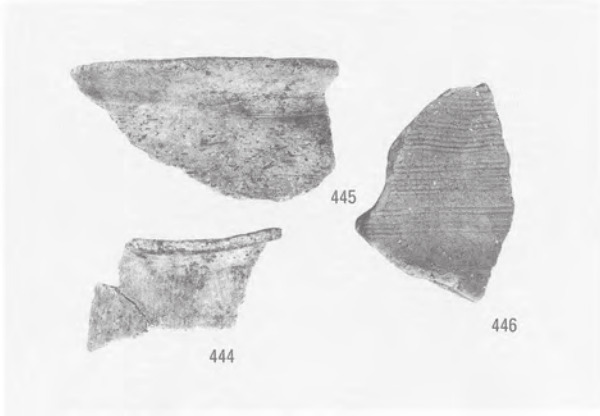
786溝・825土坑出土遺物


440
441
442


447
448
449


443

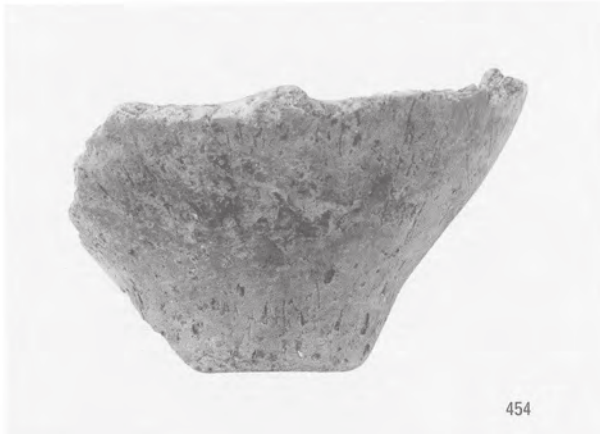

455


445
446
444

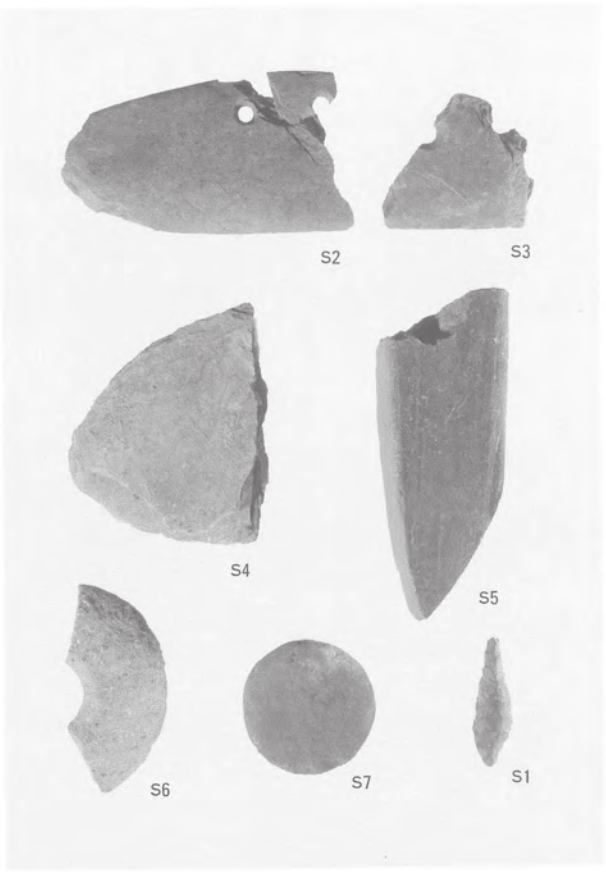

457

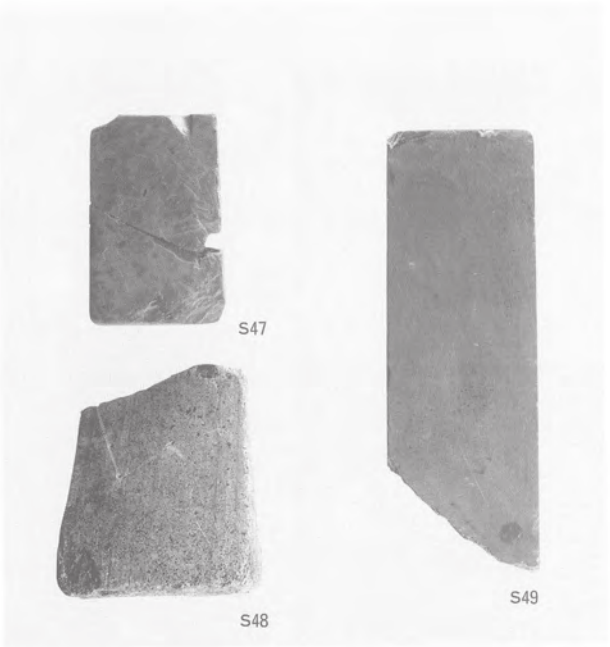

458

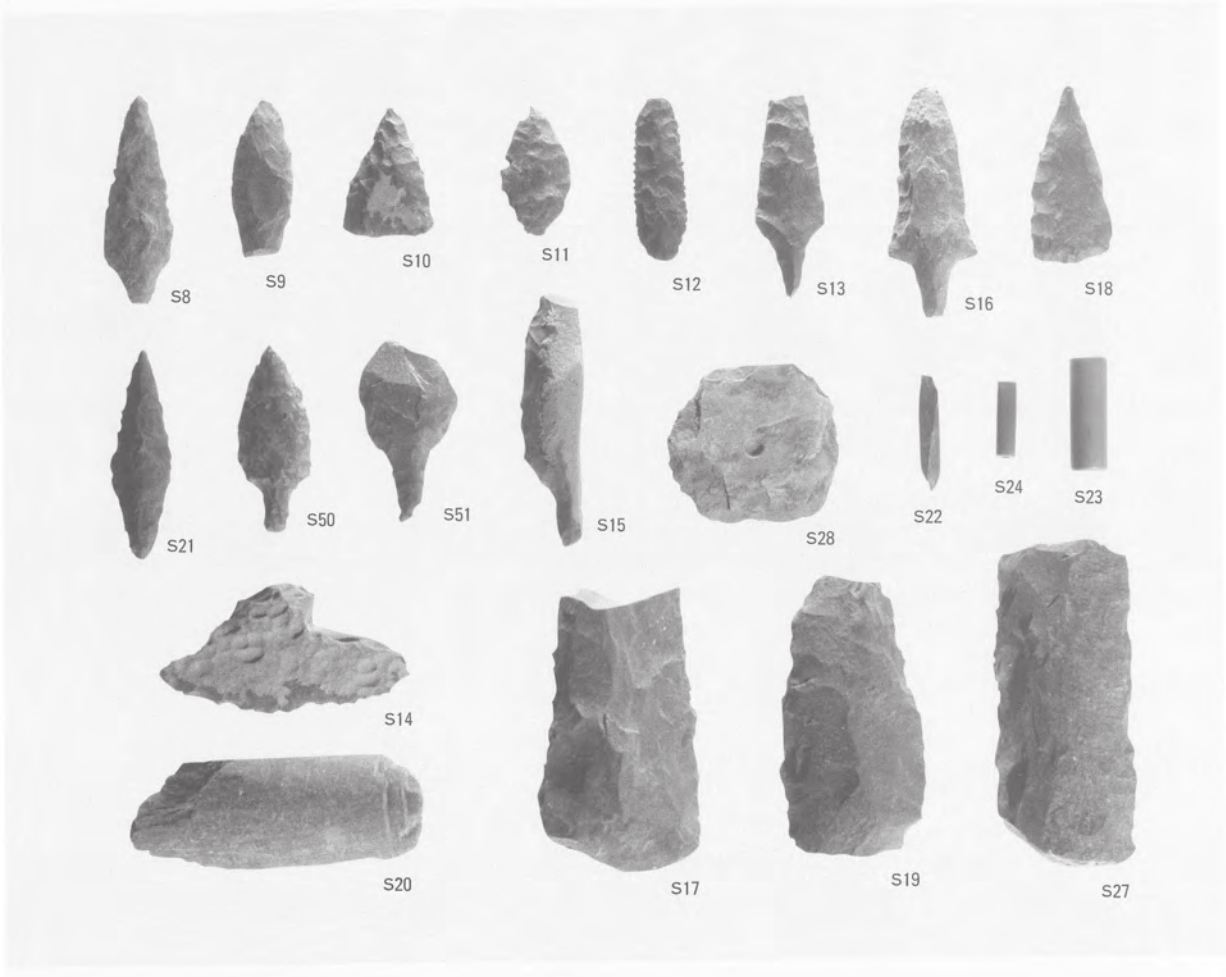

460

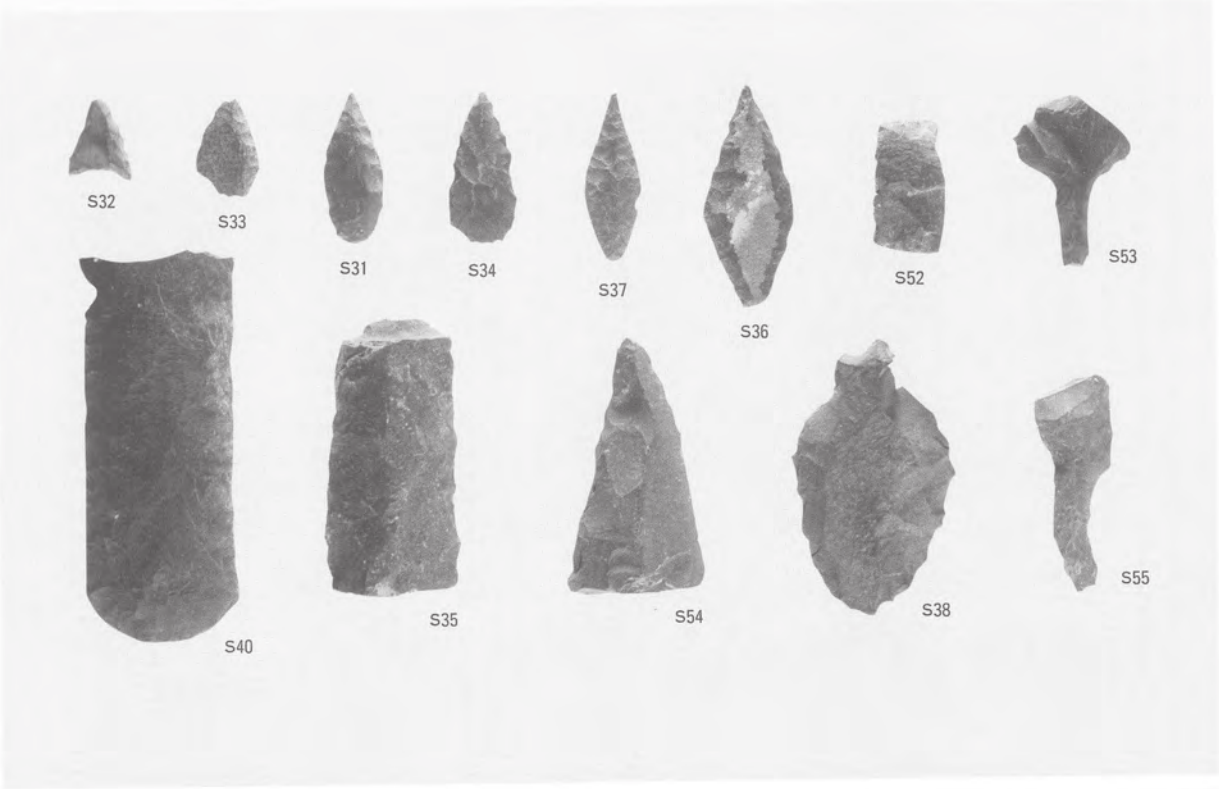

454

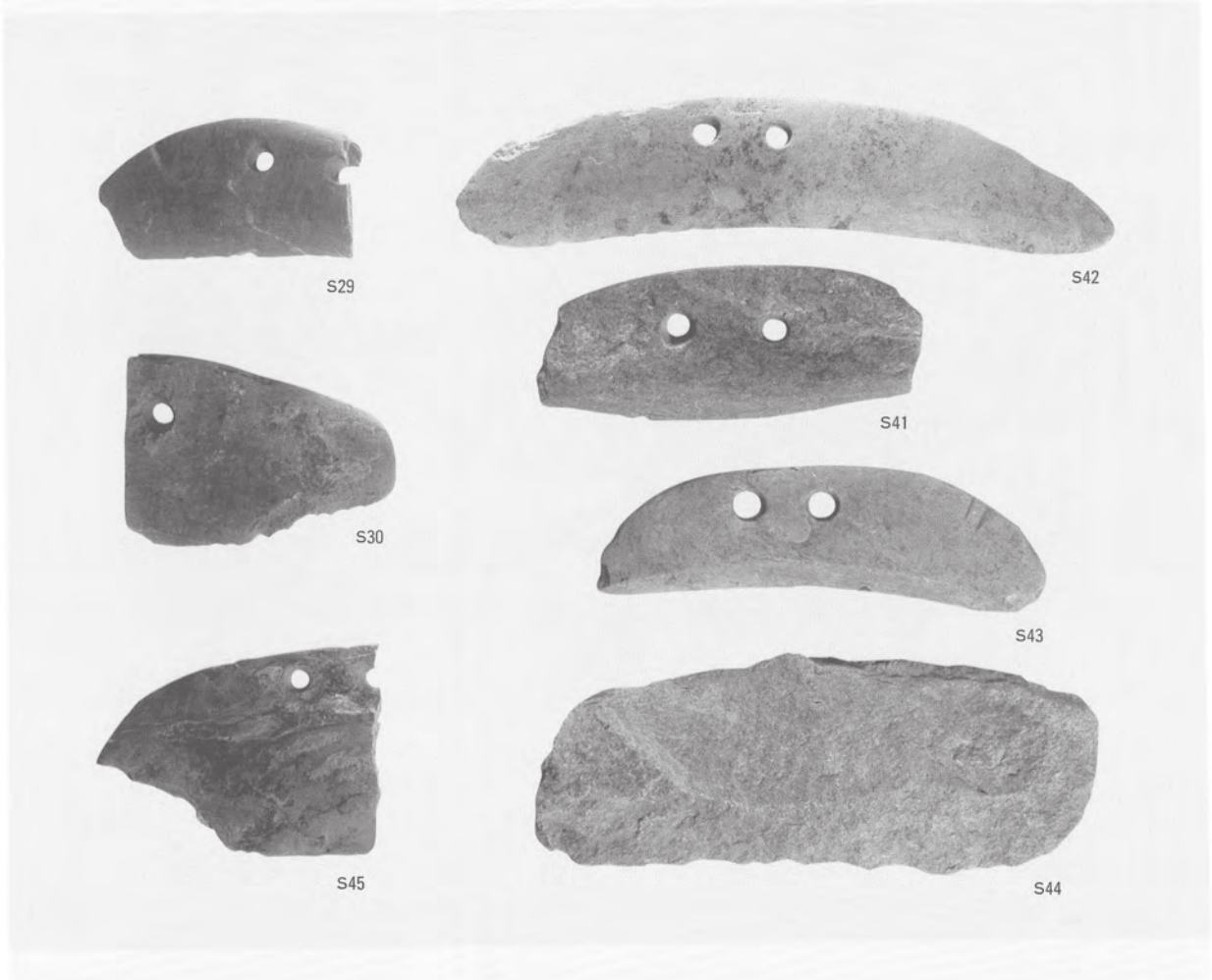

461

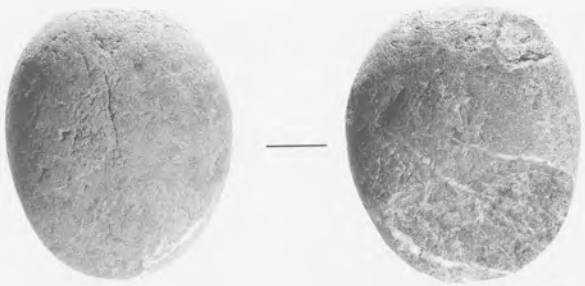

S2
S3
S4
S5
S6
S7
S1


S47
S48
S49

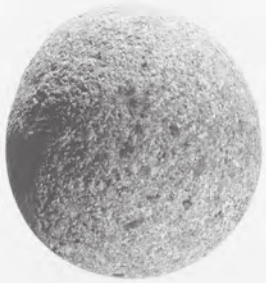

S8
S9
S10
S11
S12
S13
S16
S18
S21
S50
S51
S15
S28
S22
S24
S23
S14
S20
S17
S19
S27


S32
S33
S31
S34
S37
S36
S52
S53
S40
S35
S54
S38
S55

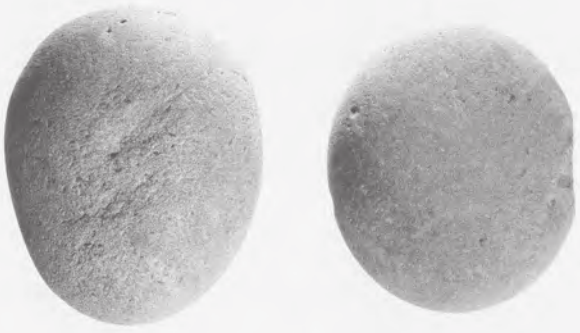

S29
S42
S41
S30
S43
S45
S44



S26



S25



S56

S57



S39



S46

垂井女房が坪遺跡・野口遺跡
北馬場遺跡・柏原遺跡

――一般国道24号京奈和自動車道（橋本道路）
建設工事に伴う発掘調査報告書―

２００７年３月

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷
製本　中和印刷紙器株式会社